（岡山製本）

大正二年七月十日印刷
大正二年七月十三日發行

有朋堂文庫
近松浄瑠璃集中卷
（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

近松淨瑠璃集中卷索引終

ム

メ

ミ

ヒ

ツ

チ

ソ

タ

ス

セ

シ

ケ

コ

ク

カ、クワ

オ、ヲ

ウ

エ、ヱ

イ、ヰ

近松淨瑠璃集中卷索引

（主として固有名詞、諺、俚謠、特殊の語句等を採り、發音に從つて五十音訓に排列す）

ア

近松淨瑠璃集中卷終

うてな—臺、血統にいふ
桃園—皇族
乙女—巫女
神樂男—神樂囃す男
退轉なく—永久に止めず
すゞしめ—すゞやかに和げる

爰に苟くも清和のうてなを出、桃園の御葉末、源の牛若丸、獻上祈文の意趣は、平氏追討の一望なり。時今平家四海を呑むの勢ひあつて、上をおかし奉り、民を悩し痛しむ、且は國の怨敵、又は某父祖の敵。彼といゝ是といひ、神力を得奉らずんば、いかで彼を亡ぼさゞらん。仰願くば、感應誤る事なからしむべし。願成就有においては、御本社、拜殿、末社〳〵九十九所、殘らず造營し奉らんに、或は金銀瑠璃を以て甍を磨き、珊瑚、琥珀、硨磲、瑪瑙を敷て、平地の光爛々と、水晶の色の中よりは、金の光を出し、互ひに光耀し、神領、社領、御供領、一万町を寄せ奉り、百饌百味の神供を捧げ、八人の乙女、十人の神樂男、朝の御神樂、夕の祝詞、禮幣奉幣退轉なく、神慮をすゞしめ奉らん。逆徒を一戰に攻靡け、天下太平の功を得せしめ給へ。夜の守り日の守りと守護せしめ給へ。治承三年八月吉日、源の牛若敬て申」と、讀上給ふぞ有難き。それより直に奧州門出のお盃、淨瑠璃御前お迎の約束のお盃、譽れは雲井の盃や、三々九郎判官と、御果報、御威勢、御手柄、夜にます日にます年に倍々辻月、實千秋の秋つ國、源氏の御代の繁昌の、淨瑠璃こそは目出たけれ。

うし起—丑起、前途を祝ふ意

ざんざめかす—陽氣に騷ぐ

若一王子—熊野權現の末社

久成正覺云々—阿彌陀如來と觀音勢至菩薩

下化衆生—下界に下りて衆生を濟度する

頂戴。鈴木殿兄弟御目見へ。それ〳〵女房達、是へお出と申て給べ。其儘寢卷召ながら、帶なされいでも大事なし。引摺起して下され」と、そゞろに悅び勇みける。長者余りの嬉しさや、「目出度やな〳〵。迚の事に御座敷をも改め、御將束にて御頂戴。幸我等が西の對に、色紙の間と申て藤原の定家朝臣、十六才の時、七首の名歌の心を繪にいろ取筆に染め、妾がつまに下されしを、一間にしつらひ置侍ふ。此座敷にて院宣の御拜見、方々の御目見へ、淨瑠璃と若君の御祝言のお盃、目出度い事の有條を、揃て祝ひ申べし。さあ此方へ」と有ければ、吉「扨こそ我名も吉次なり。牛若君の牛起に、淨瑠璃玻璃は寶の玉、福女房の御祝言」末繁昌の初なる御壽の最中に、藤原の秀平が三男、泉の三郎忠平、御迎の爲として三千餘騎を相具して、ざんざめかいて伺公する。君御對面ましまして、御悅喜甚淺からず。鈴木は「是より暇給はるべし」と、熊野山若一王子に奉納の御願狀。文筆は達したり、即座に書て差上、高らかにこそ遊ばしけれ。「抑當社は是三熊野の、九十九所の王子〳〵、若一王子とたゞせ給ふ。事も愚や、御本地は久成正覺の如來、大悲千躰の菩薩なり。かるがゆへに、下化衆生の願ひを充てんが其爲に、光を高天原にやはらげ、跡を三熊野の靈地に顯はし、御惠み降雨の國土を潤す如くなり。

いき〳〵なされたー今迄元氣よかりし

院宣の御頂戴云云ー義經に院宣も受けられろし鈴木にも對面せられよと也

候ぞ」ー吉「ヲヽ誰あらふ、源氏左馬頭義朝の八男牛若御曹司よ」吉次愕として。「ヤ牛若を戀聟とは平家の聞へ、長者のお爲も能らぬ事」と、いはせも果ず、長「是曲もないとは其處を申さん計ぞや。彼の若君こそ御曹司にて渡らせ給へ。疾に知らせ給ふとて、妾が外へ漏すべきか。近比聞へぬ御心。去ながら此お恨みも嬉しゐ餘り、矢矧の長者が分として、源氏の大將を聟に取ると申事、二世や三世の冥加ならず。是も冷泉十五夜が中立とや。出來した〳〵。此處へ出よ」と呼給へば、蘇生りたる心地にて、二人はおづ〳〵畏り、「斯樣に御機嫌直らんとは存ぜず、只今の恐ろしさ、姫君樣も我々も、心は消へ入如くにて、いき〳〵なされた牛若樣も、ぐんにやりとならんした」と、溜息つくこそ道理なれ。吉次嬉しく、「扨牛若君とは誰が知らせ申せし。但し長者の御推量か」と有ければ、「知らせ人是に候」とする〳〵と立出、「我等は鈴木の三郎、龜井の六郎と申兄弟の熊野武者、平家追討の院宣のお使に參つたり。又武藏坊辨慶、御厩の喜三太は　北國路を御先へ、秀平館にて待奉らんとて罷立、御母常盤御前は、都を忍びて中仙道を御下りと承る。又清盛入道は、火の病と申難病に冒され、今を限りの有樣。彼是源家利運の御吉相、はや〳〵御披露頼み申」と述ければ、吉次大きに悅びの、足も手も地に付ず、「先院宣御

常陸帶—占帶とて緣結にする
源氏の君—光源氏にかく

假初—苅にかく
木になる—茫然とイむ体

と夕附の、「あれ鷄が鳴く鐘が鳴る。先出立が堅くろしい。烏帽子著たは繪にも有」と寄てかゝつて直垂や、常陸帶解く紐を解く。「淨瑠璃御前の瑠璃の肌、源氏の君の光り肌、お肌比べ」と押遣れば、「いやじや〳〵」と頭掉り、後は領く花薄、亂れ伏猪の床の內、しつぽりひつたり、しつぽりひつたり、しんそこ〳〵、底の心ぞ解にける。

第五

水淺黄淀の若菰假初の、こそ〳〵契ばつと成、母の長者に漏れ聞へ、女房達を引連、寢屋の戸口に立覆ひ、「吉次殿、信高殿」と呼び給へば、內には十五夜、冷泉も木に成て、牛若君も、姫君も、二度の汗をぞ流さるゝ。吉次も夜明の目をする〳〵、「吉」何時にないけはしい聲、何事かは」と出ければ、長者色を變へ、「曲もない吉次殿、馴染共ない信高殿。同道なされた若衆が、姫が寢屋へ忍んで、ぬつくりやら、しやつきりやら。疑はしくは戸を明ふか。彼の淨瑠璃には心あての聟が有。大事の娘に大疵付て、何んで癒るぞなをるぞ、分別なされ吉次殿」と、疊たゝいてねだらるゝ。吉「御尤〳〵。若る人の同道は、斯樣の事に草臥れる。如何樣共詫言申さんが、して心懸の聟御とは、誰人にてばし

雲に架橋云々―架橋も雲にはからず千鳥も霞迄は至らぬ

木幡山―山城の木幡山には梔の木數多あれば口無しにかけて云へり

流し控云々―活花の用語をとる

曉―あかぬに掛く

五夜「それ〳〵、お返事〳〵」と、いへ共若君身を縮め、「如何なる責に逢ふ事ぞ。戻して下され拜む〳〵」と計なり。「爰が大事のはづみぞ」と、又十五夜が聲細め、「つれなき事な宣ひそ。九重の塔が高しとて、鳶や烏が羽根打立て飛ぶ時は、九重の塔も下に見る。蒼海深しと申せ共、櫓櫂の立ぬ海もなし。山といふ山に霞のかゝらぬ山もなし、谷間といふ谷間に、ちり〳〵草の生ぬはなし。駒に踏れし道芝も、露に一夜の宿は貸す、風に揉るゝ笹竹も、小鳥に一夜の宿はかす、蘆の假寢の伽船も、比丘尼に一夜の宿はかす。今宵一夜は靡かせ給へ。情なの君や」と仰せける。姫君は急き給ひ、「最う能い加減、仕損ふて給んな」と宣へ共、冷「いや〳〵戀ははづみが大事ぞ」と、「雲に架橋霞に千鳥。木幡山にはあらね共、此方や口なし」とて音もせず。十五夜態とあらゝかに、「ム丶及ぬ戀との譬かや。とても焦れ死なんより、腹搔切て煩惱の犬となり、猫となつて寢所へ、ぐす〳〵と這入、爪を立てゝ何處も彼處も搔て〳〵搔たくり、ひり〳〵させて我思ひ、一度は晴し申さん」と、足拍子とん〳〵〳〵、とゝんとんと踏ければ、誠と思ひ姫君は、覺へず寢卷ほら〳〵と、駈出て直垂ノ御袂、控へらるゝも控ふるも、笑顏計の梅櫻、流し控への睨合、眞には中の思ひかや。斯て十五夜、冷泉は、「是では埒も曉近し。辛氣〳〵」

さもしい—あさまし
こなし—振取廻し
峯の松風—琴のねに峯の松風通ふらし云々の歌の句
一節—一夜にかく
きしましてーまごつかして

子様、御笛を遅なはり、面目もなき事ながら、妾が姫君、御姿を垣間見の戀風が、ぞつとしてよりお枕上らず。あはれお寢間へお忍び有、お手枕の上にて、直に受取給ひなば、藥師勝りの若衆樣、さあお手引ん」と云ければ、牛「是は思ひも寄らぬ事、妹脊の道は未だ知らず。旅の空にてそれがまあ、さもしい事」とて迯給へば、十「是それを知らねばお侍のかなはぬ事。すは夜軍夜討と云時の、一番鑓の稽古に成、萬事のこなしは此十五夜に任させ給へ」と、押遣れば力なく、顫ひ／＼牛若は、局々を打過て、淨瑠璃御前の閨の戸や、几帳の影にぞ忍ばるゝ。十五夜呫き、「優しる聲にて何成とも、云かけ給へ」とほのめけば、牛「優しい聲とは笛の音か。母の形見の一管、戻してたべ」と仰ける。十「エエもどかしい、妾に任せて置給へ」と、若衆聲にて十五夜は、枕屏風をほと／＼／＼と、「數ならぬ、峯の松風琴の音に、通ひ迷へる笛竹の、一節の情をかけ給へ。吾妻の伽羅」とぞ申ける。お側に伏したる冷泉、「それ彼の樣か／＼。少きしましまして見さんせ」と申せば、姫君「如何成ともよい樣にしてたも」と、お聲も顫ひひつたりと、玉抜く汗もいとしらし。冷泉は姫君の聲を移して細々と、「誰そや誰そ、枕屏風に音するは聲がはりせぬ鶯の、塒に惑ひ給ふかや。餘所にも人の聞物を、歸らせ給へ」と有ければ、十

すな／＼―しなしな

御事―御琴か

れ此君は、源氏方の御由縁と覺えたり。いたはしや御代ならば、斯く輕々敷有べきか。苦しからずば少時が程、御宮仕へ申たし」と、思染みたる御顏ばせ冷泉見て取、「なふ十五夜、何とぞ彼の笛を、少の間借て見せましたし。氣轉はないか」と云ければ、十「お蔭にて我々も、ちよつと戴く爲なれば、隨分借て參らせん」と、庭の撒砂すな／＼と歩み寄り、十「今遊ばせし物の音の、笛とやらん申て火吹竹の樣な物、我等がお主の姫君、終に見た事候はず。借て參れと申さるゝ、お心あれ」と有ければ、牛「余り卑下成御口上、辭退申筈なれ共、御事を聞しるべ、吹けがして候」と、服紗に歌口淨めんとし給ふを、十「いや其儘が忝し」と追取て、足早に緣の上へ、くはら／＼と一足飛に駈上り、十「サア借ました／＼。お口のついた歌口の干ぬ先に姫君樣、それからは段々に、ちよつちよと甜つて廻しや」と、御脣に差付塗付、「又用無心も云爲、約束違へず早返さん」といへば、冷泉、「いや／＼今は返さぬ。姫君樣のお寢間へ都人のお忍びで、お手からお手へ請取渡し、それ迄は姫君樣大事の殿子の御笛、握つて／＼握詰て御座んせ。それ女房達、お寢間取りや。火を灯しや」と打連て、皆々奥へぞ三重入給ふ。更け行鐘の初夜も過ぎ、夜露に濡て御曹司、「笛の返事は如何ぞ」と、褄戸の内に入給へば、十五夜見參らせ、「是和

かぐろひ―隱るの延言
皆にした―すつかりなくした
押さる〻―負ける
はしかからふ―はがゆかろう
玉虫拾ひ云々―手持無沙汰でうぢ〳〵する體

村に、立寄る姿かぐろひて、鏡に影はとゞまらず。淨「ホウ能い事しやつた。若衆を皆にしやつた、元の樣に入て返しや」と、御機嫌彌々損ずれば、「今迄有しに不思議な事。誰も隱しはしやらぬか」と、噪ぐ人音夕嵐、庭の荻原女子原、漏るや戀の風ならん。牛若さすが奥ゆかしく、襖戸あらはに押開き、立聞給へる御姿、又こそ鏡に移りけれ。十五夜嬉しく、「それ〳〵、御神躰が鏡の内に顯れ給ふ。拜ませ給へ」と御手を取、十「なふ能く見れば、金賣吉次同道有し都の君。御目の張の氣高さ、此の口元のしをらしさ、御肌著の白小袖、押るゝ程の色白、上重ねは唐綾、上品の直垂、此品々の縫物の手際は心も及ばれず。お烏帽子は左折、金作の御佩刀、彼の指振の尋常さ、百萬騎の大將と申ても、怯はせじ。ウヽ〳〵いとしらしゐお顏や。ほつかりと喰付たい。御姫樣も我々も、鏡で見たは仕合、直に見たらば今比は氣付が入であらふ」と、ぞく〳〵すれば冷泉、「御年は十六七迄は徃まい、姫君樣には似合比。十五夜、我々には少とはしかからふ」と云ければ、十「アヽ驕つた事計。はしこふてもこそばふても、假へ蘞ふて、跡で口が腫ても、身は構はぬ」とざゞめく聲、ほの聞ゆれば牛若は、きやうとくも迯入らず、玉虫拾い玉笹の、露を飼ふてぞおはします。淨瑠璃御前も戀草の、ほの顯はるゝ詞の色、淨「さもあ

想夫戀—曲の名

箒木の巻—源氏物語箒木の巻の「數ならぬ伏屋に生ふる」の歌の意にて數ならぬ賤しき者の義

吹きさし—吹き止める

まんこが玉—萬戸將軍が唐土より渡しゝ寳玉

まどふ—償ふ

はしたない—不謹愼な

に、吹合せてぞ三重聞へける。座敷には女房達、笛の音色に聞ほれて、眼を細め身をねぢて、腰もふなく〵成にけり。姫君感に堪兼て、「面白の笛の音や。殊に天滿天神の、惜み給ひし樂なれば、此祕曲を吹く者は、只人にてはよもあらじ。みづから是にて琴を調べて合せんに、如何にと咎むる人あらば、箒木の巻と答ふべし」と、引寄せて掻合せ、爪音ゆたかに遊ばせば、十五夜、冷泉、太鼓篳篥あいしらひ、籬隔つる糸竹は、心も動く三重計なり。牛若笛を吹さして、「斯る東に誰なれば、此爪音の優しや」と、覗き給へば、座敷にも聞失ひて茫然と、まんこが玉の玉琴の、調子まばらに狂いけり。耳を澄して姫君は、「あれ〵笛がやんだは。まどふてかやしや笛返やしや」と、御機嫌損ぜし折からに、御曹司の面影、鏡に移れば十五夜、「ナフ笛を誰ぞと思ひしに、美しい若衆が、鏡の内にそれ〵」と、走寄て姿見に、ひつたりと抱付ば、冷泉も女房達も騒ぎ立、「此鏡には袖が有」「此方には髪の髱計」「此方の鏡は肝腎の、袴の前腰ア、味そふな」と喰付やら抱付やら、顔は上氣の戀紅葉。女護の島の夢咄、男見たるも斯やらん。姫君そゞろの御目元、「是はしたない十五夜、みづからが鏡なれば、裡の若衆も妾が若衆。見苦しい此方退や」「本に是は不調法」と、立退く跡に入替り、御覧有間に牛若は、小萩が下の一

若紫―源氏の紫上

歡喜苑―諸天人此苑中に入れば自然に歡喜の念を生ず、紀世經に善見城北門の外にある大園林と有り

所在―仕事とする

泔坏―髪洗ふ水の入れ物

蟬折―唐山より渡りし寒竹にて作りし名笛

千五上尺云々―笛の八孔の名、歌口吹く所の名

の種、歡喜苑の花の下、錦華帳の月影に、明て三五の春秋を、人に戀られ忍ばれて、戀しと思ふ人は未だ、持初て見ぬ閨の中、御寢の物の重ね著に、枕一ツの丸寢こそ、何に不足はなけれ共、物足らずなる寢覺なれ。秋も中旬の荻の聲、籠飼の虫の色々に、音をそめ出す萩桔梗、むら〳〵薄の露ごとに、映る月かと見る迄に、立並べたる鏡臺は、伊達を所在の女房達、淨瑠璃御前の夕化粧、其役々をぞ定らる。先御乳母の冷泉はおぐしの役、十五夜は額の役、玉藻前は細眉の上手なり。空冴、月冴、千壽の前、白粉油臙脂の役、有明はお爪の役、更科は留伽羅、籬、小衣、そつの助、楊枝手拭泔坏、定めの役役勤めつゝ、淨瑠璃御前は姿見の、十寸見の鏡に對ひ給へば、十五夜、冷泉、衣紋繕ひ參らする。淨「最ふ能いはいの、何う嗜んでも作つても、見せるは女子計成、身は闇の夜の花ぞ」とて、譬へられても中々に、花も及ばぬ姿なり。斯る折節御曹司、「今宵は父の逮夜ぞ」と、烏帽子裝束あらためて、姫の閨共白露の、からてうづ手向草、牛「此直垂大口は、母の手づから縫物し、蟬折の一管と、ともに形見に賜び給ふ。何とか成らせ給ふぞ」と、いとゞ覺束懷しく、思ひの數も千草の露、千五上尺、中六下口八ツの歌口打濕し、父母の手向の樂なれば、夫を思ふ想夫戀、身も日も寒しと謠ひけん、昔覺ゆる凩

粗忽にも云々—むやみにいふも如何と也
手束弓—立つにかく
峯—三河鳳來寺山
一人も云々—たつた一人娘なれば

ら、矢矧の宿長者殿にて候な。都三條金賣吉次信高の定宿と承る。此度の下向にも嘸泊りにて候はん。十六七の少人を同道にては御座なきか。若し左樣にも候はゞ、逢せて給べ」と有ければ、長者聞給ひ、「さればとよ、信高殿は妾が方に逗留有、東の名所見物とて、氣高き若衆も御同道。左宣ふ人々は、何方ぞや」とぞ答へらる。鈴木兄弟嬉くて「それこそ源氏左馬頭の殿の若君、牛若御曹司、我々は紀州熊野鈴木の三郎重家、舍弟龜井の六郎重淸と申者。後白川の法皇より、平家追討の院宣を蒙り、扨こそ尋参らする。牛若君に逢せて給べ」と、心も勇み氣もせきて「早ふ〳〵」と云ければ、長「アヽ音高し音高し。數年馴染の吉次殿、みづからにさへ明されず、粗忽には如何なり。未だ逗留の筈なれば、御兩人も我方に、二三日も留りて、折を伺ひ吉次殿に申込み、其上には兎も角も、我も人もそれ迄は、知られず知らぬ旅人の、宿かり合せし風情にて、關所も多ければ、ゆる〳〵休息遊ばせや。さらば案内申さん」と、長者は先に手束弓、矢矧の宿へぞ三重 歸らるゝ。都に勝る東路や、矢矧の長者の一人娘、淨瑠璃御前と聞へしは、峰の薬師のまふし子とて、瑠璃をのべたる顏形、一人も一人がらなれや、大内育ちに侍きて、若紫の稚立。和歌の道、文字の道、繪も美う花結び、天性琴の妙を得て、百の媚百

左右―しらせ
はた折―旗
松虫―待
馬追虫―馬を追ふ
屈み鞍―鏡鞍
車を砕く云々―險しき岩深き淵も人の心には及ばれぬ
矢矧の宿―參河にあり、矢を矧ぐにかく

來い〳〵」と引連れて、跡を見ずして迯たりしを、笑ぬ者こそなかりけれ。群集の見物悦びて、皆立歸れば金賣吉次、一散に駈來り、「虎の尾を踏む御振廻、危し日出度し。去ながら此上にも、牛若君辨慶と、人はよもや白旗を上給ふ迄御愼み、常盤御前は人目を忍び、跡より奥へ御下り、辨慶は都に隱れ、秀平の左右を待給へ」と、直に門出の馬負冠者、腰に馬柄杪竹の鞭、窶れ行野の秋の草、連れて音を鳴轡虫、何時か揚ぐべきはた折虫、末松虫の時を得て、馬追虫に屈み鞍、鐙踏張名乘るべき大將軍とぞ見へにける。

第四

車を砕く岩よりも、人の心はさかしくて、船を浮ぶる淵よりも、深きは人の心とて、鈴木の三郎重家は、院宣を首に懸け、御曹司の御跡を慕ひて奥へ下りしが、義を守つてしばしが程農民と成たれば、太刀をも佩ず主從の、見參始如何とて、弟龜井打連て、忍ぶ菅笠みの尾張、三河に架し八橋や、水の源賴む身は、平家を何時か討べきと、常の心に敵を見て、矢矧の宿にぞ著にける。折しも今日は虎の日の、峰の藥師の御緣日、矢矧の長者參詣の、下向道に行逢ふたり。鈴木は一歳ほのかに顏を見覺えて、「是申卒爾なが

十面作り―苦々しき顔する

落してつゝ立ば、難波を初警固の武士、數萬の見物一同に、ばつと驚く計なり。難波腹にすへかね、「若君の御敵、一寸も遁さじ」と、進み出れば武夫共、一度にばらりと取廻す。鬼より怖き鐵婆、綿帽子半ば押除け、「産所の側でもや〳〵と、血が上つては大事じや。やかましゆいふは誰樣じや。婆が此手で片端から、頭をぐんぐと押へて、ちつと沈めて進ぜう」と、馬追冠者も引副ふて、そろり〳〵とねぢ寄たり。難波の次郎齒がみをして、エヽ憎くしと思へども、婆めが面相凄じく、馬子奴が眼其意を得ず、膝節顫ひ出けれ共、左あらぬ體にて、「よし〳〵若君は是非もなし。常盤を罪に行へ」警「承る」と寄らんとすれば、鐵婆大手を擴げ立隔て、「アヽ輕忽な。七夜の內は横寢さへさせぬもの。彼の木の上に引張て、鑓で突ふと云樣な不養生が有物か。堪るものか堪らぬ物か、心見に難波樣、此方さん上つて見さんせ。どりや嫗が上てくりよ」と、裾捻巻り引褰げ、くはつと踏出す兩足は、松の古木に異らず。難波戰慄き身も縮み、聲も顫へど十面作り。難「ムヽ尤々。聞届けぬも侍の。物の哀を知らぬに似たり。七夜立迄相延す」と、云捨て引かへす。老「なふ是々、七夜過て又やかましういはふより、今日埒明て下され」と、追かくれば、難「いや〳〵七夜八夜十夜でも、最早一代構はぬぞ。皆

まつべて—揃へ集める
がきあみ—癩病患者
ちやうち〱—子供の戲、手を拍つ事
あはゝ—口に手をあてあゝといふ戲
無下—思ひやりなし
仕樣こそ云々—外に仕方も有らうに

産祝ひ申べし。先御果報は御父清盛、底意地悪るいど根性。諸人の憎み猜む迄、引まつべてあやかり給へ。力は地獄のがきあみ、御壽命は朝顔の、日影待間の露の身。あら目出度や」と、怪我の貞して絞殺さん、隙間を窺ひ捻殺さん、と眼は四方へ付ながら、「ちやうち〱、あはゝ、ねん〱ころゝ」と賺しけり。父源左衛門亂れ白髪に鉢巻しめ、太刀横たへてつゝと出、「是御檢使難波の二郎殿、此翁は今度の訴人、常盤が親。物其數にはあらね共、左馬頭義朝が舅梅津の源左衛門正國、妻は桂の宰相、常盤が平家に從ふさへ恨みに存、十年已來親子中、違ふた程瘦せ我を張る年寄、慾にめで利に耽り、娘の訴人すべきか。我方にて平産せさせ、敵の子を養育するは虎の子を育つる道理、又いはゞ我孫なり。虫同然の水子を殺さんも無下の至り。清盛の老後の子、抱たい見たいは斷りと、子の可愛さを身に覺へ、正しく聟の敵の子、妊婦常盤が訴人せしは、賢を守る源左衛門、道の上に道を立、情の上の情ならずや。仕樣こそ有べけれ洛中を引晒し、親の門に磔とは、おめ〱と見て居るべき源左衛門と思ふかや。水子といへ共平の朝臣、郎黨には難波の次郎。折こそよけれ、鎗長刀の鞘はづし、大勢を引連れしは、天晴平家の大將よ。此大將を源左衛門が討とめて、首取樣を是見よ」と、引寄せて刺通し、首打

德利子—頭部に比して下部の大なる兒

のめく—騒ぐ事のゝめくか

つがもない—とんでもない

出—發語

喘上泣給へば、見物貴賤心なき、警固の武士下部迄、袖を絞らぬ者はなし。歎の中に常盤御前、色替り腹痛み、御産の氣付給ふを見て、警「いざ行はん」とひしめくを、難波の二郎、「暫く〳〵。是は此序に牛若をおびき出し、討ん爲の謀事。腹を裂ても若君を取上よとの御諚、氣の付こそ幸なれ。近邊に功者成、取上婆は有まいか。産後迄は大事ぞ」と暖簾幕にて周圍を圍ひ、繩を許して木の根の床、兎角しつらふ其間に、産の氣しきつて誕生の、初聲高く聞へけり。斯る處に丈高く、色眞黑成老女、大綿帽子の額より、皿の様成目を見出し、老「私は花の都で隠れもなき、鐵婆と申大名人の取上婆、産一通りの事ならば、二子、三ッ兒は申に及ばず、逆子、袋子、德利子、跡先膨れて、中で詰つた瓢簞子でも、引攫へて掻出す故、熊手婆共申ますが、お尋に就て參つた。やあゐい」と坐りしは、搗臼直す如くなり。武夫共興覺し、「日外の辨慶が頰の色に生寫し。平産有ての上なれば、歸されかし」とのめく聲、老「アヽつがもない、色の黑いが辨慶ならば、鍋やちやん茶釜は皆辨慶か。平産有ても婆が祝ふが式作法」と、幕の内へ手を差入、赤子引出し抱上て、「ナフ憎々しい能いお子や。惣じて祝ひは逆祝ひ、下々は目出度ふ祝ひ、上つ方の和子様は、悲しい事の有たけを、揃へて祝へば頭が堅い。出

阿闍世太子—印度頻婆沙羅王の子、外道を信じて父を弑し母を幽して王位に卽く

婆羅門王—天竺の外道

水子—嬰兒

大功は細瑾を云云—大功を立つるには小節に拘はらず、大行不顧細瑾、大禮不辭小讓(史記)

父親—淸盛

浮—憂き

討ん切んの血の筋よ。斯る敵を身に持し、母が因果は何事ぞ。異國には阿闍世太子、婆羅門王を子に持し、昔語を聞もする。常盤ならで日本に又と、例しの有べきか。淺ましの身の果や、拙き前世の戒行や。いとしと思ふ牛若は、日影の草と埋らせ、辛しと思ふ胎内の、水子ゆへに浮目に逢ひ、罪科に逢ふは何事」と、牛若をつく〴〵と見上てははつと泣き、見下しては哽返り、悶へ焦れ給ひしは、目もあてられず哀なり。母の歎きに堪へかね、「エヽ今は是迄、源の牛若と名乘て出、太刀一ふり奪ひ取程ならば、八方へ切散し、肩に引懸退ん物」と、思ひこふだる面色、常盤それぞと聲を上、「此有樣を牛若が聞付ば、斷出んは必定。おろかさよ〳〵、大功は細瑾を顧ずとかや。母一人を助けんとて、天下の大事を仕損じて、源氏の恥辱を雪がずば、義朝の子とはいはれまじ。今の間に此母は、此木末に梟られ、手足を枝に引張て、釘鎹にて打付られ、鑓先に貫かれ、果は目鼻もとび烏の、餌食とならん其苦み、こたゆるも何故ぞ、牛若を世にあらせん爲。天にも地にも萬寶にも、替じと思ふいとをしさ。斯程に思ふ子もあれば、胎内にて殺す子も有。同じ親にて父親に、此苦患はなき物を、何とて惡業がかたまりて、女の身とは生れしぞ。浮物思ひさせんより、はや〳〵罪に行ひて、殺してたべや人々」と、せき上

死んでの前—死後
妻—夫
浮勤—憂勤
まうし子—神佛に子を授けられよと願ふ

土に參りおはしませ。余りに名殘惜ければ、今はの際も見屆けたし。今暫し此冠者を、是に置て下され」と、檢使の前に平伏て、搔口說き泣給へば、難波の二郎も感じてや、暫時とてこそ許しけれ。常盤は目をも泣張し、顏も擡げずおはせしが、「能も優しゐ詞をかけ、最期の心を慰むる。自は牛若とて、おことが年配恰好の、いとし子を持たれば、冥途の旅の馬の口、牛若が取と觀念し、縛めの繩も痛からず。最期も清くするといふ、死での前には元の妻、義朝公のおはすれば、浮世に心は殘らねど、迷ひと成は牛若よ。それがいとしゐ故にこそ、敵清盛に身を任せ、年月の物思ひ、傾城白拍子の浮勤めも、是程にはよも有まじ。義朝の御年忌御命日にあたつても、精進破らせ酒宴の友、未來の人まで迷はすは、そもや如何成報ぞや。それさへ有に清盛が子を孕む。まうし子しても產まず有、女の心の誠にて孕むといふも僻言よ。清盛に思はれても、貞を見るさへ煩くて、夜の襖は釼を抱き、鬼と添寢の心地して、肌を反向け身をそばだて、心とけぬに女の因果、お腹に子種宿りしは、浮目の上の浮目にて、夜は目で泣き晝は胸、涙の絕ゆる隙もなく、十年といふ春秋を、暮かねたる歎きの程、誰にか語り盡すべき。假へ平家の種にても、身に有中は我子にて、牛若が弟なり。產落せば敵と成、成人しては親兄を、

奈落—地獄にて
なるはにかく
阿防羅刹—獄卒にて剛鐵劍を持つ
鐵鞭—金棒

多門持國—四天王中の二王

郎經遠、下使の下部、穢れの人歩、したり顔に玉襷「犯人遲し」といふ奈落、牛頭馬頭の阿防羅刹、惡刧無盡の罪人を、待も斯やと恐ろしく、見物貴賤身の毛を立、皆々涙を流しける。「すはや是へ」と先拂ひ、「立つまい〳〵先退け」と、鐵鞭鳴し振廻す。罪なき罪に沈むこそ、前世の報ひ重き身を、乘せたる駒も口取も、共に涙の足重く、しどろもどろに行惱み、古郷戀しも引かへて、悲しや親の家の前、最期場にこそ成にけれ。下部の雜人あらけなく、鞍詰の繩解て、常盤御前を抱下し、木の根にどうど腰引据へ、「此處な馬子奴はめろ〳〵吠て、しかと馬を追もせず、道に隙取日も傾ぶく、最う用はない、歸れ〳〵」と睨付る。牛「御尤〳〵。去ながら我等は金賣吉次の馬追冠者、東下りの門出に、行懸り不思議に鬮に取當り、常盤御前の御最期の、御馬の口を取事は、嘸や三世の宿緣と、思へば涙留まらず。高きも卑きも世のならひ、親の死したる葬禮の、輿に其子が手をかくる、是もそれにかはらねば、前の世の親と子が、馬子と生れて葬禮の、輿に手をかくるぞ、と思へば今も母上樣、如何に宿緣なればとて、母を高手に縛めて、罪に行ふ馬の口、子が引渡す因果の程、昔が今に至る迄、そもや例しの有べきか。今宵より精進し、讀み奉る御經が三途の河の船と成、死出の山には馬と成、多門持國に口取られ、佛

高倉―高し
嘴―鳥のはし

歩みなづむ―行き滞る

がう木―礎柱

給へ人々なふ。みづからが科とても、盗みとては致さず、人を殺せし咎もなく、況て仲言僞りせず。妻は源氏の左馬頭、名は義朝と巾人、形見の胤の子を持て、今歳は既に十六才、其子を慕ふが曲事とて、斯る罪科に行はるゝ。子のある方は推量有。子達は親を思い遣り、歌念佛すゝめたび給へ。南無阿彌陀ぶ」と稱ふれば、知るも知らぬも念佛の、聲高倉を引渡し、とても骸を暴す身は、爪嘴にかくるとも、惜まじ野邊の烏丸、惜みても厭いても、誰かは一人留まらん。果は烟の室町や、洞院小川はや過て、子に引るゝと思へ共、地獄を急ぐ道なれば、乘たる馬は火の車、油の小路堀河の、水は淀まず中々に、淀むは駒の足並や、「はい叱い〳〵」と鞭あてゝ、口には追ふて心には、涙の手綱引留め、引留むればさすが實に、馬も生あるしるしとて、歩みなづみつ行惱み、黃成涙を流すれば、草木も哀知りぬべし。此處ぞ猪の熊大宮の、辻を廻れば有難や、西にぞ壬生の地藏堂、六つの衢を導きて、慈悲を知邊の錫杖も、杖も及ばぬ警固の杖、追立〳〵引渡す。駒の追風秋の風、末は朱雀の野邊の露、脆き命ぞ三重末ちかき。身の成果や梅津の里、源左衞門が家の前、樗の立木を其儘に、枝を打て科人の、がう木の柱と定らる。廻りに拔身の鑓長刀、數百本整々と夕陽に輝けば、此世から成劒の山。檢使には難波の次

命三つある—常盤と腹の子と牛若との三人の命一つは止る—牛若の事

我は連行—母を三途川に連行く

押落—惜し

たのも—頼む

こんかき—紺屋、爰は紺衣を着せし下郎

露の轡虫

命三ツ有親と子の、中に一ツはとゞまれど、二ツは今を最期場の、羊の歩み引かへて、駒の歩みや鞍底に、身を柵の立田川、繩目〳〵は紅に、しめ付られし後手に、爪繰る数珠は今死ぬる、我後生より菩提より、馬の口取子の行衛、末安穩と見下せば、子は又母の成佛と、見上る涙眼に漏て、警固の武士はあらけなく、「急げ〳〵」と追立られ、泣く〳〵引つ引れ行く、親子の中の歎きには、上越す哀ぞなかりける。引るゝ町は何處〳〵ぞ。上は一條今出川、歌爰は何處ぞと、馬子衆に問へば、死したる親も祈りの奇特、再び娑婆に戻橋、我は連行く三途川、出水通を引過る。跡のしるしとなりはせで、此身の果は風に散る、柳の馬場と聞からに、浮世の名殘押小路、とわたる鳥の聲聞ば、名も懷しや哀我、ときはの國の友ならば、後世を田面の鴈金に、戒名か文字言傳ん。佛の御手の善の綱、二條三條これとかや。昨日は袖にかざしぬる、錦の小路亡き跡の、旗に縫へとや綾の小路、四條五條の橋の上、老若男女聲々に、「科人あり」と立集ふ。紺かき下部高聲に、「法を破りし罪科人、みせしめ成」と呼ばる聲、耳に堪へて淺ましく、常「憐み

在鄕馬—前の殿文な馬に對して云ふ驛馬
溫な—甘い事吐す
大黑—梵妻、弘法鬼子母神の前にて御鬮を採るに梵妻を賴めり

いやがり申ゆへ、何時とても馬さし方にて、天道次第の鬮取に致す事。馬さしに仰付られかし」と願へば、瀨尾、「急成御用に何の馬さし。是にて鬮をさせられよ」「承る」と徒士目付、人數に合せて細繩切、「サア長きに當るが役馬ぞ。寄て引け」と出しける。「いや我等は仲間はづれ、二の瀨村の在鄕馬」牛「是馬子衆、此冠者は鬮を除てたも。賴む〳〵」と詫給へど、馬「ヤア溫な、賴むとは何の口で。ちと利口振出さぬかい。ならぬ〳〵鬮取れ」と、皆立かゝつて、「南無鬮取大明神、短を取らせたび給へ」甲「大黑賴んでどれ取ろぞ。ハア短いは忝い」乙「此方も短い有難し」と、戴き〳〵立退く人も多き中、母の罪科や罪障の、山鳥の尾のしだりをの、長きを取るぞ是非もなき。馬「そりやこそ冠者奴があたつたは、能い氣味な。科人の馬追ふて、夜さり首が咽笛へ、わんといふて嚙付ふ」と、實にも野人の心なさ、哄動をつくつて笑ひけり。瀨尾の太郎聲を荒らげ、「サア鬮は極つたり。參れ〳〵」と責ければ、力及ばず牛「あつ」といふ、聲の中にも正八幡、諸佛諸菩薩、別しては鞍馬の大悲多門天、日比讀置く御經も、現世後生も父母に、二筋引し法の綱、今は母上片口に、引て出たる駒の綱、縺るゝ心ぞ 三重 いたはしや。

第にて、御祝義も獻上も無用になされ。吉次にも其通り申渡されよとの仰なり」とぞ申ける。手の裏かへす平家の掟、例の事とは思へ共、吉次も不審晴やらず。瀬の尾太郎驚きて、「シテそれは小産ばし召れての事か」といへば、徒士「いや〳〵左樣の事ならず。常盤が源氏に心を殘し、惡緣にて平家の子を懷姙せしは是非もなし。安々と產落し、平家の子孫蔓らせ、源氏に對し道立ず。毒を服か、腹に刃を突立て、我身も共に死んと申。威し賺しつ致す內に、既に帶を解んとす。淸盛公御立腹甚しく、先高手小手に搦めさせ、今日中に洛中町小路を引渡し、親源左衛門が家の前に、門磔にかくべしとの仰にて、其支度急々なり、お歸り候べし。ヤよい處に馬方共、常盤を乘せて引渡す、巖丈なる馬一疋、引て參れ」と云渡す。牛若はつと肝に泌み、何ゝ條母を引渡させ、罪科に逢せ置くべきか。六波羅に切入て、何ゝ十萬騎も切散し、母は人手にもかけじと、思へども「待てしばし。母の浮目を見給ふも、我を助けて、父の仇を討せん爲。運盡て仕損ぜば、父母の敵を討ぬのみか源氏の瑕瑾。奧州の秀平が短慮なりとさげしまん。如何はせん」と、吉次をきつと見給へば、吉次も氣色見て取て、頭を掉て目まぜの躰。急き來る心押沈め、胸に淚を包まるゝ、千々の思ひぞ哀なる。馬方共聲々に、「科人渡す役馬は、我人

爰に用ひたり、今の警部

小產—流產

巖丈—強き

浮目—憂目、以下皆同じ
秀平—鎭守府將軍藤原秀衡

我人—我も人も

阿部家—安倍晴親、陰陽博士の家

徒士目付—徳川時代の役なるを

常盤御前、入道御妾にそなへられ、御寵愛有しに、此常盤欠落し、方々詮義遂げたれば、常盤が父梅津の源左衛門方へさまよい來る由、則父が訴人にて有所詳しく知れ申た。なふ吉次御聞やれさ。入道殿お年は六十四才で、御氣精強い事ではないか。常盤御前は懐姙有、當月が産月。阿部家の博士勘へて若君と占い、御老後の御男子平家繁昌の瑞相、殊に去年小松殿御逝去に、當年常盤の男子懐胎疑ひもなく、小松殿の生れ替りなるべしと、大方ならぬ御悦び。御誕生の御祝義は、御惣領同然と仰出さるゝ。然れば御一門諸大名獻上の太刀刀、百ふり計吉凶を選んで名作を用意召されふず。馬代の金銀巻物類、さあといふ時御用に手支へなき樣に、御誕生過る迄奥州下りも延引あれ。假初ならぬ大事の御用、ハテ産落して明き腹の、常盤は死んでも構はぬ事。腹に御子の有中は母の身とても疎ならず、守よ札よ産婆のと、我々が忙しさ推量あれ」とぞ語りける。吉次横手を打て、「これは〳〵お目出度い。いや當年は老人の子を産する年やら、此隣町に道庵と申、六十九に成斉啇坊の隱居が、玉といふ飯焚にたつた一夜忍んで、淺黄小紋の布子を、やす〳〵と玉が産ました」と、當座の興を催ほす所へ、六波羅殿の徒士目付、あはたゞしげに、「ヤア瀬の尾殿、未是に御入か。常盤御前誕生の事、散々の次

御共―御供

ほてがくねる―可笑くてたまらぬ

こなす―打ち潰す

がんだう云々―强盜に入る、屋尻に尻をかく

介かけるは定。中間の邪魔じや差換い。馬の町か日野岡か、先駄賃借たら戻して、はや出て失い」といひければ、牛若「我等は北山二の瀨村小冠者といふ馬子。日外吉次樣、馬詣に片道此馬に召し、其時よりの約束で、奥へお共は致せ共、目利の通馬追ふことは無巧なれど、其代りに東路の垂井、青墓、赤坂邊、夜盜强盜多しといふ。例へ今音に聞、熊坂の長範でも、何百人でも此童、只一人に押向て、何れも怪我せぬやうに、足早にお迯〳〵。其時は各の命の親の此童、留れならば留らふが、後悔召さるが笑止な」と、店前に高腰懸け、揚足してぞおはしける。長「ヤアほてがくねるはい。小意氣過た前髮奴、摘み出してくれふ」と、肱を張ば馬方共、「よいは〳〵、頤は憎けれど、若衆が能い堪忍せい。盜人こなすと自慢こく。待て晩の泊に寢處へがんだううつて、やじりきつてくれふぞ」と、一度にどつとぞ笑ひける。かゝる所に瀨尾の太郎兼安、「六波羅殿の御用有。吉次は未だ發足なきか。面談せん」といゝければ、手代共飛で下り、「その段申聞すべし」と、見世の上にぞ請じける。吉次奥より揉手をして、「ハアお出で御座ります。御所は昨日お暇申、跡の御用は手代共、承るはづ成にお氣遣し」と申ける。衆「いや〳〵氣遣な事でなし。上に目出度い事あつて、御用仰付らるゝ。御手前も存じの通り、源氏義朝が後家

すゞき—鈴木と鱸
魚と水—仲善き事（蜀志諸葛亮傳）
黄金を云々—金銀兩替商
菊月—陰暦九月
聞くにかく
賑れり—賑へりか
片意地—頑固
こぢよく—小わつぱ

なり」と、するり〳〵と拔放し、石に打當段々に、打折てからりと捨、「是ぞ冥途の小松殿へ、二心なき未來の忠義。此お使は牛若君に現世の忠義の始めぞ」と、守袋の紐を解き、院宣納め首にかけ、叡慮を伺ひ立出る。兄は正直順路の武士、形一ッを源平兩家、現世と未來の忠義を立、弟は孝行武邊の勇者、心一ッを父と母、兄と君とにたゞせりと、叡慮深く還幸有。名も水に住む鱸すゞき、魚と水との如くなり。

第三

扨も三條の吉次信高とて、黄金を商ふ商人ありて、毎年數多の寶を集めて、高荷を造つて奥通ひ、次第に家も富の小路、三條表の檜木見世、平家の御用菊月の、今日を嘉例と馬方に、半金渡す錢拂ひ、數多の手代が覺帳、八十八駄の馬追に、祝義取らせて旅立は、東の空や逢坂の、赤飯蒸して酒肴、隣町迄も賑れり。多くの中に十六七の馬追の、人に勝れて目の中も、くり〳〵栗毛の馬追ふて、小利發氣に立廻る。片意地の長八不思議そふに見廻し、「やい若る者共、此處なこぢよく奴を知たか、終に中間で見馴ぬ奴。まゝごとしそふな態をして、二百里に余つた奥州、半分道も往ず、所勞ぬかして、人に厄

一なり。弟は源氏に身を立て、兄の身命はたゝさせ、龜井が嬉しかるべきか。曲もなき鈴木殿、慳貪成兄上」と、引寄せ〳〵縋付、「まづ此如く本の龜井が悲まば、何と返答し給ふ」と、詞は他人向なれど、涙ぞ誠の涙なり。鈴木横手を丁ど打、「ハァあやまつたり〳〵。院宣の御使して、兄弟諸共源氏方、牛若君に從ふべし。汝が諫を聞に付、さこそ龜井が恨むべき。懷しさゆかしさよ」と、そゞろに涙を浮ぶれば、龜「なふ左程に慕ひ給ふかや。何をか包まん我こそ龜井の六郎よ」鈴「さては弟の重淸か。母の名字を繼だれば、御分は母の形見ぞや」龜「父の名字を繼給ふ兄こそ父の形見ぞ」と、兄弟ひしと抱付、聲も惜まず泣ければ、女房も涙にくれ、供奉の內侍、法王も御衣の袖を絞らせ給ふ、叡慮の程ぞ有難き。斯て龜井は牛若の御所在、喜三太が口移し備に語り、片時も早くと勸むれば、鈴木も御暇申せしが、立留つて、「思へば〳〵小松殿、平家に向つて弓引けとて、此重家は賴まれまじ。苔の下にて亡魂の妄執も痛しし。院宣の御使して源氏の味方に參る共、源平兩家の戰の軍の御供は仕らじ。後れたり臆病と、後指をさゝばさせ、其代りには牛若君の御行末、若し一大事のあらん時、千里も厭はず馳參じ、腹十文字に搔切て、冥途のお供仕らん。それまでは重家が生國藤代に引籠り、軍に出ねば身は農人、太刀刀無用

ぼて振—擔ひ賣の商人

從へて—原本のまゝ

やみ〳〵—みす〳〵

七才五才—幼少なりとて容赦せず

の大敵は法王樣。それに金をあてがい、敵の城へ兵粮籠ながら、源氏に附ては弟のさけしみが恥しいとは、理の詰らぬ云分。頭は鈴木尾は江鮒、跡先揃ぬ」と、かゝら〳〵とぞ笑ひける。鈴木氣色を損じ、はつたと白眼、「ヤアぼて振の賣人め、弓取の法は知るまじい。弟龜井は侍なれば、汝等が推量とは雲泥萬里。其處立去れ」と睨付る。龜「イヤ是賣人も人による。彼の行燈の書付を御覽ぜ。ずんど心底の鹽梅よし。さらば其弟の龜井に、此鹽梅よしが成かはつて問答せば、一言も開せじ」と、布頭巾取て捨て、朸腰に脇挾み、膝立直して、「是兄じや人、鈴木殿、僅二人の兄弟を、源平兩家に別け置れし父の心を御存じか。子を思ふ親の慈悲、我子で思ひ知り給へ。傾く平家に從へて、兄弟が譽れもなく、やみ〳〵と骸を曝し、孫の命も有まじと、子孫の絕ゆるを悲み、末繁昌と見へ渡る、源氏へ龜井を付られしは、兄の鈴木を見立よと。いはぬ計の親心、痛はし共有難し共、推量なきは不孝人。親を學ぶは子の作法、七歲の男子を平家方と名付置、御身源氏へ忠功あらば、其子も命助かつて道も立子孫も立、孝も立家も立ッ。勅命に背き、平家に荷擔人し給はゞ、其身は申に及ばず、七才五才もいはせばこそ、胎內迄子孫を斷れ、親の墓も引毀たれ、道も立ず、名も立ず、家の名字を絕やさんこと、不孝の罪の第

松柏の云々—世亂れて忠臣の操を知る、歳寒然後知ニ松栢之後凋一(論語)
出々—どれ〳〵
宿紙—すき返しの紙
鈴木—鱸にかく

の忠義、遂ぬも便なく候へば、御傍の上臈達、御取次下されかし」と、身を投伏て奏しければ、龜井、拙は幼少より、別れ育ちし兄なるよと、女房に目配せし、小首をかたぶけ聞居たる。法王御手をはたと打、「松柏の萎むに遲るゝとや。諸木の霜に枯るゝ時、松の常盤は見ゆるぞや、小松が忠義顯はれたり。それには似ぬ淸盛一家が不忠不義、天下の煩ひ國土の憂へ、疾に亡すべかりしを、小松に免じて助けしなり。出々平家誅罰の院宣をなすべし」と、内侍達の懷中の御硯宿紙にて、宸筆の院宣薄墨に遊ばし、法「義朝が末子牛若、京近邊に有と聞。此黄金は軍の用意、共に鈴木渡すべし」とて給びければ、鈴木飛退去り、「宣旨背き難く候へ共、某父方は鈴木にて平家の被官、母方は龜井を名乘て源氏の下人筋。さるに依て、親にて候鈴木の庄司、一人の弟を幼少より引分け、母方へ付置、今にも源平軍となれば、兄弟しのぎをけづる中、亡びかゝる平家を捨て、末榮べき源氏に從ふなどゝ笑はれては、他人よりも恥し。七才に成悴を連れ。平家の味方に參る某、院宣の御使は余人に仰付らるべし」と、申捨て駈出る。龜井走りかゝつて引留、「ハテ又しては〳〵、びち〳〵跳る鈴木殿、尾鰭を付て生臭い云分めさるれど、くだらぬ〳〵。もと法王樣は平家滅さんとなされしゆへ、斯く押籠れおはします。然れば平家

おきく〱—起きるや否や

なめ過た—無稽極まる

二百十日云々—二百十日は厄日なれども風吹かぬ事もあると同じく密夫の科料も三百匁とは限らぬ

輕—憚の訛か

八性氏—八莊司

被管—家來

三所—本宮、新宮、那智

遙に、「あやまりないとはいはれまい。今朝おき〱にひよつと來て、茶一ッ呑だ計に、合點の往かぬ金突付、人が何んの請取らふ」と、喚くを男は半分聞、亀「そりや見たか。男の留守に女房の寢込へ仕懸、嚊が出花を能ふ呑んだなあ。なめ過た銀で濟そふや。二百十日に風は吹かず。嚊が出花の相場が何時三百匁に極つた。サア失せい」と引摺て、立歸れば、法王御覽じ、「ヤアさなせそ〱。其者聊か科はなし、法に過し施物を歸さん爲よ。如何に旅人、愚老が一鉢は、其日の餓を養ふ迄、明日の貯へ何にせん」と、立去らんとし給へば、龜井は「あつ」と怪訝顏、旅人は手を突き頭を下げ、涙を流し居たりしが、旅「一天の君に向ひ奉り、申も輕多けれ共、某は紀劦熊野の八性氏、鈴木の三郎重家と申。平家の被官にて御座候。扨も小松の重盛、「平家の運命末危し。憂恥を見ぬ其中に、命を取て給はれ」と、三所權現に命請し、卯月初めに熊野參籠有し時、某を密に招き、「父の入道天命に背き、法王を鳥羽殿に押籠憂目を見せ奉る、冥罰子孫に及ばん、淺ましくも恐ろしし。我死して後、黄金三千兩、法王へ獻上し、貧苦を慰め參らせよ。世間へは此黄金、菩提の爲唐へ祠堂に渡すと披露して、賴むは汝一人。深く包め」と申されし。此鈴木めを人と見られし小松の遺言、草葉の蔭にも腑甲斐なく、且は小松が寸志

八ッ目の草鞋―乳の多きわらぢ
鳩の杖―鳩は咽ばぬ故老人之を用ふ
貧女が一錢―貧女が一燈の諺をとる
四分律―佛書六十卷あり
十二頭陀―頭陀の行法に十二種あり乞食は其一なり
不作餘食―餘の食をなさぬ、飜譯名義集に食不レ作二餘食一法、二四、一乞食、二三、一坐、四一揣、とあり
まつかせ―よしきた
尾籠―をこの音、無禮

成。頭陀の袋麻衣、鐵鉢を御手に据へ、八ッ目の草鞋召るれば、二人の内侍鳩の杖、網代の笠を携へて、昔にかはる御共人、賤が門々、「鉢々」と宣ふにぞ、主の女「進ぜましよ」と貧女が一錢手の内の、片搗麥を御鉢に受、法「三寶供養六道の、有緣無緣」と御回向有、戴き給ふぞ痛しき。旅人も態と知らぬ顔、「近比殊勝の修行者、僅の報謝致し度し。受給はんか」と云ければ、法王聞召「さん候。四分律に十二の頭陀を說かれたる。中にも次第乞食とは、長者をも親まず、貧者をも猒はず、次第〳〵の門竝を、請ふて通る法なれば、如何にも申受べし」と、仰も果ぬに旅人、肩に懸たる革籠を開き、重たそふ成一包、御鉢の中へ入れんとすれば、法「アヽ是は重たげ成御施物、金銀でこそ有らめ。不作餘食と申して、一時の食の外とては、受ぬ頭陀の法ぞかし。只一錢一粒の施しあれ」と宣へば、修「修行の法は兎も角も此金子三千兩、御僧の外余の人に施す金にて候はず」と、云捨て駈出る。「留れ〳〵」と内侍達、呼ぶ聲耳に聞入ず、田の畦傳ひ迯て行く。折しも龜井はあき内より戻る處を、女房、「是此方の人、あれ捕まへさつしやれ」と、呼はれば龜井「まつかせ」と、畠も畦も踏荒し、彼方此方へ追廻し、難なく追詰め「どつこい遣ぬ」と引据ゆる。旅「ヤア尾籠千萬、何あやまりに斯く聊爾はするぞ」と、いへば女房

其緣にて愛嬌ありと也
おかた―お嗅
こつちり―情の濃なると濃い茶
頭陀―梵語、抖擻と譯す苦行して煩惱の塵を拂ふ義
鉢々―ハツチ坊主の物請ふ詞

草鞋も妻が手作の、情の鼻緒足輕く、朝夕飛で鳥羽の里、名所は人の氣も優し。未だほのぐ〳〵の朝霧に、牢人めきし旅人、「なんとおかた茶は未だ有まい。素湯一ッ所望」と、床几に腰を懸ければ、「成程お茶も沸ました、酌で上つて下されませ。私が亭主は朝茶好き。毎夜京へあき内に戻り〳〵呑では、いかな宇治の極上も、嗅が茶には及ぬと、女夫の中のこつちりの、出花を上つて下さんせ」と、小じほらしげにあいしらふ。牢人「ムヽ扨は御亭は留守か。聞けば清盛入道、後白河の法王樣を、此鳥羽の北殿とやらんに押籠置しと聞及ぶ。お内義の才覺で、法王の御有樣、ちと拜む事成まいか」といひければ、嗅「いかな〳〵番に番嚴しく四邊へ參る事叶はず。去ながら、此度小松の重盛隱れ給ひし菩提の爲、此鳥羽の里日に一遍、頭陀の修行なされたきとの御願ひ。放逸無慙の清盛も、我子の別れに心和ぎ、七日が間は一遍づゝ、鳥羽一在所の内計、苦しからじと許し參らせ勿躰なや痛はしや、御法躰とは申せ共、十善天子の御身にて、我等風情の門に立、鉢々〳〵と宣旨有。殊勝共痛はし共、涙にくれて染み〴〵と、拜みし事もさふらはず。追付御幸の時節故、此草鞋を捧げん爲、急ぎ作り候なり。あれ〳〵彼へ見へさせ給ふぞや。必それと知らぬ顏、常體の鉢開き同然の挨拶」と、知らする風の秋の山、たどろ〳〵と御幸

猿々、こけ猿小猿が、唐と日本の汐境、ちくらが沖の、沖の小島の、波にしよぼ濡て日本の方へ、越すを越させじ、越さん越させじ我慢の相、天下分目の軍を學び、針目正しく糸筋清く、縫ひ仕立たる直垂を、我朝にて著る人は、我等が主人ならずして、又と二人有べきか。サア渡せ」とぞ申ける。龜井一々聞に付、「是八幡の引合せ」と、小聲に成て、「扨覺へたり申シたり。お主と申は源氏方の由縁よの。我は紀州熊野の住人、龜井の六郎重清といふ、代々源氏の下人筋。主君と頼むお方あらば、引合たべ」といへば、喜三太悦び、「ムヽ聞及ぶ龜井殿か。我等がお主と申は、義朝の八男牛若君、御母常盤御前を、清盛入道害せんとの催しゆへ、此所を忍び落ち給ひ、此御形見を若君へ屆け申せとの相圖にて、扨こそ斯樣の次第なり。君は近日奧州へ御下向なり。追付跡より下り給へ。某は喜三太と申お馬取、豫て御披露仕らん。先それ迄は穩便に。其儘其商ひして、豆腐に串をさす共、腰に刀は指すまいぞ」と、袋擔て別るれば、龜井悦び打頷き、「兎角御前は能い樣に。追付下つてお目見へし、多勢の軍兵勢揃へ、打て上る程ならば、主と下人の鹽梅よし。源氏の運は鹽梅よしの、豆腐の豆のさや」か成、月に別れて 三重 歸りける。戀塚を、隣に住ば藁葺の、燒餅茶屋の妹脊迄、色を酌茶の女夫合、夫は京へ小商ひ、

八幡—源氏の氏神

穩便—おとなしく

さやか—爽にかく

戀塚—鳥羽にあり其隣の茶屋も

呉郡云々─昔呉國より渡りし綾
山鳩色─黄の濃き色

三國一の云々─嵯峨の釋迦

車に蟷螂─以ニ蟷螂之斧一向ニ隆車一の意をとれり

ませ─小くして才勝ちたるもの

「其直垂は紗綾綸子、緞子繻珍の類ならぬ、呉郡の綾のもと渡り、山鳩色に薄紅まぜて、さつと一刷毛、はかせかけたる八重飛白、八色五色の組糸にて、十二の菊綴、四つの紐付、蜻蛉結び蝶結び、雌蝶雄蝶の翼を學び、番ひ結びに結ばれたり。右の肩の折目より、左の袖の端れ迄、鞍馬は大悲多門天、加茂の御社、糺の森、貴船、松の尾、梅の宮、高きお山に愛宕山、麓には三國一の釋迦如來、甍を竝べし景色を、手を盡し氣を盡し、上手を盡して縫れたり。脊筋に源氏の產土、岩清水正八幡の宮所、赤の鳥居は赤き糸、瑠璃の玉垣瑠璃の糸にて縫るゝ、百八間の廻廊に、廿四孝八景の彫物を移して、一間〳〵に金糸を入、鷺に澤瀉葡萄に栗鼠、車に蟷螂、きり〳〵〳〵桐壺、箒木、若紫、是も源氏の壽の、御代を祝ひて縫物せり。腰に綠の千本松、白鳩千羽、雛鶴千羽、竹の小枝と子の日の松、ひつくはへ〳〵、梢々に巢をくふ躰。源氏の白旗百ながれ、平家の赤旗百ながれ、威勢を爭ふ山颪、神風山風沖津風、平家の赤旗さつ〳〵〳〵、吹拂ひ吹纏ひ、八重の鹽路に引汐の、浪間を照す白旗は、朝日と輝く雲の色、金銀の糸にて縫はれたり。大口袴の裾の縫い、唐の猿も千疋、日本の猿も千疋、唐土の猿は大國にて、尾を長く色薄く、形大きに縫れたり。日本は小國の、顏をませ〳〵ませの小猿の、ずんど小猿の猿、

朸—天秤棒
とつこの皮—獨鈷か、僧の分別といふに用ふ(俚言集覽)
心惜く—奥床しい

て進ぜふ」と駈出る、朸引合て袋どうと落たりけり。中「扨こそ〳〵先へをのれが仕てやつた。いきがたり奴」と云すてゝ、抱へて走るを引たくり、重「をのれこそ横取の、とつこの革。朸の背打頂くか」と、振上れば、中「ヲヽサ如何なりとせい。身が旦那はらう人。母御よりの御形見、命かけて大事の物、戻して旦那出世の後、きつとお禮に預るか、無理取して首を切らるゝか、勝手にせい」と怯まぬ躰、龜井も流石心惜く、「ムヽしかとそれが定ならば、袋の中に何が有、いふて見よ。違はずは其方にくれふ」といへば、中間ちつ共臆せず、「それを知らいで能いものか。青貝蒔繪の手箱に、小結の烏帽子、笛一管、五色の糸の繁縫の直垂大口有筈。何んと違ひは有まいが」重「ムヽ然らば笛は如何樣の笛なるぞ」中「ヲヽ吹けばひるひる〳〵鳴る笛よ」重「ヤイ鳴らぬ笛が有物か。竹の恰好いふて見よ」中「されば竹は漢竹、節込て蟬の形に小枝を切て殘されし、是に違ひは有まいぞ」重「然らば直垂大口の縫の模樣は何々、地は何色」と問ひければ、中「ヲヽいふて聞せん、よつく聞け」

模樣盡し

螺鈿—青貝の蒔繪
小結—小形
御將束—御裝束
空鞘—刀を佩くに鞘の先を高くする
二合半—奴が一日の給米
二佛—昔細川玄旨の召使に大佛といへる中間僧となりしをよめる狂歌、大佛頭を剃りて又佛是ぞ二佛の中間の果(俚言集覽)
恩を請ふ—恩にきる

うか斯うかと分別袋、口を解けば螺鈿の手箱に、横笛一管小結の烏帽子、五色の糸にて樣々の、縫物したる直垂、大口共に疊みこめられたり。重「いか樣よし有公達の御將束、不思議に我手に入る事、武運開けてよき大將、主に取るべき瑞相」と、歸り支度する處に、赤銅鍔も物錆て、雲の空鞘剝廻り、月山の端に二合半、もつさう頭の奴が聲。「南無陀は〻南無彌陀、南無阿彌陀ぶ南無阿彌陀」塀を見上て高念佛、立留りては又念佛、是ぞ二佛の中間なり。中「是鹽梅よし。我身が樣に此處を念佛申て通つた人はなかりしか。彼の高塀から女中などは見えなんだか」重「さればく〵、私先程ふと念佛申たれば、塀の上より美しゐ女中が、なふおじやつたかとぬつと出、ハア違ふたとてぬつと引込み、それより念佛申人一人も通られず。此方の念佛待てそふな」と、なぶるも知らず打頷き、「なまみだぶく〵、なまいだく〵、く〵く〵ア丶喉が痛ゐ、湯はないか」重「いやく〵湯も茶も仕廻ふた。唐辛味噌は有けれど、是では咽て堪るまい」と、賣物擔げ迯んとす。中「是待てく〵」と引留め、大事の手筈の念佛、一人の聲は屆かぬそふな。同音に申てくれ。恩に請ふ頼む」といへば、重「お安い事じやが、宗旨が違ふた御免あれ」中「そふはいはせぬ、たつた今念佛申たではないか」重「いや只今は魚食ふて口が生臭い。明日來て申

し行燈ー暗い
身の油ー働いて取りたる所得
豆腐云々ー豆腐田樂の加減がよい
四十八事ー彌陀の四十八願
阿彌陀の光ー阿彌陀圖をひいて買うてくれぬか
高塀ー高いにかく
生魚ー若い男
おすもじー御推量
てんがうーいたづら

鹽梅よし」とぞ賣歩く。「アヽ今夜も月は八ツ前、扨も賣れぬ事かな。蒟蒻は今夜喰いでも明日までも置るゝが、豆腐が廢る。一丁を廿四に切、二丁で四十八串、彌陀の誓願アア何處ぞに阿彌陀の光りはせぬかい。賣て退けたいな。ムヽ南無阿彌豆腐なまいだ。ああなむあいだ」仇口念佛高塀より、若き女の顔出し、「是おじやつたか。宵からたんと待焦れた」と、忍びやかに呼はる聲、重「あい〳〵。ずんど燒立味噌べつたりのぬく〳〵、頤が落まする。十串計上ましよか」と、いへば女は「アヽ煩さ。違ふたげな」とて入にけり。重「ヤア聞へた。爰は淸盛が妾共を置對の屋の裏と聞。淸盛の古入道が、鹽鮹頭に喰厭て、生好魚むいたづら女、念佛合圖の男引入れ、何でも能い慰」と、打仰向て「なまみだあゝ南無阿彌陀、南無阿彌陀ぶ」と張上れば、以前の女「是々來てか。何として遲かりしぞ。待ぼうけに氣が盡た。爰へ〳〵」と小手招き、さし心得て、重「アア待身より待たるゝ身の、千々の思ひを御すもじ、宵から賤が魂は、拔て其樣のお袖に」と、思はせ振の詞つき。女「エイいやらしい何んぞいの、てんがうも折による。コレ是に大事のお形見有」と袋一ッ投出し、「見咎められてはむづかしし早ふ〳〵」といひ捨て、女は隱れ入にけり。龜井案に相違して、必定是は盜み物。後の難義に成まいか。何

蛭が小島の悴—頼朝の事

三軍—大軍

白濟—百濟の國

四魔—蘊魔（隨逐義）死魔（奪命因）天魔（障義）煩惱魔（與ニ死生ニ衆生作ニ苦器ニ故）（釋氏要覽）

源は涸れて云々—源氏衰へて支離滅裂なるに喩ふ

烏羽玉—暗き意にて人目も暗ま

け、「サア常盤御前も討て捨て、法皇を流罪に沈め、蛭が小島の悴め、鞍馬山の童を初め、片端に攻伏せん。馬に鞍置け物の具せよ。入道年は寄たれ共、保元の弓勢、平治の太刀風、草木も靡かす赤旗を眞先に押立て、三軍心を一致にして、親が進まば子も續け、兄が引かば弟は駈けよ。主が討れば下人は飛超へ、先陣討れば後陣が乘越へ跳越へ、隙をあらすな息つがすな。無二無三に攻め入らば、秋津島は扨置ぬ、鬼界高麗白濟國、南蠻北狄殘りなく、平家の下に附けん事、案の内に覺へたり。小松が別れ悲んで、心落すな臆するな。勇めや勇め一門」と、中門の歩の板、どう〳〵と踏鳴し、物に狂ひの勢は、惡魔天魔邪魔心魔、四魔の首領の僧正坊、大天狗の所爲なるはと、鼻にあらはれ見へにけり。

第二

源は涸れて埋れて濁江の、水に離れし魚とかや。源氏侍方々の、底の藻屑に身をそばめ、何時世の中に這ひ出て、甲を乾すべき知邊なき、龜井六郎重清、晝は人目も烏羽玉の、小行燈さへ身の油、荷い賣する身代は、吹ば散てふ細流砂、「蒟蒻豆腐の鹽梅よし、

祠堂—祠堂金にて供養料の事

唐へ投金—無用の所へ金を捨てる諺

ん」と宣ふ處に、辻風さつと吹來り、梢を鳴し木の葉を捲き、檐を破り瓦を飛し、遣戸障子を吹折て、震動するぞ三重恐ろしき。御供の瀨尾の太郎、顫ひ〳〵罷出、「彼の唐の醫者、一丈余りの鳶となり、車輪の如き翼を廣げ、風を起し雲に乘り、鞍馬の方へ飛失て候」と、中間に空晴て、風おさまるぞ不思議成。入道大きに仰天有、「さては小松が詞に違はず、天狗に毒氣を吹込れた。三年の内火の病で死ぬるとや。三年の經つは今の間。入道は死ぬるか、アヽ扨是は何とせん。エヽ死ともない〳〵。妙藥は有まいか、天狗のあたつた療治はないか。誰ぞが高る鼻を剔で、煎じて服で見よふか」と。顚動愁傷うろ〳〵と、狼狽給ふぞ見苦しき。詞「アヽ思ひ付たり。黄金は毒を消す。先年奥州の黄金三千兩、内府が庫に籠させたり。それ取出せ」と宣へば、小松の執權主馬の判官盛國罷り出、「平家の御運末危く、日本にて御一門の跡弔ふ人も有まじとて、唐育王山佛生禪寺の御寺へ、祠堂に御渡し候」と、いひもあへぬに飛懸て、しや首取てひつしき、詞「主が主なればをのれら迄馬鹿律義。目前日本の寶を、見へもせぬ後世の爲、異國へ渡す空倜者、それこそ唐へ投金といふ物。入道が命三年切、存命の間に源氏の末葉根を絶やす。軍初の血祭」と、肩を踏へ、盛國が髻を摑んで「ゑいうん」と、首引拔てかつぱと投

瓦りやく—瓦礫か

正念—死際に心の亂れぬ事

下種—種おろし

ける。入道嘲笑ひ、「又癖の生悟り、其心より煩らはるゝ。御邊は兎も角も、此入道は文盲なれば、藥を服て長生せん。それそれ」と有ければ、輿の内に入られし唐桑の櫛匣より、堆朱の香箱御前に差出せば、入道愼み頂戴有。蓋を取らんとし給ふ時、香箱の内燃え出て、火焰烟を捲上、微塵に碎け飛ぶ音は、瓦りやくを割るが如くにて、流石の入道色變じ、上下身の毛を立たりけり。重盛涙を抑へかね、「御覽候へ天狗の所爲、毒氣五躰に泌渡り、大熱病を受け給ひ、火の病となつて御命を取らん事三年とは過べからず。それより平家の運命傾き、源氏に世を切取られ、今の榮華は引換て、一門骸を暴すべき、重盛が未來記は其時思ひ知らるべし。淺ましの運命や、墓なき平家の行末を見んよりも重盛が命を取てたべ、と熊野權現に祈誓をかけし病なれば、藥も療治もかなふべきか。臨終も早今宵の中と存ずれば、是今生の親子の別れ。心の亂れぬ其中に、正念の床に坐し、淨土の道をも踏分て、御菩提の下種し奉らん。さらばく」と涙にくれ、御子達の方に添ひ、泣くく佛間に入給ふ。「平家の柱折れたり」と、惜まぬ者こそなかりけれ。入道相國大きに怒り、すつくと立、「ヤア愚なる内府の詞、此淸盛が威勢に、木の葉天狗の見入などとは思ひも寄らず、源氏の奴等が所爲ならん。唐人醫者め引立來れ。穿鑿せ

三界―欲界色界無色界なれども此娑婆の事
大覺世尊―釋迦
碧落―天
六道云々―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天、苦輪は苦境
五戒―殺生、偸盗、邪淫、妄語、飲酒
出離生死―苦界を脱して心を清淨にす
無上菩提―尊き佛の道

三度、日に三度用るなり」と宣へば、重盛公涙はら〳〵と流し、「アヽ淺ましや平家運命果て、世は魔道に落けるかや。それ乾坤の間に生を享け、形有物は天命有、初あれば終有。三界の教主大覺世尊、耆婆が良薬叶はずして、跋提河の涅槃に入給ふ。病者は佛躰、醫師は耆婆、定業の天命薬によらば、釋尊入滅有べきか。秦の始皇は不老不死の薬を得んと、上は碧落、下黄泉を探せ共求ず。但天竺の外道の法は億萬劫を有ち、中華の仙術形を離れて、氣を食ひ風を飲み、千歳を延ぶれ共、生死の悟を得ざるゆへ、六道の苦輪を廻つて地獄に落ると承る。我朝には天狗の法、我慢功慢人の心を栖家として、善根を憎み惡行を悦び、夜に三度日に三度、鐵の熱湯を飲む苦しみに天狗道成就し、生もなく死もなし。此魔法の外、三國に不老不死の薬候はず。疑もなく愛宕鞍馬の大天狗、平家驕りを荷擔人に、世を覆さん天魔の見入。其薬重盛に見せ給へ。生を貪る愚蒙の目には良薬と見ゆる共、五戒を保ち五常を修め、正法を守る重盛が清淨の目にかゝらば、薬の邪正は顯れん。假しは誠の薬にもせよ、位太政大臣に經上り、日本六十六箇國、三十餘國は平家の知行。齡六十に超へ給へば、出離生死の御營み、無上菩提の願ひの外、何御不足の候て。煩惱業苦の浮世に長命の御願ひ、淺ましさよ」と計にて、又咽かへり給ひ

六脉—浮、沈、遲、數、滑、濇の六種の脉搏
一粒一匕—少しの丸藥、粉藥

は恐れなり。我等御奉公の手見せ。蠅同然の難波の十郎、其の十の字に蠅が留れば千人切」と、主従どつと笑ひの聲、雞は八聲の凱歌や、曉近き三重松の風、無常の嵐吹きすさぶ。小松殿の御病體、日にしたがつて頼みなく、限り近しと聞へしかば、一門はいふに及ばず、公家、武家、町人、農人まで、六波羅に群參し、眉を顰むる折から「清盛入道御入なり」と有ければ、維盛、資盛迎ひ參らせ、枕本に請ぜらる。やう／＼助け起されて、衰へ果てし顔に。鬼の樣なる入道も、やゝ涙ぐみおはせしが、「御邊の所勞大事の由、當家他家の歎きなり。然るに此度宋朝より、耆鵲天といふ名醫日本に渡り、病人の顔色を見て肺肝を知り、聲を聞て六脉を察し、一粒一匕の藥を與へて、死したる者をよみ歸らせ、長生不死の壽命授くる事、恰も神の如し。則此醫者召連れたり。脉を見せ藥を請、本復の色を見せて給べ。入道無病息才の身なれ共、唐の醫者の名方、不老不死の藥を、はや一廻飲だれば、千年の命は慥なり。又二廻服したらば二千年は生延ぶべし。假へ萬々年にても、入道計存らへ、孫子の跡のとい弔ひやかましむづかしし。御邊も共に生て給べ。耆鵲天是へ召せ」と宣へば、今を限りの重盛公、起直つて、重「暫く／＼、其唐の醫師が不老不死の藥を、父禪門ははや聞召れ候か」清「中々常に身を放さず、夜に

こなし—打碎く

こそ左馬頭義朝が八男牛若」と名乘給へば、辨「ヤア願ふてもない主君。我等は熊野の別當辨眞が一子、武藏坊辨慶と申者、淸盛に頼まれ、君討奉る筈なれ共、約束變替世の習ひ、今日より生々世々お主と頼み奉る」と、降參すれば御悅び、主從三世の緣のはし、五條の橋の橋柱、氣太るお主、根强い下人、と薄衣被け長刀擔げ、立歸らんとせし處へ、難波の次郎が弟、難波の十郎經時、夜廻りの足輕二三十、經「洛中惱す天狗冠者、討手に向ひし惡魔坊主が一味せしは。あれ討留め」とどつと寄る。新參の喜三太、見へ隱れの供せしが、「其處御退」とつゝと出、喜「是體に御太刀を合されんは勿體なし。下拙こなし申さん」と、面も振ず切かくる。難波の十郎きつと見て、「彼奴は御厩の喜三太め、をのれも暴者の同類か」喜「チヽ我は馬の口も取、時々人の首も取る。噓なら取て見せふか」と、駈寄せ〳〵雜兵の兩足、小腕、引摑み、橋の下へ取て投げ取て投げ、七八人投ぐるを見て、皆散々に失せてけり。され共十郎踏留め、只一打と打太刀を、引外いて裏へ拔け、後抱きにむんずと締め、指上て橋板にどうど打付け、太刀もぎ取り、首搔落す早業は、實にも下郎の手鑑と、末世に殘るも道理なり。牛若ます〳〵勇みをなし、「出來た〳〵。一人不足の千人切の數に入れてくれん」とあれば、喜三太頭を掉て、「いや〳〵君の數に

着長─大將の鎧
精好─厚くて美しき絹織物の大口袴
行桁─橋の行桁に着物の桁をかく
見越入道─影法師や見越入道山の月（鵬筑波）
白柄─知らずにかく
溜めず─止めず
三塔─一山に三塔ある叡山を云ふ
物々し─小癪な
押付─鎧の後方

る秋の風、武藏野ならぬ武藏坊、何處にて取たりけん、緘に緘せる黑革の大鎧、大長刀、宛がら鬼神と夕顏の、五條の橋の橋板を、とゞろ〳〵と踏鳴し、童遲しと待居たり。牛若は母上の教訓に力を得、そゞろ浮立つ出立は、赤地の錦の著長に、美精好の大口、重代の御佩刀、取て被きし薄衣の、行げた遙に見渡せば、二王の樣成法師武者、「人か見越入道か。何にもせよ心見て、押へて下人にせん物を」と、ゆう〳〵と步み寄り給ふ。辨慶は斯ぞとも、白柄の長刀欄干に横はし、仕懸を待ば牛若丸、通りさまに長刀の、柄本をはつしと蹴上たり。辨「すはしれものよ、手なみを見せん」と切てかゝれば、薄衣引除け、太刀拔放つて、詰つ開いつ、潛つて切れば反向て外し、裾を拂へば足をためず、中を拂へば首を地に付、三塔に隱れなき長刀の達者と、僧正坊に授りし打物の名譽と、甲乙分目の戰ひは、巢立の鷲の若鳥と、深山を出し荒熊が、野邊に爭ふ 三重 如くにて、さしもの辨慶あぐんで見へしが、「物々し小冠者め」と、疊みかけて討處を、擬寶珠に飛上り、片足かけて長刀を、からりと踏で踏落す。辨「さ知たり」とかけ寄て取らんとすれば、打物取のべ辨慶が、押付をしつかと押へ、牛「何と御坊應へたか。我千人切を思立、根性見屆け下人にせんと、九百九十九人切る。汝程の健氣者に出合ず。主從に成べきか。我

修羅前云々—戰場の御馬の口は如何なる駻馬でも引廻すと也

馬屋を得たる—馬の世話に長ずる

內府樣の云々—重盛樣の祈禱中なれば盜んだ事を荒立てるなと也

せぬことぞ。數珠落せしとは供人除けん詭語。是を持て佛神を信心あれ」とてたびければ、牛若戴き懐中し、牛「全く無益の殺生ならず。源の牛若が下人一人持ずして、大事は思ひ立れずと、千人切を企て、手練を見屆召使はんと、夜前迄九百九十九人切て候へども、是ぞと思ふ下人もなし」と、語り給へば喜三太、「畏れ多く候へ共、拙者を召れ下されかし。外の事はいさ知らず、修羅前の御馬の口は、蛇に綱つけても引廻し、雑兵の首四ッ五ッは寢起に成共仕らん」と、申せば母も悦びて、「ヲヽ幸々、跡は妾に任せ置直に共せよ。あれ〳〵下人共が立歸る。何を云ふ間もないはいの。氣早な心持ちやんなや。喜三太萬事に氣を付よ。さらば〳〵」と乘り給へば、名殘盡せぬ親子の中、振返り振返り、牛「をのれは馬屋を得たるとや。當分夫は要らぬ事。馬に乘る迄牛若が、草履直せ」と笠被き、一町計別れし處へ、供の人々立歸り、「如何樣に尋ても御數珠は見へ申さず。拾ひし者も是なし」と申上れば、常「ヲヽ其筈〳〵。喜三太めが拾ひ隱せしを、袖口より見付られ、直に欠落したそふな。內府樣の御祈禱、沙汰なしにして遣りや」と、有そふに宣へば、供「扨は生掏摸の盜人、憎や〳〵」と口々に、云繰返す水晶の、數珠より清き常盤の前、涙に暮れの日も入て、月は出けり 三重 夕雲の、行衛はそれか夜嵐の、聲澄渡

恨めしの云々―嫖緻のよいのが結句恨めしい

氏―源氏

調伏―人を呪詛して殺す事

非歎―悲歎

自に心をかけ、妾物にせんといふ。無念やな口惜や。源氏の大將義朝に枕を竝べし此常盤、指す敵の平家に辱しめらるゝ事、恨めしのみめ容、面に燒鐵漆さし、顏を損ひ此無念、聞まじと思ひしが、待てしばしと思案をかへ、清盛が心に從い、種々に口說きしかば、色にひかるゝ愚の清盛、扨こそは和御前達、命を助け置しなり。母は女の道立ず、末代に名を乘るも、御身達を成人させ、平家を亡し、源氏の代と飜へし、つまの敵も氏の恥辱も雪がんと思ふ爲計。老入道の清盛、光る源氏か業平か、何に色香の有べきぞ。床を竝ぶる寢臥には、火炎の上に寢るよりも、其苦しさを推量あれ。語るも淚が飜るゝぞや。され共小松の重盛は日本の賢人、此人あらん限りは、平家は亡び難しといふ。時しも重き病氣なり。自ら御祈禱の七日詣と僞り、清水の觀音樣に重盛の命を、七日が中に取殺してたび給へと、調伏の爲、繰る數珠は我身ながらも恐ろしや。聖人賢人の命を取るは、菩薩を殺すに同じくて、五逆罪に勝ると聞。妻の爲子の爲、現世後生を取失ふ母が心を思遣り、恨みを晴れよ牛若」と、搔口說給ふにぞ、牛若も手を合せ、「知らで恨みし恐れの段、眞平御免」と計にて、非歎の淚せきあへず。常盤重て、「聞ば此比此橋にて、十六七の小童の往來を惱すとは、疑ひもなく御事よの。大義を思ひ立者は、無益の殺生

羅尼

半將束―將は裝にて琥珀と水晶の半々の仕立

でしとだつま―でしは弟子珠とて四個の小珠、たつまは達磨と書いて大珠

督殿―衛府督にて義朝をさす

晶と琥珀と半將束の紫房、でしとだつまは珊瑚樹ぞや。皆立歸つて尋てたも。拾ふた者の有ならば、價を取らせ囉ふておじや。喜三太獨附置て皆々早ふ」と宣へば、「今迄落てはよも有まじ。拾ふた人を詮義せん」と、方々へこそ走りけれ。常盤輿より轉び出、「やれ牛若が母なるは。鞍馬へ上しは七ツの年、それより喜三太に文の便を聞計、十年振の我子の顏、見せてたもや」と引留め、抱付て泣給へば、牛若夢の心地して、涙に沈みおはせしが、牛「故督の殿に後れしは三歳の時なれば、面影も覺へ參らせず。母上の御顏は慥に覺へ候が、見替す程の御窶れ。斯く由々敷御身にて、何不足の候ぞ。敵清盛に御身を任せ、平家繁昌の祈禱、小松殿の祈とて、眞言陀羅尼に數珠の所作、清盛への追從か。心の變つた母上樣、其お心では牛若を不便共思されじ。何しに父も戀しからん。御涙は空事よ。恨めしの母上や」と、恨みかこちて泣給ふ。母上わつと涙に暮れ、「たまたま逢ふて愛らしき、親子の詞をかけもせず、情なの恨みやな。母が心を文にても知らせんとは思ひしが、師の御坊や傍輩に、漏もやせんと控へしを、知らで恨みも道理なり。督の殿討れ給ひてより、御身を母が懷に入、伏見の雪に凍へ伏し、大和の國宇田とやらんに隱れしを、平家に探し出され、御身も二人の兄共も、殺さるゝ筈成しに、清盛入道

づくー鈌

添七ッ道具ー添なき七ッ道具

御共ー御供

秋の日ー秋に願がゝあくをかく

茶辨當ー外出の時茶道具辨當を一荷にしたるもの

盤桓ー進み難き貌雖盤桓志行正也（易經）

かすらすー牛若丸也と仄めかす

隨求陀羅尼ー隨求は願を叶へる意陀羅尼は佛の秘密にて誰も解し得ぬ經文

千手ー觀音の陀

銀のづく打たる鐵の棒提げ、淸「是は源氏の大將、鎭西八郎爲朝が得道具、去る平治の軍に義朝一家を攻滅し、討取たるしるし。是にて童を打ひしげ、遣はせぬぞサア取れ」と投出せば辨慶、一つに擱んで數を讀む。「三本、四本、五本、六本、是こそ添け七ッ道具」と勇み行。平家の威勢引換て、源氏は鬼に鐵棒の、武運の末ぞ三重頼しき。世に連て替れば替る常盤御前、我子の命助けん爲、淸盛に從へば、心に入らぬ乘物や、御共美美敷侍きて、小松殿の御祈禱に淸水詣の御下向道、姿は花を飾れ共、覺悟は出家同然の、心に衣胸に袈裟、五條の橋にぞ著給ふ。爰に源の牛若丸、三年の日參の、願も今年は秋の日や、はや暮かゝる橋の上、由々敷女乘物に茶辨當かたげしは、折々鞍馬へ使に來る喜三太といふ下郎、扨は我母常盤御前、摺違ふて通るならば、見知りし者も有やせん。人に心を付顏に、戻られもせず盤桓と、編笠傾けおはせしに、喜三太見付、乘物へ知らせんと、喜「彼の若衆の道のねばさは、あれこそ本のくらがりの牛、鞍馬の牛」とかすらする。常盤はそれぞと心付、人目よぐまの遣瀨なく、常「ハア、悲しや數珠を落した。我身の菩提は兎も角も、平家の御代の御祈禱に、三年以來隨救陀羅尼百萬遍、此度小松樣の御願の爲、千手の眞言十萬遍、唱へ込みたる大事の數珠。勿體なくも氣にかゝる。水

飯綱—狐を使ふ魔術

うい—殊勝な

國、「ム、それは豫ても聞しこと。何條其小童、魔法飯綱を行ふ共、變化鬼神も討てば討つ、軍兵を差向け、はや討取れ」と下知せらる。門脇宰相進み出、「仰にては候へ共、左程の童一人に軍兵を向けられんは、却つて都の騷動。夜廻係の者共が手に餘るしれ者ならば味方多く損ずべし。然れば當家の恥辱と申、殊に小松殿の御病中、旁御遠慮有べき事。されば敵を以て敵を亡す手段、彼の法師めを放ち遣はして、打合せて御覽あれ。相打に討れば二人の惡黨滅ぶる道理。さもなくても一人は手を濡さずの御誅罰、此旨如何」と申さるれば、辨慶聞も敢ず、「ア、面白き御政道。元來某武藝を好み、日本に慢る手柄したしと思へ共、手痛き奴も無つしに、洛中に持餘す天狗冠者と勝負せんは、嬉しや嬉しや嬉しうて堪らぬ」と、すく／＼立てぞ悦びける。入道も悦喜有、「それ繩を解よ。出來いた／＼うい坊主。まづ太刀、刀、長刀などが入ならば、取らすべきか」と宣へば、辨「いや／＼此儘罷出、行逢ふ人の太刀、刀、目に付たをもぎ取べし。此法師生れてより人に物囉はず、お床に立たる彼の長刀、御門にかゝりし突棒、刺股、火消道具の熊手、鋸、大槌など　囉ひは致さぬ欲さに取」と、引寄せ／＼一つに取てからげたり。入道猶も機嫌能く「扨々氣味能い法師めかな。千騎萬騎の軍兵の頭に立ん人相」と、簾中につゝと入、

ぬ事、先諸人に傷付、傷を負せし事、是は相手の臆病、「何故其時に討留ぬ」と、相手を御詮義なさるべし。又書寫山囘祿の事は、松明持たる下僧を人礫に打て候へば、時節惡き山風辨慶が知らぬ事、風の神にお尋あらば明白に知れ申さん。且又出家の法に背くとは左宣ふ入道相國、袈裟衣を懸け、頭顱を丸めながら、法皇を押籠め、諸人を流罪死刑に行ひ、「此法師がしやかうべをはり碎いてくれん」と、只今の握拳、是も法師の道成か、御心に問ひ給へ。又辨慶が爭ひ好み、喧嘩好きは生れついての癖なれば、是も我等が存ぜぬ事、親こそは知つらめ。定て胎内に宿る時、父と母とが小夜の口說、爭ひ紛れの天の逆鉾、逆立たる一滴が凝結て、喧嘩好きの辨慶と生れたそふな」と、空嘯いてぞ居たりける。さすがの淸盛理窟詰、「なまなか彼奴に物いはすな。打首か獄門か、兎角方々計らはれよ」と有ければ、宗盛、知盛詞を揃へ、「もと叡山育ちと申せば、彼を罪に行はれば、例の三千坊如何成仇をか仕出さん。をのれと亡ぶる御仕置あらまほし」と、宣ふ處へ、筑後守貞義慌忙敷參上し、「去る卯月下旬より、五條の橋に十六七の小童、夜な〳〵往來を惱し、打れしもの九百餘人。夜廻がゝりの役人召捕んと働け共、蝶鳥なんどの如くにて力に及ばず、京中難義仕るよし毎日の訴訟、如何計ひ申さん」と言上すれば入道相

富且貴於レ我如ニ浮雲一（論語）
所勞—病氣
能化指南—師匠
囘祿—燒失
護摩—梵語にて梵燒と譯す、身の幸、國の厄を禳ふ爲佛前にて焚く
滅燼す、著す—皆語尾「る」を省けり
ゑや—そ奴の略

雲と頼みなく、思ひ積りて雪折れの小松殿の御所勞、良藥醫療の驗もなく、御病氣重らせ給ふとて、一門殘らず西八條入道の館に與參あり、「靈佛靈社の御祈禱の大法有べきか」と、評定とり〲なる處へ、播州書寫山の衆徒中として訴へしは、「去年の春より比叡の山育ちと申惡法師、學問の爲とて登山いたし候が、竝びなき強力、劍術、早業に調練し、同學の兒法師を疵付、能化指南も恐れぬあぶれ者。一山もてあつかひ夜中に追拂ひ候へば、松明持たる下僧を摑んで、本堂の屋根へ人礫に打上げ、松明檐の檜皮に移り、折節山風烈しく、諸堂、學寮、一宇も殘らず囘祿に及び候。名は西塔の武藏坊辨慶と申惡法師、搦取て候」と引出す、面がまち筋骨高く、頰骨荒れ、繩取六人中に引立、睨み廻せる頰黑く、護摩に燻る不動尊、玉顏光るに異ならず。清盛入道緣先に跳出、「ヤア憎くい法師が頰つきかな。己れ如何なれば爭ひ喧嘩を好み、諸人にきず付、剩へ大伽藍を滅燼すは、頭を丸め三衣を著す法なるか。察するに叡山法師、平家を傾ふとしたまふ法皇に與し、己れを頼み方々を暴れさすると覺へたり。サア眞直に申せ。僞らば是を見よ、淨海が此握拳にて、しや頭微塵にはり碎かん」と、睨付給ひし面色は、白いと黑いと辨慶が、二人有かと凄じし。武藏けら〲とゑせ笑ひ。「扨色々の御尋、一ツも辨慶存ぜ

祇園精舍云々―平家物語發端の句を取れり
祇園精舍―祇陁園に須達長者の建てたる寺
沙羅双樹―跋提河の邊にて釋尊入滅の際枯れかかりたる木
受領―國司
衛府―近衛、衛門、兵衛各左右の六府
浮べる雲―あぶなき事、不義而

孕常盤

近松門左衛門作

序詞　祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響有、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはり、驕る者久しからず。遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高、唐の祿山、近く本朝をうかがふに、天慶の純友、承平の將門、間近くは六波羅入道前の太政大臣平朝臣清盛公の有樣こそ心も詞も及ばれね。我身の榮華を極るのみならず、嫡子小松の重盛內大臣の左大將、次男宗盛中納言の右大將、三男知盛權中納言、四男重平三位の中將、門脇の宰相經盛、前の大納言敎盛。池の大納言賴盛、越前の三位通盛以下、一門の公卿十六人、其外諸國の受領衛府、八省すべて六十余人。官祿前代に超過し、榮華天下の目をそばめ、華族の三公、英雄の公達も肩を竝ぶる者はなし。されば一朝の怒に其身を忘るゝとや。院の御所を恨み奉り、天命をも省ず、後白河の法皇を鳥羽の北殿に押籠、卿相雲客四十三人流罪に沈め、小松殿の敎訓をもいさゝか用ひず、擅なる入道相國、驕る平家の行末を、浮べる

んかぎりは、國とみ民も豊にて、敵する者の有べきか。寶釼の威徳疑ふことなかれ」との給ふ所に、有難くも寶釼は、盛長が頸をさし貫ぬき、虚空に閃き歸らせ給ひ、元のさやに納りしは、有がたかりける次第なり。「見よ〳〵悪魔降伏の、寶釼は勇神璽は智、我内侍所は仁の鏡、智仁勇の三寶も、佛法僧と王法の、民安全に守るべし」と、御詫宣のうちよりも、御かたちは鏡と現じ、内侍の袖にうつらせ給ふ。天下一統源氏一統、太平國に太平の、君が威光は万々歳、治る御代こそ久しけれ。

いがきー齋垣、神社の垣
三種の三祇ー三種の神器をさす

きかゝり追廻しく、劔のはかぜ神風の三重迯るを追ふて千早ふる、いがきもこへてにげて行。吉野の勅使北畠の准后親房卿、新田義貞楠正行、三種の三祇御迎に來り給ひしが、「三輪山の震動何事か」と、急ぎ驅付「こはそも如何に」と驚き騷ぎ、兩人の繩を解給へば、内侍は夢のこゝちにて、内「小山田が妻の情にて、あひ見る今の嬉しさ」と、盛長宰相が惡逆くはしく語り、嬉し泣こそ道理なれ。足利高氏三社の神の靈夢蒙り、吉野殿へ參らんと此所に行かゝり、驚き給へば新田楠、「すは大將と大將との、相手づくぞ」と身構へして、既に危く見へし所に、和田の新發意宰相が首ひつさげ、敵「アヽ是々粗忽せまい」と、眞中へかけ入、「先惡人一人は亡し」と、首投出し義貞に向ひ、「高氏卿朝敵のとがをひるがへし申爲、量仁親王を御位に立、京の内裡とあがめ、後醍醐の天皇を吉野の内裡とうやまひ、新田足利和睦して、帝を守護せしむべきとの願ひ、玄恵法印の取次我等其お使」と、申詞の中より、白雲たな引異香くんじ、杉の梢にかゝりしは、不思議なりける次第なり。兩寶童子の御相好、たへなる御聲あざやかに、「天に二ッの日なし、地に二人の王なし。量仁親王に新帝の位を授け、後醍醐の天皇は院の御所とあをぎ、帝都は高氏是をかため、吉野の都は義貞守護し奉れとの神勅なり。我國の三ッの寶のあら

けて追かくる、二人の女中公家達も、「何事か起りしぞ。所は三輪の御神前、是は神代の御寶、守りめもつき給ふかや。神力をそへ給へ」と、あはて給ふぞ道理なる。かゝる所に大森彦七盛長、手勢ひき具しどつとかけよせ、大「年來心を盡したる内侍はあれよ。先なま公家ばらひつくゝれ」兵「承はる」とひつぷせ〳〵、二人に繩をぞかけたりける。大「扨其櫃は心得ず、何か有、明て見よ」と、いふより早く郎等共、御箱にすがれば、兩人涙を流し聲をあげ、「やれ情なやもつたいなや。夫こそ忝も我國の御寶内侍所、十善の御身にさへ拜み給ふことかなはず、不淨無禮の手をふれんとは忽眼くらんで、立ずくみに死なん淺ましや。情なやそこ立退」と泣給へど、大「扨ことおかしい神より強い軍神の、眞先かける兵に、何の罰」といふまゝに、からげの布を切りほどき、蓋をとれば恐ろしや、御箱の内鳴動して、いなびかり天地に輝き、神鏡朝日の登るがごとく、虚空にあがらせ給ひける。近づいたる雜兵共忽悶絶血を吐て、のつけにそつて死してげり。無道の盛長ちつとも恐れず、「よし〳〵さはらぬ神にたゝりなし。心をかけし女を連れて歸る計に、罰もたゝりも有べきか」と、走りよつて内侍を、ひつ立んとする所に、杉にかけたる寶釼の、さやを離れて刃の光、天に輝き地になり渡り、盛長が頭の上、ひらめ

あたゝかな─まんまと

木まぶり─木にとり殘されし果

じゆくし首─熟柿の如き落ちやすき首

授けんと、契約せしをおのれに邪魔を入られ、天皇を押籠高氏より恩賞を受んとすればあの尼めに奪はれ、今又三種の神器を奪ひ、高氏公へ奉らんと欲する所、又妨ぐる推參者。是程迄しこみしこと、本意を遂げでをくべきか。下り坂の楠新田に組せんより、運に乘たる高氏公に順へ。取次せん」と云ひければ、源秀大口あいてかッら〳〵と笑ひ、「ヤイ高氏は名大將、うぬらが樣成不忠の臣、あたゝかな用ひられんや。天子に向つて弓引朝敵の名を恐れ、後伏見院第二の宮量仁親王を御位に立、吉野の内裡は後醍醐の天皇、京の内裡は新帝とあがめ、義貞共和睦し、一家のまじわり舊の如く有度願、玄惠法印を以て奏聞ある。内奏の爲只今某吉野殿へ、參る折から出合しは、うぬらが因果の木まぶり、梢に殘つて烏の餌食とならんより、じゆくし首ゆすり落し、踏つぶしてくれん」と、飛でかゝれば下人共、一度にはらりと取まはし、「ヤア奇怪成雜言。をのれこそ赤面の熟柿坊主、踏つぶしてのけん」と、左手右手より取つけば、源「ムヽウ此源秀を熟柿とな。熟柿にたかる目白共、捻り殺して見せふか」と、引きよせて片端より、首筋つかんで一しめしめてはかつぱと投げ、しめては投付、投付〳〵宰相に飛んでかゝれば、「叶はじ」と山をさして迯て行。源秀あまさじいつ迄か、身を逃るべき三輪の山、ひばらをわ

どうでも―どうしても

己がさんまい―汝が勝手

毘沙門立―仁王立に同じ

柹本―人麿にて次の熟せぬと共に柹の緣語

一人か、いか様共すき次第。しらぬ者同志交ることは、此方はいやじや〳〵」といひはなす。亘「やあら珍しい。知ぬ者どし相かたいやとは、錢をとる出籠じやと思ふか。冥加の爲身の祈禱、願ふは誰も同じこと。どふも我等一分立ぬ、嫌ふには樣子が有ふ。其を聞ふ」と理窟づめ、十「ア丶小むづかしい何の樣子、見た所お手前は人間はづれのせい高島、肩が合ぬによつてのこと。どふでもならぬ」といひければ、亘「ム丶聞へた、肩が合ずば舁くまひ。お供すれば同じこと。サア皆よつてかき奉れ」と、ひつそふて「我等はお供」と、身拵するを見て、十「いや〳〵所詮此方構はぬ。供なりと舁なりと、己がざんまい皆來い〳〵」と立かへる。亘「ヤアやらぬ〳〵」と道中に、大手をひろげふんばたかり、「拙者と同道いやがるは、面こそ見へね大かた夫としつたな。尤々御所柹と澁柹とは皮むかいでも知れる物。是見よ和田の新發意源秀と云御所柹」と、覆面を取て捨て、毘沙門立にすつく立、「ヤアうぬは坊門の宰相柹。可愛や生れはよけれ共、持ちなしわるさに澁柹に劣つたな。公家ならば公家の樣に、柹ノ本の流れをくみ、腰折歌でもよまずして、身にも熟せぬ武家まじはり、終に刃にさし通され、串柹とならん笑止さよ」と、かんら〳〵とぞ笑ひける。宰相覆面取てすて、「エ丶口惜や、勾當の内侍を大森彦七盛長に

近付ー趣意

「我々は近邊の土民共、今度天皇樣吉野山にいらせられ、新田殿楠殿内裏を吉野に御造營なさるゝに付、天照太神より傳はりたる内侍所樣と申御寶を、只今吉野へ御供遊ばす由、お公家樣のお身にて御太義千萬。まだ是より廿四五里、中々お足つゞくまじ。賤き下々の身ながらも、日本の地にすむ冥加の爲、其御箱を吉野迄肩にのせ申たし。息をかけるも恐れに存、皆々覆面致し、垢離を取身を淸め候。仰付られかし」と思ひ入てぞ申ける。兩人聞給ひ、「扨々奇特の心ざし、是こそ内侍所しるしの御箱とて、天照太神の御たましひ御かげのうつりし御鏡、汝等がかたにかゝらせ給ふこと、よくも冥加にかなひたる、果報の者共有がたく存、擔ひ送り奉れ」との給ふ所へ、六尺ゆたかの大男、是も覆面日計出し、「我等も當所の百姓、冥加のため寶の御箱、吉野迄かき申たし。鼻息かくるも恐れに存覆面もいたしたり。御ゆるし下され」と、望めば兩人、「ヲヽ望みの者は幾人にても其身の祈禱、かき奉れ」と有ければ、亘「ハア有がたし。是そこな衆さきがたでも後がたでも、いづれもよつて片はなされ。片はなは我等一人、吉野迄同道、さきへ著て覆面取近付になるべし。道中萬事申合せふ。サア來い」といひければ、各ひそ〳〵さゝやひて、「いや其方が相かたに我々は成まい。こつちの組へわたすか、さなくば其方

井手—井堰

御裳濯川—伊勢内宮の前を流る川にて皇統連綿を云ふ

頭の中將—藏人の頭と近衞中將の兼官

帯つかんで中にさし上、「ゑいやつ」と井手のふかみの泥水へ、眞倒樣にぞ打こんだる。殘る軍兵恐れをなし、四方へばつと散亂し、近付敵こそなかりけれ。「軍の手合かど出よし」と、勝どきの聲太鼓の聲、松にかぐらの千代萬歳と、君を馬に駕し奉る。長年は項羽が勇、正行は孫子が智、母が敎へは孟母が仁、是大將の智仁勇、合せて三ッのみよしのや、よしのゝ内裏に行幸なる。

第五

神風や、御裳濯川の流れたへせぬ神國のしるし、後醍醐の天皇楠正行が守護によつて、吉野山に皇居有。新田義貞馳參じ、都作りと聞へしかば、北の方勾當の内侍、千草の頭の中將洞院左衛門督心を合せ、三種の神寶内裡に殘り給ひしを盜出し奉り、神璽寶劒は内侍の身に付參らせ、小山田が妻御供すれば、内侍所のしるしの御箱、頭ノ中將左衛門督兩人荷ひ奉り、人目忍べは是も又、晝をば何とうば玉の、夜道に同じ山かげや、三輪の里にぞ著給ふ。鳥居の前成御手洗の、水舟石に御箱をすへ、内侍は寶劒を神木の杉にかけ、しばしやすらひ給ふ所に、覆面したるおのこ、同じ出立十人計道端につくばい

をんまはし－追廻し

しらけ－負色になる

人の後にかゞみ、子は親を楯にして、腰をぬかし氣を失なひ、迯まどふ眞中へ、又太郎長年、楠帯刀正行と名乗かけ、わり立てをんまはし、火水になれとぞ三重戰ひける。臆病神に眼もくらみ、二人を千騎萬騎と見て、迯足落足深田にふんごみ岩根に乗かけ、我打物にて死るも有、片時が間に手負死人三百余騎、生たる者は落失て、残りずくなに成ければ、「矢責にせよ」と山口兄弟、森に向つて立ちならび、矢種を惜まずいかけたり。味方には弓一張矢は一本もなかりしに、正行思案し、苅り捨たる稲かき集め、五尺計にたばねあげ、社人の烏帽子浄衣をきせ、木の間にそつと立ければ、「すは天皇よ余すな」とさし取引取さん〴〵にいる矢さき、藁人形に留まつて、針を植へたる如くにて、味方の矢種と成たりし、幼心に孔明が、昔を耳にふれつらん、頓智の程こそやさしけれ。「エエ目出度し」と又太郎、矢をかなぐつて大音上、「いかに寄手の人々、早天よりのお出、隨分御馳走申せとて、新田殿の御意を受、本間孫四郎、さび矢少々持參せり。何なく共賞翫あれ」と、矢つぎばやに射かけしは、嵐に雪の飛如く、面に立たる山口兄弟、弓手右手へ射伏られ、一陣しらけてさつと引所を、正行親子打物かざし、「きたなしかへせ」とをつかくれば、山口入道すきまを見て、「女中やらぬ」とむんずと抱。正行すかさず上

どまくれ―うろたへる

恐るゝこと有べからず。何萬騎よする共、亂る迄は音するな」と、下知する聲もわかみどり、松原さして三重入にける、追手の大將、山口入道嫡子八郎久國、二男九郎宗重、其勢一千余騎、もみにもふで馳來り、山「此松原こそあやしけれ。いふても二人か三人か、草村の虫を取よりやすかるべし、骨折て何かせん。松明をふみしめし、松原をおつ取卷、しめよせて討とれ」と、ひしめく所に正行長年、木の根をゆすり梢を動かし、弓のほこにて驚かせば、驚かされて數萬の烏、聲を立て鳴さはぐ。山口親子大きに驚き、「塒の鳥の俄にさはぐは、此松原に天皇方の軍兵の、隱れ居るに極つたり。ふかく\〱と近付より切立られては惡かりなん」と、大將を始諸軍勢、進みかねてひかへたる。童心の楠が、智惠一ッにまはされて、一千余騎の兵の、どまくれみだれうろたへし、智略の程ぞ恐ろしき。山口入道聲をかけ、「あれ\〱東もしらみたり。天神の森に陣を取、備へを立て責めよせん。いざこい」と見渡せばこはいかに、朝霧深き森の木の間。色々の旗ひる返り、あらしに靡く有樣は、只花紅葉のごとくなり、「南無三寶前にも敵後にも敵、いづくに命をのがれん」と、大將始諸軍勢、具足震ひのかた\〱\〱、鳴子を引にことならず。相圖をたがへず神樂太鼓、どう\〱と打聲に、山「そりや責づつみなふ怖や」と、主は下

歸鴈云々—鳥起者伏也、獸駭者覆也(孫子)
かゝる時—懸ると斯る

弦袋—弦卷にて丸く腰に提るもの

の、ふみとまつたるためしなし。多勢かへつてかせと成、人にて人をせきふさがれ、同志討友討度を失ひ、八方へ迯ちつて、味方の勝利正行が掌に握たり。母上いかに」と云ければ、母「いや〳〵夫も一圖の軍法。若又敵の大勢が、此森へはかゝらず、汝が籠る松原へ先にかゝらば如何せん」正「ヲヽ其時こそ松原の泊り烏を追立ん。明ぬ先より立鳥は、歸鴈つらを亂るなる、隱し勢と心得取てかへして此森へ、かゝる時には彼手だて。鳥と旗とに威されて、中に漂ふ寄手の眞中、只一驅に踏散すは、蚊を殺すより猶やすく、骨を折ずの勝軍、案の內に候」と申上れば天皇も、「天晴正成が子なりけり。末賴もしき若者や」と、忝も感涙に、御衣をしぼらせ給ひければ、長「又太郎は卅五歲、十一歲の正行に、今日の大將軍、御下知に任せ候」と、手をつかねたる武士の、弓矢の禮こそただしけれ。母は悅び「ヲヽでかしたく。惣じて大將は必弓矢を帶する物、母が其心にて持たるは長刀ならず、是見よ」とさやを取れば、弦をはづせし村重籐。母「おことを慕ふいそがしさ、箙負ふ間もなかりしぞ。薄なり共押し切て、かぶら矢いるは軍神の祭ぞや」と、弦袋そへてたびければ。取て戴き。正「あれ〳〵、追手の松明近付たり。夜明と て程もなし。母上は我君を社の森へ御供あれ。敵は小勢と侮る共、味方は必大敵とて、

寅の一天―一天は今時の三十分にて午前四時半

一尋―一幅

かねのを―鍔口の緒か

とむね云々―驚く貌

無勢なりとて戰かはずんば戰ふ時節は有べからず。父正成は三百騎に足らぬ小勢にて、十萬の敵を幾度か破りたり。軍は奇正變化に有、時はや寅の一天、我計略を廻らさば、千騎は愚何、萬騎も、驅破つて見せ申さん」と、廣言吐ば母上、「エヽ小面憎や童なら童の樣にしてゐや。出るまゝの軍法だて。サア味方二人で、千騎の敵に勝つべき智略があらばいふて見や。道理が悪いと正成の子でないぞ。サア申せ〳〵」と問ひかけられ、正「さん候惣じて子共のいさかひにも、強きは弱きを侮つて油斷の負をする物也。君落人の御身にて、御供とても一兩人、千騎に余る追手の兵、多勢を頼みに油斷するは必定。我等と長年兩人は向ふの松原にかくれ入、母上は君の御供して、天神の社に忍び、上を始各々下著の小袖をぬいで、裏表一尋〳〵にとき放し、本社末社のかねのをともに大旗小旗の尺に切、石を括つて森の梢、こゝかしこに投かけ〳〵、敵寄くる共しづまりかへつて、ほの〴〵明の朝風の、霧のひま〴〵森の樹蔭に、旗の手のひらり〳〵と閃くを、小勢と見る者有べきか。一のみにあなどつて、油斷したる追手の勢、とむねをついて色めく所を、神樂堂の大太鼓、亂調に打立給はゞ、先陣よりくづれ立、後陣もともに亂るべし。其時我々小松原より、よこあひに切て出、十方無盡に切散さば、陣をわられし敗軍

御覧、思召―此の自尊の敬語は天皇上皇ならでは使はぬ

さまも切らぬ―さまは狭間にて城の櫓の窓も切らぬ

ば、君も泥土におりさせ給ひ、帝「汝は帯刀正行汝は母、いづれも正成が形見かや。妻子を御覧有につけ、父が忠節をこそ思召出せ」とて、正行が髪かきなでゝ、龍眼に御涙をうかめ給ふぞ有がたき。扨坊門ノ宰相かへり忠にて君とらはれと成給ふを、小山田が妻と心を合せ、奪ひ奉りし有様くはしく語り、長「高氏方の追手の軍兵千騎計、あれあの松明こと急なり。先御邊の館迄、急ぎ御幸なし申さん」と云ければ、正行頭を振て、「いやいや我等が館へ君を入奉り、追手の勢を引受、さまもきらぬ塀一重、溝同前の埋れ堀、一日も堪へず責落され、敵に分量を見さがされ、後日の合戰成がたし。此所につゝさゝへ追手の大勢打散し、出合頭の初軍に、敵に一しほ氣を付て、闖悩ます程ならば、重ての軍に二の足ふまんは必定。是非此所に喰留て、一合戰」とぞ申ける。母上睨んで「ヤイ小癪者、たつた今異見した其舌も引ぬに、御前共憚らぬ利發だてなそれなんぞ。兒と云ても大じない長年殿、武勇と云年かさ、おことにならひ給ふべきか。假初ながら大事の所、あなたの下知に任せてゐや」と、ねめ付給へば又太郎、「年に足ぬ正行殿、此所にて戰はんとは、勇有て頼もしし。去ながら味方は貴殿と某只二人、追手の勢は一千余騎。死物狂ひはそは知らず、勝べき道理更になし」と、いはせも果ず正「アヽさなの給ひそ。

つめ〳〵―つめる
山立―山賊

サア歸れはやかへれ。重ねてからは口ではいはぬ、つめ〳〵するぞ覺てゐや。是に付ても正成殿、今三年世にながらへ、おことが十四十五にならば、かくうきせわもせまい物。はかなの浮世や淺ましや」と、諫め口説て泣給へば、さしもに勇む正行も、母の歎きになき父の、顏を今見る心ちして、母の膝に抱き付、聲も惜まず泣き居たる、親子の歎きぞ憐なる。かゝる所に又太郎長年、天皇をおひ參らせ、森を目にかけ來りしが、ヤア心得ぬ、夜はまだ深きに幼き身に、物の具かため女も長刀横たへしは、ムヽウ例の山立よな。幸々彼奴を威して、夜道の案内させんと思ひ、長「こりや〳〵山賊、熊野詣の同道に病人有て迷惑なり。夜明迄看病すべき所や有。送つてくれば急度禮をせん」といへば、母聞もあへず、「いや〳〵我等山賊にてはなし。熊野道者の御病人とは殊勝にもおいとしし。我宿所は三里計、折ふし是に馬も有、召れて御入候へかし」長「いや心ざしは嬉しいが、人を忍ぶ我々、其中に夜明ては氣の毒。三里行けば隱れもなき楠に縁有故、かたがたを頼む迄もなし」と、行過れば、母「是申、楠に縁有との給ふはどなたぞ。是こそ正成が妻や子にて候へ」長「扨はそふか。我こそ隱岐の國名和又太郎長年と申者、おひ奉りしは忝も後醍醐ノ天皇」と、いふより親子は「はつ」と計、退つて額を地に付れ

をとなやく――大人役

面縛――後手に縛る

一あぐみ――一こまり

母「やれ物がついたか帶刀、母にもしらせずいづくへ行ぞ正行。母は息切しぬるをも構はぬか。馬を留ぬか悴め」と、さけび給へば、正行馬よりとんでをり、土に手をつき頭をさげ、正「父の忌のあき候へば、とぶらひ軍仕り、高氏と打果さんと思ひ立候。御暇申さぬ段眞平御免下され」と、さしうつぶいてぞ居たりける。母はとかふも涙にくれ、「エヽ如何をさなければとて、十チにあまればをとなやく、などさほどにも辨へなき。栴檀は嫩よりかんばしとといふたとへも有、正成の子ならずや。日本半分切取たる高氏に、おこと一騎かけ向ひ、一太刀合する迄もなく、多勢が中に取巻れ、當座に討ればまだしもよ、生捕となつて面縛せられ、恥辱の上に命を失ひ、いつの世にか天皇樣を御世に立、父亡魂の本意をば遂るぞや。親の敵討んとて、かろかろしく身を捨るは、葉侍の上のこと。父ごぜの櫻井より、汝をかへし給ひし時、老先迄の教訓を、母にも語り聞せしが、百日立やたゞずにて、其諫を忘れしか。一族かたらひ軍兵揃へ、菊水の旗眞先にをし立、古今無雙の名將とよばれたる足利高氏に、一あぐみあぐませんとは思はずして、一騎武者の働きに、いか成手柄したればとて、其名をあぐるばかりにて、天下の爲には益もなし。幼なく共楠正成が子、六十余州を重荷に持、大事の身とは思はぬか。うらめしや情なや、

本地垂跡和光―日本の神々は佛の垂跡なり和光は佛が光を和げて身を現す

興津白波―風吹けば興津白波立田山夜半にや君が獨越ゆらんの歌による

法の駒―御法と乘り

銀覆輪―銀にて鞍のふちをとる

しほ手―鞍の前輪後輪二個所に着ける紐

御覧候へ。かすみて見ゆる高嶺こそ、志貴の毘沙門にて渡らせ給へ」と奏聞すれば、主上御手を合せ禮拜有、「佛法擁護の本地の月、垂跡和光のかげ清く、再び朝廷あきらかに、四海を照させ終へや」と、丹精無二の御祈、神慮もあんにはかられて、たゞたのめ、年ふる松の壽を、御代にゆづりて高やすや。其にはあらで是も又、興津白波立田ごへ、よはにや君が一しぐれ、雲行空をこかげかと、濡てたゞずみ三重給ひけり。取傳へたる梓弓、光陰矢のごとく楠正成が百ヶ日、立や其名も忘れがたみの一子帶刀十一歳、父が最期の無念さの、胸に止まり骨にしみ、幼心に只一騎、とぶらひ戰思ひ立、鎧の袖に小櫻の、花を手向の法の駒、曉深き星の影、ともにかゞやく銀覆輪の、鞍の山がた山道の、小石まじりの小笹原、そよ吹風にくりかけて、取ッたる手綱こむらさき、藤井寺を弓手になし、右手へさら〳〵しと〳〵〳〵、かつし〳〵と歩ませて、神の告も念力の、示現は今もあら人神、天神の森にぞ著にける。あら不思議やうしろのかたに女の聲、「待てよ待てよ」と呼びかけたり。何者やらんとふりかへれば、きぬ引からげ腰刀、長刀かいこみ追かくるは、母上なり。正「南無三寶、我を止めん爲なり」と、一鞭くれてかけさする。息をはかりに走り付、鞍のしほ手をむずと取、留ても引ても駈馬の、一二三十間引ずられ、

鳥羽—問ふにかく
玉鉾の—道の詞
關戸—せきあぐるにかく
男山—今こそあれ我も昔は男山栄ゆく時もありこしものを（古今集）
三津浦—難波江にて見つにかく
五手舟—五挺立の舟（俚言集覧）

まてしばし。あれは野面にたれまねく、かゞしの影に落人の、鳥よりさきに驚きて、ともにむら立鷺の森、急ぐとすれど玉鉾の、ならはぬ道のけはしきに、御足もかけ損じ、御わらんづに流るゝ血は、草葉に染ていさゝ川、紅葉しがらむごとくなり。あはれ實に昨日迄、玉樓金殿の床に坐し、月に戯れ色香にそみ、花やかなりし玉躰の、今日は岩間の苔むしろ、かたしく袖に御涙、せきあへさせ給はねば、さしもに猛き長年も、涙は胸に關戸の院、こゝは名高き山崎の、麓にみだす荻萩薄、ふみわけなくや狐川、東の空を眺むれば、あれ〳〵宇治のかはぎりたへ〴〵の、せゞの淺瀬にわらんべの、小手さしつるゝ聲々に、引歌「故郷戀しや我ふるさとの、柴のいほりもなつかしや。庵もしばの、柴の庵もなつかしや」戀しゆかしと聞からに、實に九重もはる〴〵と、跡に名殘の男山、さかゆく事も有こしに、今のうきめを三津の浦、西にかすみて淡路がた、須磨のせきもりよびおこし、通ふ千鳥のちり〳〵〳〵と、よせくる〳〵、波もよせくるおもかぢ取梶、拍子そろへてさ、舟歌面白や〳〵さつさ、堺の裏遠く、帆を十分にあげた所が、面白いよの、何にたとへん五手舟、鹽風さむく吹通ふ、かさも袂もひら〳〵〳〵、ひらの若江も過行ば、日影もさがる藤井寺、はや告渡る鐘の聲、こんこん剛山もはるか成。長「あれ

天皇の御手を引、走り出ればあまたの犬跡先を取巻て、吠かゝれば又太郎、「うちもらされの今非の四郎、手なみを見よ」と酢も餅も投出し、虎の尾を踏毒蛇の口、犬の背をおどりこへ、大和路さしてぞ　三重

天皇かちぢの御ゆき

クセ　世は末世に及ぶとても、日月は地に落ぬ、ならひとこそ思ひしに、我等いかなれば、王位を出てかく計、人臣にだにまじはらで、雲井の空をも迷ひきて、行衛いづくと白露は、草葉の上にをきもせで、袂にさむき秋の霜、菊月も末つかた、故宮を忍び出給ひ、あやしの賤の神もうでに、やつせど馴れぬすげの笠、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、憐を催す時しもあれ、御いたはしや先帝は、梁園の昔の御遊、華軒香車の外を出させ給はぬも、いつしか馴れぬ旅はゞき、千歳の坂と詠ぜしも、耳には觸れて手にふれぬ、うきふししげき竹の杖、長年一人御供にて、知らぬ野山をこゝかしこ、たどらせ給ふ御有様、よその見る目も恐れ有。こゝはいづくと里人に、いざ鳥羽繩手秋の山、岩にくだくる瀧川の、どう〱〱、どつとよせくる追手の聲か、それかあらぬかいや

白露—知らぬ
雨を含める—此句太平記巻五にあり
梁園—梁の孝王が宮室苑囿の遊を好めるを云ふ
華軒香車—共に立派な車を云ふ
千歳の坂—白金の杖の歌、千早振神のきりけんつくからに千歳の坂も越えぬべらなり（古今集）

一犬吠れば—一犬虚に吠ゆれば萬犬實を傳ふの諺

鼻がもげる—臭氣の甚だしきさまに云ふ鼻切られたにかく

といれば犬の聲々、一犬吠れば萬犬に、番の者共目を覺し、起あがれ共ひよろ〳〵く〳〵、よろり〳〵とよろめきながら、番「南無三塀を破つた。又六めか丸太めか、一打にしてくれん」と、拔つれ〳〵入けるは、危かりける次第なり。既に夜半の番がはり引連て宰相、檢見の爲に來りしが、宰「ヤアウ番の者は一人もなく、塀押破りしは心得ず。敵の忍びの入けるぞ、こみ入て討取れ」と、喚いていらんとする所に、又太郎大肌ぬぎ、棒ひつさげつゝと出、「我等は酒賣の又六と申者。誰共知ず十八計、我等が酒酢飲喰ひ、番衆にも振まふてまんまと抱込、錢も拂はず塀を破つて入候。我等が爲には喰迯の敵、奧に氣遣なさるゝな。是へ追出し申べし。酒臭者を相圖に討取給へ」と云ければ、宰「ヲヽ出かした〳〵。急いで是へ追出せ」又「承る」とつゝと入、無二無三に追立る。三人の醉ざめ共迯出れば、宰「そりや討取れ」と取廻す。番「イヤ我等は御内の傳五平」「傳五平でも酒くさいはしれ者なり」とはたと切る。「我等も御家來源藏」「やれ〳〵彼奴も酒くさい」番「拙者は軍太」「こいつは取分酒くさい。一人ものがすな」と、片端切て捨にけり。又太郎とんで出、「お手柄〳〵裏門は大かた仕廻、表門の酒くさゝ鼻がもげていにまする。皆々表へ御廻り、「ヲヽ心得た。隨分はなをきかせよ」と、表門へとかけ出す。其隙に高家が女房

おなかのまゝ—腹中の飯
大臣—大盤
范蠡—勾踐會稽に降り入牢せしに范蠡魚商となりて近づき密書を魚の腹中に入れて獄に投ぜし話(呉越軍談)

中で一番大きなを、おなかのまゝ取て、魚計うつてたも」又「是は犬殿大臣がついた。何もあきなひ、丹後の鯖の一番卅八文合點か」比丘「合點〳〵。竹の皮一枚たも」とこかげに立寄、懐中より一通の文くる〳〵卷、魚中に入て「來い〳〵〳〵」と、投出せばひつくはへ、塀の破れに入にける。又六とつくと見すまし小聲に成て、又「是比丘尼殿、そなたは異國の范蠡をやらるゝの。此所は坊門の宰相下屋敷、天皇樣を押籠置、定しそなたは、新田殿よりの案内と見たちがふまい。某は出雲の國名和の又太郎長年と云者。御厚恩の綸旨を受、近よるべき便、か樣の商人せめて一人荷擔人のあれかし。奪出し奉らんと心をくだく所なり。御身の上有樣に聞まほしし」と云ければ、比丘「ヲヽ我等は小山田太郎高家と申者の妻。新田殿の情を受、夫高家は討死し、みづからは尼となり、勾當の内侍樣とひとつ住居の其中にも、天皇樣をうばひ新田殿の御本意を、と思へ共女わざ、せめての便に御力を、付參らする計なり」と、語れば長年大きに悦び、「是ぞ御運のひらくる時、折しも番の者は喰ひ醉ふ。此塀一重踏破り、やす〳〵奪ひ奉り、吉野の奥に皇居をすへ、根來法師熊野武者をかたらひ、吉野十八鄕を都と定むる物ならは、北國西國なびくこと、案の内ぞ」とあん餅の、になひ棒にて塀一間、どう〳〵〳〵とつきくづし、つゝ

思ひざしー氣に入た人に盃さす

まつかせーよしきた

錢しませふー錢貰はう

あひー同類

執心ー取らうと思込む心

ん様、かるたには太この二、盃には太この一、私から」と引受てついとほし、「サア丸太様へ」とさしければ、各口をそろへ、「其盃を三人の中氣に入た男にさし給へ。其者が枕ならべる、鬮取より是がまし。思ひざしになされ」と、面々衣紋つくろひ、鬢かきなでゝならびける。比丘「いや＼／それでは氣がしれぬ。茶碗三ッで面々盃、わしを思ふ數程のんで、心中を見せさんせ。茶碗の數の重るが、私しが今夜の男じや」又「ヤア面白い酒の賣る瑞相」と、茶碗ならべて三升樽、「すぐにお酌」と立ければ、何れも「合點まつかせ」と、初手一盃はつい＼／のみ、二盃目ははや我呑にて、三盃からが義理一ぺん、後には義理も瓢簞も、ふらり＼／がたちまちに、ころり＼／と息つきて、前後も知らず臥にけり。又「是々寢入ぬさきに錢しませふ。是旦那衆、はて手のわるい狸ねいり。酒代早ふ」とゆり起す、三人「マアよいはいの。たつた今寢入ばな、今宵は歸つてあすでも取たがよいはいの」と、いへば又六腹を立、「ムヽ拗はあひじやの。サアそなたから錢せふ」と、ねだれかゝる其間に、塀の破れに月影の、白犬一疋尾をふつて、箱の鮓をねらひ付、くはへる所を又六、「どつこい」と首玉をさへ、「犬も人も此屋敷は食迯の大よせ、罷ならぬ」ともぎはなす。比丘「是々いふても畜生執心がかはいひ。其あたひは私がやる。

おびん—比丘さん
おてき—相手
まんがぢ—手前勝手
しよげる—しげるの轉訛しげるは睦ましく語る
よその町—余所にするにかく
白餅—城持
大納言—小豆の一種なる故
餡餅—案
もろこし—玉蜀黍
今井ずし—今井兼平とうまいすし
有たけ云々—有る限り皆
太こもて—幇間になれ

奉公に精出せ。又後程見廻ん」と、上屋敷へぞ歸りける。番の者共のびをして、「やれきづまりや是おびん、旦那がいなれたもふ樂じや。歌をふと踊ろふと、夜中迄はこつちのもの。こゝへ〳〵」と招かれて、比丘「ムヽウ殿達は三人、わしがおてきはどれじやゑ。氣が定まらぬ」と云ければ、傳「ハテ誰有ふ此はな」軍「ヤア傳五平それはまんがち、今夜は身がとめぶろだ」傳「イヤ身が先だ」とせり合ば、源「是々傳五軍太せりあひは無用。此源藏に任せてをけ。寢る時はもみ鬮でしぶいてこい。先其迄は一盃あげてしよげるべい。ヤ、酒賣の又六がもふくる時分」と、比丘尼一人に侍三人、役目の番はよその町、聲高高と荷ひうり、「大名深草大納言、唐人分別ぬらりころりのかね平。やい大名とは白餅、深草とは鶉餅、大納言は小豆餅、唐人もろこし分別餡餅、ぬらりころりは鰻の蒲燒山椒味噌、謠「兼平とは木曾殿の御内に今井ずし、酒盛にかくれなき一騎當千の御肴、磯打ッ波のまくりのみ、蜘手かくなは十文ぎりの、茶碗に一ぱい酒でも餅でも、うまい物のせい揃、錢次第」とぞ賣にける。各悦び、「又六きたか。是見よこふした色遊び、酒も鮓も有たけはたけ買てやる。汝も飲で太こもて」又「アヽそれは忝い。商して酒飲で、其内で利を取は、めでたい西が吹てきて、丸太舟の湊入、三人の御番こなたは加番に靑のほ

しきねやの内、さては野にさく百合の花、しよがゑ、少くわん〳〵」とぞ謡ひける。番「ヤイ〳〵やかましい丸太奴ら、暮に及んで何ごとじや。番所が目に見へぬか、うぬらがくる所でない。通れ〳〵」としかつても睨んでも、「さては野に咲百合の花、しよんがゑ」「扨々無禮者此所を知らぬか。坊門の宰相樣の御下やしき、高氏將軍と御内通、後醍醐の天皇を此所に押籠、近日隱岐の國へ流しもの、夜の目も寢ずの大事の番。宰相樣も只今奥に御入、追付お歸り。そこのいておれ〳〵」ときめつくる。比丘「アヽかたい侍じや。是より嚴い番所、波にゆらるゝかゝり舟の中迄も、小歌は付たり假寢の伽によばんす。ねしめてのねごころは、髪の有よりないかたが、びら〳〵せいでよいげな。番衆は猶用心、すはと云時はや鐘まさり、私がつぶりを打たんすりや、はやくはん〳〵」とぞじやれかくる。奥より「殿のお歸り」と、よばはれば番の者、ばら〳〵とかしこまる。宰相ゆう〳〵と立出あたりを見廻し、あの裏の方は塀一重、犬のくゞつた道も有、いかにしても無用心。明る早々めぐりに蜘手をゆはすべし。彌々番を怠るな。夜中替りに定しからは、氣のつまる間もなし。番所は禁酒にして、萬に氣を付油斷すな。追付高氏より大國を給はり、此宰相も公家をやめ、武家の大名と成時は、皆相應の知行とらすべし。

しよがゑ―拍子詞
少くわん―比丘尼が歌の前後にいふ拍子（好色訓蒙圖彙）
まるた―比丘尼の異名比丘尼はもと熊野信者の尼なりしが頭を子細に包みて小歌を便りに色を賣る（嬉遊笑覽）
早鐘まさり―早鐘打つより私が頭を打てば直に知れるとの洒落
蜘手―十文字の垣

はちげんはなつて―廣言して

あらし―あらじと嵐

妻―夫義貞

弘誓―佛の衆生濟度を舟に譬ふ舟岡山は火葬地

まだしき―盛りに至らぬ事

子の親は、主君高氏へは不忠の者、奉公すべき理窟なし。御前にて此首が、義貞にてなき時は、獄門の木の下にて、腹切て伏すべきと、はちげんはなつて申せしは斯樣のため。高氏の御手にかゝると思ひ、我首てづからかき落し、勘當は冥途にて直にあふてゆるすべし。内侍樣をかしづき、情の恩を報ぜよや。三世の諸佛大悲のちから、親子一所に道引給へ。是迄なり」と刀を首に兩手をかけ、ふい〳〵の聲の中、二人ははつとすがれ共、はや其かひもあらしの庭の、老木につもる白雪の、もろく落てぞ消にける。會者定離とはいひながら、あふも今別れも今、是目前の哀別離苦。憂を重ぬる涙の袖に、舅の首をおしつゝむ。内侍は「妻の命の親、是も我爲舅ぞ」と、身に引そへてもろともに、誠有ける現世の道、仁といひ義となづけ、忠孝深き法の海、ともに弘誓の舟岡山、煙の末も一筋に、亂れぬ御代のをしへなる。

第四

比丘歌「夜さ樣のねすがた窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、さかりまだ

かばふ—助け守る

うへ—飢ゑ

が釼にも、なふ貧苦の敵は防がれず、腹を切んとし給ふを、わらは樣々力を付、兵粮秣の心ざし、盗みかゝりし青麥の、畠は敵の領內、高手小手にしばられ、大將の前に引出し、罪に沈むはづなりしに、敵ながら義貞は、情有大將、身の上を聞屆ケ、命たすかる其上に、召がへの錦の鎧、太刀刀迄給はり、「此恩有とて必我をかばふな。夫故夫が名は問ぬ」と、仁義深き御詞、かたり聞せし我妻の、心魂に染たるか御命にかはり、「我源の義貞」と、名乘てあへなく討れ給ふ。たとへ千金萬金を、のべたる鎧太刀にもせよ、高家程の侍が、うへに望んで死すればとて、鎧一領太刀一振に目がくれて、そもや命が捨られふか。是ぞ誠の情の死とは夫のこと。恩を忘れ義貞を討參らせ、高氏公より大國を給はつて、榮華を極むる果報より、義理と情に命を捨、獄門にかゝるこそ、武士たる者の果報なれ。おいとしや御最期迄、心にかゝるは父御の不興、御免有との一言の、息をお顔に吹かけて、親子の縁を二世迄も、結んで進ぜてたび給へ」と、すがりかきよせいだきよせ、きえ入〳〵泣ければ、內侍も「扨は我妻の、命の親ぞ」と諸共に、聲をそろへてかこちなき。警固の匹夫下部迄、袖をしぼらぬ者はなし。父の前司も愁歎の、涙にかきくれゐたりしが、「エヽあつぱれ我子やでかしたり。只殘多きは十二歲より、一日安

あをる—馬上にて障泥を打ちて急がす

下の武士にほめさせ、我も世上の親たる者にうらやまれん。今やくろ〳〵と毎日の高名帳、夜は繰つて翌日を待ッ、親に孝なく義も知らず、所領恩賞に恥をかへ、敵に手をさげ膝をつき、義貞に降參し、知行に命を捨しよな。迚も捨る命をなぜ高氏に奉り、名の爲には捨ざりしぞ。親は年よる子は犬死、小山田の名字のほまれ、誰が末の世に殘すべき。エヽ淺ましや」と齒嚙をなし、持たる首をかつぱと投、どうど坐して泣けるが、「思へば汝は義貞の郎等、我は高氏の御家人、親子ながらも敵味方、首成共一太刀」と、上振て打かくる。女房すがつて「なふ悲しや、內侍樣もとめてたび給へ。親の勘當受し身は、未來もやみに迷ふと聞。勘當御免なき上に、親の手づから子の首に、刃をあて給はゞ、迷ひのうへの迷ひなり。最期の樣を聞分ヶて、免しのお詞かけ給はゞ、名僧智識の引導も、夫にはなどかまさらん」と、口說立て〳〵、歎けばさすが親心、「いふことあらばはや語れ」と、むせび入たる計なり。女房猶も涙にくれ、「いたはしや我妻の、今度の軍は高家が、主親の勘氣をゆるされ、昔にかへるは此時と、軍兵にまじり幾度か出給へ共、牢人の貧しき身、鎧一領あらばこそ、すはだ武者の錆刀、拾ひ弓に拾ひ矢、畠につかふ野飼の馬、うて共あをれ共かはねば瘦て足立ず。いか成猛き武士の、三條小鍛冶

小心―子心

臈の首とは余りぞや。我夫は身貧にて、名香はたかね共、弓取の心の花は、梅櫻よりかんばしく、仁義に命を捨し物。かばねに恥を與へるか。情なやいとほしや」と、首だきよせて伏轉び、聲も惜まず泣居たり。前司飛かゝり、取てつきのけ、首のたぶさを摑んで、涙をはらはらと流し、前「六十の老眼に見しも違はず、我子の小山田太郎高家にて有けるよ。おことは連添女房な、我こそ彼が父、足利高氏卿には譜代相傳の御家人、小山田前司高春生年六十七歳、命ながければ恥多しとは、我身の上に知れたり。十八年以前彼奴は其の時十二歳、猪狩の御供せしに、年ふる猪の峰こすを「誰か有あの猪射留よ」との御諚。太郎こざかしげに小弓に矢をはげ向ひしを、高氏はつたと睨せ給ひ、「小腕にて仕損ぜん。罷しされ」との給ひし、御詞も終らぬに、弓と矢大地へ投付しを、彌立腹ましまし、「誰に當つて投げうち。年にも足らで慮外者。親前司はなきか、あれ引立よ」と御いかり。夫より君の御不興なれば、親も則勘當して、十八年の春秋は、風の便も絶果し、首も性あらばよつく聞。世間の親の勘當は、遊女博奕大酒の沙汰、夫さへ親は子を思ふ。小心にも弓矢の道、主君に向て意地を立たる御憎しみ、親の身では憎い半分嬉しいが又半分の勘當ぞや。今度の軍に義貞方の名有兵、首取て來れかし。君の御前は云に及ず、天

の外臣にて持國、增長、廣目、多門の四天が修羅と戰ふさま
盡弓—槻弓にて盡きにかく
はしたなし—不都合
その原や—薗原や伏屋に生る箒木のありとは見えて逢ぬ君かなの歌による
蘭奢待—奈良正倉院に納まりし名香の名

落すが如くにて、面を向ろ敵もなし。かゝるゆゝ敷武士の、運盡弓も矢も折て、修羅の奴と成給ふ、後世弔ふ者は我計」と、獄門に取付ば、後女「イヤ〳〵其は軍の出立。大内の事を知らぬ身が、内侍とはいつはり」と、引きのけてはわつと泣き、をし退てはわつと泣き、籬の菊の狂ひ咲、花を爭ふ蝶鳥の、露にしほるゝ如くなり。前司聲をかけ、「エヽはしたなし先しばらく」と、二人を左右へをし分ヶ、「首は一ッ内侍は二人、是非一人は僞なり。是跡にきた上臈、義貞と札はうつたれ共、うたがはしきこと有。心を沈めて能御覽ぜ」と、獄門を取おろし、見するもあへなき生首をなまめく膝にかきのせて、一目見てさへなれし夜の、面影だにもまがはぬ物。能々見ればその原や、有とも知ぬ死顏に、ぞつとこはさの「ア、恐ろし」と、拂ひ退て身を震はし、女「いや〳〵是は人たがひ、目元口元義貞殿には似ても付ず。かねて我妻の給ひしは、「軍は時の運、いつ討死もはかられず。敵に向ふたびごとに、帝より給はりし、蘭奢待の名香、內甲にたきしめん。鬢の髮に名香かほる首取たりと云人あらば、義貞が討死と思へ」との御詞。軍の騷ぎに淺ましい、下臈の首と取ちがへ、誠のお首は勿躰なや、草むらにうづもれしか。尋てたべ人々」と、歎き給へば以前の狂女泣出し、「エヽ口惜や、いかに見しりなきとても、下

思ひ者―妾

栴檀の板―高紐を切られぬ爲に綿上に懸くる板、冠板は其上部

大立擧―惣體鐵製の臑當

しゆみ―須彌山

四天王―帝釋天

事。御身は定て思ひ者か一夜妻、かりの情を忘れかね、跡迄慕ふはやさしけれ共、菩提をとふは本妻の役、お首は我に下され」と、をしのくればをしのけて、女「さいふ御身が一夜妻か遊女か。筋なきことな申されそ。勾當の内侍とは大内の女官御代にたつた一人の女。義貞殿の本妻我ならで誰あらん。物に狂ふも夫故、本性はたがはぬぞ。サア誠の内侍ならば義貞殿の參内の出立有樣覺しか、忘れしか。よもや知らじ」との給へば、狂「なふ忘れんとすれど忘られぬ、其出立は紫裾濃、栴檀の板冠の板、金銀にて中黑の、しるしをうつて金札、大立擧の臑當、こがね作りの太刀かたな、赤地の錦御著長、わらはが取てきせければ、ゆつて上帶ちやうどしめ、につこと笑ふて、義「あつぱれ我ながらも弓取かな。今日の軍に譽を得て、名を末代にとゞめん」と、馬引よせゆらりとのつたるはなふ、大將軍にまがひなし。近づく敵のときの聲、味方にとゞろくせめつゞみ、みねのこがらし磯打波、よせくる勢をまくり切、大敵を見ていさむこと、荒鷹が雉を見て、鳥屋をくゞるにことならず。雨やあられと飛くる矢さき、あがる矢にはかいくゞり、さがる矢には飛上り、向ふてくる矢は小太刀をもつて、切ては落し受ては拂ひ、はらりはらりと切拂ひ、しゆみの四方の四天王、魔醯修羅が放つ矢を、一度に切て大海に、拂ひ

によりてかはりけり浪花の葦は伊勢の濱荻

氣違―匙

あはれ―泡

おどろ―亂髪

秋より先に云々―謠曲班女にある句にて夕にいふをかく

さらしな―梟すにかく

はしらず本朝に、名もひとり身も獨り、又と二人はなき人成を、さもなき首を何故に、墨くろ〲と高札に、新田義貞としるしたる。其方こそ狂人よ。我は元より氣違の、こぼさぬ水のあはれをしらば、さのみ人目にさらさず共、あの首をわらはにたべ。煙となしてなき跡の、菩提を弔ひたふさふらふ」と、袖にすがりて歎かるゝ。前「ヲヽ御歎きといひ、御不審はさることなれ共、此首は盛長が討ちは討つて候へ共、義貞とは見へがたく、外に似たる者の有故、さらして實否をたゞさん爲、かくの通」と云所に、東の辻に人立して、是も女の物狂ひ、まゆかきくもり黒髪も、おどろにばつと、ふりかけたる笹の葉の、亂れ心やくるふらん。女「あらはゞかりや、恐れをしらぬ京わらんべ。忝も我殿御は、源氏の大將左中將義貞、參内の道そこのけとこそ。歌「なつかしや我妻の、雲井を出しは卯月の空、秋よりさきにかならずと、夕の數は重れど、こぬ夜つもりのうらめしや」獄門にたがさらしなの、月日待しもいたづらごと。後世とぶらひみづからも、死出三途をともなはん、御首たべなふ警固の人、お情あれ人々」と、獄門の木に抱き付、人目もわかず泣給ふ。以前の狂女走りより、「是義貞殿の妻と云御身はそも何人ぞ」女「ヲヲ聞も及び給ふらん、勾當の內侍とはみづからよ」狂「イヤ實の勾當の內侍とはわらはが

葛葉—風吹けば裏見するもの故
宇津山—駿河にありて蔦葛茂りし故に亂るの序にもけり
兒の樣を云々—夫を思餘り幻に立つさま
妻—夫
伊勢の濱荻—古歌に物の名も所

くちせぬ中を葛の葉の、怨は風のとがもない物。誰が手にかけて宇津の山、蔦の葉かづらみだれそめ、くるひ出たる 歌 我身は何とならの葉の、露よりうすきおなさけや。宵は待かね夜中は歎き、暁起きて空見れば、兒の樣な傾城が、むらさき盃手にすへて、一ッ參れ我殿、二ッ參れ此殿、三ッめの肴には、白瓜からうりから梨子から梅、西王母がそのゝ桃、百とせ千年の御命、情なくも失なひし、謠 そも修羅の敵は誰そ、大森彦七盛長とや、妻の敵いざ討ん。持たる柳を劒と定め、瞋恚の焰はこがるゝ紅葉、いふに甲斐なき狂女なれ共、夫の弓矢のはげしき嵐に、なれてもまれて、四方の櫻の四方へばつと、よりくる警固、さす手も引手も武士の、物狂ひとて咎むるか。よし咎めても威しても、歎きても口說ても、獨りは歸らじ我妻たべ、夫たべなふ人々」と、かつぱとふして泣沈む、淚の袖も黑髮も、亂れ心ぞ憐れなる。警固の下部棒振廻し、「騷敷氣違め、そこ立退」と追拂ふ。前司押へて、「さなせそ〳〵云事有」と立ちよりて、詞「扨は義貞の北の方にてましますな。いかに狂氣し給ふ共、年月なじみの夫婦の中、かほばせも忘れ給ひしか。心を沈め能見給へ、義貞にては候まじ。歎を止め歸り給へ。しやうだいなや」と諫むれば、狂「うたての人のいひごとや。伊勢の濱荻浪花の芦、所にかはるは草の名よ。異國

秋のは―秋の草木の葉にて爰は男の音信を待ち焦れし様

八橋―參河にあり

かきつばた―似たりや似たり杜若の影を取れり

なるは瀧の水―延年舞の歌、とうたりは流れ落つるさま

雞籠山―唐山通城縣の南にあり夜靜なる時常に鼓の聲すと云ふ(大明一統志)

ばなつかしやなふ。ヤア〳〵わらんべ共は何故に立ちさはぐぞ。何新田左中將義貞と云大將、軍に打負敵に首を取られて、獄門にかゝり給ふとや、あら誠しからずや。其中將と云人は、本より弓馬は家の藝、雲のうへ人に交りては、歌連歌の道にも達し、鞠は曲鞠の品々迄くらからず。又酒もりなどの折柄は、謡いで人々に亂舞舞て見せんとて、水干直垂取出し、衣紋美しう著ないて、へりぬり取て打かづき、手拍子人にはやさせ、扇をつ取「なるは瀧の水、たへずとうたり、たへずとうたり落くる瀧の、音羽の嵐に地主の櫻はちり〳〵」アヽ淺ましやちるは櫻かふるは涙か誠にあれよ、あの獄門こそ涙の種。めぐりに嚴しき鑓長刀、劒の枝のさかしき中の、梢にしぼむ花のかほばせ、目もふさがり色かはる共契りは變らじ。我こそ妻の勾當の內侍。何なふ內侍と召るゝかや、いで參らふ。思ひ出せばはやむかし、人目忍ぶの袖打かざし、あひそめし夜の睦言も、語りつくさぬ鐘のこゑ、雞籠の山にひゞきて、森の小鳥八こゑの鳥。歌曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろり〳〵とする時は、扇をつ取刀さいて、往ふよ戻ろふよといふては妻戸に佇みし、ゑにしなきりょんな。君が心に秋風吹ば、いなふ共戻ろふ共、何共其方の御計らひと、いふては小腰に抱つきて、むすぶの神の中立は、比翼連理も磯枕、

人性―人情

そこゐなく―底意包まず

うたてや云々―此章は小山田の妻狂女となりて夫の首の下にて嘲つさま、其意は柳はもと直なれども風之を撓む我心も戀の爲に狂ふと也

某に任せ下さるべし」と、望み申せば高氏卿、「然らば兎も角も計らふべし。去ながら都方は義貞ひいきの萬民、詞も直には受がたからん」との給へば、﨟「さん候。壽永のむかし、木曾殿北國合戰に、手塚の太郎光盛、齋藤別當實盛が首を取しか共、名乘らねば名もしらず、見知ル人もなかりしを、樋口の二郎が朋友のよしみに語りし詞の色、染たるすみのびんひげを、洗ひて夫とは存じて候。友達のよしみにさへ、心をあかすは人性のならひ、殊に義貞は情有大將、よしみの者も多かるべし。北の方は勾當の内侍と申ス内裏上﨟、かくと傳へ聞給はゞ、忍ぶに余る涙の袖。諸人に紛れ給ひても、思ひは外の色に出、其かくれ有べきか。實盛がひげを洗ひしは、夫は篠原池の水、是は情のそこゐなく、誠を顯はす涙の水に、謠洗はせて御覽候へ」と、申もあへず首を持御前を立り。三重

狂女「うたてやな是御覽ぜよ。今迄ゆるがず折てかたげし此柳、風のさそへばこそ一葉も散るなれ。たまく心すぐなるを、戀こそ我をくるくるはすれ。風狂じたる秋のはの、荻のをとづれ今かくとたのものかりよ、歌君が玉づさつばさにかけて、我手に渡せ渡せやわたせ八はしの、澤邊ににほふかきつばた花あやめ、にたりや似たり新田と聞ケ

とゝのへ—よきに取成す

生貞云々—竹田出雲、手習鑑に此句を用ひたり

に心を沈め、前「新田殿の御貞は、先年鷹狩の折柄、一兩度も見參らせ、大かたに覺候」と、近々と立ちより右へまはり左へ向、ためつすがめつ、見れば見る程疑ひもなき我子の高家。南無三寶、勘當して十八年、此世にながらへ有ならば、此度の合戰に、大將の御目に及ぶ程の高名せよかし。夫を品に勘當ゆるし、御前もとゝのへ老が世の、子孫の榮を見ん物と、賴し心の綱も切、そゞろ涙のこぼるゝを、「ハア丶老眼のかすみさだかならず」と、目をおしのごふ其中にも、當家譜代の身を持て、敵の大將義貞と、名乘て死せしは心得ず。申詞にさしあたり、前後にくれたる計なり。大森彦七つゝと出、「是々前司殿、生貞と死貞は相好の變る物。其了簡して大概似たらば似た通申し上られよ。凡道具の目利でも、只一言で千貫の道具が似せ物に成ことも有。粗忽いふて盛長が、高名を消まいぞ」と、色をかへてぞ申ける。前司重て御前に向ひ、「面體よく似たるとは存ずれ共、某が心にて決定しても申されず。所詮一條一路の獄門にかけ、諸人の噂をうかがはゞ、是非明白に顯はれ、義貞に極らば、味方の勝利盛長が高名、もしさもなき首にて候はゞ、六十に餘る前司めが、粗忽を申て面目なしと、獄門の木の下にて、腹かき切て伏ならば、恥は某にとゞまつて、盛長が不覺もなく、味方の恥辱も候まじ。此實否をたゞすこと、

死骸を求むと欺きしを賊兵眞とし似た首を曝ししを或者是は似た首なり、まさしげにも書きけるは虚事哉と落書したり（太平記十五）

いはんずなーいはんとするな

きしと聞及ぶ。彼等は天性武略智謀備へたる英雄、引も駈るも理に當り、生るにも死ぬるにも、勝負の損徳を守る名將、いか成謀をやかまへつらん。卒爾にもてはやし、義貞にてなくんば味方の恥辱は云に及ず、汝不覺人の名を取べし。かたぐ\如何思はるゝ。評定あれ」とぞ仰ける。大森つゝと出で「いや御評詮迄もなく、生どりの者に見せ、御尋候はゞ、實否早速知れ申にて候」と、こざかしげに言上す。高氏大きに笑はせ給ひ「イヤ生捕に問などとは、名もなき者の首のこと。命を捨てゝ働き入、生どらるゝ程の者なれば、よつく大將義貞に忠信深き侍よ。とはれて誠を云べきか。若御邊運盡き敵に生どられ、味方の謀を問ふならば、有の儘にいはんずな、覺束なし」との給へば、盛長は詞なく、赤面したる計なり。大將重て「我義貞と一家なれ共、使者の通路計にて、終に直に對面せず。見知たる人あらば、申されよ」との給へば、諸大名立よりく\、「關東以來此度の合戰にも、遠目に見たる計にて、近付しことなければ、おぼろげのことは申されず」と、更に實否は極らず。小山田前司高春、末座よりのび出て、見ればおもざし顏のかゝり、若年の昔勘當せし、我子の小山田太郎高家に、似たりと見たる親子の緣、六十の老眼にも、紛ふかたなく胸にしみ、はつと驚ろき居たりしが、さあらぬ躰

矢ずくめ―矢を放ちて動きのとれぬ樣にする

にた〳〵敷云々―律僧正成等の

七盛長、腹卷に直垂うちかけ、もみ烏帽子引たて血まぶれの甲箱御前にさし出し、彥「敵の大將楠討死の後、總大將新田義貞西の宮の軍破れ、味方の多勢に取卷かれ、求塚の上にかけ上り、腹きらんといたせしを、某矢ずくめにして討伏首取て候。殘る軍兵落行所を、播磨路迄追かけ申せし故、御帳にも付申さず、只今實檢に供へ候」と、蓋を取れば錦の直垂、袖をちぎつて包みしは、大將軍の首のしるし。伺公の諸武士横手をうち、「扨は義貞を討たるか、今度の譽は盛長一人。弓矢の冥加に叶ひし侍、お手柄〳〵あやかり者」とぞうらやまる。高氏卿しばらく思案し給ひ、「錦の直垂を著し、新田左中將義貞と名乘たるを、夫ぞとしつて討つらめ、其に虛言も有まじ。去ながら此高氏も義貞も、同じ淸和の後胤、八幡殿の嫡孫、敵味方とはなつたれ共、ともに一家の源氏の棟梁、殊に天皇に賴まれ參らせ、官軍の惣大將、相隨ふ門葉に、大館大井田里見鳥山、大島堀口脇屋のれき〳〵數をしらず。譜代重恩の武士も多かるべし。義貞程の大將が討死せんに、我さきにとかけ合、冥途の供とて一人も討死せぬさへ不思議成に、殘る軍兵播磨路迄迯げたるは心得がたし。一とせ楠がやけ首を以て欺き、義貞の智略に乘られ京童の笑草、「にた〳〵敷首共をまさしげにもかけたり」と、落書を立られ六波羅の愚將共が、耻か

我立杣—比叡山を云ふ都の富士も然なり傳敎の歌と伊勢物語の歌による

木主—文王の位牌

義弟—義帝の誤、義帝は楚懷王の孫、何れも君を奉じ民心を得天下を取る例(史記)

とざま—譜代の臣ならざる者

三枚甲—三枚にかけて錣三枚ある兜をいふ

立こへてならびなき、我立杣や都のふじ、西坂本にぞ入給ふ。

第三

周の武王は木主を作つて殷の世を傾け、漢の高祖は義弟を尊んで秦の國を亡す。されば高氏將軍天理を恐れ、後伏見の院宣を申給はり、朝敵の名を免れ、忠戰の鉾先鋭くして、兵庫湊川の合戰に打勝、楠正成に腹切せ、新田義貞を驅散し、馬鞍休め物ノ具も、ぬぎて紐とく花の都、東寺を假のやかた城、大將の御所とぞ定らる。猶も殘黨洛中を犯すこともやと、口々の警固怠らず。生殘る義貞一家、重て討手を向ふべし。先々軍の疲をはらし、樂を諸人と共に樂しむ酒宴の興。此度の合戰に、分捕高名の帳面を開かせ、夫々に御褒美ある。仁木細川吉良石堂、南部桃井高上杉、武田赤松畠山、澁川岩松一色荒川小笠原、此人々を始として、とざまの大名小名御家人は云に及ばず、雜兵葉武者に至る迄、たち刀馬鎧、金銀時服の御褒美、昨日今日の足輕も、知行の感狀給はつて、首一ツが一筆に、千石に成も有、數にもあらぬ首とつて、御褒美を貪れ共、僅銀子三枚甲、拾ふて著せてもあきらけき、名大將の賞罰と、あをがぬ人こそなかりけれ。爰に大森彦

さしつたり―オイ合點

十善―前世にて十惡を犯さぬ者現世にて帝となるとの佛說

射取や〳〵」と矢先を揃へ、よこぎる雨と射かくる矢先、小「さしつたり」と小太刀をぬいて、はらり〳〵と三重切落す。され共鎧のすきま〳〵、矢ずくめにすくめられ、「今は是まで。我義貞の命にかはり、其ひまにやす〳〵落し、情の恩を報ぜん」と、求塚に驅上り、小「遠からん者は音にも聞け、近き者は目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義貞、十善天子に賴まれ參らせ、屍を戰場の土に埋む、功ある大將の最期のてい、よつく見をいて手本にせよ」と、たかひも切てとく所を、大森主從おり重り、きりふせ〳〵、をさへて首をぞかいたりける。直垂切てをし包み、「官軍の惣大將新田義貞を、伊豫の國の住人、大森彥七盛長討取たり」と名乘しは、いかめしうこそ聞へけれ。此聲に驚き、馳散たる味方の勢、「大將を打せては、壹人もいきて詮なし」と、八方より引返す。義貞も取て返し、義「ヤア〳〵同士討する狼狽武者。誠の義貞是にあり」と、切てかゝり給へば、彥「イヤ義貞が二人あるものか。新銀古銀同じ通用是で堪忍仕る」と、一散に迯て行。味方の大勢追驅るを、大將をさへて「しばらく〳〵。彼は聞ゆる佞人、愚痴愚蒙の狼狽者。かゝる者の敵陣にあるは、味方の利運ぞ」と、諸卒を示す謀、智謀は居ながら天に入る、波をもくゞる尼が崎、山崎過て名將の、譽は雲井の桂川、打ち越かけこへ渡りこへ、世に

わざと敵に組しかるゝ者や候べき。足利高氏の家の子小山田太郎高家、不足の敵とおぼしめさば、只首打てすてさせ給へ」と、兩手をゆるめて働かず。義「いや／＼此物の具は夜前女に與へし義貞が著捨の鎧。扨はその夫よな。恩を報ぜん心ざし、しほらししやさしさよ。さりながら天下にくらぶる義貞が命、僅の鎧一領にて助からんとてはとらせぬぞ。主親の勘當に付望有者と聞く。目を驚かす高名して、本望を達せよ。只今にても駁返し、義貞と今一勝負、せばせよかし」との給へども、小山田は涙にくれ、「重々の御情冥加の程も恐ろしく、申上る詞もなし。いふに甲斐なき此高家がかせくび、義貞公の御手にかゝり申こと、いかなる先陣さきがけにも、勝つて身に過たる譽、勘氣の父が聞ならば、さぞ悦び申べし。此上の御芳志に、はや首打て捨させ給へ」と、申切たる兩眼に、涙を流すぞ道理なる。義「エヽ義理ばつたるおのこや」と、取て引立塵打拂ひ、「義貞に助けられしと人に語るな、我も人には語らぬぞ」と、手負し馬を引立て、靜に打て過給ふ。武將の氣質備つて、古今に語るもことはりなり。小山田は茫然と、義貞の仁心こゝろにしみて立たる所に、大森彦七盛長手の者五十騎ばかり、どつと驅寄大音あげ、「赤地の錦の直垂、中黒の鎧は、敵の大將義貞、遠目にも見ちがへず、

しほらしし―可愛らし

かせくび―かせは悴にてやせ首の事（俚言集覽）

正なふ—きたなく

こがらし—凩にて秋冬吹く暴風

かゞせ—案山子

弦走—鎧の腹部

出の山路の一二のかけ、をくれはせまい」とわかれしは、はや修羅道の先陣と、後にぞ思ひ三重しられける。傾く日蔭西の宮、大手の合戦入亂れ、人馬四方に馳ちがひ、喚きさけぶ其聲は、山を崩すが如くにて、官軍既に戰ひ破れ、堪へつべふは見へざりけり。大將義貞只一騎、返し合〳〵、十六度迄驅散し、御身をきつと見給へば、數か所の矢疵馬鞍に立し矢は、枯野の薄にことならず。義「エヽ軍の勝負今日に限るべからず」と、追くる敵を切はらひ〳〵、求塚の小松原、心靜かに打給ふ。高家其ぞと見るより大音上、「大將軍と見奉る、正なふ後を見せ給ふ。引返して勝負あれ」と、をつかくれば振返り、義「日本一の義貞に、聲をかくるはこざかし」と、鐙にかけてはつたと蹴散し、たゞよふ所をひらりと飛おり、片手をのべ一突つけばこがらしに、かゞせのたをるゝ如くにて、横なげにどうど伏す。義貞すかさず弦走りにのつかゝり、首をかゝんとし給ひしが、鎧出立つく〴〵と御覽し、義「ムヽウ天晴をのれはしれ者哉。義貞にやす〳〵と組しかれん力とは覺えず、何とて我を組しかぬ、定て子細有べき。去ながら汝が主の高氏を組伏せたらんはしらず、汝ごときの侍を、五十百首取ても、さのみ義貞が手柄本望共思はず。サア子細を語て名のれ〳〵」との給へば、小「コハ御諚共覺えず、いかに大將なればとて、

釣の紐
上巻付―押付の下にある板に上巻の緫をつく

さもしい―卑しい

あはよく―機會よく

も、中々買るゝ物かいの。馬の草もなき故に、昨夜義貞の領内の、青麥盗み苅たるを、番の者に搦られ、殺さるゝ筈成を、さすが義貞は憐を知ッた大將、夫の身の上聞屆、命を助け其上に、此太刀具足。サア早ふ出立て、手柄してござんせ」と、わたがみ取てきせんとす。高家つきのけ、「ム丶誠に義貞は五常を守る名將、物の憐れをしること、敵味方の隔なき人と聞。義貞に嘊ふた鎧を著し、直に義貞に打てかゝらんこと、心よからぬ軍なれば、思ひ切たる高名も成べからず。エ丶よしない情を受たり」と、くやみ顔にぞ見へにける。妻「エ丶こなた共覺えぬ。義貞程の大將が、さもしい返報受ふとて、何の情をかけられふ。それ故こなたの名も問ず、用捨なく我をうて、と詞に念を入給ふ。義貞の目の前、此具足著て働き、あは能ば義貞をしてやらふと思ふ氣はないか。エ丶をくれた人や」とせきければ、小「ム丶分別した合點有。一度著して見せずんば、其方をかたりなどゝさみせられんは男の恥。サア小山田太郎高家が出陣」と、鎧取てなげかけ、上帯高ひも小をどりして、引しめ〳〵太刀わきばさみ立あがれば、妻「ヲ丶あつぱれ武者振よい男、わしも馬に草かふて、追付そこへ」と立歸れば、妻「是討死は軍の習ひ、いきて歸れば仕合。先今生の暇乞、必泣くな」妻「コレ武士の妻に成からは、そこは合點」小「死

貧は諸道の妨—貧は總てに差支へる諺

矢留り—鎧の弦走の上部
押著板—鎧の後の肩にあたる板
高紐—鎧の上部綿がみにある胴

が中なり共、只一揉に駈破り、兩陣の目を驚かせん物を、何をいふても浪人の、紙子頭巾に鋤壹丁、思ふに甲斐のあらばこそ。貧は諸道の妨と、世のことわざも我が身のうへ、エヽ無念口惜や」と、こぶしを握り牙を噛、男泣にぞ泣居たる。かゝる所へ女房は、危き命をまぬかれ、ふつてわいたる太刀鎧、夫に見せて悦こばせんと、足早に歸りしが、妻「ヤアこちの人爰にか。此身裝は何ぞいの。さぞ待かねてゞ有ふと思ひ、いきせきして戻つた。是わしじや女房じやが、なぜに物いはんせぬ。氣合が悪いか高家殿」と、抱きおこせば涙をおさへ、小「チヽ氣合もどふでよふはない。ヤレ女房あの向ふの山々に、入ちがふ籏を見よ。今ぞ合戰眞中。あの軍中には主君高氏公、父前司殿もおはすらん。正しき主君老たる父が、天下別目の晴軍と、命を惜まず戰ふを、子の身として安閑と、見物して日を送る。是が無念に有まいか」と、いはせも果ず、妻「コレ〳〵、其泣事はもふいらぬ。是見さんせ」と、太刀鎧投出せば、高家横手をちやうど打、鎧引よせつくづく見て、矢留り金物押著板、發傳高紐上巻付、太刀は鳥首兵庫ぐさり。小「ムヽ是は大將の拂物、大抵では賣まじきが、但損料でばし借つたか」と、いへば女房くつ〳〵と吹出し、「アヽつがもない。日がな一日たま綿くつて錢廿取や取ぬもの、八百年の手間賃で

假名實名—假名は苗字にて實名は本名を云ふ（瑠璃天狗）

立かゆみ—立つにかけ、引きの緣語

中黑—新田の紋、二ツ引兩は足利巳は小山宇都宮輪違は高の紋所

ヲ其心を察してこそ、わざと最前より夫が假名實名をも尋ず、互に知れず知ぬ相手、名乘て勝負を遂る時、何れに用捨の有べきぞ。さ程の事を汝等に、敎らるゝ義貞ならず。いらざる詮義に時遷れり、早々歸れ」と太刀鎧、手づから取てたびければ、をし戴きわきばさみ、女「お情は是迄、明日の合戰には、夫婦諸共心を合せ、恐れながら御運によつて御首を、給はることも候べし。おゆるしあれ御免あれ」と、御前を罷立かゆみ、ひきはかへさじ武士の、妹脊の義理ぞ三重賴もしき。既に其夜も明行ば、勝にのつたる高氏の軍勢雲霞のごとく、湊川より打てかゝる。義貞も西の宮より取てかへし、生田の森を後にあて、入亂れ責戰ふ。太刀のつば音ときの聲、いか成修羅の鬪諍も、是には過じとおびたゞし。小山田太郎高家は、心計は春の花、身は埋木の力なき、野飼の馬の繩手綱、ちぎれ具足もあらばこそ。あまつさへ女房の、夕部に出て歸らぬは、心もとなさ氣遣さ、足に任せてこゝかしこ、所在を尋求塚、小松原より振返れば、コハいかに、遙向ふの山山に、中黑のはた二ツ引兩、巴の旗も輪違ひに、東へなびき西へなびき、礒山風に翩翻して、馬煙矢さけび天に響き地に滿て、新田足利の國爭ひ、今を限りと見へたりける。小「アヽうら山しき殿原が合戰や。せめて古具足の一領もあれかし。取て投かけ何百萬騎

盗み取。我妻に打著せ、みづからも太刀脇ばさみ、夫婦諸共軍して、名を後代に上べしと、思ひしこともいたづらに、かゝる縄目にあふことも、夫の武運の拙なき故。子細と云も此あらまし、とてもながらへ果てぬ身ぞ、憂物思ひさせんより、はや／＼殺して給はれなふ。御慈悲成は人々」と、聲も惜まず歎きしは、目も當られぬ風情なり。義貞もやゝ落涙有、「ヲヽあつぱれ武士の妻にて有けるよ。命がけの盗して夫の武勇を勵ます心、感じても猶余り有。罪をゆるし義貞が、著捨の鎧太刀をもそへて取すべし、夫々」との給へば、御召替の錦の直垂、金作りの一こし、女が膝にぞ置れける。義「サア／＼歸つて物具著、明日の合戰には、義貞が陣に向つて打てかゝれ。敵ながらも見物せん。はやとく／＼」との給ひて、いましめの縄を解せらる。女は「アツ」ト頭をさげ、「情有御大將、有がたき御恩の程、何と報じ奉らん。去ながら、我妻はまさしく高氏公の御家人。すは合戰に及ばんとき、今給はつたる鎧を著し、太刀を持て義貞公に向はるべきか。用捨しては高氏への不忠。是非なく一矢仕らば、恩を知らぬ弓取と、末代迄の笑ひ草、御恩は却てあたとなる。只御慈悲にはみづからを、盗一ぺんの科に落し、はや／＼殺して給はれ」と、首さしのべて泣き居たる、心の中こそすゞしけれ。義貞猶も感じ給ひ、「ヲ

暗目暗なり（俚言集覽）
あぬまいーあるまいを南無まいだに似せて語尾とす
往還ー大道
我妻ー我夫、次にあるも同じ

盗み取たる青麥を、背に縛り付られて、恥かしげにぞ泣居たる、義貞つく〴〵御覽じ、「彼が躰盗すべき者共見へず。子細ぞ有らんまつすぐに申べし」と有ければ、女ちつ共騒がず、「ハア丶子細と申て麥を盗みしより外の子細もなし。はや〳〵法にをこなひ給へ」と、恐れもなげにぞ答へける。義貞猶もいぶかしく、義「子細をいはずんば往還にさらし、諸人に恥を知らすべきぞ」との給へば、女は「わつ」と計にて、暫し涙にくれけるが、「ア丶是非もなや。盗みをするも夫の恥、包まんと思ふ爲成に、諸人に面をさらさんこと、恥を招くか情なや。然らば包まず申べし。わらはが夫は足利高氏の相傳の侍成が、聊のこと有て主親の勘當受、此國の土民となり、忍びて暮すうき身にも、此度の合戰是屈竟の時節到來、おゆるしなく共戰場に馳加はり、分捕高名譽を顯し、主の不興父ごの勘當ゆるされんと、思ひ定めし我妻の、心はやたけにはやれ共、鎧一領有にこそ、手綱ゆりかけ乘つたり共、一町もとばぬ野飼の痩馬、住もわびしき藁屋の窓より、鬨の聲矢さけびの音、かすかに聞ゆる其時は、齒ぎしみしての無念がり、傍で見るさへ胸せかれ、己れやれ二世とかはした大事の男、此まゝにては果させじと、樣々に思案し、麥を盗んで兵粮の、便よくは陣所に忍び、寢入たる軍兵原が、太刀物具思ふまゝに

しよざい—論語の如在より來る、常の振舞を云ふ
ひつしやりほん—ひつそりの意か
てんぽの皮—まゝよと皮巾著にいひかく
お根付—お目付を巾着の緣に然いふ
のぢばる—のし上る
しやつ面—うぬの面
はりが過て—金を多くはりて賭する事に寄せたり
どう取—親方
かるた—刈ると骨牌
お山—女郎
赤栴檀—大なる借錢にかく
手ぐら云々—手

らずの商買。此軍始つて國中のよい衆は、わらんぢがけで迯ごしらへ、遊山所はいかなこと、我等がしよざいひつしやりほん。御法度を背きしは、いつそてんぽの皮巾著、お根付衆に咎られ、括られました」と申ける。兵「其次成大男、己が面付たゞ者ならず、眞直に白狀せよ。のぢばらばしやつ面を、はつて〳〵はりまはさん」乙「アヽ余りはる〳〵御意なされな。はりが過て此ざま。我等は博奕のどう取、此比つゞく不仕合、鍋釜疊つりお前、糠味噌桶迄はたけ出し、詮方盡て二三日、麥をかるたのかたにはり、ひねつても〳〵、二寸より上目なく、あげくに今夜三寸繩に縛れました」と泣にける。三番目は若き出家、兵「三衣に似合ぬ麥盗人、子細を申せ」と睨付る。丙「されば愚僧はあかしがた、蓮臺寺と云淨土寺の後住に、無海と申法師成が、學問のうきばらしに、ふと室の津へ出かけ、梅花のうつりをかぎそめて、抹香の匂きづまりさ。あくびは百八煩惱菩提、いつそお山に宗旨をかへ、好色修行と心ざし、通ひ詰た其あげくが、それはいかい赤栴檀の、阿彌陀佛迄質屋へとばし、手ぐらまぐらに調のへ、今少に手づかへ、ふつとした出來心、後悔先へたゝきがね、只今斯樣のせめ念佛にあふことも、出家の身にはあぬまいこと。あぬまい〳〵、アヽぬまいだ」とぞ語りける。遙の跡に年の比、廿余りの女房、

將の謀云々—七書の三略の文にて同書に利を勢に作る

成るは—成るよ

第　二

將の謀洩る時は軍利なし、外内を窺ふ時は災ひ制せずとや。坊門宰相淸忠が内通故、湊川の合戰破れ、楠正成討死すといへ共、惣大將新田左中將義貞、西の宮に御陣を召され、士卒を懷け給ひければ、馳集つて御方の勢、四萬余騎とぞ聞へける。侍所長濱六郎左衛門、松明持せ陣屋をめぐり、囚人四五人搦めさせ、義貞の御前に引据へ、長「彼奴ばら今夜近邊の田畠を荒し、御馬の飼料に殘せし靑麥を、盜み苅取しを搦め取て候、見せしめの爲首切て、獄門にかけ候はん」と言上す。義貞聞召、「抑今度の合戰は朝敵を亡ぼし、民安全になすべしとの勅錠なれば、賣買耕作に妨げず、田畠の一粒をも苅取者は急度刑罰すべきよし、諸軍勢に相ふれ、所々に立たる高札を背きしは、敵方のあふれ者か但盜賊か、白狀させよ」と御諚有。雜兵繩付ひつ立、「サア大將の御前成は眞直に申べし。僞らば首捻切らん」ときめつくる。甲「是々そこつなされな。我等も此國の大將」兵「ヤア大將とは」甲「いや〳〵巾著切の大將剪刀の彌市と申者。或は花見の開帳の、又は傾國猿芝居、人立多き所にて、人の懷腰のまはり、手がさはるとこつちの物、資本い

大磐石云々―太平記に大森が鬼女を負ひなる話の作り習

手が惡い―仕方が惡い

秋風―飽く事

八文字―女の歩みに内八文字外八文字とあり是は外を云ふ

口へらず―負けずいふ

出家侍、犬畜生―農工商の三民より相手にしがたきとの諺

たまぼこの―道の枕詞

付たるごとくなり。大森わな〳〵震ひ出し、こは〳〵下にそつとおろし、迯入んとする所を、源「是々彦さん手がわるい。幾瀬心を盡すとは僞りか、何處へいかんす。いとしかはいといはんした、言の葉はうそかいな。チヽしんき跡じよりさんすは早や秋風か」と、見あげ見おろす高入道、しやなら〳〵の八文字は、二王をゆるがすごとくなり。彦七五體縮め共、弱味を見せじと大音上、「ヤア〳〵源秀智仁勇を兼ねしと云、楠さへ討取たる盛長、いはれぬ腕立せんよりも、腹をきれ」とぞ呼はりける。源秀今は堪られず、長持の棒をつとりのべ、源「ヤイ禮義知らずの國賊、楠一族國の爲君の爲、死を善道に守て潔よく切腹せしを、何ぞや己れが、討止しなんどとは、どの頬げたから吐出した。いざこい源秀が手なみを見せん」と討てかゝる。盛長猶も口へらず、「侍たる身が坊主を相手にする物か」と、云捨て迯て行。源「ヤア出家侍犬畜生餘すまじ」と、ぼつ立〳〵たゝき立、八方微塵にうち立れば、あたりに近づく者もなく、皆ちり〴〵に迯てけり。源「さもそふず〳〵。これより河内に立越、正成の最期を傳へ、重ねて義兵をあぐべし」と、甲斐なき首を取集め、怒れる眼にはら〳〵と、涙貫くたまぼこの、道は生田の森の露、するのしづくや末の世に、譽を永く傳へける。

一作—一趣向
御見—お目にかからう
おぼこ—處女
指—刺
重き小夜衣—さらぬだに重きが上の小夜衣我妻ならでつまな重ねその歌による

大森彦七、大勢引具し込入て、一々に首かき落し、「ヲヽ目出度し心地よし。抜ぬ太刀の高名、楠が首高氏公に奉らば、三ヶ國は取れた物。日比心を通はせし、勾當の内侍も坊門宰相が計らひにて、今夜我手に入筈。むまいことのつかみ取、早ふ内侍の顔が見たい」と云所へ、女房二人先に立、長持を舁入させ、「宰相殿のお使ひ」と、聞より彦七大きに悦び「彦「ヲヽ、滿足〳〵。人目を憚り長持とは宰相殿の一作。去ながらいとしい君の箱入、氣の詰るもおいとしい。先々御見と蓋をあくれば、恥かしげに薄絹深く顔かくし、籬の梅のはや咲の、雪に埋れし風情なり。彦七猶も心うかれ、「其おぼこながなを味し。そさまを我が手に入んため、此度の軍も某が手を碎き、御覧候へ楠一家を討留たり。是より義貞が首捻切らんは、𪇆鳥を指すよりいとやすし。世になき新田に心中を立んより、日の出の我等になびかれよ。色こそ黑けれ心は伽羅、先我が陣屋へ同道して、新枕の酒もりせん。いざさせ給へ」と肩にかけ、二足三足は歩みしが、アヽラ不思議や今迄輕き女郎の、俄に重き小夜衣、我妻ならぬ念力か、大磐石を肩先に、たゞみかけたるごとくにて、五體ちつ共働かず。彦「ヤアラしれものごさんなれ」と、太刀に手をかけ振あをのけば、コハ如何、和田の新發意源秀、くはつと見開く眼の光り、二面の鏡研立て、額に

九界―六道と聲聞緣覺菩薩となり

宗徒―旨と賴む輩

つかんで捻あふ間に、大森小脇をそつと拔け、跡をも見ずして逃失けり。正「エヽ大事の敵を洩せしもをのれら故」と、兩脇にしつかと挾み、ゑいやうんとしめ付れば、目口より血を流し、二人一所に伏たりける。是を見て吉良、石堂、高、上杉六千余騎、「楠を討留ん」と、八方より喚てかゝる。正成元より討死と思ひ定し晴れ軍、「望む所」と太刀さしかざし、打て出れば正季正員和田五郞、宗徒の兵ぬきつれ〳〵、死物狂ひのおがみ打、當る者を幸に、なぎ立〳〵三重追まはす。され共敵は百萬余騎、入かへ〳〵責立れば、七十三騎に討なされ、正成今は是迄と、一村在家に走り入り、是屈竟の最期場と心靜に鎧ぬぎ捨、正「いかにかた〴〵、抑最期の一念に由て、善惡の生を引といへり。九界の間に何が御邊の願ひ成」と問ひければ、弟の正季から〳〵と笑ひ、只七生迄は同じ人間に生れ出、朝敵高氏を亡ぼさんこと、我等が願ひの一ツなり」と、いはせも果ず正成嬉しげに打うなづき、「罪業深き惡念なれ共、我も斯樣に思ふなり。いざや同じく生をかへ、此本懷を逹せん」といひもあへず、をし肌ぬぎ、氷の刃一文字、脊骨をかけて引まはせば、宗徒の一族十六人、從ふ兵五十余人、我も〳〵とさしちがへ、同じ枕に伏たりし、惜かりし惜むべし。日本無雙の名將の、最期の程ぞ潔よき。あひもすかさず

驀地―傍見もせず突進する

しや物々し―おのれ小癪な

勝も誠の勝ならず、恥を子孫に殘すなり。心得たるか正行」子「承り候」と、互に駒を引かへし、東西に別れしが、振返り〳〵、親は我子の身の行衞、子は又親の最期の末、思ひつゝみて弓取の、泣ぬを今の涙とは、よその袂にせきかくる、湊川へぞ三重寄にける。明れば五月廿五日、高氏の軍兵海手山手百萬余騎、楯をならし箙をたゝき、鬨をどつとぞ上たりける。楠手勢七百余騎、同時に鬨をつくり立、多勢が中にわつて入、喚叫んで三重戰ひける。味方は小勢と云ながら、一命を義路にかけ、名を末代にとゞめんと、思ひ切たる勇士共、北より南へ追なびけ、西より東へわつて通り、息をも續せず責かくれば、さしもの大勢さゝへかね、須磨のうへ野へさつと引、後陣の勢をぞ待居たる。大森彦七盛長、駒かけすへ大音上、「鬼神ならぬ楠、某が一軍に、正成兄弟首取て、敵味方の目を覺さん。彦七を手本にせよ」と、廣言吐て打てかゝる。正成も駒かけよせ「何大森とや。合ぬ敵不足ながら、心ざしのやさしや」と、驀地に駈出す。此いきほひに氣を失ひ、迯鞭打てひつかへす。正「きたなしかへせ」と追かけしは、早瀬の鮎を鵜の鳥の追ふてまはるがごとくにて、程なく追つめ盛長が、上帶つかんでどうど打付、首をかゝんとせし所へ、藥師寺十郎同次郎、左手右手よりむずと組。正「しや物々し」と兩手をのべ、草摺

吉野初瀬云々ー親は死しても子は其忠義を受繼ぎて譽を現はす譽

引合ー鎧の右腋にて弦走の合せ目

倒に投落す。獅子の氣分なき子は、岩角に身を破つて當座に死す。いきほひそなはる獅子の子は、中よりひらりと驅返り、身を全ふすと傳へたり。我子の心を見ることは、畜類とても斯の如し。今諸國八方に峙たる敵の中、をさなき汝を歸すこと、かの巖壁に投うつ獅子の子よりも猶あやうし。汝勇士の氣分具らば、數萬の敵の鋒先の巖石も、しのぎて碎く獅子のいきほひ、太平の御代とはね返せ。吉野初瀬の名木も、老木は次第に枯れ共、こぼるゝ種の色香をつぎ、花の名高き山ぞかし。二葉の苗を殘すこそ、いはほとならん楠が、永き世迄のかたみぞ」と、鎧の引合より一巻を取出し、「是ぞ我祕する所の軍術、此書を讀て道を得ば、父正成がながらへ有も同前ならん」と、一巻を手に渡し、「サア此上にも聞分なく、腹切らばきれ供せばせよ。父が云ふこと是迄」と、馬引よせゆらりと乘、思ひ切たる心にも、ゆゝ敷我子の武者振を、見るも限りと目にもろき、涙に手綱くりそへて、駒をひかふる計なり。正行も理に當る、親の教訓詮方も、涙をおさへ「御詞一々承り候」と、一巻取てをし戴き、めのとの恩地に馬引せ、手綱かいくり打乘て、親子此世のわかれの詞、さらばとだにもいはゞこそ。父「欲を忘れ情を知り、義にたくましき大將は、百萬騎にかこまれても、恥辱の死はせぬ物ぞ。此理に背く武士は、

の名人、紀信は漢高祖に代りて死したる忠臣、此句も太平記にあり

め戰ひ、君を御代に立參らせ、父が憤りを散ぜんこと、いか成佛事孝養も、是にはなどか勝るべき。今生にて汝が皃見ることも是迄ぞ。必詞を忘るゝな」と、勇氣たゆまぬ弓取も、恩愛父子の浮世の別れ、涙をはら／＼とぞ流しける。正行聞もあへず、「口惜き父の仰せやな。楠正成が嫡子正行こそ、負軍を考、道より迯て歸りしと、世の嘲りに落んこと、かばねの上の恥辱候。ことに親の討死と、思ひ定し軍場を、見捨る子や候べき。是非御供につれられずは、我等一騎かけぬけ、敏達天皇の後胤、井手の左大臣橘の諸兄公の末葉、楠河内の判官が嫡子帶刀正行、生年十一歲と名乘て能敵にかけ合せ、引組でさしちがへ、冥途の道のさきがけと、思ひ詰たる正行、敵の旗をも見ぬさきに、歸れとはうらめしや。幼なくて戰場の、妨と成ならば、只今爰にて腹切らん、介錯してたべ人々」と、芝の上にどうど居て、聲も惜まず泣ければ、有あふ軍兵感涙に、鎧の袖をぞ絞りける。正成もともに涙は先だて共、わざと聲をあらゝげ、正「ヤア弓馬の家に生れて、討死するが珍しきか。おことを年月養育せしは、父が最期の供せよとては育てぬぞや。戰ふべき所に進み、引べき所に退き、天下に功をたつるこそ、能弓取とは名付たれ。傳へ聞西天に獅子といふ獸有。其獅子子を產で三日の內其子を、數千丈の巖壁より眞

勸學院の雀―勸學院は藤原氏の學問所、其處に住む雀は蒙求を囀ると云ふ諺より習はずして事の大略を知れるを云ふ

しやなら〳〵―去なり〳〵

養由が云々―養由は楚人にて弓

預け參らせよ。道中人に悟られぬ用心第一、とく〳〵」と有ければ、源「合點〳〵智略はお家、勸學院の雀任せてをけ」と小躍して、良等二人が具足をぬがせ、長持に入棒さし通しになはせて、「是内侍樣もめのとごも、慮外ながら下女にして、我等は又此躰」と、内侍の裲襠鎧の上に衣かづき、二王の樣なる大入道、五日歸りの花嫁と、しやなら〳〵とふりかけて、源「サア腰本衆、早ふおじやや」と夕影も、眼は朝日てる月の、都の方へと急ぎける。正成遙に見送つて、嫡子正行を招き涙をうかめ、「汝幼く共能聞をけ。忝も我帝に賴まれ奉り、命を敵の矢先にかけ、身を戰場になげうつこと、譽を取て名を殘さん爲にもあらず、子孫の榮華を希にもあらず、朝敵を亡し國家安全の、叡慮をやすめ奉らんと、義を重んずる計なり。今度の合戰味方必定打まけ、王法忽傾き、御代を奪はれ給はんこと、鏡に照すがごとくなれば、我一ッの謀を以て、さま〴〵諫め申せ共、坊門の宰相よこしまの理を進め、君用ひさせ給はねば、力なくうつ立たり。父が一期の名殘の軍、花々敷戰ひ、一戰に腹を切べきぞ。おことは是より故鄕に歸り、父が最期と聞ならば、彌身を全ふして、廿にも余る時、金剛山を要害として、住吉天王寺に打つて出、近隣を劫し討手向はゞ一命を、養由が矢先にかけ、義を紀信が忠烈にくらべせ

妻―夫の事以下同じ

ぬらし―戀を述ぶる事

けり。其隙に楠親子馬乘はなし、とかふいたはり給ひければ、内侍も涙にくれながら、「常々妻の物語り、楠判官正成は、慈悲第一の大將と、聞しにかはらぬ御情、何と報じ參らせん。一とせ猿樂見物の時、伊豫の國の住人大森彦七盛長とやらん、みづからに心をかけ、坊門の宰相を中立にて、威勢でおどし文でぬらし、色かへ品かへ口說しを、つれなく返事もいたさぬ間に、新田義貞の妻と成たるは、上樣よりの勅諚、天下晴ての夫婦ぞや。夫に此度義貞殿、西國發向の留守を覗ひ、宰相理不盡に亂れ入、先約は大森、仲人の宰相義理が立ぬの何のとて、無理無躰に長持に押入て送らるゝ。なふやるかたなさ便なさ。乳母が慕ひくるとは知らず、頭もあがらず息もならぬ長持を、搖るやら振るやら打付まはる、其響胸にこたへ、目もくら〱と幾度か死入し。火の車にのせて行、地獄の迎ひもかくやらん。此上のお情に我妻の陣屋迄、送り屆けて給はれ」と、めのと諸共手を合せ、かきくどきてぞ泣給ふ。正成打うなづき、「さこそ〱。我大内を出しより、か樣のことのあらんとは、宰相が詞の色にて察せしなり。義貞の御陣所へ送り申はやすけれ共、宰相かくと洩聞ば、陣場へ女中を召れしと惡樣に奏聞し、叡慮を以て御夫婦の中をさかば、御恥辱を招くに似たり。それ〱源秀、是より都へ御供し、玄惠法印に

功德池—極樂に八つの功德池ありと云ふ

ほぞん—本尊佛を云ふ、郭公の鳴聲はほぞんかけたかと云へば續けたり

手ぶり云々—手ふらで味方へ歸れば我々の命がない此方へ來いと也

﨟の、涙ひまなく息籠り、顔にばら付亂れ髪、柳櫻をこきまぜて、水にうかめし如くなり。女「いざ下部共の來ぬさきに」と、抱出せば、上「アヽ嬉しや、此池こそみづからに、菩提を進むる功德池よ。そなたも數珠を持てか」女「お肌に御ほぞんかけてか」上「ヲヽほぞんかけたる時鳥、あやめの沼は水淺し」と、深みを尋さまよひたる。正成馬上より、遙に見付、「あれ〳〵、身を投る女有。敵か味方か何れにもせよ、源秀かけ付助けられよ」と有ければ、「承る」と和田新發意、あぜを傳ふて走りよる。其丈六尺七寸、古の辨慶もあざむく計、鬼の樣成赤入道。二人は「あはや」と手を合せ、飛入所を引寄てしつかと抱く。「なふそふせいでも死ぬる身を、せめて身躰に疵付ず、死なせてたべ」と飛入を、源「是上﨟、殺す程なら何のとめふ。あれ成は楠判官正成、物の哀れを見捨ぬ氣質、子細とつくと聞屆よとの使なり」と云ければ、上「扨は楠殿とや。みづからこそ新田義貞の妻勾當の内侍なり。お情けに新田殿の陣屋へ送りたべかし」と、の給ふ所へ二人の下部立歸り、「ヤアウ長持の錠捻切た。己れ取迯し手ぶりで歸つてこちとが命有物か。こつちへうせふ」と取付所を、源秀二人が首筋ひつ摑み、「手ぶりで歸れば取るゝ命、爰にて取てくれんず」と、蘆間にかつぱと打こめば、五躰をからむ菱かづら、泥にゑふてぞ失に

一俗―一族
新發意―新に佛門に入りし者の稱
雲こり―雲かたまる

み申に及ずと、御前を立けるが、是ぞ最期の合戰と、思ひ定し忠臣の、屍は刃にきゆれ共、義は碎かれぬ楠と、朽せぬ名をこそ三重留めけれ。元來正成智仁勇を兼備し、死を善道に守る良將、今度の合戰味方必定負軍、討死の時極れりと、本國へも立歸らず、直に五月十六日、有あふ手勢五百餘騎、嫡子帶刀正行十一歳、父が馬に押竝べて打ければ、舍弟正季一俗和田の新發意源秀、同新兵衞尉、紀六左衞門恩地の左近、馬物の具を輝かし、心の花も咲かくる、櫻井の宿に著けるが、まだ雲こりて五月雨の、やゝ夕立と降雨は、瀧の落るが如くにて、人馬の足を立かね、生田の森に打入て、暫らく晴間を待居たり。雨に浪よる昆野の池、堤を急ぐ簑笠は、早苗の賤かと見すつれば、下部貳人に長持かゝせ、四十余りの女房の、雨にあらそふ淚の雫、しほれまろびて走りくる。下部共長持どつかと下し、「エヽどう因果の夕立や、目も鼻もあかれぬ。いざ來いあの森で、少晴して行まいか。コレそこな女子殿、長持預けた番めされ」と、二人は森へぞ走りける。女とかふにかきくれて、歎き沈みて立ちけるが、思ひより有顏付にて、長持の棒取て捨、石を拾ひてちやう〳〵〳〵、敲く手先に力なき、女力も念力の、天や見透す鎰の穴、錠前はなれ落ちければ、女「なふ有がたや、サアお出」と、蓋を取る手にすがり付、廿計の上

謀を云々—帷幄は籌也、此句史記高祖本紀にあり

軍法不覺—軍事に不心得

震襟—宸襟

彦七盛長と云ふ武士、尊氏に組するといへ共、某に縁有故、裏切して味方に力を加へんとの内通あれば、味方の勝利目前にて、御邊らが命に氣遣のないことは此宰相が請合。はや〳〵發向有べし」と、嘲り顏して申さるゝ。楠もとより私の怒りに忠を忘れぬ良勇、彌おもてを柔げ、正「仰にては候へ共、其大森彦七が内通にて、味方勝に極らば、猶以て正成向ふ迄も候はず。去ながら詩歌管絃は殿上の御もて遊び、弓馬合戰の道は武門の諫言に任せられ、是非に都を明渡し、敵に一たん勝を與へ、重て畢竟の勝を御覽有こそ、謀を帷幄の内に旋らし、勝事を千里の外に顯はす籌策にて候」と、子房が祕藏孔明が骨髓殘るかたなく奏せらる。宰相大きに色を損じ、清「御邊が云迄もなく、弓馬合戰の道なればこそ、賤しき汝等禁庭へ召るゝ條、有がたしとは存ぜずや。先年御邊千早赤坂の城郭にて、六波羅の大勢を傾け、相摸入道亡しも、全く武略の手柄にあらず、君の聖運天に叶ひ、宗廟社稷の大小の、神祇王法を守護し給ふ故、殊に今度は目に見へたる勝軍。大森が御蔭にて、手柄すべきは此度、はやうつ立」と有ければ、軍法不覺の卿相雲客口口に、「敵の内通有からは、天の與此時。是非〳〵楠はせ向ひ、朝敵尊氏一戰に責亡ぼし、震襟を休め奉れ」と、衆議一決の勅諚は、うたてかりける御運なり。正成も此上はさの

搦手―裏手
蒸す―閉籠めて攻める
惣じて―一體

後備中にさゝへ、挑み戰ひ候間に、敵船はや須磨明石をはせ越候」と、追々注進頻なり。天皇大きに驚かせ給ひ、楠判官正成を、頓て御前に召れける。「扨義貞が注進事急なり、罷向つて合戰を致すべし」との勅諚。楠畏つて奏せしは、「數年の軍に疲れたる御方の小勢、筑紫方は新手の大勢機に乘たるに驅合せ、常の如くの合戰は、御方打負申さんこと決定。先新田殿をも召かへされ、君は比叡山へ臨幸なり、正成も河内に退ぞき、敵を都へおびき入、河じりをさし塞ぎ、籠の鳥の如くにして、兵粮を留敵軍次第に疲れ落ん、所を新田殿は山門より押寄、正成は搦手より責上り、眞中につゝんで一蒸むす程ならば、朝敵一戰に亡びんこと、正成が方寸の內に覺へ候。軍は必一たんの勝負を見ることなかれ、始終の勝こそ肝要にて候へ。たとへ官軍百度戰ひ百たび負る共、正成一人生て有と聞召ば、聖運終にひらかるべし、と思召れ候へ」と、世に賴もしくぞ奏しける。坊門宰相清忠、御簾の前につゝと出で、清「ヤア臆したるか楠、尊氏が多勢に聞おぢして、一戰にも及ず河內へ退ぞき、君を比叡山へ臨幸なし奉れとは、命の惜さに帝位を輕しめ申よな。惣じて新田義貞、勾當の內侍に思ひを殘し、都に心引かるゝ故、軍手ぬるく敵にきほひ付たるに、御邊も河內へ引んとは、古鄉の妻子がゆかしいか。伊豫の國の住人大森

吉野都女楠

作者　近松門左衛門

大權聖者—佛の人となつて現はるゝ事聖德太子を云ふ

東魚—北條高時　西鳥—楠、新田をさす（太平記）

九五—天子の位、九五飛龍在レ天（易經）

落汐—落つと八重の汐路とかく

序　往を尋て來れるをしる、大權聖者の未來記見つんべし。東魚來つて四海を呑み、西鳥來つて東魚をくらひ、海内既に一に歸し、二度九五の御位、後醍醐の帝と重祚ある。逆臣相摸入道が一族亡びて後、足利治部ノ大輔高氏、聊朝家を怨み奉り、東國勢を引率し、矢矧鷺坂竹の下、數か度の軍に勝誇り、己と征夷將軍にをしなつて、帝都まぢかく責入しを、新田左中將義貞、楠判官正成、陳平張良が肺肝より出たるごとき名大將、命を風前の塵にかけ、義を金鐵より堅くして、驅破り驅惱まし、千變萬化の合戰に、さしもの高氏終に打負、筑紫を差て落じほの、八重九重や都の内、萬歳をこそ唱へけれ。時に建武三年五月十五日、新田義貞早馬を立て奏聞ある。「抑朝敵高氏大友少貳を順へ、九州の軍兵五十萬騎、兵船數千艘にて責上り、高氏が弟直義、山陰山陽の大勢陸路をうつて雲霞のごとく、播刕の赤松敵に組し、苔繩の城に立籠り、官軍を遮り候を、義貞備

唐戸―長持

めんない千鳥―目なしどち

水の流れ云々―諺に水の流れと人の行へは知れぬものとあり

にけり。忠三郎先嬉しいと息を吐いだる處に、庄屋年寄先に立ち、代官所の捕手の衆、忠三郎が門口、背門口二手になり、どや〳〵と込入て、筵を捲り簀子を破り、唐戸、米櫃、灰俵、打返してぞ探しける。「土間かけて二十疊にも足らぬ小家、何處に隱れん樣もなし。此家は別條なし、野道を探せ」と云捨て、茶園畑の間々を、駈立てこそ 三重 通りけれ。親孫右衛門跣足にて、「如何じや〳〵忠三郎、善か惡か聞たい」忠三「アヽ能い〳〵氣遣ない。夫婦ながら、何事無ふまんまと落し濟した」父「ハアヽ有難い忝い如來のお庇。直に又道場へ參りて、御開山へ御禮申そふ。なふ嬉しや有難や」と、二人打連れ行處に、「龜屋忠兵衞、槌屋の梅川、只た今捕れた」と、北在所に人だかり、程なく捕人の役人、夫婦を搦め引來る。孫右衛門は氣を失ひ、息も絕ゆるばかりなる、風情を見れば梅川が、夫も我も繩目の科、眼も眩み泣沈む。忠兵衞大聲上げ、「身に罪あれば覺悟の上、殺さるゝは是非もなし。御囘向賴み奉る。親の歎きが目にかゝり、未來のさはりこれ一ッ、面を包んで下され。お情なり」と泣ければ、腰の手拭引絞り、めんない千鳥百千鳥、泣くは梅川河千鳥、水の流れと身の行衞、戀に沈みし浮名のみ、難波に遺し留まりし。

逆様な回向―親が子を弔ふを云ふ

こなたの連合にも詞こそは交さずとも、ちよつと顏でも見たいが、いや〳〵それでは世間が立ぬ。何卒無事な吉左右を」と、涙ながら二足三足、行きては還り、「何んと逢ふても大事あるまいかい」梅「なんの人が知りませふ。逢ふて遣て下さんせ」孫「ア、大坂の義理は缺れまい。何卒して逆樣な回向させなと、念比に賴みまする」と咽返り、振返り〳〵、泣く〳〵別れ行く跡に、夫婦はわつと伏轉び人目も忘れ泣居たる、親子の中こそはかなけれ。忠三郎が女房、雨に濡れて立歸り、「待遠に御座りませふ。此方の人は庄屋殿から直に道場へ參られ、それ故逢ひも致さず。最ふ雨も霽れかゝる、追付今に戻られふ」と、いふ所へ忠三郎、息を切て駈來り、「これは〳〵忠兵衞樣、親仁樣の咄で段々聞て來た。此方の事で此在所は、大坂からいぬが入り、代官殿から詮義ある。釼の中へ晝日中、運の盡たお人じや。此方の振を見付たやら、俄に在所家竝のかたはしから家探し、親仁樣を今探す、是からわしが家の番。親仁樣はいとしや、早ふ脫してくれよとて狂亂になつてじや。鰐の口とは只今、サア〳〵裏道からごせ海道、山へかゝつて退つしやれ」と、いへば夫婦は狼狽ゆる、女房は譯知らず、「私も一所に退きましよか」夫「阿房らしい」と引退て、夫婦に古簑古笠や、雨のあしべも亂るゝ心、死しても忘れぬ此情、深く忍びて出

はかり—限り

親は泣寄—諺に親は泣寄り他人は食ひよりとあり

世間廣う—表沙汰となる

から思ひ過されて、一日も先に往生させて下されと、拜み願ふは今參る如來樣御開山、佛に嘘はつかぬぞ」と、土にどうど平伏て、聲をはかりに泣ければ、梅川も聲を上げ、忠兵衞は障子より手を出し伏拜み、身を揉み歎き沈みしは、道理とこそ聞へけれ。猶も涙を押拭ひ、孫「なふ血の筋は悲しい。中の能い他人より、久離切た親子の親みは世の習ひ。盗みかたりをせふよりも、何故前かたに内證で、斯ふ〳〵した傾城に、斯ふした譯の金が要ると、密に便宜もするならば、親は泣寄り親子なり、殊に母もない忰、隱居の田地を賣ても首繩は付させまい。今では世間廣ふなり、養子の母に難義をかけ、人に損かけ苦勞をかけ、孫右衞門が子で候とて、引込で置れふか、一夜の宿も貸されふか。皆彼奴が心から、其身も狹い苦をしをる。嫁御にまで憂目を見せ、廣い世界を迯隱れ、知音近付親子にも、隱れる樣に身を持なし、碌な死もせぬ樣に親は生付けぬ。憎い奴とは思へども、可愛ふ御座る」とばかりにて、わつと消いり泣沈む、分けたる血筋ぞ哀れなる。涙の隙に巾著より、銀子一枚取出し、孫「これは難波の御坊の御普請の奉加銀。今此處に有合た。嫁御と存じて遣でもなし、只今のお禮の爲。此邊にぶらついては能ふ似たとて捕へるぞ。連合は猶以て。是を路錢に御所海道へかゝつて、一足も早ふ退つしやれ。

つれ〴〵—つくづく
胸づばらしく—胸つまるやうにて

顔をつれ〴〵ながむれば、梅川最どむねづばらしく「ァ、我等は旅の者。私が舅の親仁様、恰當お前の年配で、恰好も其儘。外へする奉公とはさら〴〵以て思はれず。お年寄た舅御の臥悩みの抱きかゝへ、給仕へは嫁の役、御用に立ば私も何程か嬉しいもの。連合は猶親御の事、飛立ッ様にも有筈、此紙と此紙と換て私が申シ受け、連合の肌に著させ、父御に似たる親仁様の、形身にさせたふ御座んす」と、塵紙袖に押包む、涙ぞ色に出にける。詞のはづれに孫右衛門、熟々と推量し、さすが恩愛捨難く、老の涙にくれけるが、「ム、和女の舅に此爺が似たといふての孝行か。嬉い中に腹が立つ。年長た忰を、子細有て久離切り、大坂へ養子に遣はせしに、根性に魔がさいて、大分人の金を過り、揚句に土地を走つて、此在所まで詮義の最中、誰故なれば嫁御故。近來愚痴な事なれども、世の譬にいふ通り、盗みする子は憎からで、縄かくる人が恨めしいとは此事よ。久離切た親子なれば、善いに付ヶ、悪いに付ヶ、構はぬ事とはいひながら、大坂へ養子に往て、利發で器用で身を持て、身代も仕上た彼の様な子を勘當した、孫右衛門はたはけ者阿房者といはれても、其嬉しさは如何あらふ。今にも探し出され、縄かゝつて引るゝ時、能い時に勘當して、孫右衛門は出來した、仕合じやと褒られても、其悲しさは如何あらふ。今

の綟の肩衣が、孫右衛門様か。ほんに目元が似たはいの」忠「それ程能ふ似た親と子の、詞をも交されぬ、是も親の御罰ぞや。お年も寄る、足本も弱つた、今生のお暇」と、手を合すれば、梅川は見始の見終め、「私は嫁で御座んする。夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命過て後、未來でお目にかゝりましよ」と、口の中に獨言、諸共に手を合せ、咽び入てぞ歎きける。孫右衛門は老足の休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の水氷、滑るを留る高足駄、鼻緒は斷れて横様に、泥田へがばと輾込んだり。「ハア悲しや」と、忠兵衛もがけども騒け共、身を顧て出もやらず。梅川周章走り出、抱起して裾絞り、「何處も痛みはしませぬか。お年寄のおいとしや。お足も濯ぎ、鼻緒もすげて上ませふ。少しも御遠慮なさるゝな」と、腰膝撫て労はれば、孫右衛門起上り、「誰方やら有難い。お蔭で怪我も致さぬ。若い上臈のお優しい。年寄と思召し、嫁子もならぬ介抱。寺道場へ參つても、これ此處の一心が、邪見では參らぬも同然、此方がほんの後生願ひ、最う手を洗ふて下され。幸ひ爰に藁も有、鼻緒は私がすげましよ」と、懐中の塵紙を取出せば、梅川は、「好い紙が御座んする。紙捻撚つて上ませふ」と、延引裂しその手元、孫右衛門不思議そふに、「先此方は爰等に見知らぬお人じやが、何方なれば此様に念比にして下さる」と、

剃下—三日月形に後方へ剃り下げる、絲鬢に同じ
大臣—大盡

といふ者は、百姓に稀な男氣を持たもの、頼んで一夜逗留し、死ぬるとも此處、古郷の土に身を成して、生の母の墓所、一所に埋れ、嫁姑の未來の對面させたい」と、目もうろ〳〵となりければ、梅「それは嬉う御座んせふ。去ながら、私が母は京の六條、定し此間詮義に人が往つらん。日比が眩暈持なれば、何ふならんした事やら、ま一度京の母様にも、一目逢ふて死度いぞ」忠「ヲヽ道理共。我レも和女のお袋に、聟じやといふて逢ひ度い」と、人目なければ抱合ひ、涙の雨の横時雨、袖に餘りて窓を打つ。「ハアヽ降て來たそふな」と西受けの竹櫺子、反故障子を細目に明て、見やる野風の畠道、後しぶきに降る雨は、傾げて急ぐ阿彌陀笠、道場參り打連れしは、あれ皆在所の知た衆、先なは樽井端の助三郎、是も在所の口利、彼のお婆は荷持瘤の傳が婆、アヽ甚い茶喫じやがの。其處へ見へる剃下は、昔は大貧乏、年貢に詰つて娘を京の島原へ賣、大臣に請出され、奥様に供り、聟の庇で、田も五町藏も二ヶ所の分限じや。同じ傾城請る身が、我レは和女のお袋に、憂目をかける口惜い。彼の爺は弦掛の藤次兵衛、八十八で一升の飯残さぬ、今年は丁度九十五。其處へ來た坊主は針立の道庵、彼奴が鍼で母者人を立て殺した。思へば母の敵じや」と、憂につけての恨み言、「あれ〳〵彼れへ見へるが親仁樣」梅「彼

おか樣―内儀
久離を切―緣切る事
お讃談―お說敎
いさ汁―いさ知らずにかく

座る」といふ。忠「ム丶忠三殿におか樣はなかつたが、此方は誰でばし御座るぞ」女「ア丶私も三年あとに是の内へ嫁入して、前かたの知る人は、どれが何ふも知りませぬ。ヤアほんに皆樣は若し大坂でば御座らぬか。これの親方孫右衛門樣の繼子忠兵衛殿と申すが、大坂へ養子に往て、傾城買ふて他人の金を盜み、其傾城連れて走られたといふて、代官殿より御詮義。孫右衛門樣は疾ふに親子の久離を切り、構はぬとはいひながら、眞實の親子なれば、年寄ての氣苦勞。これのはお馴染の事なれば、若し此邊り狼狽へて、見付られてはいとしい事と、内外へ氣を付らるゝ。庄屋殿から呼に來る、寄會の、印判の、節季師走に此在所は、傾城事で沸返る。なふうたてのお傾城殿や」と遠慮もなくぞ語りける。忠兵衛はつと思ひ、「如何にも〳〵、大坂でも其取沙汰。我等は夫婦連で年籠に參宮の心ざし、懷しさに寄ました。ちよつと呼ふで來て下され、立ながら逢ふて歸り度い。大坂者といはずに賴みます」といひければ、女「扨はいかふお急ぎか、往て呼ふで來ませふ。さりながら、鎌田村のお道場へ、京のお寺のお下り每日のお讃談、先から直にお道場へ參られたも、いさ汁の下さし燻て下され」と、襷がけして走行く。跡の門口梅川が、はたと鎖て鎰かけ、「是はほんの敵の中、大事ないか」といひければ、忠「忠三郎

葛城云々—一言主神容貌醜き故晝は隠れ夜出て条の岩橋を渡す（閑田耕筆）

飴賣云々—甘言を以て賓を吐かせ

鐘も云々—金にかけて旅費乏しくなる事をいふ

諸勸進—物もらひ

泣くか、笑ふか、富田林の群鴉、切て一夜の心なく、咎むる聲の高間山、彼の葛城の神ならで、晝の通路つゝましく、身を忍ぶ道戀の道、我から狹き浮世の道、竹の内峠袖濡れて、岩屋越とて石道や、野越へ山暮れ里々越へて、行は戀ゆへ 三重 澄る世の掟正しく、畿内近國に追手かゝり、中にも大和は生國とて、十七軒の飛脚問屋、或は巡禮古手買、節季候に化て家々を覗きの機關、飴賣と、小共に飴を甜らせて、口を挘るや罠の鳥、網代の魚の如くにて、遁れがたなき命なり。無慙やな忠兵衞、我さへ浮世忍ぶ身に、梅川が風俗の、人の目立つを包みかね、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日餘りに四十兩、遣ひ果して二分殘る、鐘も霞むや初瀬山、餘所に見捨て親里の、新口村に著けるが、「是お梅此處は我ガ生れた在所、二十歳まで育つて覺えしが、師走の果に此如く、諸勸進しよ商人、春とても無い事。あれ彼處にも立ッて居る。野外れにも二三人、胸騷ぎもして來た。四五町往けば、ほんの親孫右衞門の家なれ共、不通といひ繼母なり。此藁葺は忠三郎とて、下作あてた小百姓、腹の下から馴染、頼母しい男。先爰へ」と打連れ、忠「忠三郎殿宿にか、久しうお目にかゝらぬ」と、つゝと入ば、嬶と思しく、「誰で御座るぞ。これのは今朝から庄屋殿へ詰られ、今は留守で御

槌屋—梅川の抱主
木瓜—忠兵衛の紋所
松皮—松皮菱といふ紋所
朝込—朝大門の開く時期
小笹原—謠に傷持つ足に笹原とあるをとれり

し提灯の、中にはかなや槌屋内、此木瓜に打添て、私が紋の松皮の、松の千歳を祈りしに、定めぬ契り提灯の、消ゆる命の夕には、此紋付て我中の、經帷子と觀念し、冥途の道を此樣に、手を引ふぞや引れふと、又取交し泣く涙、袖の氷と閉合り。誰が關据ぬ道なれど、問ひ〳〵行けばはか行ず。今朝の姿を其儘に、素足に雪駄しみづけば、空に霙の一曇、霰交りに吹く木の葉、ひらり平野に行懸り、「爰は知る人多ければ、此方へ〳〵」と袖覆ひ、里の裏道畔道を、すぢりもぢりて藤井寺、あれ〳〵あれを見や。何處の田舍も戀の世や、背門に菜を摘む十七八が、歌「門に立たは忍びの夫かゑ、野風身の毒、此方入らしやんせゑ」餘所の睦言妬しく、それ覺えてか何時の事、彼の初雪の朝込に、寢衣ながらに送られし、大門口の薄雪も、今降る雪もかはらねど、變り果たる身の行へ。我故染ていとほしや、元の白地を淺黄より、戀は譽田の八幡に、起請誓紙の筆の罰、和女を除てと泣く涙、歌暫し人目の、ャ許しはあれど、申是なふ去りとては、私が身とても儘にはと、末は涙に果しなく、延紙の三ッ折絞るにも、裙に窶るゝ小笹原、霜に枯野の薄原、茫々さら〳〵颯と鳴つたは、我を追手の尋ぬるよと、覆重り影隱し、振さけ見れば人にはあらで、妻戀鳥の羽音に怖る身と成は、如何なる罪の報ひぞと、口說き歎きて行く姿、

翠帳紅閨—女の美しき閨、此歌松の落葉二卷にあり
四つ門—四つ時に廓の大門を鎖す
翻れ口—翻れると地名とにかく
炭の埋火云々—炭火が消えて白くなるを霜に寄せたり
一蓮托生—相合籠に喩ふ
比翼煙管—雁首一つ吸口二つある煙管
値の露—露は花代にて爰は駕籠賃にかけたり
庚申—叶ひにかく

謡クセ「翠帳紅閨に枕並べし閨の内、馴し歌 襖の終夜も、四ッ門の跡夢もなし。さるにても我夫の、秋より先に必ずと、仇し情の世を頼み、人を頼みのヲ綱断れて、夜半の中戸も引替て、人目の關にせかれ行く、昨日の儘の鬢付や、髪の髷目のほつれたを、髷て進じよと櫛を取、手さへ涙に凍ゑつき、冷たる足を太股に、相やひ炬燵相輿の、駕籠の息杖生てまだ、續く命が不思議ぞと、二人が涙翻れ口、明ぬ間は暫しとて、駕籠の簾をあげてさへ、膝組交す駕籠の内 狭き局のありし夜の、逢ふ瀬に似たは似たれ共、炭の埋火何時しかに、朝の霜と置かへて、夜半の嵐に呼れては、應ふる野邊の禿松、過し其の夜が思はれて、いとゞ涙の種ならん。忠「何ぐど〳〵と思ふぞや。これぞ一蓮托生」と、慰めつ又慰みに、比翼煙管の薄烟、霧も絶へ〴〵晴れ渡り、麥の葉生に風荒れて、朝出の賤や火を貰ふ、野守が見る目恥しと、駕籠立させて暇を遣る、値の露の命さへ、惜からぬ身は惜からず。猶も惜まぬ徒歩素跣、惜むは名殘計ぞや。終に著馴れぬ綿帽子、私が顔より此方様の、肌にこれをと風防ぐ、びらり帽子の紫や、色で逢しははや昔、今日は眞身の女夫合、頼まば願ひ庚申、庚申堂よと伏拜み、振返り見る勝曼の、愛染様に愛敬を、祈る芝居の子共衆や、道頓堀のいろ〳〵や、馴れし廓のそれぞとは、紋で覺え

高―つまり

ちやつと措いて―屛風の上に出た頭が獄門に似たれば云ふ

千日―刑場

砂場―地名と金を砂にするとかく

大和路―山となれにかく

本望、今とても易い事。分別据へて下んせなふ」忠「ヤレ命生やふと思ふて此大事が成物か。生らるゝだけ添はるゝだけ、高は死ぬると覺悟しや」梅「アヽそふじや。生らるゝだけ此世で添はふ。今にも人が來る爲、爰へ隱れて御座んせ」と、屛風の陰に押入レ、「アヽ私が大事の守を、内の簞笥に置て來た。是が欲しい」といひければ、忠「ハテ斯る惡事を仕出して、いかな守の力にも、此科が遁れふか。兎角死に身と合點して、我は和女の回向せん。和女は此忠兵衛が回向を頼む」と、屛風の上顏を出せば、梅「ハアヽ悲しや忌々しい、ちやつと措て下さんせ。嫌な物に能ふ似た」と、屛風にひしと抱付、咽返りてぞ歎きける、越後主從立歸り、「サア何處もかも埒明た。お出の勝手近ければ、西口へ札が廻つた」と、いへども夫婦はわなく\と、「さらばく\」も慄聲、主人「おさぶそふなが酒はいの」二人「酒も喉を通りませぬ」主人「目出度いと申そふか、お名殘惜いと申そふか、千日いふても盡ぬ事」二人「其千日が迷惑」と、木綿付鳥に別れ行く、榮耀榮華も人の金、果は砂場を打過て、跡は野となれ大和路や、足に任せて 三重

忠兵衛
梅川相合かご　下之卷

と、金懐中し出ければ、五「私等もいざ歸りましよ。川樣目出度ふ御座んす」と、皆宿へぞ歸りける。忠兵衞氣をせいて、「花車は何故遲いぞ、五兵衞往てせつてくれ」と立ッに立ッてせきけれ共、五「イヤ身請の衆は親方が濟でから、宿老殿で判を消し、月行事から札取らねば、大門が出られませぬ。ま少と隙が入ッませふ」忠「エヽ其處邊を早ふこりや賴む」と、又一兩投出す。五「おつとまかせ」と足輕く、走る三里の灸よりも、小判の利ぞ應へける。忠「サア〳〵此間に身拵へ、べた〳〵した取姿、帶もきり〳〵と仕直しや」と、滅多に急けば、梅「何ぞいの、一代の外聞、傍輩衆へも盃事、暇乞も譯能ふして、寬りと出して下さんせ」と、何事なく勇む顏、男はわつと泣出し、「いとしや何も知らずか。今の小判は堂島のお屋敷の急用金、此金を散しては身の大事は知れた事。隨分堪へて見つれ共、友女郎の眞中で、可愛ひ男が恥辱を取ッ、和女の心の無念さを晴したいと思ふより、ふつと金に手をかけて、最ふ引れぬは男の役、斯ふなる因果と思ふてたも。八右衞門が面相、直に母に吐す顏、十八軒の仲間から、詮義に來るは今の事。地獄の上の一足飛、飛んでたもや」と計にて、縋付て泣きければ、梅川「はあ」と慄出し、聲も涙にわな〳〵と、「それ見さんせ。常々いひしは爰の事。何故に命が惜いぞ、二人死ぬれば

月行事―樓主の惣代にて每月交替す
おつとまかせ―よしきた
滅多―滅法
地獄の上―急難を逃れる諺

邯鄲―盧生が邯鄲の旅舍にて五十年榮花の夢を見た事

いはれぬ辭義―要らぬ辭儀

淺ましい氣にならんした。斯ふは誰が仕た私が仕た、皆梅川が故なれば、忝いやらいとしいやら、心を推して下さんせ」と、口說き立〳〵、小判の上にはら〳〵と、涙は井出の山吹に、露置き添ふる如くなり。忠兵衞氣も有頂天、前後括らぬ間に合鎚、敷金の事思ひ出し、「はて喧しい。此忠兵衞をそれ程痴氣と思やるか。此金は氣遣ない、八右衞門も知て居る。養子に來る時、大和から敷金に持て來て、餘所へ預け置た金、身請の爲に取戾した。花車此處へ」と呼寄せ、「先へ手付に五十兩、今百十兩、合せて百六十兩、是川が身の代、是又四十五兩、いつぞやしめた帳面、買懸りの借錢、五兩は遣手、九月からの揚錢、萬事十五兩程と覺えたが、算用が喧しい、廿兩で帳消や。此十兩は、此方へ御祝義やら骨折分、林も玉も、五兵衞も一兩宛じや。來い〳〵」と、金銀降らす邯鄲の、夢の間の榮耀なり。忠「サア今の間に埓明、今宵の中に出る樣に、賴む〳〵」といひければ、主人俄に勇みをなし、「無い程は無いも金、有段には有物かは。氣を死そふ事でない。梅川樣嬉しう思はんしよ。ヤ大事の金を持て往く、林も玉も供しや」と、引連れ走り出にけり。八右衞門は濟ぬ顏、「誠とは思はね共、只さへ囉ふ此小判、返す物をいはれぬ辭義。五十兩慥に請取た。手形返す」と投出し、「梅川殿能い男持ってお仕合。妓樣達これに」

始終―四十にかく
ぎしみ―軋り
籠櫃―牢屋
濱に立―惣嫁になる事

處へ届けて仕廻へ。エヽ性根の据らぬ氣違者」と、割つ碎いつ叱れ共、忠「いや〳〵仁義立措てくれ。此金を餘所のとは、此忠兵衛が三百兩持まいものか。女郎衆の前といひ、身躰を見立ヶられ、猶返さねば一分立たぬ」と、包解いて、十、廿、三十、始終詰らぬ五十兩、くる〳〵と引包み、「これ龜屋忠兵衛が人に損をかけぬ證據、サア請取れ」と投付る、八「男の面へ何とする。忝いと禮いふて、返し直せ」と投戻す。忠「をのれに何んの禮云はふ」と、又投付つ投返し、腕捲りしてぎしみ合ふ。梅川涙に暮れながら、梯子駈下り、「なふすつきり私が聞ました。皆島八様のがお道理じや。これ手を合せる、梅川に許して下さんせ」と、聲を上て泣けるが、梅「情なや忠兵衛様、何故其様に逆上らんす。そもや廓へ來る人の、假へ持丸長者でも、金に詰るは有ならひ、此處の恥は恥ならず。何を當に人の金、封を切て撒散し、詮義に逢ふて籠櫃の繩かゝるのと云ふ恥と、此恥と換らるか。恥かく計か梅川は、何となれといふ事ぞ。とつくと心を落し付、八様に詫言し、金を束ねて其主へ、早ふ届けて下さんせ。私を人手に遣ともない、それは此身も同じ事。身一ッ捨ると思ふたら、皆胸に籠て居る。年とても先あ二年ヶ下。宮島へも身を仕切り、大坂の濱に立ても、此方様一人は養ふて、男に憂目かけまい物。氣を靜めて下さんせ。

棚下し―善惡殘らず竝べ立る
藁を焚き―煽動する
てんがう―いたづら
屆かぬか―不行屆か

川樣、いとしぼいは、川樣お一人に留めた」と、下女、料理人、うら若き禿も袖を絞りけり。忠兵衛元來惡いむし、押へかねてずんと出、八右衛門が膝にむんずと居懸り、「是丹波屋の八右衛門殿、常々の口程あつて、ヲヽ男じや、見事じや。三人寄れば公界。忠兵衛が身躰の棚下しゝてくれる、忝ない。コリヤ此水入も男同士、母の心を安める爲、請取てくれるかと、謎をかけて渡したを、此忠兵衛が五十兩損かけふかと氣遣さに、廓三界披露して、男の一分捨さする。但又島屋の客に賄賂取ッて、梅川に藁を焚き、彼方へ遣ふといふ事かおいてくれ。氣遣ひすな五十兩や百兩、友達に損懸る忠兵衛ではごあらぬ。アヽ八右衛門樣、八右衛門奴、サア金渡す、手形戻せ」と、金取出し、包を解んとする處を、八右衛門押へて、「こりや待て、やい忠兵衛、餘程の痴氣を盡せ。其心を知たるゆへ、異見をしても聞クまじと、廓の衆を頼んで、此方から除て曬ふたらば、根性も取直し、人間にもならふかと、男づくの懇だけ。五十兩が惜ければ、母御の前でいふはいやい。てんがうな手形を書き、無筆の母御を宥めしが、是でも八右衛門が屆かぬか。其金がさも三百兩、手金の有ふ樣もなし、定て何處ぞの仕切金、其金に疵を付け、八右衛門仕た樣に鬢水入では濟まいぞ。但代りに首遣るか。のぼり詰る其手間で、屆ける

公界―人中
潛上―高慢
しやうげ鳥―鳥名にあらず何とせんとがつかりすると也
肩のわるい―運が悪い

忠兵衛、「傾城は公界者、五十兩の目腐銀取替た潛上、若い者に恥かゝせ、川が聞たら死たかろ。懐中の三百兩、五十兩引抜て、頬へ打付け、存分云ひ、我身の一分、川が面目雪いでやらふ。アヽされ共是は武士の金、殊に急用、爰が大事の堪忍」と、手を懐中へ幾度か、とやせんかくやしやうげ鳥、鶍の嘴の齟齬ふ、心を知らぬぞ是非もなき。八右衛門水入取上、八「これも買はゞ十八文、如何に相場が安いとて、五十兩を二分五厘替へ、神武以來無い事。友達さへ是なれば、他人をかたるは御推量、此次は段々に巾著切から家尻切、果は首切、如何にしても笑止な。あの如くに亂れては、主親の勘當も、釋迦、達磨の異見でも、聖德太子が直に教化なされても、いかな〳〵直らぬ。廓で此沙汰ぱつとして、寄せつけぬ樣に賴みます。梅川殿へも吹込んで、此方から挨拶切り、島屋の客にさらりつと請させて仕廻度い。皆彼の流が心中か、女郎の衣裳を盜むか、碌な事は出來さず、片小鬢剃こぼされ、大門口に暴され、友達の一分捨さする、人でなしとはあれが事。可愛くば寄せて下さるな」と、語るを聞けば梅川も、悲しいといとしいと、身の墓なさと搔交て、胸引裂ける忍び泣き、梅「アヽ刃物がな、鋏でも、舌を切ても死たい」と、悶へ伏たる苦みを、下には各々推量して、鼓「ひよんな心にならんした。肩の悪い梅

爲ずく云―原本に「爲すくミ」

小尻が詰る―末が切迫する

「斯ふ云へば忠兵衛を憎み猜むやうなれど、爲ずく云ぞ。彼の男が身の成果がかはいひ。尤も千兩二千兩、人の金をことづかり、暫しの宿を貸すけれ共、手金とては家屋敷、家財かけて十五貫目、廿貫目に足らぬ身躰。大和の親が長者でも、龜屋へ養子に越すからは、高の知れた百姓。斯ふいふ此八右衛門も若い者の習ひ、一年に五百目一貫目、揚屋の座敷も踏ねばならぬ。身にも應ぜぬ忠兵衛が梅川にのぼり詰め、島屋の客と張合、五月より此方大方は揚詰、身請も此比極り、百六十兩の内、五十兩手付渡したげな。それゆへに方々の屆け金が不埒になり、當る處が嘘八百、いかふ小尻が詰つて來た。今でも梅川が、サア出るに極まらば、借錢も有ふし、泣ても二百五十兩、天から降ふか、地から涌ふか、盗みせふより外はない。彼の手付の五十兩、何處から出たと思召す。身が方へつた金は知てなり、渡せ〳〵とせつかれて、忠兵衛が戻した小判お目にかけふか」と、一卜包取出し、「コレ斯ふ見た處は五十兩、さらば正躰顯はして、獄門の種御覽あれ」と、包を切て切解けば、燒物の鬢水入。主人も、一座の女郎も、「はあゝ」とばかりに怖氣立ち、身を縮むれば二階には、顔を疊に摺付ヶて、聲をかくして泣居たり。短氣は損氣の

花車—女主人の淸をさす

入らずと—入らずとも

耳打—密に知らす

心の氷—我金ならねば云ふ

酒もしらけて醒にけり。中の島の八右衛門、九軒の方より淨瑠璃聞付ケ、「ヤア皆聞知た妓の聲々。花車内にか」とつゝと入、柄差箒逆手に取り、二階の下から板敷をぐはた／＼と突鳴し、八「女郎衆あんまりじや、此處にも人が聞ィて居る。如何成男でそれほどに戀しいぞ。男がなふて寂しくは、お氣には入らずと、是にも一人貸てやろか」と喚きける梅川はそれ共知らず、「デモ逢たいが定じやもの、憎いなら來て叩かんせ。清様、下なは誰さんじや」清「イヤ大事御座んせぬ。中の島の八様」と、聞より梅川はつとして、「是々彼の様には逢ともない、皆様下て下さんせ、私が二階に居る事を、必／＼いふまいぞ」妓「其處らは粋じや」と打頷き、皆々座敷に出ければ、八「ヤア千代歳様、鳴渡瀬様、歷々の御參會。梅川殿は宵の口、島屋を嘩ふて往なれたげな。忠兵衛も未だ見へそもない。花車此處へ寄つしやれ。女郎衆も禿共も、忠兵衛が事に付き、耳打て置く事が有。此處へ／＼」とひそ／＼すれば、妓「ハアヽ何事やら氣遣ひな」と、いへ共二階の梅川に、悪い噂も聞せんかと、皆氣を配る折節に、忠兵衛は世を忍ぶ、心の氷三百兩、身も懐も冷る夜に、越後屋に走著き、内を覗けば八右衛門、横座をしめて我評判。はつと驚き立聞す。二階には梅川が、心を澄す壁に耳、漏るゝぞ仇の始なる。斯と知らねば八右衛門、

格子女郎―京都の天神に同じ（異本洞房語園）

傾城に誠云々―此句遊君三世相に出でたり

しよざい―所在なき

れては、我ガ身一ツは死でも退ふ。天神太夫の身でもなし、さもしい金に氣が觸れた、見世女郎の淺ましさ、と世間の唱へ、傍輩の掃部殿を始めとして、格子女郎衆の手前も有、忠様と本意を遂げ、とや斯ふ人に謠はれし、面が脱ぎ度ふ御座んす」と、泣しみづきて語るにぞ。一座の女郎身の上に、思ひ合せて尤と、連れて涙を流せしが、「アヽいかふ氣がめいる。わつさりと淨瑠璃にせまいか。禿共ちよつと往て、竹本頼母様借て來い」梅「いや先に鬢付ヶ買ふとて聞ましたが、芝居から直に越後町の扇屋へ往んしたげな。私は頼母様の弟子なれば、能ふ似た處を聞かんせ。サア三味線」と夕霧の、昔を今に引かけて、文句「傾城に誠なしと世の人の申せ共、それは皆僻事、譯知らずの詞ぞや。誠も嘘ももと一つ。假へば命擲ち、如何に誠を盡しても、男の方より便なく、遠ざかる其時は、心矢竹に思ひても、斯した身なれば儘ならず、自ら思はぬ花の根引に逢ひ、掛し誓ひも嘘となり、又始より僞りの、勤計に逢ふ人も、絶ず重ぬる色衣、終の寄邊となる時は、初の嘘も皆誠。とかく唯戀路には、僞りもなく誠もなし、緣の有のが誠ぞや。逢ふ事かなはぬ男をば、思ひ〳〵て思ひが積り、思ひざめにもさむるもの。辛やしよざいと恨むらん。恨まば恨め、いとしいといふ此病、勤する身の持病か」と、戀に浮世を投首の、

橋か架けたや―取持つて見たや
越後―揚屋の名にて主婦をきよと云ふ
かき本―缺と杮本とかけて、ほの〴〵と云々の歌を寄す
うてず云々―野呂間の客に責めらる
貸す―見てもらひに
豊川、高瀨―妓の名
ろませ云々―拳の懸聲にて六、七、十、三、
差す腕―棹す櫂にかく
はま云々―八、三九、五、六、四(巣林子評釋)
一つは鳴渡瀨―妓名と一つは酒呑めるとかく

ん、今日は島屋で、彼の田舍のうてずにせびらかされて頭が痛い。忠樣は未だ見へぬかゑ。せめてのゆかりに、此方樣の顏が見たさに貸に來た」と、入るさの門の障子戶も、明る晨の形見かや。遣「さつても能ふ御座んした。あれ二階にも、女郎樣達が大勢遊びに御座んして、お客待間の酒事、拳をして御座んする。此方さんもお氣晴しに、一拳して酒一ッ。傍輩樣も御座んす」と、上る二階の隙間風、男交ずの火鉢酒、拳の手品の手も撓く、ろませ、さい、とうらい、さんな、同じ事とよ豊川に、戀の高瀨が差す腕には、はま、さんきう、ごう、りう、すむゐ、「それ〳〵何んと。地躰一ッは鳴渡瀨樣」高「あれ梅川樣の御座んした。なふ能い處へ來て下んした。此方樣拳の上手、宵から千代歳樣に仕付られて無念な、敵取て下んせ。銚子直しや」といひければ、梅「ア、うたての酒や、拳をする氣もあらばこそ。此梅川が今の身を、少しは泣ひて囃ひたや。田舍の客が身請の事、今日も今日とて島屋にて、理窟を詰て强請事、腹が立つやら憎いやら、とはいひながら是は先、忠兵衞樣は後手といひ、宿の勢力一ッにて、手付も渡し、約束の日ぎり切れるも言延し、今日迄は繫りしが、忠樣も世帶持、養子の母御の手前といひ、屋敷方歷歷の町方を引受て、東路かけての大事の商賣。如何成事が邪魔になり、田舍の客に請ら

一度は思案云々―一度は思慮すれども二度は無分別になつて遂に冥途に行くと也

浮氣鴉―嫖客をさす

紅葉して―青が炭火で紅くなる

位はよしや云々―松の太夫や梅の天神とは位が劣つても並べて見ると哀深しと也

見世女郎―天神の次にて價廿二匁（澪標）

が一大事、戻りは少と遲ふても、駕籠で往けば氣遣ない。夜食仕廻ふて早や寢よ」と、金懷中に羽織の紐、結ぶ霜夜の門の口、出馴れし足の癖になり、心は北へ行く行くと思ひながらも身は南、西横堀を浮々と、氣に染付し妓が事、米屋町迄歩み來て、忠「ヤア是は堂島のお屋敷へ行筈、狐が化すか、南無三寶」と引返せしが、「ムヽ我知らず此處迄來たは、梅川が用有て氏神のお誘ひ、ちよつと寄て顏見てから」と、立歸つては、「いや大事、此金を持ては遣ひたからふ。措てくれうか、往て退ふか。往もせい」と、一度は思案二度は不思案、三度飛脚、戻れば合せて六道の、冥途の飛脚と 三重

中之巻

歌 ゑい〳〵鴉がな鴉がな、浮氣鴉が月夜も闇も、首尾をもとめて逢ふ〳〵とさ。青編笠の紅葉して、炭火ほのめく夕べ迄、思ひ〳〵の戀風や、戀と哀れは種一つ、梅薫しく松高き、位はよしや引締て、哀れ深きは見世女郎、さらさ禿が知邊して、橋が架たや佐渡屋町、越後は女主人とて、立寄る妓も氣兼せず。底意殘さぬ戀の淵、身の憂きしほで梅川も、此處を思ひの定宿と、餘所の勤もかきの本、島屋をちよつと島隱れ、梅「申シ淸さ

佛の顏云々—諺に佛の顏も三度撫れば怒るとあるに之は親を三度欺した

仕合馬—うましにかく

うちがひ—帶袋

一筆ちよつと書せましや。物は念じや」といひければ、忠「ヲ、それ〳〵、母は無筆の一文字も讀れね共、しるし計に一筆」と、硯出して眴せすれば、「易い事〳〵。忠兵衛文言是見や」と、筆に任せて書散す、「一ッ金子五十兩、請取申さず候。右約束の通、晩には廓で飲かけ、我等はたいこ實正明白なり。何時成ッ共騷の節、屹度參上申スべく候。仍て紋日の爲、鬢水入件の如し」と、阿房のたら〴〵書散し、八「さらばお暇申そふ」と、表へ出れば妙閑は、「書た物こそ物云へ」と、又だまされし正直の、親の心や佛の顏も、三度飛脚の江戸の左右、待夜も漸更にけり。おもてに鈴の音、「こりや〳〵駄荷が著たぞ。中戸〳〵」と聲高に、手ん手に葛籠擔込む。忠兵衛親子機嫌能く、「サア拍子が直つた、來年も仕合馬、馬子衆に酒よ煙草よ」と、硯控へつ帳付て、家內どんどと賑へば、手代の伊兵衛けうとげに、「なふ堂島のお屋敷から、金三百兩九日に來る筈、前狀が上つた、何とて遲い、とお侍の甚內殿が睨付て歸られた。何んと〳〵」といひければ、宰領が打がひより、「其三百兩合點。これ急々の御用、今夜中にお屆け」方々の爲替金高八百兩ぐわらり〳〵と取出す。忠兵衛いよ〳〵勢ひよく、「白銀は內庫へ、金子は戸棚へ。母者人私は直に此小判お屋敷へ持參する。人の金を預れば、表も氣を付ヶ早ふ締め、火の用心

きり〳〵―ぐづ〳〵せず
神おろし―冥助を祈る
鬢水入―髮をとくに用ふる眞鍮の水入にて塗物製もあり
駿河包―駿河半紙
五十杯―五十兩うまく欺した

とつくと手を置て、能ふ思案して見や。遅ふ届けば飛脚は入らぬ、何が其方の商賣ぞ。サア今渡して上ましや」と、いへ共渡す金はなし。八右衛門も底意は聞、八「是お袋、恥しながら八右衛門が、五十兩や七十兩、急に入事もなし。是より直に長堀迄參れば、明日でも」と立んとすれば、母「いや〳〵大事のお金預れば氣遣で夜も寝られず。なふ忠兵衛、きり〳〵渡しや」とせり立られ、忠「あつ」といふより納戸に入り、迂路〳〵しても金はなし。入れもせぬ戸棚の錠、明る顔してぴんといふ、鎰の手前も恥しく、胸に願立て神おろし、狂氣の如く氣を揉しが、「ヤレ有難や、此櫛箱に燒物の鬢水入、これ氏神」と三度戴き、紙押廣げくる〳〵と、駿河包に手ばしこく金五十兩墨黒に、似せも似せたり五十杯、母には一杯參らせし、其悪智惠ぞ勿躰なき。忠「是々八右衛門殿、今渡さいでも濟む金ながら、母の心を安める爲、男を立る其方と見て、詮方なふ渡す金、さつぱりと請取て、母の心を安めてたも。包は解に及ぶまじ。いらふて見ても五十兩、如何してたもる」と差出す。八右門衛手に取て、「ハテ誰ぞと思ふ、丹波屋の八右衛門、請取に子細はない。是お袋、江戸爲替慥に請取ました。不動參りに待まする」と立處を、妙閑誠と思ひてや、「是忠兵衛、仕切爲替の作法は、金と手形と引替へ。若し御持參なきならば、

其内—其内逢はう

留しも、八右衛門と云男を友達に持し故と、心の内では朝晩に、北に向ひて拜むぞや。さりながら、如何に念比なればとて、先に斷り立置て遣へば借るも同然、跡では如何と思ふ内、其方からは催促。噓に噓が重つて、初手の眞實も虛言となれば、今何をいふても誠には思はれじ。され共遲ふて四五日中、外の金も上る筈、如何樣共仕送つて、一錢一字損かけまじ。此忠兵衛を人と思へば腹も立つ、犬の命を助けたと思ふて了簡頼入。男是を思へば世の中に、處刑者の絕ぬも道理。此上は忠兵衛も盜みせふより外はなし。の口から斯樣の事いはれふものか推量あれ。咽より劍を吐くとても、是程には有まじ」と、絞り泣にぞ泣居たる。鬼とも組ん八右衛門、ほろりと涙ぐみ、「いひ憎い事能ふいふた。丹波屋の八右衛門、男じや了簡して待てやる。首尾能ふせよ」といひければ、忠兵衛土に額を付け、「忝い〱。父二人、母三人、親は五人持たれ共、其恩よりは八右衛門、貴殿の御恩忘れぬ」と、とかふは涙計なり。八「左樣思へば滿足、サア人も見る其内」と、立別れんとせし處に、內より母の聲として、「ヤア八右衛門樣か、忠兵衛是へ通しましや」と、聲かけられて詮方なく、もぢ〱連立チ入にけり。母は律義一遍に、「先程はお使又御自身のお出、御尤〱。是彼方の金の屆いたは十日も以前、何として延引ぞ。胸に

金ずくめ云々―金力で忠兵衛と爭ふ

大事の家職。十日に餘れど埒明ず、今日も使を遣たれば、手代奴がかさ高な返事した。よもや他へは左樣有まい。八右衛門をなぶるか。北濱、靱、中の島、天滿の市の側迄、親仁共いはるゝ八右衛門、なぶつて能くばなぶられふが、金は今日請取。但中間へこたへふか。先お袋に逢ふ」と、内へ入ルを引留め、忠「さりとては誤つた。是手を合すたつた一言聞てたも。拜む〳〵」と咡けば、八「又口先で濟そふや、梅川をだましたと男の意氣は違ふた。いふ事あらばサア聞ふ」と、苦々敷きめ付ヶられ、忠「是其聲を母が聞けば死んでも一分立ぬ事。一生の御恩ぞ。さりとては面目ない」と、はら〳〵と泣けるが、「何を隱そふ、此金は十四日以前に上りしが、知ての通り梅川が田舍客、金ずくめにて張合かける。此方は母、手代の目を忍んで、僅二百目三百目のへつり金、追倒されて生た心もせぬ處に、請出す談合極つて、手を打ぬばかりといふ。川が歎き、我等が一分、既に心中する筈で、互の咽へ脇指の冷やりと迄したれ共、死なぬ時節かいろ〳〵の邪魔ついて、其夜は泣て引別れ、明れば當月十二日、其方へ渡る江戸金がふらりと上るを、何かなしに懷に押込て、新町迄一散に、どふ飛んだやら覺えばこそ。段々宿を頼んで、田舍客の談合破らせ、此方へ根引の相談しめ、彼の五十兩手付に渡し、まんまと川を取

うそ腹—腹の立つにかく
いかつげ—威張る
れそ—相手の女
たくし—籠絡し
駄賃かく—駄賃をとる

しい顔付キで、氣毒がらすは如何じやいやい。いつそ殺せ」と抱付ヶば、萬「ム、嘘付んせ。毎日〱新町通ひ、延の鼻紙二折三折、結構な鼻をかまんすもの、何んの私等に手洟もかみたふあるまい。彼の嘘付が」と振切るを、又抱付て、「そちに嘘付て何の德。實じや〱」といひければ、萬「それが定なら、晩に寢處へ御座んすか」忠「ヲヽ成程〱忝い。それに就て今ちよつと問ふ事有」といひけれ共、「それも寢處でしつぽりと聞ませふ。必ずだましにさんすなゑ。そんなら私はお湯沸いて、腰湯して待ます」と、いひ捨振切り走りけり。忠兵衞はうそ腹の立煩ひて居る處に、北の町からいかつけに來るは誰じや。「ヤア、中の島の八右衞門、彼奴に逢ふてはむつかし」と、東の力へ出違へば、八「是忠兵衞、外すまい〱」と聲懸られ、忠「ヤ八右衞門、此中は久しい。昨日も、今日も、一昨日も、人遣ろ〱と思ふて何やかやと延引した。めつきりと寒いが親仁の疝氣は、婆婆樣の齲は。アヽいかふ酒臭い、過しやるな〱。明日は早々人遣ふ。や、れそが言傳したぞや、近日一座致したい」と、たくしかくれば八右衞門、「をけやい。口三味線に乘せかけても、乘る樣な男でない。其方が商賣は三度でないか、身が方へ上つた江戸爲替の五十兩は何として屆けぬ。五日三日は了簡も有ぞかし。心易いは各別、高駄賃かくからは

せはく〵—喧ましく
びんびー—ばつぱ
見世鎖比—夕方戸締りする頃
忠兵衛—雀の啼聲にかく
十文色—十文字と價十文の辻君とかく
木で鼻云々—木で鼻かむにて思ひやりのない者
濡かけ—色仕懸け

ふか。せはく〵いふより云ぬ身を、恥入せふと思ふて目を睡つても、聞所見所は見て居る。何時の間にやら大氣になり、延の鼻紙二枚三枚、手に當り次第重ねながら鼻拭やる。過行れし親仁の咄しに、鼻紙びんびと遣ふ者は曲者じやといはれたが、忠兵衛が内を出さまに、延紙三折宛入レて出て、何程鼻をかむやら、戻りには一枚も殘らぬ。身が達者なの、若いのとて、彼の樣に鼻かんでは、何處ぞで病も出ませふ」と、よまひ言して入ければ、丁稚小者も笑止がり、「早ふ歸つて下されかし」と、待ッ日も西の戻足、見世鎖比に成りにけり。駕籠の鳥なる梅川に、焦れて通ふ廓雀、忠兵衛はとほく〵と、外の工面内の首尾、心は蜘手かくなはや、十文色も出て來るは、南無三寶、日が暮ると足を空に立歸り、門口には著けれ共、留守の内に方々の催促使ひ、妙閑の耳に入ッて、如何樣の首尾になつたも氣遣はし。誰ぞ出よかし、内證を篤と聞て入たし、と我家ながら敷居高く、内を覗けば飯焚の、萬めが酒屋へ行ク躰なり。彼奴は木で鼻もぎどふ者、只は云ふまじ、濡れかけて、だまして問はむ、と思案する間にによつと出る。樽持た手をしかとしむれば「アレ旦那樣の」と聲立る。忠「アヽかしましい。こりや粋奴、おれが首だけ懷んで居る。思ひ内にあれば、色外にあらはるゝ、目付をそちも見て取たか。可愛ら

納戸—無くにかく

わざくれ—やけばち

使を遣れば、酢の蒟蒻のと、何時届けさつしやるぞ。此者に渡して人をつけて下され。手形戻そと申さるゝ、サア金子請取ふ」と、立跨つて喚きける。主思ひの手代の伊兵衛、騒がぬ體にて、「是お使、八右衛門様が其様に、理窟臭い口上は有まい。五千兩、七千兩、人の銀を預つて、百卅里を家にし、江戸、大坂を廣ふ狹ふする龜屋、そこ一軒では有まいし、遲い事も無ふては。今でも旦那歸られたらば、此方から返事せふ。五十兩に足らぬ金、あたがしましう云まい」と、かさから出れば氣を呑まれ、使は眞面目に歸りけり。母妙閑は炬燵の側、離るゝ事も納戸を出、母「ヤア今のは何ぞ。丹波屋の金の届いたは、慥十日も以前の事、何故忠兵衛は渡さぬの。今朝から二軒三軒の金の催促聞て居る。親仁の代から此家に、金一匁の催促得ず、終に仲間へ難義をかけず、十八軒の飛脚屋の龜鑑といはれた此龜屋。皆は心もつかぬか。忠兵衛が此比の素振が如何も呑込まぬ。昨今の者は知るまいが、地躰是の實子でなし。もとは大和新口村勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子、母御前はお死やつて、繼母がゝりのわざくれに、惡性狂ひも出來るぞと、父御前の思案で、是の世取に囉ひしが、世帶廻り商賣事、何に愚はなけれ共、此比はそはそはと、何も手に付かぬと見た。異見の仕度い事あれど、養子の母も繼母も同然と思は

頼狀を纏める者
留帳—臺帳
三度—飛脚
差上せ云々—持たせ遣はすべし
なまり散す—銀に對して鉛に訛りをかけたり

衞は留守なれば御下し物の御用ならば、私に仰聞ケられませ。お茶持ておじや」と待遇ふ。侍「いや〳〵下りの用はなし。江戸若旦那より御狀が來た。是お聞やれ」と、押開き、文面「來月二日出の三度に、金子三百兩差上せ申べく候。九日十日すなはち兩日の中、其地龜屋忠兵衞方より、右三百兩請取、內々申置候事共、埒明け申さるべく候。則飛脚の受取證文、此度上せ候間、金子受取次第、此證文忠兵衞に渡し申さるべく候。是此通仰下された。今日迄屆かぬ故、大事の御用の手筈が違ふ。何故斯樣に不埒な」と、鼻をしかめていひければ、手代「ハヽ御尤〳〵。去ながら、此中の雨續き、川々に水が出ますれば、道中に日が込み、銀の屆かぬのみならず、手前も大分の損銀。若し盜賊が切取か、道からふつと出來心、萬々貫目取られても、十八軒の飛脚宿から辨へ、芥子程も御損かけませぬ。お氣遣あられな」と、いはせも果ず、「是さ〳〵、いふ迄もない、御損かけては忠兵衞が首が飛ぶ。日限延ては御用の間が明により、それ故の穿鑿。迎ひ飛脚を遣はして、早速に持參せい」と、徒士若黨も刀の威光、銀ン掠へもうさん成、なまり散して歸りしが、又、「賴みませふ〳〵。中の島丹波屋八右衞門から來ました。江戸小舟町米問屋の爲替銀、添狀は屆いたが、銀はなぜ屆きませぬ。此中文を進じても返事も御坐らず

三度笠―三度にかく、此笠は落馬しても鼻を打たぬ樣に深くしたる編笠(我衣)
角取れ―垢ぬけ
國細工云々―刀も珍しく男も田舍には稀なり
里知る―廓に明るい
奥口―置くにかけて家の奥と入口
狀取―町内の依

梅川忠兵衛 冥途の飛脚 并三度笠

近松門左衛門作

上之巻

身をづくし難波に咲くや此花の、里は三筋に町の名も、佐渡と越後の相の手を、通ふ千鳥の淡路町、龜屋の世繼忠兵衛、今年二十歳の上はまだ、四年以前に大和より敷銀持て養子分、後家妙閑の介抱故、商ひ功者駄荷積り、江戸へも上下三度笠。茶の湯、俳諧、碁、雙六、延紙に書く手の角取れて、酒も三ツ四ツ五ツ所、紋羽二重も出ず入らず。無地の丸鍔象眼の、國細工には稀男。色のわけ知り里知りて、暮れるを待ず飛ぶ足の、飛脚宿の忙しさ、荷を造るやらほどくやら、手代は帳面算盤を、奥口共にどや〱と、千萬兩の遣繰も、筑紫吾妻の取遣も、居ながら金の自由さは、一分小判や白銀に、翼の有が如くなり。町廻りの狀取立歸つて、それ〱と留帳つくる處へ、「誰ぞ頼もふ。忠兵衛宿に居やるか」と、案内するは出入の屋敷の侍。手代共慇懃に、「ヤア是は甚内樣。忠兵

人を殺さぬ作者の老婆心なれども奇異の感あり

秋の夕霧を、猶萬代の春の花、見る人袖をぞ列ねける。

切れ離る—慾心を離る

顏も生々—萬死の夕霧が助かりたる趣向は不自然なり是名ある

は、行末の年月無事で勤める女郎の事。今死ぬる夕霧に、大分の金銀取て隙をやるは、此扇屋は盜人と申者、殊に全盛して、親方に大分儲てくれられた此太夫、命さへあらふならば、此扇屋が身代半分は入れまする。此金子、夕霧和女に遣る。臨終に金やるとは異な事申樣なれど、此金では萬部の經も讀るゝ。跡の追善、遺言召され。サア〳〵暇を遣た、廓を連てお出なされ」と、切れ離れたる意氣方は、さすが所に住ばなり。今を限りの夕霧につこと笑ひ、「アヽどなたも〳〵有難い御心ざし、お禮申て下されませ。是源之介、此金は親方殿より下された、そなたに母が讓りじや。由々しい町人になつて、父樣の名を揚てたも。わがみの出世を草葉の蔭より見るならば、萬僧供養にも勝りて母は佛になるぞや。去ながら、伊左衛門樣源之介に、妙順樣を竝べて、三尊の來迎と拜みたふ御坐んす」「ヤ妙順樣呼に走れ」と立騷ぐ。「いや呼にやる迄もなし、氣遣がつてアレ門口に」と、手代伴ひ入ければ、妙「なふ花嫁御珍しや〳〵、嬉しい對面。誠の佛は西方のお迎ひ、此妙順は此方の家へ迎へ取、金ずくめにして養生し、此姑が精力で本服させて見せふぞ」と、家内が勇む氣勢に連れて、諸病は氣より本服の、顏も活々に〳〵と、立て躍るや扇屋夕霧、憂却つて悅びを、語り傳へて三十五年、又五十年又百年、千歳の

八功德池—浄土にある八つの池
雨甘露云々—經文、よい雨を降らすは衆生を憐むため
上刹—浄土

臥てぞ歎きける。重て樒の水を携へ、「是夕霧、人界は一生造悪の娑婆世界、別て遊君流れの身は、面に紅粉を飾て數多の人を迷はし、綾羅錦繍を身に纏ひ、多くの酒を酌流し、煩惱の種を植て、菩提の根を絶つとは遊女の事。此水は、極樂の八功德池の水と思ひ、雨甘露法雨愍衆生故と聞く時は、是を飲んで心身を霑し、九品の上刹に往生し、半蓮を分けて待て居や。是其しるし」と、同じく髪を押切て、親子夫婦手向の水、哀れにも又頼もしし。斯る處に吉田屋の喜左衛門、六尺に金箱持せ、「是は平岡左近様の奥方お雪様の御使、夕霧を請出す所、其筈違ひ是非もなし。され共代金八百兩、其爲の金子なれば、外に遣はん様なし。御病氣以ての外の由、此金にて請出し、一時なりとも廓の外にて往生させませとのお使なり」と、いふ處へ下袴の若い者、金箱數多擔させ、「是是扇屋殿、我等は藤屋伊左衛門様の御老母、藤屋妙順様よりのお使、伊左衛門様は父御の御勘當、今は此世に亡きお人なれば、お袋様の我儘に勘當御免はなり難し。夕霧様には御一子迄有事、嫁御、孫御に勘當はなし。藤屋妙順が嫁を廓の内にて殺されず、一時成共廓を出し、外にて往生させましたいとのお願ひ、金子二千兩持參致す。サア〱片時も廓を出して下され」と、きほひ勇めば扇屋了空、「御尤なれ共、金子を取て隙を遣と

白露云々—果敢ない事、知らぬにかく

水を〳〵—親子から死水をとつてもらふ

子の、花の盛を餘所に見て、惜や三途の川霧と、消る其身も人目にも、昨日今日とは今迄に、數珠を手に取る事もなく、何をか後世の土産共、いさ白露の仇し野や、相の山野邊より彼方の友とては、樒一枝一雫、これが冥途の友となる。知邊となれや此詞、形身共なれ回向となれ。迷ふな我も迷はじ」と、思ひを籠し一節に、聞人哀れを催せり。扇屋夫婦情深く、「なふ此方は聞及ぶ藤屋の伊左衞門殿そふな。忍ぶ事も時に依る、娘とも思ふ夕霧が、臨終の心が堪能させたい。早ふ逢ふて下され」伊「ア、忝い」と走り寄り、「太夫又逢ひに來たはいの」夕「伊左衞門樣私や死ぬるはいのふ」源「母樣死んで下さるな」と、縋り付ば家内の上下、「わつ」と一度に聲を上げ、泣沈むこそ道理なれ。重き枕に手を合せ、夕「旦那樣幼稚い時より御苦勞に預り、御恩も報ぜず死まする。是さへはかなふ御坐んすに、いとしい男、可愛子に逢せて下んす。もふ私や佛で御坐んす。迚の事に伊左衞門樣の手で、此髮切て囉ひ、佛の形になつて、親子の手から水を〳〵」と云聲も、絶々にこそ成にけれ。伊「ヲ、髮飾は假の戯れ、佛の三十二相とは新木作りの卒塔婆を云。只今某が切髮は阿字の一刀、彌陀の利劒を以て、煩惱の羈絆と觀念せよ」と、指添へ拔て、二人添寢の寢亂髮、ふつゝと切れば源之介、「可惜髮を」と身に添へて、悶へ

浮き—憂き
鹿島—貸すにかく
ふる雪—客をふるにかく

朝込—朝廓の門の開くるを待ちて入る（嬉遊笑覽）
櫻花かや云々—松の葉三の巻の歌
難波—七ツにかく
撫子—源之介をさす

あひの山

相の山夕べ晨の浮き勤、花一時の眺めとは、知れ共迷ふ數々の、文に染ても誠は薄く、思ふ方へと駿河なる、富士も麓の戀の山、我踏分て我迷ふ、夢の中戸の夢枕、月を憎みし夜半も有。辛い座敷を曬はれて、冷泉 餘所に行く身を彼の人に、ちよつと鹿島の神も知れ。しんぞ嬉しさ可愛さの、身にも堪へて忘れめや。初手二度迄はふる雪の、つみも恐れぬ無理起證。神も佛も二つの耳に、嘘と誠を私語の、橋の蜘手に物思ふ。格子叩くを合圖にて、稀の御見も籬越し、何を歎くぞ歎きても、身は十年の繫ぎ船、出船の今日の名殘の床、明日の朝ごみ枕より、跡より遣手の責來るは、呵責の責より猶辛く、仕廻太鼓の音迄も、寂滅爲樂と響くなり。死出の山路は誰とても、一つ泊の旅の宿、浮世隔る淚川、此世に浮名更科や、姥捨親捨身を捨て、櫻花かや散り〳〵。五ツでは糸をより初め、六ツや難波に此身沈めて、八ツで遣手に附添ひ、九ツで戀の小使ひ、十ヲや十五の初姿、髱入ずの地髮房々、衣裳のこなし、心利發で道中能ふて、戀知りわけ知り、文の文章、思ひら〳〵ら〳〵。床は伽羅〳〵、謠 沈香や麝香の香迄、今の手向と燻らする。種蒔捨し撫

扁鵲―支那三國時代の名醫

來世金―未來の冥福を祈る金

おうへ―閻魔裏ぶち

うたふ聲―善知鳥にかく、善知鳥安方は奥州外ケ濱に住む親子の鳥

扁鵲でも叶ぬ。物に譬へていはゞ、干上つた土器に燈心一筋燈ひて、風吹に置様な物。今日の日中か遲ふて初夜限り、最早壽も何も構はず氣任せにしたがよい。ア、惜い人じや。夕霧〳〵と云て、親方にいかい金儲けて遣た女郎じや。達者な内に此梅庵、彼の人を一年持ば、今比は匙取らいでも樂するもの。可惜金を彼の世へ遣、是がほんの來世金じや」と、云捨歸れば、扇屋一家は打萎れ、返答する者もなし。伊「ヤレ源之介、醫者の云分聞たか。最ふ叶はぬ思ひきれ」源「ア、悲しや、何卒母樣の死なしやれぬ樣にして下され」と、取付嘆ぞ不便なる。扇屋了空夫婦、涙片手に蒲團手づからおうへに敷き、了「今の相の山が奥へ聞へて、太夫の慰に、是へ出て聞度いと仰る。是へ這入て面白い事歌ふて慰めて下され」「あつ」と親子は笠傾け、奥を見遣れば夕霧は、芙蓉の眼尻衰へて、夕べ待間の玉の緒の、今ぞ切れ行息遣ひ、やり手禿に手を引れ、肩に懸りし其姿、親子は目も暮れ胸塞り、漏る涙を夕霧も、それと見るより飛立つ如く、心を胸に積み疊む、蒲團の上にかつぱと伏し、思を涙に通せて、人目を中に憚かりの、せきたぐるこそ哀なれ。了「サア〳〵相の山、早く〳〵」といひければ、伊「あつ」と涙の玉簓、うたふ聲にも血の涙、子は安方の囀りや。

相の山—前に出づ
血脈—佛より授かりたる守札
めかり—目
四枚肩—四人にて擔ぐ駕籠
耆婆—釋尊時代の名醫

の榮耀程憂目を見ねば罪消えず。男故の苦勞と思ひ、歸つてくれ」と泣諫め、賺し乘すれば弱々と、云度い事の數々も、せき來る涙、せき來る胸、「命の中に今一度、顔ばせ見度い逢度い。末期の水を、彼の子の手から賴む／＼」と、夕霧の名に立替る夕霞、見送り見送る門々の、松に太夫が面影を、殘して別れ 三重 歸りける。

下之卷

相の山「夕べ晨の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞てナ驚く人もなし。合手 野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥途の友となる」扇屋「エヽ物囉ひでもめかりを利しや。是程醫者の出入やら、神子の御符のと、屋内が持返いて、七種囃す間もないが目に見へぬか。通りや／＼」と云處へ、梅庵御見廻四枚肩、おりゐの衣、長羽織、醫者は奧へぞ通りける。伊左衞門編笠傾け小聲に成、「やれ源之介、母が氣色が重そふな。命の内にま一度見せたく、此姿にて來れ共、最早見せる事も、見る事も成まい」と、呵けば源之介、「早ふ逢ひたい事じや」とて、父に縋りて泣居たり。「梅庵樣お歸り」と、表へ出れはやり手杉、家内の上下ついて出、「病氣は如何で御坐ります」梅庵頭を掉て、「耆婆

百里云々—因果應報の理をいふ

寢臥もしたいぞ」と、搔口說き染々と、眞實盡す憂淚、源之介聞分ヶて、「此方が本の母樣か。父樣は此方か。傾城でも駕籠舁でも、本の親がいとしい」と、淚まじりの笑ひ顏、血の筋見へて哀れ也。伊「ヲヽ出來いた〳〵。侍とても尊からず、町人とて賤しからず。尊い物は此胸一ッ。氣遣ひせまい伊左衞門が妻子、憂目はさせぬ、力落すな〳〵」と、いへ共我も力なく、只茫然と成にけり。吉田屋喜左衞門駕籠舁雇ひ、「是非なし共お笑止共、參りかゝつて我等の迷惑。外の事ならば何卒思案も致すべきが、申ても霧樣は親方がより。殊に病中大事のお身、先連歸つて扇屋へ手渡せねばお爲にも如何。いざ召ませ」と舁寄する。夕「扨は二度、別れて廓へ歸るかや。ハアウ」と計にかつぱと伏し、既に息も絕へんとす。伊左衞門抱起し、吉田屋は印籠の氣付、種々看病しつ漸性根付けるが、夕「昔より幾人か斷した身の憂難義、咄にも聞つれど、是程の辛い事、重なれば重なるかや。今逢ふて今別るゝ。彼の子をせめて相駕籠で、卒おじやや」と抱寄するを引放し伊「それは喜左まで迷惑、これ世にも人にも恨みなし。左近もいはゞ尤至極、女房が情といひ、誰か親子三人に仇するものはなけれども、親に逆らひ實を費し、身を奢りたる其酬ひ、あれあの天道に睨まれて、何國にて身の立つべきぞ。百里來た道は百里歸る。昔

楓の云々ー楓は赤い子供の手をさす、楓といふより病葉と續けてたまさかの意をもたす

誰が爲に身を惜まん。一分捨る合點」と、大小もぎ取突出す。雪「いや〳〵假令此方は返しても、契約して子にしたからは、此雪が返さぬ。夕霧も戻さぬ」と、取付を引退け、縋付を引放し、左「夫をもどく見苦し」と、奥方引立、立闕をはたとさして入にけり。伊左衛門も夕霧も、前後に暮て途方なく、源之介泣出し、「コレ父様母様、おりや駕籠舁の子ではないはいの、傾城の子にはなりともない。父様の子じやはいの、母様の子じやはいの。此處明てくれ。やい侍共、明けをれやい」と泣叫び、立闕の戸をとん〳〵と、叩く楓のわくらはに、應ふる者もなかりける。夕霧息も絶々ながら「是源之介合點しや。眞實其方は左近殿の子ではない。母こそは夕霧、父御はそれ藤屋伊左衛門、さもしい人と思やるな。江戸迄も知られて、左近殿より大身の武家に親子も有ぞいの。母故の御牢人、其方も憂目見せまじ、と左近殿の子と云しが、誠の親と、假親の心はさしも違ふかや。左近殿も其方をよも憎ふは有まいが、我身の無念、一旦の腹立に、いとしい其方を捨らるゝ。彼の父様や此母は、今の如く人中で、踏れぬ計に恥を掻き、云下られても其方を抱が嬉しい、逢ふが嬉しい。肉身分ヶし本の子は、斯ふもいとしい物かいの。母が此氣色では、最ふ逢ふ事はなるまい。父様の事頼むぞや。せめて一年しつとりと、一つ

つもり—見くびる

直の話—直接に聞いた話

臣と異名を呼れし平岡左近、其方に恨みはなけれ共、夕霧にいふ事有。それにて聴聞致されよ」と、かばと突退け、涙を浮め、「エヽ僞り多き遊女の習ひ、驚くべきにあらね共、是程迄、能ふも〳〵此左近をつもりしな。此子は伊左衛門が悴とは、先年死したる遣手の玉が咄にて、疾くより聞付、無念共口惜共心一ッに堪へかねしが、いや〳〵改めては侍の身分立ず。殊に此子も、我々夫婦を誠の父母と思ひ睦しく、不便さも増す故に、縁でがなと諦め、二世と連添ふ妻にも深く包み、夕霧が生んだる某が實子と僞りしかば、さすが女房の優しくも、夕霧が心を憐み、乳母と名付、此内へ呼取りしは、皆此悴が可愛さ故、それになんぞや淺ましい躰にて忍び入、親よ子よのと名乗合ひ、知らぬ子に智恵付る。ヤレ稚くても此子はな、馬に乘鑓附せ、老先立身樂む身の悴に恥を與へん爲か、左近が武士を捨ん爲か。色に迷ひ馬鹿つくし、女共が手前も恥し。エヽ恨めしや是非もなや。悴を返す連歸れ。町人の子に刀、脇指無用なり」と、引寄せてもぎ取處へ、奥方は走出、「なふ情なや。此子が事は我とても、直の咄を聞しか共、調べては御侍の一分廢ると思案して、囉ひ切たる此子なり。今返しては武士が立ぬ、一寸も離さぬ」と、抱上るを引放し、左「身を立名を立、一分を立るといふも子孫の爲。實子も持ぬ此左近、

むさい―穢い

あこぎ―阿漕の浦に引く網のたび重ると云ふ歌より飽き足らぬ意に轉用せり

參會―出くはす

こやかに、打連れ座敷に入にけり。夕霧四邊を見廻し、「なふ懐しや。先刻にから抱付度ふてならなんだ」と、縋付て泣ければ、伊左衛門も走入、思はず知らず、「やれ可愛の者や」と抱付處を、源之介飛退き、「やい駕籠舁奴。むさいなりで侍に抱付く慮外者奴」と、脇指に手をかくる。伊「ア、〳〵申、眞平〳〵御免なりませ。私が忰に、丁度お前程ながら御坐れ共、小さい時から人手に渡し、見度い〳〵と存ずる折節、お前を見付如何も堪へられず、心亂れて慮外の段御免遊ばし、あこぎな申事なれど、お侍のお慈悲に、父かといふて、私に抱付て下されませ」と、額を疊に摺付て、手を合せてぞ泣居たる。源「何んの己れを父といはふ。おりや父樣にいふて來う」と、駈入る處を夕霧抱留め、「是申、乳母が始ての御訴訟頼上る」と泣ければ、源「乳母の云やる事ならいふて遣ふ。父樣なふ」と抱付を、伊「ヲ、忝い、父じや〳〵」と嬉し泣き。夕霧もうら山敷、「次でに私も母といふて下されかし」源「ヲ、いふて遣ふ、是は母樣」夕「ヲ、私が子じや」源「是は父樣」伊「おれが子じや」二人が中の思ひ子の、親子夫婦の寄合は、又今生では叶はぬ、と泣つ笑ふつ樣樣に、寵愛こそは道理なれ。奥より左近が聲として、「藤屋伊左衛門、藤屋伊左衛門」と呼ぶ聲す。南無三寶と迯出れば、續いて左近走り出、袖を控へて、「是いにしへ參會せし阿波の大

若い者―若い者にの意

隨分弓馬の稽古精出し申そふぞ。永日〳〵」と暇乞して歸りけり。左近親子玄關に立休ひて見送る躰、伊左衛門遥に見て、「あれは我子か、昔の伊左衛門ならばひとの子に爲さふか。大小こそ指せず共、數多の手代、若い者、若旦那とかしづかせ、京大坂の町人の誰にかは劣るべき。侍とても負まじき、母親の駕籠を父が舁き、我子の門にはひつくばふ我親に背きたる其罰、ひつしと思ひ知り、悔み涙に頰冠の、手拭浸す計なり。奥方も端近く、「なふ〳〵喜左衛門か。其駕籠是へ」と他事なき風情、それを力に夕霧は、駕籠も思ひも漏れ出て、「平樣お久しう御坐んす。奥樣のお慈悲にて、あのお子のお乳母に付らるゝ筈ながら、のらぞんざいの私が身、氣色もしか〳〵捗らねど、先和子樣を見たさに」と、熟々と打守り、夕「あれ喜左衛門樣、扨も氣高い能いお子や。聞及びしよりおとなし樣、常躰の者の子が、七ツや八ツで斯ふ有ふか。人は筋目が恥かしい。流石父樣のお子程有。父樣のお心が左こそと推量せらるゝ」と、表の方へ目を配れば、伊左衛門も首延し、魂脫て綠子の、袖に飛入ばかりなり。左近夫婦は氣も付ず、「サア喜左衛門、先少成共金子渡そふ。いざ座敷へ。是源之介、あの人は我身の乳母、馴染をかけていとしがり、此母も同前に、大人になつても乳母は見捨ぬものじやぞや。吉田屋此方へ」とに

正月のお客—正月の費用をして貰ふ客

傾城—けいせんともけいせいともいふ

御奇特—感心感心

色代—挨拶

首尾成り、只今是へ同道。扨々節季の忙しい中私の働き、春の用意、正月のお客の穿鑿、錢金の請拂ひ押詰ての節分」大豆で打出す鬼の首取た樣にぞ申ける。女中「成程奥樣にも其お噂、扨は彼が傾城どのか」と、駕籠を覗いて、「ハウアウ傾城と云もの始て見た、矢張常の女子じや」と走入て、「奥樣々々、傾城が參りました」奥「アヤ喧ましい。皆物見から聞て居た、傾城〳〵いふまいぞ。今よりは源之介のお乳の人、侍町人の歴々に交際ふて、心も至り目恥しい、粗相して笑はれな。盃の用意せよ」と、ひそめく聲に、左近勝手へ入ければ、雪「是なふ豫て申せし夕霧の事、吉田屋の喜左衞門が埒明、連立ち來たとの案内、なんと此雪が樣な、悋氣せぬ氣の通つた女房は、御坐んすまいが」と笑はるれば、「ヲヽ御奇特〳〵。去ながら座敷に堅い軍兵衞が居らるゝ、今内へは呼れまい。表に置ても目に立つ。何ふか斯ふか」と思案半ば、門前には喜左衞門、「アヽいかふ冷たい。夕霧樣は御病後、早ふ内へ入まし、火に成共あてましたい。頼みませふ〳〵」と呼はる聲、若黨、中間ばら〳〵と、「小栗軍兵衞迎ひの者」と奴の聲、揚屋の聲遣手はなくて傾城に、鎗侍交り喧しし。やゝ日も長けて軍兵衞、「お暇申」と立出る。左近親子送つて出、色代あれば軍兵衞、「ヲヽ源之介殿おとなしふ御坐るよ。追付殿の御用に立召されふ。

冥加もない―冥加もない
裡百足―男は裸
百貫の諺をとる
根引の松に云々
―身受の太夫に
かゝる伊左衛門
とかく
上本町―上、勝
るの意をかく

國迄も御内衆が悪名立るが悲しい。此上張の袷を脱ぐ、角介殿これで濟して下され」と、帶を解かんとする處へ、おこし本のりん走出「是々竹、和女の心底奥様物見よりお聞なされ、扨々奇特な。上々迄も女たる身の鏡と、殊なふお感じなさるゝ。奥様にも少お氣の濟ぬ事あれ共、和女を手本にお心が納つてお嬉しさ。師匠共思召、御褒美に此鳥目百疋下さるゝ。扨角介は慮外な。餘所の大事のお道具に手をかける狼藉千萬。重て此事云出さば旦那様へ仰られ、討首になさるゝとの御意じや」といへば、天窓角介佛頂面、竹は悦び、「アヽ冥加もない有難い。兎角お禮は能い様に」と、戴き〳〵、「これ槌右衛門殿是持て往つしやれ。何を見込に此様に可愛ぞ」と、譬の裸百疋を、直に男に鑓持に、過たる妻が三重優しさや。人の情に夕霧が、思ひも寄らぬ此春の、子の日を根から根引の松に、かゝる藤屋の伊左衛門、我子の顔の見まほしく、ならはぬ駕籠の片端を、隱れて忍ぶ頬冠り、夕霧も簾越し、子を見る今日の嬉しさより、夫に別るゝ物憂さは、上本町にぞ著にける。宿札を見て喜左衛門、「誰方ぞ女中方頼みませふ」「ハウ何方からぞ」と腰本出れば。喜「私は九軒町吉田屋喜左衛門と申者、奥様よりお頼みなされし扇屋夕霧身請の事、随分と駈廻り、金子は當月一ぱいに、お渡しなさるゝ約束で、ゑいやおふと

お祓云々—八幡祭に鐘を振て練り歩く仲間

比丘にん—比丘尼の装したる賣女

濱せゝり—河岸にて惣嫁をあさる

ア取て見せふ」と競合ふ最中、竹走出「ヲウ角介殿道理じや。錢は竹が濟す、堪忍して下され。エヽ情なの性悪男奴や、世間を見て恥を知りや。お小人町の久六は、此方より若い人、八軒屋の龜と只た一年念比して、小錢貯て宿持て、冬年も鶴が橋のお婆々へ、大きな鏡に鮪添へて据へられた。藤の棚のねぢ兵衛は、此方程鑓は振らね共、お祓ひの練衆御番替り、人の氣に入雇はれて、眞性者と云はれた故、片町のふりを内へ呼入、師走に廣めが有たぞや。是でこそ女房の肩もいかるはいの。此方と言交して明ヶて四年、給分一文身につけず、皆此方に入上る。それに何んじや、よい年して、長屋へ比丘尼引入、日が暮ると濱素見、未だ其上に、稲荷邊りの裏屋小路を覗き廻り、揚句に此比は、夜見世狂も付たげな。私とても木竹じやなし、悋氣も仕度い、腹も立。エヽ憎いとは思へ共アヽそふじやない。女子に生れた因果じや、男のさがを顯すまいと、隨分私が身を約め、三度付る油も一度付け、雪駄履を草履にし、草履履を跣足で仕廻ひ、鍋釜の煤烟搔くにも此方の髭に入と思ひ、よい處を除て置く。我身の事には元結一筋買はぬは、男を大事にかける故じやないかいの。女房には苦勞をさせ、榮耀が余つて色狂ひ、聞へぬ人じや」と締泣に、恨み口説くぞ不便なる。竹「是此處の御奉公は、中途に參つて馴染はなし、お

法海悋氣―身に開せぬ者を妬む

物もうどれい―物申さう何れよりお出なり（貞丈雜記）

ない―はい

身に逢―我に逢ひたいと云ふべき處

の太い―大膽

た、能ふいふてくれた」女中「扨は彌々止めになされますか」雪「はて止にせいで何んとせふ」女中「アヽ氣がさつぱりと成ました。お林殿よい氣味か」林「私や痞が下ました」「おしゆん殿は何んと」しゆん「此方や金拾ふたより嬉しい」と、身に德もなき法海悋氣、是ぞ女の習ひなる。雪「あれ北から十文字の道具、御藏屋敷の小栗軍兵衛様年頭の御禮。御一門の中でも彼方は堅い。それや〳〵」物見の簾下す間に早や玄關に、「物まう」家人「どれい」「小栗軍兵衛御慶申ス」家人「旦那幸宿に有。いざお通り」と云ければ、軍兵衛玄關に立て、「是家來共、御用に就て左近殿と申合する事有。暫く隙が入るべきぞ、屋敷へ歸つて八ツ時分迎ひに來い」家來「ない」小栗「其中少早く來い」家來「ない」小栗「油斷するな」と入ければ、若黨始め草履取、挾箱、皆々宿所へ歸りしが、道具持の槌右衛門、一人殘つて臺所覗き、「誰ぞ頼みませふ。飯焚の竹呼出して下され」といふ處へ、馬取の角介苦い顔して、「ヤ槌右衛門。わりや見事武家に奉公するかやい。此角介が僅な切米の内、五百五十と云錢を取替た。冬年一言の斷りもせず、今も先身に逢ひ度いと云ふべい處、竹を呼出してくれとはの太い者だ。錢の濟む迄是を取」と、鑓の柄に縋付。槌「待て角介、鑓持が鑓を取られては、槌右衛門が首が無い。五百や六百で賣る首じやない。成らぬ」角「ヤ

白泡—知らぬにかく
結構—心のよき事
にやこい—女に甘い
小舌たるふ—あまえて
あた分云々—はんに割がわるい
焚付—おだてる
もや〳〵—むかむか
定—必定

しるとは不調法な。侍の乗馬は、是此樣にはい〳〵、はい〳〵」と、親の心も白泡嚙せ、門内へ乗入し振り、いたい氣に溫柔しし。今の詞にこし本衆、口をとぢて奥樣の機嫌を窺ふ躰なれば、雪「是々源の咄を聞たか。道通が左近殿を太夫買と云たげな。此前大坂お屋敷役の時、新町通ひに夕霧と云太夫に馴染をかけ、源之介を設けたは定て皆も聞つらん。人の見知るも道理。大名高家も母方の吟味はなし、大事ないとはいひながら、彼の子の心は、此雪を産の母と思ふて居る。必々夕霧が子と云噂禁制ぞや。其夕霧をも請出し、彼の子がお乳に置く筈。傍輩並みに待遇や」と、仰せも果ぬにこし本中口々に、「アヽ奥樣の餘り結構過ました。我々がなんぼ沙汰を致さず共、彼の傾城のばしやれ者、それをいはずに居ませふか。お袋振て鼻高ふ、お家をありたい儘にして、奥樣を踏付るは今の事〳〵。未だそれ計か下地がにやこい旦那樣、小舌たるふ仕懸たら、ぼつかりと喰付て、田も遣ふ畦も遣ふで、奥樣は倥侗鼻明て仕廻んしよ。小無益しいあた分の悪い。こりや御無用に遊ばせ」と、焚付らるゝ女心、雪「アヽいへば左樣じや。おれは甚い阿房じや。いのりも除たい戀の敵持て居て當がふは、盜人に藏の番、磁石に針、皆に氣を付られて、はやもや〳〵と腹が立。後に悔の出るは定、請出す事を止めに遣ふ。皆出來

しほらしー愛らし
すつすー鎗を振る形容
あどなきー無邪氣な

宿札も、門の飾に時めきて、武家は綺羅有春なれや、表の物見に女中の聲々、「中奥樣、珍しい大坂の正月を始て見物致し、お國へ歸つて能い咄。是もおかげ」と悦ぶにぞ。雪「チチ〳〵其方達が云通、主のおかげは忝い。御用に就て左近殿、我々連れて、僅か逗留の旅宿へ、今朝から禮者の絶へぬ事、皆殿樣の御威光。左近殿は源之介連れて、天滿とやらの神明樣へ惠方參、親の子とてしほらしい、六ッや七ッで馬に乘る。追付左近殿の名代、御奉公勤めるを見るで有ふ」と、御悦びの處へ旦那の御歸り、前供走る黑羽織、すつ〳〵素鑓、栗毛の馬、のつし熨斗目に麻裃、親に續いて源之介、明て七ッの乳のまふ。饅頭形の中剃も、目元賢きうなる松、千代を斷ゆる土佐駒に、手綱搔繰りしやん〳〵しやん、轡の音はばりょん〳〵、りんと坐りし袴腰、物見の前を乘廻せば、母「是々源之介戻りやつたか、目出度い〳〵。嘶馬上が寒からふ。溫柔い出來しやつた」と、招かれて源之介、「中母樣、惠方參に天滿へ寄て、是買て來ました」と、土人形の天神、手綱に持添へ、「私がこれ持て居るのを、道通が見付て、父樣を見知て居るやら、親は太夫買ひ、子は天神買ふと云て笑ひました。おれにも大きな太夫買ふて下され」と、あどなき詞に、こし本共氣の毒がり、「是しる〳〵」と目まぜすれば源之介、「ヤイ駄賃馬の樣にしる

ざゝんざ―賑々しい

なりふり―なると姿

口をきこ―奥をきこより口をきけの謎を反對につかひたり

豆男―忠實な男

進ずると云迄もなし。以前夕霧が申通、左近殿の御子息。伊左衛門が子では御坐らぬ」雪「ア丶忝い。夕霧殿も左様じやぞや」夕「はて主の合點の上からは、私が否とは申されぬ。去ながら、命の内ちよつと見せて下さんせ」と、涙に咽ぶぞ道理なる。雪「チ丶心得た〳〵。萬事胸に込めました。身請の事も吉田屋と近々に談合しませふ。あの子が成人するに付、伊左衛門殿も樂み。サア契約の堅めの盃、いよ〳〵あの子は此方の子、平岡左近が惣領」さらり〳〵と手を打て、廓でざゝんざ珍しし。日も暮かゝれば若黨、中間駕籠釣らせ、「阿波の旦那のお迎ひ」雪「是下人も忍ぶ此姿、元の男となりふり爲り、頭巾大小、印籠、巾著。雪「亭主さらば。夕霧事は追付是より便宜せふ。萬事賴む」亭「請込ました」と膝を屈める、腰屈める、腰本伴れるを引換て、昇夫が送る大門や、口をきこより奥樣の深き情や 三重 立歸る。

中之巻

春や延寶六年と、明渡る世も昔の京、難波の今朝は珍しき、妻子引具し舊冬より、上本町の道場の玄關構借座敷、お國の御用新玉の、此處に年取るまめ男、阿波國平岡左近と

あられぬ―見られぬ風

さがなさ―不祥

御改易―族籍を除き資財一切を沒收する刑罰

阿房拂―追放

た姿は天晴平岡左近が世繼、七百石の主なりと御家中の褒め者、嗽見たからふし見せたし。一つは彼の子が冥加の爲、夕霧殿を請出し、一所に伴ひ暮さん、と心根も聞ん爲、鐵醬落しつあられぬ態で、只今聞けば我連合をたらして、伊左衛門の子をつき付たと、聞よりはつと胸塞り、夫の武士は廢つた。エヽ恨めしい夕霧、男に化たを幸に、飛かかつて刺通し、我も死ふと刀を取は取たれ共、死んだ跡で、此雪が傾城に悋氣して、阿房死といはれてはいよ〳〵男の名を出す、と留るも殿御を思ふ故。無い事さへいふ世のさがなさ。阿波の平岡左近こそ、町人の子を傾城に突付られたと取沙汰し、殿樣の御耳に立ば、よい仕合で御改易、阿房拂か切腹か、死しても惡名消えばこそ。此處を了簡し、彼の子を其儘下されば、侍一人の取立、生々世々のお情ぞや。我人我子は大事のもの、殊に思ふ人の子を、思はぬ人の子といふは、何しに心能からふぞ。それは流れの身の辛さ、侍の妻には又此樣な憂き事有。女子と生れし此因果、女御更衣になるとても、うら山しうは思はぬ」と、心の底を口說立て、淚わりなき物語。夕霧夫婦、吉田屋の一家袖をぞ濡しける。伊左衛門つゝと出、「ハヽア賢女哉貞女かな。左近殿とは夕霧故遺恨はあれ共、それは私。拙者も彼の忰を力に、出世の望み御坐れ共、武家のお名には替られず、

おとまし―うとまし

ば、夕「されば其子を里に遣しと申せしは僞儘ならぬお身の上、苦勞にさせます氣の毒さ、彼の阿波の大盡平岡左近といふ人と、私とが中の子といひかけて塗付て見たれば、人は愚な、まんまとたらされ受取て、「腹は假物武士の種」と、寵愛に逢ふと聞につけ、身の憂き時は色々の怖い智慧も出るもの」と、語りもあへぬに伊左衞門、「ムヽウ左もあらふ事。去ながら我古の手代共、其子をつき立、母へ訴訟し、藤屋の家を取立度いとの談合有。どうぞわけをいふて取返す思案が仕度い」と云處に、奥より内義色違へ、「なふおとましや〳〵。お二人爰の咄が奥の座敷へ筒拔、お客樣は不興顏、直に逢ふていふ事有と今此處へお出。なふ喜左衞門殿、此方の人」と、皆々怖りひそめく處へ、客は刀を提げ、「アヽ是伊左衞門殿夕霧殿、驚く事は少もない。是其證據」と頭巾を取れば、突出し鬢の下笄、鼈甲挿櫛、さしもの粋共、惘れて不審晴れやらず。客「ヲヽいかにも不審の立はづ。男に化けたる其間は何の其と思ひしが、女子の姿を顯して此中で物申は、おはもじながら、彼の阿波の大盡平岡左近が本妻雪と申は我身事。夕霧殿の假の情、連合の子を誕生とて此方へ請取、いはゞ我が悦ぶ子、腹も痛まず苦勞せず、産で貰ひし忝さ。他にもせず守育て、手習、讀物、弓、鑓迄も器用にて、國隣の土佐駒引せ、乘つ

さらぬ體—知らぬ風也、皿にかく

四十八枚—彌陀の四十八願に通はす
胴慄—同發菩提にかく

と、烟草引寄せ吹く烟管の、さらぬ躰にて居たりけり。夕霧わつと咽せ返り、「エヽ此方様共覺えぬ。此夕霧を未だ傾城と思ふてか、ほんの女夫じやないかいの。明れば私も廿二、十五の暮から逢ひかゝり何年に成事ぞ。もふけた子さへま少とではや七ツ。誠をいはゞ今比は一門中の状文にも、伊左衛門内よりと書ても人の咎めぬ事。私に恨みが有ならば此方様ゝにも恨みが有。去年の暮から丸一年、二年越に音信なく、それは幾瀬の物案じ。それ故に此病、痩衰へが目に見へぬか。煎薬と煉薬と鍼と按摩で漸と命繋いで、たまさかに逢ふて此方様に甘ようと思ふ所を逆様な、こりや惨らしい何ふぞいの。私が心變つたら、踏んで計置んすか、叩いて計置んすか。是死懸つて居る夕霧じや、笑ひ顔見せて下んせ拜んます。エヽ心強い胴慾な、憎や」と膝に引寄て、叩いつ擦つゝ聲を上げ、涙亂れて髪ほどけ、わけも性根も無りけり。伊左衛門も涙に暮れ「ヲヽあやまつた。外にさして恨みはなけれ共、命にかへぬ大事の女房、奥座敷の若い者、我物顔がむつとして、思はぬ腹立こらへてたも。我とても浮身の躰、誠の正躰見給へ」と、小袖くるりと脱げれば、肌に袷の破れ紙衣、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、胴慄うこそ哀れなれ。伊左衛門涙を押へ、「扨彼の忰は無事で里に居る事か、何んとしたぞ」と云ければ

侍蹴―候ひけるに通はせたり

慾若―徳若をもじる

締寄せ泣けるが、夕「なふ伊左衛門様〳〵、目を覺して下んせ。わしや煩ふて、疾ふに死ぬる筈なれど、今日まで命生存へたは、ま一度逢せて下さるゝ神佛の控へ綱。是懐しうはないかいの、顔が見たふはないかいの、目を開て下んせ」と搖起し〳〵、抱起せばむつくと起き、横ざまに取て投げ、伊「是夕霧殿とやら、夕飯殿とやら、節季師走此方の樣に隙ではない。七百貫目の借錢負ほて、夜晝稼ぐ伊左衛門、此樣な時寢ねばならぬ。邪魔なされな惣嫁殿」と、轉りと臥て又ごう〳〵と空鼾。夕「ムヽウ身に覺えはなけれ共、恨みがあらば聞ませふ。寢させはせぬ」と引起す。伊「是何とする。此躰でも藤屋の伊左衛門。今の如く奥座敷の侍に、踏れたり蹴られたりする女郎に近付は持ぬ。此處な萬歳傾城、萬歳ならば春おじや。通りや〳〵」といひければ、夕「ムヽウ此夕霧を萬歳とは」伊「ヲヲ萬歳傾城の因縁知らずか。侍の足にかけて蹴らるゝを、萬歳傾城といふぞや。誠に目出度ふ侍蹴る。しかも足駄履て蹴るやら、年立かへる足駄にて、誠に目出度ふ侍蹴る、聞へたか。去ながら何も身過ぎ、あの樣な好い衆には蹴られても損は往ぬ。慾を知らねば身が立ぬ。慾若に御萬歳や、年立かへる足駄にて、誠に目出度ふ侍蹴る。町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、蹴る〳〵蹴る」と蹴散かし、伊「是喜左、餅でも米でも遣てやりや」

けんどん—慳貪蕎麥
襖の陰より—夕霧が差覗くなり
兩人—夕霧と伊左衛門
彼の人—伊左衛門をさす
何がなしほに—何かの機會に
ぱつぱ—立派か
炮碌頭巾—大黑の帽の如きもの
紙花七九寸—祝儀を與へる代りに紙を渡すをいふ其延紙の長さ七寸に九寸なり
なめたり—失禮なり

た。繼目が離れぬ先に罷歸る」と立んとす。妻「アヽあんまり御短氣。奥のお客は平樣ではは御坐りませぬ」伊「いや〳〵平でも壺でも、此方仕度能ふ御坐る」と立上る。妻「それはお前の慳貪と申もの。先夕霧樣に逢せましよ」伊「いや迚もけんどんなら夕霧より蕎麥切に致そふ」とすね廻る。其中に奥座敷より手を叩く。客「あれ禿衆は何處にぞ」と、いひつゝ出る内義に連れて、襖の蔭より差覗けば、兩人馴れにし床柱、もたれ懸るも形見ぞと、忘れもやらぬ物越は、慥に彼の人何がなしほに座を立て、逢たや見たやと心もせき、反向て向ふ客の顔、左も大名の小性扮、風よしの衣裳付、ぱつぱの鮫鞘、象眼鍔、若紫の炮碌頭巾、懐中より香包、名木火鉢に薫らせ、「嗅是へ來やれ。身なんどが樣な奉公人は、殿の御前に相詰、たまさか遊興所へ參るも氣晴しと云内に、第一は夕霧殿に戀有故、君の機嫌の能い樣にお身を頼む。一ッ飲やれ肴せむ」と、ひらり紙花七九寸木枕に打敷て、横に鳴門の阿波大盡、夕霧が襠に兩足ぐつと入ければ、夕「扮もなめたり〳〵。此夕霧に足もたすは、こりや少と慮外そふな。夫れ程足が苦にならば、打折て捨たが能い」と、いひ捨てつゝと立、次へ出れば伊左衛門、ちやつと寢轉ぶ肘枕、空寢入して高鼾、はつと計に夕霧、我身を共にうちかけに、引纏ひ寄せとんと寢て、抱付

身が事—俺が事

せいたる—急きたる

ば、伊左衛門とかふの挨拶涙ぐみ、「夫婦の衆が念比に、蓬萊と迄氣が付け共、夕共霧共云出さぬ。仄に聞けば夕霧が、身が事を氣病にして、命あぶなしと聞及びしが、いかふ重いか、但無常の夕霧と消失せてしまふたか、歎きをかけまいとて云出さぬか、誓文で泣まい語つて聞しや。泣ぬ〳〵」といふ聲も、氣遣涙に濁りけり。妻「いや〳〵是はお道理。霧樣の御氣色、秋の比は散々で、勤もお引なされしが、寒に入て少御快氣。則阿波のお侍、正月もなさるゝ筈で、今日是に」と、云ひも果ぬに伊左衛門、「ヤア〳〵それは眞實か」妻「はてうそか誠か、隣座敷覗いて御覽なされませ」伊左衛門はつとせいたる顏色にて、しばし詞もなかりしが、「なふ內義、天地開け始りて、誠ある傾城と、迦陵頻の雄鳥は、繪に書たも見た者ない。惣嫁の樣な傾城奴に、微塵も心は殘らね共、知ての通、彼奴が腹から出た身が悴、しかも男子で明れば七歲。元の遣手玉が才覺で里に遣たとやら。今日來たは、其悴が事に付て來たれ共、定て里に遣たも僞、捻殺してがな捨つらん。阿波の侍と云は合點、此前我と張合た阿波の大盡平と云者。つら〳〵思へば、傾城買より紙屑買がましじや。金出して此方へ取物は狀文ばつかり、七百貫目が紙屑では、富士の山の張拔も樂な事。仕合の惡い時は何で損をせふも知らぬ。無用の涙で紙衣の袖濡し

師走坊主—皴にかく
遣—遣手
長刀草履—穿き古した草履
いはれぬ—之は措いて貰はう
負ほ—負ふ
穗長—齒朶
榧—角やにかけたり

飛脚も二三度、奈良、大津迄尋させ、たつた今もお噂。先お馴染の小座敷で、二年積るお物語。いざお通り」と袖引けば、伊「アヽ紙衣障りが荒い〳〵。是引けば破れる」摑めは跡に師走坊主、師走浪人、昔は遣が迎ひに出る。今は漸長刀の草履を脱で編笠の、中の座敷に通りしが、「お寒からふ」と喜左衛門、縮緬に紅絹裏の小袖をふはと打かくる。伊「アヽ是はいはれぬ。寒晒の伊左衛門、少も苦しからね共、芳志を著致す」と、戴いて著る有様、喜左衛門つく〴〵見て、「エヽ浮世じや。藤屋の伊左衛門様に、此吉田屋の喜左衛門が著せまする小袖、假令蜀江の錦でも戴いて召ませふか。眞に涙が翻れます」と、目を擦るを見て、伊「いや是喜左、此紙衣の仕合、さら〳〵無念と存せぬ。惣じて重たい俵物材木でも、牛馬が負ほは珍しからぬ。犬か猫が負ほたらば、是はと人が手を打ふ。我等も其通、紙子の袷一枚で、七百貫目の借錢負ほて、ぎく共せぬは恐らく藤屋の伊左衛門、日本に一人の男。此身が金じや、それで冷て堪らぬ」喜「ヤアウ此身が金とは忝い。喜左衛門が餅搗に大きな金がお入なされた。これ嗅、未だ蓬萊は飾らね共、先正月の心、三寶飾つて持ておじや」とて入ければ、内義は「應」と、楪に、穗長折敷く橙、柑子、蜜柑や何や榧、搗栗、妻「お床しや〳〵。久振で御無事なお顏、お嬉樣や」と出けれ

參らせ候―行成次第に遊ばせ

食出し鍔―短刀に用ゐる鍔

棒まかれな―棒でぶたれるな

之丞、中の間へ往て善哉祝や。此處は冷えます太夫樣、先お座敷へ」といひければ、夕「アア私が氣色も能いが能いには立ね共、伊左衞門樣と二人連、一度もかゝさぬ今日の日なれば、命の内にちよつと來て伊左衞門樣に逢ふ心。此方樣達の顏見たいと思ふ折節、呼に來たを幸に此處迄は來ました。座敷は氣儘に勤める、左樣思ふて下んせ」喜「何が扨御氣任せ、どふ成共りにやらしやんせ」と、座敷へこそは出しけれ。冬編笠も垢張て、紙衣の火打、膝の皿、風吹凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれど古の、花は嵐の頤に、今日の寒さを喰しばる、食出し鍔も神さびて、鐺詰りし師走の果、胡散らしく吉田屋の内を覗いて、伊「喜左衞門宿にか、ちよつと逢ふ。喜左衞門〳〵」と鼻に扇の大柄なり。男共口々に、「ヤア彼奴は何者じや。風の神か、鳥威しの樣なざまで。何んじや、喜左衞門に逢ふ。百貫目も遣ふ大盡のいふ樣な、棒まかれな」と云ければ、「ヲヽ、百貫目がそれ程貴い物でもない。喜左衞門といふべき者でいふ程に逢せてくれい」男共「どりや逢せてくれふ斯んな目に遭せてくれふ」と、竹箒持てかゝるを、喜左衞門飛下り、「强請者か知らぬ、粗相すな。誰方で御坐る」と笠を覗いて、喜「ヤア伊左衞門樣か」伊「何んと喜左」喜「これは夢か七ッか、扨お久しや懷しや。京大佛の馬町に御逼塞とうけ給。霧樣よりは數通の御狀、

を出るに譬ふ
つけ屆—庭錢の事
裏白—齒朶
鱓—正月に飾る魚、達者にかく
彌しも云々—愈上替らずに御目にかゝる
節季候—頭に齒朶を頂き赤き布にて面を裹み萬歲の如く歌舞する者
女郎衆に—女郎には遣手がつく
勤めも心のまゝ—勤も夕霧の勝手に任す
投入—活花の語、簡略の挿方、身を投るにかく
角前髮—少年の髮形

日の長持、お客に太こ持、こりや又賑々女郎衆に遣持、お家は金持代々福々、松吹く吹く／＼松風や、松賣る聲こそ。三重 戀風の、其扇屋の金山と、名は立のぼる夕霧や、秋の末よりぶら／＼と、寢たり起きたり面瘦て、藥も日數ふる雪の、重らぬ先の養生と、勤めも心まゝなれど、深きよしみの吉田屋は、足本輕き道中や、暖簾くゞるも力なく、夕「今日は目出度ふ御座んす。アヽしんどうや」と腰打懸け、我身を横に投入れの、水仙きよき姿なり。喜左衞門機嫌能、「是は／＼太夫樣、御氣色も能いかして、聞た程瘦もなされず、お顏持もずんど能い。先今日は嘉例の餠搗、格子へお出なされてより去年の今日まで、伊左衞門樣とお兩人、一度もお外れなされぬに、今年の餠搗ばつかり、伊左衞門樣は流浪遊ばす、お前は御病氣、嘉例を外す處、此喜左衞門頭痛八百。ちよつと成共呼ましたいと願ふ折柄、今日のお客は四國のお侍、頭巾で頭は見へね共、角前髮のお小性らしい。其器量の能さ、おぼこさ、道頓堀の若衆方女方、引浚へてもけも無い事。四國西國隱れない夕霧といふ太夫に、近付になりたいとて、態々大坂で御越年。お氣合に構ふとて、初對面はお勤めなされぬも存ながら、呼に進ぜた。さすがお馴染の喜左衞門、否應なしのお出、身祝ひと申、どつといふた餠搗、女房も尻餠搗て悅びます。是杉、沖

餅花—正月に柳の枝に餅の球をつけたるもの

日取吉田屋—日取よしにかけたり吉田屋は九軒の揚屋

難波津の歌—仁徳帝の高き屋に登りて見れば云云の御歌

やゝゑい—餅搗く掛聲

大杵云々—大杵を多きに舁夫を下すにいひかく

恵方棚—歳徳棚

谷の戸—年期を移へて遊女が廓

夕霧阿波鳴渡

上之巻

近松門左衛門作

年の内に春は來にけり。一臼に、餅花開く餅搗の、賑々はしや九軒町、嘉例の日取吉田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵、舁夫の長兵衛が大汗で、「やあゐい」中ゐの萬が臼取の、「さッ、やあゐい、さッ、やあゐいさッ」「さッさ搗け〱」「ハッア木やりで搗やれな」先恵方棚、神の棚、鏡取る〱遣手衆の、顔にとりこの面白いとて妓衆の笑ひ、禿が手折る柳の枝の、春も近づく、年も近づく、やがて廓も谷の戸も、出て初音の鶯の、羽子づくろひの君も有、正月買のセッキゾロだい〱盡、太夫様より附屆ケ、門を賣る聲山草や、ちよつと祝ひましよ。裏白、楪、䱇で御座んせの春永に、いよしも替らぬ御見まで、逢瀬を契る餅は杵、ついて離れぬお客を祝ひ、臼へ入ます、ます〱全盛、座敷は善哉庭には、節季候、こりや又目出たい揚屋の餅搗、紋

つく息—突くにかく
出死の田長—時鳥にて冥途に通ふ二人の魂に喩ふ

たうつ藍の虫の息、苦む躰に氣も迷ひ、「かはい〳〵ア丶、かはい」と、共に苦む男の心、「南無三寶後れじ」と、落たる文をくる〳〵卷、口押割て含ませ、髮剃押取り、喉のめぐりを切さき〳〵、續くは首の骨ばかり、刀で切たる如くなり。その髮剃の返す刃を、我喉笛につく息も、いる息もはや絕々の、おなじ枕に死出の山、しでの田長かほとゝぎす、きゝに北野の藍ばたけ、藍に染めたる魂魄と、回向に色をぞあげにける。

て盆に必ず此草な佛に手向く

夢ちがへ—惡夢を善夢に返す呪あらちをのかゐやのさきに立つ鹿も皆へなすれば向ふとぞきく（秋齋閑語）

のたうつ—藍の虫が蠢く如くも

と引かへて、戴く我は草葉の影、さぞ父母のお歎きを、思ひ遣れて情なや。何事もゝ追付目出たくめもじにて、申まるらせ候ゝめで度かしくと止られし、是がなんの目出度いこと。子を祝ふ親心、無下になしたる身の罪科は、先の世からの約束か。二枚重の御文を、金水引にて綴られし水引の紅落て、おつやと云ふ字は血に染みたり。子の血は親の血の別れ。血筋が教へて此如く、先へ知らせの有からは、今の最後を物の告、さぞや夢見が惡からふ。明日は占ひ夢ちがへ、違へても祈りても、返らぬ後の悔言。いとほしの父母や、名残おしの伯母樣や」と、文を抱締め肌につけ、悶へこがれて泣きければ、男も共に伏沈み、「皆此歎きは我故」と二人が膝にもたれあひ、咽返りてぞ歎きける。小「あれゝ明星樣も高々と、明方に程はない。此文口にくはへて未來迄も持まする。最後の苦患に離れたら、含ませて下さんせ。念佛も心で申、こな樣口で高々と、勸めて殺して下さんせ」と、文ひん捲てしつかとくはへ、兩手は合掌心に念佛、顔で髪剃教へつゝ、早ふと急ぐ目元にも、可愛男を見をさめの涙は玉を列ねたり。それも今を限りの詞、「さあ」とばかりに振あげて、見れば目も眩れ二目共、塞ぎうつぶき「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」を力にて、襟引よせて髪剃の、柄迄ぐつと一刀、突れてうんと反返り、三重の

まめ―豆と健全とかく

みそはぎ―濕地に生ずる植物に

らもと、幼少で二親に離れ、今は在所の兄より外、一門眷屬一人もなし。鍛冶屋の鎚の一本立。親兄弟共頼みたる、親方には勘當うけ、我身ばかりか和女迄、殺して一家に憂をかくる此科は、地獄の火焔に鞴かけ、無間の底の鐵床にのせられ、呵責の鎚に骨々を、打碎かれんは今の事。よし夫は厭ね共、和女は國の弔ひうけ、六道の辻の憂別れ、是が今から悲しい」と、縋り付てぞ泣居たる。小「アヽ憂いこと云ふて下さんすな。私とても親伯母の心を背き歎をかけ、幾せの罪をつくりし身が、よい所へはよも行くまい。無間奈落の底迄も此手は離さぬ、こな樣も私が手離して下さんすな」と、互ひに引よせ寄せられて、抱あひてこそ口說けれ。母樣のお文をも來世で讀んと肌につけ、封目も切らね共、親子は一世冥土にて、呵責に逢ば目も眩み、妄執の雲に文字消て、讀むも此世の名殘ぞと、親子の緣も封目も、切て披きし文の中、「是なふ熨斗と昆布とに節分の、まめで下れの祝ごと、今が冥土の門出と、御存じないか悼はしや。母樣常が血の道持、長文書く事お嫌ひが、子の可愛さかこま〴〵と、舟の中息才にはや〳〵下り、待祝ひりゝとあそばせし。父樣今年は丁七十の賀の祝義、一門衆の振廻も和女下りを待受て、生御魂の祝ひ一所にと盆迄延すと書れしが、盆には我も新精靈、親子の盃みそはぎの、露の手向

にかく以下皆かけ詞
緞子—鈍
繻子こし—仕過し
ぬめりんず—胡麿かす
羅紗—埒
とびざや—飛ぶのり—糊と法
若草—二人の年若にかく

帳面皆ぬめりんず、らしやもないこと云はしやりんずの、はや人玉も飛ざやぬいて、共に刃の諸羽二重の、おなじ枕にふしつむぎ、重ね井筒の戀の水、結び汲む手は多けれど、色は樣々紺屋染、胸はもゑぎに紅ひはだ、さやけき色は是ぞこの、とくさに染てさしも實に、心中みがくゆかりかや、花紫に薄淺黃、桔梗花色地白型、紺屋ののりの道廣く、到り先立つ此人々を、今身の上の智識ぞと、賴む外には菩提をも、若きは別ちあら人神の、天滿の方に見ゆる火は、我を尋ぬる提灯か、野邊の螢か神の御燈か神垣や、神明宮にお暇の、後世は鳥居の二柱、二人離れず立添へど、こぼす淚の雨にさへ、千代の老松つれなくて、地水火風の若草は、因果の嵐無常のわけ、時を別たず時ならぬ、夏の枯野に迷ひたる、あかつき露に身もひたれ、帷子裾に纒はれて、歩みかねたる二人が躰。平「是なふ十里も來たる樣なれど、まだ爰に行吟は爰で死ねとの神明樣の、敎ならめ」と泣きければ、小「アヽあの町は老松町、伯母樣の家も二三町。伯母樣の近くで死したらば、緣に引れて後の世は、親にも逢に藍畠」藍より出て藍より靑く、罪より罪の重からん、來世を待つこそはかなけれ。男髮剃取出し、「扨も因果な身の果やな。人は高きも賤しきも、死しては出家の髮剃を、頂くものに極まるに、その髮剃で死ぬるかや。生國は大和たは

一二九十—脉の分るゝ所の數にて委しくは古寫本節用集にあり
早と—早くか
たい市云々—第一とたい市之丞とかく
笠屋云々—實說は搜奇錄一の巻にあり
魂魄—陽と陰とのたましひ、附ㇾ形之靈爲ㇾ魄、附ㇾ氣之神爲ㇾ魂(左傳)
おつう—半七の子
お龜與兵衞—卯月の紅葉にあり
小菊半兵衞—傳奇作書に出づ
金入—金を入れ

なるは、是も今來た道ぞかし。此世からさへ踏迷ふ。六道の辻覺束な。迷ふまいぞや」「迷ふな」と、泣くぞ迷ひの種ならし。あれ寺町の鐘の聲、一二九十は七々の、七ツの知死期、最後も早と來にけらし。狼狽て白たへ潛る畠垣、仇の譬の朝顏も、今咲かゝる花の露、夫より先に凋む身は、明日のあさ日に此體、干ん曝さん淺ましと、縋る涙の龍骨車に、あひの水さへまかすらん。世の中に絕て心中なかりせば、冷泉二世の賴みもなからまし。誰か仕初し此契、音に聞きしは生玉の、それが初のたい市之丞、つれて男も名の高き、大和の國や三笠山、笠屋三勝舞の袖、つまとつまとを引よせて、結ぶ無常の薄けぶり、千日寺のはかなしや。別れし跡の寢姿は、歌夜中の鐘に目を覺し、母よ〳〵と乳吞子の、歎きを捨し修羅の道、魂は冥土に到れ共、魄となりたる今の世の、おつうは母の形見ぞや。此曾根崎に埋もれぬ、大坂三十三番に、名を殘したる順禮補陀落や、大慈大悲の誓にて、ついには兜率天滿屋の、お初も佛なかまかや。道具屋おかめ與兵衞とは、思へば近き町つゞき、世は何事も難波橋、よしとあしとの境筋、中に立たる賤が身は、不便と思へ備後町。夫のみならず吳服屋の、手代半兵衞は彼の池田屋の、小菊にたんと金入なれば、心どんすな者でもないに、身のしゆすごしに氣はちり緬の、見世の

北野—來た
梅田—埋め
長良—乍ら
池田—伊丹へ行けだに皆いひかく

よその云々—小かん心中の一節を尺八に合せて唄ふ
二十二三—年と三味線の二三の絲とかく

分。お騒ぎなさるゝ事でない」と、いへ共伯母も傳内も、「先おつや様起しませふ」と、連立ち奥に入けるが案の如く小かんはなし。「是は〳〵」と戸棚を明けつ、庭の隅々穿鑿すれば、著替の帷子引ほどき、庇のたるきに結びさげ、屋根へ越したに疑ひなし。「なふ悲しや小かんが居やらぬ」と、伯母が泣く聲落人ありと云ふ聲に、家内の男女驚き騒ぎ、「扨は今のじや、程はない。隨分追かけ、死ぬ先連て北野はあんまり近い。死んだら體を梅田は爰じや。町衆迄に御厄介、近比御無心長良へ走れ。八ッの太鼓がでん〳〵でんぼあとが屋とやのいたみへいけだ、茶屋中組中駕籠の衆國の侍交りしは、鬼に鐵鎚煎餅屋の、伯母は小橋へ急ぎける。

下の巻　平兵衛小かん夜ルのあさがほ

よそのつらねも我命も、一よぎり成うきふしや、憂身の果は主親の、ばちにかゝりし三味線の、二十二三の糸きれて、殘る一期も暫しぞや。いかに今年のから露も、哀れ袂のさみだれに、心は今も皐月闇、木の下闇にどまくれて、覺えし道も幾度か同じ所にまひ戻る、跡にたづぬる願立に、神や佛のひかへ綱、のばす命と知ばこそ、「アヽ是又元の道

つど〳〵—毎々（にて候ふの義 俚言集覽）

はしもない—星にかく

しゆらい—雜用 たんぽ—銚子とたりにかく 漬—燗をつける 書出—鰹をかくにかく

つど〳〵に頼みます。伯母様も去らば」と、外に云ひさす襖さす、さすや障子の薄紙一重、見へざる事こそ是非なけれ。はや臺所も仕廻比丁稚起して、「こりや〳〵安治川の宿へ往て、明日明六ツに乘る程に、舟の用意せよと云へ。内衆頼む、七ツ過に駕籠二丁、安治川迄約束して囉はふぞ。伯母様は氣が盡きやう、夜食でもあがりませ」伯母「いやなふ此程胸がつかへて、夜食は思ひもよらぬこと。歸つて夫にも悦ばせ、明日見立に來ませふ」傳「夫なら酒が能ござらふ」伯母「ハテなんの辭義があるものぞ、酒も何にもほしもない」闇夜を辿りて歸りけり。傳内も氣くたびれ、「内衆酒の燗しやれ。一ツ飲で寐みたし。しゆらいも書付あるならば代物遣ん」といひければ、心得たんぽを漬生姜、しほがひに花鰹、書出し算盤に、暫らく時こそ移りけれ。伯母も宿へ行つく比、門を明けて立歸り、「なふ〳〵曾根崎の際迄往たれば、中町の方が騷しう、屋根へ上れのなんのと云ふ、手過ちか氣遣で夫故に戻つた」「ヤア心元ない」と、内の男は追々に走つて出る。傳内刀押取て、鉢卷引締め裾からげ、身ごしらへしつかと固め、實に侍の心掛、奥へ入んとする所へ、内の者ども走り歸つて、「ア丶氣遣ない〳〵。盜人そふなが二人連、濱筋の屋根傳ひ中町の辻へおりて、福島の方へ走つたを道通りが見付て、聲を立て騷いだ

頭がうつ―頭痛がする

は有ても反古なり。其上誓紙は男の方へ渡して、爰にはない」とぞ陳じける。「いや〳〵今迄懷中に守袋が見へました、ぜひにお隱しなさるれば、慮外ながら手をかけます」と、振ひいへば男は襖の中、見付られては悪かりなんと、守袋を戸の間より小かんが袖に、振ひ返せしはいよ〳〵危ふき契りなり。「ア丶待や〳〵尋常に破らふ」と、守袋を解く中にも、「サア二世の固めの起請文、破るは佛神三寶の守めも切果た。片時も生て何にせん。合圖の最期は爰なり」と、襖戸棚に肋を寄せ誓紙を披き、「南無阿彌陀佛」と合圖の詞、さつと引さき身をすり付、待ども内より音もせず、「南無阿彌陀佛」と引さいては身を付、引さき〳〵男の刃今や〳〵と最後を待てど、内には疑ふ恨にや靜まつて音もせず。「エ丶死ぬることさへ叶はぬは、是が誓紙の罰ぞ」とて、寸々に引裂て、どうと伏して泣きければ、二人「ヲ丶尤も道理や、つれなふ云ふも身の爲」と、皆々袖をぞ絞りける。涙を留め漸と、小「ア丶氣が勞れて頭がうつ。母様のお文も見たし少と爰で休みたい。誰も人の來ぬ様に、障子も閉て皆立て下さんせ」伯母「ヲ丶道理〳〵。傳内も端へおじや」と出ければ、小「中伯母様、平野屋へござんしたら、女夫のお衆傍輩衆、内外の者へも念比に、是から直に遠い國へ往まする。もふ此世では逢ますまい。年月の御念比忘れはせぬと、

生身は死身―諺、生あるものは必ず死す

の御文」と、懐中より取出し、「此直筆を御覽あり、とつくと御思案あそばせ。私が腹立も皆お最愛さ故なり」と、泣つ叱つゝ樣々に詞を盡し諫めしは、奇特にも又哀れなり。小かんも母の文と聞押戴き、上書見れば、「おつや殿參る母より。此方無事」と書れしが、「お筆に年の老たこと、十五の年爰へ來て、八年おがまぬ親の顔、見たふなふて何とせふ。生身は死身若しひよつと、死病うけたり共、母樣の懷しさに臨終も仕損ない、いか成恥も晒そふかと案じ過しする程に、親の事は忘れぬ、あんまり叱つてたもんな」と、文を顔に押當てきへ入たへ入泣きけるが、封目切て見たけれ共、文躰見たらば氣も落て、彌心が引れふず。平樣に談合したけれども、襖一重が七重の關、一人の思案に落かねて暫案じて居たりしが、「いや〳〵口でいふは安い事、どふ成共間に合せ、今宵の所をのがれん」と涙拭ふて、小「アヽそふじや今とつくと合點した。親には思ひ替られぬ。此方をふつゝと思ひ切、成程國へ下りましよ。伯母樣も傳内も、今宵は歸つて明日早々」といふ中にも、起請文を取られじと、守袋を後手に、棚の戸を細目に明けそつと入れば、男も心得受取しが二人の心の危さよ。伯母傳内も悅び、「御承引忝なし。とてもの事に彼の男の誓紙を、只今破つてお見せなされよ」と云はせも果ず、小「ハァ思ひきるからは起請

氏より育―譬にて教育の如何にて善とも惡ともなる

鳥は古來云々―胡馬嘶北風越鳥巣南枝とありて鳥獸も故郷を忘れぬ義

堅牢地神―佛縁のある土地を護り玉ふ天の神

なり共、いつそつやは死んだ共、どふなりともいふてたも。其方を頼む、此儘に大坂に置てたも。國へは否じや」と手を合せ、拜み口說も哀れなり。傳内わつと聲をあげ、兎角も云はず歎きしが、「扨も〳〵淺間しや、口と心が皆違ふた。氏より育が恥かしい。華美はすは成身に染り、うはの空成世にならひ、親の事も古鄕の事も忘るゝ程のお心には、いつ成果た情なや。心なき畜類も鳥は古巣を慕ひ、北國の馬は北風に嘶くとは申さぬか。鳥獸もそうはない。親ない者は身を樂に旅他國致せ共、親の墓へ參るとて百里貳百里戾るも有。此度御國の兄御樣、御知行拜領親御達は御隱居、髮を下して樂々と御法體の筈なれ共、おいとしやお母樣、つやが戾つて、二人の親が法體の顏見たらば、なんぼう殘り多からふ。ま一度髮の有顏を、おつやに見せたいばつかりに、惜からぬ頭の雪、解も撫るも子の可愛さ。早ふ連れて歸つてたも。傳内樣頼みます、と家來の我等に樣つけて待こがるゝ親心、私計すご〳〵と戾つて生てござろふか。手を出して兩親を殺すも同じ不孝人。堅牢地神のいたゞきに釘を打つとのをしへ有。釘は鍛冶屋が細工にて、打かねはなされまい。曲もないお心や。我等が母はお前の乳母、養ひ君の顏見んと日を數へ指をおり、待あこがるゝ母が心、思ひ遣れてお母樣の、御心底のいたはしや。則ち母御

人ばし―人をば也しは助辭

振捨て、御息才な顔ばせ見せて下さる筈成に、お心迄が變つたは少御恨に存る」と、侍の作法。互の顔は見忘れても乳兄弟なり主從なり、私迎ひとあるならば、恥も恥辱も泣にぞ泣き居たる。伯母涙にくれながら、「去とては面目なや。何もかも伯母が科、あの人ばし恨みやんな。身を賣せたも我故。此度國の出世に付、下るは其身の仕合なれど、あの人も大坂に思ひあふた方ありて、深い約束のがれぬ中、其方に隱して金調へ、伯母が力で彼の男と、夫婦になして年月の望を遂て遣たさに、身をはたいても煎餅屋、押ば碎ける身代の、そこを見せたる恥しや。・此上其方が心入、國へはよしなに云遣て、あの子が大坂で彼の男と、添るゝ樣には成まいか。遙々登つた乳兄弟、能らぬ事を聞するも、皆此伯母が身の因果。世の中の浮沈、子を賣る親は多けれど、姪を賣る伯母は我ばかり。恨しの娑婆の境涯や」と、聲をはかりに泣きければ、小かんも共に涙に咽び、「知ての通り胤腹一つの兄も有、妹もあれどいか成緣にか母樣の、私一人が祕藏子で、海にも山にも譬へられぬ、御恩をうけた此身なれば、明暮逢たさお床しさ、身躰は大坂に殘つても、魂魄は母樣の懷に入てゐる。是程に思へども、なまなか武士の娘とは、薄知に人も知る、免れぬ義理にからまつて、大坂の土とならねばならぬ。其方に任する。兎も角も煩と

伯母「それなら斯う通りましよ。何れも御免なりませ」と奥の座敷に通りしが、客と云ふは國本の迎の人。伯母ははつとばかりにて、伯母「小かんはあの人見知らずか。あれこそそなたの乳母の子乳兄弟、今度の迎に登つた人よ」小「ヤア知らなんだ恥かしや」伯母「いや和女より伯母が恥。此勤さする事國の人に見付られ、最早云分ないはいの」と、伯母姪ひしと抱きつき、聲も惜まず泣き居たり。侍鎮めて「アヽ是々少とも苦からぬ事、親御達御浪人とは申せども、國では賤しき業もならず、大坂は誰知らずいか成身過なされても、名字に疵は附ぬとて覺悟の前で登されし。それ故他人は差置て、乳兄弟の拙者が參る事、御内證の恥恥辱承つて能樣に、計へとのお迎ひ、いかにしても此間伯母樣の詞といひ、萬事合點參らぬ故、客と僞り方々を聞合すれば、平野屋の小かんは鐵鎚煎餅の姪の由聞屆け、猶念の爲一昨日表向の御一座、稚顔疑ひなしと藏屋敷にて金調へ、今日晝の間に堀江とやらんの前の親方、平野屋亭主も對談し、本金十二兩相濟し一札取て今宵から、自由の御身に致したり。最早氣遣ひあそばすな。私は乳母が忰和田傳内と申て、家中に若黨仕る。おつや樣と御同年稚名は石松、五ツのころ迄は夜晝お傍に附添ひ、一所に遊び育てられ、七才より男の身は、大身小身隔てなく、奥へ參らぬ武家

吸物—蜆を吸物にするとかけたり

お仕着—挨拶もきまり文句とかけたり

氣が通る—氣が利く

はや家々に行燈あげ、面々約束〳〵の、客も見ゆれば酒肴、吸物にする蜆川、水も色めき賑へり。小かんが揚の侍も一僕連れて、「何とおさが遲かつたか。小かんは來てか」と腰かくる。さが「是は〳〵小かん樣は今朝から待かねて、たんと腹を立てじや。ふられさんすな怖いこと。いざ先奥へ」と伴ひける。小かんは色を曉られじと、「此永い日をうつかりと、よふ待ぼうけにさんした。南か堀江かきつと吟味もしたけれど、馴染が無いだけ許してやる。其代に酒呑す」と挨拶もお仕著の、袂を戸棚に打覆ふ。北野の伯母は二三日、夜も寢ぬ目元とぼ〳〵と、「和泉屋殿は此方か。平野屋の小かん殿をちと呼立て下され。北野鐵鎚煎餅と云へば合點、頼みます」といひければ、さがも日ごろは薄知の座敷に出てしな〳〵囁き、さが「ちよつと立て逢しやんせ」と、云へども跡の氣遣に、棚の傍も離れがたく、座敷へ伯母も呼がたく、どふか斯かと思ふ顔、客は見てとり、「アヽこれ〳〵我等は一見明日は國へ下るもの、お客衆でも苦うない、是へお呼なされ」といふ。小「いや私が伯母樣咄したい事が有。自由ながら其間端へ立て下さんすか。客「何が扨〳〵。咄の時分は立ませふ。近付にも成爲早ふ是へ」といひければ、さが打笑ひ、「粹かな〳〵、當世は田舍衆程氣が通る」と走り出て、「これ伯母樣お客へ斷り申た。奥の間へ通らんせ」

鉦鐃鉢—葬式に用ふるもの故假りて自分の死を仄めかす

づし戸—袋戸

も門に出、「そこに何してぞ。屋内がお前を尋ねて、太鼓鉦がいらふとした」といひければ、小「アヽ仰山な凉がてらに紙鳶見に出た。太鼓鉦がいらふとは朔日早々祝ふて囉ふて忝い。太鼓鉦も鐃鉢も頓ていらふ」と涙ぐみ、跡に心は殘る日の影と入つゝ暮にけり。空にたなびく紙鳶、次第〳〵に引下す、中に小袖の絹紙鳶風を含みて下かねじが、糸眞中よりふつゝと切れ、和泉屋の小座敷の軒にひらめき落たりけり。「あれよ〳〵」といふ程こそあれ、紙鳶主大勢引連れて、「囉ひませふ」と駈入れば、あたり近所の血氣者、「それ遣る物か」と走りこむ。道行人は是次手に、お山見べしに込入るを、内の者共抑へても、我人差別あらざれば、天の與と平兵衛、群集に紛れ奥座敷の、庭迄どや〳〵入りにける。小かんは見つけ氣をあせる。兎角する間に漸〳〵と、扱ひ詫言たら〴〵にて、紙鳶を囉ふて立歸れば、皆入込の大勢も、殘らず表に出て行く。小かんは男を招きあげ違ひ棚のづし戸を明け夫を押入、「すはと云ふなら此方から、南無阿彌陀佛と聲かけふ。それを合圖に其髪剃で、私が肋を襖越にぐい〳〵と剜て、うんと云ふたらこなさんも尋常に死んで下さんせ」と、戸を引立て寄かゝり、口に鼻歌心には、彌陀の名號一筋の、紙鳶の糸より猶細く、切かゝりたる玉の緒の、結び續れぬ二人が命、危くも又無慙なり。

打たるゝ杖―諺、他人に撫でらるゝより親の折檻が却て嬉し

ばしやれた―蓮葉な

優曇華―此花三千年に一度咲く故云ふ

居たり。小かん「あれやう／＼と忘れて居た物、親の事又云出して泣さしやんす。打るゝ杖も床しいと云物を、拳一ッ當られず可愛がられた現在の親、是は懺悔じや忘られぬ。迎に來たは乳兄弟、顔恰好は覺へねども、親達と思ふて見たけれども、町方に居る分に云成した私が身が、ばしやれたなりで逢れもせず、親の事を思ふやら、こなさんの事思ふやら、心を推して下んせ」と、又さめ／＼と泣きけるが、「是ではすはといふ時に、國へ心が引されて、未練の出來まいものでもなし。こな樣に逢ひ次第死んでのけふと覺悟をする。髪剃は身を離さぬ。是見さんせ」と、袖口から手を引入て懐中の、髪剃の柄包みながら、男の手にしつかと持せ持添て、「南無阿彌陀佛」と我腹に突立るを、捥取て引たくれば、小かん「こりやなぜに。もふ逢ふことは優曇華、こなさんの手で死にたい」と、咡き口說ぞ憐れなる。平「はて悪い合點な、まだ人立も有中に、思ふ樣に死そふか。其心底に極らば、まそつと爰にさまよふて日の暮るに程はない、人顔見へぬ時分に足を限に何處でも、見事に身躰を竝べたい。ひらに待や」と制すれば、小「おなじくは今爰でちつ共早ふ」と、死神の誘ふ命の墓なさよ。和泉屋には「小かん樣／＼」と呼はる聲々。平「南無三寳最後の邪魔。去ば」とばがり平兵衛、堤をおりて身を何となすび畑に隠れけり。和泉屋の男ど

紙鳶…大坂などでは五六月兒童の之を弄ぶ（嬉遊笑覽）

唐團扇云々—以下、鬼頭藤の花、牡丹等は凧の名にて皆嫖客の所作にかけたり

彼の人—平兵衛の事

淺黄島—淺黄縞

夕顔—源氏夕顔巻の、よりてこそ夫れかとも見め黄昏に仄々見ゆる花の夕顔

てたも。小かん樣もお行水、私も汗を流そふ」と奥に入れば一座の色、「私らも行水してこふ」と、皆々表に出にける。空も涼しき夕風に　はやる今年のいかのぼり、雲に舞鶴とんびいか、から風招く唐團扇、鬼の頭も色里の、うへにあがればたよ〳〵と、しなだれ上る藤の花、誰ふみいかの一結び、其思はくの紋付て、袂すゞしき小袖いか、盃いかの品もよく、菊や牡丹の花いかを、戴きあぐるたいこいか、鰻瓢簞鯰いか、吹ぬ風もつ扇いか、雲をゑどるに異ならず。往來の人も立留る、此内に彼の人の見へよかしと、紙鳶見る顔で表に出、上下に氣をつくれば、梅田橋の西詰に、淺黄島に深編笠、小かん「アアあれそふなが」夕顔の、黄昏たどる覺束なさ。先にも見付て編笠の、下の目遣ひ届かねば、心の中に招き合、目はいかのぼり爪先は、其方の方へ行水の、橋の詰迄そろ〳〵と、跡の怖さに身も慄ひ、傍へ寄りは寄つたれ共、人目にせかれ抱付れず、小「文を見てから私が氣は、死んで居るぞ」とばかりにて、泣くにも涙落次第、拭ふも人目つゝましや。男は笠のうちしほれ、「親方も道理の勘當、是以て恨なし。そなたを國へ下さずは、親に不孝の冥罰、行末善らふ樣もなし。下したいも一杯なり、別るゝは猶辛し。此平兵衛が胸一ッで、本國の親達迄嘆をかけ苦をかける、許してたも惡縁じや」と、笠を傾け泣き

梅田云々—白張提燈は葬式に出すもの故死んで梅田の墓場へ行く時要ると也
じあい—間にあひ
五音—調子

やがて梅田へ行時にどふで要らねば叶はぬ」と、浮世をすねし言葉のはし、一座の妓や下女久三、「仕直に遣たらば、多分晩のじあひにならふ。歸らぬことは悔まぬもの、いふて歸らぬ〳〵。歌いふてな歸らぬ死出の旅、サア飲懸ふ」と祝ふても、定まる前世の約束を脱れざるこそ哀なれ。平野屋の小めらうが風呂敷包打かたげ、「アヽ熱や」とて走り入り、「さが樣ちとお耳かろ」と耳に口よせ、「内義樣のいはしやんす。アノ小かん樣には、鍛冶屋の平樣と云ふ間夫のお客が御ざんすが、樣子あつて逢せませぬ。晝からちら〳〵此邊で見へまする。門より外へ出しませず、行水もそこで賴ます。氣を付て下さんせ」と、呫き散し歸りけり。小かんはしく〴〵聞付て、「さが樣今のは何のこと、平樣の事であらふ。さりとては氣の毒な。先の人は親方持、浮名が立ては職人の、身の爲によからぬ噂、人の云ふは皆惡口、間夫の何のと云ふ樣な、深い譯では更々なし。今でもふつと見へたらば、どこぞでそつと逢てや。此方からとんと埒明て、手を切て退ましよ」と、口にはいひて目は涙、さがは五音で推量し、「アヽそんな事氣に掛て此勤めがなる物か。世間の口に戸をたてよ、錠おろす其錠鎰は、如何な鍛冶屋の平樣に誂へてもなるまい」と、夕暮近き入日かげ、さが「お客樣達見よふぞや。行燈の用意しや甜瓜も冷しや。湯もとつ

お本尊、六日朔勝鬘會を行ふ（國花萬葉記）
此方の揚—此方の客が揚錢出して
よいすい—よき推量
三十郎—俳優嵐三十郎
小憎い—小づらにくい
一げん—初對面
みしらせふ—伎倆を示さう

る〻。さが「皆様緩りとやらしやんす。道頓堀でござんしよの」妓「よいすい〳〵三十郎の初日見て、芝居では大酒、戻りは駕籠でむしたてる、熱いこと〳〵。此暑さでは霍亂して、信田森のうらみくず水、一ッ飲しや」とわめきしが、「ヤア小かん様、こなさんは參らずか。定めし夕平様と、手を引あふてで御ざんせふ。小憎いことや」といひければ、小かんはつと肝にしみ、小かん「そうした事ではないはいな。今日の客は一げんの田舍の侍、日が暮て見へる筈。それ迄は愛染様へ參らふと儘なれども、心に大願有故に提灯二ッ紋付て、今日の間に合ふ様に一昨日から誂へ、今にも提燈出來次第參りたふござんすが、提燈の出來ぬのも氣に掛ります」といふ所へ、提燈屋の息子走てきて、「小かん様爰じやげな、提燈が出來ました。二ッで四匁四分じや」と云ひ捨てこそ歸りけれ。小かん「嬉しや〳〵さが様つい參つてきませふ。むづかしながら四郎兵衞殿、此提燈の紋のわきに、書付して下さんせ」といひれけば、料理人は「お易い事、目出たふ一筆みしらせふ」と、提燈あぐれば紋なしに、眞白四郎兵衞興さまし「こりやどふじや。四匁四分で白提燈、氣轉の悪い提燈屋、ちやつと紋を書せて來ふ」と走り出れば、小かん「これ〳〵もふよいはいの。提燈屋に科はない。私が佛にうけられず、願の叶はぬ知らしめ、そふして置て下さんせ。

堂島―御堂にかく、以下懸詞
來て見よ―簑を著てに
大江橋―逢ふに、又櫻の緣に吹雪、梅の緣にみどりの橋と續けたり
法華長屋中町―曾根崎新地にあり
吉野川―よしにかく、花の緣にいひし迄なり
一まき―一類
六月朔日―此日正月の飾餅を下して食す
掛鯛―正月に吊した鯛を今日藥にして食へば邪氣を避く（歲時記栞草）
缺餅―お鏡を缺いて冷水に漬けて食ふ故氷餅といふ
勝曼院―新清水寺の北愛染明王

戀草の種ぅへんとてかためしは、神か佛の堂島をきて見よとてや田簑橋、夜々を重ねて大江ばし、はしのゆきげた雪ならば、いくたび袖を拂はまし。花のふゞきの櫻橋、梅田のみどり曾根崎の、青葉隱れの鳥の音も、法華長屋の名を立てゝ、神祇釋教戀無常、中にこめたる中町や、其家々の吉野川、流の數の多ければ、よねが情のはなの網、掬ひとられぬ人もなし。色里に誰が身の樂で身を捨る、人はなけれど取わきて、平野屋小かん一まきは、語るも聞も哀なり。今日は六月朔日の正月納めの紋日ぞと、思ひ〳〵の揚の客、小かんは田舍の侍に、初手は內にて二つめは、濱筋の和泉屋、さがゝ許へと出かけたる。女子亭主の譯よしが、穗長の煤を打拂ひ、人に情を掛鯛のむしり肴と春めかす、其かきもちの氷より、淚の氷とけやらぬ、うき身の上こそ無慚なれ。小かん「あれ〳〵勝曼參りの妓樣達、駕籠が戻る」といふ中に、早表まで舁よせて、簾打あげ 妓「コレさが樣、今下向しました。小かん樣爰にか。こなさん參ると云はんしたが、道寄せずにおとなしう、早ふ下向さんした。夫も合點、早ふ逢ひたい人があろ」と、さゞめき戻る駕籠の數々、衆人愛敬愛染の、ゐとくも見へて頼もしし。さがもそれ〳〵挨拶して、「松屋丸屋河內屋の、妓樣達も此方の揚で參らせましたが、遲いことや」と云ふ所へ、程なく駕籠を舁入

皮切―灸の初めにて一番目は熱いが次よりはさもなし

かたられた―騙られた

鹽水―貞觀式に灌鹽水」とありて物を清める事、爰は穢多の跡を清める

備後町―備後表にかへる事

離れがたない筈なれど、それは一度の皮切。なんぼいとしい戀しいも、身が立ねば叶はぬこと。但思ひ切られぬか、サアいやおふの返事しや。どふぞ〱」と手詰になれば、平兵衛顔も心もうろ〱と、否と云へば主人の慮外、おふといへば年月の、小かんが情仇と成。思案涙に胸つまり、「なふ旦那様おゑ様おつま様も頼みます。その御返事は私が身に成代つてどうなり共、思ひ分て下さりませ。鐵火は御免」と計にて、かつぱと伏して泣きければ、親方も是迄と燒鐵をつ取り、大地へどうと投げつけ、「エヽ欺されたかたられた。十八年此方、たとへ犬猫飼たり共是程にはよも有まい。半時も内には叶はぬ叩き出せ」と飛びかゝり、胴骨をどうと踏む。情なき丁稚共、柄長の鐵鎚手々にをつ取、目鼻もわかず打出す。平兵衛大聲あげ「假令擲ふが叩かふが、此平兵衛は是の内より外往き所はよそにはない。死ぬる共此内から直に死ぬる」と、駈入を敲き出し、走り入れば敲き出し、なんなく辻へ打出し、打て清めの鹽水や、跡は火を替水を替、表もかゆる備後町、へりも切れはて緣切れて、とこ離れ行 三重 戀路なり。

中の巻

忌ひ月―正五九月にて今五月なれば忌み愼む

打みしやがる云云―打潰されてもよい

鐵火を握れ―火起請にて罪なき者は之を握りても害なし（武家盛衰記）

まかなひ―つくらふ

げ、「申おゐ樣おつま樣、旦那樣へ詫言して御禮申て下さりませ。道知らず恩知らず大惡人の私に、金迄出して此難義お救ひにあづかること、親も及ばぬ主の慈悲。今日は忌ひ月廿八日御緣日不動の釼に喉笛を突通され、身の家職の鐵床に打みしやがるゝ法もあれ、又や二度惡性ごとふつゝと思ひ切ました」と、淚を流し云ひければ、母親「ヲヽでかしやつた〳〵。それが其方の身の果報」と、皆々悅びほめにけり。親方も機嫌を直し、「流石男じや滿足した。此上ながら此方の心の落付ため、誓文の證據に」と、三尺ばかりの掉鐵の、夕日の如く燒けたるを鐵挾にて引出し、鐵床にどうど直し、「是は此度禁中樣お内侍所の釘下地。此内侍所には日本の神々御ばん有、八萬餘座の神の司の御寶殿、其釘に成黑鐵、今の誓文僞りないと見る前で鐵火を握れ。心に誠ある者は氷よりも冷やかなり。少も僞有者は腕燒けたゞれ落ると云、佛神に嘘はない。其方も發起して、今の誓文立るからは熱いことは有まい、サア握れ」と云ければ、平兵衛色變り、只「はゝはゝ」と計にて跡退りにぞ成にける。女房笑止がり「ハテ爰な人うろたやる、思ひ切たが定なれば鐵火に怖い事はない。但は當座まかなひに金取欺しの空誓文か。去りとは惡い合點。一生の病をぬき、身上の固まる事。さつぱりと思ひ切りや。思ひあふた馴染の中

仁藏―仁藏は丁稚の通り名

な。己が身の立ことならば、彼等に商ひする迄なく、五百目や六百目は此利右衞門が出しかねぬ。遣ふても〳〵止りの知れぬ悪性金、氣儘にさするは汝が身に毒飼と云ふものよ。内外の者も町衆も、三人寄れば己が評判、聞て無念な親方の心の内を推量せよ。さきにも仁介長三めが、噂をするを叱りつけ、今で彼等に面目ない。去年の春から際々に、或は百目八十目、懸の算用不埒にて、何時の際か帳面のさつぱり濟んだ事が有。夫のみならず堺筋の絹屋から、紺繻子の女子帶五十六匁、緋縮緬八尺三十五匁と云ふ書出、覺えが無とて返せども、跡からは持て來る、不思議な事と思ふたに、今日と云ふ今日内のかゝが、緋縮緬の正躰を見屆けて歸つた。ヤレ勿躰ない冥加ない、灰まぶれの鍛冶屋の仁藏、身にさへ著にくい緋縮緬に、足を四本踏ごんで其罰はなんとせふ。身の行末が可愛ひ」と、聲をあげて泣ければ、女房娘諸共に、「悪ふ聞きやるな平兵衞」と、共に袖をぞ絞りける。罰利生有親方にて涙をとゞめ、主人「こりや平兵衞、云ふて居ては果しがない。今迄の事は皆許す、是から魂入かへ世帶を持て出る迄は、茶屋の見世へもあがるまい、お山と詞もかはすまい、と急度誓文たてふならば此度の金たとへ四兩が五兩でも、今出して取らするがサアなんと」と云ければ、平兵衞飛退り兩手をついて頭をさ

あたはぬ—與はちぬ

額に毛拔—男をつくる

鹿を逐ふ云々—諺、女に夢中になつて他を忘れる

が定か憎いが定か。只今のお詞は、弟子子不便な云ひ樣で又此仕方は平兵衞に、首くゝれとのなされ樣。鍛冶の道一通り、火を淸めるといふ事は、商賣なれば知つて居て、其上でする商賣。一旦はさも有れ、一生主に逆らはず詞一つ返さぬ此平兵衞が、是程迄逆らふて申からは、身拔のならぬ譯有と、大目に見て下されて、其御恩を忘れる平兵衞めではなき物を。但し銀を引こんで損懸ふとの氣遣か。年の切は去年明、身を質に置からはお氣遣はない事。平兵衞が身一生、生る瀨か死ぬる瀨の、大事の銀に行詰り、やう／＼大和の宿村が、誂物を天のあたへ、時の間を合せたく、奉公して十八年目始めて旦那に叱られ、あたはぬ身にはあたはぬ金、命を捨つるも世のならひ、それに悔みは殘らね共、額に毛拔もあてる者、見世の前で晝日中、町の衆、道行く人、友傍輩も見るぞかし。丁稚小者をする樣に、曲もない打擲き、脊骨は折ふが碎けふが、打たるゝ鎚は痛ふない。あはれを知らぬ親方殿、見て居て打するおゑ樣やおつま樣の情ない、お心の鐵鎚が身節にこたへしみ渡り、いたひ悲しい恨めしい」と泣ひては恨み、恨みては我身の科を悔み泣き、色に迷ひの心の闇、押量られて不便なり。親方彌々腹をたて、「鹿を逐ふ獵師は山を見ずとは己が事よ。お山狂ひに眼がくらみ、人の理非も身の上も、一寸脇が見えぬよ

おきをれ―おきやがれ

舊功云々―年功ある子飼の雇人

怒りけるこそ尤なれ。平兵衛至極につまれ共、懐中の銀に離れ難く、平「よふござる。今の間に私が打てやる。地鐵は後で算用」と、横座に直つて足鞴、地鐵打くべ吹たて〳〵、「丁稚ども傍輩のよしみに相鎚ひとつ打てくれ。平兵衛が一生の恩に受ふ」と頼め共、親方の顔色みて、誰か詞の相鎚さへ打者とてはなかりけり。平兵衛恨み泣き、「エ、そふはせぬもの聞へぬな。うぬらがくたびれ眠たがる時には、己が代りをして二人前を働らいて、宵から寢させたり休ませた恩德を忘れたな。よい頼まぬをきをれ。裏鐵の千足や二千足、平兵衛が片腕半日の仕事に足ぬ。親方傍輩ひとつに成て、此平兵衛が一分すてさせ、此首尾なら死ふも知れぬ、死だらば此一念己等が首引抜て」とてこ〳〵とつてらこ〳〵とてこ〳〵と打鎚に、落る涙もこぼれそひ湯玉とたぎる計なり。親方土間に飛でをり、鎚鐵挾取て投げ、「朝晩淸める鐵床に涙をかける罰あたり」と、鎚の柄をおつ取直し胴骨を四ツ五ツ、たゝき付〳〵、「己が敵は此銀」と、懐中に手を押入、「是銀を返せば云分ない。此方には請取らぬ、どこぞ外で誂らや」と、投返せば二人の者、詮義無益と思ふ顔、商「手付の一貫覺えたか。平兵衛重ねて取に來る」と、云ひ捨てこそ歸りけれ。平兵衛わつと大聲上、あたりも恥ず歎きしが、「去とては旦那殿、舊功なした育立を、可愛

目代―名代

己が先いき―我得意先を廻つて利を得る事

ごくに立ぬ―役に立たぬ

らへすべらし紛らかし、只名所を隱すにぞ。平兵衛も親方に根問させては惡かりなんと、

平「サア請取は仕廻たり、渡して早ふ戻しましよ」と、取らんとすれば亭主押へて、「イヤ此商ひはせまいはい。かね請取たら早戻せ。始聞けば請取らぬ。あの衆は大和の金銀たんと持た村の、牛馬迄持つた樣、あの衆の誂へ物、此利右衛門は請取らぬ。我等が家職に疵がつく、勿體ない」と掻さらゑ、ひん抱へて奧へ入。平「先待つしやれ。夫では私が立ませぬ。損のいく細工でなし、銀に一厘不足なし、手付取て手形して、渡す段に變改して職人が立ますか。樣子があらばある迄、それなら私が内證の自分仕事にしませふ。時には家に難つかず、疵が附けば平兵衛が疵。渡さねばならぬ」と取付く所を突こかし、はつたと睨で、主人「うつけ者、疵が付ば平兵衛が疵とはどの口でぬかした。此利右衛門が目代にして、弟子手間取をも引廻す己に疵を附まい爲よ。京御所方の御普請の、下細工の釘請取、火水を清める最中に、正しふもない銀を取、伴ひつきあふ己が先いきせふと思ふか、冥加があらうと思ふか。五兩に足らぬくさり銀、寶の山と惜みをる、根性の甲斐なさで商賣がならふか。けつく丁稚の時分には、人にも成らふと思ふたが、エヽごくに立ぬ根性」と、涙を浮め齒ぎしみし、「向ひ隣へ聞へぬ中、銀を戻して去せをれ」と、

けてゐる代物

あはぬ―向か

いや〳〵お茶云云―商人は穢多なる故遠慮して呑まぬ

光の間云々―電光石火に寄す、忽ち穢多の身の上を知らる

點の、數もよむやら讀ぬやら懷中に押入れ、「請取でも手形でも起請でも、仰付られ」と硯紙取出し「是旦那樣、上物の裏金二千足戸棚に有ふ。取出し下さりませ」とぞいきりける。亭主は裏金束ねながら持て出、「平兵衛が咄で聞ました。大和の雪駄屋殿は各で御座るか。是はあはぬ細工、私が聞ば請取るまいに、平兵衛が在所から、念比中じやと申てどこでやら請取た。重て斯は成ませぬ。それおつまお茶進じや」「あい」と返事も色づぎしあかゐの茶碗手にすへて、つま「出花一つあげましよ」と差出せば、甲商「是は〳〵忝い」と取らんとせしが、「いや〳〵お茶はたべますまい。御無用になされ」と云ふ。つま「お前はいやならお連樣」乙商「いやわしも御免なれ」つま「平にお一ッあがりませ」「何しにお辭義申ましよ。兩人ながらお茶は得たべませぬ」つま「そんなら白湯でも上ましよか」商「いや〳〵所望に御座らぬ」と、いへばおつまも打笑ひ「ハア愛想もないことや。こりや仁介、煙草盆持てこい」とて入にけり。仁介が奥より煙草盆、鍛冶屋炭火のおこり立、有る火はをいて懷中より火打に火口打出し、煙草のむ身は石の火の、光りの間をも待かねて、身の程知らるゝ墓なさよ。亭主是に心付、「何も大和のお衆と有。奈良郡山左手右手、吉野郡の奥迄も雪駄屋衆は皆存じた。御兩人の御在所は、何方」と問へど聞かぬ顏。あち

四兩あし—四兩以上

うちがひ…帶袋

相場は云々—金一兩の相場は銀六十目と錢十五匁なれば三兩三分で二百四十目となる（貨幣秘錄）

しかけ—寫しか

ませふ。伯母樣偏に頼みます」と、又手を合せ泣ければ、伯母「いや頼む事ではござらぬ、私が身に掛つた事。其銀さへ調へば何の案ずる事もない。ちつと胸が開た平野屋へも立寄て、小かんに云ふて落つかせふ。そんなら早ふ歸りましよ。内方へもよい樣に」と出れば、平「是々此傘小かんに返して下さりませ」伯「なふ〳〵是は幸」と、差て出たる傘や、とらが涙も引かへて丑天神ののべの露、消ゆる間近き 三重 命なり。見送る道もしみづきし、草鞋に編笠の田舍商人二人づれ、「ヤア平兵衛殿いかい暑さでござるの。誂へ物共出來ませふ、今日請取て銀も濟し、明日下り度ござる」と云ふ。平「いかにも〳〵上物は皆出來たが、急な細工が支へて中から下の竝物が揃ひにくい。銀を先請取て出來次第に跡から下しませふ。銀を持てござつたか何程持てござつた、四兩あしもござるか」と、そぞろに高をぞ聞たがる。商「いや上物さへ出來たれば竝は遲ふて大事ない。誂の分算用は今日殘ず仕切て」と、腰のうちがひ取出し、「先度手付に一貫文渡し、今三兩三分、相場は金六拾目、錢十五匁合二百四拾目、しかけの代に引がない、こなたの方には是が德。ちよつと一筆請取して出來た分下され」と、いひも仕廻ぬ半分聞、三兩三分につかみ付、平「是でざつと濟みまする。まあ二分や一分は伯母がどふぞ仕やりましよ」と、我計合

ひき日―女郎の休んだ日、

是程しき―此位の事

しやちら云々―めちやくちや

あぢな商云々―うまい商賣巧んで

はうはつら―頬べた顔の謬、どちらへ使ふも同じと也

す、國へ遣ずに平様と長ふ添はせて下され」と、歎くもいとしし道理なり。恩を受けた大事の姪爰は一つと思ふても、手わざにいかぬは銀事。國の迎ひは早ふといふ、あの子はどふじやと氣をせきやる、詮方つきてこな様と談合に來ました。三年を十二兩、一年半は勤める、殘つて半銀六兩なれど、ひき日の何のとてつきり七兩は入ませふ。私が方で二兩二分は身の皮剝でも調へましよ。まあ四兩二分あればあの子をしやんと請出して、こな様と疾から夫婦にしたといひなし、國へ遣る共夫婦づれ、婿入させて濟せ共、其四兩が見へぬ故、大事の姪が望みも遂ず、死に生も出來かねまいと思へば胸も塞つて、今朝はおもゆばつかりで何も喉が通らぬ。是程しきでこな樣へ身代打明け咄すこと、恥しい口惜い無念にござる」と、手拭も絞る計に泣居たり。平兵衛はあと吐息をつき、「はて扨思案に行あたつた。私も近年彼故に旦那の懸錢も何もかもしやちらさんばう、近付中に痛手を負せ、動かれぬ身になりし故、少借錢を輕めん爲、あぢな商ひからくんで、三兩餘りは今日明日に請取筈の約束。はてほうはつら、此銀を請取次第遣ませふ。二分や三分の足ぬ口、夫は其時どふもなる。何とぞ首尾して、小かんを手へ入れる樣に賴みます。國へ下るに極れば、此平兵衛から死にまする。二人の命を助ける慈悲本の後生に成

如在—よい加減に
おつや樣—小かんの幼名
こちと—我等
あだて—あてど

かんの孝行故。こな樣元は知らぬ人、小かんがいとしがる人と、云ふて互の念比あひ。命を助け身を助け姪ではなふて親じやもの。如在にせいと云やつても、私等に如在はないものを、恨みが結句で聞へぬ」と、邊りを忍びしく〳〵と、泣くどきてぞ語りける。平兵衛手を合せ、「餘り氣遣ひ切なさに恨みらしい詞つき、眞平〳〵御許し。こなたを伯母御と云ふことも、小かんがいふて知つてゐる。先此度ひよんな事できたといふが氣遣な。落つかせて下され」と猶氣をせくこそ道理なれ。伯母「ヲヽされぱいの。内々國の親ごぜへ、茶屋奉公はかくして、大坂の歴々の奥樣へ預けた分。所に今度小かんの兄御、殿樣より呼返され、御奉公にありつかれ、それ故あの子を國で縁につけるとて、乳母の息子の乳兄弟が、昨日の朝おつや樣迎ひにきましたと、幼名いふて登つて安治川に宿をとつてゐる。こちと夫婦は當惑して、樣々思案して見ても、今で請出すあだてはなし。恥を捨ていふたらば、國の迎ひが藏屋敷で、つい銀を調へ、國へ連て歸ふし、時にはこなたと縁切れる。どうした物で有ふと、小かんに問ふて見たれば、いとしやあの子も泣入て、「國へ歸つて親達の顏も見たふはござれ共、平樣に一寸も離れふとは得云ひますまい。叶はぬ首尾に極つて、國へ下るが定ならば、私は見事に死まする。伯母樣を頼みま

を、小かんの肝煎取次のと、こなたへも祕したが、眞實はわしが姉の子現在の伯母姪。父親は播磨で鷹匠頭の奉公人。五十石に五人扶持、二本指た人の子なれ共、親ごぜが殿樣の御祕藏のお鷹をそらし、お氣に違ふて浪人し、あの子計を大坂へ、伯母を便りに何方へも仕附て吳れと登されしが、折節惡ふ不仕合、こちの夫の長煩、やう〳〵本復めさつたりや一昨年の大地震。私はきじやくで床につき、身代どふも立兼、既にかまどを破る處、あの子が私等に隱して肝煎賴み、堀江の茶屋へ三年を十二兩に、身を賣て吳れました。私は聞て目をまはす。夫は男の腹をたて、「身こそ貧なれ大坂三鄕隱れもない、鐵鎚煎餅三郎兵衞、かゝが氣色が本復して、千年百年生よふが、大福長者にならふが、女房の姪に身を賣らせ其金取て立物か。腹を切る」とて喚かれたを、可愛やあの子が涙を流し、「伯母樣許して下さりませ。國の父樣母樣が浪人でなければ、こなさん達へみつぎの筈。其ならぬが悲しさに、私が身を捨ました。他人でも有ことか、伯母は親のかたはれ。こな樣達計じやない。國にござる母樣への孝行と思ひます。伯母樣を母樣と私や思ふてゐまする」と、病ほふけた伯母に抱付て、聲をあげて泣やつた顏、今に忘るゝこともない。其陰で人參の百服餘りも飮だ故、病の根を拔此樣に身代の尾もみせず、暮すは小

鷹匠頭―鷹一切の事を司る役人の頭
そらし―逃がし
きじやく―癪氣
大阪三鄕―南組、北組、天滿の三處（國花萬葉記）
かゝが氣色―女房の病氣
尾―破綻

おかた—おかみさん
重ねてから—此次から
おこゞ—晝飯、供御の轉（俚言集覽）
あふ—應
いはく—いはれ

主人「ヤ、戻つたか、雨にあふて氣がせかふなあ」妻「いや〳〵平兵衛の近付多ふて傘借たり休んだり、ゆるり〳〵と蜆川の新地を、おつまに始めて見せました」と、語ればおつまも、「なふ父樣、平兵衛の案内で美しいお山衆をたんと見て來ました」主人「ヲ、そりやよい慰み一段々々。北野の煎餅屋のお方、平兵衛に逢ひたいと、先にから待てじや。嚊土産が有禮を云や。煎餅屋殿も先づ内へ」と、亭主は奥に入ければ、女房「ア、おゑ樣でござりますか。今日は宿におりましたら、澁いお茶でも上ましよもの、お殘りおほや」と挨拶す。妻「さればの事、平兵衛の念比とかね〴〵咄し家も知てゐまする、重てから寄りませふ。あれみなおこゞの時分じや。サア先づ内へ。それ平兵衛馳走しやや」と人あひよく、皆々奥へぞ入にける。平兵衛あたりを見廻し傍へ寄て小聲に成、「なんとしてござつたぞ。今日立ながら平野屋で、小かんにちよつと逢ふたれば、物案じ顔して、今夜中に是非共ちよつと來て下され。ひよんな事ができました、と跡先もなふいふたれ共、供の事なりや二言と聞かず、おふといふて戻つたが、どふしたいはくじや氣遣ひな。萬事こなたを頼んでをく。何事ができたぞ」と、恨み顔にぞ見へにける。女房も早涙ぐみ「ヲ、道理、去ながらつい云ふて濟ぬ事。せかずと樣子を聞かつしやれ。今迄はわしが身

めいよ―不思議、鰻は精を増す故云ふ
とつて置―餘所行の衣裳
こなたの近所―御近所
手があけは―遊べば口が干上る
とゝ―をつとさま―内義様
櫻の丸―紋所

私は端の上り口で鰻の蒲燒ばつかり、お山は口へも寄せなんだが、めいよな鰻といふ物は、喰へば喰ふ程お山が喰ひたふなつてくる。鈍な物じや」と笑ひける。親方も返答を他へそれたる鎚の音、てん〳〵天氣も照降雨に五十餘りの女房の、とつて置をば濡さじと、「嬉しや此方そふな」とて、走り込しは、主人「誰でござるぞ何方からぞや」女房「ハア、御免なりませふ。大文字屋の利右衛門樣とはこなたか。北野鐵鎚煎餅三郎兵衛と申者の女房、こなたの若衆平兵衛殿一寸呼び出して下されませ」主人「ハア、中々や。平兵衛は今日かかや娘が不動參りの供をして、こなたの近所へ往たが今に戻ろふ。煙草でも呑で待つしやれ。茶進ぜや」と云ひければ、女房「アヽお構ひなされますな。平兵衛殿とはふとした緣で念比に致しあひ、今では親子同前。とふに内方へもお禮に參る筈なれ共、夫婦の手ばつかりの商賣、手があけば口があくで自らの御無沙汰。今日は平兵衛殿に用ついで、お爲樣にもお目にかゝらふと存じ參りました。是はとゝの手燒の鐵鎚煎餅、さまに進ぜて下さりませ。皆平兵衛殿の傍輩衆か。暑い時分に熱い仕事、御太義でござんする。あれあれ辻迄平兵衛殿お供して見へまする、お爲樣そふな」と云ふ所へ内義娘平兵衛が、差掛傘の印にも新地平野屋墨ぐろに、櫻の丸の花の露、花の雫もなまめきて、人々歸れば、

り、先の平き鋤を萬能といふその一對なり（俚言集覽）
糠釘云々—說論も聞かぬ浮氣者となる
てこ—技に堪能なる職工、之より鍛冶屋の有樣を述ぶ
合に合槌—帳面を胡魔化して都合合す
灰猫云々—亭主が灰だらけになつて働いて見せる
虎が雨—建久四年五月廿八日曾我祐成殺され其妾虎悲嘆の涙を流しゝより其日には必ず雨降ると云ふ
金でかす—金溜る
くら屋—曖昧屋
濡かけ云々—濡を防がれぬ、お

分ぐらゐで駕籠をかれ。かゝにも足袋をぬぎやと云へ。雪駄を腰に挾む共新しい紙遣ふまい。釘包んだ古反古一二枚持ていけ」と、そこ〳〵氣のつく職人の、金でかす氣ぞ各別なる。弟子共は不請顏、「雨が降ふが雪が降ふが、平兵衞の供からは氣遣は御座らぬ。堂島新地蜆川、茶屋くら屋煮賣屋で、鍛冶屋の大臣平様と、誰知らぬ者もない平兵衞殿、笠の五本や十本を借かねは仕やるまい。私等が持た傘では、お山衆の濡かけは堪るまい」とて動かねば、親方利右衞門「やいこりや〳〵。又しては己らが誹りはしりに兄弟子の中言を云ひをるか。アノ平兵衞めは是の見世を任せる程の久しい者。なんぼうでも身をうつて仕損ふ者でない。平兵衞が眞似したら汝等あてが違はふぞ。同じ樣に己等が文の使ひも仕をるげな。連立たも知て居る。あの邊は人を釣る甘い餌に喰附、お山の味を喰覺えたら、夫限りに追出す」と苦々しく云ひければ、長「いゑ〳〵私や文持てたつた一度。仁介は先度も連立てお山喰ふて來たげな」仁「エヽあの人の嘘つきやる。己がどこに喰ふたぞ」長「ヲヽわがみ先度云やらぬか。ほん山寺の開帳から平兵衞殿と新地へいて、喰ふて來たとサアなんと云やらぬか」仁「わあいそれはの平兵衞の茶屋へ連ていて、旦那樣に云ふまいなら甘い物喰はせふとて、主は奧の座敷でお山を喰やつたそふなれど、

心中刃は氷の朔日

近松門左衛門作

上之卷

さりとても云々—どういふても戀はよくないもの
地金云々—主人公平兵衛の本性を腐らして如何程異見しても酒と色に引かされて直らぬ
鐵橋—肴炙るもの
あぶりこ—金網
せねば云々—せぬといふと手間を拔いて遊ぶ
萬能一れん—萬能一心にかけた

さりとても戀はくせものみな人の、地金をへらす燒釘は、敲き直いて異見して、燒直いても惡性の酒と色との鎹や。煮ても燒ても嚙れぬは、鐵橋あぶりこ鐵火箸。其くせ細工は器用にて、精さへ出せば二人前、せねば釘貫拔ていく。讀書かな文鐵挾、とかく萬能一れん物、鐵鎚こたへぬ糠釘で、後は吹あげ鞴ふく、歌鍛冶屋のてこの衆、てつからりころり、ちんからりりちんからり、ちん〳〵からりと打あげて、帳面計合に合鎚、いかな打出の小槌成共、續くべき樣なかりけり。弟子子大勢遣ふ身は、油斷させじと旦那から、灰まぶれなる灰ねこの顏振上て、主人「ヤア虎が涙のしるしが見へて空が曇つた。五月廿八日、雨三つぶでも降ねばをかぬ。かゝや子供が不動參り、氣の毒や雨に逢ふ。仁介でも長三でも、ちやつと笠持て走れ。大降がするならば、おつまが帷子濡そふより、八

果て、消行星と諸共に、一度に息絶へ目を塞ぐ、桁丈揃ひし死姿、刃に伏すは古手にて、これ心中の新物と、聞く人回向をなしにける。

新物―縊死は新發明と也

水せし女の塚
くねる―女郎花の縁にて爰は死ぬる事をいふ
暗うて云々―暗くして見えず
一丈―一定にかく

無明の橋の最細き、心の罪に踏滑る、足を踏しめ踏しめしても上り煩ふ男の體、きさ「女子の身でさへ上る物、是やどふぞいの」と手を引ば、二郎兵衛涙をはら〳〵と流し、「アア主の罰の恐ろしや。此足袋の片足は旦那のお古。常は兎もあれ此時は頭にも戴くはづ、土足にかけし其咎、お許しなされ下され」と、脱捨て登る松が枝に、きさ「そりや電光鳴ふぞや。吃驚して落まいぞ」と、夕立頻る雷神、目ざすも知らぬ松陰に、何やら暗ふて見へてこそ、さゝ「慾深い事ながら、皃をよせて下さんせ。電光の影に成共顔が見たい」二「見せたい」と、くはつと光ればわつと泣き、叫ぶ聲々雷神も、思ふ中をばよも裂ぬ、涙の雨に二重三重締付〳〵、二丈の絹も我々が、一つ蓮は一丈ぞ、往生淨土は一寸も、伸も縮めも「サアよいか」首の結びめ生々世々、解ぬ契りの堅結び、二「サアもふ物は云れぬ」きさ「云たい事は御座らぬか」二「和女は無いか」きさ「私は父樣母樣が懐しい是計」二「我はかみ樣旦那の事、いふて盡せぬ此外は、唯南無阿彌陀佛ばつかりぞ」二人「サア只今が南無阿彌陀佛々々々々々南無阿彌陀佛」と踏はづし、落る袂を引寄せて、抱き附ても苦みの、寄りては離れ離れては、足を縮め手を伸し、虚空を摑む臨終の、互ひの目には見へながら、物はいはれず岩代の、松にかゝれる下り藤、嵐になやむ如くにて、次第〳〵に弱り

ゐとく—威德、効能の義
現世さへ—此世さへくひ違ふ現して未來はと也
をんでもないこと—勿論の事
求塚—昔二人の男に思はれて入

ね共、世間晴て宿小屋持、若い衆のつき合ひに、老女房持ッたとて、人が笑をが譏ろふが、此兩の手の有たけは、命限りに稼ぎ出し、まあ十五年辛抱すれば、こな樣は三十六私はちやうど四十一、老女房のゐとくに、男に家を買せたと、譏りし人にうらやませ、男に鰭を付ふぞと、思ふたこと云ふたこと、違へば違ふ現世さへ、未來は猶かし覺束なや。中有の旅の雲きりに、見失なふこと有共、犬死と思ふて下さるな。六道の辻にて必巡り逢ふぞや」二「ヲヽ、をんでもないこと。譬畜生界に落、虫けらに生るゝ共同虫と生れふと、思ひ詰たか」きさ「つめました」二「さは去ながら何に成らふも知らぬ身の、人界の見をさめ。ま一度顏がよふ見たい」きさ「私も見たい」と引よせ〳〵、二「我故に殺すか」きさ「女房故に死なしやんすか。愛しぞや」二「愛しい」と盡きせぬ歎き干ぬ思ひ、思ひ亂る夏草の、しほれ伏てぞ泣居たる。二「あれ〳〵夜明も近付か、ちら〳〵人の通ひも有。二人が帶を結び繼ぎ、いふた通り」と解んとすれば、きさ「いや帶を解ては見ぐるしからん。此絹は親方の商ひ物、盜みはせね共、斷り云ねば盜みも同然。是を此木にゆはへ付、旦那の絹にて首くゝれば、旦那の手にかゝるも同然。一つの罪や脫るゝ」と、昔の例求塚是も男と女郎花、それはくねる是は又、うねりし松に手を取て、渡るも夢の浮橋や、

京嬬—いろはの最後に京字あればいひかく
死にゆく—流行唄
行くもの—行くのもか
よほ—歌の拍子
走りの先—流しの先にある菜刀
まぶられ—見つめられ
大ぐれ—大きな體

此處に惠比壽の松原、松のくろみか雨雲か、降らぬさきとて道急ぐ、早曉の旅人や。歌死に行くもの よほ 知らいで人の、浮世仇口曲もなや。知らいで人の よほ 知らずや人の、浮世念佛も賴もしく、傾く月を知る邊にて、空を拜めばをちかたに、とどろ〳〵と遠くなるおの海かと聞けば、あれ〳〵よそに轟く雷鳴の、落ちかゝるとも我妻を、よけて涙の袖おほふ。いや我は男よそなたをと、互に覆おほはれて、今死ぬる身も生身には、目に恐ろしき電光。野中の水に飛ぶ螢、御堂の影はまがはじと、歩みよろ〳〵足たゝぬ、惠比壽の森にぞ 三重 著にける。二人は松の下蔭に、どうど座を組み泣けるが、男は氣弱き若者、「アヽ譯もないことしたはいの。内に居る時走のさきの菜刀で成共、一人死ねば能い物を、死ぬるに連を拵らへて、旦那には事欠せ、家の名を出すと云、女房の親兄弟に、難義をかけるのぶといやつ、と死面をまぶられ、日比立てた正直も無になり、よしない者に緣ふれたと、そなたも世間の評議にあふ。許してたもや」と計にて、涙正體なかりけり。きさ「なふ死際迄其様に、私が事思ふてか、嬉しう御座る忝い」と、ともに打伏し泣きけるが、きさ「され共夫は愚痴じやぞや。格好こそは大ぐれなれ、昨日今日の前髪を姉といふても大じないきさめが酷や殺した、と憎みは我身一つにて、そこは露ちり厭は

米屋町—籠めにかく
ちよきり云々—きさの愛らしき小柄なるをいふ
久太郎町—子供の名にかく
久寶寺町—寺入の緣
馬喰—漠にかく
順慶云々—順といふもあてにならぬ
安東寺町—安堵にかく。
鹽町—、さしくる潮、
九之助橋—苦にいひかく
師走油云々—火に祟る、お染久松の運命が今身の上に及べるにかく
法—乘るにかく
堀詰—放る
大和橋—山

の、空を力に東堀、澄行水に影映る、我身の濁り恥しし。歌恥は暫しの浮世なり共、戀をする身の手本町とは、二人が心ひとつに米屋町共、思ひ計りて後生七生助かる、おれが殿御は日本おろかよ唐物町にも、稀な男のちよきりこきり小女房、花の樣なる和子を設けて、久太郎町とてやがて寺入久寶寺町、其豫言もいつしかに、空寢の夢の馬喰町、誠に私もこなさんも、跡には親のかれ殘る、老木の老の世はさかさまに順慶町も空ごとや、安東寺町も子故の闇に迷はせません不孝の罪、何と脱れん淺ましと、又引よせて泣く涙、袖にさし來る鹽町や、長からぬ世に長堀の、樂な世界を心から、九之助橋やこれや此、歌 瓦屋橋とや油屋の、油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松は、いつの時雨の一雫、洗へど落ちぬ ナヨイ 戀衣、世にひろがりしあだし名を、よそに謠ひしことの葉や、其油屋の一節も、師走油が身の上にイ、懸る涙とこぼれそひ、明日より同三味線に、法の灯し油屋の、回向をなすこそ哀なれ。ひとつ有さへ惜き世に、今宵限とほりづめや、命二ッを二ッ井戸、深い緣とて死にたいも、皆罪障の大和橋、あの千日に立つ煙、無常の雲のさつき雨、降ぬ先にと 歌 死に場尋ねて、露にしみづく帷子、肩と裾とはおぼろ花色、腰に弘誓の舟に帆掛て、妻に磯馴の松原、是を最期に京橋やら、西に川口船の帆柱、

兵衛、積重ねたる染地の日野絹、一反解いてくる〳〵、身も頭も眞白に引包み耳門をぬつと飛出れば、久「なふ悲しや幽靈じや。幽靈よ〳〵」と、迯こみ門口はたと鎖す。二「危なや地獄極樂の堺を筋から是爰」と、招かれ寄りて「何事も、先此近所を退いての事、あては無けれど南の方、人や咎めんくる〳〵」と、絹をも包む世を包む、其風呂敷の木綿巾身のなる果こそ　三重

下之巻　二郎兵衛おきさ道行

歌一ッとやひとつ涙の瀧の糸、落ちて三途の川となる。二ッとや筆もあれかし我心、書て後世に留めたや。三ッとや見たや聞たや故郷の、親の生顏夢にだに、夢さへ見せぬ死での夢、醒てはいつか此娑婆へ、歸りこんどの藪入は、女夫連でと約束の、盆正月の十六日を、待ち樂みし我々が、哀れ地獄の釜の蓋、開を待べき罪人と、呵責の責はよもやその、愛しいこなたかはいひそなた、脫すまいぞや脫さじと、縋り抱よせ泣姿、咎めて吠る犬の責、此世に地獄見せけらし。是も思へば親の罰、私は親よりお主の報ひ、育てられたるお情や、後生願ひの親方の、宵にや和讚夜中にや念佛、早眞夜中の月しろ

かけたり

くる〳〵—來るにかく

夢にだに云々—夢にも見ず又我々の死出の旅を夢にも親に見せぬ

こんど—來むにかく

和讚—佛法の意味を說きたる一種の歌

挨拶―念頃の中
あやなし―區別なし
朝比奈―三郎義秀にあらねば門破りかなはぬ
割菊―紋所
極樂の西風―極樂は西にある故

とおきさ殿、挨拶見れば浦山しうてたまらぬ。此方も盆には在所へいて、あは畑でしげろ」と、ころりと寢たる音計、鼾の闇はあやなしや。漸と門口の貫の木堅き家の風、鎰は久三が預りにて、朝比奈ならねば門破り詮方つきて立居たり。預けられたるきさが身の、出ては姉の迷惑と、知れど夫の懷しさと、分て割なき割菊の、紋の風呂敷引包み、菱屋の門口樞の穴、覗いても音信は、蚊の聲ならで便りなく、胸じやくりして泣聲の、内へ微に聞ゆれば、二郎兵衛も樞の穴、顔を寄れば鬢の香の、梅花の薫は「おきさか」きさ「おいの二郎樣か、語りたい事計。爰がどふも明けられぬ。此戸一重が關守」と、互ひに身をすり氣をもがき、泣くより外の事ぞなき。浪花橋の辻に寢し犬一疋吠ゑかゝる、聲につれて方々より七八疋、きさを威して吠立る。恐ろしなんども詮方なく、放れがたなく門口に、猶取付て立たりしが、中の間の竹目を醒し「あれ久三、門にいかふ犬が鳴く。何も無いか起て見や」久「おふ」と答ゆる寢聲の返事、「そりやこそ久三」ときさは東へ、二郎兵衛は中戸の影にぞ隱れける。久三は例の襦袢一ッ、より棒提げ貫の木明け、耳門開いてつゝと出、久「ハテなんにもないもの非人がな通つたか。來い〳〵」と呼ば犬共尾を振かゝる。「エ、蒸暑いが外へ出れば極樂の西風、エ、忝い」と涼む間に二郎

奈落云々—仰に背かば母を地獄に墮すといふ誓文

おむく〳〵—無垢か

上本町云々—上本町の家を抵當にして七貫五百目貸附たる證文

一災起れば云々—一災は相伴うて來るとの諺

致した此母を、奈落に墮しませふ」と、跡先知らぬ誓文の、ひとつは罰も當るべし。貞「チヲ出來いたく〳〵。此家久しい重手代、由兵衛と張合て勝て負といふもの。何事も貞法が美しう濟して遣ふ。二階へ上つて最ふ寢め」と、戸棚の錠前しとゝおろし、「阿房めが。おきさ計が女房か。彼の樣な洒落者より、おむくむく〳〵の手いらずを抱せふぞ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」とて奥に入、心殊勝に哀れなり。二郎兵衛夢とも誠とも、氣もうつとりと成けるが、二「左もあれ彼の手形隱居の破つて捨てしとや。今破つたは何じや知らぬ」と取出し、合せて見れば、南無三寶、七貫五百目上本町の家質の手形、此晦日に元利殘らず相濟む筈。はァはァはつと明たる口も、何に塞がん身の罪科、一災起れば二災起る、雨雲の空恐ろしく、よろめく足本判の破れを引寄せて、合て見繼で見て、繼に繼れぬ命の難義、どふも生ては居られぬ。死るとも生るとも、きさは放さじ離れじ物。先此家を脱殼の、ひよろつく足を踏留めく〳〵、表へ出る中の閒の、合の戸そつと明ければ、竹が蚊屋に丸裸、蚊を燒く紙燭明々たり。「エヽ邪魔な爰を通らば咎むべし。アヽ如何せん何と扇」子の一扇ぎ、はつと消れば、竹「アヽ悲し。憎の風めや火を消した。今宵一夜は蚤と蚊に、此肌を手向るじや。あつたら物を久三でもおじやらいで、二郎兵衛殿

情をはり—剛情ぱり

籠ひつ—牢屋

身代あける—身代をつぶす

あさじ參り—朝の寺詣り

己が情を云々—己の趣意のみを貫きて

錠をおろして下されませ。直に籠へ參らば、是今生のお暇乞、御恩を報ぜぬ段は、御免有て下されませ」と、はひ入る所を引出し、貞「やれ恩知らずの物知らず」と、腹立涙の隙よりも、「十二の歳より飼育てし、二郎七の昔忘れたか。三日にあげず煩ひて、迚も用には立まじき、去せ〳〵と人毎に、いはぬ者もなかりしを、此婆一人情をはり、在所へ戻さば死るは定。本の慈悲とは此事と、十八の春まで、まじなひよ藥よと、孫子にもせぬ世話をして、四郎右衛門にも物入させ、やう〳〵と人になし、傍輩共も嫉む程、人に勝れ目をかけしに、籠ひつに入時、菱屋の婆が阿房盡し盗人飼ひたて、親方は眼病なり、身代あけるも知ぬと、四郎右衛門迄謗せても、おのれが一分立たいな。御堂のあさじ參りにも、女子共起して、苦勞かけては後生にならぬと、己ばかり伴しに、明日より朝じに參られず、願ふ後生も願はせぬ淺ましい氣が附初た。此家に馴染ば犬でも猫でも、貞法は酷いめが見ともなく、可愛さにこそ口たゝけ。此上にも我を立て、己れが情をじやうにたて、死たくば戸棚へ入れ」と、泣ひつ威しつさま〴〵に、慈悲心餘る涙の異見、後世に入たるしるしなり。二郎兵衛聞入て「や御尤〳〵、今合點參つた。思ひ切て由兵衛にきさを遣りませふ」貞「ム丶、夫が定なら誓文立て」二「來月は母の七年忌、此ごろ取越

氣がふれて—落着かず

あつと云々—はいというて從はれぬ
差てもない—何でもない
打叩き—由兵衛に叩かる

形とは見たれ共、其場は其日の亭主方、無興と思ひ其手形は、とふに破つて捨たぞや。きさめと己を夫婦にして、末では所帯にしつけんと、此年寄が苦に持たも、斯う破れては水の泡。何程慈悲がしたふても、理を非には枉られず。目の明ぬ主と由兵衛などが云立ては、傍輩共も氣がふれて、跡で人も遣はれず、己に不便もかけられず、思ひ切てきさを由兵衛にやれ。時には四方圓く成、其方も是に勤よく、主の恩も送らるゝ。己が心持次第、池田の姪の中にても、女房には事かゝぬ。きさを遣るか何樣するぞ」と、我子に異見をする如く、叱つ泣つわり口說、二郎兵衛も唯泣入て、暫時返事もなかりしが、二「一々のお詞聞入ぬは、畜生に劣る二郎兵衛なれども、あつと申て御恩はよも送るまい。元服を致したものを丁稚よりなを押下て、差てもない事云立に、踏ぬ計に打たゝき、出でも堪忍なりがたき、無念を凌ぎ參りしも、お家のお影で一日も、きさと一所に住居をせば、由兵衛が面を踏返した同然と、思へば今日の奉公も、心まめしう勇しに、やみやみときさめを渡し、是や見たかといふ面が、見て居られふか口惜や。どふも私は堪ゐまい」と、無念涙は目にあまり、袖を喰切我身を摑み、身を慄はして歎きしは、心底道理にむざんなり。二「いや申ス程お主ゐの慮外。とにかく元の戸棚に入、彼奴が致した通

わきへなり—横へそれる

ねたにこみ—妬を抱き

でんど—法庭

地獄で地藏に逢ふ心地、三「ア、かみ樣かお恥しや。庖丁でも薄刃でも、柄を脱て戸の間から、そつと入て下されませ。お馴染だけのお慈悲ぞ」と、泣く聲漏る計なり。貞「ヤレ死る程の性根でさもしい事をする物か」と、袖を覆ふて錠鎰の、音せぬ樣に戸を明て、「其處へ出おれ。町人といひ年寄の婆なれど、菜刀でなり共、己が首を切て遣ふ」と、故意と詞をあらゝかに、叱られてしよぼ〳〵と、はひ出る帷子も汗にひたりて、時の間に顏も痩たるむごらしさ。流石子飼の主心、叱る心はわきへなり、思はず涙を流さるゝ。二郎兵衛顏振上、「貞法樣面目も御座りませぬ。お主の罰」とばかりにて、はたと俯伏し泣きけるが、三「御存じの通今迄に、一錢掠める我等でなし。氣も違はね共恥しや、きさと念比致せしを、由兵衛めが妬にこみ、何がな見出そふ〳〵と、文言知れぬ手形を書、きさ親子に判をさせ、旦那のお手に入し事、いかにしても覺束なく、此手形取らん爲計。戸棚の內でかすかに聞けば、旦那のお耳へ入らぬとやら。どふぞお耳へ入れずに濟む樣に賴み上まする。彼の眞直な旦那殿お心の蔑みが、首切るゝより悲しい」と、隱居の膝を戴き〳〵、疊に喰付泣き居たり。貞「やれ其云譯は己が心の了簡よ。主の腰の巾著あけ、屋內の鎰を盜み取、此だいそれた云譯が、でんどでそもや立べきか。由兵衛が我儘な手

よざと—いざとに同じくすぐ目が醒るやうにとなり
代待—代祭（俚言集覧）

済し様も有ふこと。何いふても夜が更る。二郎兵衛めは籠の鳥、其分で戸棚に置き、きさめは今宵請人の、姉めに急度預けにやりや。急ては粗相も有物、とつくと分別して見よふ。女房子共が怖がらふ、直に出見世に泊まらしや。手代どもゝ向ひへ、母者人は爰へ來て、お寝みなされと申て、其方も歸つて明日おじや。必何にも穩便に、宵の中に皆寝さしや」と、蚊屋に入れば、由兵衛元の所に立出、「夜中に旦那のお耳に入、眼病に障れば如何、何事も明日の事。是長兵衛權兵衛、太義ながら此きさを、請人の姉女夫に急度預けて、直に出見世へ往て寝や。サアきさ立」といひければ、きさ「申かみ様參ります。私が身は構はね共、二郎兵衛に科の無い段は申譯の有事。お爲様へもお取成萬事頼み上まする。盗人の名を取、是が悲しう御座んす」と、わつと泣出し送られ行く、目もあてられず不便なり。由「サア貞法様奥へござつてお寝み。我等も明日早々。久三も表を能ふしめて、よざとに寝や」とて出ければ、欠を直に「あゝ」と云ふ、返事眠たき夜なか聲廿三夜の代待や、門の通りは未だ四ツ、内は靜まる燈火も、心も細く更にけり。物の憐深きこそ、後生願ひの心なれ。人も寝入て貞法は、寝醒の床を起出て、戸棚の傍に差足し、貞「こりや二郎兵衛、いきずりめ、聲聞知たか阿房め」と、こと〳〵と敲かるれば、

忝い云々一態と反對にいふ

其方と寢たらば、なんじや戸棚を明てやらふ、忝い嬉しい。夫が嫌さに此苦勞。云ひたくば云や大事ない。二郎兵衛殿と此きさと念比を仕て居る。戸棚の中なは二郎兵衛。私も科は脱れぬ。靡ぬ仇に訴人しや生畜生の死畜生」と、所存極し涙の躰。由兵衛聲をたて、「ヤア若い衆は出見世にか、盗人が入つたぞ。久三や竹は宵の口、何所に居る」と呼はる聲、貞法始め長兵衛權兵衛、皆跣足にて駈付る。由兵衛威丈高に成、「是御覽あれ。旦那衆の腰を離れぬ此鎰を盗み出し、彼の如く簞笥を明、戸棚を明し所へ、身が來るを見て戸棚の中へ逃こんだ、所をしやんと錠をおろした。中に居るは二郎兵衛、手傳は此おきさ、證據人は此由兵衛」と、出來し顏の腕捲り、きさは涙に性根もなく、内外の者ははつと計、顏を眺めて居たりけり。貞法鎰を腰につけ、「四郎右衛門は最ふ寢てか。旦那に聞せて兎も角も思案が有ふ」とありければ、由兵衛先町代を呼びにやり、宿老殿へ知せて、町中挑灯繩よ棒よとひしめけば、奥より「由兵衛〳〵」と、手を扣いて呼はるゝ。由「あい」と答へて奥に入ば、四郎右衛門小手招き、「次第とつくと聞屆た。子飼と思ひ肌を免し、扨も〳〵憎い奴。灸の間に鎰取は、恐ろしい仕方。去ながら己が聞ては六かしい。夜中にわやわや町内の外聞も能らず、外へ物さへ散ずば己が聞ぬ分にして、

消入る—二郎兵衛が棚の中にて死ぬる心地

釣れた—欺された

あた—罵聲

なされたけな」と、つゝと上つて「是やなんじや。大事の鎰共取散し、簞笥の口も明て有。是おきさ退や、此世間物騒に戸棚の錠は何故おろさぬ。左らば鎰も腰につけ、錠をおろして置ませふ。ヤアしやんとな」とおろす錠の音、内に響けば消入る心地、きさはわな〳〵〳〵と、直に死たい計にて、前後にくれてぞ見へにける。由兵衛きさが手をむずと取り、「是おきさ、先度舟へ石打れた其疵が是未だ治らぬ、此打手が知れました。今宵旦那の戸棚へ入た盗人と同人。定て此方も助けたからふ。戸棚を明て沙汰なしにしてやろか、旦那の耳へ入うか、此方の心一ッじや。なんと〳〵」と云ひければ、きさ「手を合せて頼みまする。日比は恨も有筈を打捨て其詞、生々世々迄忘れませぬ。一生の内此御恩、どうして成共送りませふ。どれ鎰貸んせ明けましよ」と、取付ば押退け、由「ヤアうまいこと云やんな。何時ぞ〳〵と今迄釣れたは何十度。此以前貴様が津山玄三殿に奉公した時から、惚て居た此由兵衛。是非思ひを晴さふなら、和女の口へ手拭捻込で、寢る術も知たれども、夫は戀とはいはれぬ。此戸棚が明けたくば、此首尾についちよつと、身を汚して下され。ちよつと〳〵」と、取付ば突放し迯て廻れば追廻し、抱付所を、きさ「あた面倒な」と突倒し、「由兵衛の生畜生、文言知れぬ手形に能ふ判をさしやつたのふ。今

ふるひ〳〵、手を出し手を引から猫の、おきをいらふ危さや。きさ「申旦那様熱くば少押へましよか」四「いや熱うはないが精がつきた。よい加減にをきたい」きさ「まちつとでござんす。夫れまちつとじや〳〵。夫やよいは」と鎰引出せばうろたへて、はしの灸を取落す。四「熱や〳〵〳〵、もう〳〵是でしまはふ。奥へ往てちと寝よう、二人ながら休んでくれ。能ふ仕てくれた過分な」と、悪事と知らぬ主の慈悲、仇となつたる身の果の、冥加に盡しも道理なり。二人は顔を見合せて 二「鎰を取りは取たれど、主の目を晦ませば胴が慄ふて恐ろしい。誰ぞ來るか番しや」と、合せて見たる簞笥の鎰に、あたるも地獄の錠前を、明て捜せど衣類の外は、三原の相口時代の印籠、箱に入しは蓮如様の名號。二「ハア合點のいかぬ、手形箱は何時も土藏へは入らぬが、戸棚に入たか知らぬ」と、常見覺へし戸棚の鎰、なんの苦もなく戸を引明、捜せば一通上書に手形と有。二「サアかたじけない。是が欲さの狂亂」と、戴き〳〵二ツ三ツにひきさき、懐中に捻込で、跡しまはんとする所へ、二「門を明たは誰そ」「だんない者」と由兵衛上り口迄つか〳〵と、影を見るより二郎兵衛戸棚の内へはひ入ば、きさは前にひつそふて、「ハア由兵衛殿か、上らしやんせ」と後手に、そろ〳〵戸棚を鎖にける。由兵衛とつくと見澄し、「旦那は灸を

の意
おきー熾なる火
三原ー備後三原の刀匠代々正家と稱す
相口ー短刀
蓮如様の云々ー蓮如の書かれし南無阿彌陀佛の六字

しに判するといふ様な。是後の邪魔とは其手形、どふぞ手形を盗んで破つて捨たい物じや」といへば、きさ「アヽ苟且にも盗むと云ふは恐い〳〵」二「ハテ錢銀の手形か慾德になるにこそ。傍輩由兵衛との色づく、旦那に損德かゝらぬこと。何時も彼の簞笥に手形ども置るゝ、鎰はそこらに見へぬか」きさ「何の爰等に置れふぞ。おゑ様かみ様旦那様、三人の外介さまへさへ持されぬ。何時ぞ序にかみ様頼み、文言見たがよいはいの」と、いふ所へ四郎右衛門、「なんときさ二郎兵衛、艾が未だ出來ずば向ひの出見世へいて、女房共にも撚つて囉へ。更ぬ先にしまひたい。どふじや〳〵氣がせく」きさ「あい〳〵灸も皆出來ました。御勝手に遊ばしませ」四「そんなら爰で斯ふ向いて、それ二郎兵衛、菓子盆あられ煎豆、さんせうにこぶ團敷け」と、袷くるりと灸のばゝ、前を後に目は見へず、何をせうとも頷いて、くすり〳〵の灸ばし、痴話の便りの薄煙り、十四の灸に水が湧く、盛りの女盛りの男、手をしめ身を撫で口を寄せ、誰を忍ばんさしも草、是ぞ因果の皮切なる。やう〳〵灸もすへおろす、主人の帯の前巾著、後へ廻る紐とけて、繫ぎし鎰は巾著より、半分こぼれかゝりたり。二郎兵衛見付て、簞笥に指しきさに目くばせ、天の與へと取んとす。きさは「嫌じや」と手を振れば、二「大事ない」とて頭ふる、手をふる頭

慾德云々—慾德にあらず

こぶ團—昆布にかく

灸のばゝ—ばゝは糞、灸の灰をいふか

灸ばし—灸をつまむ箸

水が沸く—灸の跡が膿持つとつや氣タップリとかく

皮切—初めて灸据うる事、始め

出花―茶の煎じたて
茶臼形―くつろぎて坐する形容
雪駄の裏―人を去らする咒
理外―理外の理
滅多に―矢鱈に
こけても―變つても

卜庵樣へはつい茄子の淺漬で、茶漬進ぜとおゐ樣のいひつけ。早ふ歸て御寢なつたが増しで御座ろ」とたらせ共、卜「何じや茄子の淺漬じや、一段よからふ。夫に出花をつけたらば」と、茶臼形になるを見て、おきさも悃れ、「寧そ泊つて御座んせ」と、佛頂顏に二郎兵衛艾に火を付庭の隅、卜庵が雪駄の裏、物は試と煽ぎ立煽ぎ立てぞ燻らする。まじなひは理外にて卜庵氣にや徹しけん。卜「是は不思議千萬、俄に宿へ歸りたい。もふ往ましよ。滅多に往とうなつて來た」きさ「ハテまちつとお遊びなされませ」卜「いや〳〵俄に往とふなつて、足の裏がこそばい」と、疊に足をすり付〳〵降りければ、二郎兵衛雪駄をちやくと直し、二「申卜庵樣、旦那の眼も直りませふ。灸が早ふ驗ました」と、いへ共我身の上とは知らず。卜「ヲヽ卜庵が名人御覽あれ。一炷で驗が見へましよ」と、足の踵のきび悪げに雪駄擦せて歸らるゝ。二「サア旦那の出れぬ間に手形の文言早ふ聞たい〳〵」きさ「さればいの、文言は何樣やら讀でも聞せず、宛名は菱屋四郎右衛門樣貞法樣、親子が印判しました」と、語れば二郎兵衛はつと驚き、「エヽ由兵衛めが文言聞さぬは曲者。娘きさを由兵衛殿へ遣はさふと書たやら知れぬ。日比和女に心を盡す由兵衛め、どうこけても己奴が爲の、よい樣に書たは定。三田の親仁も粗相な、手形の文言吟味な

ぴかしやかーちやか〳〵と當てこすりのありたけいふ

こちや〳〵ー堪忍々々

まそつと云々ーモウチツと遊んで灸の勞を慰むる饗應の仲間入をせん

り、艾出して揉んとするを、きさは立寄り胸倉取、「是あんまりじやぞや酷いぞや。先度から染々と物いふ間も無い故に、心底が語りたさ、傍へ寄ればぴかしやかと拗言の有ルじやう。安東寺町とは何事じや、ア丶嫌らしい〳〵。是なふ誰しも此方の年ばいでは、十六七の振袖を好このむ最中に、四ツも五ツも年かさの私にほれて下された。私や其心に打込で親兄弟も捨たぞや。在所は生れ古郷なり、兩親の傍に居る物が、往ともない筈はない。何の由縁に大坂に、執心はなけれ共、此方と云人に離れるが悲さに、お主を欺し親に背き、身を狂はす心を、可愛や共云ずに面白そふに拗言。コレ死んで見せふか。死兼は仕ませぬ、二郎兵衛殿」と抱き付、聲をも立ず隱し泣。二郎兵衛もしほ〳〵と。「こちや〳〵」と背中を撫で、共に涙を流せしが、二「シテ先度の手形の文言は、どうぞ〳〵」と云所へ、卜庵奥より立出る。二「ヤ是はもふお歸りなされますか」卜「されば歸らふか、まそつと遊んで灸行の相伴せふか。やあゐい」と煙草盆引寄る。二人は艾捺へながら、此首尾に語りたし。早ふ去ねがな〳〵と、跪けど去る氣色なく、卜「なんと灸行いひ付は無つたか。冷麥か素麪か、なまなか茶漬位なら、いつそ戻つて寝てくれふ、内証知しや」と云ひければ、きさは悦び差心得、き「旦那様は毒斷で夜食はあがらず、

渡らぬ先云々—正月七日七草を打つ時の唄に唐山の鳥と日本の鳥と渡らぬ先にストトンとあるをとれり

無用云々—毒なもの故用ひてならぬと申したり

點—灸點をおろす

て打チ盤をとん〳〵〳〵、三「何處やらの男と、よそ〳〵の女と、渡らぬ先に」とん〳〵とん、とゝんとんとぞ打にける。重手代口々に「やい〳〵ほたへな。夫れ向ひの出見世から、旦那のわせる見へぬか」と、云所へ四郎右衛門は、眼病に毒とは知れど渡世の世話、「なんと仙臺の注文は仕廻たか。秋田の荷を積だらば、今橋へ往て銀請取りや。ヤア卜庵老は未だ見へぬか。卜庵が見へたら灸をせふ。女子の手が薬じや、きさに點へて囉はふし、二郎兵衛に手傳さしよ。手のふるはぬ樣に仕事しまへ。殘りの者は出見世へいけ」と云所へ、「物もふ、澁川卜庵御見廻申」と、つゝと入れば、四「ヤアお出か待かねました。先是へ」と上座へ通せば卜庵、「今日は廿三夜なれど一向宗はお構ひない。明日から八專土用前、一段とよふござろ。どれ脈を見ませふか。私の申た通薬喰をなさるゝか。ハアいかふ脈がよふなつた。玉子を參る驗しに、左の脈がふは〳〵と打まする。ムヽ魚の中にも鯔などは大うんの物、かねて無用と申た、よもや喰ひはなされまい。右の脈があたまがちなは、若し檽木などは參らぬか。風氣もなし點を致そふ。硯々」といひければ、四「奥で點を頼みませふ。是きさ二郎兵衛、油火灯して艾をもみ、先二三百ひねつて置や」と、打連れ奥に入りにける。「あつ」といふて二郎兵衛行燈灯しつ土器あぶ

つい一針云々―つい馴染んだが緣で後に顯れて大事となるを裁縫にかけて云へり

拗言―當てこすり

乾反―日に當りて反りかへる

だんない―大事ない

致すまい。御馳走が身の菱屋、酒盛つて尻踏れた」と、獨言して 三重 歸りけり。

中之卷

本町や新物店の若衆は、女とも見へず男なりけり。女子交りの針仕事、つい一針が永き世の緣の端縫しどけなく、尻も結ばぬ糸櫻、綻びかゝるうたてさよ。二郎兵衛は在所より、戻つた顏して二三日、仕事は常より精出せ共、きさにすね言ねすり言、乾反し直し上下を、盤にかけて打けるが、二「エヽ是は糊加減の惡い袴じや。よそ〳〵の人の心の樣に、彼方へ這入たり此方へはひつたり、移り易いどう根性。なふおきさ殿、此方が頓てかみ樣の肝煎で、安東寺町へ嫁入の時、此袴を婿殿に著せたらよかろ。其晩に石打れて小鬢先割れぬ樣に、抱締て居さつしやれいの。おきさ殿やいのおきさ殿う」きさ「ヲヽかしましい、己や聾じや御座らぬ。是此私が仕立テる布子も、誰やらが氣によう似て、なんぼ直に縫ふても、横へ〳〵といきをる。聞分の無いものは、此方に似合ふ著さつしやれ」二「私等が氣には入ぬ」と云へば、きさ「ハテ氣に入ずは打破つてのけたがよい」二「ムム打破つてもだんないか」きさ「夫はどうして打破る」二「まづ此樣に打破る」と、槌振上

たゝみかけて―續けざまに

うなよく―うぬはよく

聞えぬ―判らぬ

身の莚屋―莚にかけて身の災難を云ふ

てぞ 三重 歸りける。由兵衞久三大汗にて、「何方へうせた〳〵」と、橋へ廻れば年ばい成牢人侍 髭奴の草履取、何心なく來る所を、うぬ覺えたか」と久三郎、奴を橋へ横なげに、眞向を四ッ五ッ疊掛けて喰はする。主人是はと立歸り、久三を摑んで打付、踏付〳〵踏む所へ、由兵衞駈付、由「ヤア爰にけつかるか。よふ舟へ石打つた」と、摑み付手を確と取り、侍「何さ石打たとは誰が事。慮外者め」といふを見れば歷々のお侍。由「ア丶御免なりませ。人違で粗相致しました、御免されて下されませ。お慈悲で御座る」と泣叫ぶ。侍「何のお慈悲」と捻上、向脛をはたと蹴返し、「是奴、腸の出る程此奴踏め」奴「任せておけろ」と土足にかけ、奴「うなよく身を打せたナア覺へて居ろ」と、胴骨尻骨うんと踏めば「ぎやつ」と云ひ、うんと踏めば「ぎやつ」と云ひ、目玉も出る計なり。侍「もふよいはよいは死ぬ程にしてをけさ。此方へ來い」と主從は、悠々として歸りけり。命から〳〵由兵衞、「あ痛〳〵」と起上り、由「久三其處にか。エ丶聞へぬぞや。今の樣に踏居るを、見て居やる筈は有まい」久「ヤ此方が聞へぬ。此方故に最前喰はされたり踏れたり。エ丶振廻喰ふた計に、云れぬ人の肩持て、阿房くさい振廻が戻つた。御座れ戻ろ」と立上る。由「チ丶其方は切て振廻を喰ふたが、此方は物入振廻ふて、揚句にしたゝか踏れた。向後饗應

荷が下り—樂になる
判をすや—判を据ゑよ也

石打—當時婚禮の夜に瓦礫を飛ばす風習あり元祿二年之を禁ず

敗もう—閉口
てんがう—いたづら(俚言集覽)

は一大事、何とせふぞ。石を打て提灯を打消してのけん」と、石を尋ねる其間に、手形の文言思ふ通に書濟し、由「是宛名は菱屋四郎右衞門樣貞法樣、親三田村太郎三郎、サア印判」と云ひければ、太「御念が入て忝い。私の荷が下りました」と、巾著の印判くろ〳〵と、「サアおきさ我身も判をすや」きさ「いや私は印判持ませぬ」父「左樣なら父が裏判を」と、同じくすへて「貞法樣、いよ〳〵賴み上ます」と差出せば、貞「チヽ〳〵是では此方も如在がならぬ」と、數珠袋に納むる内、二郎兵衞溝の石をあげ、由兵衞目がけて打石が、艫板に當つて一はづみ、川へざんぶと水散て、由兵衞一絞り、「そりや暴れ者が石うつは」と、立ち上る所を續けて打てば、由兵衞が額に當つて「あいたしこ、是は危し。皆々屋形へ。きさも乘つて戸を立や」と、無理無躰に舟に乘せ、「親仁も早ふ去つしやれ、負傷さつしやれな」と云ひけれ共、太「いや〳〵是は目出度、きさが嫁入の談合に石打とは吉左右。目出度御座る」と云ふ小鬢に、はたと當れば「南無三寶こりやどうじや。目出度過て目が出た」と、抱へてこそは歸りけれ。猶も續けて打つ石に、提灯も打破れ、由兵衞も敗もうし、「おきさに心有奴が、てんがうかはくに紛れない。船頭船をやつてたも。久三おじや、此奴を踏んでくれふ」久「任さつしやれ」と上るを見て、二郎兵衞横へきれ

もや〳〵―悶着

貰付る―火をつけるにかく

せて在所は變改したがよい。此由兵衛も旦那の陰で、安東寺町に手も擴ふ商賣し、手代の一人も遣ふて今日の樣な饗應に、二兩三兩遣ふも皆親方の光り。未だ女房を持ぬはかみ樣へ、とんと任せて彼方の媒妁待て居る。かみ樣のお心で此方と私が婿舅に、成まい物でも御座らぬ。なふおきさ左樣じやないか」と、いへ共きさは胸塞り、「アヽどうやら知りませぬ」と、打傾ぶきて居たりけり。太郎三郎一々に聞屆け、「きさめが申た分では、さら〳〵胃の腑に落ませぬ。かみ樣のお御意で發起致した。御尤々々親方の躾らるゝと申に、先は幸一門中、何の子細も申まい。此上はきさめが緣付はどうなり共。最ふお暇」と立んとすれば、由兵衛分別顏にて、「是貞法樣、是は大事の請取物。おきさも若い人の事、後日のもや〳〵やかましし。ちよつと親子に手形させ、きさが緣付、貞法樣のお指圖背くまい。外から一言邪魔させまいとの手形が取たい物」と差込ば、貞法打頷き、「是は由兵衛が云通、手形を取て置たい」きさ「夫でも父樣無筆なり、明日でも私がかみ樣へ手形して上ませふ」と、辭退する程由兵衛、「いや〳〵たとへ無筆でも。判がなくば筆の軸、手形は我等筆取」と煙草盆の硯引出し、はや書付ヶる提灯の蔭、二郎兵衛見すまし聞すまし、二「ヤア彼奴が勸めて手形させ、かみ樣たらしてきさを貰ふ分別。此判させて

こうげん—權力前に出づ

世帯佛法云々—佛法よりは食ふ事が肝腎といふ諺

もむない—ももない（甘くない）の轉

かこふか—與へやうか

第に任せて有。是非とも親のこうげんに在所の男持てならば、己や死るが合點か。娘殺そと云事か」と大聲上げて吠ゑまする。お主のお慈悲に御異見を頼みます。在所の婿と申も喰兼ぬ身代、行きをれば彼奴が果報。世帯佛法はら念佛、口に喰ふが一大事。彼奴が喰ふは違ふて、大坂の男に喰付たか。やい其處なうつけ者、在所の男じや大坂の男じやとて喰ふに二ツの味なし。一人の娘に親の身で、もむない男を喰そふか。エヽ親の思ふ程にもない」と、涙を流し恨みける。おきさも流石親心、思ひやれ共二世かけて、かはせしことも捨られず。「只かみ樣のお情を、頼みまする」と計にて、同じく泣ひて居る姿、貞法も不便さに、「親仁の云分理が聞へた。去ながら彼のきさが病者で、在所方の荒働き一年と續くまい。身に藝もないことか、銀の湧く手を持つて居る。二百目近ひ給分を、唯の女子にかこふか。廣い大坂に男養ふ商賣とは彼れらが職。五人三人は針一本で、樂々と過す手を持ながら、山家在所へ煩ひに往ふとは、無分別かと思はるゝ。此談合は取をいて、きさは此貞法にとんと預けて置てたも。此方の家にも子飼の者躾る者がたんと有。能い婿取て後々は、親達も大坂へ呼ぶ樣に仕て遣ふ」と、念の入たる割口說、由兵衛扨は彼のきさを我等へ隱居の心當。日比の念願成就と、由「是親仁、隱居樣へ任

入れて見よ

手いたい―荒仕事

云ひじよ―云條

三田から、私が父親登られ、幼少時から在所で約束し置いた、男の姑の煩故、急に嫁入を急いで來た。此度お暇申受、三田へつれて歸りて嫁入さすとの申分。御存じの通り私は幼い時より大坂に育ち、手いたいことは仕付ず、殊に病者な身を持て、在所の手業がなんとして。夫故當座の間に合に、「内方のかみ様が御念比に遊ばし、舊功なした若い者共數多の中、一つにして此大坂で、物の見事に躾て遣ふ。必外へ約束すなと常々のお詞、是が反古に成物か。在所へとては歸るまい」と私は申ます。「夫では親の一分が立ぬ」といふての親子いさかひ、多分是へ見へませふ。私が口の合ふ樣に、在所の嫁入をお止めなされ下され」と、つど〱語る下心、二郎兵衛は合點にて「彼の云分は我故。男に親を見返る心中者め」と、材木に抱付ぞく〱悦び居たりける。親はとぼ〱尋付、乘「菱屋殿のお船は是か。きさが親三田の太郎三郎で御座ります」貞「ヤア親仁殿か。それ酒進ぜ茶進ぜ」と、取々挨拶ありければ、乘「いやお茶もたべました。定てきさめが咄しでお聞なされませふ。在所で許嫁の方より、急々に欲いと申に付、中途ながら一生の身のかため、「ことわり立てお暇取れ」と申せば、「在所へは往くまい、大坂で男を持つ」と申。「夫は我儘親のいひじよを背くか」と叱つても聞入ず。「おれが男は内方のかみ様次

裸身云々—男は裸百貫の諺をとる

是ならぬ—これはどうもならぬ

もやくつて—不快にて

御訴訟—お頼み

聞かいでは—下にならぬの語を

取出せしが南無三寶、由「蠟燭を忘れた是久三、太義ながら一走り、此通りの百貫町、四五丁往ばおきさの宿、定て知てゞ有ふぞ。由兵衛が巾、蠟燭一挺貸てたも。ちつと氣色が能ならば、ちよつと爰迄出てたもと云て同道してをじや。序に内に氣を付て誰もないか見廻しや。早ふ〳〵合點か」久「心得ました」と帶もせず、襦袢一つの裸身や、百貫町へぞ走りける。昨日今日前髪取つて下手代、未だ新物の二郎兵衛、おきさと深き中入の、南京綿の上べには手のない樣に仕立口、在所はいかな横堀の、知邊の許に隠れ居て、暮れば其處へと通路の、二「仄に見ゆる彼の舟の屋形には、貞法樣お爲樣、舳には安東寺町の由兵衛、ヤア是ならぬ外しませふ。ありやどうじや。菱の提灯久三が持て、跡から來るはおきさじや。樣子が無ふては叶はぬ筈」と、氣ももやくつて蒸暑き、材木納屋に立隠れ、事の樣をぞ窺ひける。きさは程なく走り寄り、「是は〳〵皆樣今日はお慰み、と只今久三の物語、私が氣色も云々とは無けれ共、かみ樣お爲樣へ頼み上ます御訴訟事、直に是へ參りしも、ア丶おとましい事出來まして、一倍氣合に當ります」と、溜息吐て居たりけり。貞法もつく〴〵見て、「此方へ訴訟の事有とはどうした事ぞ咄して見や。成べき事なら聞いでは」と、さも念比の詞の末、きさ「ア丶お馴染とて忝や。昨日の暮かた

ごせ殿—盲目藝者

つがもない—途方もない

友盛—平知盛のこと

沈みし有樣—謡曲船辨慶の文句をとり「又義經をも」の句を又由兵衛ともじりたり

は何と云誰ぞいの」由兵衛殆ど笑壺に入、「ヤア有難い忝い、三度禮拜仕る。名を申せばつい御存じ。され共先唯今は、お名をば申まいよの。しやん〳〵、サア是からが本酒、亭主から又はじめ、憚りながら介樣へ、お肴にごせ殿一節頼む」といひければ、介五郎盃うけ、「申かゝ樣、二郎兵衛が法隆寺より戻つたら連て來て、彼れが好の心中を語らそ物」内義「ヲヽされぱいの。切てきさが居たらば、祭文を聞ふ物」と、いへば由兵衛興醒顏、「ムヽ二郎兵衛は母親の年忌に當り、在所へ参ると申たが、きさも一所に二郎兵衛と連れだつて参つたか」内「アヽつがもない、きさは此比風引て頭痛がするとて宿へ往た」と、聞もあへず由兵衛、「エヽ内方も此方等が居た時分と違ひ、自墮落になつたな。あ。青二才の二郎兵衛め、丁稚上りの分として、母の年忌で候ふとて此忙しい最中に、十里近ひ法隆寺へうせざまが氣に入ぬ。殊にきさが煩ふて宿へ歸つた時分に、同じ樣に家を出、祿な事は仕出すまい」と、滅多無性に一人腹、人も知らぬ心を苛ち、船辨慶にあらね共、謡友盛が沈みし其有樣に、又由兵衛がしんきをもやし、舟端蹴たて盃踏わり、前後を忘ずる計なり。菱屋一家の人々は何の心も付ざれば、「はや日も暮れた、最早是から歸らふ」と、上り支度を由兵衛、「危ないことはちつ共無し。挑灯用意致せし」と、

き女形、柳亭道
倚に圖あり
焦る—漕がるに
かく
火屋—火葬場
山村—歌左衛門
芝崎—林左衛門
江戸堀—江戸風
なる故
猪喰屋橋—猪喰
うた報いと云ふ
故
如法—柔和（俚
言集覽）
しにせ—老舗の
活用
くはいけい—面
目
いきやすふて—
出來易くて
きも入—世話

出す。嘉十郎が負付に炭屋町を思ひ出す。敵は三原重太夫、序にて作りし惡心の、切りで返報のくる時は、猪喰屋橋思ひ出す。思ひ出し〳〵陳ね行く。先是迄が片おもて、裏の御堂も高々と、立賣堀を漕廻し、辨當濟ば碗家具も、釜もちや〳〵あらや橋、跡へはんなり入花の、茶びんご橋はこち〳〵」と、寄よ〳〵濱際の瓦町橋にぞ著にける。菱屋介五郎は如法成氣も丸額にこやかに、介「巾婆樣母樣、此永き日の馳走ぶり、亭主由兵衛さぞ草臥、暮も近し是からお上りなされ」と有ければ、隱居の貞法七十三眼鏡要らず杖つかず、齒は一枚も拔目なき、男勝りのかみ樣にて、「ヲ、それ〳〵、是由兵衛、念の入た馳走でいかひ慰。此方の內から出た人が、店一軒の主に成商賣もしにせて、親方一家を饗應とは此方ともくはいけい其身の手柄。去りながら女房がなければ、人の世帶は落付ぬ。身代藥の女房を早ふ持て落つきや。左樣でないか」と有ければ、內義も共に打笑ひ、內「何故に女房持やらぬ。但何處ぞに思ひ入がなあるかいの」由兵衛思ふ圖に乘りて、「誠に今日はお心よふ、お遊びなされし忝さ。其上女房のこと迄お尋。御意の通少思ひ入御座れ共、此女房がいきやすふていきにくい。どふでかみ樣お爲樣の、お口を借ねば參らぬ事」貞「はて此方連が云ふて濟事ならば、きも入らいで何とせふ。其思ひ入の名

ば葬式を送る船もあり
せんの字—船は公に葬むと書く
橋をいよこの—いよこのは前のよのと同じく拍子詞（松の落葉）
浪華藝者—藝者は歌舞伎役者
いせお云々—浪花の葦は伊勢の濱荻の歌によれり
龜井橋—此處に天神のお旅所あれば云ふ
袖島源治、桂木常世—共に女形の役者
新靫—鹽魚の町なればしほ〳〵と愛嬌あるに取る
福島—雀鮓の名物ありて味よき故
蓼穗—鮓に蓼ある如く辛い所もありと也
上村吉彌—美し

共、其はま荻の八重桐を、龜井橋じやとおしやる」乙「心はの」甲「先はおたびの神かけて、跡先に又續く者がないは扨」甲「袖島源治は新靫じやとおしやる」乙「それ何故に」甲「鹽物町のしたゝるたる、然も藝には骨が有といの」甲「桂木常世はゑのこじまとよ」乙「なぜなぜ」甲「ゑのころころ〳〵抱寄せて手飼に愛らしや」甲「扨又嵐三十郎かつほ座橋とおしやる」乙「心はの」甲「何の料理に遣ふても仕出が甘いは扨」甲「櫻山庄左衞門福島じやとおしやる」乙「心はの」甲「小柄なれ共張詰て舞臺一ぱいかさも有、藝に味も有ル口中のしより〳〵したる雀鮓、夫で蓼穗の何所やらが、ひりゝとする」とぞ答へける。甲「音羽二郎三を雜魚場とは」乙「鰭が有との譬かや」甲「上村吉彌は伏見堀じやとおしやる」乙「義理はの」甲「舟板町の舟板の末には沖に乘出し、帆を充分の印とて今から人や焦るゝと云事」甲「扨市村玉がしは、梅田橋と見立たり」乙「夫何故に」甲「はて渡れば色町、越れば火屋、濡にも憂にもよふうつるは扨」乙「杉山平八を四ツ橋とは是どふじや」甲「江戸からも京からも四方へ引つり引張た、蹈ばつたがつて山村が、くはつとひろげた兩足は、音頭百間堀を思ひ出す。善惡二ツを嚙分ヶて、六義を糺す芝崎に、思案橋を思ひ出す。篠塚二郎左を見る時は、大佛島を思ひ出す。三代續く奴風、嵐が風姿を譬ふれば、其江戸堀を思ひ

今宮心中

二郎兵衞
おきさ

作者　近松門左衞門

ござ〳〵舟—ござた〳〵と御坐船とかく
じやれ云々—冗戯でない本當と本町とかく、爰は由兵衞が舟遊して主人を饗す所
瓜を二つ—似る事の譬に云ふ
紫帽子云々—女形の被る帽子が水に映る
道正坊云々—坊主が水垢離して祈れは病氣本復す
茶船云々—嫁が里歸の船もあれ

音頭　ゑい〳〵〳〵ゑい〳〵、月見花見は何所も同じ、諸國名所のその中々に、たぐひ浪花の舟遊び、老も若いも下人も主も、男女がござ〳〵船に、袂涼しき川風は、秋と云ひても虚でないよの、じやれでないよの本町橋を、漕出て見れば天滿川、市の側成初甜瓜買ふて冷してひいやりと、瓜を二ッに打割ば、似たりや似たり燕子花、紫帽子河水に映らふ影を水汲みが、汲で荷ふて　謠　持や桶の棒、坊主頭を振立て、道正坊の金柄杓、あれあれ撫て通れば一撫に、はや本復の伊丹酒、茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里歸り、上荷で送る葬禮や、世の有樣のさま〴〵を、一時に見る舟遊び、是常になきお肴と、一つ勸むる盃や。謠　然れば船のせんの字を、君にすゝむと書キたり。船の屋形に三味引ば、納屋に油の臼を引、はしのいよ此はしの上にて賣る聲は、煙管團扇煙草入、役者評判扇賣、浪花藝者の風俗を、橋々名所に擬へて、書集めたる藻鹽草、甲「いせおの海士に有ね

と成たれば、譬へ誠の科有ても、彌々命は取難し。此上は汝が行末、彼が後生の爲ぞかし、和睦して恨みを晴させ、往生させよ」と有ければ、勘十郎一念發起して「是清十郎今は我も懺悔せん。彼の七十兩の小判は、此勘十郎坊主が盗んで、源十郎奴に塗らんと思ふ折節、切られしを幸に、其方に負せたり。恨みを晴れて成佛あれ。跡弔はん」といふ所を、役人「扨こそ盗人顯はれたり。其奴縛れ」役人「承る」と踏付け〳〵腕捻上げ、はや切繩にぞかけてげる。役人「直に國中引渡し、獄門に切かけよ」と引立れば、妄執も晴れつゝ淸き清十郎、臨終顔も菩薩の數、廿五歳の命は消へて、浮名は今に殘りける。お夏も共に取付を、宥め伴ひ立歸り、其夏衣墨に染、年忌〳〵の手向草、花の帽子に修行の笠、笠が能く似た阿彌陀笠、彌陀の御國に生れける。

塗らん—罪を被せん

切繩—斬罪人を縛る繩

廿五歳—廿五菩薩に寄せたり

夏衣云々—お夏も尼となりて淸の菩提を弔はん爲修行に出づと也

わだかまり—中途で奪取る

と思ふたに、仕損ふて口惜し。エヽ〳〵無念な口を利するなあ。ハッ〳〵我ら故にお夏樣の自害、御恩の旦那の憎しみも、嘸や增らん情なや。此年までの御面倒、御恩を報ずる事もなく、御苦勞をかくる事、是ぞ黄泉の障りと成。これ親仁樣、妹共」と、呼向け顏をじろ〳〵と、云度き事の有そうに、目は働らけど息切れに、人脈絶ゆる兩眼より、涙計を暇請ひ、親子他人の隔てなく、皆々哀れを催せり。佐治右衞門涙を流し、「申殿樣、勘十郎がお主の銀を引負し、我らを騙した慥な證據出るからは、七十兩も彼奴が盜みに極つた。御詮義なされ、淸十郎を御助け下され」と、大聲上てぞ申ける。代官職聞給ひ、「尤々。不便なれども淸十郎は、人を殺せし白狀紛れなき上は、斷罪遁るゝ所なし。又勘十郎が七十兩、盜みしといふには證據なし。然れ共勘十郎、をのれ一旦主人の金子をわだかまり、淸十郎親子に無じつを云懸け、迷惑させし不屆、もと皆をのれが惡心より事起つて、お夏も自害に及びたり。主殺しとも謂つ可し。急度仕置に行ふべきが、手を出して人も殺さず、盜人に極まる證據なければ、慈悲を以て助け置く。命の代りに髮を剃し出家して、彼等が菩提を弔ふべきか」と仰ける、「ハアヽ有難し」と勘十郎頭を地に付け三拜し、小刀拔いて髻より、ふッつと切て捨ければ、役人「ヲヽ神妙〳〵、佛弟子

お下り―大阪より姫路に戻る

顋―口

四拾兩の内百廿一兩、爰元にて鹽問屋へ相渡し、貴樣の損銀殘らず相濟し、則請取手形殘金十九兩上し申候。追付御下り待入候。但馬屋勘十郎殿參る。同源十郎」役人「何と此手蹟相違なしや」と仰せける。九左衞門一見して、「相果し源十郎が筆、判形ともに疑ひなし。サア返答あるか勘十郎、御前にて申せ〳〵」と責付れば、勘十郎少しも怯まず、「尤我ら私商、損金の立用に道具の代金、暫く取換置たれ共、追付右の金は才覺して、道具屋へ濟し置く。商賣の習ひ、廻り金の無き時は、氣轉を利せ、表裏をつかひ、主人の金を手前へ加へ、自分の銀を主の銀に廻し、間に合するは世間共に手代の習ひ、我等計に限るでなし。彼の淸十郎は傍輩を切殺し、金七十兩盜取、是も手代の習ひか。エヽ殘多い。まそつと早ふ生れたら、熊坂長範か、石川五右衞門が手代にせば、能い給分を取らふ物を」と、憎體にこそ申けれ。今を最期の淸十郎、眼をくはつとみひらき、「おい〳〵勘十郎、廣い世界を己が口から、世間手代の習ひとは、顋が過て聞憎い。惡い事を習ひといはば、主殺し、親殺し、屋燒、强盜、世間の習ひと許そふか。人を殺せば我身も死ぬる、此淸十郎が七十兩や八十兩の金に換る命でなし。旦那の御恩、お夏樣の情に捨ふと思ふ身を、己が口一ッにて勘當させた其恨み、をのれをたつた一討に仕廻はふ

しなしたり―失敗せり

代官所の役人、馬を飛して駈來り、矢拂の内に飛で入、大聲上て、「ヤア早まつたり淸十郎、汝傍輩の源十郎を、人違にて殺めし段は、白狀紛れなしといへども、盜人の科未だ分明ならぬゆへ、さらし者となして成敗の日を延し、盜人の本人顯はれなば、汝が命を助けんとの評議なりしに、近比殘念千萬なり。只今但馬屋一家を召寄する。事の詮義濟むまでの命を生んと思はぬか、狼狽者」と力を付、二人が口に氣付を入、樣々看病なし給へば、お夏は少し息出る。淸十郎は心配の臟腑を破りし長烟管、賴む方なく見へにける。程なく、警「但馬屋九左衞門、手代勘十郎、一家殘らずお召によつて參りたり」とぞ訴ふる。斯る處へ老たる百姓、慌しく狼狽來て、一目見るより、百「南無三寶しなしたり。待てむざ／＼と一人は殺さぬ、敵を取てとらせふ」と、せき來る淚を押拭ひ、謹んで、「我らは淸十郎が親、和泉の國水間の佐治右衞門、年寄ながら面目なや。其勘十郎奴にたらされ、お主を大事、子が可愛さ、よしない手形、なんほう後悔仕る。それに付其時分、娘子共が道頓堀にて取違へ歸りたる笠を、此比取出せば、頂の下に此文有、御詮義なされ、淸十郎が科を輕め下され」と、淚を流して訴訟する。役人「それ／＼是へ」と、取上て披見ある。文句「幸便に任せ一筆啓上せしめ候。此度お夏嫁入道具の代金百

充滿其願―盂蘭盆經にある句にて其願を充たして淸凉池の如くならしむ
沙羅云々―釋尊涅槃を示し玉へる所、其時栴檀の匂の霞が今烟草の烟に變りしと也
梵釋二天―梵天、帝釋天
りやうぜん―靈山、鷲の山に同じ、此山凡夫が見れば荊棘瓦礫の山なれども佛菩薩が見れば百寶莊嚴の淨土なり

未來も一ッに生るゝ爲、約束の烟りぞ」と、餘所ながら暇請、烟草吸付垣越に、警固の者取次て、淸十郎にぞ渡しける。夫婦は物も云たけに、顏振上しが咽返る、淚を中の關の戸にて、とかふの詞も出ばこそ、泣より外の事はなし。漸淚を押留め、淸「人も多きに御身の手より、末期の一服を受る事の有難さよ、本望さよ。此烟草にて十惡五逆の睡を覺し、充滿其願如淸凉池と嘯きて、地獄、餓鬼、畜生、修羅、此四惡種の苦患を解脫し、吹出す烟は沙羅林栴檀の霞と變じ、三寶供養の燒香となつて、三十三天に薫じ渡らば、日月は兩の眼に入代り給ひ、梵釋二天に手を引れ奉り、佛の御前に此度は、立別る共藻汐燒く、烟は同じ鷲の山、りやうぜん淨土で待べきぞや。南無阿彌陀佛」といふより早く、烟管押取雁首迄、咽の内へ押込んで、眞逆樣にぞ伏たりける。警固の上下ふためきて、「それ殺すな」と引起せば、色もかはつて目眩めき、血は紅の瀧津瀨と、口に流るゝ風情を見て、夏「口惜ふ後れたり。我こそ淸十郎が二世の妻但馬屋のお夏、人々の情には同じ土に埋みてたべ。南無大悲觀世音助け給へ」と、立たる拔身の鑓押取、咽笛ぐつと突通す。二人の比丘尼抱付、「なふ皆樣頼みます」と、泣けど叫べど囚人の、自害に各々仰天して、勞る人もなかりしは、是非にかなはぬ次第なり。城下に斯と注進す。

高き山云々―成佛の難きに喩ふ

只一人―お夏

情のお主―九左衛門

御高恩、明暮主の敎へに任せ、親に孝行、主に忠、只正直を守つて一言も僞りをいふまじと、每朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは、只今非業に死んとは思ひも寄らず。佛共法共一遍の念佛申せし事もなく、今の口惜しさ詮方なく、高き山の頂にて、一杯の水をもとむるが如しとは、此身の上に知られたり。此群集の中にこそ、淸十郎が一命かはらんと歎く人も有べきぞ。必々僻事なり。存生へて追善し、菩提を弔ふ善根こそ、命を助け、不老不死の藥を與ふるよりも嬉しきぞや。人々の回向を受け、佛の御國に至らんと、思へば〳〵、此世の羈絆はふッつと思ひ切たぞや。アヽ思ひ切ても切られぬは、いとし可愛の只一人、よしこれも夢の戲れ、頓生菩提、南無阿彌陀佛」と、潔くはいひけれ共、お夏が歎き妹の、變れる顏を尻目にかけ、覺えずわつと泣出せば、お夏を始め二人の尼、警固の上下、緣もなき、貴賤群集に至る迄、皆々袖をぞ絞りける。やゝあつて淸十郎、「如何に警固の方々、口乾きて苦しきに、烟草一服所望したし。此群集の其中に、姫路の人も有ならば、吸付て給はれかし。情のお主の御手より、末期の水と觀念せん。如何あらん」といひければ、警「苦しからじ、それ〳〵」と、烟管烟草を出しける。お夏悦び「なふ我こそ姫路の者、一樹の蔭も他生の緣、況して一ッ國なれば、

る事だけを容赦して左右の二の腕を縛す

搔締、北向に引据ゆるは、目も當られぬ風情なり。お夏は涙に目も明れず、聲も立ねど伸上り、夏「なふ此處に居る。是此處に顔を向て下され」と、呼はる聲も往來の、群集の歎き念佛に、紛れ聞へぬ哀れやな。不便やな淸十郎、顔も容も瘦衰へ、最期極る心にも、後生菩提も思はれず、お夏が歎き古鄕の、親兄弟は如何ぞや。お夏に知らせ今一目、せめて面影計でも、姬路の方を見廻して、目と目をふつと見合て、お夏は「わつ」と泣出す。淸十郎は聲立てず、膽より出る憂涙、刀の刃より先さきに、思ひに命絕へぬ可し。涙を中の架橋と、心通はす心の色、世に取沙汰の諺や。歌「淸十郎殺さばお夏も殺せ。生て思ひをさしよよりも、思ひを生て、生て思ひをさしよよりも正」なまみだ〱南無阿彌陀、南無彌阿陀佛なまみだ〱、南無阿彌陀佛と囘向して、皆々袖をぞ絞りける。淸十郎涙を押へ、「何れも有難き御囘向、千金萬金より、一遍の囘向に優る寶なしと承る。最期の悅び何事か是に如ん。さりながら、心にかゝるは此高札、主人の金七十兩、盜むとは身に取て覺へなし。相手勘十郎を切殺さんと思ひしに、過つて人違へ、遁るゝも業悅びならず、殺さるゝも業歎きにあらず。某生年廿五歲、十一歲の春より奉公し、主人の養育み情にて、商人の道一通り、藝能文字の本末迄、人並に成たるも、皆是お主の

おきてあだし心を云々の古歌より契り深きないふ

上越す云々—清の右に出づる者なし

何か云々—其甲斐なしにお夏をかけ謡曲班女の狂氣を寄せたり

由縁の草葉—由縁の中

羽搔締—高手小手にくゝしあげ

出給ふ。今は我名を包みても、何か其甲斐夏果る、扇の女の物狂ひ、其人の名は清十郎、有し姿は變る共、未だ俤は殘るべし。教へてたべの人々」とて、伏沈みてぞ泣居たる。二人の比丘尼縋付、「扨こそは餘所ならぬ、一ツ流れの和泉の國、其人の爲にこそ」まゆん「我は妹」さん「我は嫁」二人「親の歎きを宥めかね、共に亂るゝ我身ぞや。狂女といふも何故ぞ。和女は妹脊の忍草、身は兄弟を思ひ草、同じ由縁の草葉ぞ」と、手に手を取て泣叫ぶ、物の哀れをとゞめける。比丘「なふ淺ましや、今里人の語りしは、但馬屋の清十郎は人を殺めし科によつて、方々へ追手かゝり、長崎とやらんにて終に捕はれ、囚人と成、彼の松蔭の竹垣にて七日曝し、其後は但馬屋の門口に、獄門にかけらるゝと語りし故、せめて餘所目の暇請に是迄は參りしが、御存じなきかいとほしや」夏「なに我良人は捕れて、終に首を切らるゝとや、それは誠か。今迄は狂氣の中にも若もやと、賴む念力切れ果て、同じ刀に切られん」と、駈出るを二人の尼、「歎きはかはらぬ我々なれど、最期に心亂れては、人の譏後世の爲、皆其人の仇ぞ」とて、泣く〳〵制し留むれば、はや先拂ひの警固の者、山賊夜盗の其如く、嚴しく堅め引出す。生ての思ひ死する罪、もと一筋の縛めの、繩目に遭ひて清十郎、引れ出るぞ無慙なる。矢拂の内に土壇を構へ、高手を許し羽

れり(白氏文集)
かいろ—偕老にかく、藏玉集、武藏野にかいよと鹿の鳴く頃は尾花浪寄る秋の夕暮とあるを音便にてかいろと云り(燕居雜話)
丸太船—比丘尼をかく
枯れたる木—念彼觀音力枯木華更開(陀羅尼經)
笠にさいたる—熊野道者の歌
ぼんじやり云々—愛らしき中に威あり
花橘—五月待云云の歌を取れり
盤上—双六
美い酒—癖のない酒呑
根掘れ—根間ひ葉間ひせられても
末の松山—君を

埵の誓には、枯たる木にも花笠、笠に挿いたは椰の葉、腰に挿いたも椰の葉、一枝二枝、三日に三枚七日に七枚、起證誓紙の牛王のうらなく、灰に燒つゝ互に飲んだる、水も漏さぬ中々に、引も合せぬ神心、熊野の神のお留守かや。足柄、箱根、玉津島、貴船や三輪の明神も、神共覺へぬ神ならば、尋る人に逢せて見や。それ〳〵逢せず逢せぬは、皆僞りの御神と、譏つても祈つても、神の力もかなはぬか」と、笠も髱も搔投捨、狂ひ歎くぞ哀れなる。共に濡らせる尼衣、二人の比丘尼も涙を抑へ、「我も尋る人故に、假に扮せし修行の道、思ひあたる事あらば、知らせ申さん國處、有樣語り給へとよ」「エヽ嬉しの人の問言や。國は播州姫路の者、尋る夫の容姿、姿は詞に語る共、心は筆も及びなき、ぼんじやりとしてきつとして、花橘の袖の香に、昔男の業平作り、黑い羽織が好き梳油、髮付髮付眞黑々、黑目がち成日の中に、鼻筋通つて櫻色、年ごろは卄あまり、せい高からず低からず。茶の湯、盤上、打囃し、男の藝に一つでも、疵なき玉の盃の、酒も美い酒、假名文書手の萩の露、轉寢し 說敎夜の睦言は、おれと和女が中ならで、岸の濱松根掘れても、漏すまいぞや顯はすな、變るまじきと末かけし、末の松山浦の波、上越す人もなかりしに、友傍輩の猜みにて、犯さぬ罪の仇名をかこち、世を憂きものに

少くはん―唄ふ時の拍子なり

歌念佛、比丘尼が齒を磨き頭を子細に包みて歌ひ歩く唄にて骨董集に詳し

流れ、河竹―遊女をさす

びんざゝら―小板を數多繫ぎて比丘尼の鳴すもの

花の手―籠手

笑顏―柄にかくしほ―鹽にかけて愛嬌をいふ

向ひ通る―當時の流行歌

鐘に待宵―待宵侍從の歌をとれり

鯉魚―孔子の子にて父に先ちて歿す

白居易云々―白氏が女子金鑾子を哭する文など

夜さ來ひといふ字を金紗で縫せ、裾に清十郎と寢たところ、裾に清十郎と寢たところヱ、少くはん。歌念佛「觀ずれば夢の世や。寢て溫めし懷子、何時の間にかは浮れ初、三界を只家として、袖笠雨の宿りにも、心とゞめぬ假枕、流れにあらぬ河竹の、笹の小笹のびんざゝら、花の手おほひお手を引れた、是も熊野の修行かや。姊樣のこれの、勸進柄杓の、笑顏好しとて柳が招く、柳の髮を何故に、浮世恨みて尼が崎、尼が崎とは海近く何故に其方はしほが無い」一節は哀れに身は伊達に、歌は念佛の歌比丘尼。歌「向ひ通るは清十郎じやないか。笠がよく似た菅笠が、能く似た笠が、笠が能く似た菅笠がゑ」笠を知るべの物狂ひ、物に狂ふも我計かは、鐘に待宵鳥には別れ、戀する人の夜な〳〵を、氣違とてな笑ひ給ひそ。謠「傳へ聞、孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き、白居易は又我子を先立て、枕に殘る藥恨むは斷や。夫は子故の別れの淚、親より子より我身より、いとし殿御のいとしぼや。夫より便宜音信の、聲も聞ねば顏も見ず、我は秋鹿夫を戀、歌かいろと啼と知らせたや。なふ〳〵あれなる御僧我殿御返してたべ。何國へ連て行事ぞ、男返してたべなふ。いや御僧とは空目かや、我も焦るゝ丸太船、浮世渡る一節を、謠へや謠へ泡沫の、二人歌「小舟作りてお夏を乘せて、花の清十郎に櫓を押さしよゑ」夏「觀音薩

因果の網云々—不幸の網に懸るに斯るを掛く
直なる法云々—正しき道には從はれず横道行く
契りにし—西にかく
狂亂云々—お夏は發狂したり、爲ると鳴るとかく
妻—夫の事
夜の鶴—鶴は子を愛する爲夜寢ずに守る

しさ、清十郎が氣遣ひさ、氣も逆立て散亂し、「南無天照太神樣、觀音樣氏神樣、死ぬとも二人一所に」と、胸を騒がす折からに、勘十郎が聲として、「蚊屋の内を見なんだ、探して見よ」といふ聲す。夏「南無三寶」と飛んで出、表には錠下りたり、裏には大勢充滿たり、跡へも先へも因果の網の、かゝる憂身は佛神の、直なる法も横町の、相の細路次蹴破れば、さつと開くも戀路の念力、かけし願ひの神力の、神變奇特毒蛇の口、遁れ出たる如くにて、落んと契りにしの辻、東の辻に、夏「なふ我良人〳〵」と、聲を限りに往還り、「扨は俘となりけるか」と、はや狂亂となる鐘の響の末に、夏「あれお夏〳〵と呼ぶはいの。おふ〳〵其處にか。何處にぞ。いや〳〵いや待て暫し、あれは我屋に父の聲、我を尋ねて我を呼ぶ。親も床しや、妻も戀しや。父は子を呼ぶ夜の鶴、我は妻呼ぶ野邊の雉子、追かけ行かん、夜は何時ぞ。鐘はいくつ、八ッか、七ッか」曉風の、辻行燈を吹消して、道も心も眞くら〳〵、くる〳〵〳〵〳〵、狂ひ亂れ泣亂れ、亂れて歌ふ鷄の、卵を渡る危さの、狂女となるこそ 三重 哀れなれ。

お夏笠物狂　下之卷

顋骨―口
鳩尾―みづおち

よしこれも云々―まゝよこれも汝が非より出でたりと也

引入―手引したる仲間

耳に口を差寄て、清「こりや勘十郎、未だ魂はよも去るまじい、能く聞け。傍輩に科を被せ、身の爲にせし報ひの劒、名乘合て殺さぬは、近比殘念至極ながら、讒訴したる此顋骨」と、頤かけて斬下げ、「此胸から工んだか」と、鳩尾前を背中まで、思ふ樣に止めを刺し、死骸を夜著に押包み、立上れば血落て、滑つて反向にどうと臥す。はつと起て蒲團にて、足摺拭ひ靜々と、身仕廻して立たる處に、奧よりお夏は手燭の影、表へ出るを、清「これ〳〵」夏「ム、其處にか」と走寄り、血に滑つて「ア、怖」と、聲を立るを押鎭め、樣子を聞き、此上は一所に退かん」といふ處へ、行燈提て勘十郎、納戸の方より來る躰、南無三寶人違へ、よしこれもうぬが身の、火を吹消して車戸を、押明け飛んで出にけり。遲れてお夏は詮方なく、蚊帳打あげ身を潛め、生たる心地はなかりけり。此音に勘十郎走寄て手燭を上げ、夜著引捲て、「ヤア源十郎が切られたは」と、呼はる聲に主下人、男女殘らず起合せ、主「疑ひもなき淸十郎、門の戸明たは落つらん。引入れあるか吟味せよ」と、上を下へと返せしが、下人「なふお夏樣は御座らぬは。ヤア是ぞ曲者探して見よ」と、二階、內庫、緣の下、湯殿まで探せども、蚊帳の內は氣もつかず、表の口に錠下し、甲「裏を探さん」乙「尤」と、提灯燈して馳惑ふ。お夏は我身の恐ろ

おぞい—すごい

身代の敵—主家の身代の敵

心の錆も云々—精神は潔白なる

ない。お蔭で萬事忝い」と、いへば源十郎、「一段〱。それに付き、淸十郎奴が諸道具、七拾兩の小判まで、旦那が身共に預けられた。お夏女郎と淸十郎奴が、盜出した分にして、仕てやる樣な工面がなと、分別すれど能はぬ智恵。其方が今度のおぞい仕樣、魔法でも適ふまい。どふぞ思案はあるまいか」といへば、勘十郎領て、「嫁入道具の代銀を、此方へ遣ふて損を埋め、まんまと間には合せしが、一度は大坂へ上す銀、あれをと胸に當て居る、工面を聞け」と囁き合て吸付る、烟管の先にて行燈は、消て闇とぞ成にける。淸十郎は幸と、釜の内よりはひ出る。酒に醉たる源十郎、とろ〱寢入る躰なれば、勘十郎搖り起し、鼻に手を當て、仕濟したり、七十兩を盜み取、預り手の此奴に負ほせん物と分別し、そつと起出、源十郎を我寢處に押遣て、夜著打被せさし足し、奥の納戸に入にけり。淸十郎はそれとも知らず、扨は彼奴等は寢入しな、エヽ憎さも憎し、とても斯なる憂身なり。身代の敵、此首尾に助けておめ〱と戻られず、勘十郎奴を刺殺し、有甲斐もなき我命、仕損ふたら浮世は闇、後前見へぬ出來心、内の勝手は覺えの庖丁、心の錆も荒砥の研立、尋ね寄れば高鼾、前後も知らず不思議の本望、夜著引退けて咽笛を、ぐつと剜れば源十郎、吽といふを引起し、膽先を一刀、又刺通して息を留め、

七や十四五云々—若緑五、快き夢二つ三つ七八十四五すつとんとんとうちくむ云々の句をとりて洒落れたり

人は零落—諺、零落してゐる時に親切にしてやるもの

彼の金子で云々—横取した嫁入道具の金で

も靡いて下されぬ。恨みの焔火吹竹、七や十四五すつとんとんと打度いが。アヽいとしいが因果の種。人は零落の心ざし、コレ此餅は正月の、在所へ遣ふと思へ共、君に何が惜からん。恥しながら、此玉を喰ふと思ふて、賞翫して下さんせ」と、懐中に押入るゝ。お夏は色を知らせじと、じつと抱付締めければ、玉「ヲヽ、ぞつとするほどお嬉しい。恨みの雲も晴渡り、是で千倍〳〵。とても事に盃せふ。酒取て來ましよ」と入跡に、引續いてつゝと入り、部屋に駈込み夜著引被き、身を慄はしてぞ臥居たる。淸十郎は斯とも知らず、「お夏は外に如何ぞ」と、釜の蓋あけ見廻せば、奥には人も寢入花、勘十郎は親方と、寢酒の相伴ひよろ醉て、夜著蒲團引出し、常の所に臥にけり。跡より又源十郎、これも微醉ひ來りしが、源「勘十郎もう寢たか。少談合ある、目を寤せ」と、頰杖してぞ寢轉びける。勘「いや寢入はせぬサア話せ」と、夜著の内より烟草盆、寢ながら行燈引寄て、顔を竝べて語りける。源十郎小聲になり、「其方が頼ふだ鹽商ひの損銀、彼の金子で濟して、請取手形も剩餘金も、一所に上した届いたか」といへば、勘「ヲヽ過分〳〵、慥に届き請取たが、其狀も請取も大事にかけ、笠の頂に入れ置、其笠を道頓堀の群集に、芝居の木戸に預けて、餘所の笠と變つて、詮義しても知れなんだ。それは失せても大事

機嫌も直るべし。それまで辛抱遊せ」と、泣く〳〵宥め慰むれば、夏「戀し床しは身の氣隨。男の爲には憂苦勞、厭はずながら只一人、突放して遣れふか。これ此小袖と脱換て、其布子を逢ふまでの形身に著ん」と、涙ながら互に帶解き身を合せ、片袖づゝを脱交はす、肌睦しき心ざし、戀路ならずは何故に、生れて知らぬ木綿物、服紗の衣と引締て、顔と顔を見合せて、わつと泣入る心底に、萬の涙籠るべし。物にて顔を押包み、「さらばや」といふ所へ、腰本下女共、「お夏様御座らぬ、裏よ井戸よ」とひそめきしが、門口明て「こりや此處にじや。アヽ申お夏様、お前は悪い合點な。どちらの爲にもならぬ事、先づ御入」と、衣裳をしるしに淸十郎を取巻き、連て内に入けるに、お夏續いて入らんとす。下女「是淸十郎殿、お夏様がいとしくば、先往んだが好いはいの。男の様にもない人じや」と、恥しめ突出し押出し、大戸をはたと鎖ければ、淸十郎は詮方なく、部屋へ入體にして、大釜明て身を縮め、そろり〳〵と忍び入り、中より蓋をぞしめにける。お夏は門に憧れて、入るべき便を待つ所に、炊婦の玉はそろ〳〵と、門口明て、「なふ淸十郎様淸様」と、お夏が袖をしかと取、玉「アヽ此方は戀知らず。私が此方に絆されて、御主様を袖になし、朝晩に心を付け、しんぞ思ひを盡せども、お夏様に心中立て、一度

御主様云々―主人の命令を蔑にする

涅槃の雪—諺に雪の果は涅槃とあれば門の雪をも見納めと也、涅槃は陰暦二月十九日

愛染—明王の一にて愛慾を司る

て泣きけるが、「旦那にさら〳〵恨みはなし。十一歳の彌生の花、いろはともちりぬるとも知らぬ者の、是程迄算勘商賣、讀書の、硯の海より山よりも優つたる御高恩、拳一ツあたらぬ身が、いか成月日か、今日の今日主従の縁切るゝ。いか成神の咎めぞや。今一度旦那の顔拜まん」と駈入るを、情なくも男共、手取足取大道へ追出し、門口はたと鎖しけるは、詮方もなき三重次第なり。未だ二月の朧夜や、涅槃の雪の名殘の門、立留りつ立去りつ、涷へ狼狽へ佇立めり。無慙やお夏は魂も、布子の袖に入計、身は脱がらの力も切れ、若やと部屋を忍出、門の戸明てそつと出、四邊を見れば人影の、清「お夏樣か」夏「此處にか」と、いふより先に抱合ひ、聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰付て、忍び音に泣く計なり。夏「今の間の物思ひ、ま一度逢せ下され」と幾干の願を掛たやら。清十郎の清の字なれば、先此處の清水樣、京の清水、室の明神、書寫山、伊勢の御神樣、住吉樣、金比羅樣、不動、愛染、大師樣、拜み頼みし印にて、顏を見て有難や。サア二人連にて立退て、いか成遠國小借屋でも、二人使ふを一人使ひ、一人使ふを手鍋でも、暮されまいものでもなし。いざ立退かん」と有ければ、清「いやそれでは、情の親方の憎しみも増るべし。在所へ歸り、親共と勘十郎奴が善惡糺し、身の垢ぬいて詫言せば、御

奪衣婆—葬頭河曲府奪衣婆、脫亡人衣(十王經)

提物差換—印籠刀など

相讀—相棒

目とは見られぬ容貌。お夏は「我も一所に」と、飛付を下女腰本、引分け宥め教訓し、常の部屋にぞ伴ひける。父は彌々腹を立、「勘十郎は何處に有。何に恐れて引込むぞ。清十郎奴が入れ物吟味し、衣類諸道具押へ置、追出せ〳〵」といひ付奥に入ければ、「心得ました」と勘十郎、半櫃、簞笥舁出させ、ぐはらり〳〵と打明て、衣類引出し取散らすは、三途川の奪衣婆の、呵責も斯やと哀れなり。錠前を叩き破り、提物差換取出せば包みの小判七拾兩、勘「これは扨、此金子はお夏樣へ婆々御よりの譲りの金、身が包ませて覺へ有、極つた大盗人、首のは有旦那の慈悲。叩き出して追拂へ」と、手足を取て引出す。清十郎大聲上げ、「ヤイ勘十郎、盗人する男でなし。をのれが私商に赤穂鹽買ふて損をして、首縊らねばならぬ首尾、どふぞと談合したる故、お夏樣へ申ておのれに貸す爲替つた。戀する者の因果で傍輩の機嫌取、追従したが身の仇となつたるか、口惜や。をのれが損は入れ合せ、今は銀も要らぬといふ、察するに此度の嫁入道具の代銀を、遣らずに己れが引込んで、我親かたつて一札させ、人を損ふ工面とは、鏡にかけて知たれ共、相讀なければ是非もなし。是を見よ、清十郎は破れ布子一枚で、非人の體にはなつたれ共、心の内は紗綾縮緬、錦より潔い。エヽ辛いぞや、やれ恨めしい」と、齒嚙をなし

はいてに云々―新參の時に著て來た
無得心―思やりなき

はいひながら、親にさへ逢はぬ身が、夢程も覺へなし。在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打のなされ樣。勘十郎奴何處に居る。いはせねば堪忍せぬ」と、蚊帳より出るをとつて押へ、九「ヤレ勘十郎源十郎は、此九左衞門が兩の眼の代りをする。其手代が穿鑿して一札取たに胡論があるか。暇をくれた出て失せふ。こりや女子共、男共、彼奴がはいでに著て失た布子があらふ。尋出し引剝で、著せ換へ追出せ」とぞ喚きける。お夏は斯る有樣を目も當られず、涙にくれ「いはゞ我身も遁れぬ科。あまりといへば親ながら、無得心なるお心や。人の譏りも思召し、少しは宥免あれかし」と、聲を上てぞ泣居たる。九「チヽ慘いも辛いも知たれ共、をのれが母の遺言に、傾城の娘とて侮られふか淺ましや。未來の障りはこれのみ、と返すぐも歎きしに、氣遣ひするな。能い婿取て名を揚させふと請合しを、嬉しそふに打笑ひ、それで成佛〳〵とて、死んだ良ばせ忘れかね、千兩附ける嫁入を止め、大事の娘を教唆し、惑者になしたる恨み、但馬屋の九左衞門は、胴慾者慘い者といはれねば、亡人の位牌に向ふて云譯ない。胴慾者には誰がなせし」と、わつと計に堪へがね、咽せ返りてぞ歎かるゝ。其間に下部共、衣裳を剝で振袖の、汚れし綿衣に著せ換ゆれば、さしも美形の淸十郎、山田の案山子とうそ顫ひ、二

晝の螢云々―籠に入りし晝螢の如く胸の思を包む

まぶる―交はり染む

たまか―細かに心を用ふる、公道は花やかならぬこと（俚言集覽）

あらがふ―諍ふ

て、斯くと語りし不實さよ。二人は五體に冷汗の、露の命も消ゆるばかり、居直つて溜息を、つきも敢ぬに親手代、ばら〳〵と走り出、お夏が小腕引出し、清十郎もはひ出れば、九「其儘居れ、身動きせば男共打ちのめらせ」と取廻せば、蚊帳の内にすご〳〵と、晝の螢の影消えて、籠に窶るゝ其風情。外にお夏は夏の蟬、聲の限りを泣盡し、思ひをくらぶる計なり。親は腹立ち涙にて、「やれ女郎奴、おのれが母は流れの者、空言に身はまぶれても、心のたまかさ公道さ、千人にも稀なりしぞ。何時習ふて其いたづら。遊女の腹とて、何方へも嫁に嫌ふは聞つらん。其袖下は何事ぞ。左樣な事をせんよりも、己れが額に傾城の娘と、何故看板は打をらぬ」と、齒切をしてぞ泣けるが、「やい丁稚奴、不義一通りは許しもあり、十一の年から子同然に育てし奴。事によらばお夏奴と夫婦にせまいものでもなし。在所の親奴と云合せ、嫁入道具に邪魔を入、親方に恥搔せ、但馬屋の家を覆そふと工んだな。口の明れぬ事見せむ」と、證文出し、「これ見たか。おのれが請狀にある親奴が印判、妹とやら嫁とやらが文共合せて吟味した、芥子程も違ひなし。覺へがあらふあらがふな。主の寢首を搔かんも知らず。エヽ憎や」と蚊帳越に、額を三ツ四ツ喰はせて、涙を翻して怒りける。清十郎はつと驚き、「親の印判、妹の手跡と

開眼―釣初

寄親―保證人に立つ親分

取付き拜めば手に縋り、夏「女房を拜む事かいの。是程思ひ合ふた中、何故に女夫になられぬ」と、辛氣泣にぞ泣居たる。清「ヤア申お夏樣、いつぞやお前に借ました七十兩の小判の事、私が遣ふ金にてなし。傍輩の勘十郎、私商ひに損をして、平に賴むと申た故、取替へやらんと存ぜしが、思ひも寄らぬ仕合して、損を埋しと道すがらの咄。最う要らぬ金子なれば、戻しませふ」といひければ、夏「アヽ好いはいの。婆々樣の讓の金、如何しても大事ない。人の來ぬ間に、彼の蚊屋の開眼をせまいか」と、怖々慄ふ春風も、人目を忍ぶ綟子の蚊屋、蚊屋はお夏に緣深く、神の結ぶの釣手か、と戯れかはす手枕も、心せはしき契りなり。内手代の源十郎、「お夏樣、旦那の呼つしやる」と出けるが、はッと廣げし手も打れず、あきれて立てば清十郎、お夏が褄を引被ぐ。お夏騷がず袖にて隱し、「是源十郎、其方も男じや、引せはせぬ。忍んで逢ふは清十郎、見遁しにして給らふか。沙汰をするなら爲るといや。幸刃物も此處に在、直に二人が死ぬるまで。サア助けてたもるか殺しやるか、急度した誓文で承らう」と、弱身を見せず責付られて源十郎、「沙汰して私德もなし。商ひ冥利隱密なり。僞ならば各より私が先さきに、清十郎が脇指にて止めを刺るゝ法もあれ」と、云捨歸る其舌も引入れず、寄親の勘十郎に打明

實事云々—眞面目な戀で口舌いふ筈なし
室—播磨の室の津の遊廓
一季半季の者—奉公人
出來ぬ仕方—そんな大膽な事は出來ぬ筈と也
右左云々—下著の右は振袖の娘姿左は詰袖の嫁姿と也片ちぐはぐ

などする挨拶か。此度の祝言を好きこのんだる事でもなし、知ての通り、母様は室の女郎、今の内の母様に彼の弟が出來る迄は、我も室で育ちし故、母方が悪いの、傾城の風が有のとて、何處の嫁にも嫌はるゝ。これぞ能い事幸と、猶女郎の風を似せ、人は隱せど我は只、母様は傾城と、一季半季の者にまで、觸れ廻りたる村時雨、縁には付じと願ひしに、彼の立野の阿房面、敷銀に目が眩て、嫁に取らふと嫌らしい。此お夏ばつかりはいふた事を違へるか。恨みも辛みも後を見ていふたが能い。惣じて和方も斯樣な時如何なされ斯樣なされの主待遇が聞へぬ。わしから詞を直しませふ。なふ此方の人、此方向んせ」と、袖口から手を入て、ほと〳〵叩いて抱しむる。淸十郎四邊を見廻し、「コレお前に聞へぬ事がある、此袖下は何事ぞ。若衆の前髮、女の脇詰、男が知らいで立つものか。出來ぬ仕方」といひければ、夏「なふそこらを忘れるお夏でなし、ま一度振袖見せ度さに、皆々お針が縫ふたれど、祝ふて我も縫んとて、片袖計縫ふ顏して。是が嘘か」と帶解て、上著を脱げば右左、振と詰とのかたちぐに、片枝は蕾み片枝は、開き初めたる花衣、二人前見る誰も皆、斯ぞ仕立て著せまほし。淸十郎は身を擲ち手を合せ、淸「涙がこぼれて忝し。それほどに此男を不便と思召さるゝかや。冥加に盡ん勿體なや」と、

脇詰迄―嫁になれば振袖を詰めて小き袖にする

ねすりごと―あてこすり

身の正直云々―自分が正直なるより人もかくなちんと思ふ

是に懲よ云々―只是に懲りよと云ふ諺

駿河―するにかく

富士山云々―懸隔の甚だしき譬

一里塚は道一里毎に榎を植ゑたり（雨窓閑話）

脇まで詰め、今日明日となつて、道具が出來ぬ何んのとて、此嫁入が延されよか。世間からは道具屋へ銀渡さぬと評判せん。それに浮々銀渡し、素手で戻るといふ樣な、子共遣たも同前」と、算盤の割れる程、疊を叩いて叱りける。勘十郎迷惑そふに、「御立腹御尤、拙者も脫りは致しませぬ。證文をお目にかけ、ひそかな處でお物語致し度い事御座る」といへば、九「チヽいひわけあらばサア聞こふ、源十郎も來て聞け。勘十郎此方へ來い」と、打連れ裏の小座敷へ、苦い顏して入にけり。淸十郎奥を見て、「ハアヽ餘所には嫁入が有そふな。此方や洗足でも致しませふ。やあゐい」と沓脫に腰を懸れば、お夏つか〳〵走出、「又ねすりことばつかり。同なじ口で可愛やといふ事がならぬか。意地の惡い」と抱付き、戀には淚脆いぞや。淸十郎は懷手、「アヽ思へばあほうな者、身の正直な勝手して、人の詞をまん誠に。世間の奉公する者は、態々隙を貰ふては、春は親に逢に行、此淸十郎は親里の近所に、十日二十日逗留しても、親の所に嫁許の女房分が有故に、これに逢ふと思はれては、心中が立ぬと思ひ、親へ便りもせずに歸る。是に懲よどうさい坊、眞に孫子に傳へても、主の娘と念比など駿河の富士と一里塚、及ばぬ事をヱヱあほうな」と、舌打してぞ頭掉る。お夏淚を押拭ひ、「其方と我が身は實事にて、口舌

つぶ〳〵—くどくどと算盤のつぶ
怖い—赤飯をこは飯ともいへれば續けたり

不落居な—かたのつかぬ

に酒盛して、謠ひませふ」といひければ、夏「アヽ何をざは〳〵しやるぞい。蚊帳が出來よふが、紙帳が出來よふが、此氣合で今やなど、嫁入する氣は微塵もない。可惜手間で彼の蚊屋を、生絹の衣にして著たい。只無常氣でおかしうない」と、背後を見れば父親は、內手代の源十郞に、帳を讀せて算盤の、父「つぶ〳〵いやんな喧しい、先來て祝や」と赤飯の、怖い目付は我戀を、知てそふなと百千に、碎き破たる胸算は、いかな算者も及ばじな。斯る處へ淸十郞、勘十郞同道してぞ戾りける。九左衞門悅び、「ヤア好い處へ戾つたは。今日はお夏が嫁入蚊屋の祝ひ。此拍子ならば、大坂の仕合もよかろ」といへば、淸十郞庭に立ながら、「旦那の病になされた、中國北國残らず賣て、爲換手形濟ました。利合は高で貳拾四五貫目」と、日を合する二人が中、無事な顏見て嬉しい、と心に心をいはせたり。九左衞門上機嫌、「お手柄〳〵。お夏が嫁入は只出來た。扨なんと勘十郞、蒔繪道具も出來つらん。跡から來るか如何ぞ」といへば、勘「お道具も出來致し、代銀殘らず渡し、職人の手前は濟ながら、不落居な事にて、道具を留められ下りませぬ」と、云も果ぬに九左衞門立腹し、「それは如何じや。餘る程銀は遣る、但馬屋九左衞門が娘の嫁入道具止められふ覺へは無い。惣じて此祝言、お夏が氣色に日限延び、漸々此度

佐次―匙をいひかく
煎じ―事の迫る藥の縁に用ふ
有銀箱云々―百兩箱十で千兩夫を六十で六萬兩の財產と父の年とかく
算盤に云々―父の慾深を云ふ、かけると斯るとを掛く
屋の内―八尋にかく、尋は幅に同じ
綟子―もぢ〱にかく
しげる―男女まめやかに物語る（俚言集覽）

所へ來る樣に、偏に頼み奉る」と、敵と知らぬ愚さの、親の情は子の爲に、藥といへど是は又、毒を調合する佐治左衛門、心は律義一ぱいに、煎じ詰たる水間の里、船は別れて 三重 下りけれ。

中之卷

所さへ、戀知り顔に姫路とは、何時名付しぞ但馬屋の、お夏が父は九左衛門、國一番の米問屋、有銀箱を十づゝに、六十近き月雪や、花も紅葉も算盤に、かゝる親には似ぬ娘、お夏は深き濡れ故に、菩提心と意地張て、嫁入も丈も延々の、それも戀する氣の前か、二人の親の顔までも、飾磨のかちど播磨潟、國に浮名や立ぬらん。今日は蚊帳の祝義とて、萠黄の生絹六尋七尋、屋の内祝ひ賑へ共、お夏は更に氣に染まぬ、心の内の綟子の蚊屋、色香を外に漏さじと、夏「アヽおれや風引いたそふな」とて、涕打かみて紛らかす、忍び涙ぞ道理なる。心を知らぬ腰本共、「お夏樣と聟樣と、此蚊屋でしげらしやんしたらば、いかな藪蚊もけなりかろ。此方は蚊屋は及びもない、せめて嫁入の紙帳なりと、あやかり度い」と口々に、「申お夏樣、新調蚊屋の御祝義、少浮き〱となされませ。賑か

一左右—音信
（俚言集覽）
時宜—挨拶

ば、我も旦那の手前が立、其方も下細工へ手間遣らひでも大事なし。身に任せて默つて居や。是親仁、何んと一筆召されふか」ハテお前の御了簡ならば如何なり共。それおさん、お望み次第に書きや」といへば、勘十郎立寄て、文面「但馬屋のお夏祝言に付、構ひ是有により、嫁入道具押留め申所件の如し。但馬屋勘十郎殿、蒔繪師權之丞殿、淸十郎親佐治右衞門」と、好む通りに書ければ、親は悅び巾著明け、墨肉墨々と捺したりし、因果の程ぞ不便成。一札卷て勘十郎、懷中にしつかと收め「サア埒は明た塗師屋殿、萬事は國より一左右せん。先お歸り」といひければ、塗師屋は船中一禮し、時宜をのべてぞ歸りける。勘「なふ親仁殿、此勘十郎が能い時に居合せて此方親子の仕合。道具さへ下らねば祝言は延引、其中には淸十郎、隙を取らふが走らふが、氣遣ひな事はなし、勘十郎に任されよ。此船今宵出ると聞、然らば是に」と乘移り、「方々此度下つては、淸十郎が爲にも惡し。能い時分に便せん、其時必待入ぞや。數年馴染の淸十郎、惡い樣には致すまじ。何れもさらば」といひければ、親子の者は船より上り、手を合せ淚を流して、「傍輩のよしみとて、有難し忝し。生の親の我等より、淸十郎奴が命の親、嫁も娘もやれ拜め。辨へもなき淸十郎、弟共下人共思召て御異見なされ、美しくお暇取、再び在

構ひ—故障

土ほぜり—土なぶり

切羽脛金—せつば詰る事を洒落ていふ

廻し者—間諜を褌の事と聞く

いふにこそ—言ひはせぬ

れは親仁廻氣な。然らば銀も入らぬ思案が有、彼の蒔絵屋に向ふて、此娘には構ひあつて嫁入はさせぬ、道具は其方へ預けた。銀渡したら損で有ふ、と一言いへば濟むじやが、成まいか」といひければ、爺「ハテ金さへいらぬ事ならば、我子の爲じや申さいでは」と、表の間にぞ出にける。隼「播磨の姫路但馬屋の嫁入道具を、請取た蒔絵屋は此方か。身共は和泉のどん〻百姓、土ほぜりでおじやれ共、但馬屋のお夏には、此方に先の構ひが有。外の男を持せぬからは、嫁入道具を押へた。勘十郎殿先刻にから切羽脛金する通金渡したら御損であらふ。ことはつて置たぞ」と苦りきつてぞ申ける。蒔絵師の手代冷笑ひ、「ハテサテ悪い工面なされ樣、是娘に構ひ有ならば、それは先との詰開き、此方に構はぬ事。如何でも是は廻し者、近比悪い仕方」といへば、隼「ヤア何んじやまはし者、ヲヽ男じや物まはしをせいで能い物か。若い時は小相撲の一番も捻つたおれじや。男に用ふ詞が有。まはしかいたかかゝぬか、來い見せふ」と裾からげ、胸を叩いてりきみける。蒔絵師も聞ぬもの、片肌脱げば二人の娘、船頭船方おり合せ、「先堪忍」と取付ける。勘十郎も分け入て、様々宥め押沈め、「塗師屋殿も悪い合點。道具は其方の銀は此方の、銀遣らずに此方へ請取らふといふにこそ。其方と我とに彼の仁から一筆取て置なら

そもや―よもや

請取た―引受けた

ありさま―お前樣

る。親は在所の律義者、何の工の有共知らず、「アヽお前は如來樣。内々如何やら承り、氣遣いたせし折柄なり。傍輩のよしみとて御知せ有難し。年六十に餘つて、火屋へ片足踏込んで、一人の悴が木の空で、引張凧になるのが、そもや見て居られふか。悴が命助かる樣に、御思案頼み奉る。さりとては、誰に似て下心の惡い悴め、と何處で聞てかいふこと」と、泣て口説くぞ哀れなる。時に船場に案内して、「姫路の本町但馬屋の勘十郎樣のお船は是か。難波橋の蒔繪屋誂へのお道具、今宵船に積んと存じ、銀子請取申さん爲、參りたり」とぞいひ入ける。勘「あれ親仁聞てか。銀を渡せば道具が下る、道具が下れば嫁入が有、嫁入があれば淸十郎は引張凧。何んと此處が談合、身は國へ歸つて旦那へは道具屋が出來さぬ分で濟し置く。彼の道具屋の手前は親仁から、百五十兩か八貫目渡してさへ置たれば、波風立ず嫁入が延る。延さへすれば淸十郎、隙を取らふと走らふと、此勘十郎請取た。此處は親仁太儀ながら、八貫目何んぞいの、田地賣ても子の爲じや、出したがよい」と、いひも果ぬに佐治右衞門、ぎよつとして、「エヽあり樣は一口に八貫目、たとへ淸十郎引張凧にならふが、鹽鮭にならふが、世が泥の海に成とても一文も銀は無い。エヽ此方は皮か身か合點が往かぬ」と顏顰め、立て入るを引留め、勘「そ

何じやヽ―何ぢやかぢやとて

木の空―礫柱に上げらる、其柱の形キ字に似たればいふ

坐ります。嫁子共が申にも、親仁ちと旦那樣へ往つしやれ。何かのお禮も申さつしやれと申まする。ヲヽ〳〵とは申ながら、正眞の貧乏隙なし。物作りの事なれば、いや大根時の綿時の、瓜を蒔くは茄子を作るは、牛蒡畠豆畠粟よ黍よ藍時よ、麥を蒔くぞ赤らむぞ、田を植へては草を取る、穂が出れば刈まする、籾になれば磨まする、米になれば炊まする、飯になれば食まする。何んじやし、徒居る間とてなく、御無沙汰」とこそ語りけれ。勘十郎打首肯き、「尤々、何方も隙はなし。して此船に乘て何方への下りぞ」といへば、爺「先旦那へ春の御禮も申、清十郎にも逢んと存じ、これは妹お俊、彼は行く〳〵清重郎が留守をもさせんと存じ、おさんと申娘分、連て姫路へ罷下る。迚の事に御同道致さん」と云ければ、勘「イヤコレ逢ひたいといふは其事よ。先下る事は入らぬもの。清十郎が沙汰を聞かれぬか、扨々氣毒笑止な事。旦那の娘お夏樣と密通して、お夏樣のお腹は茶壺を抱た樣になる。それに立野の一門中へ祝言が極つて、嫁入道具も出來揃へ、身共が道具を請取て、下り次第の嫁入。彼の腹の土産物、聟から詮義があるは定。否でも應でも清十郎は、片假名の木の空で此樣に手を廣げ、引張凧は知れた事。親兄弟も同罪なり。どふぞ嫁入の無い先に、身を引思案がさせたさに、知らせまする」とおどしけ

初色―お夏
笠が能く似た―笠が淸十郎に似た
たがらす―烏の一種、爰は農夫の事
高給―鷹にかけ鳶が鷹生むの諺をとる又淸十郎にせよをかく
三人―おさんをかく
打てず―負けず劣らず
扱―仲裁
いくはなか―幾箇所か
十文―辻君の價
九文半云々―十文の中半文も負けてはならぬ

親佐治右衛門苫打上て、「やあこりや〳〵、此處じや〳〵。はれやれ〳〵大膽な、暮れる迄大坂の町をぶら〳〵と、女の身にて何事ぞ。昨夜も東の横堀で、男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉んづして居たを、いくはなか見て來た。扱ひになりしやら、錢をついたも慥に見た。大坂の喧嘩は大方相場は極つて、十文では事が濟む。喧嘩は降物、和御寮達若もの事があつたり共、いかな九文半文でも勘忍ばしめさるな」と、眞顏にいひしも殊勝なり。二人の娘打笑ひ、「さればいの、今日も一日芝居見て、それから此處の川口の八景とやら見物して、つい今になりし」とて、船に乘れば佐治右衛門、草履菅笠片付て、「まづ〳〵休めや」といふ處へ、向ふの船の船頭來り、「和泉の國の佐治右衛門殿は此船にか。此方の船の乘手衆が、ちとお目に懸り度い。播州姫路但馬屋の勘十郎といへば、合點じやげな」とぞ申ける。佐治右衛門聞も敢へず、「ヲヽ知た〳〵、但馬屋勘十郎殿、わしが子息の傍輩衆、參つてお目にかゝりませう」と、上らんとする處に、是へ見えしと勘十郎、「何んと〳〵親仁殿、さても年も寄らぬは。不思議な處で逢ひました、先御無事にて一段。淸十郎も息才で、商ひの用事にて此處へ上りしが、はや下つたも存ぜず。旦那も折々噂なり、何故に見へぬ」といひければ、佐「ゑい勘十郎殿樣お久しう御

おなつ
清重郎 五十年忌歌念佛

近松門左衛門作

上之巻

序詞 通ひ車は、小町が仇の情に乗せられ、閨の扇は、班女が親骨にせかれ、形身の烏帽子は、行平の云かぶり、柏木の鞠、さんろが笛、古今其品かはれ共、皆これ戀路の寄せ框、根太も根強き門柱、其但馬屋の初色に、立つや浮名の濡草鞋、笠が能く似た菅笠の、雫積りて戀の淵、湧て流るゝ和泉の國、水間の里の佐治右衛門、畠作りのたがらすや、鳶が産だる高給取の、手代は主の代りをも、清重郎といふ子を持て、老の入まへ暮しよき、正月著物播磨潟、延引ながら年頭に、娘はおしゆん嫁の名も、三人連の木賃宿。明日は出船の名残とて、道頓堀の芝居過、名所〱は大坂の、娘子達に交りても、打てず押されず手入らずの、田舎生れのおぼこにも、父の乗りたる便船の、しるしは如何に錨綱、手繰りついたぞ口は傾く、いざ急がんとちよこ〱走り、とは川口にぞ著にける。

通ひ車は云々―古今集の曉の鴫の羽掻云々の歌をかへて深草少将と小野小町の話にしたり（歌論義）
閨の扇―謡曲班女にあり
形見云々―謡曲松風にあり
柏木云々―源氏若菜にあり
さんろ―山路にて前に出づ
寄框―木材を組寄せて戸障子の周圍のわくにしたるもの、但馬屋の家の構を云

阿字本不生―阿字に向て本來不生の理を觀ず
阿字―初めて口を開く聲之を一切敎法の本となす
土砂の功德―死骸の關くなりし時眞言の法にて土砂を撒けば柔くなる

れ共、山中夜中聞人も、泣て麓へ走りけり。久米之介身を隱し、立歸れば骨桶に、樒を添へて殘したり。押戴き三拜し、分て賜はる骨肉を、一ッに返す阿字本不生、阿字の一刀是なりと、咽にぐつと突立て、死骸の上に法の花、梅と枕を竝べける。地水火風の風は山、水は谷水土は又、土砂の功德の眞言祕密、善男子善女人堂、心中斯とぞ聞へける。

あんあほぎや云々―陀羅尼の文句
阿吽―氣息の出入、阿は生、吽は死の相

らせを頼みます。何れもに別るゝも、殊更名殘惜うて、久米之介が臨終の暇請をする樣で、心細ふて悲しや」と、物が知らする血の由緣、淚すゝむる計にて、いはず知らせず別れしは、本意なくも三重又哀れなり。堂の小蔭に身を潛め、〽「片時も娑婆に居る內は見るも聞も皆罪障、夜明も近づく此上に、いか成苦しみ恥をか見ん。いざ死なふ」と叫けば、梅「早ふ死に度ふ御坐んする。去ながら此方樣は、餘所ながらも姉御に逢ひ、親御の御骨の側にて、羨しゐ最期じやが、わしは父樣母樣の、悲ゐ中にも不孝者と、叱られふかと氣にかゝり、是が迷ひと成ます」と、又泣出せば、〽「是々、宵に母御の下されし盃は爰にあり。手に觸れられし物といひ、志の籠つた形見は是ぞ」と取出す、梅「アヽ有難い。丈長の伸た私を、親の心で何時も童と思ふて、抱て寢て下さんした其心で死ましよ」と、盃肌に手を合せ、刃を待たる其顏、〽「チヽ奇麗なく〳〵、和女は母の形見を持、我は父の骨の側、夫婦親子一蓮の、示しの時刻延されず、只今ぞ」と脇指拔き、胸に押當おんあほぎや、べいろしやのまかもだら、まにはんどまじんばらはらはりたや、吽と突込む切尖の、膽にあたれば反返り、はりたやうんとくり通す、阿吽の息も消へ〴〵と、反つゝ返しつ苦しむ聲、姉主從は驚きて、走り寄て南無三寶、「人殺し人殺しよ」と呼は

萬年草—杉葉に似たる草にて枯葉を水中に浮ぶれば他國人の生死を知る（近代世事談）

御告が—御告か歟

あくび—欠とかく

共猶知らず、「さればこそ思ひ當つたれ。此お山の萬年草は、人の命の生死を示し給ふと申故、余りの事の訝しさ、守に入し萬年草を、彼の谷川の水に漬け、久米之介と心ざし、半時計浸しても、次第に枯れて萎みしが、弟が命有まいとの大師様の御告が。遙々と尋ね來て、昨日にも著くならば、せめて死目に逢ふ物。男の身ならば一山を、駈廻つても逢ふもの、女と生れし悪業は、淺ましや悲しや」と、聲を上てぞ泣きければ、夫婦も共に伏沈み、お梅涙の隙よりも、「親御様をもお誘ひか、但し姉様計か」姉「なふ其事よ。父様が去年の冬から煩ひて、此二月の朔日に、六十九にて御臨終、明くる二日に煙となし、今日七日の弔ひを、兄弟一所に拜まんと、此お骨を持て上りしに、弟も同じ骨となし、すご〳〵歸つて母様に、何と申さん定めなの浮世や」と、又さめ〴〵と泣きければ、久米之介は我親の、骨と聞より氣も亂れ、お梅は一目も見ぬ舅、縁といはふか、因果といはふか、心に含み目に漏るゝ、涙を袖にせきかねて、わつと絶入計なり。側に臥たる供の下女「あれ申七ツの鐘が鳴まする。善か惡か、夜が明たら知れませふ。アヽ此方は草臥れて、何が善やらあくびやら、ふら〳〵眠る心なき。「アヽそれもそふ、御用あるも存ぜず、引留めて長物語、是も他生の御縁でこそ。若し久米が事を聞付なされなば、お知

危さも、後世のみせしめ蛇柳や、鬼が千疋責ふぞ、責られつ、さいなまるゝと離れまい、放すまいぞ」と取かはす、袂は涙、手には數珠、賴めや賴め一筋に、一心頂禮萬德圓滿、釋迦如來信心舍利、舍利〳〵佛に成とても、又は三途に迷ふ共、一ッ回向の水汲めや、手向の梅の花折坂、辿り超ればあか月の、五障の雲に埋もるゝ、女人堂にぞ三重付にける。

若い心の一向に、死んで來世で〳〵と、思ふ心のがつくりと、「サア著ました嬉しや」と、勇むは跡の歎きなり。堂の內には我より先、泊りし女中の眼をさまし、「申々」と呼かくる。「あい」といふのも怯氣立、身を抱合いて居たりしが、「イヤお氣遣な者ではなし。私は播磨の飾磨にて、成田武右衛門娘さつと申者、南谷の吉祥院に、久米之介と申弟を尋ねて、今日の暮方、下人共を登せ訪はせても、有共無しとも知れ難く、坂の麓紙屋の宿を尋よといふ人も有、皆樣土地のお衆か、若し御存じも有まいか」と、他人に見做す姉弟、後世の闇路も知られたり。弟は骨肉恩愛の、淚にくれて應へもなう、暫し躊躇ひ居たりしが、詞「久米之介とは聞たる人、昨日の晝より俄に大病引受て、今宵限りの命なりと申せしが、夜明なば、生死の定說かくれ有まじ」と、淚をかくす聲付を、姉はそれ

四間四尺、罪障深き者は渡られずとなり
さいなまる云々—呵責せられても離れまい
曉月—垢つきにかく
五障—女人が成佛できぬ五つのさはり
付—着

しつらん旅人の高野の奥の玉川の水とあるより毒ありと傳ふ
縛の繩—不動の金縛の繩
猛き心や—猛と云より梓弓と續け、夫より春(張)の彌生にかく
尼が口—弘法大師の母公の遺跡
捻岩—母公が罪障の爲高野に登られぬをいらちて捻ぢたる岩をいふ(姫鏡)
五月雨云々—松の落葉卷五にある唄、に、な、よ、は拍子詞
佛の御母—空海の母公
みめうの橋—御廟の橋とて長さ

互ひの口に傳へ入、末期の水と成けらし。梅「刃を急ぐ我命、末短夜の春の霜、羨しやな朝まで、消へ殘るかと白妙に、里の夜業も時過て、干も紙屋の宿はづれ、生れ在所の名殘さへ、親より殿を思ふぞや」久「我はそもじの親御の恩、戀と思ひに縛られて、情の羈絆縛の繩、不動坂にも差懸り、死出の山路を越ゆるかと、歌「心細しや外は谷、こゝ夏川と引留問へば、爰は古の刈萱殿の、しるし繁りし春の草。クドキ「問ふて語つた味氣なや。彼の刈萱弓取の、猛き心や梓弓、彌生の空の月の前、櫻が下の盃に、開いた花は散りもせで、花の蕾に身を捨て、無常の夜語身の上に、十九十八一盛り、今宵散り行初櫻、兒が瀧」とぞ涙ぐむ。梅「彼れへ越ゆれば尼の口、去年母親と連立て、拜みし事の忘られず。哀佛の御母も、女の罪の捻岩や、それさへあるに我身の科は、歌「五月雨に、ほど戀慕はれて終にな、秋田のよ落し水」山は眠りて物いわず、谷の流れよ聲立て、人に語るな此姿、私が心を此方樣に、隱す事とて持ね共、賴む佛の御名問へば、我をば外の不動樣、二親よりも捨難き、嘸や若木の花の兄、歎き恨みの數々も、二人が上に罰受くる、天竺の山颪、締た肌にしみ〴〵〳〵と、サア悲しゐ、いとしといふも今の間の、冥途の苦患覺束な。此世からさへ嫌はれて、深く心を奥の院、渡らぬ先に渡られぬ、みめうの橋の

い人なれど、お梅が歎く不便さに、此方夫婦が了簡で今宵の命を助ける。お梅は男定れば、思ひきらねばならぬぞや。是はお梅が呑んだ盃、これを形身の緣切」と、懷にいれければ、二人は死ぬる覺悟の上、心の中の暇請い、顏は見られぬ暗闇に、「ま一度聲を」と躊躇へば、母「遲い〳〵」と氣を急きて、急ぐは我子の死を急ぐ。産出すも母、死なすも母、生死二ツの門口を、明て出行先も闇、跡も子ゆへの闇の夜に、迷ふ親こそ三重悲しけれ。

下之卷

歌「幻しや。定業の限りとは、いかに如何成娑婆ならむ」梅「世は何の譬ぞや、逢初て早三歳、かけ計の契にて、夫は野中の一ッ井戸、名は後の世の形見かや。殘す形見は親の爲、我はそ樣の前髮の、長き來世もわしが此、直さぬ額は此儘で、見たり見せたり六道の、辻の衢は多く共、はぐれまいぞと夕月は、はや入果て更渡る、未だ如月の八重霞、隱れ忍ぶによけれ共、顏が見憎の朧夜や、二ツ能い事嵐吹、木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば、身に疵付けず、死度や」と、顏と顏とを摺寄て、翻す涙はおのづから、

駄を脫ぎ置く石

子故の闇―後撰集、人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

幻や云々―死の來るは幻の如し世―お梅久米の中

直さぬ額―娘の時の姿

夕月―いふにかく

嵐吹く―あらずにかく

玉川―風雅集に忘れても汲みや

聲が殘る—も梅は久米に尾行て出でたれば也
沓脫—入口の下

らね共、斯ふ召さつたが能い筈。作右衛門程の聟は慮外ながら取憎い。久米之介は若衆で前髮は有ふが、己が樣に小判の前髮は有まい。彼の樣な奴等が娘子共を唆し、京大坂にも有こと、大方果は心中、ホヽ嫌な事、お梅は命拾らやる、親御は娘拾らやる、おれは盃ひらはふ」と、又三杯引續け、「サア寢ませう、お袋彼方へ往なしやれ」と、夜著引立てんとする所へ、大石をはたと打。是はと驚く頭の上、障子雨戸を打破り、大石小石透間なく、はらり〳〵と三重投げければ、お梅は此處を大事ぞと、久米之介に抱付、作右衛門はひよろ〳〵足、「お梅は、危い夜著被きや」と立寄れば、母親燭臺を蹈こかし、「やれ暗いは火を灯せ」と、いふ聲に與次右衛門、下の火殘らず吹消して、常闇の夜と成にけり。母ははい寄り、久米之介が手を取て引出す。喫驚するも夢心地、お梅は久米が帶を取、尾行て出るも闇の夜の、母はかく共知らばこそ。作右衛門度を失ひ、「お梅は何處に」梅「イヤ爰に居まする」作「暗がりで怪我しやんな。お袋は何處へぞ」梅「火を取にでがな御坐んしよ。此方樣勝手知らずじや、動かずに御坐んせ。私も此處に居まする」と、聲が殘れば母親も、一人と思ひ連て出る。お梅は跡も恐ろしく、母に知らせぬ足音をば、火を蹈む如く爪立てゝ、顫ひ〳〵沓脫迄忍び出、母、久米之介に囁きて、「此方は命の亡

しゆんだ―酣なる

祝義の石―祝儀に石打つ事當時の習はしにて神事より起る（嬉遊笑覽）

無益しい―餘計な事

打うるほひ、「ハア目出度い〳〵。去ながら先此處で盃事、其間にそれ〳〵」と、氣を付てもがけ共、作「いや〳〵今宵も四ッ過、軈て夜半寐る間がない。目出度ふ閨の盃」と、寢所急ぐ氣毒さ。親「平に此處で酒盛なされ、其間に内との者一獻酌めや。酒を酌め、そりやくめ〳〵」とあがいても、何處へ落さん久米之介、夜著引被き身をちゞめ、生たる心地はなかりけり。聟は蒲團に延し上り、「ヤア誰ぞ寢たやら暖かな。さらば此夜著を被て、「盃せふ」と久米之介が、臥たる夜著を取らんとす。梅「アヽ是々、此方樣計寢よふでの。とんと二人が一度に寢る。盃濟む迄いかな事、夜著に手をもかけさせぬ」と、もたれかゝりし夜著の袖、足を擦り手をしめて、夫に力を付ければ、作「一ッに寢やうは忝ゐ。銚子早ふ」と呼ぶ内に、夜半の鐘も鳴渡る。下には夫婦手に汗握り、九兵衞其外小隅へ寄り、供の者にも酒盛て、父「酔ふた時分に臺所の火を消して闇に爲い。二階の酒しゆんだ比、祝義の石を打込んで、騷ぐ拍子に蠟燭を踏こかし、どやくや紛れに久米殿の、手を引門へ脫かそふぞ。仕損へばお梅が首がないぞ。脫るな」と諜し合て酒肴、下では下人盛潰し、二階を母の酌人は、怪我あらせじの氣遣ひや。作右は母に時宜もなく、差いつ差されつ時宜作法、大盃四五杯引かけ、「なふお袋、姑に酌とらせ、無益しいか知

代なしても—賣りても

生る瀨云々—危險を冒す事七度あるとの諺

ひつしよなく—取亂して

男持たぬ前云々—夫を持てば愼むべきが持たぬ前に彼是云ふはいらぬお世話と也

有ふまで—までは强辭にて意義なし

の手柄に何時でも、退去は世の習ひ。子が立てこそ能もあれ、屋財家財代なしても、返す物を返やさずに置く與次右衛門でさら〳〵なし。母が此歎きを聞、お梅が爰へ出るならば、それを機會に和睦して、祝義を渡して下され。例へお梅が我を立てゝ、座敷へ出まいと云とても、先方の小性も木竹では有まいし、先往きや〳〵といやる筈。それも聞ねば不孝者、子を一人育つるに、生る瀨か死ぬる瀨が、七度あるとは稚い内。十七八に丈長伸び、親に夜の目も寢させぬか。憎いものには世話燒ぬ、子を持たらば思ひ知らふぞ。恨しの世の中や」と、聲を上てぞ口說きける。久米之介も聞取て、「後は兎もあれ、親御の心安める爲、涙も拭ふて下てたも。拜む〳〵」と勸められ、口惜涙ひつしよなく、梯子とん〳〵踏鳴し、駈下りて、梅「これ母樣、いたづらも惡性も、男持たぬ前ならば、いはれぬ構いじや有まいか。それに意地無地いふ人は、放からかいて置しやんせ。私が斯樣して出るのは佗言といふ物、それでも合點ないからは、氣に入らぬで有ふ迄。田舍育ちのわしじや者、なんの都の目に入らふ」と、身振もすねて見へにけり。聟はお梅に搖られ、につこと笑ひ、「是親仁お袋默らつしやれ。彼が此處へ出てくれて、今の詞で千倍じや。頭の上で踊ても去ることでは御座らぬ。サア寢所へ」と手を引ば、二親屋內

夫を持ぬ云々―まだ夫を持たぬ女は密夫などのないとも限らぬ

兩方へ架橋―二階と作右衛門とにかけて口をきく

かい拭ふて―かき拭ひて

著蒲團から取てくれふ」と、二階へ上れば與治右衛門、「腕捻折らふ」と引下し、上を下へと摑み合ふ。久米之介は脇指拔て、すはといはゞと縋付、お梅がわつと泣く聲も、下には聞かず叩き合ふ。女房中を押分て、「此方の人から默らッしやれ。待て下され聟殿」と、彼方を拜み此方をおがみ、やう〳〵兩方押沈め、瓦破と伏して泣けるが、「都衆共覺へぬ物の情の無い事や。是程迄取結び、サア祝言の場と成て、打破つて此方夫婦、世間が立たふか身がたとふか。男を持ぬ娘子は、誰が身の上に何事のあるまい共云難し。過つる事に二親が迷惑するを聞ならば、氣の細い娘なり、先の小性も堪へかねて、死ふとするは必定。留に往るゝじぎでもなし。必ず死ぬるな死ぬまいぞ、此處は死ぬる場でないぞ。親に歎きをかけるといひ、其身も無い難受ける事、親孝行と思はゞ、必ず死んでくれるな、と先づ斷ういふて留めたらば、よもやとは思へ共、若い心の一筋に、恥しいとばつかりで、若や死ふか悲しや」と、知らせの詞一つをも、皆兩方へ架橋の、二階にも聞取りて、拔たる脇指さすが又、死もやられず聲立てず、抱き合てぞ泣居たる。母「なふ親はどれも替らねど、母の名汚すも雪ぐのも、娘の育ちの善惡から。お梅が一期の疵つけば、三十年添ふた此方の人に、頰かい拭ふて添はれもせず、是非に一旦盃して、男

わらを燒れて―おだてられて
にち―理窟ばる
涼し―奇麗
共―供
垢を脱く―冤を雪ぐ

出せ。何處ぞでわらを燒れて、銀が惜うなつたか。慮外申た御免あれ、と詫言させて其上で、是非に祝言させねば、娘の垢が脱けぬ。サア證據を出せ」とにちければ、家内の上下泌凍り、二階には迯場もなく、死ぬるより外分別の、泣ひつ顫ふつ狼狽ゆる。作右衞門押沈め、「證據〳〵と凉しそふに云やるな。身は明日立つ合點で、今朝から御山へ上つたが、八ツ時でもあらふか、俄に山が暴れ出して、大雷雨風、一期に覺へぬ怖い事、さる寺へ駈込んで、樣子を具さに聞たれば、南谷吉祥院の小性久米之介といふ者と、雜賀屋のお梅と數年密通して、山を穢した其祟り。それゆへ今追出さるゝと一山が見物、後姿を己も見た。飛脚の樣な奴が共して麓へ下つた」と、いふより九兵衞もじり〳〵と、門の方へ後退り、亭主もはつと二階を見れば、女房賢く、「いや〳〵〳〵、其分では胡論な。此方の人、娘が垢をぬかつしやれ。狼狽て娘一人捨さつしやるな。是々」と膝を突けば合點し、與「ヲヽ飲込んだ。こりや男、雷が鳴たとて、此方の娘が不義のある證據にはなるまいぞ。どふでも今宵祝言させ、くゝり付て往なさねば、雜賀屋の與治右衞門が町へ頬が出されぬ。手柄に聟にして見せふ」作「ヲヽおれが身代見掛ては、定て聟に欲からふ。二十八貫目の銀では、疵のない手入らずの女房が持るゝ。おれが銀で拵へた夜

疊みしは―原本のまゝ
誰も勿來云々―誰も來るなと也、關に急きをかく
人來と厭ふ―古今集、梅の花見にこそ來つれ鶯の人來〳〵と厭ひしもをる
はめ立―欺罔
ほこり―はした金、寄署(倭訓栞)
肩のよい―運のよい
頬げた―口

くさる筈。エヽ嫌らしゐ煩さや」と、蹈ちや〳〵くつて擲ほをり、梅「是は又私がの新しゐ寢道具、祝ふて寢初て欲しけれど、人が來ふかと氣遣いな。アヽ辛氣や」と、疊みしは夜著にもたれ合ひ、誰も勿來の關心、花のお梅に鶯の、人來と厭ふわりなさよ。時に美濃屋の作右衞門、小僕を連て突と入、與治右衞門が髻を取て引寄する。女房始め下々も、「是は聊爾」と取付くを、作「寄るな〳〵」と打拂ひ、取て引据へ「こりや與治右衞門、京の者をはめ立したら、返報を喰はふ用心せい。親代々の得意で二十年以來、二千貫目足らずのあき内に、九貫目のほこりを取り、先も見へぬ秋買に、十五貫目の前銀取、祝言の仕入に四貫目取、情夫の有娘を被かせて、さらせて構はぬ工面じやな。此邊では未だ流行るか、京大坂では、其手の騙瞞は廢つた。サア娘の首を渡すか、二十八貫目戻すか、二ツ一ツの返事を聞かふ。ヤイ一升入袋は海川でも一升、肩の能いものゝ仕合見よ。盃せぬばつかりで二十八貫目捨ふた。恵美須大黑が乘移つた作右衞門をこかそふや、措てくれ」とぞ罵りける。與治右衞門眞直者、ぐつと急て、「ヤア京々と喧しゐ、頬げたが過る。七十萬石の下にすむ與治右衞門、氣の狹い己們が蔑みとは違はふ。銀返すは易けれど、云詰られて戻したといはるゝが口惜ゐ、娘にも疵が付く。サア男のある證據を

ねちみやく〳〵ツン〳〵ときればなれのわるい

九貫五百目云々―當時金一兩に付銀六十目替なれば百六十兩で九貫六百目となるを百目まけて買ふ

しやる。サアしやんと打ませふ」と、手を廣げても、親「イヤ先お打まい」九「ハテねちみやくした。そんなら舅姑御夫婦も乘物やじや〳〵馬」と、乘せてもいかな乘らばこそ。「いや〳〵馬は馬連、牛は牛連。今日祝言する聟殿は、京三條烏丸美濃屋の作右衛門、お梅を欲しるばつかりで、年々の殘銀九貫五百匁、百六十兩で帳消して、此秋の買入に、紅の花の樣な小判二百五十兩、先へ預けて置れた。今宵の物入仕拵へ、此方には一文入させず、娘を裸體で請取聟は、世間にちツとありかねる。何んと九兵衛」といひければ、九「イヤ久米之介樣も、小判の事は請合れぬ、お梅樣を裸體でならば、鬼に鐵棒で御坐りましよ」親「コレ阿房な事はいはずとも、聟がおじやるか出て見よ。是お梅、久米樣二階へ連まして、新しく出來た寢道具を見せましや。こりや女子共、肴を鼠に引るゝな」と、鼠の用心しながらも、二人二階へ上たるは、是こそ猫に鰹魚なれ。二階には古渡りの大紋緞子の夜の物、二ツ枕の總付を、妬しそふに久米之介、「ムヽ〳〵京の男と、此枕を竝べて、此夜著を被て、二人しつぽりと寢さんしよの。アヽひよんな物見せて、又泣かせて下さるか」と、ほろ〳〵涙を流しける。梅「エイ嫌がらす樣な事聞度ふない。京の奴と何んの寢よ。今夜中に連立て走るぞゑ。胸を極めて下さんせ。此夜著蒲團に今の奴が寢

天狗頼母子―富の事
おうへ―入口を這入つた圍爐裏のある廣間
てれふれ―照り降り
駻馬―強き馬

してたもんなや。山は暴ても崩れても、久米樣に逢へば嬉しゐ〳〵。此方樣嬉しうないかいの。少笑ふて見せて下さんせ」と、いふても前後思はれて、泣顔見ゆる不便さよ。親は「お梅よ〳〵」と門口見遣りて、「誰じや、ヤア久米樣か。九兵衞これは何ゝとして。呼に遣たい處へ、能ふこそ〳〵、まづ内へ。嗅久米樣が御座つたぞ。暮たに何故に火に灯さぬ。お梅が祝言常とは違ふた。二階は蠟燭、庭もおうへも、燈心を摑込んで赫々とやれ」と、勇む處へ母親は、なりふりを心得難くや思ひけん、「いつの間に、九兵衞は此處へも寄らず山へ往て。お梅が祝言聞てお出なされたか」と、不審さうな成かほ色を、九兵衞見て取つゝと出、「久米樣のお仕合、未だお聞なされぬか。お國の親子御隱居で、跡目をお繼なさるゝ筈で、私も在所から早飛脚に雇はれ、打通りに上りました。日比の念比、暇請の爲、ちよつとつれて寄てくれ、祐辨樣も追付其處へと有事。今日からは是れ七百石の御世繼。旦那樣物は談合、お梅樣の御祝言未だ盃なされぬ先、彼方を變改なされて、久米樣へ進ぜられまいか。私やお爲申ます。祐辨樣も大方其御心と見へました。千貫目持ても商人は、一時の損が知れませぬ。てれふれなしに七百石、すればお前もお手柄。雜賀屋の聟殿がひん〳〵跳る駻馬に乘て、娘子は金物の乘物に乘らつ

そゝけた—亂れた

いりわり—いりわけ

くどく—功德に精しくをかけたり

婆羅僧掲諦—陀羅尼の文句に立腹をかく

ぼじそあか—菩提娑婆訶、娑訶を赤にかく

念者—若衆の兄分

熟え—悋氣

一さい云々—諺、一災あれば必ず二災あるもの

賴母し—賴母講、卽ち無盡

兵衞も投首して、辻へ見ゆれば走り寄り、「なふ能う來て下さんした。文にいふて遣る通り、京の奴めと今夜盃する筈で、私が氣は今朝からとんと死で居たはいの」と、縋付て泣にけり。久米「チヽ和女は氣が死んだか。私は叩かれ引摺られ、身も心も死にまする。噓なら是」と手を取つて、袖から、梅「背中がハアたんと腫て有はいの。鬢もそゝけた、顏も泣た顏じや。こりや如何ぞいの」といりわりも、いはず知らずに泣居たり。九兵衞不請な調子にて、「エヽ麁相なお梅様、文を封じ違へて、久米様への濡文が法印様のお手に入、何が日比法印様、眞言陀羅尼讀だ目で、くどくは御見思ひり〳〵と、讀で波羅僧掲諦を立て、ぼじそあかなる面相、念者坊の祐辨様は、蹈殺すとて熱へさつしやる。一さい起れば二さい起る、お國からは弟の敵じやとやら申て、理窟臭い侍が背打を喰はする。弘法大師御入定八百年以來の、一山の大騒ぎ、飛脚の詮義も有さうで、私は据つた膳箸も取らずに隱れいる。其間にお山が暴て來て、天狗殿が鼻を怒らかし、大雨大風雷霆、大事の山を久米之介が穢したと叩き出されて、かくの躰にておはします。お二人の御蔭で烟草入を落しました。中に賴母の懸錢七十四文あつた物、定めて狗賓に摑れたで御座らふ。正眞の天狗賴母子じや」と、ぶつくさ云ふも道理なり。梅「チヽ其様な事内へ沙汰

こうけん—豪家の意か權力の義
まだ外に—粂之介をさす
かすらする—仄めかす
共—供
つゝごかし云々—竹筒に百文づつ入れてあるを筒が倒れて錢が溢れた風で九文十文づゝ拔取れと也
九十六文云々—當時は九六百文とて九十六文をもて百文に當てたれば云ふ

梅は涙ぐみ、「急な事いふて下さんす。盃さへ延べて欲けれど、親のこうけん是非なふて、如何なり共と云ました。京上りは待て、氏神へも參りたし。阿房でも兄は兄、花様にも知らする筈。日比懇切遊ばして、お守よ御符よと、御恩を受た祐辨様、お山には未だ外にも」と、其人の名は云兼て、思ふ邊りをかすらする、是も思ひの餘りかや。母親も打頷き、「ヲヽそれも左樣じやがこんな事、念比な方へ知らすれば、聟の祝義のと、厄介かけるが迷惑じや。兎角聟御の心次第、サア御座れ」と、納戸へ入れば與次右衛門、「これ嚊、聟の共の者共、これの内の奴等にも、何がなしに三百宛お引をやるが合點じや。つゝごかしの顔で、つらりと九文十文づゝ、百の口を拔て置けや」母「ハテ此方も餘まりな。お梅が一世一代に何が惜いぞ。矢張九十六文で、百宛遣て置かしやれ」と、連て納戸に入りにけり。お梅は稚き時よりも、あまやかされて二親に、我儘云ひしならはしも、心に疵を持たれば、いぶりもならずすねられず。「アヽ九兵衛は何故遅いぞ。久米様の返事は」とそろ／＼表へ出けるが、女子丁稚が口々に、「よふお梅樣、晩には立聞いたしましよ。京のおか樣にならつしやる」と、なぶられても浮々せず、梅「アヽ何云やる。京へ往こやら冥途へ往こやら、知れた事か」と門に立、坂を見上て居る所へ、久米之介は頬冠り、九

通を失ふ―久米仙人が女の衣を浣ふ白脛を見て通を失ひ墜落せるをかけたり（元亨釋書）

白紙―無垢の未通女をさす、もとお梅の家は紙屋なれば紙の事を續けたり

横紙―無理非道を横紙を破ると云ふ、塵紙に散り、鼻紙に花をかけたり

又―まだか

氣もすしや―酸しに粋をかけたり、

鱠をかけ―鱠大根を細く削る事

宿老―町内の取締

廣め―祝言の披露

く、さらば〳〵と振返り、嗁音もかるゝ鶯や、お梅に通を失ひし、久米が心ぞ 三重 哀れなる。

中之巻

逢ぬ昔の白紙も、忍び重ねて厚紙を、人に裂るゝ横紙に、袖濡紙の漏れやすき、浮名やぱつと塵紙の、嵐に脆き鼻紙や、又十七のほところ子、名さへお梅は氣もすしや。親與次右衛門、活々として外より返り、「お梅が祝言いよ〳〵今宵に極つた。今朝いひ付た通り、市介、傳九郎鱠をかけ。夏よ雜煮の用意爲い。竹膳立も奇麗に爲い。聟殿は京烏丸の人なれば、黒椀が能からふ。塗盃はいらぬぞ、年の徃かぬ娘じや、土器を三寶に、口取は熨斗昆布、肴は鯣車海老、熊野から囉ふた鹽貝があらふ。ヤ鹽貝の序に女房共は何處に居る」と、嬉がるのも親心。下女「おゐ樣は中二階に、お梅樣の髮梳て」といひければ、二階の口まで駈上り、父「こりや〳〵、宿老殿へ往て談合した。皆内證勝手づくの祝言なれば、廣めは重ねて下つた時。今宵杯濟んだらば、娘は最早聟の物、とんと先へ渡いて女夫連で、明日早々上して退いと云るゝ」と、勢ひかゝる親の顔、見るよりお

をんでもない―いふまでもない事

を剃たらば、此悔みも有まい物。坊主頭のすげない顔、兄分に見せる悲しさに、せめて二十歳を越す迄と、鬢を撫顔つくり、身嗜みが身の敵、お梅に思ひ初められた、是も前世の因果かや。お梅に逢ふて斷り立、緣を切て來ましたら、元の樣に念比に可愛がつて下さるか。梅「をんでもない事、女と緣さへ切たらば、身にかへても法印樣へ、佗言申て念比せふが、誠緣を切らずは、大師の罰を受ふといふ誓文を立てふか」久米「如何にも誓文立ませふ」梅「サア立て、サア何と」久米「エヽ此方は切らふと思へ共、お梅が合點せぬ時は、何としませふ悲しや」と、かつぱと伏て泣きければ、「それ其心の付くこそは、罰の當つたしるしぞや。はや出て失ふ」とどうど伏し、共泣するこそ道理なれ。其隙に法印、以前の文を取出し、「山に置くは穢らはし、持て失ふ」と投付給へば、恥かしさうにそつと取、肌懐に入れけるが、男女破戒の御咎め、俄に吹來る天狗風、岩も枯木もどう〳〵どう、震動雷電雨霰、天地一つに黑雲覆ひ、長夜の闇とぞ三重成にける。「すは一山の大事なり、不動坂まで追出せ」と、下僧下僕が小腕引立て、棒よ杵よとひしめいたり。流石よしみの花之丞、「是久米殿、妹が事は氣遣ひさつしやんな。此方の居所知れる迄は、おれが女房に持てやろ」と、聞も苦しき名殘の山、鬢も髻も引亂かれ、涙亂れて目も暗

金胎兩部—金剛界と胎藏界
少人—若衆
袖になし—身にするの裏にてのけものにする（俚言集覽）

蹈付け〳〵引起し、齒嚙をなして涙を流し、「エヽ見損ふた悴奴、其根性とは夢にも知らず、兄弟の契約の念比したは何事ぞ。雜賀屋にはお梅といふ若い娘も有程に、出入するには行義が大事、浮名ばし立られな、若衆のたしなみ是第一、兄分に恥かゝすなと、起居にいふたを忘れたか。これ千右衛門殿、今迄愚僧が存ぜしは、彼奴は敵持たる身、若も覘ふ人あらば、拔刀の下へ此法師が驅入て討れんと、一命やつたる中なれ共、只今懇切る上は、金胎兩部の大日も御照覽ましませ、ふびん共存ぜず。御舍弟の敵、サアお手にかけられ」と、坐敷の下へ取て投げ、「俗の女を慕ふより、法師の身にて少人を、思ふは幾千優るぞや。其兄分を袖になし、こゝろざしを無下にした、憎や無念や淺間しや」と、氷の樣なる眼より、涙をはら〳〵とぞ流しける。千右衛門續いて下り、「心ないには似たれ共、寺を出れば弟の敵、討たでは武士の道立たず」と、するりと拔て背打に、四ツ五ツ丁々と打つけ、是からは死したる人、此方遺恨なき上は、心次第に師弟の中、何卒挨拶いたしたい」と、さすがは武士の神妙さ。久米之介わつと聲を上、「只今の背打も、打て打るゝ身の報ひ、恥辱とも思はね共、山の名殘に、法印樣の御機嫌損ふ悲さと、二世と賴みし兄分を、袖にしたとの恨みの詞、悲うて〳〵死んでも迷ひと成まする。疾に髮

あらためて恨みを云はん樣もなく、仇を恩成出家して、後世を助けてくれるか、と思へば形見の心地もする。恨めしいと床しいと、未練の涙を翻したが、口惜しるぞ久米之介。たとへ親の敵でも出家は各別、在家となれば見遁し置れぬ弟の敵。此山が下り度いとは、それこそ望む處、麓に下つて、八年以來鬱憤を散ぜん。法印に斷り申爲、御意を得ん」と立處へ法印駈出、「樣子詳しく承る。やれ若衆奴、をのれは未だ髮こそ剃らね、九字護身法傳授して、禮拜化敎も勤むれば出家も同然。殊に大師以來結界清淨の御山、假にも女犯の穢があれば、一山暴て震動し、其身は狗賓に五體を裂れ、木の枝にかけらるゝは、目にも見せ咄も聞ふ。それを知て此寺を、能ふも〳〵穢したな。國元の親から珍らしゐ文を得た。此年になれ共、思ひまゐらせ候べく候。御げんの如く二世三世、くされ〳〵と血判を据へた、小舌たるい女子文、手に觸れたは今日始め。梅よりとは誰が事。皺の寄た此法印を、梅干に譬へたか。師匠と思ふな弟子でもない。あのお使者の手に懸り、死のふが生よふが構ない。彼れ引ずり出せ叩き出せ。十一から敎へた經文も眞言も、魔道へ捨たか勿體ない」と、腹立涙にくれ給へば、久米之介は伏沈み、有あふ小性同宿も、側から何と千右衛門、呆れ果たる計なり。祐辨律師走り出、久米之介が袴腰破るゝ計に、

九字護身法—臨兵鬪者皆陣列在前と唱へながら兇を空中に書く事（貞丈雜記）

結界—法力にて惡魔を入れぬ區域

狗賓—天狗

候ふべく候—女文に多く用ふ、候ふに同じ

くされ〳〵—誓の詞

千右衛門—せんにかく

も主が手に云々ー久米の手に殺された

當山へ云々ー此山へ登つたではないか

故郷の人の染々の、涙にほだされ側に寄り、「一見に馴々敷事ながら、同國のよしみと申、御落涙の樣子、御心底の優しさも推量つて賴み奉る。私事此山に、一夜も足をとゞめ難き身の難義出來いたし、幸ひ國より迎ひも參る、具の事は麓にて、お物語いたしません。お詞を添へられ、法印より暇を取、今日中に此山を連てお出下されば、生々世々の御恩に受け、命の親と存じませふ」と、身の置處なきまゝに、粗忽の無心も戀路ゆへ、若氣故こそ是非なけれ。使者膝を立直し、「是久米之介、お主が山へ登つたは、末は出家の筈成に、今此山が出たいとは、還俗したい心よな。ヤレ出家する因緣を忘れたか恨めしゐ。お手前十二歲の時、傍輩伊吹重太夫が二男、卯之介といふ十一に成とも達と、雞合の友達喧嘩、あへなくお主が手にかゝつた、卯之介が兄、伊吹千右衞門とは身共が事。其比は數年の在江戶、後日に聞けば、殿よりは切腹との御評諚、父母が了簡にて子の可愛いは同じ事、親達へ歎きをかけ、討れし者の爲でもなし、出家させて、稚い者の後世弔はせんとの扱ひにて、我親共が命を助け、當山へは登らぬか。一人の弟が死骸をも見ぬ懷しさ。せめての形見に其方を一目見たさに、此度のお使ひを望み受け、小性衆の名を尋ね、久米之介と聞よりも、弟が有ならば今年は十八蕾む花、つれなくも討たかと思へ共、

ずんと伽羅―頗る美人

八寸―八寸釘と八寸四方の小さき膳にかく

同名―同苗

の、小性は「おい」と色めきける。使者も數獻を傾け、「扨々御きりやうなる小性衆、いづれもお名は何と申、御生國は何國々々の御方ぞ、仰聞られよ」と云ければ、甲「我等は有村主膳と申、當國田邊の者」乙「私はよつぎ八彌と申大和の者」丙「身共は伊賀の上野の生れ小栗右門と申ます」丁「私は此簏紙屋の宿、雜賀屋の花之丞、年は十九で法印樣の御內義、私が妹にお梅と申て、ずんど伽羅めで御座れ共、惜い事は女子で、坊樣の口へはいりませぬ。私が顏は花の樣で花之丞と申まする。妹をお梅といふ譯は、如何した事か知らね共、彼の梅といふものを、此方は割て見さしやつたか。中に平たい物か有。此方のお梅が中にも、それが有やら無いやら、ついしか割て見ませぬ。無念な事」とぞ眞顏成。使者も返答し兼れば、傍輩は笑止がり、「是しい〳〵」と袖を引。久米之介はお梅が噂、聞に付ても彼の文の、法印の手に渡り、今や詮義の有かとて、思痛める胸の中、釘を打る八寸の、給仕も更に手につかず、日に淚持つ計なり。使者重ねて、「御自分はお年嵩と見へ申、お名は何と、生國は」と問ひければ、久米「我らは播州飾磨、成田武右衛門が悴、同名久米之介」使「ム、扨は同國武右衛門子息、高野に有は此方か」と、見上ては泣出し、見下しては淚にくれ、打萎れて見へければ、身に思ひある久米之介、心便りも無き折柄、

細谷川―平通盛、我戀は細谷川の丸木橋ふみ返されてぬるゝ袖哉(盛衰記)
木遣―邪許にて擧二大木一者呼二邪許一(淮南子)
ひんよろい―かけ聲
播摩―聲をはり上るにかく
妣母―亡母
日牌―毎日讀經の後法名を讀みて供養す
祠堂銀―寺へ寄附する供養料
御追福―死者の冥福を祈る事
五十六億云々―彌勒が釋迦に紹ぎて出らるゝ迄の年數
納所―事務を掌る僧

故棚へ入錠下し、手が汚れた勿躰ないと、跡で手水をなされたが、如何なる狀で御坐るぞ」と、問へ共譯は咄されず、はつと計に胸躍らし、「詮義に逢はゞ如何せふ」と、飛脚の九兵衛が心迄、細谷川の丸木橋、文返れとぞ祈りける。時に麓の山動搖む、木遣に法のひんよろい、聲播磨路の大名より、御墓引こそ三重殊勝なれ。則宿坊吉祥院、僧達立合、石塔請取給ひければ、使者は坐敷に直りける。法印やがて出迎ひ、「遙々のお使者御太儀〳〵、いざ〳〵是へ。それお盃、お茶持て參れ」と挨拶有。使者の侍慇懃に、「旦那が妣母第七年に方りし故、御當山に石牌を立、日牌を供へ申に付、祠堂銀五百枚奉納いたされ候。御受納あつて末世末代、不退轉の御回向賴み存候」と包みの白銀、目錄添て渡しければ、「武門の御身に、御信心御孝行の御追福、感じ入候。それ我山に卒塔婆一本殘せし人は、五十六億七千萬歳の後、彌勒の出世に逢せ給はん御誓願、などか疑ひ候べき。先此銀子の請取認め申さん」と、法印奧に入給へば、豫て用意の勝手より、銚子盃重箱や、はや吸物の椀折敷、善盡したる馳走なり。御住の弟子祐辨律師を始めとして、納所同宿入替り立替り、「山中と申、風情はなく共御時分能し、お吸物でもお代へなされ。それ小性衆、相手になつて御酒一ツ、緩りと上つて下されと、待遇へば愛嬌

お梅様を京へ連て參るとて、内方にも御用意。兎角お前が片時も早く、山をお出なさると、何處ぞへ一所に立退くか、分別も有處。それ故内々約束の如く、お國の親御の僞狀で、お暇取て今日中に、久米樣連て來てくれと、いとしぼやお梅樣、涙を流し手を合せ、お賴みなされた手前も有、どうぞお共いたしたし。詳しい事はお筆に」と、懷中よりお梅が文、取出してぞ渡しける。久米之介も心せき、「成程〳〵其筈。其方も知ての上なれば、隱す事は少しも無い。外の者に添はせては、生て居られぬ二人の中。親の命と有からは、法印了簡ないとても、暇請捨て出易し。先文見ん」と封〆切、讀んとすれば南無三寶、上包はお梅が文、久米樣との名宛にて、中は吉祥院法印樣參、成田武右衞門親の文。久米「ムヽ扨は聞へた、お梅が常々男手を能ふ書くゆへに、國許の狀をも人賴みするなと、下書書て渡せしが、隱忍んでする事とて、封違へて我文が、法印の手に渡つたか。これは〳〵」と色違へ、立ても居ても詮方なく、うろたへ廻る折柄に、主膳立出、「是々飛脚、法印直に問ふこと有、先休息召れとの事なり」と、云も敢ぬに久米之介、「なふ主膳殿、最前の文を法印樣は、はや御披見なされたか。封じ目お切なされずは、そつと取て來て下され。一期の御恩」といひければ「イヤ其狀は、法印樣繰返し披見有、反

お共—お供

聞へた—わかつた
男手—男の書く堅い文字
國許の云々—久米の國からの狀

御口上—口で傳へる話

執合—法印樣に取成しを賴む

糠袋—男をつくる品物

穴一—子供の戲にする勝負事、百日曾我に出づ

のお耳へ入ては云譯ならぬ。小性仲間の恥辱なり。沙汰しやるな」と制せられ、六尺共も聞流し、「阿房に油斷は猶ならぬ」と、目まぜしてこそ入にけれ。やゝ有て表より、「成田久米之介樣に逢申たい。お國の親御武右衛門樣よりの飛脚なり」と、若黨一人刀の先に、文箱付てつゝと入。「ムヽ久米之介とは身がこと。國許よりの使とは氣遣はし」と云ければ、「いや別義にてもなく、御老體の武右衛門樣、御隱居の願ひに付、久米之介を呼戻さんと、御一門の談合極り、法印樣への御狀段々の御口上、兎角は首尾能お暇の出る樣に、御傍輩樣達へも賴みませとの御使」と、文取出せば久米之介、「是は思ひ寄らぬ事。父が老後の大望を違背ならず」と云ながら我口からは申されず。何れも傍輩云合せ、お暇の出る樣に、執合せ賴みます。狀も進ぜて能い樣に、いづれもに任する」と、手を合すれば人々も、「心一ぱい申て見ん」と、一度に坐敷を立けるが、花之丞ふり返り、「これ久米殿、お暇曬ふて往しやらば、糠袋はおれに下され。巾著にして穴市の、つぶ入ます」と打連れて、皆々奥にぞ入にける。飛脚はそつと側に寄り、「申お國からとはいつはり、雜賀屋へ出入いたす、岸の和田の九兵衛と申駕籠の者。お梅樣の賴で、密にお咄しいたせと有。彼の御存ぢの京の紙屋、此中下つて逗留し、二三日中に祝言し、其明る日、

ぬ程に、豆腐や蒟蒻を、鯛やはむじやと思ふて喰へ、山の芋を鰻と思へ、法印樣を親と思へとばつかりで、女夫とは聞なんだが、アヽ思ひ當つた。一昨日のお日待に、法印樣の相伴で、善哉餅を十三杯、それから身持になつたやら、ぼてれんじや」と腹摩り、傍輩は皆小小性の、顏を赤めて挨拶せず。久米之介は年嵩にて、「なふ花殿、笑止な事いふ人じや。是に御坐る主膳殿、八彌殿、右門殿、年は三ッ四ッ下なれど、此方の心が足らぬ故、なぶられて居さつしやる。此方は他國者なれば、當地では此方の里を頼みにして、一家同然の此方を笑はせて本意でない。此久米之介が居る内は侮らせはせまいが、追付お暇申請、國へ歸つた其跡では、高野一山のなぶり者、少たしなんで下され」と、いへばむつと腹を立、「此鈍な事云やんな。法印樣の女房が法印樣と竝んで、善哉餅喰ふて孕んだがおかしいか。コレ忝もおれが親は、紙屋の宿で隱れもない雜賀屋の與治右衛門、母樣と一所にいつゝも物を喰やるでおれも生れる、お梅といふ美しゐ妹迄生みやつた。其方も何時も此方へ來て、妹のお梅と二人土藏へ這入て、善哉餅を喰しやるやら、お梅が聲で味ひ〱といふたを、おれや聞たぞ」といひければ、久米之介は赤面し、殘りの傍輩口々に、「賢い人のいふ事を、氣にかけては果がない。去ながら、正直な法印樣

はむ—海鰻
山の芋云々—薯蕷の鰻となる事うちつけにいふたれども昔よりいひ習はしたり（塩囊抄）
お日待—十五日の祭禮、日待は日祭の意（安齋隨筆）
ぼてれん—腹のふくれたる形容
嗜む—愼む
いつゝも—いつもか
賢い人—痴呆を態と反對に云ふ

女嫌やる—高野山は昔より女人禁制なれば云ふ
夜這星—流星の事、女の許へ通ふ意を含む
兒文珠—弘法大師が男色の道を受傳へたりと也
衆道—若衆を愛する道
臺子—茶棚
じやれをまうけ—下僕の洒落を眞受に聞いてゐる小性の顏は大人びたり

女人堂 高野山 心中萬年草

近松門左衛門作

上之巻

歌女嫌やる、高野の山に、何故に女松は生ゆるぞや。何故に女松が生へまいならば、夜這星でも飛まいか。松より梅より柳より、お寺小性の兒櫻、兒文珠の御相傳、大師の廣め置き給ひ、俗も尊む若衆の情、衆道祕密のお山とかや。南谷の吉祥院に、播磨大名の使者有とて、庭の掃除の下男、小性衆は客殿の、床に掛物、臺子の塵埃、掃いつ拭ふつ忙しさ。「是長助、闕介、掃除が大方出來たらば、不動坂まで一走り、御使者が見へるか見て戻りや。急ぎや〱」と有ければ、「いやそれは餘の者遣らしやりませ。私共は皆樣の髪を結ねばなりませぬ。寺方のお小性は、俗の內義と同じ事。法印樣の奥樣の髪は結はずに濟ますか」と、じやれをまうけの顏ひねて、足らぬ心の花之丞、「ム丶そんなら此方は法印樣と女夫か。エ丶在所の父樣や母樣は嘘付じや。山へ登れば魚喰ふ事がなら

ふとん　と─蒲團、とんと

樽屋町─垂るにかく
高津─來うにかく

ぬおしどりの、たゝんとすれば病者のくせの長話し、何とせんきのあら腹いたや、痛や痛やと空腹病めど、空さむき夜に是非に泊れとゆふ霜の、おくの炬燵にふとんと轉けて、泣て忍ぶは隣の二階、そろり〳〵、そろ〳〵〳〵〳〵さし足は、德「誰じや房か」房「德樣かいの」これは夢かと抱き付き縋り、憂をさゝやき、辛さをくどき、死なでかなはぬ身のさしづめと、なりゆく果ぞあはれなり。房を背中に大屋根傳ひ、足もよろ〳〵夜は何時ぞ、七つ八つの芝居の仕組、浮名ばかりは殘れども、殘らぬものは命ぞと、いとゞ涙の樽屋町、おりて再び此娑婆へ、いつか高津の日親樣で、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、蓮華ひとつと脇指を、胸におしあて只一刀、あつと叫びし一聲に、づんぶり染の紺屋の德びやうゑ、お房が頓生菩提の回向、水を手向て再び盆を、重ね井筒と名のたつにさ。千歳樂萬歲樂、おどりよろこぶ御代ぞたのしき。

こい染こみ—深く馴染む

ふづくる—謀を以て誑す（色道大鑑）

せがむ—文をよこせと促す

與作おどり

クドキ ゑい〳〵〳〵紺屋の徳兵衛、房にもとよりこいそめこみの、内の身代灰汁でも剝げず。口入たのみて銀四百目を、かりにやとふて女房と名づけ、阿房三太を、らむうげん太で、やまけふづくる内義の心、男いとしし子もまた可愛。しはい隱居の手前をつつみ、宵寢する子を我夫ぞと、いひまげすます鬢かづら、徳兵衛不義じやとはやまるきほひ、顏は十めんぐめんもいらず、羽織ひらりとやッ〳〵此〳〵この〳〵我子のこの〳〵、胸ぐら取て引ずり出す。宵よりつもるうき淚、理づめ義理づめ情づめ、如才内義の貞女にめでて、クドキ 金も投げ出し房との中を、あすは神明こよひの月ぞ、思ひ切たと誓言すれど、こよひちぎりの戀風は、生薑酒でもふせがれず、氣もふは〳〵の玉子酒、まゝよ行てのきよ、左樣も成まいか。どふせふか、かうせうが酒、辻にしよつつくばふて、思案中橋こひしさまさる、胸かきまはす玉子酒、心ふたつに打ちわつて、君が方へと走り行く、跡は内義がナ獨寢てさ、房は日くれて人まつ隙の、火廻しすれば飛脚がせがむ。肥後屋の迎ひはやとく徳兵衛、兄の病氣を見廻顏で、來ても互の心の底は、云ふにいはれ

過分〳〵—重疊

ざんざめく—陽氣に騒ぐ

ふみ馬云々—人を踏む馬連れて御免〳〵と進む、ふみに文をかく

ら侍ならぬ馬方を刃で死なすは勿躰ない。舌をくふか身を投るか、似合た樣に在郷馬の口取綱で首くゝれ。情に見物してやらふ。エヽ侍でもない者に心を盡して氣がつきた」と、大あくびして居たりける。與作わつと泣出し「誤たり左内殿、此仕合の上なれば、心も闇と罷成。萬事貴殿に任せ置」と、手を合すれば膝立直し、左「合點いつたか過分〳〵、それでこそ與作なれ。御前は拙者が受取た」と大音上て、「與作は御意を重んじ生害思ひとゞまる由、御披露あれ女中衆」と、よばはれば御乘物、ざんざめかいて舁よする。お乳の人も與之介も、さすが武士の子武士の妻、御前なれば手をついて、四人目と目を見合せ「何事も姫君樣、御慈悲ゆへ」と計りにて、嬉し涙に咽びける。姫君輿の内ながら、「與作丹波の伊達男と、歌に謠ふはあの人か。關の小まんも雙紙に有繪で見たよりはよい女房、聞ケば踊が上手じやげな。明日は一日逗留せふ。踊を踊つて見せてたも。家老共に云付て知行をたんとやらせふ」と、生れついたる御詞、其一言に千石千兩、千貫松の千代に八千代に、よろづ與作がもろ果報、小まんが戀もとをり町、仕合よしで今はお江戸の刀さしじや。しやんと一筆ふみ馬御免。踊子よする笛つゞみ、馬も太鼓をうつくしき、踊り浴衣の上から下迄、いろめき悅び三重賑はへり。

人そばへ—人に連れてするに當る

采配—指揮するに用ふる具

きつすい—尤もよい者

情に死だ跡と御披露あれ、最期のお暇申し請る。小まんが事はその替りに、頼み存る左内殿」と云ひもあへぬに、小萬「是々此小まんに殘れとはお内義樣の思召、わたし計に恥さらせか一人歎けか物思へか。口で云へば人そばへ、先立て埒あけふ」と、取付脇指おし止め、與「そふじや〳〵。恩も禮義も忠孝も、死ぬる身にはへちまの皮。爰へよれ南無阿彌陀」と、刺違へんとする所を、左内飛入り脇指もぎ、二人を兩へ踏倒し、はつたと睨んで齒嚙をなし、「イヤ道知らずの人外め。さすが以前は御家中の物主采配迄御ゆるされ、二つ道具をつかせし身が、心迄上々の馬方になつたよな。諸傍輩多けれども親左近右衛門がゑぼし子、與作と云名を付たれば、此左内と己と兄弟分が口惜い。死なふ〳〵とやかましい、死ぬるが左程珍らしいか。弓馬の家の死と云は、城責の一番乘、野合軍の一番鎗、能敵の首取て討死するを侍の死、悪い死とは云ぞ覺えて置け、關の小萬と心中の討死を手柄とは、一切經にも無こと。纔の恥を思はんより、主君の恩を報ぜぬは、侍たる身の大恥と知ざるか。扨淺ましや後指をさゝれふが、犬畜生といはれふが、我身の恥を振り捨、厚恩の主君に忠節をはげむこそ、恥を知つたる侍、大丈夫の武士のきつすいといふ物ぞ。此道理合點なく、死んで勝手がよいならば、左内は止ぬ心任せ。去なが

母儀―滋の井

大殿の御前―殿様のお目通りすむまで

聲をかけ、漏る方なく取まきたる。與「南無三寶見付られては二度の恥、いざ死なん」とひらりと拔く、刃物の光、「それやこそ」とお徒士衆、やにはに二人を縋りとめ兩方へ引わくる。與「やれ侍ならば情を知れ。もとは伊達の與作ぞ。一生懸命の時節到來、死損なはせてくれるか。エヽ口惜い」と身をもがく。遙か彼方に立てられたる乘物より御意を請、若侍走りより、「ムヽ珍しい與作、故傍輩鷺坂左内見知られつらん。こんど姫君關東御下向御悅びの時節。今夜の始終御れんみん淺からず、吟味仰せ付られしに、小まんが箱より貴殿の實名あらはれ、三吉事も實子與之介にまぎれなく、殊に内室お乳の人神妙の心ざし、かれこれ感じ思し召し、三吉が命を助け母儀もおなじく御供にて、兩人を助けんため、忝けなくもあれ迄お乘物を出された。大殿の御前相濟迄五十人扶持の御合力、小まんもお家へ引取、重ねてよろしく御了簡有べしとの御意の趣有がたふ存じ、サアお乘物のお供して歸られよ」とぞ述にける。與作草むらに頭を付、「大殿以來例なき御厚恩報じ奉る事もなく、不奉公の天罰にてあらぬ體になりくだり、親子も知らず恥辱の骸をさらすべき所、姫君の御愛憐生々世々に忘れ難し。去りながら女共も悴も、人の笑はぬ心ざしも立たるに、拙者は何を面目におめ〳〵と諸人に生顏があはされん。傍輩の

聲の限り云々—泣く聲とよむを地名にかけたり

太々神樂—太神宮に神樂をあげて命乞する也

鞘外す—提灯の覆を取る

やんす。そんなら私も父樣が、年よつて子をさきだて、途方があるまいいとしぼや」與「ヲ念を殘すが迷ひと成。たとへ奈落に沈む共親の事と子の事が、思はず云ずに居られふか」小萬「そふでござる」與「そふじや物」小萬「いつそいふて罪作り、親のため子のために、地獄へ落てやりませふ」と、二人ひつしと抱き付、聲の限りをとよくのゝ風も哀を添にけり。與「あれ〳〵あれへ見へる早提灯、走り飛脚と覺へたり。道端はいかゞなり、いざ最期場を換まいか」と、半町ばかり草わくる。飛脚共は汗水にて、「お乳の人の御立願あす四つ迄に命乞の太々神樂、御願かなへば、御祝義の御褒美は知れたこと。急げ〳〵」と走り行く。與「あれ聞やつたか、何方のお乳の人、命乞の御願とは養君の煩か。いらぬ命が二ツ有、アヽ換らるゝ物ならば」と、悔めば小まん涙ながら「夫が叶ふ程ならば、よその子よりもこつちの子、切られて死ぬる身替りに、とても死ぬる此身體、髮頭より爪先まで、一分ためしに試されても替りたい助けたい」と、歎しづみし誠の心、百千萬のいのりより、などか祈禱にならざらん。時に人足四五十人ひそめいて來りしが、「ヤア主なき馬の夜中といひ、繫がれ有は訝し。提灯立よ」と呼はつて、忍び提灯さやはづせば萬燈會のごとくなり。「遠くはあらじ、一二町野をかれ」と大勢が、「與作小まん」と

さはり―すはりか
生死を云々―此世を去つて未來成佛する
さみせられ―侮られ

泊らんせ。夫婦の外はあひ宿も南無阿彌陀佛彌陀佛と、こうの阿彌陀の影たのむ、其誓願の詞の縁、千貫松にぞ三重著にける。
與作も名有弓取の、家に生れし氣質とて、きつと死に身に胴さはり、土手へ飛おり馬を小松の根につなぎ、小笹の露を打拂ひ、「爰へ〳〵」と小まんが手を取顏を眺め、「廾一と廾一、二人合せて五十二才、是でから長命と云ふ程の年でもなし。可愛人を殺すよなふ。心にかゝりいひたいことは、ないか〳〵」といひければ、小萬「ハテかはいひ男と死ぬる身が、浮世に心何殘らふ。去ながら只一つ、いふて返らぬ事ながら」と、云んとするを、與「アヽもふ〳〵それもいらぬ事、人間の念慮かぎりなく、息の通ふ間は六根の樂欲にひかれ、思ふ程云ふ程なほつきず、皆罪障の種となる。此念をはらふを、生死をはなれ涅槃門に入と云。我とてもいひたいこと千萬無量を打捨たり。され共一ツの粗相には、そなたに預けし箱枕に、先祖の由緒、所々の勳功知行付の一卷有。死後に諸人にさみせられ、家名をながさん此無念、よし夫はまゝにもせん、不便やかはいや與之介が、最期迄親共知らず、親戀し父親戀しと思ひ死に殺されん、其思ひは親のわざ、親ではなくて仇ぞ」と、かつぱと伏して泣ければ、小萬「それ私には云ふな〳〵とてこな樣いふて泣し

―此唄松の落葉五卷にあり
とよくの―地名とゆたかに掛く
賴しみ―樂みにかく
雲津云々―地名をかけて二世三世もと取交す
あこぎにも―只管に
石塔―自分の墓と見立てゝいふ
朝熊嶽―伊勢の南にあり
男見る目云々―男見る自分の目は涙計り

心もひろき、とよく野とこそ賴しみし、あかれぬ中を秋の霜、今宵切ぞと氣もへりて、久保田に浮名うづむかや」サイモン小まんなく〳〵ヨイ申樣、「緣は異な物其時に、起請一枚書ね共、くもづのかはせ二世三世、指切しての云ひかはせ、枕定めぬ參宮に、寢て居て胸をやかふより、手を引あふてゆる〳〵と、步みなぐさむ夕暮は、一わの火繩に火を付て、相合ぎせる思ひ草、思ひし甲斐も夏のせみ、春秋知らぬ世のたとへ、與作小まんが身の上と、昔忍ぶの露涙、今を恨のうき歎き、このもかのもにあのゝもの、あのゝ松原時雨行く、阿漕の海士の、あこぎにも、過にし方を思ひ出て、二見の浦の二つ石、淸めし肌引かへて、刃に穢し死する身の、かたみとなれや石塔の、標の石を思ひ出す。いがき越へしも戀のつみ、末社〳〵の宮めぐり、地獄めぐりを思ひ出す。返らぬ昔思ふまい。泣な〳〵と鳴烏、人の末期を知らすとは、音にきゝしが今ぞ知る、あさくまの嶽淺ましや。彼のさいぐうの忌詞、いまはしや迚道もせに、晒す身體を道者にも、嫌ひ憎まれ人々の、よもや回向もなさけなや。歌「過去もエイ未來も現世で知る」と、男見る目は泣目もと、ヤツサありやそりや、早明がたのお八つの太鼓の聲は高田の寺、泊り〳〵は多く共、十萬億土馬次なしの、西は百味の旅籠屋に、觀音せいし手を取て、蓮の臺に

與作小まん夢路の駒　下之卷

歌「與作丹波の馬追なれど、今は野ずへの放れ駒じや。しやんとさせ與作。與作思へば照る日も曇る、關の小まんが涙雨か。しやんとさせ與作」よさく〳〵と、呼びよばれつる、いなおほせ鳥も音をいれて、野邊のかるかや軒ばの荻、馬のまぐさにかひ殘す、草も我身も此あか月は、ともに枯野のくつはむし、人を乘せたが乘せられて、かぎりの旅の坂の下、なふあれ、夜ぶかに急ぐのりかけも、泊りは知れて四日市、我は泊りもなゝ七日、中有の旅の馬ひつじ、歩めしる〳〵、アヽしぶとい口を、引どしやくれど行きかぬる。畜類ながら性あれば、最期を惜む綱すくみかや。歌「私は十二で人よび初めて、今年廿一まる九年、とめし旅人何萬人ぞ。關一宿はせばけれど、男女に幾人か、ともの〳〵よしみも時の花、無常のかぜにちりはてゝ、馬より外にとふ人も、泣てくれるか優しや」と、鞍にひれ伏しはら〳〵と、袖には涙梢には、このみこぼるゝ椋本や。與「契り初しはさをとゝし、拔參宮の道づれに、歌そなた櫛田の眞中ほどで、深き思ひをやれ紫ぼうし、ほんに口說いた其眞實が、關の地藏を誓にかけて、戀の重荷の馬追ふ迚も、足もかる〳〵

與作丹波の、與作思へば―右二首は諸國盆踊唱歌但馬七にあり

稻負鳥―鶺鴒、爰は馬と見ていふ(比古婆衣)

中有―七七日冥途に迷ふ事

馬羊―屠所の羊を含めたり

泣て―無いにかく

拔參宮―親主人の許しを得ずして伊勢參宮する

そなた櫛田云々

浮線綾—浮織の綾の總名（貞丈雜記）

おきめ—刑罰—

腰折云々—まづい三十一字の歌と腰抜た與作の三十一歳とかけたり

に付て待たしやんせ。三吉が預ケし守袋、いか成神の御札やら、私が懐中にも太神宮の守お祓ひ、穢すは後生のさはりなり、地藏堂へ納めませふ」與「ヲヽ氣が付た」と取出すふせんりやうに紅梅裏の袋を開き、月影に讀んで見れば、「正一位おばら太神宮、丹波の國の住人伊達の與作が一子與之介息才延命」與「南無三寶、扨は三つで別れたる我子の與之介成けるか。我を親とは知らね共、與作と云名を大切に、慕ひし物を氣もつかず盜をさせておきめにあふ、手を出して我子の首を切たと同じ事よ」とて、どんと坐して足ずりし、聲を上てぞ歎ける。女も共に涙にくれ、「因果人共ごう人ともよふも〳〵罪業を、重ねたは二人が身、死なふと云氣の付たこそまだも冥加に叶ふたれ。何のかのと暫時でも、此世に居る程罪おもし。サアござれ」與「ヲヽそふじや」と、立んとすれど腰立ず「口惜や腰ぬけた」小萬「エヽ氣のよはい」と引立れ共膝おるゝ。抱上ても腰をれの三十一期の浮思ひ、最期は伊勢路育は近江、生れは丹波くりげ馬、夫を抱きかき乘せて、妻は口取はいどう〳〵、今六道の次傳馬、三途の川を打またぎ、昔の小歌引かへて、あひの土山死出の山、冥途の旅路通し馬、たどるや夢の 三重

から覗いた、八藏まで殺いたはありや皆私等が身替り。明日の日中に切るゝげな可愛ひ事を仕まする」と泣さゝやけば、與「南無阿彌陀〳〵、そりや皆こちが殺すは。こちとはいかひ業人」と顔を見あはせ泣居たり。小萬「なふ三吉より一時も跡に下つて成まいが、こなさんどふ思ふてぞ」與「ムヽ其覺悟きはまればもふ落付た滿足した。宵からそふは思ふたが親仁の難義を見捨ては、死なぬ氣で有ふかと胸に計持て居た。心がゝりは殘らぬの」小萬「ハテこふ左なはに成からは父様の事も埒あかぬ。もじや〳〵云へば氣がもどる。餘のことおいてサア早ふこゝが出たふござんする」與「チヽ嬉しい〳〵。裏の軒につないだ、馬を人手へ渡しては主たる人への不調法、死場へ馬も引まいか。其間に身を出る程、此竹格子をはなして見や」小萬「いや此も小よしの惡性で、つい推ばはなれる」與「アヽアア小よしは逢ふ夜の通ひまど、最期近付二人には冥土に通ふ鐵の門」と、くどき〳〵馬引出し、「預けて置た脇指は」小萬「そこらはぬからぬ私が腰にさいて居る」與「できた。夫なら此馬の鞍をふまへてそつと下や。アヽあぶないぞ怪我すな」と、かばはるゝ身もかばふ身もはつる廿日の月毛の駒の、尾髮亂れて置露に袖の涙をあらそひし。ひらりと飛おり一町計足ばやに立退き、與「海道は往還、伊勢路の方で死ぬまいか」小萬「アヽそれ

仕損ふただんかいの―失敗以上の失敗
業人―罪つくり
左繩―不運
もじや〳〵云々―いろんな事いへば氣がひける
できた―出かした
往還―大道

めたゝく—またゝくなるべし

泣入—無くにかく

往がけの駄賃—行がけに頼まれた駄賃は馬子の儲

ほてつぱら—太腹にて馬を罵る詞

仕損ふたげなのふ—仕損ふたらしいなア

ヲ聞えた」とつゝと立「こりや八藏め、おのれは己をよふ踏で面に疵を付たな。元來我は武士の子じや。人に踏れて生ては居ぬ、覺えたか」と云ふ詞のうち、中間が脇指ひらりとぬき、飛びかゝつて八藏が首打落せし早業は、めたゝく間の稲妻なり。「すは人殺し」と取て伏せ、「もふ此うへは了簡なし」と、本繩に縛りあげ、「宿の庄屋へ預けをく。此方よりも人を付代官所へ渡すべし。立あがれ」と引立る。母は性根も泣入て、前後もわかずみだるれど、「此お目出度道中に繩付などは見ぬ物」と、人にさそはれ力なく見返り〳〵奥に入。子は父母を見送りて顏をうなだれ目をふさぎ、聲をも立ず歎きしが、三「ムヽ是ぞ本望〳〵。惡名取て人には踏まれ、助けられても生きて居ぬ。一人死より人きれば往がけの駄賃じや。父樣も母樣も誰も一度は死る物、來世でゆるりと逢はふ迄。あの世から來てあの世へ歸る。戻り馬やろいほてつぱらめ」とわるびれぬ、所存は侍まさりかな。本「惜い奴じや」と涙ぐみ、引て歸れば本陣は火の用心の聲ばかり、物しづかにぞ成にける。與作は取沙汰聞とひとしく、科を我身に引うけんと、駈つけ見れども早落著してひそかなり。本陣も門しまり、四邊もひつそと靜まつたり。小まん待かね格子たゝけば走りより、與「どふじや〳〵仕損ふたげなのふ」小萬「アヽ仕損ふただんかいの。私や爰

是式―是位

成敗―死罪

の人々に推量もしてくれかしの、心遣ひ目遣ひをそれ共知らぬぞ是非もなき。三吉も母の顔、見上見おろし涙にむせび居たりしが、三「申お乳様さもしい盗みいたしても、馬方のことなれば誰恥かしとは存ぜね共、お前一人に恥かしい。父様のためかとは恨めしの仰やな。父様が有程なれば馬追は致さね共、あり所知らねば顔も見ず。又母様も持たれ共、女子の身の不甲斐なさ、奉公人のはかなさは今では他人も同じ事。たとへ云譯立てから、盗人の名を取り見苦しいめにあふては、父様に顔はむけられぬ。はやふ殺してもらひたい。其様におつしやれて、可愛がつてくださる程どふやら心がうろたへて、死ともなふ成そふな。奥へ入て下され、もふ顔見せて下さるな」と、両袖を目にあてゝ泣しづみたる利發さに、母はなをしも心くれ、「命はお乳が囉ふた、助けて下され侍衆」と、わつとひれ伏し聲を上、人の推量思はくも忘れはてゝぞ泣居たり。家老の本田奥より出で「様子つぶさに承る。盗み物出ると云ひ、殊に道中他領の者、是式の事評議に及ばず、お助なさるゝ立歸れ」と、引立れば三吉、「此恥かいて助られ、何と生てゐられふ。慈悲なら切て囉はふ」と、猶座をしめて立ざりし。本「エヽ小しやく者かるい科を成敗とは、古今の掟にない事。立て失せふ」と怒らるゝ。三「ムヽ此分ではどふでも命助かるの。チ

さもしい―卑しい

思ふに、脛にかけて此様に、顔に疵を付たなあ。首がとんだらをのれが面へ喰付てくれふぞ」と、はつたと睨む目の中に無念涙をはら〳〵と、思ひこんだる腹立の、おさな心の念力は、ぞつと身の毛も立にけり。母お乳の人聞付て、駈出見れば大勢に取圍まれし我子の躰、あつと計に腰もぬけ、あきれて泣より外はなし。人々に悟られては、今まで包みし甲斐もなく、お姫様の乳兄弟、馬方して盗みしてといはれんも口惜く、不便さ憎さ腹立さ。滋「ヤイそちは國から目をかけて、情を加へた甲斐もないさもしい事を仕出したな。筋目も有そな者なれ共、さすが育が恥しい。其心ゆへ親々も知ても知ぬ見ぬ顔して、其馬方とは成つらめ。此方も子を持ち覺が有、皆親心は同こと。若母などが聞付ても、我子の命を助けんため、火水の底へは沈まふが、此場へ助けに出らるゝ物か。見殺しにする様なれど、心の中では神佛に命ごひしてもがくぞや。年にもたらぬ心から、恐ろしい事する筈もない、父親が貧しうて、云付て盗ましたか、但は人に頼まれたか、云譯あらば仕てくれよ。母の心を推量し、此比の馴染も有、兎に角命が助けたい、姫様のお名を思はずは此のお乳がうんだ子で、姫様の乳兄弟と云ふて成とも助けたい。どふ成とかふ成と云譯あらば仕てくれ」と、魂のそこ心のそこ、肝より出るうき涙、當番吟味

地獄落云々―鼠落に罹つた鼠の
ちぎり木―乳迄の長さの棒
ろくで―無難で
はつつけ柱―磔柱にて罵る詞
枝骨―手足

廻りつどいて飛付、乘物の戸をしつかと押へ、すだれを揚て「ヤアうぬめか。是は御前のお金袋。サア馬方の三吉めがお金袋を盗んだ、出あへ〳〵」と呼はりし。是ぞ此世の地獄おとし、かゝる鼠の如くなり。本陣の上下殘りなく、下宿の諸侍、隣町隣家の旅籠屋ども棒ちぎり木にて駈付、海道の眞中に乘物かきすへ高提灯、あたりきびしく取卷たり。當番下知して、「丁稚づれに仰山なそれ引出せ」「畏まつた」とあらしこ共戸を明て、「サア出ませい」と小腕取て引出す。三「是旦那殿ぬすんだ金は返します」と、きよろりとしてぞ居たりける。當「いか樣にも幼少な。彼奴計ではあるまい、同類を穿鑿せん。馬さしは居らぬか、當宿に泊つたる馬子共殘らず召よせよ」「あい」といふより觸れまはり、皆々一所に相つむる。八藏も大酒して宵より關に泊りしが、「盗みかはくは何奴じやい。ヤアませのじねんじよめか。おのれなら尤、ろくで果てまい奴じやと、常にいふたが違ふたか。馬方仲間の恥さらし。エヽはつゝけ柱め」と、脊骨をどうと踏みければ俯にかつぱと伏し、額を石にすり破り血は紅と流れたり。三「無念な己れ踏んだか枝骨もいでくれふ」と、立上ればひつすへ〳〵、當「そこな馬子めも慮外者。武士の前にて脛ざんまい」とさん〴〵に叱らるゝ。三「エヽ彼奴にふまれたか。下々の刀でさへ切られまいと

打たるゝ分―要盗小萬に呼き掛三吉に向つて彌頼んだといふ也
げんこ取―代價五文の餅
そやされ―おだてられ
きや〱―ひや〱
だくぼく―凸凹

て彼奴が打るゝ分。三吉「彌たのんだ、ひかせはせぬ」といひければ、三「はれやれやれやれ〱しちくどい。盗んでいらずは捨やいの。此じねんじよが頼まれて引はせぬ。ハテ親はなし一門なし、げんこ取より小さい首、意氣づくなら取ていけ。盗みして現はれ首きらるゝが不思議か」と、義を立ぬきし侍氣、盗む小金もくちせざる筋目恥かし哀なり。與「チヽ頼母しい、命掛て頼んだ」とありたけそやされ、三「ハテイ味方があれば氣がおくれる、何處ぞへとつと退いて居や。ヤア小まん女郎此守が預けたい」小萬「ハテ守はかけて居やいの」三「いや〱是には私が本名が書いて有。若しあらはれて捕まへられ、人に見せれば恥辱じや」と、といて預けし神妙さ。裾ねぢからげて忍び入。與「坂の下の彌六が方へ退いてゐて、夜中時分に戻らふ。小まんもはいりや」小萬「私やあぶなふてきや〱する。南無地藏樣〱」與「エヽ今願立がきく物か。聲が高いひそかに〱」ひそひそと、胸はだく〱だくぼくの坂の下へと別れける。武家は道中おきてにて、半時がはりの拍子木の、數も九つ十に余るやあまらずの、子共心の愚かさは、盗みおほせし嬉しさに、拍子木を除もせず、金襴の財布さげながら、門口へずつと出る。夜廻りちらりと氣を付て、慕ひ寄ればうろたへて、乘物に迯入つて、内より戸をざさいたりける。夜

除く効ある故いふ
すはせふ—すませうの意か
盗人におひ—盗人に追錢
時宜—挨拶

くもに汁—希望が生じて來た

のぼす—おだてる

や知らぬ。與作めが身の皮はいでも二石二斗が物はない。馬を質におさへて彼奴にきつと濟まさせ、小まんを内へ入ておきや。皆御太儀でござる」と、時宜もそこ〳〵戸を立て錠さす音こそきびしけれ。庄屋問屋組がしら、「扨々與作と云ふ奴は存の外の大食、旅籠から盛切から、蒟蒻くふて煮賣食て、其間に小まんと云ふお山を夜食に食をる」と、めん〳〵宿にぞ歸りける。與作は肌に冷汗ながし、漸這い出くるゝの節穴、しとみの隙間のぞけ〳〵ど見へばこそ。竹櫺子の出格子に首を伸して取付ば、内より顔がによつと出る。ちやつとひけば、「ア、大事ない〳〵。コレ私じや」與「小まんか」小萬「與作樣か、今のを聞てくだんせ。悲しいことに成はてゝ籠の鳥に成ました。私がかう成上は父樣へ難義はもふかゝらぬ。こな樣にあふ事はならふやら成まいやら、是が別れに成ふやら、下から上ははかられぬ」と、手に取付て泣ければ、與「イヤ是くもにしるが出來てきた。どふした縁やら三吉めが、與作といふ名にほれて、常に己を大事にする。乘物の内でたらしこみ、隣にとまつた大名の、金を盜んでくれまいか、男と見こんで頼む、とのぼせば此奴がのぼされて成程盜んでくれふといふ。なれば上々ならねば元々」云もあへぬに小萬「いや〳〵〳〵、人迄罪におとす事止しにして下さんせ」與「ハテ氣の細い、あらはれ

いわうじ―女房、原本に「いわらし」とあり
おかた―おかみさん
出籠―出獄
おとまし事―いやな事
かもめじりに―まんべんに
半がい―葛籠
蒟蒻の云々―蒟蒻は腹中の砂を

せぬ隠してやらふ、サアはひりや」と膝おし合し心ざし、知らねど親の孝行の通ずる念こそ哀なれ。程なく亭主門口から、「内外の者共皆おきよ。問屋殿庄屋殿組中残らず御座つた。かゝも起て出や〳〵」と、わめく聲に出女共、いわうじ諸共表に出る。庄屋問屋口をそろへ、「おかたお聞やれ。今日の寄合は、是の小まんに付て代官所のお差紙、小まんが父親横田の彦兵衛、四年此かた二石二斗の御未進にて、水牢に入られたを、小まんが願ひ請負ゆへ、出籠仰付られた。宿中としてきつと取立納めませいと、則小まんをお預ケじや。よふお聞やれ」と云ひ渡す。小まんうつむき涙ぐむ。女房も驚きて、「おとましい事仕出しやつて、主に厄介かけやるか」といへば亭主とがり聲「なんの主の厄介、一文もこちや知らぬ。上り下りの旅人衆も關の小まんといふ名にはぢて、百やる人も二百やる。一匁の囉ひもかもめじりに取をる。百目や二兩は半年にもたまれども、與作といふ博奕打のぬす人めに、有たけこたけ仕揚て、夏の物は半がいに襦袢が一枚なさそふな。與作が懸がよつぽど有、皆をのれが請合じや。帳面は忘れぬ旅籠が六かたけ、酒が四升五合、十文もりが七十杯、芋とくじらの煮賣が八十五杯、くらひも食ふた蒟蒻の田樂を百五十串、蒟蒻の錢じやとて砂にしてすはせふか。盗人におひなれば、此出入はこち

引はせぬ―口を引かず何處迄もやる

昔とちがふて當代は、道中筋も吟味つよく、馬借問屋へことはられ、惡名が立ては、とんとすたつて出入の門もふさがれば、おのづから逢ふ事も成らぬ様に成はて、萬一お國へ聞へての恥辱は二度返らぬ。父様の未進も云ひ延る丈云ひのべて、叶はずは水牢へ、代りに私が入覺悟。差當つた男の難義、すくへば私が本望」と、云へども與作聞入ず、「馬方風情になんの恥辱。うき身やつすは親のため。其金をやる物か」と、駈出しが「南無三寶こりやならぬ。是の旦那の左次殿が、何事が出來たやら、問屋組中つれだちそれ其處へ戻らるゝ。何の彼のがやかましい、一寸かくれて逢ひともない。馬も何處ぞへ引てくれ」と、隣の見世の幕のかげ、乘物あるを幸に、戸を明片足ふみこめば、内より「あいたあいたしこ。横腹をふみくさる何者じや」と、小丁稚が大欠してによつと出る。與「ヤア石部のじねんじよか」三「與作殿か」與「そちは爰に何して居る」三「おりや江戸へ通しの馬追ふて本陣に泊るが、夕飯過から眠たふて爰でぐつとやつた物。あり様はこりや何事じや」與「いや氣遣ひな事ではない。隣の旦那に逢ひ共ない、爰へ隱してくれ」といへば、三吉邊りをすかし見て、「其所なは小まんか、エヽ〳〵うまひな〳〵。己やとふから知つて居る。外の人なりやならぬが、與作と云ふ名で愛しい。與作の事なら引は

に馬子の喧嘩とて馬のふみあふごとくなり。八藏は力ばかり、與作は取手柔術取、すりちがひに小腕を取、こぶらを蹴かへし、與「これやあ」ととつて投つくる。門柱に腰骨うち、よろつきながら睨みつけ、八「どうずりめ覺えてけつかれ。問屋馬さし親方へことはつて、海道筋の五器の實をぶちあげ、菰かつがせて見せふず」と、身を捻振つて立歸る。小まん追付「是八藏殿、公用勤める馬方が、馬さし問屋へことはられ何處で身が立物ぞ。此小まんが手を合せる、男は當つてくだけいじや、堪忍して下され」と詫る程なをつき上り、八「十六貫と云ふ錢貸して、其上に投られて堪忍したら、其方はよかろ己がわるい。與作めの博奕うちぬす人と、此門からわめいて往く」小萬「なふ是々爰に百卅匁、命がはりの金なれども、男のためじや惜うない。是で濟して下され」と、取出すを引たくり八「必跡もすませよ。錢の直段はどふせふぞ」小萬「ハアテそこらは構はぬ、そなたの勝手にしてたも」八「そんなら是で拾貫分、相場は十三もんめん巾著、捻こんでこそ歸りける。小まんは小首傾ぶけ溜息ついて立歸り、「さきの金を渡してやう〳〵と去せた。彼等との交際重ねておいてもらひたい」と、つぶやけば與作肝をつぶし、「其金渡してよい物か。取かやそう」と立あがる。小萬「是待しやんせ。人の物おひながら、返さいでよいかいの。

馬さし―問屋より命ぜられて馬の割當を司るもの
五器云々―飯の種をあげる
男は當つて云々―衝突の後に和解せよ
十三云々―十三匁と木綿とをかけたり
おひながら―借りながら

すないやい云々—するない畜生奴、ほてつぱらは馬方の例の套語

したかせい—したくばせよ

引さかれ、ふりばりめ—何れも畜生阿魔と云ふに同じ

くはした—なぐつた

六貫をたゞせふや、どうずりめ」と、馬をとく手を飛かゝり、ねぢ上て、與「こりややい、我がひぬかの八藏なれば己は丹波與作じや。二百めのかたに五百目の馬をほしいか。遣たら機嫌がよからふな、三百目のつりを持て來い。五十三次に汁かけて、かみこなす與作じや。すないやい〳〵ほてつぱらめ」と振ちぎる。八「ヤイ男達はおいてくれ、錢濟いてしたかせい。腕づくならサア來い」とぶつてかゝれば、小まん取付「なふ八藏殿、こなたは粋の樣にもない。其方も此方も親方持、馬をやつて能からふか、取てこなたを褒ふか。聲高に云はず共、了簡づくがよいわいの。情なや」と泣ければ、八「ヤイ妛な引さかれ、其涙は與作になけ、こちや忝ふないわいやい。取べき錢はとらずに馬を取が了簡じや」小萬「いやそりや成らぬ。此門に繫いだ馬は此小まんがやらぬ、關の小まんがやらぬぞ」八「イヤ死めらうのふりばりめ、竹のぶちをくらふなよ」小萬「ヲヽ女子を相手にならばしや」八「ヤア仕かねふか」と鞭を持てはたとぶつ。與作小まんを押退けて、「あれは餘所の奉公人なぜくはした」八「ヲヽ我女房じや所でくらはした」與「ムヽよふくらはした、女房共の返禮」と、拳をかためて目鼻の間、缺けてのけと打たりけり。八「來い、する氣なら仕て見せふ」と、互にこづかを取ては投つ投られつ、ぶつゝぶたれつ摑み合、誠

きよくがない――情ない

ぼんのくぼ――運

山人――人質

ども、案じてもくだんせず、しこり博奕のわる遊び、扨もつれない氣と思へば、あつい涙がこぼるゝ」とせき上〳〵泣ければ、與作「わつ」と泣出し「そりやきよくがない〳〵、慰みにも慾にもせぬ。其方の親の未進米、二石二斗は何程じや、むかし與作が草履取馬取の切米。是で可愛いそなたが親を殺させはせまいと、痩我をはつての出來心。千三百石から馬追まで成下るぼんのくぼ、よい事はない筈と、思はなんだは身が不覺。是は主の天罰とあきらめて濟すが、しこり博奕の榮耀とは、去りとは小まんむごいぞや。皆是そなたの親のため、胸に書付有ならば、爰が立わり見せたい」と、打たゝいたる胸當も、しぼる計の恨み泣。小まん是はと手を合せ、「忝けなふござんする。とふに云ふてくだんせば、恨むまい物堪忍して下さんせ。父樣の出入も、夏の物共人手に渡し、傍輩にも無心云ひ百三十匁とゝのへ、まちつとの所は賃苧もよつぽどうみためた。これ見さんせ」と苧桶より金取出し、「父樣の命代、落付てくださんせ。日が暮て間が有、よもや八も來をるまい。泊りどはなし私も隙、馬は向ひに繫いで中の間に寢ていなんせ。互の憂を散ぜふ」と草鞋の紐とく所へ、石部の八藏きよろ〳〵目して來りしが、八「ヤア與作か人の馬をことはりなしに。美濃路まで隱れもないひぬかの八藏、目のあらい男知らぬかい。十

まつかせ云々—ヨシキタと手を開けた
しおつた—甘くやつた
一文はねて云々—摑んだ錢は七文と思うたからの十三字を上に添へて見るべし
げんなり—グンニャリと弱る
わりない—隔てない
未進—租税怠納
吉書—告發狀

「サアどふじや」といふたれば「三まいせい七つじや」と二文張おつた。まつかせとつく程に、手の内に殘つたはたしか七文、南無三寶しおつた。一文はねて六文にして。當てとらふと思ふて一文しやんとくろめて、ついて見たればかなしやの八文で有た物。一文はねて七つにして、彼奴が壺へあてがふたは、どふした因果のかたまり。此方げんなりと成程、八めはいきつて「馬を取た」としがみ付。今日の乘手は氏神、やくそくの馬次迄、やれ〳〵とせがまるゝ。八めも武士をのせたれば、なぜ馬を追ぬと目のぬける程しかられて、「久保田で旦那をおろして、追付馬を取に行」と早おひ程に追て來る。親方の馬をとられては、此海道は云ふに及ばず、木曾海道中仙道、たゞずみが叶はぬ。八藏めが來ぬうちに、早ふ内へ往にたい」と溜息ついで語りける。小まん心もくらやみにて、「人の沙汰に違ひはない。世につれるとは云ひながら、卑しい心にならんした。古はおれき〳〵、私等ふぜいは下司にもお使ひなされまい。緣なればこそ膚ふれて、抱つしめつのわりないこと、嬉しいやら悲しいやら、一ばいいとしさ增す物を、わるい病がつきました。そりや雲介の身持ぞや。友達仲間の交際で、引れぬ事が有にもせい、私が親の未進米、此六日の吉書に立ねばもとの水牢、此世から八かんの地獄へおとす私が心、苦にかけふではなけれ

九十九文—深草少將の九十九夜にかく

三十三匁—觀音の三十三身をよせたり

二月をどる—一月に二月分の利をとる

ぶう〳〵—ゆすり者、蜂の鳴聲にかく

むして—倍にして

借錢おほて、肩の重たい石部の八藏に請合てもらふた。是をいくさの始として、大津八町で八百まける。小野の宿の小町塚で九十九文してやらるゝ。すりはり峠の氣が細ふては勝れぬと、へそ村の上で分別しかへ、森山の觀音堂で卅三匁が質をいて、心は鬼神と出たれども、つち山の田村堂で、つい平げてのけらるゝ。伊勢へ通しにいつた時、宵からあかつきの明星が茶屋で、飲み干す樣な大ぐさり。借錢の利を一月に、二月おどる松坂こへて、くも津の渡しで算用したれば、貳貫づゝ四つ合せて、二四が八藏めに八貫のしやく錢、是はならぬと思ふ所へ、向ふから馬追ふてうせをる。じたい八めはぶう〳〵なり、己が胸倉しつかと取て、「こりや貸した錢はどふする。見忘れたか八じや〳〵」と刺す樣に云ひおる。ぐど〳〵と見苦しう詫言もして居られず、「錢と云ふて今はない。正味でかつた錢ではなし。數計の勝負づく、一ばん切について見て、八貫を濟すか十六貫おほ物か。サア來い」と云ふたれば、八めは數年の通りもの「こちは八貫出して置く、負ればそれで取り遣りなし。勝てばむして十六貫なんで濟す合點じや。抵當もなふてはいやじや」と云ふ、此方も引れぬ云ひがゝり、「是此馬を知つたか、池鯉鮒の市で九兩一分。親方の物なれど十六貫のかはりに、五百目の馬なら。してこい」と、木陰へよつて錢にぎり、

けんねじ―筆の勝負(松屋筆記)
ついてゐる―打てゐる
してやつた―儲けた
梅の木―梅の木の辻と埋めに掛く
ぜさい―是齋といふ藥種屋

れお足の湯。先奥へ。合宿もござりませぬ、ひろ〳〵と御休なされませ」と、奥にともなひ入にけり。與作は荷物も跡付もそこ〳〵に投おろし、「小まん此中逢はなんだ無事で嬉しい、やがて逢はふ」と、馬の口取り駈出す、手綱に縋つて、小萬「これなんぞ。語る事がたんとある、此方も云ふ事有筈じや。そは〳〵せずと待んせ」と引戻せば、與「エヽじやまな、其話はいつでも成。急な事じや遣つてくれ」と、振りきれば抱とめて、小萬「是どふぞいの、何がそれ程忙がしい。どふで心に一物有、譯を聞ねば遣りはせぬ」と、見世にとんと抱きすへられ、與「ハテ荷物さへおろしたに一もつが有ものか。氣遣ひそふなに短ふ咄して聞せふ。此不仕合を聞てたも。傍輩共がけんねじついて錢儲する羨ましさ。勢多の久三がどうの時、百切はつて見たれば、勝程に〳〵一いきに七百。こりや門出が面白いと腰にひつ付、しやん〳〵と鈴鹿で皆ついて居る。爰えもちよつと出かけて、又六百してやつた。是でおけばよい物を、慾には見へぬ目川村の、馬子共よせて我らがどうを取たの。當らぬか〳〵、晝さがりから七つ迄、一文と六文の錢のかほを見ぬ程に、前の勝をぶちこんで五百余りのしすごし。どつこいどこぞで此損を梅の木のぜさいの辻で、身を粉にはたいてやつて見た。和中さんでもきくにこそ、金になをいて一歩二朱の

しよざい―身分

あだて―目あて

鶴のあはれ―鶴が栗を拾ふ樣にポツ〳〵と

まめしげ―賴母しげ

本小むろ―追分節

ひんぬき―上手

扨も見事な云々―若緑卷四にある唄

ふな。餘程彼奴に懸も有。丸裸にして成共、懸を取てそれからは、門詰も踏せまいと夫婦さゝやきうなづきて、寄合にいかんした」と語もあへぬに、小まんはら〳〵涙にて、「勤めの身にもおじやれの身は、下の下といふは爰のこと。傍輩衆へもいはなんだ、横田村の父樣二石二斗の未進につまり、六十六で水牢。男にも娘にも、子とては此身計なり。しよざいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小まんが父親を、水牢では殺されず、參宮するとて隙もらひ、女子の身で代官所を秋納め迄請合て、牢を出しはした れ共、何をあだてに何とせふ。まへの樣に客は勤めず、私仕事に賃苧うみ、女中とまりの袖の下、小まんといふ名でほつ〳〵と、鶴のあはれや淺ましや、請合の日は近付、氣がいさまねば身もやせて、辛苦するのもあの人の、身をもくろめて遣りたいの念力一つで立る身が、世間でわるふ謠はれて、まめしげもなき浮世や」と、おごけにひれふし歎きしが「あれ〳〵あそこへ謠ふて來る本小むろのひんぬきは、與作〳〵」と小手まねき、歌「扨も見事なソンレハおつゞら馬や、七つ蒲團にソンレハ曲彔据へて」我もむかしは乘りし身を、人は夫とも白子屋の見世さきに馬引付、與「こりや小まん、此旦那殿馳走してとめましや。お供かけて三人じや。サア下さつしやれ」と荷物とく。小女郎小よし取々に「そ

角にまた―角に股が出來る

七二―合すれば九となる故九郎助の渾名にしたり

おやろ―追ふてあらう

ほでてんご―無用のいたづら

四九―逃る事の符牒か

いとしか―いとしくば

宿さへ泊りがない晩にはみんな覺悟しや。旦那殿のにがい顏、日比はへた角にまたが咲ふぞ、なふこはや。常にひいきな馬子衆も、こんな時に客ひいて呉そな物ではないかいの。ヤそれについて小女郎、そなたのおてき松坂の七二は何として見へぬぞ。口舌でもしやつたか。梯子の下のごそ〱が過ぎて氣色でも惡いか。餘りごそ〱ごそついて、馬は追ひでおとがひで、蠅おやろぞや」と云ひければ、小女「ムヽ其七二とは九郎助のことか。それは未生以前で今は挨拶きり〲す、しいと云ふ馬追聲も聞ぬはいの。始はたんと可愛ふて、元結の脚絆の鬢付買ふの帶買ふの、沓の錢までつゞけた、其わしが目をぬいて、一人か二人かみな口の火なは屋のおげん、まだ土山のくし屋後家、庄野のふとのおよねが、たはら腰にくひ付て、馴染のおれをすほんぬきに逢せた。それも云ふたら止むにもせい、ほでてんごうの貧乏神、何もかもほつきあげ、今は布子と襦袢と、たつた二枚の四九をやつて、親方の駄賃の算用も立ぬげな。きけば小まんの知音の與作も博奕の友じやげな。與作がいとしか異見しや。小よしも取沙汰きゝやらふ」と云へば、小よし小聲に成、「さればうちの旦那が龜山の問屋で聞いて來て、これの小まんが念比する馬方の與作めは、博奕打の大將じや。あれから盜みの下地じや。重ねて來たともあしら

紙子云々―仙臺の產物牛蒡は八幡の名產なれば云ふ

伯耆―箒

三河云々―腰、越後明石のちゞみ、東寺の瓜、越中褌にかけていへり

色こそ云々―女色は人を留る關の如し

掛子―苧桶の中蓋

をじやれ―おじやれの意にて出女

どつぱさつぱ―混雜

坊様は、此暖かなに紙子著て仙臺の坊様か。あの旅人は京の八幡の生れやら、足にごんぼの毛がむく〳〵じや。向ひ通る菅笠樣、足本腰本身のまはり、すつきり奇麗にはいた樣なは、伯耆の國の人と見た。是々爰な若衆樣、越後衆か明石か鬢がちつくりちゞんだ。あれへ大名一かしら、瓜ざね顏の旦那殿、東寺から出た人そふな。跡から御座る角まへ髮、吉野の衆かはなが見事。これへ見へた飛脚の足本のねばいは、三河者に極つたぞ、常陸の衆はおびで知る。是爰な奴殿、越中の國の人と見た。なんで見たれば此下紐を、といて一夜は泊らんせ」夕暮は急ぎの人も呼びとむる、色こそ道の關の地藏、しろこ屋の左次が內、小まん小女郎小よしとて百廿里の名取ども、人よぶかた手の袖の下、おごけの掛子そこるには、戀に心をひねり苧の、麻裃みだいた胸の中、何とならそのうき身ぞや。小萬「なふ小よし小女郎、かふした勤めさま〴〵あれ共、君傾城と云ふ者は此るいでの王さま。それから段々有內に、をじやれの身には何が成。朝の夜から見世ざらし、晝休みから泊りまで、吉原雀のなく樣に、息の有たけしやべつて、それとも泊りどあることか。如何した事やら此比は、一ぜん盛の客さへない。隣にはあの樣に大名のお姫樣、今日で三日の逗留、宵朝百六十人、どつぱさつぱと忙がしい。これの內はいかな事。下

ぎごつなく―愛想なく
坂はてる／＼―此唄松の落葉巻四にあり
しやん／＼―チヤンと沸いてゐる
あかつき―曉と垢つき
振袖―若い女　つめ―年增
庄野―痛やうにかく
しやらくさつ―しやらくさいと草津とかく
同じね―音と直段とかく

方を此乗物に引付、お慰みに謡はしや」「畏つた」と宰領ども「こりや、其處なじねんじよめ、謡ひ居らふ」とぎごつなく、「ヤア此奴はほへをるか何じやこりや忌々し」と、握り拳を二ツ三ツ、いたゞきながら泣聲に、三「坂はてる／＼鈴鹿はくもる、土山あひの、あひの土山雨がふる」ふる雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ三重 雨やどり

中之巻

留女「これ泊りじやないかゑ、泊りなら泊らんせ。泊らんせ／＼、旅籠安ふて泊めませふ。上旅籠中旅籠、お望み次第すき次第、椀家具も奇麗な、座敷は此夏表がへ、寝道具よふて酒よふて、お茶は上々木賃で成と。据風呂もしやん／＼、かゝり湯取てかげん見て、旅の汚れのあかつきは、七つ立か八つ立か、枕のお伽が御用ならば、振袖成とつめ成と足さすつて腰打て、吸付煙草のきせるのがんくび、首筋もとからぞつと庄野の六藏でないか。よい女郎衆乗しやつて、足本がかるいの」六「をいてたもァ、しやら」留女「くさつの三介三藏、石部金吉泊りならとめてたも。なんぼ先へ行んしても旅籠屋は皆ひとつ、同じねを啼く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか、目本にしほがこぼれる。爰へ見へる

きつぺて―まとめて
いたく〱しー憐むべし
たしなみ―用意

だ云ひ居るか聞分ない。夫の事我子の事、母に如才が有物か。合點の悪い聞分ない」と
制する内に奥よりも、「お乳の人はどこにぞ、御前から召ます」と呼はれば、滋「あれ聞き
や、人が來る。出てたも」と手を取て引出す。不便や三吉しく〱涙、頬冠して目をか
くし、沓見まつべて腰に付、見すぼらしげな後影、滋「こりやま一度こちらむきや。山川
で怪我しやんな。雨風雪ふり夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで煩
はぬ樣にしてたも。毒な物喰ずに腹や痲疹の用心しや。可愛のなりやいたく〱しや。千
三百石の代取が何の罰ぞ咎ぞ」と、式代の段ばこに身を投伏して歎きしが、懐中の有合
壹歩十三服紗につゝみ、「是たしなみに持て居や」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨
めしげに、「母でも子でもないならば、病ふと死ふといらぬおかまひ。其一歩もいらぬ。
馬方こそすれ伊達の與作が惣領じや。母樣でもない他人に金貰はふ筈がない。エヽ胴慾
な母樣覺へて居さつしやれ」と、わつと泣出す其有樣、母は魂消入て、「養ひ君お家の
御恩思はずば、扨一人子を手放して、なんの遣ふぞ。奉公の身の淺ましや」と、悶へこ
がれて歎きける。時に奥口ざゝめいて「早御立」と姫君の、御輿舁あげ行列立、お乳の
人の乗物をひら付にこそ舁寄けれ。お乳はさあらぬ顔つきして、「姫君のお伽に最前の馬

改易―祿を取上げ籍を削らるゝ刑

男の子云々―男は親の罰を受繼ぐ

出ればいかゞとて、母を其儘殘さふため、父樣の命助かり、奉公構ひの御改易。其時母も一所に退けば、尤も夫婦の道はたつ。お姫樣の乳離れ、お苦みをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。殘つて御恩を報じてくれ、と父樣のことはりゆへ、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼ふても御勘氣の末氣遣ひな。與作が子とばし云やんなや。サア早ふ御門へ出や。アヽいかなる因果な生れ性、現在我子に馬追させ、男の行衞も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿にのつたとて、是が何に成事」と、聲を忍びに泣く計。子は生れ付賢くて聞分有程猶泣入、三「悲しい咄を聞ました。去ながら常に姥が申たは、姫君樣と私とは乳兄弟の事なれば、母樣にさへ逢ふたらば、父樣も出世なさるよ由、御訴訟なされ下されかし」と、いへばちやつと口を押へ、滋「アヽ〳〵勿躰ない、その乳兄弟云はぬ事。姫君樣は關東へ養子嫁子にお下り、高いもひくいも姫御前は大事のもの、先は他人の世間てい、三吉と云ふ馬追が乳兄弟に有などと、どふ妨にならふやら、蟻の穴から堤も崩れる。輕い樣で重い事。ひそ〳〵云ふて人も聞く。先早ふ出てくれ」と泣く〳〵云へば三吉、「アヽ母樣あんまり遠慮過ました。先云ふて見て下され」滋「ま

恥しめて返さん物、と涙のごふて氣をしづめ、「爰へ來い與之介」と、引寄て兩手を取、「扨も大きうなりやつたの。迚も成人せふならば、侍らしう何故じんじやうにも育ぬぞ。顔の道具手足迄、母は斯うは産付ぬ。美しい黒髪を、此やうに剃下て、手足は山のこけ猿じや。ほんに氏より育ちぞ」と、又さめ〲と泣けるが、「これ物をがてんしや。腹から産だはうんだれ共、今では子でも母でもない。淺ましう成さがつたを嫌ふて云ではさら〱ない。爰の譯をよふ聞きやや。かゝはもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓、たがひに若氣の戀風に、すれつもつれつ一夜が二夜と度重なり、通はせ文をお次に落し、小姓目附に拾はれ、武家の作法と云ふ内に、殊にお家は御法度きびしく、御家老衆の評定、父も母も御成敗と極りしを、御前様のお身にかへお命かけての御訴訟。殿様の御慈悲にて科を許され、其上に表だつて夫婦になされ、與作殿は段々に、そう者役番頭千三百石迄お取立、追腹程の御恩の家、其間に其方を設け、上には姫様御誕生、御内證のよしみにて、かゝが乳を上まし、首尾さへよければ、其方も今家老衆の子同然に、二番と下座に下らぬ人。情なや父様が江戸詰の三谷通ひ、大事の所を仕損ない、又切腹に極つた。なれども腹を切せては、女房お家に置れぬ、時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も

おろ覺へ―うすおぼえ
馬借―馬を貸す所
沓打―馬の沓を作る

様は殿様のお氣に違ふて、國をお出なされたは三ッの時でおろ覺へ。沓掛の姥が咄しには、母樣も離別とやらで殿樣に御奉公、此方を姥が養育し、父樣に逢せたふ思へども甲斐もない。母樣の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋野井樣と尋ねよ、と念比に敎へて、姥はおれが五ッの年、久しう痰を煩らふて、あげくに鳥羽の祭禮に往て、餅が咽につまつて、つゐ死んでのけました。在所の衆がやしなひて、漸馬を追ならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。是守袋を見さしやんせ、何の虚を申ませふ。お前の子に紛れはない。外に望みは何にもない、父樣を尋ね出し、一日成共三人一所に居て下され。みごと沓も打まする。此草鞋も私が作つた。晝は馬を追ふて夜るは沓打草鞋作り、父樣母樣養ひませふ。父樣と一つに居て下され、拜みまする母樣」と取付抱付泣居たり。お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我子の與之介、守袋も覺へ有。飛付て懐に抱き入たく氣はせけ共、アッア大事の御奉公、養ひ君のお名の疵、詐つて叱らふか。イヤ可愛げにさうも成まい。まあちよつと抱たい。アヽどふせふ、と百千色の憂涙双つの眼にはたもちかね、咽び沈みて居たりしが、いやいや我子ながらも賢しい者、詐つて誠とせず。母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、

ぎやうに—馬鹿に
大高—檀紙
ぶんかう—菓子入
けな者—殊勝な者
三筋—三百文
番頭—隊長

意の變らぬ間に、行列揃へ」と立騒ぐ。お乳の人は勇をなし、「左樣ならま一度大殿樣、お袋樣とお盃。是も馬子殿おかげじや、出來いたく〱。其方には禮いふ褒美やる。其處に待やや」とざゝめき渡り、奧に御供し入にけり。馬方は遂に見ぬ金の間を、うそ〱と覗き廻れど、筵の外踏もならはぬ備後表、三「エヽ此座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも此方の內がけつこで御座る」と、獨言して居たりけり。お乳の人は大高にお菓子さま〲ぶんかうに盛入、「どれ〱三吉其處にか。まあ〱其方はけな者じや。道中双六お目にかけ、夫故に姬君樣お江戶へ御座ろと御意なさるゝ。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子難有ふいたゞきや。お錢三筋買いたい物買やや。殊に其方は通しじやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢ふといや。見れば見る程よい子じやに、馬方させる親の身は、能々で有ふ」と最念比の詞の末、三吉つく〲聞すまし、「由留木殿の御內お乳の人の滋野井樣とはお前か。そんなら己が母樣」と抱きつけば、滋「アヽこは慮外な。おのれが母樣とは馬方の子は持たぬ」と、もぎ放せばむしやぶり付、引のくれば縋り付、三「なんの無い事申ませふ。わしが親はお前の昔の連合、此御家中にて番頭伊達の與作、其子は私、此方樣の腹から出た、與之介はわしじやはいの。父

日阪—にッと笑ひにかく
よどみ—逗留
十國子—名物にて一掬に十宛入て客に出す（足新翁記）
沼津—鰻のぬめりにかく
ういちらう—透頂香といふ藥
とつかは—戸塚に急忙の意をかく
一の裏—骰子の一の裏は六なればかけたり

へ坂三里ナ、馴染見附の泊りと聞ば、誰も惜まぬ島の財布の袋井や、のり掛川を飛おりて、機嫌笑顔やサァにつ坂の蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川。さいに無の字を打出せば、水の出ばなの八十川の、島田金谷に二日のよどみ、仕合よしの旅すご六里、七里八里もたゞ一足に、さきへ／＼と咲かゝりたる、藤枝岡部瀬戸のそめ飯、うつの山邊のとうだんご、所々の名物買ふて、おあしつく／＼つく手鞠子に、ひいふうみいよ／＼ふちう江尻にすつとん／＼、とんと打たる興津なみ、松原はるゝ膏藥買ふて、月をすひ出せ清見寺、由井蒲原や吉原の、花の蒲燒名物の、鰻のはだへぬまづの宿、三島こゆれば箱根へ三里、さい目次第にせきこゆる。惡い目うてば手はんをとりに、元の京へ立歸る。がつてんか、ヲヽのみこんだ。小田原ういらう大磯平塚藤澤の、さはりもなしに双六の、さいさきもよし門出よし、道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷神奈川こへ、川崎をこへ品川こへ、まづ先駈のお姫樣、一番勝に勝色の花のお江戸に著き給ふ。一のうらは双六の、幸あり喜あり、慰み有ける道中と、どつと興にぞ入給ふ。

お傍の衆に囃されて、幼稚心の姫君、「斯う面白い東とは、今迄おれは知らなんだ。サアサア往ふはや往ふ」一「ヤア御座らふとおつしやるか、そりや目出度は／＼。又もや御

男色にて兄分を念者弟分を若衆といふ
そぐはぬ―つりあはぬ
はゐしろ云々―馬追ふ詞のハヰ、シヰ、ドウに道中をかく
南無諸佛分身―當時双六の骰子に此六字を刻みしなり
どさくさ―混雑
鰌―水口の名物 鰌は躍り上るもの故續けたり
手判―處の名主五人組の旅行劵

苦しうない」と呼びければ、三「あい」と云ふより慮外をも、かへりみじかき煙管の煙り立交りたる女中の傍、そぐはぬ様に見へざるは、さすが童の一徳と、繪を取出し双六を皆打交り遊ばるゝ。

道中双六

これ〳〵御覧ぜうたしやんせ。是こそ五十三次を、居ながら歩むひざ、ひざくりげ馬。はゐしる道中双六、南無諸佛ぶんしんと、書いた六字を六角の、さいは櫻木花の都をま、ん中に、思ひ〳〵のしるしを置て、さらば此方から打出の濱、大津へ三里爰で矢橋の舟賃が、出舟召せ〳〵旅人の、乗おくれじとどさ草津、お姫様より先姥が餅、一口二口みな口　鰌踊りこへ、坂へ越すのもさい次第。さいをふれ〳〵、ふるや鈴鹿を跡に下れば負まいと、せきにせきより龜山に、煙草火うちの石藥師、おつと桑名の舟渡し、宮へ上れば池鯉鮒へ四里の、宿にころりは 歌 岡崎女郎しゆ〳〵、岡崎女郎しゆと、もつれ寝よやれ藤川に、思ひ〳〵の君待受て、解く前垂の赤坂や、吉田二川 歌 白須賀ちよいと越て、手はん御座るか振袖に、ヤ此この荒居今ぎれ、舟に召せ〳〵、蛤召の蛤々、濱松までま

ちつぽけ—小さい

丁稚—小僧

あり樣—お前さん

かけどく—賭事

なんでやる—何でござる

はれやれ云々—馬方の套語にて語尾につけていふ迄

つかふど—ぞんざい

船頭馬方お乳の人—人の惡きものを並べたる諺

一代若衆云々—

賺しても、姫「いや〳〵江戸へは往きはせぬ。どうでもいやじや」と泣き給へは、お乳も今はあぐみはて、どうして能らふ御家老も、あきれてこそは居られけれ。お仲居の若菜は旅出立に、菅笠持て門外より走り入り、「なふお乳の人樣、面白い事が御座ります。十計の剃下のちつぽけな馬方が、道中双六とやら、東海道の繪をひろげ、あぢな事して遊びます。御機嫌なをしにお目にかけなされませ」姫「チヽ〳〵よふぞ氣がついた。夫は聞およふだ道中の繪を見せまし、お心も移るため馬子でも子共は大事ない、お許しじやぞの丁稚に、持て參れと呼ふでおじや」若「心得ました」と御門に出、連立來たる馬方が、片肌ぬいでさばきがみ、御前近くも無遠慮に、緣先にあげ足して、「やれ〳〵〳〵あり樣達は、あつたぼこしゆもない。傍輩共とかけどくに道中双六打て、沓の錢程してこませふと思ふたに、人呼廻つてなんでやる。はれやれ〳〵〳〵きり〳〵乘つしやれ、馬やろい」とぞつかふど成。姫「扨々利口な野郎じやな。船頭馬方お乳の人、此方もそちらとおなじこと。して年は幾歳、名は何と云ふぞ」馬「年は今年十一、五つの歳から馬追ふて一代若衆にならずに、はへぬきの念者じや。所で名はじねんじよの三吉」姫「扨もよい名じや。聞ば道中双六が有げな。腰本衆もうつて見や、姫樣も遊ばせ。サア三吉も爰へ來い、

山も見えざる云云—松の落葉五卷にある唄
琴の組—組歌、意味の違つた歌を幾個も續けしもの
どうでも—どうしても
てんがう—いたづら
てこのぼう—人形、てく

と泣く／＼走り出給へば、侍衆も下々も御門に駈出、家老の外男ぎれこそなかりけれ。お乳の人色を變へ、「是申御姫樣、下々の子供さへ九ッ十では物の聞分御座ります。あれ見さんせ、百里彼方の山川越て白髪かづいた家老殿、皆歷々の侍衆が迎ひませに參つて、江戸へ御座れば入間殿の惣領嫁子と、かしづかれるお身じやぞや。お乳の養育の難になれば、女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬ。サアよいお子じや、お輿に召せ」と、威してもそやしても、姫「いや／＼、皆の欺しじや、何の吾妻が能い所。腰本共が謠ふを聞きや。サアみんな爰へ出て、いつもの歌を謠へ／＼」とせめ給へば、お伽小姓の玩是なし十二三なが手を揃へ、歌「山も見へざるかりそめに江戸三がいへ往んして、いつ戻らんす事じややら。殺して置て往かんせの。放ちは遣じと泣きければ」「アおきや／＼、お大名の宮仕、琴のくみでも謠はひで、誰に習ふてはでな歌、姫樣などに敎やんな。必おいてもらはふ」とお乳の人の不機嫌さ。本田も餘り詮方なく、「申お姫樣、あれは人の口てんがう。花のお江戸は京優り、淺草上野の花盛、又堺町木挽町の、てんつく／＼でこのぼう、辨慶や公平が、ゐいやつとと ゝゐなどと切合を見せませふ。道中の面白い事富士の山と申、天までとゞく山を御目にかけまする。サアお輿に召ませい」と、力一ぱい

巳の上刻との定にて、御迎ひの奥家老本田彌三左衞門、數獻の盃足元はよろ〳〵と、猩々緋の道中羽織、白い所は髪ばかり、きんか頭に顏色も、しゆちんの裁著りよしげに、「何と〳〵、御供廻りが揃つたら、お先手から乘出めされ。是さ文左源五左、身はおさへを乘申。萬事夜前申渡す通りだ。若黨仲間あらしこ小者に至るまで、大酒を致さぬ樣に、馬次舟渡し等にて、がうぎがさつを仕つたらば曲事でおじやんべい。又とさ、とまりとまりの赤前垂にしやらくら致さない樣に、第一お乘物の先で見苦しい。去ながらとさ。永の道中下々が退屈致すべい。若濡などを企つるとも、目だゝぬ樣に物蔭へよつて、ちよこ〳〵ちよこ〳〵濡たがよくおんじやる。目出度い折からと申、殊に女中のお供だ、少々の事は見免しにして置召されつちや」「あつ」と答へて宰領ども、「サア御立」と催す所に奥より女中聲々に、「アヽ待つしやれ〳〵。氣の毒やお姫樣、關東へ往く事は、いやじや〳〵とやんちやばかり御意なされ、お袋樣も殿樣もたらしつ叱つゝ遊ばせ共、どふでもいやじやとおむづかり、お乳の人の滋野井殿色々と申されても、夫程江戸へ往きたくは乳母ばかり往きをれ、とお乳の人の背中をとん〳〵と打しやんして、御機嫌が損ねました」と云ふ所へ、眉泣きはがし姫君は、「江戸も東もこちやいやじや、己は往かぬ」

大内桐迄皆袋のきれの名
おさへ—殿がり
あらしこ—雜兵
おじやんべい—ありませう
がうぎがさつ—我儘粗暴
又とさ—とさは助辭
濡—色事
赤前垂—驛妓をいふ
宰領—人足頭
おむづかり—お腹立

大名に云々－大名に生るゝ子は自然に何萬石とり何萬人に敬はると也
お湯殿－浴室に奉仕する召使女
お國腹－丹波で生れたる子
金水引－金色の水引にて髮を結ふ
おさし－乳母、乳を上るもの
中老－老女の次
研出－下に繪を書き上に漆塗り磨きて下の繪を顯したるもの
金襴鍋蓋－以下

丹波與作

近松門左衞門作

上之卷

大名に生るゝ種の一粒が、何萬石ぞ幾萬人、腹の中からうやまひて、持囃したる舌つゞみ、丹波の國の一城主、由留木殿のお湯殿の子、しらべの姫はお國腹、金水引の初元結まだ十歲の裲襠もすらりとしたる生れ付。東の高家入間殿より御養子分の約束にて、蕾からとる花嫁子、御迎ひの諸侍五千石を頭にて、騎馬が廿騎稚兒醫者は御輿つき、大上﨟小上﨟、おさし抱き乳母御乳の人、中老下らうの供乘物、またもの駕はいろは付、以上四百八十挺金銀瑪瑙枝さごじゆ、研出し蒔繪の長柄の笠、長刀袋傘袋、時代の金襴、鶴ひし、たすき花うさぎ、棄に霰大内ぎり、覆ひかけたる挾箱、濃紅の大紐を高高と結びしは盛の牡丹に異らず。臺所荷は次傳馬、おつゞら荷物は通し馬、三十駄の馬方の小歌がなつて小奇麗な、聲のよいのをすぐられしも金にあかせし吟味なり。刻限は

どを入るゝ旨
（貞丈雜記）

回向偏に頼み奉る。南無阿彌陀佛彌陀佛と、涙を染て書留む。切謠同音 毎日評判朝暮の供養、佛法繁昌の回向を得るも、其身の果報と承る。

雜らず
身蓋云々―お龜に離れた自分をさす
無明―煩惱世界
せいげつ―未詳
有漏路云々―濁世より淨土に參る途中の休み
上品下品―九品の中
ほかい―行器と書く、餠饅頭な

存命し、六道の辻に只一人、今や〳〵と左こそ待兼申にや。現に現れ夢に見へ、幻に來り歎く樣、見る度毎に片時も、存生て有心、思ひ遣らせ下されとよ。今は此世に亡き妻を、二度娑婆に掘出しする、小道具屋の身にもあらず、無常の風の荒道具、身蓋揃はぬ離れ物、浮世の直打更になし。輪廻の塵の置古し、無明の夜市に賣下られんよりは、と今宵亡妻の忌日を期して、去年お龜が死したる髮剃、緣と緣とを合せ砥に掛け、廿二歳一睡の夢を拂つて、せいげつ己が眉間に施し、今月今日髮剃の、刃に滅し畢んぬ。悲きかなや、娑婆に親伯母冥土に妻、未來に情現世に慈悲、中に憂身を挾箱、何時の世にかは一對の、一ッ蓮に生るべき。是も因果の車長持、轟く穢土は假の宿、有漏路無漏路の中休み、割籠辨當茶辨當、剝ぬ間の戯れなれば、誰か端に殘るべき。たとへ此度存生ても、重ね簞笥の引出の、一重足らぬ如くにて、お龜なければ甲斐もなし。去年一度に死したりと、思召し切り給ひ、歎きも悔みも御留め、只佛壇に指向ひ、夫婦の御回向有に於ては、六尺屏風の隔もなく、眞直に受取、先立つ妻の跡繼となり、共に三途のかは葛籠、一荷に手を取打渡り、西方淨土に一文字、越ゆるは下品下用櫃、忽ち上品膳棚に到らんと、思へば最期急げ共、返す〴〵も伯母御樣、御名殘惜き椀家具、法界ほかいの御

教主―釋迦
他生お―前世よりの因緣
蘇迷盧―須彌山
かけ―懸と賭にかく
湯水も喉に云々―喉に錠がおりて飲み下されぬにかく
海―硯の水
順道―老は先立ち少は殘るが順
鴛鴦の襖―夫婦仲善き事道具屋の緣をとつて屛風、障子、疵破といへり
水入らず―他人

況んや親となり子と生れ、伯母と云はれ甥と成、一日養育の御恩は、蘇迷盧の山より猶高しとこそは承る。況て他年の御面倒、譬を取物なし。殊に去年五月の十七日、不慮の御難義かけ商、命を捨る身の損銀を、他目には榮耀者たはけ者、氣違者と人の譏世の嘲、親伯母の御歎き存ぜぬ我にも候はず。然れども生て居られぬ心の中、今更申せば人を損ふ毀ち家の、立つ方もなき夫婦の者、涙で暮らす朝夕は、湯水も喉に錠前の、懸硯の海替干しても、書盡されぬ我身の上、二人が胸に埋れ木の、身にならずして誰人か、推量には及び申まじ。其節お龜諸共に、相果て申程ならば、二度の歎きは掛けまじき。迚も助かる程ならば、存生へ出家成就して、御恩の伯母樣情の親、百年の御壽命過ぎ目出度く往生あそばさば、御菩提を弔ひ奉るこそ、順道共孝共申べけれ。去年はお龜が憂を見せ、今年は我等が歎きを掛け、お心を苦め申事、罪に罪を塗長持、孝行の元直に外れ申なり。去ながら子弟主從父子夫婦、五倫の親み何れおろかは無き中に、妻と成夫と成、偕老同穴の枕屛風、鴛鴦の襖障子、疵も破れもなき契、今捨賣にはなりがたし。殊にお龜と我等事、從弟同士の水入ず。鼠入ずの竹戸棚、釘も離れぬ中と云ひ、去年最期の折からも、一所と思ふ頼みにて、廿歳に足らぬ女の身、潔く相果て候ひしに、我等思はず

白縮緬、伸ばさぬ時刻只今」と、髪剃取て押當てしが、「ア丶思へば〳〵名殘惜の伯母御樣、身を達者に長生し、後世弔へとて只今も、お藥迄も下されし志を無下になす、御恨み御免あれ。神も佛も御慈悲に、我等を地獄に沈めても、伯母御の二世を助けてたべ。南無阿彌陀佛」と髮剃を、咽にがはと突立て、笛のくさりを刎切たり。まだ死兼て目眩く、苦痛はせじと追取直し、人脈筋を四ツ五ツ、聲を掛けて刺通し、うんと計にかつぱと伏し、反つ返しつのたれを打、苦む中にも妹脊の印、お龜が位牌に抱付、むかはり待たぬ花橘、昔の人と短夜の、雲隱れして世の人の、袂しほるゝ藻鹽草、書置に名を三重殘しける。

助給書置　下之卷

古道具屋與兵衛入道助給、末期に親伯母の御方へ申殘す書置の事。つら〳〵思へば老木返つて春を迎へ、蕾める花の先に散る世のならはし、かたぢの長持嫁に傳はり、出來合はん櫃、風呂の下の霞となる。老少不定の境、會者定離の掟、末世一代教主の如來も、免れがたしと思召せ。それ一河の舟に棹を指し、一樹の蔭の合宿も、他生劫の緣と聞、

のたれうつ—藻掻く

花橘—五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（伊勢物語）

老木—伯母

蕾—お龜與兵衛

堅地云々—昔の丈夫な長持は伯母にかけて今に殘り今流行の飯櫃は火に焚かるとて自分等にかけたり

堅牢地神―氷の朔日に解く

衣の上に能からふと氣の付た伯母御樣、必疎略になさるゝな。幸文の次手なり、皆々慥に屆いたと念比に遊ばせ。愚僧も一宿仕り、樣々御馳走忝ない、と一寸入筆賴みます。言傳どもは明日。長道中の草臥、我等は最早休みます」と、我事計云仕廻ひ、奥に入てぞ臥にける。此間に助給は書置細々と書納め、伯母よりの贈物一ツに取つて押戴き〳〵、位牌の前にも供養して、暫し絶入歎きしが、「扨も〳〵難有や、益にも立ぬ甥一人、ある時は氣を痛ませ、心を盡させ身を碎かせ、苦勞の上に苦勞を掛け、一日盡せし孝行なく、不孝第一の某を勘當不興もし給はず、如何なる合緣奇緣にや、親も及ばぬ御厚恩、送りも遣らず自害して、又もや歎を掛けん事、不孝の上の不孝の科、日月の怒を受け、堅牢地神は大地を破り、奈落に沈め給ふべし。罪業深き此身體」と我と我身を掻抓り、喰付て、聲を上てぞ泣居たる。やゝ更渡る野寺の後夜、八聲の鷄も啼交す。明方も近付たり、後れじものと位牌に向ひ、助「是お龜去年の五月に伯母御より、緋縮緬を下されて、御身と我が肌廻り、自害の恥を隱したり。時しもあれ今夜又白縮緬の絎帶、是も二人が申受、永き形見と身に付ん。我も受取受取れ」と、位牌のひれに結び付、端を右手にしつかと絡み、斯持たる心こそ、最期は後れ先立つ共、手に手を取て行道は、只一筋の

やあゑい—ヤッコリヤショ

今にいかい參—今猶夥しき參詣者か

うちあけ—淋しくなる

齋非時—僧家にて午前の食事を齋と云ひ、午後のを非時と云ふ

しゆきん帶—末攷

はなく、涙もこぼれぬ死用意、無慙と云ふも愚なり。「ヤア待て暫し、大坂の伯父在所の親、恩深き伯母のあり、狂亂したりと歎きをかけ、不孝の罪も恐ろしや。一筆づゝの書置を殘さばや」と、佛前の經机引寄せて、油も細き燈火の、消ゆる間近き我命、心あまりて事足らぬ、筆のすさみぞ哀なる。かゝる所に相住の道心石山より立歸り、「何と助給御無事なか。今下向致した、やあゑい」と、平包どうと下して休みける。助給はつと思ひしが、イヤ此坊主はいろはのいの字も、讀書ならぬ幸と、助「まめで下向羨ましい。今にいかい參りか。在所の文を書きかけた、釜にぬるみも沸いてある、洗足して休息あれ」と、云ひつゝ筆を早めける。道心何の氣も付かず。道「ヲヽ構はずと遊ばせ。扨石山の繁昌京大坂がうちあける。ヤア夫に付戻りがけ、大坂へ立寄り、此方の里へ見廻ふた。在所にも何事なく、長兵衞殿もお息才、立賣堀の伯母御から念比の言傳進上物を渡さふ」と、平包押開き、「來月の十七日はお龜樣のむかはり、盛物になされてと是菓子が二袋、お齋でもなされふば、と大坂の名物樋の上の切荒布、嵩高な計で錢安な物なれど、是齋にも非時にも重寶な、一分が二ッ屆けます。梅雨も近く土用前、喉の疵が發つたら、此藥を參つて隨分命延はつて、伯母樣の後世菩提賴むとある言傳。是は又白縮緬のしゆきん帶、

（箋）こうにも云々―役にも立たぬ、

ありとは見えて―園原や伏屋に生ふる箒木のありとは見えて逢はぬ君かもの歌をとる。

まざ〳〵―ありあり

むかはり―來月がお龜の一周忌に當る

衣の袖にひつたりと、抱き付てぞ泣きにける。助給打ち笑ひ、「エヽこうにも立ぬ悋氣じやなふ。今は左樣の色茶もなく、只お茶湯で暮します。去ば釜を焚付て、お茶湯一服供へませふ」と、火打箱引寄せて、はた〳〵と打ければ、お龜すつくと立上り、「なふ熱や堪へがたや。愛著戀慕の迷の火炎、緣に引かれて石の火の、身を焦す淺間しや。是迄なり」と駈出る、助「我を捨て何處へぞ。暫し〳〵」と縋れ共、影も形もなき人の、ありとは見へてその原や、伏屋に立る我妻の、位牌に隱れ消えにけり。助「ヤレお龜女共、お龜お龜」と尋れ共、木精計に姿もなし。助「ま一度顏を見せよかし。つれなの人や」とかつぱと伏し、消入々々歎きしが、漸に正氣つき、「アヽうろたへたり南無三寶、思へばお龜は死したる者。扨は魂魄止まつて、まざ〳〵詞を交せしか、不便の者の心や」と又咽び入る計なり。「エヽ口惜や淺ましや、去年一所に死ぬるならば、迷ふとも共に迷ひ、浮むとも共に浮むべし。難面も死に後れ、中有の闇に迷はせし。今出家とはなりたれ共、智識智者の身でもなし、文盲不學の青道心、念佛回向なしたる迚、亡者の功德にもよもならじ。今日は卯月十七日、此の命日の明ぬ間に、今宵の中に自害して、來月のむかはりは、未來で一所に付添はん」と、胸を定めて死を急ぐ。戀しき人は先にあり、此世に殘す心

秋茄子—秋茄子嫁に食はすなの諺を利かせたり
二ほん—日本
口が上る—大層口が上手になつた
振—娘姿
詰—年增姿
白—白人
風呂—湯女
初昔—三月の季より廿一日目に摘む茶（安齋隨

茄子秋茄子、嫁を譏る姑はなし、相伴は如來樣火吹竹は一本、火箸は二ほん國中に、怖いと思ふゐまめは居ず、此方樣と只二人、寢たけりや宵から長枕、寢ともなくば起通し、誰が叱らふ共思はゞこそ、世界の樂とは此住家。女夫一所に居る內に、切て一日片時でも、斯した暮はしもせいで、今是が何になる。何ぼ此住居でも、女房がなふては、ちつと事が缺けませふ。鍋蓋と女房は無ふて叶はぬ筈なれど、鍋蓋あつても女房が無い。事の缺けぬは不思議じやまで。ほんに忘れた其筈じや、道具と女房は有合、尤じや〳〵。道具屋の娘じやもの」と、とんと背けて、身をすねて口舌仕掛くる目元なり。色氣を離れた道心も、何樣やら心浮いて來て、助「ヤアいかふ口が上つたの。斯して居ても面白い事芥子程も持ちませぬ。うさんな事が有ならば、拷問なされ」と云ひければ、龜「それ其口が憎いはいの。此方覺へがござらぬか、立賣堀の伯母樣の、聞ばあの與兵衞は、家の茶が飮み足らぬか、茶屋へもちよこ〳〵遣ふと有。其詞を覺へてか、夫から尋る折もなく、今迄胸に溜つて居る。穿鑿せふばつかりに今日は遙々來ました。茶屋で此方のまいる茶は、新造の振かつめ茶か、但は白の白茶か、風呂で焚いた煎じ茶か。私が樣な薄茶は交した詞も醒切て、水臭ふて呑まれまい。互にこひ茶の初昔、私は忘れは仕ませぬ」と、

つ、すゞやかに也

おりゐ云々―下つてゐる簾を捲上げて降りると駕は失せた
藜の羹―不味な精進もの

も熱い事かな。それそこな樒の葉の水、一つ下さんせ」と、汗押拭ふと見へにける。助「いやいや水はいらぬもの、釜の下を焚付ふ。して先今日は駕に乗つて何處へ往きやつた事ぞ」と云へば、亀「さればいな、今日は四月十七日観音様の御縁日、此方様と父様と、中の能ふなる願立に、二十二社廻り仕まして、其次手に神子町の、黒格子お辻の方へ、在所の衆が呼ばしやんして、一寸逢ひに寄りました。去年此方様の生口を寄せてから、近付になり初めて、再々私を呼出して、父様にも伯母様にも、折々は逢ひまする。神子殿さへ合點なれば、何時逢ふと儘なるに、なぜ此方様も折々は、呼出しては下さんせぬ」と、そゞろに咽ぶ恨みの涙、世に亡き人と氣も付ぬ、夫の心ぞ哀なる。助「ムヽ先駕籠は預からふ。爰へ通りや」と呼びければ、亀「嬉や誰もなさそふな」と、裾を搔取身も輕く、おりゐの簾捲き返す、駕籠は亂れて失にけり。助給内に案内し、「是見や今は此身持。結構な事はなけれ共、浮世の世話を餘所に見て、藜の羹かみぶすま、先盗人の恐れなく、寢覺が能ひ」と云ひければ、お龜は庵の躰を見て、「アヽほんに扨も氣樂な住居じや。釜一ッ鍋一ッ、谷から水を汲んで來て、山から柴を折つて來て、米ごし／＼と洗ふて俎板に白瓜菜刀取て、てき／＼／＼ャてき／＼／＼ャ、てき／＼しやんと揉瓜に、なれ／＼

廬山の雨―白樂天の佗住居に寄せたり、廬山草堂夜雨獨宿（白氏文集）
たう網―投網、戀に引かさるゝ事
卯の花雪―白き振袖姿のお龜
とほん―ぼんやり
わさ〳〵―俚言集覽に淸字を宛

人、捨ても捨てぬ面影は、夢共なく現共、無き人爰に有々と、昔を見るも歸るさ知らぬ、死出の旅〳〵、露の仇駕籠急がん。戀といふ其たう網にからまれて、浮みもやらぬお龜とは、外には人も水くらき、澤邊の螢稻のとの、影かあらねか簾の隙に、漏るは卯の花白妙の雪のな、振袖ちら〳〵とな、ありし昔に奈良團扇、風かろ〴〵と駕籠舁が、昨日の旦那今朝の幻、夢の浮橋一ッ橋、甲「跨げじや」乙「合點じや」甲「跨げじや」乙「合點じや」手にも取られぬ朧駕籠、姿の山に肩替る、賤が袂も幽なる。折節助給は念佛に氣を屈し、茫然と眠けざし、物に化されたる如く、うつかりとして表を見れば、山家に見馴ぬ女中駕籠、不思議と思ふ氣も付ず。身をも所も打忘れ、とほんとしてぞ居たりける。細谷川の小石原、息杖の音かまびすく、川瀬が鳴るか空耳か、女の聲にて高々と、「北久太郎町古道具屋、笠屋與兵衛様と申お方は、此邊では御座らぬか」と、尋る聲と諸共に、駕籠は庵に近付たり。助給は元より魂魄に、氣を奪はれたる夢心地、與「チヽ是々其與兵衛は爰じや爰じや」と、扇を上げて打招く。龜「ヤレ〳〵嬉や彼處じやげな。駕籠の衆頼みます、まちつと急いで下さんせ」と、機嫌よげなる高笑ひ。程なく駕籠は庵室の、柴の戸口に舁据ゆる。簾を上ぐれば妻のお龜、にこやかなる緑の眉、芙蓉の目本わさ〳〵と、龜「さつて

傳三─出ぬにかく
落居─落着
剃こぼし─剃りおとす
去此不遠─極樂は目の前にあり阿彌陀佛去ㇾ此不ㇾ遠（觀無量壽經）
盤々─入り廻る
十萬億土─極樂の遠き事、過ニ十萬億佛土ニ有ニ世界一名曰ニ極樂一（阿彌陀經）

に詰り一言も、傳三兄弟顔を下、ふしめになれば長兵衛も、漸々涙を押止め、長「道理とも尤共、皆某が誤なり。此上は身に替て與兵衛が命を助け出家させ、娘が願ひを立申。落居の後はゐま兄弟、家を追出し申べし。外聞と云ひ親の身で、のめ〳〵生て居る心、伯母御推量遊ばせ」と、又さめ〴〵と泣ければ、伯「ヲヽ夫はせめても其詞、違はぬ樣に頼むぞや。ハヽ神子殿へも面目なや。いつぞや爰へ生口寄せに參つたげな。美い娘こそ今大坂の口の端に、かゝる枠も縁ならめ。拜んで下され頼みます」と、出れば神子も門送り、「いとしぼ樣や」と諸共に、思ひの數も百廿、袖に涙を包錢、繋がる因果や巡り行く、月にも日にも秋風と、捨て果てたりし與兵衛が、生甲斐も無き身なれ共、親伯母の心默止されず、髮剃こぼし發心遂げ、妻の菩提も我後世も、助け給へと云ふ文字、其名を助給法師と改め、二度難波の古郷へは、蹈返さじと足曳の、大和の國平郡谷、大念佛派の庵室に、しるべを求め閉籠り、妻の位牌の手向草、幽々たる谷に下りては、去此不遠の水を荷ひ、盤々たる山路に薪を拾ひては、十萬億土の月をよぢ、霜に憧れ霞に伏し、櫻が閉ざす柴の戸も、躑躅にあけて今年も早、卯月中旬に成にけり。相住の道心は、二三日以前より、石山參りの留主なれば、助給一人佛前に、心も細き鐘の聲、盧山の雨の世捨

思ひ返る―思ひ代へる
つらい―つれない
公事みや―訴訟事
きよはな―氣弱な

無いか、但知つての指圖か。お龜は其方が死した、お龜を返しや姪返しや。如何に妾が可愛とて、我子に思ひ返るとは、酷いぞやつらいぞや」と、喘上〳〵泣き叫び、傍なる竹杖追取て、「姪の敵」と長兵衛を、散々にこそ打たりけれ。傳三も今も縋り付、「是申伯母御樣、人中と云ひ女中の身、如何に弟御なればとて、近比非道千萬」ともぎ放す、手を振解き、伯「ヤア非道とは誰が事、其非道と云ふは己等兄弟。同じ女子と生れても、己等とは違ふたぞ、善惡は嚙分ける。エヽ拗此伯母が手前、兎も角もするならば、お龜夫婦を引取て、分立て商ひさせ、公事みやしても己等に、がや〳〵口を利かせふか。貧の病に肩身もすぼり、可愛やきよはな甥姪を、踏付にさせたよなあ。切て片眼見ゆるなら、起居素振に氣を付ても、斯闇々とは死せまじ。其胴慾な心からは、二人が死に出る躰を見ても見ぬ顔仕兼まい。恨しの者共や」と、盲目打になぐり打〳〵、聲も惜まず泣きけるが、伯「不便やお龜が存生に、己等が奢る面毆きたからふ打ちたかろ。若い身なれば齒ぎしみして、堪へた心思ひやる。是はお龜が打杖」と折るゝ計に四ッ五ッ、又ちやう〳〵と打ち付て「今は打ても擲いても、死んだお龜が歸るにこそ。由なき罪を作りし」と、杖をからりと投捨て、前後不覺に伏沈み、聲を計に歎きしは、道理責めて哀なり。至極

たらす—欺く

とぼす—色に耽る

提燈に釣鐘と—貴賤の差甚だしき謬此下に「いふ如く」の四字を入れて見るべし

くずいを—屑にかく

輕薄—輕卒の言

さだつ云々—家内の風波を見抜いた

摑み頰—慾張者

せこめ廻す—虐待する

と嚙でやろ。梅田堤で和女の死骸、嚙まいで殘り多ひわいなふ」龜「なふ死人に妄語はなきぞとよ、恩を知らぬは犬畜生、身の皮剝いでも母樣の、御恩を思はゞ幡天蓋、袈裟の一重も上はせず、著衣裳までもがり取、家一杯に荒鼠、父御をたらす見苦や。それに弟の傳三めが、旦那增にとぼし立、提燈に釣鐘と、主ある我が袖褄引き、與兵衛殿を失ひて、夫婦に成て家の跡、繼ふと云ふたを忘れたか。こちと夫婦は下人にて、ゐま兄弟は旦那顏、車は海へ舟は山、皆逆の憂さ辛さ。語れば親の恥晒し、云へば詞のくずいを の、夜の衣の我夫の、命を助け出家となし、家を晦ます黑雲を祓はゞ晴る胸の月、守の神のゆふつけ鳥の、別は又の逢瀬あり。今は返らぬ三途の川、影は留らず手に取れず。冥土の使繁ければ、浮世の名殘是迄」と、梓の弓のうらはづに弦走して失にけり。伯母は涙に沈みながら、神子の前とも思はれず、伯「是長兵衛の邪見者、亡者の寄口聞やつたか。我は其方の姉じやぞや。身こそ貧なれ一文一錢、合力は受まいし、何輕薄がいひたかろ。現在弟に殿樣付、內外の者に追從するも、母のない姪子共、可愛がらせふ爲ばつかり。月に一度しいて二度、三度とは往かね共、家のさだつも見て取た、此摑み頰兄弟が、お龜女夫を蹈付に、せこめ廻すと云ふ事を、盲目でさへ知て居る。其方に二ツ眼は

しや、六尺だけに存生て、二度の死をなされふか、二度憂死なされふかと、是が迷となるはいなふ」伯「ヲヽ伯母が歎もそれ一つ。心中の作法にて、死損なひし片々は、試物になると聞。與兵衛が疵を養生し、本復したる其後に、試物になるならば、伯母は何とならふぞや。和女も伯母が可愛くば、片時も早ふ一道に、取殺してはなぜたもらぬぞ」亀「いやなふ世間の心中と、夫れは違ひがあら金の、金銀づくの勤の身、奉公人や主ある人、娘子などの添はれぬ中、狼狽死なぬ心中は、人殺同前の、罪に沈むも世の作法。幼稚馴染のこち女夫、比翼連理の中はよし、何に不足は無けれども、家では誰が點を打、大鎌の犬めらに、懲果て死ぬる身を、云はゞ面々じかいとも、心中の外の心中ぞや。町衆在所世間へも、此歎きを云ひ分けて、與兵衛様の命を助け、道心出家させまして、朝晩回向が受けたやな。あそこに蹲踞ふ兄弟の、犬どもを追出して下さらば、千僧萬僧百萬僧の、とひ弔ひにもます鏡、冥土の曇が晴らしたやなふ」かま「いや是なふお亀様、女夫の衆が叱るまを、酢でさいて飲む樣に、いひたいがいに云籠めて、死でもまだ云ひ足らぬか。榮耀が餘つて此方衆がほたへ死めさるゝを、己兄弟が知つたか。それに何じや、兄弟の犬めらとは、ヲヽ私や犬じや黑犬じや。試者になる與兵衛の、身體をがり〳〵

比翼連理―夫婦仲善き事（長恨歌）
大鎌云々―心の曲つたるま兄弟を罵る詞
面々じかい―我々の心中は言はば各自の自殺とも言ふべく
酢で云々―嚙みこなす樣にいためる
いひたいがい―いひたいまゝに
ほたへ死―あくたれ

禮錢はどふなりとも。三十五日の新精靈、荒血の上で死したる人、能ふ寄らつしやれ寄り給へ」と、各數珠に手を掛けて聽聞するこそ哀なれ。千早振る御さき祓の道淨め、天淸淨とは水火の淨め、地淸淨とは家内の淨め、內外六根淸淨とは世に亡き魂の道じるべ、六道四生の淨めぞかし。忝くは座せど、神と佛は夜と晝、娑婆と冥土は日光月光、出るも入るも同じ道。娑婆往來八千度、釋迦の子神子が梓弓、此弦音に寄來たは、龜「梅田に屍さらしなや、伯母樣の手向ありがたや。懷しの父御前、合の枕の與兵衞樣、忘れがたなき古は、生口寄せた我なれど、今死口に寄り人が、語りたいぞや問はれたやなふ」伯母「梅田に屍さらしなとは、我名月の面影よなふ。姪一人伯母一人、何とて我に知らせもせず、不慮の死をめさつたる。目の見へぬ我なれば、おば捨山か恨めしや」龜「山の枯木の一本立、母なき身には伯母樣を、天とも地とも頼め共、ふぢの木杜茅屋の雨、人こそ知らね屋の内に、直で立たる人はなし。先へござつた母樣の、第三年も立ぬ間に、出船は遠く入船の、親ふ成は世の習、烏帽子寶の親仁樣、內のゐまめに廻されて、こちと女夫は雨夜の星、何所に有やら無いやらで、死なねばならぬ內の樣、語れば親の懺悔なり。下された緋縮緬、形見になれとの端縫か。我名は苔の下紐も、與兵衞樣はおいとお

に併尼各施二錢十二文一とあり

百二十—百廿文

さらしな—曝すにかけて姨捨山の歌を引きたり

名月—姪にかく

茅屋の雨—降つても知れぬ故にいふ

廻され—自由にされる

衞が疵も又、立賣堀の伯母諸共に、傳三兄弟引連れて、河内の親の手に預け、天王寺の東門を、大坂の方へ歸りしが、下女のふりは神子町を、見遣りてわつと泣き出し、「申伯母御樣おるま女郎、今迄は物見見物物參り、又は此よな時節でもお龜樣も打揃ひ、びらり帽子に加賀菅笠、大振袖の後帶、どんな者でも見返りて、お供に付た私等迄、ほんに肩がいかつたに、大事の花を失ふて、物足らずなお供には、歩けど足を引戻す。何時やら爰の神子町へ、夫がお供の仕納か。冥途の道の一人旅、誰がお供しませふぞ。おふり何如じや斯じやと愛想らしい聲付が、耳に殘つて有樣な。元結一筋紙一枚、買はずに嚊ふて遣ふたもの。お龜樣に別れてから、五分で買ふた塵紙を、涙に拭ひ上げた」とて、口說立てぞ歎きける。伯母も「涙の乾かぬに又云ひ出して泣かしやるか。實に何時ぞや口寄に、此神子町へ來たと聞く、それも斯なる約束かや。最期の時は親伯母に、云ひ殘したい事もさぞ。問ふて取らせんいざ去らば」と、冥途の闇の黑格子、辻がもとへぞ立寄りける。神子の内には心得て、茶を持つて出る煙草盆、文庫の蓋に梓弓、おくより神子も立出て、「御祈禱か口寄か。お心ざしの精靈は、目上か目下か、古い佛か新佛か。神降致してはお十二銅が一包、御さき祓百二十、お望み次第」と云ひければ、「アヽ〳〵

びらり帽子―紫縮緬の帽子
肩がいかる―肩身が廣い
さぞ―嘸あらんと也
おく―奧と置
精靈―御佛
十二銅―十二文の賽錢、秉穗錄

なから死―半死半生

三十五日―お龜の死後の日數

池は深くて泥深し。底の脇指尋ねかね、浮きぬ沈みぬ漂ひしが、今を最後の眼にも、夫を思ふお龜が心、引揚げんとや思ひけん、はふ〳〵岸によると見へしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落ち、互に助け引揚んと、抱き上ればどうど伏し、かき上ればかつぱと伏し、心計を力にて、龜「なふ與兵衛様〳〵」與「お龜〳〵」と呼交す。絶へ絶へ切る・息の下、この世からなる地獄かや、哀れはかなき三重有様なり。朝出の土民が見つけ出し、「ヤレ心中」と呼ばはる聲に、里人おり合ひ、池に飛び入引上れば、女は死して眞薦草、菰や席に死骸を埋む。男は淺疵なから死、「殺してくれ、死なしてくれ」と、泣叫ぶ間に縁者一門駈付〳〵、北久太郎町心齋橋古道具屋の跡取聟養子、と取々に、見物人の山をなす。「斯てはすまず」と與兵衛を駕籠に打乗せ、ながらへし甲斐も有かや蜆川、跡白波とぞ成にける。

中之卷

廣がりし、浮名は何とすぼめても、笠屋夫婦の心中と、歌に謠はれ繪に賣られ、或は狂言淨瑠璃の、三十五日に早なりぬ。父長兵衛は一人子を、敢なくなせし其悔み、聟與兵

もなだむるも、分て分たぬ涙なり。與「あれ早東も白ふだり。サア念佛」と云ひければ、龜「心得たり」と懐より髪剃二挺取出し、「これも母樣の額たれとて讓りなり。私はこれで死たい」と泣く〳〵出す其の中に、向ふの野道を人通ふ。「あれよ〳〵」と心は急く、二挺の髪剃一つにとり、「南無阿彌陀佛」と引寄すれば、お龜は常々信仰の「南無觀世音菩薩樣、母樣の戒名教譽授綸信女、一つ蓮に導き給へ。南無觀音樣觀音樣」と、手を合せて待ちけれ共、男は目眩れ差うつぶき、只泣くより外の事ぞなき。龜「エヽ憂目を見せて何事」と、夫の手を取我が咽喉に、押當れば思ひきり、與「南無阿彌陀佛」と笛のくさり、髪剃の刃も折れよと、一刳は刳りしが、若き者の悲さは、とゞめの灸所を知らずして、未だ息絶へず悶ゆるを、疵の口を隱さんと、抱の帶をくる〳〵と、二三遍引廻す、憂目の程ぞ不便なる。與「我もやがて追付ん」と、咽喉にあつる髪剃の、刃は鍔と折砕け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれ共、通りつべうはなかりけり。「南無三寶」と髪剃すて、傍に拔置脇指の、鞘を持て引き上る。鍔は重し手は弱る、はづんではぬる勢ひに、脇指ぬけて樋の口の、非出の水草の漲つて、ざんぶとこそは沈んだれ。與「エヽしなしたりこは如何に」と、這下る堤の露、飜れし血に足辷り、池へどうど落ちたりける。

期場と、泣々息らひ立ちにけり。お龜は夫の顔を見て、「連立つ冥途の道とは知れど、今生の別れとて、云ひたい事の何やらが、胸には有て口へ出ず、あく程顔が見て死たや。心なの短夜」と身を投かけて泣るたり。與「アヽ愚や愚痴や浅ましや。永き來世が有ぞかし。去ながら心に懸るは其方の父御、二人共無き獨子を、憎や聟めが殺せし、とさこそ恨み憎しみの、是罪障となるぞ」とて、共にひれ伏し泣きければ、龜「いや父樣は男氣の、思ひ諦め有べきが、愛しや在所のお袋樣、姑なりとて一日の、給仕へしたこともなく、大事の子をば嫁ゆへに、失ふた殺したとお叱りなされんこれ一つ、目の不自由な伯母樣の、力と成はこち女夫、さぞ今比は泣悲み、眼でも眩ぬかどうしたと、胸に塞がる是二つ、又母樣の十三年、觀音經を書ませふ、佛になつて下さんせと、墓に向ふて約束の、是が違ふた何やかや、斯迄重き罪科の、閻魔の前には黒鐵の、帳に付と聞ものを、能い所へよも往かじ。火水の地獄も厭はね共、夫婦別れて行ふかと、是のみ猶も迷ひぞ」と、聲もおしまず歎きけり。さすが男は力をつけ、「一つに行ふと別れふと、皆一心の向け樣ぞ。氷の地獄火炎の地獄、劔の山へ登る共、取交したる手は放さじ」と、心強くは云ひけれど、まだ莟む花出る月、玉の樣なる若い者、若い女の頑是なさ、なだめらるゝ

この、修羅の太鼓の響かと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつゝ泣く計。聞ば私も母樣の、三十過ぎての初子とや。其讓りかや馴初めて、一夜離れた事もなく、交す枕に子胤のないか。是も產まずの數ならば、根を掘る竹の伏見町、高麗橋の西東、床も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄ふてかへる其歌の、品有中にも來ぬ人を、まつほの浦の夕凪に、やくや藻汐の身を焦がず。夫は吾妻の物語、耳に聞きたる計ぞや。和女と我は浪速津の、貴賤群集の見るめかる、尼ヶ崎町くはしよ町に、はや北濱や中の島、明日は天滿の橋々賣りて、梅田の梅田の堤をそめし、紅葉笠屋のな女夫の心中、男廿一お龜は十五、年にあはすりや、惡戯々々じや。サア繪双紙ゑ、餘所の口の端ァ餘所ごとに、買求めては慰みし、此身の果を讀賣に、誰が節つけて田舍迄、唄ひ流さん蜆川、水も濁りて此世へは、いつ歸りすむ根なし草、ゆんでは無常の燒草と、惜からぬ身はおしからず。龜「灰となさふか此肌」與「煙と成か此の形」龜「惜や」與「いとしや」二人「悲や」と、引合し手を猶締めて、淚の限り泣きつくす、杜の小烏川千鳥、合法烏も聲さびて、早東雲も近付ば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば網舟の、目にやかゝらん行く先は、早曾根崎の宮奴の、朝淨する折なれば、今は詮方夏草の、人目堤の下蔭を、爰ぞ夫婦が最

此上巻の文句は卯月紅葉に出でたれば註を省く

あとをひ心中 卯月の潤色

作者 近松門衛左門

上巻 末期の道行

江戸節今捨る身にも恐ろし犬の聲、辻を隔てゝ見返れば、あれで生れし町所、家の馴染も十五年、其春夏の此月は、忌月とて物忌ひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、其死恥も包ましく、其方の髪亂れずや。いや我よりもおの樣の、鬢撫附けて掻きなでて、死んだ跡迄よい殿と、人に言はせまほし明り、今宵の月を月々に、待ちしも遂に引きかへて、冥途の使我々を、待つらん物と掻きくれて、泪曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つる共、假令佛に成とても、必ず契り米屋町、本町の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町、生れ變りて又いつか、娑婆の便の備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、のがれし賽の河原町、三途の瀬戸の淡路町、超れば親の古里の、名にも別るゝ平野町、曙近き時太皷、どう〳〵修町これや

水を溜る所を井手といふ刀の中身がその中へはね返りて落入りたる也
しなしたり―しくじりたり

甲斐―貝
白波―知らずをかく

如何に」と、這ひ下る堤の露、零れし血に足辷り、池へどうど落たりけり。池は深くて泥深く、底の脇指尋ねかね、浮ぬ沈みぬ漂ひしが、今を最後の眼にも、夫を思ふお龜が心、引揚んとや思ひけん、はふ〳〵岸によると見へしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落、互ひに助け引揚んと、抱き上ればどうど伏し、かき上ればかつぱと伏し、心ばかりを力にて、女「なふ與兵衛樣〳〵」男「お龜〳〵」と呼交す、絶へ〴〵切るゝ息の下、此世からなる地獄かや、哀れはかなき 三重 有樣なり。疵の口に水入て、女は生年十五歲、時も皐月の菖蒲さく、沼の泡とぞ消にける。夫も死なんと脇指を、尋ね漂ふ朝嵐、里人折あひ、「すは心中」と飛入〳〵、夫婦をとつて引上る。女は死して池水も、みな紅に名を留む。男は生て生甲斐の、甲斐もあるかや蜆川、跡白波となりにける。

出る月、玉の樣なる若い者、若い女の頑是なさ、なだめらるゝもなだむるも、分て分たぬ涙なり。與「あれ早東も白ふだり。サァ念佛」といひければ、龜「心得たりと懐より、髪剃二挺取出し、これも母樣の額たれとて譲り也。私はこれで死たい」と泣く〳〵出す其なかに、向ふの野道を人通ふ。「あれよ〳〵」と心は急く、二挺の髪剃一つにとり「南無阿彌陀佛」と引寄すれば、お龜は常々信仰の「南無觀世音菩薩樣、母樣の戒名きやうよじゆりん信女、一つ蓮に導き給へ。南無觀音樣觀音樣」と手を合せて待ければ、男は目昡れ差うつぶき、只泣くより外の事ぞなき。女「エヽ憂目を見せて何事」と、夫の手を取我が咽喉に、押當れば思ひきり、男「南無阿彌陀佛」と笛のくさり、髪剃の刃も折れよと一刳は刳りしが、若き者の悲しさは、とゞめの灸所を知らずして、未だ息絶へず悶ゆるを、疵の口を隱さんと、抱への帶をくる〳〵と、二三遍引廻す、憂目の程ぞ不便なる。我もやがて追付んと、咽喉にあつる髪剃の、刃は鋸と折碎け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれ共、とほりつべうはなかりけり。「南無三寶」と髪剃すて、傍にぬきをく脇指の、鞘をもつて引あぐる、鍔は重し手は弱る、はづんではぬる勢ひに、脇指ぬけて樋の口の、井出の水草の漲つて、ざんぶとこそは沈んだれ。男「エヽしなしたりこは

目堤の下かげを、爰ぞ夫婦が最期場と、泣々息らひ立にけり。
お龜は夫の顏を見て「連立つ冥途の道とは知れど、今今生の別れとて云たい事の何やらが、胸には有て口へ出ず、飽程顏が見て死にたや。心なの短か夜」と身を投かけて泣ゐたり。與「アヽ愚かや愚痴や淺ましや。永き來世が有ぞかし。去ながら心に懸るは其方の父御、二人共無き獨り子を、憎や聟めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、是罪障となるぞ」とて、共にひれ伏し泣きければ、龜「いや父樣は男氣の、思ひ諦め有べきが、愛しや在所のお袋樣、姑なりとて一日の、給仕へした事もなく、大事の子をば嫁ゆへに、失なふた殺したとお叱りなされんこれ一つ、目の不自由な伯母樣の、力と成はこち女夫、さぞ今比は泣き悲しみ、眼でも眩ぬかどうしたと、胸に塞がる是二つ、又母樣の十三年觀音經を書ませふ、佛になつて下さんせと、墓に向ふて約束の、是が違ふた何やかや、かく迄重き罪科の、閻魔の前には黑鐵の、帳に付と聞ものを、能い所へよも往かじ。火水の地獄も厭はね共、夫婦別れて行ふかと、是のみ猶も迷ひぞ」と、聲もおしまず歎きける。逍が男は力をつけ、「ひとつに行ふと別れふと、皆一心の向け樣ぞ。氷の地獄火炎の地獄、劍の山へ登る共、取交したる手は放さじ」と、心強くは云ひけれど、まだ莟む花

聲さびー聲嗄れる
夏草ー無に
堤ー包むにいひかく
觀音經ー法華經、普門品
莟む花ー花月は美人の形容

淡路—泊戸
道修—娑々
伏見—町
根を掘云々—産ず女死すれば手の爪を剥て竹の根を掘らせらると云ふ
立君—辻君
こぬ人—定家卿の歌
堤をそめし—堤を染めし血の縁に紅葉笠と縫けたり二人の心中を讀賣にて田舍迄唄ひ流さんと豫想す
合法鳥—陽鳩と稱ふるものにて和名山鳩（比古婆衣）

これやこの、修羅の太鼓の響きかと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつゝ泣くばかり。聞けば私しも母様の三十過ての初子とや。其譲りかや馴そめて一夜離れた事もなく、交す枕に子胤のないか。是も産まずの數ならば、根を堀る竹の伏見町、高麗橋の西東、床も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄ふてかへる其歌の、品有なかにも來ぬ人を、まつほの浦の夕なぎに、やくや藻汐の身を焦す。夫は吾妻の物語、耳に聞きたる計ぞや。和女と我は難波津の、貴賤群集の見るめかる、尼が崎町過書町に、はや北濱や中の島、明日は歌天滿の橋々賣りて、梅田の、梅田の堤をそめし、紅葉笠屋の女夫の心中、男廿一お龜は十五、年にあはすりや、いたづらくじや。サア繪双紙ゑ、餘所の口の端ア餘所ごとに、買求めては慰みし、此身の果を讀賣に、誰が節付て田舍迄、唄ひ流さん蜆川、水も濁りて此世へは、いつ歸りすむ根なし草、ゆんでは無常の燒草と、惜からぬ身はおしからず。龜「灰となさふか此肌」與「煙と成か此形ち」龜「惜しや」與「いとしや」二人「悲しや」と、引合し手を猶締めて、涙の限り泣つくす、杜の小烏川千鳥、合法鳥も聲さびて、早東雲も近付ば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば網舟の、目にやかゝらん行先は、早曾根崎の宮奴の、朝淨めする折なれば、今は詮方夏草の、人

へぬは。そりや提灯よ釣鐘よ、八ッ過じや八軒屋、河内よ堺よ川口よ」と、足元へは氣も付かず手分をしてぞ追かけける。夫婦は隙間に長持より、そつと出て邊りを見、先立失せし心中の、戀の移りの香をとめて、梅田橋へと志し、二三町こそ三重走りけれ。

末期の道行

江戸節今捨る身にも恐ろし犬の聲、辻を隔てゝ見かへれば、あれで生れし町所、家の馴染も十五年、其春夏の此月は、忌ひ月とて物忌ひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、其死恥も包ましく、其方の髭亂れずや。いや我よりもおの樣の、鬢撫附てかきなでゝ、死んだ跡迄よい殿と、人にいはせまほし明り、今宵の月を月々に、待しも遂に引かへて、冥土の使ひ我々を、待らん物とかきくれて、泪曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮る共、たとへ佛に成とても、必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町、うまれ變りて又いつか、娑婆の便りの備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、のがれし賽の河原町、三途の瀨戸の淡路町、越れば親の古里の、名にも別るゝ平野町、曙近き時太鼓、どう〳〵修町

先立失せし云々―去年梅田にて情死せし彌市お高の事を云ふ（脚色餘錄）
今捨る云々―自然俳句になりたり、死ぬる身に恐るゝ者なけれど犬の聲には流石に怖れる
十五年―お龜の年なり
おの樣―與兵衛をさす
いはせ云々―いはせたいに星をかく
米屋町―籠めにかく、以下皆掛詞
安土―土
備後―便宜
瓦町―賽河原

さしがへ―云々―刀と白無垢を緋縮緬にて結び下ぐ

けはしく―烈しく

はづひて―はづして

月に別れて 三重 出にけり。宵より二階に引籠り、待てど暮せど其人の、そよとばかりの音便も、早九ッの鐘の聲、書置涙に文字消て、先へ死んだもましならめ。しほれ詫たる折節に竊に人の足音す。そつと二階の障子をあけ、覗けば夫も掻暮て、互ひに聲も立ばこそ、頷き合たるばかりにて、泣くづをれしぞ哀なる。用意し置しさしがへに、夫の白き帷子緋縮緬に結びさげ、下せば下より受取りて、死ぬる覺悟と心得ける。南無三寶西町より新町戻りの駕に提灯、走つて近く車長持、蓋をあけてぞ隱れいる。稍遣り過し出ければ、いつかは釘を放しけん、むしこをはづし帶結下、傳ふて下ん其用意、夫は長持ひき出し、心を砕く二階には消るばかりに蜘蛛の、糸に懸れる身の命、露の便りの危うさよ。憂さよ怖さよわな〱と、 三重 慄ひ傳ふを抱おろし、二人が顔を見合せて息つぎ胸を鎮めしが、「此比とだへし添寝の床、懐しなつかし戀しや」と、互にひしと抱きしめ、歯を喰しばり息をつめ、顔と顔とを打合せ身を悶へてぞ歎きける。町の夜番が時申、又長持の蓋あけて、抱きあひてぞ忍んだる。夜番は物に心をつけ、けはしく門を叩き立、「これ起た〱、二階のむしこをはづひて、上から帶がさげてある。長持も出してある。盗人そうな」とわめくにぞ、家内一度に目を覺し、二階へ上れば娘はなし。「お龜樣が見

ける。「道具はあるか吟味せよ」と、鎰投出すを手代ども、戸を明け内に走り入り、「何も道具は違ひなく、是ぞ不思議」とふすぼつたる、火繩艾を取出すは、詮方なふぞ見へにける。親ははら〳〵泪をこぼし、「如何なる天魔が入替つたか。町衆をかたつて讓狀を取出し、大恥辱かいたる昨日の今日、親の倉のやじりをきり、此火繩の火は何にする。ヤレ罰當りめ、八百屋お七を見をらぬか。聲山立て町へ聞へ、下で濟ぬ詮義になれば、如何なるおきめにあふとか思ふ。そこを切ても不便さに、高い聲もゑ爲ぬはい。是でも己が心には伯父をつらしと恨むらん。本氣ではよもあらじ、碌な死をせまいかと、却つて是が不便なり」と、涙を流し目をふるはし、色を違へて怒りける。お龜涙を押へ、「これ與兵衞樣うろたへまひ。云譯をなされ」といへば、與「イヤ證據もない云譯、見苦しげに何かせん。皆我々が不運なり。如何樣になるとても、親をも人をも恨みとは、思ふまいぞ思やるな」と、一聲いふたばかりにて、誰がもの云ふても返事もせず、歎き沈みし有樣は、目も當られぬ風情なり。長「日の内は外聞惡し。表を閉めて追出せ」と、蔀下して情なく引出せば、伯母お龜、「なふ今暫し」と取つくを挘放し挘放し、門より外へ押出し、くゞり戸をはたとさしければ、内には妻の叫ぶ聲、外に夫の忍び泣、涙に曇る十七夜、

聲山立―大聲あげて
下で―内々
おきめ―刑罰
蔀―店の揚げ戸

裏間ふ—心中を聞く

手盛に云々—一杯食はせた巧みを見よとなり

しんしやう—身代

ためず—留めず

矢尻—屋後、是を切るは強盗の所作

「旦那は留守か、お龜樣は奥にか」と、裏へ通つて後ろより遠慮もなくしつかと抱く。龜「エヽ暑くろし誰じやいや。ムヽ傳三郎か。主といひ主ある身に、此樣な無作法は、覺悟なふてはならぬ筈。其根心が聞たい」と、騒がぬ顔で裏問へば、傳「ハテ根心とて別はなし、與兵衛のたはけめはどふでも此には置かれぬ談合。君さへ合點なさるれば、賤が聟になるじやげな。但し阿呆がお好か」と、猶理不盡に抱き付。龜「ヲヽ聞へた扨はかの讓狀も、其方が欺して取らせたか」傳「如何にも〳〵町儀が何共濟ぬゆへ、手盛にさせて喰はせたる、才覺を御覽ぜ」と、いひも果ぬに、龜「ヲヽ夫れを聞ふと云ふ事よ。あれ間男よ」と聲立る、口に袂を捻込で、絞殺さんとする所を、與兵衛壁より這出て、むんずと組んでひきければ、お龜は奥に逃げ入りける。與「おのれ不義者しんしやうの敵」と、摑みついて組合しが、傳三郎は剛力者、非力の與兵衛を取て投げ、足をもためず逃失しは、殘念なりける次第なり。「さわがしきは何事」と、亭主歸る折節に、手代も皆々立歸り、裏へ通れば與兵衛は、南無三寶と起上り、狼狽廻つて切明し、倉の壁ゐ這入る所を、長兵衛飛懸り、兩足摑んで引ずり出し、長「ヤレ與兵衛めこそ倉のやじりを切たれ」と、呼はる聲に驚き、伯母はお龜に手を引かれ、「そも實事か」とばかりにて、惘れ果てぞゐたり

嵐―名優の名あらしにいひかく

鎰巾著に打入れて、「伯母御遊んでお歸りなされ。我等は町の年寄へ、聟のすりめが談合に、參る」と云ふて出けるは、にが〳〵しくぞ見へにける。お龜は樣々心亂れ、「伯母樣少とお息み」と、奧の間にこそ入りにけれ。無慙やな與兵衛は、網代の魚の如くにて、倉の窓より顔出し、「水にても湯にても、切めて莨呑みたやな。烟管火繩は懷中す、お龜來らば火が欲しや」と、咽喉乾かし待けるが、「エヽ思ひ付たり」と、倉の案内覺えたり。水晶の根附尋ね出し、艾を少し押當て、入日の窓に差向へば、實に炎天の極陽の氣、水晶に火移りて、艾燻り出けるを火繩に移し、やす〳〵と莨に氣をぞ休めける。お龜は伯母を寢いらせて、庫をほと〳〵敲きける。與兵衛顔を差出し「是は何たる不仕合、云ふ事爲事間に違ひ、獨り網に罹りしは、如何なる因果」と泣口說。お龜は思案や仕たりけん、「斯なる上は一心を据壁を破つて迯出、二人連にて在所へ行き、ゐま兄弟と公事をせん。此暮紛れに早ふ〳〵」といひければ、與「ヲヽ我も左樣思ふゆへ、壁はよつぽど崩せしが、壁下地の大竹を切る音の、響きては如何あらん」といふ所へ、與「あれ〳〵芝居の替りの太鼓、サア此間が能からふ」と、脇指拔て切破る、音も嵐の三右衛門、替り〳〵と打太鼓に、隱れて餘所には 三重 知れざりけり。ゐまが弟傳三郎斯くとも知らで來りしが、

此手—此種類

くろゝ—くるゝにて樞

伯母御出—伯母御御出か

男ぎれ—男のきれはしも

無沙汰—油斷

じもの。恨めしの娑婆世界、片時も早ふまいりたや」と、咽入り〳〵或は憐れみ或は叱り、甥子を思ふ誠の泪、與兵衛もまろび出、ものはいはれず手を合せ、拜めばお龜は聲をあげ、「只伯母様を母様と、思ふて頼む」と計にて、縋りあひてぞ泣きゐたる、理りすぎてあわれなり。伯母は泪のひまよりも、懐より縮緬一巻取出し、「これ此緋縮緬は今は此手は渡らぬとて、此前人に貰ひしが、色變りしか知らねども、若い者は嗜みぞ。與兵衛と其方が肌の物に縫ふてしや。男も女子も旅他國、どこでどの様な事有ても、肌のものゝ善悪にて常迄思ひ知らるゝ」と、渡せばお龜「忝けなし」と、夫諸共戴きて、跡まで清く顯はせし、心の色の緋縮緬縮む命ぞはかなさよ。時に亭主立歸り、見世の道具を見廻す間に、龜「あれ父様の」といひければ與兵衛裏へそろりとねけ、細目に明たる倉の戸を、明て内にそつと入り、くろゝをはたと落しける。長兵衛は不機嫌顔、「ヤア伯母御出なされたか。手代共は一人もおらぬ、何處へうせた」といひければ、お龜聞も敢ず、「はて忘れさしやんしたか。一人は河内のおぢ様へ、一人は尼ヶ崎へ買物にやらしやんした」父「ヲヽ夫を何の忘れはせぬ。まだ歸らぬか野良共」と、表裏を見廻して、「是は〳〵、男ぎれは一人も居ず、倉に錠も下さぬか。扨々不沙汰千萬」と、つぶやき〳〵錠おろし、

入ゐ—入夫
まんろく—實際
唐物屋—舶來品を取寄せて暴利を貪り奢を極む事
いぶり—すねる事
袖—餘所
小路隱—茶屋小屋抔に入浸る事
汐ふます—難儀さす
憎い者は云々—憎いものがあつても我慢せよとの諺
ふせう—不幸
此世にならば—此世にあるならば

廻に來たるぞや。總じて入ゐ入婿に小言の有はならひなれど、和女や與兵衛が親々は、伯母が爲には兄弟なり。和御りよ達は甥姪なり、どちらに贔負偏頗もない。まんろくを云ふ時は、皆與兵衛めが惡いぞや。胸前垂に草鞋かけ、親の辛苦ひとつにて、仕出たる此しんしやう、夫をまねぶが子の作法。何であらふぞ、唐物屋衆さへならぬ程に、ぞべぞへと著飾つて、謠講の俳諧の、若いそなたを女房にもつて、内の茶が呑み足らぬか、茶屋へもちよこ〳〵遣ふと聞。異見をすればいぶりを出し、商賣は袖にして、小路隱れの家出のと、聞度ごとに此伯母が、胸には釘を打如く、いふさへ泪がこぼるゝぞや。これなふお龜、年はいかねど男を持てば大人役。夫の身持惡ければ女房の名が出るぞや。戻つたりとも寄せ付ず、江戸長崎へも追下し、汐を蹈せて人にしや。とは云ひながら、與兵衛めは氣の弱ひ生れつき、無分別の出ぬ樣に、女夫あひをよふしやや。内に惡魔の有事も、憎い者は生けて見よ。是も世上のふせうぞかし。アヽ淺ましや此伯母が、年はよる目は見へず、つれあひには放るゝ。子は養子なり嫁掛り、明日が日往生申ても骨を拾ふて眞實に、泣てくれるは與兵衛とそなた。子同前にいとほしく、よいが上にも能ふしたく、朝夕の看經にも、其方女夫を祈るぞや。お袋が此世にならば、是程苦勞は聞か

賣佛壇—道具屋なれば何でもある也
わたし—渡しと私
爰の—長兵衞

にぞ染む。斯る所へ、與兵衞は今朝迄浮々さまよひありき、心も空に行ともなく、我家の門を徘徊す。お龜はちらと見るよりも、「是誰もない大事ない。これなふこれ」と呼はれば、笠をも取ずつゝと入り、二人ひつたり抱き付、臥し轉びてぞ泣ゐたる。やゝ有て與兵衞、「ムヽ此白無垢を仕立るは、死ぬる合點か嬉しや」といへば、「ヲヽされ ばとよ、これは斯はして置ども、是非に叶はぬ其時は、わたしが方から知せをせふ。必らず夫迄短氣な心持んすな。こな樣いかふ狼狽てじや。心を納めて下さんせ。ひよんな心を持まひぞや」と、力を付る其中にもさすがは年も童氣の、「いつそ連立走りたい」と、また縋り付抱き寄せ、引寄せ〳〵歎きける、有樣こそは不便なれ。下女のふりは差心得、門に立て西東、心を付てゐたりしが、「あれ鼬堀の伯母御樣、駕が見へる」と駈入れば、與「こは何とせん。伯母樣の目は見へねども、内の者が見付やせん」と、見世に立たる賣佛壇の、戸を明てこそは隱れけれ。程なく駕を舁入れて、伯母も下ればお龜は、「是はよふこそ」と、手をひき奥に入ければ、供の女は駕舁に、錢を「わたしも歸りませふ。晚方迎ひに參りませふ」と、云ふて其儘歸りけり。伯母は溜息ほつとつき、「爰のはまだ戻らずか。今朝こちへ來て、與兵衞が噺をめさつた故、あるにもあられず氣遣しく、扨こそ見

古道具—降るに
隱れ笠—笠屋にかく
花聟云々—花聟といへば名はよいけれど實際家の中心は娘にありと也、娘に生す芽をかく之は松の落葉櫻盡しの下句を取りたり
烏鵲や—逢ふ事至て稀なる事、牽牛織女會合の時鵲羽をのして渡す

て、息をはかりに泣かはす、山時鳥皐月雨、涙の雨もふる道具やの、聲ばかりして俤は、隱れがさやの憂き名殘、別れ別れに 三重 なりにけり。

中の卷

花聟と、名にこそたてれ下草や、娘ぞ家のしん齋橋、女夫の間は烏鵲や、笠やお龜は夕べより、寢られぬ目元落凹み、思ひ染みたる身の大事、中よき下女にも語らねば、たれも斯とは白無垢を、仕立る縫目大針に、二度と著まいと思ふにも、涙先立つ折柄に、町内の娘友達二三人、「お龜樣内にかゐ。今日は五月の十七日、とふからの約束三十三番連立ませふ。サアこしらへさんせ、出さしやんせ」と、何の氣もなく誘ひける。觀音樣と聞くからに、未來の緣も嬉しけれど、龜「父樣も留守なり、これも仕立て仕廻たし。今日は連になりますまい。よふ拜んでや」といひければ、甲友「夏白無垢が入事か。詣らしやれ」と云ふもあり。乙「よしかをかしやんせ。ゐまのおじやつて見やつたら、留守明たとて喧ましからふ」丙「ほんにお龜樣も能い姑母を持んした。こちらばかり廻りませふ。與兵衞樣とこな樣と、一つ蓮と拜みませふ」と、云ふて出るも常なれど、思ひあれば身

ひがやす―尫弱

くゐ出つ―出たり這入つたり

よく〳〵見れば紛ひもなき、我方への讓狀、與「ハァヽ南無三寶、扨は傳三郎めが賢人面を見せかけて、我を取ておとさん僞、裏の裏を喰はせしを、知らではまりし悔しさよ。詐られし口惜や」と、齒嚙をなして泣き居たり。長兵衛も怒りの淚、「こりや卑怯者、人な恨みそ皆おのれが誤りぞや。母なき娘が大事に思ふ聟が、何とて憎からん。皆根性のひがみから、親にも恨み出來るぞ。恨めしの心や」と、讓狀を與兵衛が面に、打付どうど伏し、大聲上て泣きければ、妾はいきつて「咎もない傳三郎に、云被せしやるな」と哮りかゝつて怒りける。娘は我親我夫、中に立たる遣瀨なさ、傍で泣くやらわめくやら、往來も止まるばかりなり。神子町中がおり合せ、「人がたかる何事ぞ。早々通りや」と叱りける。「アヽ御尤々々。御町の妨害御免あれ。サア汝在所へ駕で送らせん」と、ひがやすな與兵衛を引立駕に押込めば、與「何の面目在所へはゆくまい」と、駕の左へつゝと拔けた。親も續いてつゝとぬけ、又引捕へて乘せれは拔る、親子くる〳〵出つ入つ、どこぞのはづみに長兵衛、駕をぬけるを町人ども「エヽ面倒な」と押込て、駕舁上れば長兵衛、「ヤァこりや違ふた〳〵」と、わめけど更にきゝいれず、大坂の方へ舁て行く。お龜は歎き焦れしを、下女や手代が手を引て、なだめ歸れど立歸り、止まり見歸り呼懸

汝と思へども―憩い奴と思へども

行事―組合の幹事

三ッ鐵輪―一人を諸に取て二人にて論じ定むる（俚言集覽）

いらん―違亂か

天道が怖ろしさに、知らせまするど告し故、後日の證據に取たるぞ。おのれはおのれと思へ共然り迚は親仁樣、可愛ひ娘のをとこなり、甥子とは申さぬか。左樣はなされぬ筈なり」と、聲を上げて泣きければ、お龜は傍にひつ添て、「母樣生世の折ならば、あれらに口を利かせふか。母樣は此世になし、伯母樣といへば目は見へず、夫婦は誰を便りにせん」と、口說き歎くぞ哀れ成。長兵衛眉をひそめ、「是は夢々覺えなし。おのれを町へひろめして、直に出した讓狀、身が目を塞がぬ其内は、年寄行事も封を切らぬ書置を、傳三が知らふ筈がない。讓狀を奪ひ取て、親に難題いひ懸、るま兄弟に無實をいひ、大坂に置ぬ公事工み、おのれ獨りが智惠でない。サア讓狀が物をいふ。三ッ鐵輪で讀んで見よ」と、懷中へむさぼりつく。與「いやこれ親仁樣、でんどでひらく讓狀、後の證據に封も解ず持たれば、こなたの手へ渡そうか。權柄になさるゝな」と、もぎ放せばこづかを取、引伏せ〳〵踏んづ叩いつ、散々に打擲し引起いて讓狀、奪ひ取たる有樣は、目も當られぬ次第なり。「ヲヽ成程身が判、封の儘只今披く是聞け」と封を解いてぞ讀みたりける。「北久太郎町心齋橋表口五間半、裏ゆき町並貳十間家財殘らず、娘お龜聟與兵衛夫婦に讓り申候。外よりいらん少しもなし如件」「これ見よ」と與兵衛が目に差付るを、

けつかる―居くさる

せいすい―生粋潔白な

肬―慾張

ふせう―不請

一本―一つ穴の狐

工か。日ごろは此所な女子と、いひごと小言が絶ね共、五分々々に聞て居た。彼奴が悪いに極まつた。河内の親に言渡し、直に埒を明んため、來ればあれで見付たが、此邊へは來せぬか」と、うそ〳〵見廻し神子の門、父「こりや爰にけつかる」と引出せば、與兵衛は、被き菅笠身に纒ひ、うろ〳〵出し其風情、お龜はわつと泣出す、笑止千萬哀れなり。妾笑つて「是與兵衛様、此せいすいな私を、鵰の熊手の摑みづらのと異名をつけ、八丁まちへ名を立て、ヲヽ心の直な跡取様、斯した事をなされても、是でも家が立ますか。コレ與兵衛様やあ與兵衛殿様」とぞ喚きける。與兵衛は指うつぶひてゐたりしが、顔を上げて「是女かしましひ。エヽ恨めしい親仁様、あの家屋敷家財まで、私夫婦へ讓りの約束なれば、親子と存ずる故ふせうの事も堪忍し、心一ぱい働け共、何をするのもお氣に入らず、在所へ歸れ戻れとは、ヲヽ〳〵道理かな〳〵。家屋敷家財迄、ゐまが弟の傳三郎に、取らせると有讓狀、此與兵衛が聞てゐる。明日でも親仁様、若しもの事も有た時、町衆が立合讓狀を披いて、傳三郎に跡式取られ、此與兵衛がすご〳〵と、生て在所へ歸られふか。是誰が業ぞ其女めとの談合ならん。此事を某には、誰が知せたと思ふぞや。おのれが弟の傳三郎、今迄おのれら一本と思ひしに、奇特にも傳三めが、

半四郎—名優岩井半四郎
半九郎云々—二人の心中狂言傳奇作書に出づ
四郎五郎—右の敵役
ぴらしやらーぶらく
ほたへ—ふざける
會所—町の役場
年寄—町長

じや」と語りける。龜「はて見付られたら大事か。恨みも腹の立事も、私にめんじて下さんせ。昨日は私が氣晴しとて、父様と、半四郎の心中狂言見たれ共、餘の事は耳へもいらず、半九郎お染が最期の臺詞、此方の胸に皆堪へ、二人死ぬなら死にたいが、こな様死んで下さりよか、どうか斯かと思ふて居て、四郎五郎が不心中、面白いとて笑へ共、私や一日泣てゐた。泣てばつかり居たはいの」と、袂に取付聲をあげ、十五に成やならずにて、夫を思ふ眞實の、歎きの涙ぞ奇特なる。與「あれあれへ見ゆるは親仁じやないか。葛籠笠はゐまめじやは。逢ふてやかまし、こゝ御免」と、神子の門にぞ隱れける。親長兵衛は手代を連れ、大汗流ひて來りしが、ゐま大聲上げて「ヤア是はお龜樣、廿二社廻りとてあぢな所へ來てござんす。如何に男を持たとて、若いなりしてぴらしやらと、あんまりほたへさつしやるな」と、嚙付樣に夕立の、鳴る雷の如くなり。お龜ははつと怖ろしく、「今日の次手に母樣の、十三年忌の口寄せに、ちよつと寄たまでの事。して父様はあの人連て何方へ」といひければ、父「チヽされば與兵衛めが、在所へは戻らいで、町の會所の帳箱に、入納めた讓り狀。身が使ひと詐つて、取て行んだと年寄から、斷りが云ふて來た。彼奴に讓る讓狀、取て何に成事ぞ。家を棒に振りをるか、但はどふぞ公事

しぢ—榻、深草少將が小町の許へ通ひし故事

しやうど—目當、生處と書く（松屋筆記）

有頂天王寺—有頂天にかけてうけの空

かま—鎌、曲つた心をいふ

懐かしく、人目忍びて門に立、軒の下成長持に、そつと隠れて折々は、若も二階の格子から顔も見へるか聲するかと、蓋を明方近づけば、立出歸り夜毎には、猶しも思ひ深草のしぢに通ひし車長持、巡り逢たや語りたや」語るに盡きぬ生口も今は是迄梓弓、龜「引ては歸る習ひなり共、暫しが程と、せめて留むる甲斐もがな」與「甲斐こそなけれ縁あらば」龜「あふも不思議」與「あはぬも不思議」二人「逢ずは何を玉の緒も絶へなば絶へね」と伏沈み、死したる人に逢ふ如く名殘を包む涙の袖、寄り來るよりの生口は、神上りして醒にけり。親の異見は直なれど、傍のとりなし横時雨、どこをしやうどにさして行笠屋與兵衛は在所へも、面目なしと戻り兼、心は有頂天王寺、御子町に迷ひ來りしが、お龜は神子に一禮して立出る門口に、下女が見付て「あれ與兵衛様」龜「どれどこに」與「是はお龜か」龜「與兵衛様かあんまり便宜もない故に、生口寄せに來ましたが、なぜに戻つて下されぬ。おりやどふならふと構はぬ氣か」と、縋り付てぞ泣居たる。與「ヲヽ、おれ迚も和女に心が引されて、在所へも爲歸らず、大坂中を立迷ふ雲介同前の身持となり、今日は河内へ行ふかと小堀口迄行たれば、親父とかまのゐまめとが、是も在所へ行風で、跡から來たをちらりと見て、やう〳〵逃て戻つたが、おれを見たか知らぬまで。怖い事

郎
ゆひ立―結ふといふにかく
牛は斷き云々―反對の所爲
左繩―不運
ゆひ甲斐云々―結ふと埒明かぬ身にかく
ちやかさる―胡臕化さる

ふても氣に入らず。牛は斷き馬はほへ、理は非に落る左繩、ゆひ甲斐もない身なれ共、在所に歷きと親も有、敷金してあの下司めに、使はれふ筈はない。エヽ口惜いはいの、腹が立はいの。舅の家を出るからは下司めたつた一打に、仕廻ふてのけふか、いや出所へ連て出て、首に繩を掛ふかと、樣々思案は仕たれ共、家の名を出す夫のみか、和女と緣が切ふかと、是が第一悲うて情ないやら無念なやら、弦なき弓に羽拔鳥、立もたよれず、居るも居られぬ家の內、和女に心引かされて、破れ暦にあらね共、あだな月日を數へたよなふ。粉糠三合有ならば、入聟すなといふ事は、我身の上の譬かや。十貫目と云ふ敷金を、あの女めにちやかさりよかと、涙が翻れて口惜いはいなふ」龜「おいとしや〳〵、あのゐまめと云ふ奴を出入も止ふと思へ共、母樣の存生よりゐたる者の事なれば、なま若い私が身で、出過た事と控へしが、此秋は母樣の、十三年忌も仕廻まし、ふつゝと出入をやめさせん。して此間五七日は河內へ歸りて御入かや。そよとの便もない事は、扨は我にも秋風かや」與「アヽ何しに和女に秋風の、立田の山の初紅葉、古鄕へは錦を著て歸ると申。今すご〳〵と此姿何とて在所へ歸られん。晝は生玉天王寺、天滿小橋に河口を、終日步む時もあり、或ひは芝居で日を暮し、旅店に命を養ひて、暮れば和女が

破れ車—人はわるない我身が悪い破車でわが悪い—諸國盆踊唱歌」

扇の影云々—諺、一方立てば一方立ず

茨草—繼母ある事をさす

阿吽—呼吸

額に墨—墨は角

にはだから—下女下男の生みし子

女めが弟—傳三

ふしの双股竹、與兵衛を夫と思へばこそ問ふて給つて嬉しやの、問はれて今の恥かしや。扨世の中の憂節はなふ、わが善に人の悪きがあらばこそ、破れ車でわが悪い、とは云ひながら扇の影の立烏帽子、舅といひ元は伯父、跡嗣の約束なれば、今では親子じやないかいの。何しに粗略にする物ぞ。在所の生の親達より、猶孝行を盡せ共、丸い苧桶に角の蓋心が合ねば是非もなし。恨みも仇も外になし、憎いも辛いも只獨り。おもきが上の小夜衣よなふ」龜「恨ありとは私が事か、おの様の女房よ。仕方の悪い事あらば、なぜ殺しなりともなされずして、何か恨の有ぞとよ」與「ヲヽ二世と契りて最愛いもの、和女に恨の有べきか。小夜衣とは親ならぬ、親の手かけの茨草、目をつく様に家の内を立ふと伏せふと儘にして、陰言中言さゝへ口、立てはふすべ居ては譏り、何がな見出そふ聞出そふ、目に角立る仁王貌。物には阿吽有故に、道具中間の商賣に、損もする又徳も取、搖れば落る木の葉の露、我身にかゝる商賣の、夫におろかの有べきか。又しては〱、道樂者でのら者で、在所へ戻せ去せとて額に墨も入たもの、丁稚小者を云ふ如く、内の手代やにはだからの、侮づり者になし果て、あの女めが弟を、内へ入ふといふたくみ。町内からも小柴垣、ゆひ立れ共世の中の、藥の灸は身にあつく、毒な酒は甘ひとや、何をい

をも語りしは、黒格子の辻とかや。上手と聞し神子の門、龜「あゝ申、少口寄せを頼みませふ」とぞ案内ける。弟子の小女郎心得て、「お通りなされ」と戸を明れば、お龜は一間に入にけり。暫らく有て立出る、神子もよつぼど見へるもの。「ア、能ふお出なされました。大坂のお衆で御座りますか。お供の爰へ上つて、先あをいで上さつしやれ。お茶持おじやや」と待遇は、あいくろがうしの若神子の、口と口ともよせまほし。「して先御用の事有とは、生口か死口か」といへば、龜「いや然ればとよ、頼み度きとは生口なるが、海山隔てし方でもなし。只二三里の道を越へ、五日六日の便りもなし。どうがな斷がなく〳〵と、案じ詫たる御身の程、寄せてたべ」とぞ仰せける。神子は合掌目を塞ぎ、数珠をくりひく梓弓、神下しして寄せにける。「天清淨地清淨、内外清淨六根清淨、天の神地の神家の内には井の神、庭の神かまの神、神の數は八百萬、過去の佛未來の佛、彌陀藥師彌勒阿閦、觀音勢至普賢菩薩智恵文珠、三國傳來佛法流布聖德太子の御本地は、靈山淨土三界の教主世尊の御事なり」此御教への梓弓釋迦の子神子が弦音に、引かれ誘はれ寄來り、與「逢た見たさに寄り來たよ。なふなつかしの合の枕や」龜「我懷かしとは覺束なみの、寄來る人は誰ぞいの」與「誰とて二人思ふ身か、一ツね

黒格子―林町に住る巫子の名、色々ある内黒格子名高し（皇都午睡）

口寄―死人の魂を呼びて語らしむる巫女

あいくろかうし―愛くるしにかく

口と口云々―口寄と接吻

梓弓―人を寄する時箱の上に珠數と弓を置きて夫を神に代つて鳴す

天清淨云々―祈の詞

一つ根節―お龜夫婦はいとこなる故

とりなり—姿勢

南東云々—南の牛頭は十四番にて東のは十五番なり

神は見通し—神は言はずとも人の誠を見通す

登ればさつさ—、若綠卷四心すゞしの唄をとれり

唐土人—王仁

中よい月—月は少女にても龜を仄めかす之は若綠卷四照る月の唄をとりたり

身になし—親身の友にする

吹きたまる、歌身も冷々と心よき肌を締させ、しめて囉はゞ此方からも、じつとしめ〳〵、空も濕りて五月雨の、雲のすゞしの帷子の、衣紋繕ひとりなり直し．鬢掻撫る差櫛の、蒔繪に似たる松原は、(十二)安井の天神是ぞとよ。天王寺には(十三)十五社の、鎭守を一社と伏拜み、扨十四番十五番、南東の門前の、牛頭天王に我願ひ、幾つとはなき(十六)生玉の、玉の光りの透通り、神は見通し云はず共、心の底の貝ひとつ、夫を頼みに北向の、(十七)八幡宮の御盟ひ。世々に(十八)高津の坂道を、歌登ればさつさ、下ればさつさ、さつさ三六十八番、爰も難波の大君を、唐土人の褒め詞、咲や此花今はとて、梢も青き夏木立、西を遙かに百舟の、入江の秋の海面に、沖津白浪さばけて忍べ、碎けて遊べ中よい月に戯れ遊べゑい〳〵。遊べゑい〳〵、ゑい〳〵〳〵、照る〳〵月、月てる〳〵、君と寢たらば何とよござるまいかの、照る〳〵月、月や月讀の、(十九)旭の神明額きて、あをのく顔に當る日を、袖でかざしの(廿)玉造、稻荷の宮居こゝもまた、伊勢の内外の(廿一)内平の町、太神宮よといろ〳〵の、諸願の種を上町の、(廿二)座摩の御旅に廿二社、拜み納むる袖神樂、少女子ならぬ御子町に、問ふべき占のあればとて、まだ日の足も南へと、駕の息杖息つがず、走らせてこそ三重急ぎけれ。幼き時より氣に入りて、幾春秋をふりと云ふ年季の下女を身になして、かくす事

の川苗代水にせき下せ天下ります神ならば神（能因法師）
絲屋の小絲ー本町二丁目の絲屋の娘姉は十六妹は十四云々の作替
廿五日ー天滿の縁日
こりや堀川ーコリヤホリヤとかく
此神明ー西天滿にあり
己は夫をー御龜は情死を
しんしよー身代
樣々ー座摩の社にかく
手鞠の曲ー手鞠の數よむ唄松の落葉三卷にあり

神の君が代を聞も語るも有難き、蝦夷か千島や朝鮮國、琉球筵敷島の、此日の本の外迄も、御威光四方に飛梅の、(二)天滿の社に手習子共、書て上たる龍虎梅竹。糸屋の小糸、姉は十三妹は十二、殿御欲さに宿願かけてゐ、月の參りは廿五日、やつさ、ありやそりや、(三)こりや堀川の惠比壽殿。(四)北野は天滿と御一躰、荒人神と音高く、とどろ〳〵と鳴神もよもや破らじ、よもや裂じの幼な馴染の女夫合、(五)此神明に祈らばや。扨六番は曾根崎の、宮の木立といつごろよりか、なたてがましき天滿屋お初、他所に聞さへ身に蜆川、水の流れの勤めの憂身、どうで女房にやもたれぬ中の、死ぬる生るは愚の沙汰よ。己は夫れをと願ふじやないが、男故なら命もしんしよも取てゆけ。どこらへの、こゝらでの、お手を引あふて二人のかばね、爰に梅田のナ橋に寢てサ、夢を津村の(七)新御りやう、人の祈(八)りは樣々の、大明神や其次は、(九)仁德帝の宮所、拜み巡りて十番に、數も願ひもみつ寺の(十)正八幡に早つきぬ。道頓堀の糸竹や、太鼓の聲にひかされて、心も足もしやならしやなら、ちよつと立見の手鞠の曲は、歌ひいふうみい、よういつむなゝ八よころ〳〵、とんとはづむも可愛らし。明日も來うぞの歌惠比壽橋や。惠比壽橋越へて、見たや見せたや難波ア橋。(十一)難波の今宮是からは、野道の風の冷しさに、笠も帽子もはれ〴〵と、兩の袂に

古き都云々―大阪の廿二社なり本文に番號を附したり
戀と云ふ其根源―神社の事より筆を起して男女の戀も諾冊の二神より起ると也
曲輪樣―兵庫髷
縫箔云々―縫物の小袖は今流行らぬとて白人の姿をする
風呂の煙云々―風呂屋の湯女の風にも似せる
ふるかく―古格
水離せぬ―龜の縁にて親の側を離れぬ義
苗代水云々―天

與兵衛おかめ ひぢりめん卯月の紅葉

近松門左衛門作

廿二社巡り

古き都や浪速潟々々、廿二社詣で急がん。戀といふ其根源を尋ぬれば、神と神とが肌觸て、抱寄せ給ひし腹帶の、解てほどけて世に溢れ、產弘めにし人種の、次第々々に孫嗣て、色の道には發明な、町の小娘若嫁の、眞似る芝居の女形、髮の結ぶり小利口に、ひつくる〱〱曲輪樣、今は向ぬと縫箔の、夫にはあらぬ白のふう、風呂の煙りのたち居迄、姿似せれば心も倶に、染る紫縮緬の、小皺のよりし姥嗅迄、情こめたる此時代、年經て爰に石上、古道具屋のふるかくな、堅ぢの父の親の手を、水離れせぬお龜とは、一人娘の命をば、萬代祝ふ名なるべし。正五九月の神參り、殊に此ごろ我親と初元結の我夫、聟と舅の挨拶の、中に節たつ早苗月、皐月の雨は神心、夫の身の上安穩に、田畠を濕す其如く、苗代水に堰かけて、惠めや、(一)あまの川崎の、大權現を伏拜む。此御

會所―町の役所

ちやんぎり―山鉾の囃によそへていへり

けん、其身は然のみ働かず、打懸れば追拂ひ、二三度揉せて是迄と、射る矢の如くつゝと入、弓手の肩先馬手のさがりに、ざんぶと切て打落せば、いぬるにどうとぞ臥たりける。文六やがて飛懸り、「母の敵」と切つくる。「藤が爲には姊の敵、受取れ」と丁ど打ち、同じくゆらは「兄嫁の敵恨の刀」とはたと切。四人一所に乘掛つて、一度に止めを刺たるハ前代未聞のふるまひなり。壹町集り捧突竝べ、「敵討とは申ながら町内の念の爲、腰の物を預て有無の御下知有迄は、外へは落し申されず。會所へ取て押込よ」と、四人の男女打圍い徐づ〳〵と歩み行、見事さ立派さ心地よさ、世上にぱつと囃し立、言渡したる山鉾の、ちやんぎりしつきり切つたりや、討たり敵妻敵討、咄の通りまつすぐに、いへば云はるゝ舌三寸の、操りの御評判とぞ成にける。

ちたる窓（嬉遊笑覧）
もの〳〵しや—小癪な
枕箱—用捨箱に客の設などにや枕五つ宛を重ね箱に入れたるものとある是也
辻の門—町の境の門
尾垂—庇を關西にてかく呼ぶ（物類稱呼）
聊爾—粗忽

らば突んといふまゝに、眞下しにぞ突かけたる。彦九郎冷笑ひ「何んの己れが鼠突、鼓の胴こそ握る共、鎗の柄握る習ひは知らじ。身の好たる細工鎗、手並を見よ」と、蛭巻よりかつしと切てぞ落しける。源「もの〳〵しや」と腕の力、碁盤片手に振上て、「こりや我は固より武士ならず、鎗持すべは知らねども鼓のお蔭でうつこと覺へた。此碁盤請て見よ」と狙ひすましてはたとうち、双六盤將棊盤とつては投げ〳〵、後には火入烟草盆、風呂釜茶碗枕箱、ぐはらりとうちあけ手に觸るを、ばらり〳〵と投たるは唯降雨の如くにて、寄べきやうもなき所に、妹のおゆら表へ廻り、辻の門に手を懸て柱を傳ひ貫木ふまへ、をだれより這上つて拔打に丁ど切る。源右衛門詮方なく四尺屛風を倒しかけ、上よりとつて押ゆれば刎返さんと挑みあひ、終に脇指捥取たり。其隙に彦九郎、階子を上つて「餘さじ」と、追立々〳〵切結ぶ。手ひどくなれば叶はじと大道へこそ飛だりけれ。追續てひらりと飛、橋の上迄切出る、四丁町より「すは喧嘩」と東西の門を打チ、擲き殺せと聚まつたり。貳人の女房大音上、「訴へ申た敵討、外の人にはかまいなし。聊爾をするな」と聲をかけ、門の左右につゝ立けり。二人は爰を大事ぞと息休めては打合せ、命限りに火を散し、花を亂して切合しが、然共彦九郎侍の身で、町人を見苦しとや思ひ

とはどふ行ぞ。室町とはどちらへ行。北か西か」と追取刀我劣らじとぞ走りける。彥「サア此方の謀畧當らずと云事なく、運のさかり刻限先勝の時至れり」と、衣脫捨ふはと捨親子の脇指兩人の、女に渡せば心得て鍔打ならしぼつこんで、鉢巻りゝしく抱へ帶からげし膝口しろ〳〵と、小足を踏んで立たるは男優りといひつべし。「南無正八幡大菩薩神力威力を添へ給へ」と、心中に祈念して二人の女は堀川口、親子は立賣西東へ立ち別るゝと見へけるが、中戶障子を蹴破てばら〳〵と駈入たり。思懸けなき家內には下女も下人も「あゝ怖や」と、裏口さして迯出る。「あれこそ宮地源右衞門」と、お藤に聲をかけられて、安閑たる源右衞門、立上つて二階階子、中ば上つて腰打かけ、拳を握り左右を睨んで控へしに、隙間もあらせず二人の女兩方に引そふたり。彥九郎大音あげ「我こそ小倉彥九郞。妻女種と不義の段露顯によつて、女は先月廿七日に刺殺す。妻敵やらぬ」と聲を掛、拔打にはたと切る。「さしつたり」と足をあげ、階子に手をかけ「ゑいやつ」と、二階へ上るを追縋い上らんとせし所を、源右衞門が女房、かけたる長刀おつとりのべ、上はたてじと切結ぶ。下人共は物合より、捍棒杖よ箒木よと、支ゆるもかせと成、ためらふ內に源右衞門むしこより手を出し、軒に立たる鎗おつ取、上り口よりさし下しに上

先勝の時―我が先を制して勝つべき時

中ば―半

さしつたり―心得たり

かせ―枷にて妨

むしこ―蟲籠にて細かに子を打

つらり—まんべんなく
讀やつたと—堀川波鼓に此下に「て」文字あり
編笠召云々—此下原本不明堀川波鼓によつて補ひたり

今度禮に御座つたが、旦那樣へ銀十枚、内義樣へ壹歩五ツ、私等までつらりと三百宛あたたまつた。汝身の一日朝から晩まで咽喉の穴の痛い程、觀音經を讀やつたと三百は貰やるまい。さらりと經を取おいて手鼓なりとも拍たがよい。今からでも鼓を拍や」と、問はず語りの口早に、云捨て内に駈入ける。彦九郎打頷き、「樣子は聞たり今からでも、鼓をうてとは吉左右よし」と、皆々囁き勇みける。時を移さず客人は上下脱で脇指計、編笠被ぎ只壹人傍りを忍ぶ風情にて、立賣を東へ洞院南へ下りける。人々一所にこぞり聚り、是はきつと推量するに、只今の侍が下人共を殘し置、表に鎗も置ながら其身は是にゐる體で、祇園會の山鉾を見に行と覺へたり。七八人の下人共留つて有からは、中々容易く討れ難し。如何はせんととり〳〵に小聲に成て談合す。文六こらへぬ若者の、「斯樣に云ふてはいつ迄も本望遂る時節はあらじ。下郎共あらばあれ、めざす敵は只壹人、助太刀あらば撫切のそれからは運次第。いで切入ん」と駈出る。「やれ待て思案できたり」と、押靜めて彦九郎又門に立暖簾あげ、「是申頼みませう、先程是より編笠召てお出でなされた殿達は、山鉾見にがなお出ならん。三條上る室町で、喧嘩しだして大勢に取巻れてござります。お知せ申」と呼はりける。是はしたりと下人共はら〳〵と駈出て「三條

きごつなげ―無愛想

妙法蓮云々―法華經第廿五普門品の初の句

うらどひ―探り問ふ

よ」と、云ふ内に以前の下人立出て、「是へ」といへる氣色にて主人内へ入ければ、若黨中間草履取鎗を軒端に立懸て、皆々内に入けるは事緩かに見へてけり。外より樣子を窺はんと立寄り見れ共中戸を閉め、人音計聞へし所に、托鉢の道心者「はつち〳〵」と門に立。下女の聲して「忙がしい通りや」ときごつなげにも高聲なり。すご〳〵通る法師を呼かけ、彥「是々御坊、御身が衣の破れまはつて見苦しさよ。此金子を報謝する、新らしいを買ふて夫を是に脫でいきや。非人にとらせ喜ばせん」と小判壹兩與ふれば、夢かと思ふ貌つきにて、「アヽ是は如來樣」と頂き〳〵伏拜み、「夫なら御意に任せませう」と古著は脫でぞ通りける。彥九郞打頷ひ辻なる門の片蔭にて、頭巾引込阿彌陀笠、上に衣を引張て暖簾のつまよりさし覗き、豫て覺し普門品、本望遂る身の祈禱。案内檢見の便りとも力を添へて只賴め、「妙法蓮華經觀世音菩薩。普門品第廿五。爾時無盡意菩薩。卽從座起偏袒右肩合掌向佛。而作是言。世尊觀世音菩薩。以何因緣名觀世音菩薩」「エヽ喧ましい默りや。遣ふ」と走り出る、下女が手の内うらどふて、彥「中女郞樣、早々からの御客そうな、誰樣で御座る」と問ひにける。いづれ下部の口まめに、「あれは田舍の御侍、これの旦那殿の鼓の弟子。お國の殿樣から鼓故に御加增があつたげな。是も師匠の御蔭じやてゝ、

つらり—きんぺんなく

讀やつたと—堀川波鼓に此下に「て」文字あり

編笠召云々—此下原本不明堀川波鼓によつて補ひたり

今度禮に御座つたが、旦那樣へ銀十枚、內義樣へ壹步五ツ、私等までつらりと三百宛あたたまつた。汝身の一日朝から晚まで咽喉の穴の痛い程、觀音經を讀やつたと三百は貰やるまい。さらりと經を取おいて手鼓なりとも拍たがよい。今からでも鼓を拍や」と、問はず語りの口早に、云捨て內に駈入ける。彥九郎打頷き、「樣子は聞たり今からでも、鼓をうてとは吉左右よし」と、皆々咡き勇みける。時を移さず客人は上下脫で脇指計、編笠被ぎ只壹人傍りを忍ぶ風情にて、立賣を東へ洞院南へ下りける。人々一所にこぞり聚り、是はきつと推量するに、只今の侍が下人共を殘し置、表に鎗も置ながら其身は是にゐる體で、祇園會の山鋒を見に行と覺へたり。七八人の下人共留つて有からは、中々容易く討れ難し。如何はせんととり〳〵に小聲に成て談合す。文六こらへぬ若者の、「斯樣に云ふてはいつ迄も本望遂る時節はあらじ。下郎共あらばあれ、めざす敵は只壹人、助太刀あらば撫切のそれからは運次第。いで切入ん」と駈出る。「やれ待て思案できたり」と、押靜めて彥九郎又門に立暖簾あげ、「是申賴みませう、先程是より編笠召てお出でなされた殿達は、山鋒見にがなお出ならん。三條上る室町で、喧嘩しだして大勢に取卷れてござります。お知せ申」と呼はりける。是はしたりと下人共はら〳〵と駈出て「三條

きごつなげ―無愛想

妙法蓮云々―法華經第廿五普門品の初の句

うらどひ―探り問ふ

よ」と、云ふ内に以前の下人立出て、「是へ」といへる氣色にて主人内へ入ければ、若黨中間草履取鎗を軒端に立懸て、皆々内に入けるは事緩かに見へてけり。外より様子を窺はんと立寄り見れ共中戸を閉め、人音計聞へし所に、托鉢の道心者「はつち〳〵」と門に立。下女の聲して「忙がしい通りや」ときごつなげにも高聲なり。すご〳〵通る法師を呼かけ、彥「是々御坊、御身が衣の破れまはつて見苦しさよ。此金子を報謝する、新らしいを買ふて夫を是に脫でいきや。非人にとらせ喜ばせん」と小判壹兩與ふれば、夢かと思ふ貞つきにて、「ア丶是は如來樣」と頂き〳〵伏拜み、「夫なら御意に任せませう」と古著は脫でぞ通りける。彥九郎打頷ひ辻なる門の片蔭にて、頭巾引込阿彌陀笠、上に衣を引張て暖簾のつまよりさし覗き、豫て覺し普門品、本望遂る身の祈禱。案内檢見の便りとも力を添へて只賴め、「妙法蓮華經觀世音菩薩。普門品第廿五。爾時無盡意菩薩。卽從座起偏袒右肩合掌向佛。而作是言。世尊觀世音菩薩。以何因緣名觀世音菩薩」「エ丶喧ましい默りや。遣ふ」と走り出る、下女が手の内うらどふて、彥「申女郎樣、早々からの御客そうな、誰樣で御座る」と問ひにける。いづれ下部の口まめに、「あれは田舍の御侍、これの旦那殿の鼓の弟子。お國の殿樣から鼓故に御加增があつたげな。是も師匠の御蔭じやてゝ、

破軍—運が直つたの義、破軍星は北斗七星の第七星其に向つて進むを凶なりとす

茶宇—舶來絹

緩—麻絲を縒つて作れる目の荒き織物

十枚のり云々—銀十枚と書いた包紙を糊にて貼つた臺（貞丈雜記）

先を折る—妨げる

で客に行たらば祇園祭ではなふて、軍神の血祭じや」と笑ひてこそは別れけれ。四人嬉しき辻占の、「今のを聞たか」「聞ました」「サア破軍がなおつた仕濟した」と、そゞろに笑ふて勇みをなす、心底思ひやられたり。彥「いざ此運に乘て討たん時刻延すな用意せよ」と、帶締直し身を輕め、內の勝手を知らざれば、爰にて談合無益の沙汰。女二人は堀川おもて、小見世に上つて障子蹴破りつゝといれ。我々親子は立賣の門口より、中戶を蹴破り込入べし。面體を見知ぬぞ、人違へさするな。神妙に意趣を述、物の見事に討たんずる。はやまつて欺し討、卑怯などと云わするな。合點か「合點じや」彥「心得たか」「心得た」「サア込入ん」と突立所へ、あれ見たか、油の小路を此方へさし、らうそく鞘の鎗印、知行ならば三百石、廿餘りの若侍、茶宇の袴にもじ肩衣、若黨三人挾箱、對の奴草履取、十枚のりの付紙臺、足打ち早め敵の門、「物もう」と云ふもなまり聲、內より下人が「どれい」と答へ、溝端につくばへば、何かは聞えず漸暫し、頭をふり廻つて口上のべて進上臺を差出せば、下人は受取腰屈めそのまゝ內に入にける。文六天窓をかいて、「エヽ拍子に乘たる先を折る。如何はせん」ともがきしを、彥「いやく屈する事なかれ。屋敷方か御所方か、囃子を勸めし禮物と見請たり。返事を聞て返るぶん、隙はいるまじ待て見

追連て、連を呼さへおなじ名の、「お藤や、今日はあきなひ早しまふて、祭りに行ふと氣が急て馬に沓さへ打なんだ」藤「ア、然れば同じ事。今朝は少し寢過して、こちらも沓を打ずに來た。誰も今日は皆打れぬ。いつそ打ずに此分で、とつとゝ引て歸りやいの」とどつと笑ふて通りける。京童の口ずさみ、家々ごとに朝もよひ、萬に心もみ瓜を、刻む音さへ比叡の山、峰に響くと傳へたる、洛中の今朝のあながまと、心亂るゝ計なり。中にも藤は小聲になり、「いづれも何と思召す。最前の豆腐屋がきらず〳〵と賣たるさへ、心に懸る其上今の石賣噂共が、馬の沓が打れぬ打ずに引て歸れとは、如何にしても氣懸りなり。其上世間に同じ名の、あるは習ひといひながら、折しも惡ふ壹人おばお藤と呼んだは何事ぞ。味方の心後れては仕損ずるは定のもの。天道よりの御報せ、又翌日の日も有ものを、今日は延引せまいか」と、いへば皆二の足にぞ成にける。斯る所へ西橋詰の髮結床より、さばき髮の若い者楊枝くはへて來りしが、友と覺しく行逢たり、友「ヤア是は早々から髮も結ずに何處へ」と云ふ、捌髮「然れば〳〵、祭に行今日のはれ、月代剃せにいつたれば、扨も切たは〳〵。あら髮剃の刃は劍、天窓うちを切ちやょくつた。彼奴が手に懸ては幾人でも切そうな。是を見よ」といひければ、友「ハァ、切たり〳〵。是

あり
祇園會―圓融院天延三年五月祭禮之始也（雍州府志）
長刀鉾―山車の上の鉾
鷄鉾―山車の鉾頭に日の丸ありて鷄卵を象る
力紙―膝頭の下にあつる紙かひ〴〵しく出立つ時に用ふ
かゝる―懸ると斯る
きらず―豆腐の粕、斬らずと音通
あながま―ア、やかまし
壹人おば―一人をば
ちやゝくつた―堀川波鼓に「ちや〳〵くつた」

川波鼓にて補ひたり次の「さほど」より「諸共に」迄も同じ

三人「敵を見捨ておかれうか。然りとては連てたべ」と、三人一所に手を合せ、聲をあげて泣ければ、夫も今はつゝみかね、勇めるかんばせ悄々と、「さほど母姉兄嫁を、大切に思ふ程ならば、など最前に衣をきせ、尼にせん迚命をば、なぜに貰ふてはくれざりし」と、空しき體に抱付わつと叫び入ければ、殘る人々諸共に泪につれて立出る、物の哀や武士の身こそ 三重 仇成習なれ。

下の巻

寺御幸云々―京都の町名を東より西に順に數へたり寺町、西麩屋町、富小路、柳馬場町、堺町、東洞院、車屋町、烏丸、兩替町、室町、衣棚、新町、釜座、西洞院、小川町、油小路

五緒―御所車

下立賣―縮にかく、御所の西に

寺、御幸、麩屋、富、柳、堺町、相の東は玉しきの、御垣にかこふ五ッ緒の車、烏丸、兩が室、衣新釜西小川。油さめが井堀川の、岸の平砂を白波に、照せば今も夏の夜の、下立賣のほの〴〵明、六月七日祇園會の、長刀鉾の刃先に打かち時の 鶏 鉾と、門出を祝ふ力紙、拳を固め四ッ辻に、四人さまよひ立ち居たり。常さへ賑ふ上京の、折しも今日の祭客、下へ〳〵と朝霧の、ひまに門掃き打水の、斯る姿を咎むやと、西と東に行別れ立やすらへる折からに、豆腐商ふ商人の「きらすきらず」と聲高に、賣る辻占の耳に立、心後れと成やせん、南無三寶と橋詰に各々寄れば向ふより、白川石を商ひに賤の嶋らが馬

そでにして―餘所にして
切羽―鍔際の薄き金板
すゞどさ―鋭さ
番頭―武家一隊の番士の長
足弱―ゆら、藤をさす
それは餘りに云々―之より次の「泣ければ」迄本文にはなきを堀

れ持佛堂に火を灯せ。女立て持佛へ來れ」といひければ、女房泪を押拭ひ、「未來の末の後の世迄御憎しみの有べきに、持佛堂へ參れとは流石馴染の御情、いつの世にかは忘るべき。その御心を此年月、知ていとしき我夫を、そでにしての不義ではなし、夢見たやうな身の上の、間に憎い奴もあれど、いへば卑怯の未練の死。夫の刀の先するは如何とは存ずれ共、是は我身の云譯なり。免してくだされ是御覽ぜ」と、胸押開けば九寸五分膽さきに切羽迄、刺通してぞ居たりける。哀れ成ける覺悟なり。藤文六はあつと計涙は胸にせき來れど、しほれぬ主人の皃に恥ぢ齒をくいしばり歎きゐる。彦九郎刀を拔き、とつて引寄せぐつと刺し、返す刀に止めをさし、死骸おしやり刀を拭ひ、しづ〳〵仕廻て立たりし、武士の仕方のすゞどさよ。今朝脫捨し旅裝束、又おつとつて笠草鞋、刀追取「是文六、我は是より番頭へ訴へ、御暇申捨直に京都へ馳登り、女敵を討問、僕は足弱引連て、一門方へ立退」と云捨て出れば藤文六、ゆらも同じく引添て、倶に行んとせり合たり。彦九郎大の眼に角をたて、「町人風情壹人におのれらを召連て、此彦九郎に彌恥を與ふるか。壹人にても付來らば勘當なり」と怒りける。各々一度にわつと泣「それは餘りに情なし」藤「我等が爲には姉の敵」文「我爲には母の仇」ゆら「いや我爲にも兄嫁の」

身の錆刀―身から出た錆

中立云々―不義を取持つ人も同罪と也

しかけて―しかけは中途半端にして

息を閉たるその中に、無慙や種は心にも工まぬ不慮の悪縁の、身の錆刀夫の手で刃に掛るは覺悟の前、やがて逢んと永の留守辛抱盡せしかひもなく、去年發足の前の夜の枕が限りの枕とは、今殺さるゝ今迄も、思はざりしと思ふにも、今一度夫の皃見たやとは思へ共、涙にくれて目もあかず差俯向てぞ泣居たる。主人兩袖投出し、「妹ゆらが云分定て何れも聞つらん。女云譯ないかいやい。ムヽさこそ〳〵返答は有まじき。扨不義は中立同罪たり。藤は中立知らぬか」といへば、藤「アヽ愚なり彦九郎樣、中立をしる程ならば、かやうに恥を見るべきか」と又さめ〴〵とぞ泣居たる。彦「扨は下女めが中立ならん。其奴呼べ」と呼出せば、かち〳〵〳〵身はふるはし、「アヽ御勿躰なや私はなんにも存ませぬ。此間お種樣、人に隱して子墮藥を買てくれとおしやりまして、一貼を七分宛、三貼を貳匁壹分で買て參たばつかり。然りながら旦那樣のお聞なされたら、高ひ物を買たと叱られふかと思ふて、錢はしかけてやりました」と、何をいふやら譯もなし。彦九郎はつと愕き、「扨は懷胎したるか。やい文六、おのれ若年なれ共、是程家中の沙汰といひ、何として源右衞門疾に討ては捨ざるぞ」文「いや我等も今朝承り、家來共に申付かれが旅宿へ討手に遣し候へば、二三日以前に京都へ歸り候」といへば、彦「ムヽ是非に及ず。そ

たるむ―透ある
珍事―大事

門と密通して御家中此沙汰まつ最中。それ故土産に眞苧を遣はし氣を付ても、女敵をも得討ず、きかぬ貞する腰抜の彦九郎、其妹とは添ひ難し、と夫の政山三五平我に暇をくれられて、兄が腰が立たらば其時は立歸れ。元の如く夫婦にならんと離別して來つたり。是腰抜の兄御、我が夫に添せうか添せぬか。其方の一心一ツぞ」と長刀取のべ閃かし、たるまば切んず勢ひなり。彦九郎横手を打て、「ム丶是は珍事を聞物かな。其源右衛門とやらん音には聞ど面は見ず、遂に家内へ出入せず。證據や有」と問ひければ、ゆら「ヲヽ三五平程の者が證據をとらで云べきか。則傍輩磯邊床右衛門、氣色を見てとり見廻にもてなし、兩人忍び合たる夜の兩袖切て取たるが、御家中取沙汰有上は隱しても隱されず。いかに傍輩の念比とて直には此事知されず、と夫の三五平殿に注進ある。是御覽ぜ」と懐中より二人の袂を投出し、「是にも何と疑ひか」と色を違へて申ける。彦九郎取あげ見て、「男の袖は知らね共、女の衣裳に覺へ有。こりや妹、たつた今其方が恥辱を雪いで得させんず。此方へ來れ」と打連て座敷にこそは通りけれ。家内の上下是を聞き、鳴をひつそと靜めし時、主人少しも騷がず、「女房共來れ。世忰文六來れ」と詞少なに呼ければ、何れも「すはや大事ぞ」と、そろ〳〵夫の前に出頭を下げて居たりしは、身も冷渡り魂消、

そんをつぎ—そんは孫にて血統

後紐—幼少の時は帶の紐を後で結ぶ故

前世の云々—前世に作りし罪が毒酒となつて來れり

腕ぼし—腕節

しほらし—殊勝

て忘るなとの御詞が、骨にしみ肝に殘つて得忘れぬ。姉は父御のそんをつぎ、後紐から酒を吞。藤よ母に成代り異見をせよ、と其跡は早息ぎれの窶れ皃、身に付添て忘られず、朝夕位牌に向へ共此遺言をお經と思ひ、一遍づつは繰て見る、姉樣は早忘れてか。此世の妹に歎をかけ、來世に御座る母樣の、屍に苦患が掛るは」と、口說つ恨つ聲をあけ、伏沈みてぞ泣居たる。姉は詞も涙にむせび、「好みし酒も今思へば前世の業の毒の酒。無明の酒の醉さめて自害せんと思ひしが、夫の皃を今一度見たい〳〵と思ふより、今日と延翌日と暮世間に恥を晒す事、我身に悪魔の見入か」と、返らぬ愚痴の繰言に、兄弟すがり抱きあひ聲もおしまず歎たる、世に是非もなく哀なり。時に門外騷がしく、「口論有か先暫し」と、兄弟奥に入ければ彥九郎妹のゆらは、長刀をとりのべて兄彥九郎を追懸來り、「是兄樣、妹とは云ながら政山三五平と云ふ侍の妻なれば、義の立ぬ事あれば兄とても免されず。いかにいかに」と申ける。彥九郎はつたと睨み、「ヤアこざかしき女郎めが、兄彥九郎に向つて義の立ぬとは推參千萬。子細をぬかせぬかさずは長刀持たる腕ぼし共に　ねぢ折てくれんず」と、大きに怒つていひければ、ゆらから〳〵と笑ひ、「ヤアしほらしい腰拔殿、樣子を云ふて聞せ申さん。こなたの內義は鼓の師匠、京の宮地源右衞

下し藥―墮胎藥

嗜―愼み

ちうで讀む―暗誦する

買せられし下し藥はたが呑むぞ。人は知らぬ樣なれど、家中一ぱい是沙汰で、今も今とて方々から眞苧の土產に來りしも、彥九郎樣に報せの爲、贔負の方から氣を付に、來た物なりと私は見た。こなた一人で親兄弟、男の武士まで廢つた」と、聲を上て泣ければ、姉は兎角の詞もなく、「常の異見をきかざりし、酒が敵」とばかりにて、泣より外の事ぞなき。妹せき來る淚を抑へ、「なふ其悔みがもふ半年遲かつた。是妹が心の物思ひ、最早姉の名はすたる。切て命が助けたやと、とりぐ〵樣々思案して、彥九郎樣との緣切て、暇の狀さへ遣せなば、街道の眞中で產せても大事ない。命に障りはない筈とはかない女子の思案から、姉の男に執心と淫奔者に身をなしたも、姉樣計の孝行ならず、お果なされた母樣へ、孝行と思ふ故ぞとよ。おいとしや母樣の、御臨終の二日前、兩人を枕の右左、遺言のお詞をよもや忘れはなされまい。其方等二人は小いから女子の道を敎へ込、讀書縫針糸綿の、道もそれでは恥かゝず。第一女子の嗜は殿御もつてが大事ぞや。舅は親ぞ小舅は兄よ姉よと孝をなせ。外の男と差向ひ貞をもあげて見ぬものぞや。惣じて夫の留守の中男とあらば、召使一門他人おしなべて年寄若いの隔てなく、此嗜が惡ければ、四書五經をちうで讀む女子でも役に立ぬぞや。此遺言をそち達が、論語と思ふ

生爪—熟情を示す爲の所爲

たつてさゆる—強て支へる

念比—情を通ずる

私が夫婦になろと生爪放して入たる文。是が嘘か讀で見よ。ゑゝ憎や腹立」と、飛懸り髻を取つてくる〳〵と、手にからまいて膝に敷、「親にも子にも替じと思ふ、稚馴染の我夫、一年隔てし永の留守、月よ星よと待うけて、漸と今朝殿御の貌、見たぞ嬉しや來年までは、一ツに寢臥もせうものをと、悦ぶ矢先におのれめは、姉を去れの離別のとは、よふもいふた畜生面、生てをくも腹立や」と目鼻も別ず打叩く。彦「なふ是には云譯だんだん有。取押てたべ人々なふ。息も絕る」と叫ぶにぞ、人々「先云譯を御聞」とたつてさゆれば姉お種、「サアさあ云譯が立ぬからは此度は命を取。云譯あらばして見よ」と、とつて引立突退しは、斷り道理至極なり。妹苦しき息をつき、亂れし髮を搔撫々々涙をおさへ、「此云譯は姉樣と差向ひにいふ事ぞ。皆々次へ」と云ければ何れも立てぞ退にける。姉「ヤア子細らしうせず共云譯を聞ん」といへば、妹涙をはら〳〵と流し、「是姉樣、自が彥九郎樣へ狀を付、姉樣去て下されといふてやつたは姉孝行、こなたの命が助けたさよ。いふに及ず覺へが有ふ。皷の師匠源右衛門と念比してござらぬか」と、いふ所を飛懸り口を押へ「是默りや。假初ながらやす大事、何を見て然はいふぞ。證據を出せ」と云ければ、妹「ヲヽ證據迄もない事よ。此腹には四月に成子は誰が子にて候ぞ。下女の林に

たくる―引たくる
はなねぢ―鼻捻りにて木柄の末に罠を附けて悍馬の鼻を捻る馬具（俚言集覽）

お江戸迄二度進じた文の返事はなぜなされぬ。私心は猶此文に細さの事、分別きはめ書ましたれば、否でも應でも、合點してもらはねばなりませぬ」と、封ぜし一通姉聟の懐に押入る。彦九郎苦い皃して、「ヤア其方は狂氣めさつたか。尤も姉を呼ぶ時分、其方の談合もあつたれ共、縁なければこそ姉と夫婦と定まりて、十何年と云年月を重ね、子まで養ひ置たる中を、いか程に思はれふが、去つて其方に添んとは、此彦九郎は得申さぬ。斯樣な文は手にもとらぬ」と投付表に出にける。姉のお種奥より見て、つか〳〵と出文を拾ふて懐中す。藤「いや其文は大事の文人には見せぬ」と取り付を、はたと蹴倒し棕櫚箒木おつとつて、散々に打伏する。「あれよ〳〵」といふ聲に、文六下女共かけ付て、「何事か存ぜね共、御勘忍」と縋り付、箒をたくれば、荷物に附しはなねぢ引ぬき、皃も頭も破てのけと續け打にぞ打たりける。お藤は聲あげ「なふ痛や死ぬるはなふ。助けてたべ」と泣叫ぶ。文六はなねぢに取付、「是母樣いか樣の事か存ぜね共、詞にて御叱りもあるべきに、荒氣なき打擲叔母樣目でも眩ふたらば、何と云譯なされん」と苦々しくいひければ、「イヤ打殺ても大事ない。姉の夫に執心懸け江戸迄文を遣たるをたつた今慥に聞、今も拾ふた是見よ」と封じめ引切さつと明ケ、「是が噓かある事か。姉を去て暇をやり、

矢籠—同上
きせな鑓が—
君君たれば—君雖不君臣不可以不臣(孝經)
悅びつかひ—祝に來る使
馬廻—殿の傍に附添ふ武士
眞苧—間男ありとの謎

ば臣も又、しん樽の酒ざゝんざや、濱松の葉の散り失せず、萬代不易國入の、國こそ久し三重かりけらし。家中の上下、親妻子に壹年ぶりの對面に、彼方此方の悅づかい、祝義土產のとりやり持、中間小者に至る迄、ざゝめき渡るぞ賑しき。中にも小倉彦九郎、數年の勤め舊功によつて、東發足の刻、拔群の御加增給、若黨下人彌增て、一子文六お種兄弟悅びあふ事限りなし。爰に主人の妹聟政山三五平と云ふ馬廻り、是も此度歸國なりしが、お種の方へ使を立、「先以道中何事なく御供にて、久々にて御對面、さぞ御滿足候はん。此方とても同前たり。扨何がな土產と心ざし候へ共、さして變りし品もなし。是は關東麻とて名物の眞苧、如何しくは候へ共、御留守の間お種樣、眞苧をおうみなさると道中すがら家中の沙汰。罷歸承はれば御當地にても其沙汰ゆへ、進上致候」と云もあへぬに甲「あなたの是は誰樣より」乙「こなたの是は何兵衞樣、お種樣へのお土產」とて、送るに付ても女房は、心にこたへ取沙汰の、夫の心も付やとて、皃を見れ共夫は然せる氣もつかず。彥「それ此方も荷をときて、相應に土產物見合て送るべし。ヤア忘れたり、まづ舅殿へ參らふぞ。それ〳〵袴」「あい」と云ふて女房はやがて奧にぞ入にける。すり違ふて妹のお藤する〳〵と走り出、袖に取付「是彥九郎樣、エ、おまへは曲もない、

扨も見事な云々―松の落葉五巻にある唄
蒲團ばり―ふとんしく事
はな―鼻唄
先手―咲きにかく
からの頭―唐紅
管鎗―管々しにかけて柄に金を嵌めたる鎗
夕告鳥―鷄、逢坂の關の故事
此處東關紀行の文を取る
六番頭―殿中の宿直警衛を勤むる
使番―大名の治績を巡檢する役
幕串―幕張る棒杭
滋籐塗箙―弓に籐の巻き方にて貞丈雜記に委し
靫―矢入る器

中之巻

歌「扨も見事なおつゞら馬や、七ッ蒲團に曲彔すへて、蒲團ばりしてナ小姓衆を乘せて」海道百里をはなでやる。花もさき手の供道具、素鎗片鎌十文字、からのかしらの紅の、きぬは紅梅魚は鯛、云もくだ鎗人は武士、奴が今朝の朝酒の天目ざやにかぶろさや、ふれふれふれや、白雪の富士も淺間も跡に見る、道も長柄の數鎗の、鞘にかゝりし夕告鳥、關より西にかくれなき、名を望月の引馬や、轡の音のしやん〳〵、りん〳〵しやりりん〳〵と、心拍子に乘かけは六番がしら使番、侍大將奏者番、旗大將の跡先に、續きて靡く旗棹の、世時治まり四方の海、波靜かにてあまつ空、風もなぎ刀見へたるは、醫者よ儒者よと物識りも、知らぬもなべて行列に、舌をまく串挾箱、引もちぎらぬ持弓の、滋籐塗ごめ其の數は、いざやしら木にそば黑の、弓に靫に矢籠矢箱、二重の覆きせながの、其具足櫃甲立、立て程なき東路も、一歲越し國の留守、七ッ何事七ッ道具の、臺笠たて傘馬印、これぞと名にし大鳥毛、御めしの駒も乘替も、己が古鄕の北風に、勇んで嘶ふ勢ひや。跡におさへの對道具、國久しかろ目出たかろ、さこそ嬉しからう殿、君々たれ

戀慕の闇に暗りに由なき事を仕出して罪は死罪に極りて云々(松の落葉)

鰯で精進云々—つまらぬ下女と不義せんとするに喩ふ

「明よ〳〵」と叩くにぞ、お種も男も震ひ呫き、後手に袖を引、我身で男を押隱し鎰金明けて、「父様かサア御入」といひければ、親にてはなかりけり。床右衛門貌隱し手を指延、兩人が袂を一ッにしかと取、「サア不義者證據をとつたる」と、聲をかくれば南無三方と潛戸はたとさしけれ共、とつたる袂放さばこそ、詮方なくも源右衛門、腰の脇指するりと拔き、二人の袖下切放し、戶を引明て逸散に、我が屋をさしてぞ迯去りける。床右衛門は袖下を懷中にねぢこんで、戶をこぢ明けて内に入、「去とは御内義曲がない。人には免す下紐の、我にはなぜつれないぞ。此事隱してくれならば、今宵のお情頼みます」と、暗がりに手を擴げ尋廻るぞ怖ろしき。立まよふ内に裸身の下女にはつたと行當り、「こりやこそ爰に」と抱きあふ。下女は勝手は覺へたり、我寢所へと迯行ば 床「こは忝し難有い」と、夜著引被ぎかつぱと臥す。下女はいやがりねぢあふ間に、「お種樣のお迎ひにりんが只今參りました」と、提打ともし來ける。火影にすかし床右衛門、よく〳〵見れば下女子、「エ、勿躰なやいま〳〵し。鰯で精進をおちよふとした」と、跡見歸らず迯て行、暗夜のうつゝぞ 三重 うつくしや。

障子―しやうにかく

戀路の闇―八百屋の娘お七こそ

餘所かと思へば我身の上、此事を隱さいでなんと障」子を押明て、うたゝ寢枕かりそめの、緣の端又因果の端、うたてかりける契りなり。やゝ更渡る時しもあれ、父の成山忠太夫下人も連ず立歸り、門の戶荒く敲いたり。お種はつと耳に入、酒の醉醒目も覺て、我身を見れば帶紐とき、男と添し亂れどこ、「南無三方淺ましや。床右衞門めが不義の沙汰、世間の口止せん爲に態と戲れ仕懸し迄、慥に夫れは覺しが其後は酒に醉、夢現共わきまへず酒を禁れと常々に妹が異見を聞入ず、我夫ならで一生に覺へぬ男の肌觸て、身を汚したか淺ましや。女の罪の第一にて未來は愚か此世の恥、親兄弟迄名を捨る身をいかにせん悲しやな。夢になつてもくれよかし」と、咽び上てぞ泣ゐたる。歎の音に源右衞門目を覺し起上り、是も同じく醉まぎれ、男たる身の道を背く。はつと計に目を見合、互に恥かしくと、おもはゆ氣にも泪ぐみ差俯向てぞいたりける。忠太夫は待かねて猶荒けなく門叩く。「あれ父樣に見られては、死ねばならず如何せん」と、此所彼所に這い隱れ、下女が臥したる夜著の內、うろたへ入れば飛上り、丸裸體にて「なふ悲しや、うらが寢た懷へ盜人が這入て、雪の肌を荒すは」と、わめき廻る勢ひに行燈を踏倒し、戀路の闇の暗りと、唄ふは物か是も亦、由なき事の迷ひなり。表は連りに聲を立、

お前はどれへお越」といへば、源「イヤ女中計は遠慮に存、罷歸る」と立出る袖をひかへて、種「扨はお前は今の事、御耳に入たるかや。勿躰なや恐ろしや。彦九郎と云ふ男を持、眞實に云べき樣はなし。當座の難を逃れん爲、欺して申た分の事、御沙汰なされて下されな。偏に賴み參らす」と手を合せて泣ければ、源右衛門も詮方なく、「いや聞たでもなく聞ぬでもなく、餘り傍から聞にくゝ謠を謳ひ紛したり。申てもやす大事、拙者は他言致すまいが、霧は袋と外よりの、取沙汰は存ぜぬ」と、振り切出るを縋りとめ、「然りとはむごい御詞。御身樣も若い殿、我も若い女の身、實の斯した事聞ても、隱しかくすは世の情。此分で去せては私心落付ず、云まいと有固めの盃、取交して」と銚子を取、濃茶茶碗にちやうど献ぎ、つゝと干て又引受、半分呑でさしければ、源「こは珍らしいつけざし」と押戴いて呑だりけり。お種も餘程醉はくる、男の手を慥と取り、「コレこな樣迚も主有者のつけざしを、參るからは罪は同罪、何事も沙汰する事はなるまいぞ」と詰ければ、「いや早かゝる迷惑」と飛で出るを抱きつき、種「エヽ、餘り戀知らず。扨もしんきな男や」と兩手を廻して男の帶、解けば解る人心、酒と色とに氣も亂れ、互ひに締めつしめられつ、思はず誠の戀となり、種「サア此上は今の事、沙汰はならぬが合點か」源「ヲヽ、〳〵

やす大事―易いやうなれど取りやうにて大事となる

霧は袋―霧は錐にて袋の中の錐は自ら顯はるとの喩

つけさし―呑み殘し

しんき―氣を揉ますする

歩に首云々―僅の罪にて殺さるる
無下―無茶
あこぎ―慾深な
邪淫の云々―謠曲女郎花の句
だくつき―どきどき騒ぐ

女心の誠と思ひ、犬死といひ無き名を取るも口惜しし。誑さばや、と分別して、「ム、是は眞實か」床「チ、殿様の御勘當請、歩に首打るゝ法もあれ、僞りはない云」と。種「扨も嬉しき御心底、何しに無下に致すべき。され共爰は親の家、今戻られては如何なり。明日の夜にても我等が内へ、そつと忍んで下されなば、打解け思ひ晴そう」としとゝ打てぞ誑しける。無智無學の床右衛門、一言にだまされ、ほろりとなり、「忝い御情、此上はあこぎながら、迚もの事に今爰で、ちよつとちよつと」と縋りしを、「聞わけなや」と迯廻る。襖の彼方に源右衛門鼓を打て聲をあげ、謠「邪淫の惡鬼は身を攻て〳〵、劍の山の上に戀しき人は見へたり。嬉しやとて攀登れば、劍は身をとほす、磐石は骨を碎く。こはそも如何に恐ろしや。なふ怖ろしや〳〵」種「人が聞たそりや〳〵」と、威されて床右衛門「今のは何も皆じやれじや。嘘じや〳〵」と云捨て走つて表へ迯てけり。無慙やお種は氣も据らず、羞かしや京の客、今のあらまし聞給ひ、欺して云ふとはそも知らず、心の蔑しみ計かは、家中一ぱいする人の、世間の沙汰を如何せん。胸のだくつき堪へ兼て、下女呼び起し酒の燗、「表も閉てもふ寐よ」と、獨り酒酌み憂さ辛さ、忘るゝ内も忘れぬは、江戸の夫の事計。涙にいとゞ朧夜の月さす縁に人音す。種「ヤア是は源右衛門様、

よせい—餘情

そもじ云々—君に焦れても人目めつて儘ならぬ爲に心を碎くと也

はぢ〳〵—ぶるぶる

身體—身代

向ふ鏡によせいあり、殿待顏の夕べかな。同じ家中の相役人、磯邊床右衛門は病氣とて、江戸供免され在國せしが、下人も連ず潛戸あけ、「御見廻申とつゝと入る。お種はつと鏡を退け、「忠太夫は今朝程より出られ留守にて候」と、云捨て入る所を、抱き留て、床「是申、お留守を存て參るからは御親父に用はなし。そもじ樣故こがれ舟、人めの岩に波堰て、碎くる磯邊床右衛門、今年お江戸を勤むれば、御加增あるは知れたこと。武士の立身振捨て、虚病を構へ願をあげ、御國に止まるも皆君故と思召せ。病氣も虚で虚ならず、戀が病のお種樣、假の情のお藥をちよつと一服賴みます、拜みます」とぞ抱締る。女房少酒には醉ふ。「エヽ嫌しや面倒や」と振放して退けれ共、身の毛も立て怖しく、はぢ〳〵慄ふて居たりしが、「こりや侍畜生め、彦九郎殿とは念比なり、人間の道に反くといひ、御家中の後指、殿樣のお耳に立ば身體の破滅と成が知らぬかや。小倉彦九郎が女房ぞ、侍の妻なるぞ。推參な事をして必我れを恨みやるな。沙汰はせまいサア歸りや」と、苦々しくもいひければ、床「いや〳〵人の譏りも身の恥辱も、思ふて仕廻て上の事。よし御承引なきからは、こなたと爰で刺違へ、上方に流行る心中と國中に沙汰をさせ、ともに恥を晒さんと覺悟を極め來りし」と、刀を拔て胸倉とり、「どうぞ〳〵」と威しける。

張合—負けぬ氣になる
勝手—臺所とかけたり
つはもの〻—謡曲羅生門の句
さし—二人さしむかひてはいかが
門さし時—夕方
ほかつく—熱くなる

られず。殊に此比あてられて氣色も勝れぬ折柄なれば、姉様もふおかしやんせ」と側からたつて止むるが、張合に成上戸の癖。種「エイ何云やる。お肴もない酒なれば、飲であげるが御馳走」と、得手勝手よりかへ銚子。客は手鼓一曲の、「是では一ッ」と酌し巡る。盃とつては天晴な ウタイ つはもの〻交際、頼みあるなかの酒宴かな。盃数遍傾ける日も晩景に及しかば、妹の主人の屋敷より中間來つて、「是申お藤女郎、迎ひに來ましたお歸りなされ。御門が閉る」と呼はれれば、藤「ヲヽ〱角藏か太義じやの。姉様去らば歸りませう。お客様へも不禮ながら儘ならぬ奉公人。又重ねて」と辭義を述暇乞して歸りける。文六もおとなしく、「私も旦那の屋敷今宵は客もある筈なり、お暇申候はん。祖父忠太夫歸らる迄御師匠様は此所に、今暫く御座なされ下されい」とぞ申ける。源右衛門は「兎も角も。さりながらお袋様と、さしで是には如何なり。あの御座敷へ參らん」と、其座を遠慮し立にけり。お種は文六送つて出、「是なふ其方は内へ一寸立寄て、祖父様にお歸りなされと申てたも。我も又戻りたい、りんを迎におこしてたも」文「心得ました」とうち答へ、主人の屋敷へ歸りける。門さし時の町はづれ、女主人の年若き、夫は永の東の留守、心慥かに持爲と、一ッ過する酒好み、亂れぬ顔もほかつきて、重たき頭撫櫛や、

流石酒好云々—お種は酒好なれば文六にさす盃を我手にとりてと也

おさへ—源がささんとする盃を戻して再び飲ましむ

笑止がり—氣の毒がる

共流石酒好み、手まづさへぎる盃の種「母甲斐に私から、お燗を見て」と引受てさらりとほし、文六にぞさしにける。文「我等はかつて飲ぬ」とて、ちよつと飲で「お師匠へ慮外ながら」と禮をなす。源右衛門戴きて素より上戸の家の者、舌鼓たん〳〵と打ち、「ハツハツ天晴御酒かな〳〵。拙者も深ふは下されぬが、少御酒を好む故、方々吟味致せ共、是には中々京酒も及びなし、色よし香よし風味よし。御亭主樣の御心迄、御懐かしう候」と、酒挨拶の客振の、よきも過てはあだとなる先の見へざるうたてさよ。源「直に是を文六殿、返盞申す」といひければ、種「爰は母がおさへまし、あいを致してあげません」と、又引受てついとほし、「酒がお氣にいつたらば、一ッあがつて下さんせ」と置せもあへず盃取、源「何が扨下されん」と、たんふと請て一息のみ、文六にぞ戻しける。今度もちよつと口付て、文「憚りながら伯母樣へ、上ませう」と酌す所を、種「はてさて如何に飲ぬ迚、餘り素氣ない一ッ呑や。母があいをしませう」とたぶ〳〵受てつゝと干し、「母の身で我子のあい、目出度上の目出度さに、江戸の父御の名代に爰は一つ重ねませう。サア大あいを頼みます」と又源右衛門にぞさしにける。源「扨は御内義樣には少御用ひと見請たり。馴々しき事ながらお手元を見ん」とつき戻す。妹は笑止がり、「いや〳〵深うはたべ

ケ置て候ふが、何とぞ御師匠様の御世話にて、鼓の一番も打習はせ、御直の御奉公に出し度との念願にて、連合留守の内なれ共祖父ごが御頼申されたり。此五月には連合も御供にて歸られん。其時分は一番も打て父御に聞する様に、一しほ賴みあげます」と挨拶座配しと〳〵と、物やはらかで屹として、姿なら京のどなたの奥様にも、誰が否とは因幡山國育ちとは思はれず。妹お藤も立出て、「私は藤と申て是成者の妹にて、御家中に奉公勤め参らすが、文六に御念比お嬉しうこそおはしませ。姉の連合彦九郎殿留守の事なり小身なり、間所迚も無き儘に洗濯萬事に至るまで、斯様に親の所にて致ス譯にて候へば、文六鼓の稽古迄此所にては何事も、御不自由に候はん。彦九郎殿が戻られては、内へも申入られましよ。夫れお盃でも持てこい。やい父様はお留守か、獨り女子がはいでなりや、お客が一人あつてもアヽ不都合な事計。アヽほんにゑへよゑ、おはづかしや」と會釋する、目元は姉に劣らじな。源「いや何もお構ひなさるよな」と、挨拶とりどり成内に、下女は心得酒肴取揃ゑてぞ出しける。女房お種は酒好にて「ヲヽ是は氣が付た。牢人の親なればお肴はなくとも、お慰みに一ッ」といへは、源「御用もあらんに近比是は忝し。まづ夫より」種「いや其方よりお辭義なし」源「然らば文六殿より」といへ

御供―殿様のお供
座配しと〳〵―もてなし方しとやか
姿なら―姿といひ
おはしませ―ゴザります
内へも云々―彦九郎の内へもお出をねがふ
はいで―田舍のポッと出
牢人の親―浪人の親なれば御馳走はできぬと也

風にあり下句松に吹き來るはゐ種の身の上にかけていふ

妻―夫の事

春―張るにかくよい仕事―竹の節にかく

來ん。夫はいなばの遠山松、これは懐かし君玆に、須磨の浦端の松の行平、立歸りこば我も小蔭に、いざ立寄りて、磯馴松の懐かしや。松に吹來る風も狂じて妻の留守居の淋しき折から、鼓に心を慰むなり。あづま戻りも早近々の、風の便りの風もすゞしの絹袴、洗ひて春の長閑成、影に程なく干上りの物干棹の棹竹の、「よい仕事して嬉しやな。江戸の男を是からは、松風きかん」とのゝめきける。一子文六奥よりも、「是申母じや人、内々御聞なされたる鼓のお師匠、宮地源右衛門様只今稽古も御仕廻なり。次手ながら知人に御成もや」とぞ申ける。種「ヲヽ然ればく、先刻より然は思ひしかども、張物にしかゝりて遲なはり參らせし」と、襷もとひて身繕ひ、座敷にこそは出にけれ。源右衛門膝をなをし、「我等は京都堀川下立賣に住居の者。御家中の方々へ鼓の指南仕、ゆくく御奉公の望も叶ふべき樣子により、折々御當地へ罷下り、壹年半年五ヶ月三ヶ月逗留仕候へ共、未だお連合彥九郎殿には御近付にも成申さず。此比御子息文六殿鼓御所望に付、師弟の契約致せしが中々御器用千萬、嘸お袋の御滿足推量致候」と慇懃にこそ申けれ。女房會釋しにつこと笑ひ、「母と仰候へば彥九郎も年寄に聞へ候が、もと此者は我等が實の弟を、連合養子に致されまし、僅か御扶持の小身者。先只今は御家中の、然る方へ預

侍氣、斯う勉めねば侍の立身がならぬとて、心づようは云ながら去年六月の江戸立には、又來年の五月にお供して、下る迄は逢れぬぞや。無事で居よ、よふ留守せよとの貌つきが、目にちろ〳〵と見るやうで、ほんに忘るゝ隙もない。平常戀して居る樣で、いつかいつかとまつ」の木に、衣張結び細引のゆふて思ひや晴すらん。妹のお藤打笑ひ、「姉樣それは榮耀じや。私が樣に根から男のない身でさへ、見事堪忍しまするぞや。殊にお屋敷行義づよく、此樣な親里でも一夜泊りも法度なり。姉樣なら死しやんせう。人が聞たら笑ひましよ」姉「アレ奥に鼓の稽古がある、高ひ聲さつしやるな。しるし〳〵」を張物に、かいまみ覗く鼓の手に、心も乘りて連合を、うはの空なる戀衣、松に打懸干す内に、曲も終りの懸聲、ヤア謠「かたみこそ今は仇なれ是なくば、忘るゝ隙も有なんと、讀しも理りや猶思ひこそは深けれ」姉「あら嬉しや、あれ連合のお歸りぞや。いで〳〵迎に參らふ」と走り寄れば藤「是姉樣、エヽ正躰ない彼は庭の松の木よ、彦九郎樣は江戸にじやはいの。氣が違ふたか」と恥しむれば、姉「エヽ愚なお藤なんの氣が違はふぞ。男の留守の徒然の切ての心慰みよ。爰は所も因幡の國、松としきかば歸り來ん、と謠つ鼓の賴もしさ、あらたのもしの」ウタイ御哥や。立別れ、因幡の山の峯におふる、松としきかば今歸り

榮耀―贅澤
法度―禁制
しるし―鎭める聲と絛にかく絛は染物を張渡すに用ゐる具なり
ヤア筐こそ―以下深けれ迄例の松風の句
あらたのもし―之より以下も松

扨も行平―以下空燒なり迄謠曲松風の句
須磨の―澄にかく
かとり―細き絹にて薄く織りたるもの
留守―夫彦九郎の留守中妻お種が實家にて張物する
木綿襷―いふにかく

堀江川波鼓

近松門左衛門作

上之卷

ウタイ 扨も行平三歳が程、御徒然の御舟遊び、月に心は須磨の浦、夜鹽を運ぶ海士乙女に、姉妹選ばれ參らせつゝ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るゝ須磨の海士の、鹽燒衣色かへて、かとりの衣の空だきなり。それは鹽燒あま衣、是は夫の江戸詰の、留守の仕事の張物や。妹のお藤は折よくも、幸いの里歸り、「サア手傳ひ」と木綿襷、糊つけ絞る兄弟の袖雫垂る風俗は、國に名とりの濡者と聞へしもさる事ぞかし。姉「いやなふお藤、必お主の氣に入ていつ迄も奉公しや。男やなんど持やんなや、身につみてこそ知られたれ。彦九郎殿とは樣子ある夫婦ゆへ、嫁入の時の嬉しさは譬ん方もなかりしが、小身人の悲しさは隔年のお江戸詰、お國に居ては毎日の御城詰、月に十日の宿直番、夫婦らしうしつぽりと、いつ語らひし夜半もなし。然れ共主は

る。

いのこ—玄猪にて十月上の亥の日、動くにかく

韋駄天—佛法守護の早く走る神

五逆—害父、害母、害羅漢、破僧、出佛身血

里、十しも過て是ぞ此、小川通は三途の川、籠の町さへ近付ば見物群集とり〴〵の、暦が噂くりかへす、思へばわしが嫁取よし、我が昔の元服よしの、日どりもよしや蘆に鷺、裾の模様も繪にうつし、筆につらねて末の世に、かたりつゞけて三重聞及ぶ、道順夫婦群集の中をおしわけ〳〵、「おかせる罪が重ければ、又慈悲といふ名が重し。磔にも獄門にも、此爺媼を替りにたて、二人を助け下され。やれおさんかわいや」と、すがりつけば警固の者、「寄たら打」と追はらふ。黒谷の東岸和尚、衣の袖を捲り上げ、韋駄天の如く飛來り、「出家に棒をあてたらば、五ぎやくざい〳〵。サアおさん茂兵衛、此東岸和尚が助けた」と、持たる衣を打かけ〳〵、臂をはつて立給ふ。役人頭腹を立、「罪科極つたる囚人を助くるとは、上を輕しめたる御坊の仕方、叶はぬ〳〵。それ衣引剝げ」と、どつとよれば、和尚「ア丶是々、出家侍さりとは同前。助くるといふ義理は、三世に渡る衣の徳、愚僧が念願相叶ひ、二人が命下さるれば、是現世を助かる衣の徳、もし又罪に沈んでも、愚僧が弟子になすからは、未來を助かる衣の徳、未來でも現世でも、救るといふ文字二つはなし。サアたすけた」とよばはる聲、諸人わつと感ずる聲、道順夫婦の悦びの、聲は竭せず萬年暦、むかしこよみ新暦、當年未の初暦、めでたくひらきはじめけ

天一天上―天一神の巡る方角は物を忌む天一天上の間は吉日也
八專―壬子より癸亥迄雨降る節十二日を云ひ、其中四日を間日といふ隙の日に掛く
坎日―堪忍にかく、他出を戒むる日
黑日―苦勞にかく
釜塗―竈を塗るによき日
ちいみ―血忌、結婚を忌む日
往亡日―逢ふに掛く
半夏生―假粧にかく
玉―魂にかく
凶會日―凶日、悔にかく

し。紅蓮の井戸ほり焦熱の、地獄の釜ぬりよしなや」と、急がぬ道をいつのまに、こゆる我身の死出の山、しでの田長の田がりよし。野べよりさきを見渡せば、過し冬至の冬枯の、木の間〳〵にちら〳〵と、ぬき身の鎗の恐しや。茂「あれでそなたの身をつくか」さん「是でそもじを殺かや」茂「ちいみも今はいつはり」と、二人は顔を打合せ、くどき焦れて泣涙、馬の尾がみや浸すらん。またさへ返る夕嵐、雪の松原此世から、かゝる苦艱に往亡日、島田亂れてはら〳〵〳〵、顔にはいつの半夏生、しばられし手の冷たさは、我身一つの寒の入、涙ぞゆびの爪取よし、袖に氷をむすびけり。つく〴〵物を案ずるに、茂「我は釼の金性の、刃にかゝる約束か」さん「わしは土性墓の土、何とて墓に埋まれず。茂「ついに木性の木の空に」さん「骸を曝し。名をさらし」なんど小歌につくられて、強き處刑にあはだぐち。蹴上の水に名を流す、おさん茂兵衛が新精靈、恥かしながら手向草、おなじ罪科の下女が名の、玉は冥途に通へ共、魂魄此世にとゞまつて、共に浮名は下す共、冥途は主從一所にて、婆婆で手馴し玉がわざ、無間の釜で茶を沸し、ゆきゝの人の廻向請、我身の悟ひらく日。アヽ歎くまじ今更に、何く〳〵と凶會日の、悔むもよしな引よせて、むすべば露の命にて、とくればもとの道芝に、やがていのこや五里六

道に行く云々――生物は凡て死ぬるものなれど今日明日とは知らざりしとなり（業平の歌）
やれて――破れて
惠方――百事に福ある方角
金神――不吉の方角、以下暦に當てゝ意中を述ぶ
十方くれ――途方にくれに掛く
甲子――昨日に
まを――間男に
あやふ日――危くさせたに掛く、此日は物事をするに危き日
姫始――正月二日糅を供へる吉日
きそ始――着衣始、新年の初着
藏開――鞍にかく、正月十一日始めて藏を開く

乘る人も乘たる駒も、つゐに行、道とはしれど、最後日の今日か明日かの我身には、我のみきゆる心地して、あまたの人の命乞、それを杖共柱ごよみの紙やれて、向ふ其方は都の惠方、二人が身には金神と、思ひ返せば胸塞り、月ふさがりの駒の足、隙行く駒の世のたとへ、八十八夜は及びなき、年は十九と廿五の、名殘の霜と見あぐれば、空にしられぬ露の雨、はら〳〵ほろ〳〵繩目に傳ひ、鞍壺に傳ふ涙の十方ぐれ、泣々引れ行く姿よその見るめも哀れなり。人目盗みてあらはれて、不義じやのなんの庚申、今日はあしたの甲子と、知らであふ夜の其むくひ、世上の口にうたはれて、合せて見ても合ぬ中、丸い苧桶に角の蓋、眞苧うみためて絢交て、今は我身の縛り繩、謗を受けん情なや。おさん茂兵衛にいふやうは、「よしなき女の悋氣ゆへ、何んの科なきそなた迄、あれ不義者とあやぶ日、終に命のほろぶ日、ゆどの始に身を清め、新枕せし姫始、かのきそ始引かへて、ひかるゝ駒のくらびらき、思へば天一天上の、五すい八せんま日もなし。只何事も坎日」と、聲も涙にかきくるゝ。茂兵衛やう〳〵顔をあげ、「こはおろか成おさん様、火に入水に入事も、さだむ因果とあきらめて、せめて未來のくろ日を遁れ、二季の彼岸に到らんと、念じ給へや南無阿彌陀、なむ阿彌陀佛を帆にあげて、共に弘誓の船のりよ

地團太―足摺して口惜しがる

まつかう云々―額の眞中を斬られたり

たか、はかなや」と、きへ〳〵とこそ成にけれ。代官の役人手を打て、「ハア丶早まられた梅龍。此兩人のめしうどは、科の實否定まらず、京都において中立の女、其玉を證據に詮議あらば、事の次第明かにあらはれ、兩三人共に助かる事も有べき物を、かんじんかなめ證據人の首をうつて、何を證據にせんぎ有べきしるべもなし。殘念々々二人の罪科極つたり。首も一所に京都へわたせ。早々罪人引ませい」捕手「うけ給はる」とひつ立れば、梅龍つゝ立ち地團太ふみ、「エ丶〳〵早まつた仕損じた。七十に及ぶ梅龍が、出來しだてして一生のあやまり。むだ〳〵と腹切るもひとり物に狂ふに似たり。相手がなほしやなあ。ヤァ助右衞門よい相手、己れを切て人を殺したあやまりと、共に罪科に行はれん」と、するり拔いて打付れば、まつかうをしてやられ、あけに成て迯たりけり。梅「首をとらずにおかふか」と、かけ出るを大勢取付、「狼藉させぬ粗忽させぬ」と抱とむる。梅「狼藉合點じや、はなせ〳〵」と、かけ出すもとまるは老の力にて、とまらぬものは科人を、引行く駒も目に涙、轡にかゝる白泡の、哀を殘す 三重

道行乘合靮

僅な些少の金、物惜みする者の所持金をさして日牌金といふ

おのれ風情に詐をいはふか。よい〳〵おのれにくれた。八百目の銀うぬが根性相應に現世は長者と悦んで、閻魔の前で算用せい」と、つらぼね三つ四つ蹈付け〳〵、さらぬ顔にてゐたりけり。かくと聞より助右衛門嬉しげに走付、「私は此度お願ひ申あげし御領内助作がいとこ、京大經師以春手代助右衛門と申者。御苦勞千萬に、おさん茂兵衛御からめ下され、我々主従本望大悦仕る。縄付二人請取早々上り申たし。お渡しなされ下され」と、謹んで述べければ、役人氣色をかへ「そいつ引のけ。推參至極な縄付を渡せとは、おのれに頼まれ捕はせぬ。京都より解狀によつてからめ捕る、すぐに京のろう屋へ引渡す。殊にだん〳〵詮義有もの、慮外をぬかしたらおのれも共に、からめる」と叱られて助右衛門、もみ手をしてのく所へ赤松梅龍、早駕にて駈付、首桶提げつか〳〵と出、梅「われらは大經師以春が下女玉と申者の請人、すなはち伯父赤松梅龍と申もの。此度おさん茂兵衛駈落の事、ゆめ〳〵兩人の不義はなく、此玉がよしなきことばを聞ちがへ、嫉妬の心あまつて、間ちがひのあやまりにて、おもはず不義の虚名をとる事、せんずる所玉めが口からなすわざ。科人は一人、すなはち玉が首うつて參るからは、兩人の命御助け下さるべし」と、ふたをとれば玉が首、おさん茂兵衛は一目見て、「はや先だつ

合口ー匕首

是式の云々ー是

らき遊ばすな」さん「チヽ覺悟した合點じや」と、表を見れば取手の役人、助作を先に立て「とつた〱、とつた〱」とみだれ入。茂兵衛臆せずつゝと出、「見苦しいお侍、合口一本さゝぬ町人、手向ひはいたさぬ。悴の時より柔術あて身を稽古して、すはといはゞ腕は細く共、お侍の五人や七人は慮外ながら、きやつといはせてのめらせ樣もしつたれ共、もとのおこりは主人の勘氣、主人に手向ふ同前と思ひ、手向は仕らぬ。此女中に付、申わけあれ共それもいらぬ物。不義ならば不義にして、サア尋常に括れ」侍「とつたとつた」と引伏せ〱高手小手、顏色變ぜずしばられし、男も女も健氣さに、取手の武士は我を折て、哀といはぬ人もなし。おさんすゞしき目の中にて、助作をはつたと睨み、「エヽさもしい土百姓、おのれ少シの欲にめでて、よふ訴人しおつたな。申殿樣あいつに八百目のかねを預ケ置ました。かうなつた身に金銀はいらね共、是は親のなさけの銀、京へのぼして黒谷へ上げて下されませ」と、いひもきらぬに助作まが〱しき顏付にて、「アヽ恐ろしい女め。いつおのれに粒三文もかつた覺えはない。五十日計家貸して、宿賃の米の味噌のと算用したらば、二三百目も來る筈じや。八百目預けたとはいきがたりめ」と、あらがふ所を茂兵衛なは取引立、助作が横腹はつたと蹴倒し、茂「是式のめくさり銀

ゆりて―許されて

誓文云々―誓文腐れにて誓つて利なしに貸すとの意

一ぱい云々―うまく欺いた

急にはどふも調はぬ、一兩日待てもらひましよ。こなさまもあんまりな、あの樣な傾城殿請出した上に、銀つかふといふ樣な、むかしの心お止なされ」と云ければ、さん「いや是助作さん、あのさんの入用ではないわいな。皆わしが入用じや。勤の身はな、全盛する程世間が張つて、辛い物でごんす。念比な客から借つた銀で、今宵中に返さねばわけが立ぬわいな。其代にあのさんの勘當がゆりて、大坂へ往んしたら、夜るでも夜中でもいふてごんせ。八百貫目や八千貫は、誓文くつされ、利なしでやんす」といひければ、茂「あの通り〳〵。近比御苦勞千萬ながら、どふぞ頼み存ずる」助「ム、いかにも聞とゞけた。それ程急なと知らなんだ。七つ過暮迄に急度持て來ませう。女夫の衆の請取とる、必内にござれや」夫婦「ヲヽ、いごきもしませぬ」と約束堅き、銀が敵としらざりし、身のなるはてぞ淺ましき。茂「扨々とろりと一ぱい參らせた。今の傾城の物眞似芝居御すきの一德。銀請とるとそのまゝかけ出して急いだら、夜の中に七八里は心やすい。宮津に落付、切戸の文珠の法印樣に母方の縁あれば、頼むに引はなされまい。そろ〳〵用意」と帶しなをし、身拵へする中に、かな棒の音、人足しきりに近付たり。茂「ヤア氣味わるひ。ハア南無三寶口惜い。助作めに出しぬかれた。おさん樣も遁れぬ。未練なはた

のおさんが、おく丹波にかくれてゐる様子がしれて、京のお役所から、爰の代官所へ解状がついて、在々を尋る、其使の早駕を乗せて、おいの坂のおり口から、二里の間を一貫四百、七百づつあたゝまつたと、たつた今いふて通りました」と、身を慄はしていひければ、さん「ハテなんとしよう、今迄がふしぎの命。され共とつ様かゝさまの、歎の程がおいとしい。一日でもながらへるが孝行、今夜のうちに退かふでは有まいか」茂「いかにもいかにもかのお心ざしの一貫目二百目つかふて、残る八百目此家ぬし助作に預置ました。大事のお慈悲の此銀を、こなたとわたしが急度抱へて死ねばとて、人の寳になす事は、冥加に盡ると思ひ、今寄つて申たれば、追付持ていかふと申。此銀を腰に付、丹後の宮津に兄弟同前の者が有。そこ迄どふぞのきませう。それ迄に運つきて、死ぬる期に極つたらば、日比申通り、悪縁と思ふて下されませ。私ゆへに大事のお身を捨させました」と、涙ぐみ打しほれて見へければ、さん「又おなじ事計。それは互の因果づく。只わすれぬは二人の親、扨いとしいは幼馴染の以春様、こなたもわしも微塵濁らぬ此心、いひわけして死たい」と、又さめ〴〵とぞ泣ゐたる。家主の助作、案内もせずつゝと入、「ヤァ新六様、さつきは御出なされた、預りの八百目只置よりはと、少し手まはし致し、

解状―罪人捕の状

あたゝまる―儲ける

新六―茂兵衛のかへ名

のませぬ云々―小粒銀二枚で口を留める

きり〳〵―早く

盆も正月―忙がしい事の譬

天知る云々―人の見ぬ所でも悪事は知れる諺、楊震の故事

めいよ―面妖

出ますする。烏丸へも參り、御嘉例の如くお手代衆、助右衛門様茂兵衛様とおさかづき致ましよ。御ぶじな通り話しましよ」と、出んとすれば、さん「なふ是々、その烏丸で猶かくしたい。アヽ酒に醉ふたら忘れて、ひよつと云やればわるい。此春はもう烏丸へはいかしやんな。來年めでたふわしがのぼつて祝ひましよ。烏丸の代に爰で盃出したいが、おりしも酒をきらした。是で呑んで下され」と、二三匁の豆板二つ、呑ませぬ樽の口ふさぎ。萬「ハアなんの是で申ませう。本の樽より結句木樽に醉ました」と、うまひめにあふ萬歳の、舌つゞみうつて出にける。おさんもうき世恐ろしく、うつかりと成所へ、茂兵衛も色青ふして立歸る。さん「エヽきり〳〵戻りはせず、此身に成て惠方參り所か。たつた今毎年京へ來る、得意の萬歳が來て、不思議立たを、につこらしう嘘ついて、いなせ事はいなせたが、どふやら爰にも怖氣が立て、長ふ居らりよと思はぬ」と、かたれば茂兵衛もあきれはて、茂「サア〳〵盆も正月も一時に來ました。天しる地しるでこつちこそ見しらね、今の萬歳の格で、栗賣の柴賣のと、丹波から京へ出る者は多し。あれが云ひ是が聞、知れたも不思議でござらぬ。助右衛門めを始、旦那の一家が隣在所に宿取てるるげな。其上たつた今但馬の湯入を乘せて通る駕舁が、めいよな事を云ました。大經師

めさいの—食し
玉へ
づつしり—澤山
ほゝん—鼓の音
つがもない—途方もない
めかど—目利
すきと—とんと

福々、ぢい樣ばゝさまとゝ樣かゝ樣、わこ樣ひめごぜ、産ならべてふく〳〵ふく〳〵」ほゝんほんとぞはやしける。さん「ヲヽめでたい〳〵、よふ祝やつた。とゝ樣かゝさま御無事な萬歳祝ひましよ」猶御壽命は百包、盆に入てさし出す、おさんの顏を不思議そうに、萬「ハア是は奥樣、お久しうござりまする。御きげんよふ、かはつた所で、正月をなされまする」さん「アヽつがもない、わしは萬歳に近付はないわいの」萬「なんの私らを見覺へはなされますまい。毎年お庭で舞まして、おまへはおうへに結構な蒲團敷いて、腰本衆づらりと竝べて、御見物なされました京烏丸大經師のおく樣、よふ覺ておりまする。田植が御すきでござりました。なんと一つ舞ひましよか」と、いへばおさん胸轟き、さん「目角の强ひ人じやの。毎年の事でもこちはすきと覺えぬ。必々いづかたでも沙汰してたもんな。わしが里の父樣、此所へ去年から逼塞してござるゆへ、此比漸見廻に來た。此在所でわしは島原の傾城が、請出されて來てゐると、庄屋にも誰にもいふて置。若し人がとふたり共、島原で見た女郎じやといふてたも。少樣子も有ほどに、京ではなを沙汰なし、賴むぞや〳〵。さらばまちつと祝はふ」と、錢ざしぬいて五六十、半紙二枚にもらすなと、わが名を包めば惜からず。萬「ハアかさね〳〵おめでたい。二三日中に京へ

と響き來る、果は寂滅爲樂ぞと、名殘悲しき 三重

下之巻

春たつと、去年の雪げを其まゝに、霞むも山の奥丹波、軒のつらゝも解渡り、谷の水音したん〳〵、ぽん〳〵〳〵となる鼓、萬歳「徳若に御萬歳と、御代も榮へましますありきやう有あら玉や、年立返るあしたより、水もわかやぎ木の芽もさし榮ゑけるは、誠にめでたふ候し。京のつかさは關白殿、おりゐのみかど日のもくだいり。王は十善神は九ぜん、よろづやす〳〵、浦やすが木のもとにて、正月三日の寅の一天、誕生まします、若ゑびすあきなひ神と、顯れ給ひて、商なひ繁昌護らせ給ふは、誠にめでたふ候ける。やしよめやしよめ、京の町のやしよめ、うつたる物はやしよめ、うつたる物は何々、大鯛小鯛鰤の大魚鮑さゞい、はまぐりこ〳〵、はまぐりこうと、うつたるものはやしよめ、京の町のやしよめ、そこをば打過、そばの棚見たりや、そばの棚見たりや、豆に小豆、大根蕪、加賀の牛蒡毛牛蒡、からしの粉山椒の粉、辛い胡椒めさいの。やしよめ〳〵、京の町のやしよめと、賣りためて千貫、繫ぎたてゝ萬貫、惠方の御藏づつしり、納て家も

響を晨鐘には寂滅爲樂と響く

したん〳〵―水音にぽん〳〵と鼓の音を續けたり、雪はゐさん茂兵衛が栢原に僑居の所へ萬歳が來りしなりありきやう―原本のまゝ愛嬌かおりゐの帝―太上皇

日のもく云々―他の歌には日の木内裏とあり

浦安云々―日本の事

やしよめ―やさ女の意なれども單に拍子に用ひたり

無下—おろそか

爰に磔—柱頭に二人の影の映りしを見ていへり

絶かねて—堪へかねて

後夜云々—夜中には生滅々已と

生は無下にはよも成まい。茂兵衛たのむ煩すな。是爰に銀子一貫目、家質の利足のたし銀に、黒谷の和尚様より借つたれ共、世間張つて何にせん。家を町へつき出し、寺へ返す此銀、遣るといふてはやられぬ、貰ふといふてはもらはれまい。道順が涙にくれうろたへて落いたぞ。落た物はひろい德、罸があたれば落した者、ひろふた者に罸はない。おばゞおじや歸らふ」と、夫婦せきあげむせび入、二あし三足立されば、おさん茂兵衛はわつと泣、銀取上て額に當、さん「あんまり深い親の慈悲、返つて冥加が恐ろしい。なふとつ様かゝ様」と呼かへせばふり返り、父「何にも云な何にもいふな。さらば〳〵」の泣別れ、父が歸れば母がとめ、母が歸れば父がとめ、おさん茂兵衛は歩みかね、名殘おしさに立どまり、小高き土手に延上り、二人見送る影法師、賤が軒端の物ほしの、柱二本に月影の、壁にあり〳〵うつりしは、うき身の果は捕はれて、罪科遁れぬ天の告、母は驚き「なふぢい様、情なや爰に磔が」父「悲しやおばゝ、おさん茂兵衛が影法師、天道の力にも叶ふまいとのしらせか」と、又絶かねて泣聲に、内より玉はくゞり戸明、顔指出す其影の、同じく壁にうつりけり。「あれ又爰に獄門が」淺ましや此首の、其名は誰と白露の、「玉ではないか」玉「おさん様」さらば〳〵の聲の中、はや黒谷の後夜の鐘生滅々

今はの別れ、月出ぬ先は顔見えず。いつそ思ひ切べきに、見かはす顔は見きられず。なまなか月もうらめしく、母はもだへて「是おやじ殿。脈のあがつた死に病も若やと藥はもつて見る。天にも地にもたつた一人の大事の娘、見付らるゝと殺さるゝ、手ばなしてやられうか。ござれ爺嫗つきそふて、しなば親子一時に」と、氣も狂亂のくどきごと。道順も堪へ兼て、「それはおしやる迄もない。いか成大病難病でも、藥一味の加減にて、助かるも有ならひ。息の絶た死人でも、二十四時は待つて見る。唐天竺日本國の名醫の藥を浴せても、天下の法をそむくといふ、大病には叶はぬぞや。たつた一つの頼みには、以春の方へ手を入て、心をなだめ見る計。もし其内召捕れ、すは最後といふ時は、白髮あたまを大地の底へすり付て、命乞も身がはりも、願ふといふは其時よ。なまじい親がかくまふと、聞えてはさきに我が立て、免したふても免されぬ。親下人にも見はなされ、憂目をすると聞えては、げには先にあはれみ有。ヤイおさん、畜生よ犬猫よと叱るとて恨むるな。願かけぬ神もなく、祈らずといふ佛もなく、三光天を拜むとて、七十に成道順が、朝毎垢離を取時は、惣身の骨はこほれ共、娘が處刑にあふならば、此くるしみを百千萬、かさねても物の數かは、ところへて月日を拜するは、あの月天子の照覽有、利

さきに我が立―先方で意地になる
三光天―日月星の三天
垢離―水にて身體を淨めて祈禱する

袖乞云々―乞食でもするが

のめ〳〵―おめおめと

取違へうが―假令夫と取違つたにしても

ふござんする。中に著た淺黄縮緬は、奈良の町でうりはなし、此うへに著た蘆に鷺、此秋おまへの下されて、未來迄もかゝ樣の、形見と思ふて著ますれば、寒い共覺えず。見付らるゝをそれぎりの、命の内は袖乞でも、頼ないは後生の事、これはそのまゝ留置て、死んでの跡の弔ひに」と、歎けば母も「アヽ悲し。また死用意ばかりを」と、つきぬ涙の露霜の、白きを見れば夜も更て、出たる月は冴へながら、親子の袖ぞ時雨ける。茂兵衞は搔くれて物をもいはずゐたりしが、「我ら男のつらをさげ、斯樣のわざを仕出し、のめ〳〵ながらへ有事も、おさん樣のお命を、何とぞと存ずるゆへ、お宿もとへおさん樣を御同道なされ、御命助け下されば、科を私ひとりに受、物の見事に死ましたい。御了簡賴上ます」と、手を合せ泣ければ、さん「アヽおろかしい事いふ人じや。我一人生ながらへ、いひわけが立程なれば、ふたりいきても同じ事。取違ゑうがどふしやうが、以春といふ男持ちながら、そなたと肌ふれ寢たは定。かたちは生れ替つても、此惡名は削られぬ。そなたはいかふうろたへが來たそうな」と、恥しめられて茂兵衞も、「アッそうじや。ハアあれ三條通の車の音、夜明といふて程もない。行先あてどはなけれ共私在所、丹波の栢原迄落て見る計。サア暇乞なされませ」と、いへ共親子一生の、生死をあらそふ

品―事情
木の空―磔

がるゝだけはのがれもせず、京近邊をうろたへ、今のまに召捕られ、洛中を引渡され、親が大事に生付て、撫で育てた體を、鎗で突れて死にたいか、からだにも恥が搔きたいか。生うが死ふが此道順は、悲しい共思はねば、涙一滴こぼれねど、ばゝのなきやるが悲しい」と、わつと計にこらへかね、余所をも恥ず大聲あげ、めをとは老の息切に、むせ返りてぞなげかるゝ。茂兵衛はひれふして、とかふの詞なく計。おさんは母に抱き付、さん「ふたりに不義のあやまりは、みぢん程もなけれ共、ほんの因果のまはりあひ、云わけたゝぬ品と成、京洛中に畜生の名をながし、罰のあたつた此上に、誓文立てん様もなし。とつ様のお腹立、かゝさまのお恨も、私可愛ひ上なれば　來世をかけて形見の詞、我々は天の網、とても遁れぬ命の內、親達に逢からは、木の空にさらされて、かばねを鎗でつかれても、思ひ置事ござらぬ」と、くどき歎けば　父「未ぬかす。其鎗でつかせまひ、木の空へあげまいと、思ふてむねをこがすはや」と、又たへ入て泣沈む。母は涙の數珠袋、ふくさ物取出し、母「是一歩二つ白銀もすこし有。いとしやいかふ肌うすな、路銭に盡きて脱ぎやつたの。是を茂兵衛に渡して、駕に乘て京の地を、一足も早ふ立ちのいて、必必悲しい事、聞せて泣せてたもんな」と、泣々わたせば　おしいたゞき、さん「忝な

諸國の云々―國々のかけ先の金も集まらず

したはれた根性―慕はれたる娘の心に也

者やら」と、うとき老眼すかして見る。行燈の影に茂兵衛見付、「あれおさん様、下立賣のおやぢ様」さん「ナフ父さまかいの」と走寄、取付所をついとのき、父「ヤイ畜生にとつ様と、云はるゝ覺えはないわいや」と、わつとなく〳〵ふりあげて、うたんともがく杖の下、母はあこがれ火を吹消し、娘を袖におしかこひ、母「なふおやぢどの、おさんめは迯ました。もうこらへて下され」と、影をかくすは母の慈悲、打杖は父の慈悲、心かると子や思ふ、哀はおなじ涙の闇、まよひのうへの迷ひなり。道順不覺の涙にくれ、「道順が未來もはやしれた。ひとり娘の事なれば、聟を取て家を繼する筈なれど、近年諸國の銀もすまず、家屋敷をも人手に預ける逼塞の身。此跡を娘に渡し、苦勞さする可愛さに、一代切に家を捨、嫁入させた親心、さきとてもその合點道順が娘ならば、拵いらぬみやげもいらぬ、そだてた親に見こみが有、娘の心が土産じや、としたはれた根性に、ちく生の魂が、いつのまに入りかはつた。うらめしや情なや、池にすむ鴨や鴛を見よ。軒に巢をくむ燕も、雌一羽雄一羽、女夫つがひは生ある物のならひぞや。父親さま〴〵の毛色をうむは、犬猫ならでどこに有。親は犬には生付ぬ、猫になれとはたが育てた。畜生に對して詞は交さぬ。是は我ひとり言、とてもかう成からは山の奥にも身をかくし、の

一つ穴―同じ仲間、惡い方にいふ

身は―俺は

かち―徒歩

一つ穴のいたづら狐、一所によつたは、扨こそ玉が中立で、おさん茂兵衞が不義は極つた、といひ立られては彌科がおもふ成。爰をよふ合點せい。つれなふあたるはおためじやぞ。此事ゆへにそちもなはめの恥にあひ、此如く預られた。しかれば同罪はのがれがたい。首を切られ手足をもがれ、ためし物に成とても、主と頼んだ人ゆへ、命おしむな梅龍が姪じやぞ。最後を潔ふ死んでくれ」と、聞ゆれば玉が聲、「それは氣遣さしやんすな。とうから覺悟極めてゐる。伯父ひとり姪ひとり、わしが死んだら伯父樣の、さぞ便なふおぼしめそ。茂兵衞殿はどうしてぞ。いとしいはおさん樣、どこにどうしてござるやら。常がはかない正直な、心しつた私なれば、何かに思ひやります」と、泣入れば梅龍も、「ヲヽ、そちがいとしいはおさん殿。身は下立賣の親御達の、歎が思ひやらるゝ」と、内に伯父姪くどき泣、外に二人が立聞て、涙をもらす戸のすきま、聲なき冬のきりぎりす、壁にすがりて泣ゐたり。血筋がむすぶ親子の契り、おさんの親道順夫婦、娘の浮名かくれなく、命がつらき老後の恥、人に面もあはされず、月出ぬさきの心の闇、黑谷の菩提所へ、かちの夜道の夫婦連、小娼がさげし風呂敷や、つゝむ涙にとぼとぼと、行過る軒の下、二人しくしく泣聲の、耳にとまれば立とまり、道「おばゝあれ合點のいかぬ何

兼房云々—黑茶色の著物に鷺に蘆の裾摸樣あり

定よ—爭ふべからず

顏と顏見合せ、顏をあかめては涙の外に詞なし。さん「なふ茂兵衞殿、とてもわしらは今日あつてあすない身、命を命と思はね共、いとしや玉はどうなりやつたと、案ずるは是ばかり。只ゆかしいは父樣母樣、なんぼ思ひあきらめても、あひたふござる」とむせ返り、歩みかねて泣ければ、茂「チヽあひたいはお道理。我とてもおめかけられしお主筋、お名殘おしさは同前。爰が彼玉が在所岡崎、あれあの行燈の出た所が則伯父の宿。是にたよつてお里の便宜玉が噂も、聞ふと存じ參りしが、内の首尾を聞合せず、案内するも麁相也」と、軒に立寄うかゞへば、内には玉が泣聲の、わけも聞えずくどき事。伯父梅龍が聲として「ヤイ玉、此本は是伯父が毎夜講尺する、太平記二十一卷目、尊氏將軍の執權、高の師直といふ大名鹽冶判官といふ、これも歷々の武士の妻に心をかけ、末代迄惡名を殘し、鹽冶判官もそれゆへ命を失ふたは、もと侍從といふ女が中立からおこつた事。おさん殿と茂兵衞と、眞實の間男でないに極つても、ふたりつれて欠落めさつたは定よ。此二人にいづ方であふたり共、萬一爰え尋てござつた共、必ず〳〵物いふな、見ぬ顏せい。かういへばつれない水くさい樣なれどそうでない。ま男といふうき名のたつた二人の中へ、中立といはるゝ其方と三人よつた、そぶり成共人に見られては、そりや

おとがひ云々—口を叩く
金神—此神の方角に居れば災あり
はうだゝり—方角祟り
どよむ—土用の音をとれり、うづく
おされぬ—爭はれぬ
みだけ苧—亂れ苧、おさんが此もつれを解くに苦心する事
かねて—金にかく

に成程ぶちのめされ、助「おのれ助右衛門をぶつたぞよ」梅「ヲヽぶつた、身がぶつたがあやまりか、町人の分で本なはかけたがあやまりか、御さばき所で埓あけう。サアうせう」とひつたつれば、助「そんなら待おれ、解いてくりよ」梅「ヲヽとかせいでおかふか、まひとつ棒をくらふか」と、きめ付られてふしやう／＼になはひつほどき、助「こりや慥に預けた。所の庄屋にもことはつて歸るぞ。一寸でも取りにがしたら、請人共に首がとぶが合點か」梅「まだおとがひを聞おるか」と、ほうげた三つ四つくらはせて、玉が手を引内に入れ、かけがねはたとしめにけり。かごの者共笑止がり、「今のはいかふ痛ませう。かごでお歸りなされ」といへば、助右衛門顔をかゝへ、「此はづ／＼。今年は爰が金神に當つた。それで是ほうたゝり、殊にけふは土用の入、それでか跡がきつうどよむ。暦の事はおされぬ」と、減ず口して歸りけり。むすぼれて、なまなかつらきみだけ苧の、おさん茂兵衛は夢にだに、戀せぬ中の戀と成、つれて走し其日しも、茂兵衛がはだの紙入に、たつた三歩のかねてより、思ひもあへぬ旅の道、おさんの肌著代なして、白むく一重兼房に、裾模様有藺に鷺、あしに任せて奈良堺、大津伏見をうか／＼と、夫婦にあらぬ夫婦のさま、神佛にも人間にも、うとまれはてし身の上やと、たがひの心恥しく、顔打あげて

ふんばり―女を罵る詞、丹波與作にもあり

盆の凹―項

本繩―公に罪人を縛る仕方

かた息―肩で息する程

ゐる。もういをふ〳〵と思ふたれど、いや〳〵人のそこねる事。とかくおさん樣に疵さへつけねばよいと思ふて、此玉が急度目になつて、おさんさまのそばを一寸も離れぬ樣にしたによつて、かやめもいひ出す折がなかつたやら、わしをけぶたそうにして、そなたの文を燒いて捨おつたも見てゐる。それを妬に思ふて、針を棒に取なして、此樣にしなした。おのれを磔にかけ、かやめがまづ此樣に縛られ、獄門にかゝる奴なれど、此玉が慈悲心ひとつで助かつた。此比是をいはふとすれば、いひけし〳〵人でなしめ、じひが仇になつたか」と、かつぱとふして泣ければ、助「ふんばりめ血迷ふて何ぬかす。請人慥に預ケた」といひ捨て立歸る。梅龍とびかゝり、盆のくぼ引つかんで引あぐれば、足をつま立助「是なんとする」梅「何とするとはしばるさへ有に、町人の分でなぜ本繩に縛つた。急度訴へて處刑にする奴なれど、御免なれとぬかして解きおるか〳〵」としめつくる。助「あいたゝ、只の町人と違ふて、禁中のお役をすれば、本繩にかけても大じない。解いてほしくばそつちで解」梅「ヤアうぬめは繩付て預るさへ、昔からない作法に、禁中の御用を聞町人は、本繩かけても大事ないとは、どこから出た掟じや。上をかろしめた慮外者、どふしても大事ない」と、かごの棒引ぬいて、力に任せ七つ八つ、かた息

鉢坊主ー托鉢僧が乞ひ歩く米程の少祿

安東入道ー義貞が妻の伯父、兵敗れて自殺せんとする時義貞の妻諫めしを大に怒りて説破したり

頼んだーおさんを世話せよとたのむ

の商買、日月のめぐりを明かにしるす物なれば、ひつきやう月日に奉公さすると觀念して、大經師御手代衆參る、奉公人たま、請人赤松梅龍と判をすへたは、姪が不便なればこそ。國元では人なみに武士のまねをして、鉢坊主の手の内程、米も取た此梅龍、預ケ者には請取渡しの作法が有。此家わづか三間にたらぬ小借屋、めぐりにほそ溝ほるやほらず、薄壁一重ぬつたれ共、身が爲の千早の城廓、六波羅の六萬騎にも、落されまいと思ふ所に、どこへ見ぐるしい駕舁が泥臑。サア改て渡せ」と、辯舌は講尺、事の道理は太平記、かたちは安東入道が、理窟をこねるもかくやらん。助「あた子細らしい威しだて、おいてもらを。武士でもで侍も此助右衛門はなん共ない。あらためて請とれ」とかご打明、高手小手のしばりなは、ひつ立て引出す。玉は涙に目も顔も、水より出たる如くにて、「伯父様面目もござらぬ」と、わつと叫びし顔を見て、鬼の樣成梅龍も、涙を咽につまらせて、齒嚙をなすぞ道理成。玉は恨の身をふるはし、玉「是助右衛門、物には了簡品も有。おさんさま茂兵衛殿、一所にのいての上なれば、間男でないといふ云わけはなけれ共、かう成下つた始りは、以春樣の惡性と、そなたの心の佞人から、おさん樣に惚た間男といふはそなたじや。腰本のかやをだまして、何やかやとらせて頼んだを知つて

物」と、によつと出たる糟尾の兀僧、紙子の廣袖革柄の大脇指、梅「ヤア助右殿、夜中にけわしい、なんの用でござる」といへば、助「何の用とはおさめ過た。此中毎日人を越そなたが請に立た玉が事に付、用が有といへ共、酢のこんにやくのと我がまゝいふて、顔出しもせぬ請人が、どこの國に有事。此月朔日あくれば二日の曉、旦那外より歸りの門口、すりちがふて手代の茂兵衛めが、内義おさん女郎をそゝのかし走出、「やれ〳〵」といふ内に行衛がしれぬ。内を詮義すれば、玉めが寢所におさんじよろと茂兵衛めがねた躰にて、玉めはおさんの寢間に入かはつてねてゐた。しかれば主人の内義の、間男の中立した玉めなれば、同罪はのがれぬ。おさん茂兵衛を尋出す迄、請人といひ内證は伯父姪じやげな。そなたに急度預に來た。ふたりの者がはり付なれば玉は獄門。慥預た。そりやかご入」と、舁込所を梅龍棒はなつかんで、二三間押戻し「是お手代、此赤松梅龍が姪などを、むざと前垂奉公などに出す物ではおりない。二親もないやつ、漸伯父が太平記の講尺、暮六つから四つ時分迄、口をたゝいて一人に五錢づゝ、十人で五十錢の席料をもつて露命をつなぐ、すらう人の伯父が力には、絹氣をひつぱらせて腰本奉公に出す事もならぬ。大經師の家は常の町人とはちがひ、國王大臣も一年の鏡となさるゝ暦

糟尾―半白なる頭の中禿げたる（盛衰記）
けはしい―八釜しい
おさめ云々―落著過ぎた
酢の蒟蒻―何のかの
おりない―御座らぬ

合すよぎの内、「ヤァおさん樣か」「茂兵衛かはあはあゝ」一三重

中之卷

京ぢかき、岡崎村に分限者の、下屋敷をば兩隣、中に挾るしよげ鳥の、牢人の巢のとりぶきやね、見るかげほそき釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは、玉がためには伯父ながら、奉公の請に立、他人むきにて暮しけり。講尺果つれは聞手の老若、出家まじりに立歸る。聽衆「なんと聞事な講尺、五錢づつにはやすい物。あの梅龍ももう七十でも有ふが、一理窟有顏付、アヽよい辯舌、楠湊川合戰面白いどう中、仕方で講尺やられた所、本の和田の新發意を見る樣な、いかひ兵でござつたの。いづれも明晩々々」と、散々にこそ別れけれ。大經師助右衛門駕をさきに押立、「梅龍宿におやるか」と、あけんとすれば、門の戶ははやしめたり。助「ハテ門しめたしめぬとて、盜人に取らるゝ物も有まいが」と、わるゝ計に戶をたゝく。梅龍內よりつこど聲、「かしましい何者じや。此の家に聾はない。講尺なら明日來い〱」助「イヤ講尺聞たふない。大經師以春手代助右衛門じや。急に逢ねば叶はぬ」と、しきりにたゝけば 梅「せわしない。あくる間も有

しよげ鳥—萎れ居る鳥

とりぶき—日光そぎ甲州そぎにて葺く屋根（嬉遊笑覽）

太平記講釋—赤松青龍軒といふ者堺町にて太平記理盡抄を講ず（近代世事談）

いかい兵—大きな勇士

つこど聲—尖り聲

睨—覗か
とこやみ—常闇
しやうど—あてど

大ぶせり—大寢入り

人にとがめられ、又此上に盗人と、名をやうづまん柿ぶき、きのふの雨のかはかぬに、今宵の霧の淺じめり、足のふみどもうはすべり、そろり〳〵と引窓の、下を睨ばとこやみに、何のしやうどは見へね共、家の勝手は覺へたる、それを心の力なは、たぐる心も細引と、共にきれ行心地なり。足音餘所に知られじと、柱をさすり壁をなで、目は明ながら盲目の、杖を失ふ如くにて、敷居を一つ二つ越、三つ暦の細工所の、次の茶の間に玉が寢る。疊はいづく摺足の、屏風にはたと行當り、びつくりしたる膝慄ひ、おさんもはつと胸さはぎ、身もふるはるゝ空ね入。屏風そろ〳〵押やりて、よぎにひつしと抱き付、ゆりおこしゆり起し、ゆり起されて驚きの、今目の覺し風情にて、頭をなづれば縮緬頭巾。さん「サア是こそ」とうなづけば、男はけふの一禮の、聲を立ねば詞なく、手先に物をいわせては、ふしおがみ〳〵、心のたけを泣く涙、顏にはら〳〵落かゝる、其手を取て引よせて、肌と肌とは合ひながら、心へだたる屏風の中、緣の始は身のうへの仇の始と成にける。既に五更の八聲の鳥、門の戸はげしくとん〳〵〳〵、「旦那お歸り」はつときへ入寢所に、汗は湖水を湛へたり。「やい〳〵戻つた明やい」と、よばはるは以春の聲。助右衛門めをさまし、「どいつらも大ぶせり」と、提て出たる行燈の光、顏を見

まぶつて—守つて

井筒の女—提子の水は湯となれどまださめやらぬ我思といふ業平が高安通の唱歌を引く

た惚様じや、と思へば腹が立ます」と、涙をながし語りける。おさん溜息横手を打、「扨も扨も今の世の賢女とはそなたの事。男畜生とはつれあひ以春殿。女房ひとりまぶつてゐる男とてはなけれ共、あんまり女房をあほうにした踏付た仕方、涙がこぼれて腹が立。いつもの格なふ此うへに無心が有。そなたとおれと代つて、爰におれをねさせてたも。いつもので以春殿がござるとき、泣つ恨つくどかせ、今宵は玉のなびきやる顔で、夜のあくる迄だいてねて、内との者の見るまへ、幸母様宿つてなり、いき恥かゝせて本望とげたい。そなたのねまきのおひゑもかして、寝替はつてたもらぬか」玉「それはおやすい事なれど、召付ぬ木綿夜著、お肌が冷へてたまるまい」さん「エィなんのいの。昔の井筒の女とやらは、妬のほむらに鍉の水が湯となつた。男の恨に身が燃へて、寒さ冷たさ厭はぬ、ひらに頼む」玉「そんならばともかくも、随分ぬからしやんすな」と、名を引つゝむ此屛風、火を吹消して烏羽玉の、玉は奥にぞ入にける。科なき科に埋もれし、茂兵衛はつくづくと、思へば玉が心ざし、日比つれなき此男を、女心に恨もせず、仇を恩成詞の情、恥しし共面目なし。たとへ此まゝ死する共、一生に一度肌觸れて、玉が思ひを晴させ、情の恩を送らんと、目計出すふか頭巾、明屋の二階忍び出、おもやの屋根を四つばいの、姿を

行義—仕業
てんど—人中
割符—前後の事柄の符合する事

れにまあおさんさまの前なれど、さもしいきたない、卑怯至極な旦那樣のお心。茂兵衛殿へのあたりは、皆悋氣から起つた事。わたしにきつうほれたとて、すきさへあれば抱ついたり袖ひいたり、隙を取て爰を出よ、餘所にそつとかこふて、在所の親もやしなはふ、小袖やらふ銀やらふ。うるさやいやや、聞共ない事ばつかり。わたしが身さへ淸ければ、御夫婦いさかひさせまいと、今ならでは申ませぬ、餘所の夜咄しにわざと夜をふかして、表の男部屋の二階から、此やねづたひに、あれあの引窓の、繩を傳ふて、わたしが此ね所へ、大かた毎夜さござんする。あんまりで腹は立、見かぎりはてた旦那殿、しつかい盗人の行義か。おさん樣へ知らせまし、町中へもことはつて、でんどで恥をかかせます。必恨さつしやるな、と此女ごにしかられて、すご〳〵と我家の中、戸を内からたゝいて、戻つたぞよ〳〵と、おねまへござる後付、おかしいやら憎いやら、かゝつた事ではござんせぬ。所にわたしが茂兵衛殿の肩を持たゆへ、扨は二人が密通か。禁中の御役をして、侍同前の大經師が家で、不義者めとのにくしみは、悋氣の當り丁度割符が合ました。今夜も慥に忍ばつしやるは知れた事。今宵こそ聲立て、おまへに告うと覺悟を極め、帶も解かずに此通り。おまへも嘸お腹立、いかに家來なればとて、侮づつ

こうとうな―公道な、おとなしく花やかならぬ義(俚言集覽)

見やつたの―それ見たか

でござります」さん「ムウそなたもまだねやらぬの。別に用はなけれ共、茂兵衛の難に逢つたは、皆此さんが頼んだ事。それをどふして知つてやら、岡崎の伯父にかこ付、我身の上に取なし、いひ分してたもつた心ざし、あんまり〳〵嬉しうて、禮いひに來たわいの。さきの世の姉か妹か、死んでも恩は忘れはせぬ」と、はら〳〵涙をこぼしける。玉「是がまあ勿躰ない、お禮うけう覺へもなく、おまへのお頼みなされたやら、どふしたわけやら存ぜね共、さつきの様に申せしは、わたしが心有ての事」さん「いや〳〵わけをしらずには、そばから出ていひわけしやる筈がない」玉「御尤々、御不審の立はづ。そんなら懺悔いたしましよ。地躰わたしがあの人に、骨身に染で惚まして、二年此かたくどけ共、器量に似合ぬこうとうな、かたくろしい偏屈な生れ付、奉公の内いかな事、女ごの手をも握らぬの、女ごの顔は明た目で、みる事もいやじやの、と愛想づかしばつかりで、やさしい詞もかけられず。エヽ聞えぬきらはれた、にくい〳〵と思ふやさき、さつきの難義見やつたの。玉がばちがあたつた、よい氣味とは思ひしが、いや、そうでない。恨といふもこひからおこつたにくしみ。戀こそは叶はず共、惚たは定よ。爰で心底見せいではと、我身を捨た此玉を、まだ不便共思やるまい、とほんに恨めしうござんする。そ

人の爲の仕損—人の爲を思うて茂兵衛は仕損じたり

茂兵衛—藻にかく

露云々—露の玉に次の薄きも薄茶の意を含む

つゝぼり—茫然と

人のためのしぞこなひ、殊に大事の祝日、つれそふ女房姑が一生の詫言、ゆるしてやつて下され」と、手を合せても合點せず。以春彌腹を立、「扨はうぬらは密通か。此大經師は禁中のお役人、侍同事の町人。不義のうへに主の印判盗出す大罪、けふは早日もくれる、あす請人を呼よせ、段々せんさくする事有。ヤイ男共、隣の明屋の二階へほひ上下に急度番をせい。油斷するな」といひつくる。おさん親子は有やうに、いふてよかろかわるかろか、心定めぬうき草の、茂兵衛は下々にひつ立られて、わるびれぬ性根たゞしく哀なり。以「女共もさびしからん、お袋こよひはお泊なされ。舅殿の氣色見廻がてら、我等下立賣へ參つて、萬事つぶさに咄ませう。それ女房共頭巾おこしや。是助右衛門、戻りは定て夜がふけう、皆早ふ寢ませ、門もしめて火の用心。傳吉挑灯七介こい。隣の明屋に氣を付よ」と、いひ付表に出ければ、助右衛門は方々の、かけがねしめて部屋に入、臺所には有明の、四角行燈六角堂の、鐘こう〳〵と三重ふくる夜や、おさんは母御をねいらせて、心もしめるねまきの露、玉が常の寢所の、蒲團も薄き茶の間の角、四尺屏風を押のくれば、玉はねもせず寢所に、只つゝぼりと起ゐたり。玉「ハアこれはおさんさま、御用が有ならおねまから、お手をならしはなされず、見ぐるしい寢所へ何の御用

さゞいがら―栗螺殼にて拳骨をいふ

おぢ樣―後にある梅龍

さゞいがら、二三十くらはせ、「サァぬかさぬか」と睨めつくる。茂兵衞髮も解きむしられ、茂「ヲヽまだぶて〳〵、ふんでくれ。主の印判ぬすむとは、だいそれた此茂兵衞、去ながら今日迄茶屋の見世へ腰かけず、かるたの打樣存ぜず。人なみに著がへは持、足手まとひの妻子はなし。何を不足に私欲をせう。からだは粉にはたかれても、茂兵衞が口から云わけせぬ。おさん樣お袋樣、詫言云などあそばしたら、未來迄のお恨。ヤイ助右衞門、天道が物をおつしやれば、おのれがつらをぶち返し、ゆるして下され茂兵衞樣、とおがませいで無念なわい。くちおしいわ」と齒ぎしみし、顏をかたむけ泣ゐたり。以春もさすがなじみの下人、以「いか樣二十年見落しもない奴が、俄に惡心有筈なし。云わけせい〳〵」と、いへ共さらに返答せず。中居の玉はかねてより、茂兵衞に心をかけ、命も捨んと思ひこむ、心ざしをや顯しけん。主人の前に手をついて、「是は皆私が賴みし事、茂兵衞殿に科はなし。岡崎にゐられますわたしがおぢ樣、牢人のいとなみにくらしかね、五百目餘りの借錢にこひつめられ、腹を切との便あんまり悲しさ、あのお人を賴まし、銀才覺してもらひます。じひ心あまつて身の難義、まつぴら御免成ませ」と、誠しやかにいひければ、おさん親子は幸と、「玉出來しやつた。有樣によふいやつた。

心の奇麗と刀かけの奇麗とかく明けて奪ふ云々ー刀かけの巾着を盗みて中の紫服紗包より印を取出す、論語陽貨篇に悪紫之奪朱とある句を取る

白紙ーしらずにかく

印板おー印板を

目ねぶるー知らざる風をする

も紫ふくさ、印判そつと取出し、いつの間にかは助右衛門、戻つて後に有ぞとは、見ず白紙を押ひろげ、茂「文言銀目は跡にも書け。先印判お」としつかとおす。背に目のなきうたてさよ。助「茂兵衛それ何する」と、聲かけられてびつくりせしが、茂「ハアヽ助右衛門か。天道は恐ろしい、見付られてのけた。壹貫目程入用有つて、旦那の名代で銀をかる。此月中にあてが有。二十日程の間、目ねぶつてたもるか。そなたの氣では傍輩の首切らるゝもいとふまい。茂兵衛が科は極つた。くゝり成と殺し成と勝手にしや」となげ出す。助「ヲヽいきずりめ勝手にせいでおかふか。男共皆おじや。旦那お出なされ」とよばはれば、家内の上下何事やらんと立さはぐ。助右衛門鼻をしかめ、「旦那是御らんなされ。おまへの印判盗出し、白紙におす曲者、大經師の家をくつ返し、主を賣らふもしれぬやつ。請人に預けてのくゝしあげて」とひしめけば、おさん親子ははつと計、肝にこたへ胸にしみ、色ちがへする計なり。以春大きに驚き、「扨々日比程にもない見ちがへた根性。惣じて所帯がたあきなひ事、二人にまかせ置からは、事によつて主の印判、おすまひ物ではなけれ共、助右衛門にも知らさぬは私欲有に極つた。どふした心で印判ぬすんだ。助右衛門それいはせて聞や」助「エヽなまぬるい旦那殿」と、たぶさを取て

横道—曲つた事をする

他人さへ云々—況や主從なれば吾々を見込て賴まるゝ筈さつぱり云々—

知行納り、三十兩戻る金が有、是はおれもしつてゐる。二十日程の間のこと、賴むはそなた計。壹貫め調へて、親達の苦をはらしてたも。エヽ無念な、男の身ならば、是式に親達に苦はかけまい。娘生んだ親も損、女ごに生れた身も因果」と、しみ〴〵くどき賴みける。茂兵衞も一盃きげん、「はれやれ姬御前と申者はお氣がほそい。五十貫百貫めでも有ことか。仰山そうにそれ程の銀、ぐど〳〵おつしやる事かいの。旦那の印判一つ問屋へ持て參れば、江戶爲替二貫めや三貫目、常住取やりいたします。物ならたつた二十日の間、お氣遣なされますな。けふの內一貫め、急度調へ進じませう。私が少しの間、横道いたせば事がすむ、といふて盜するでもなく、人の目をかすめる事。よし盜すればとて、身の欲に付ぬは天道が明なり。おまへとてもお主、親の恥は娘の恥舅の恥は聟の恥、ふたりの主の恥をすゝぐは、畢竟お主の奉公。落ついて奥へござりませ」さん「アヽ嬉しい〳〵。物はいふて見よふ物。かゝさまにもさゝやいて、お心をやすめう。そなたに任せた賴むぞや。「こりやおなご共、お料理がよくば早ふお膳出しませ」と、いさみて奥に入にけり。茂兵衞とつくと思案を極め、他人さへ賴まるゝ、つまる所が主のため。たとへしわざは曲る共、心はさつぱり、ぬぐひ漆の刀かけ、主人以春の巾著を、明て奪ふ

ひければ、さん「さぞくたびれでは有ふが、急に咄す事が有。爰へ〳〵」と、膝もと近く小聲に成、「とつ様の方に面倒な事ができて來て、談合したいといふ事。恥をいはねば理が聞えず、知やる通りの御身體、下立賣の居屋敷を、町衆の加判で、おとゝし三十貫目の家質に入れたげな。それでも昔の株の家、物入つゞいて此春又町へもかくし、内證で八貫めの質に入たを、前の銀方が聞付、それとはなしに此月の三日限に、家渡すか銀立るか、返事次第に五日には目安あげる、と足もとから鳥の立樣に、俄に町へ屆たといの。いとしや、とつ樣の家渡すも大事ない。目安付るもかまはぬが、家一間を兩方へ、質に入たが顯ては、此岐阜屋道順が一ぶんがすたるとて、ほろ〳〵泣てござるげな。それで色々扱ひて此三日迄に、二貫百目の利をやつて、事はすむに極つて、其上で銀がない。漸と一貫目は黑谷のお寺で借出し、まあ一貫目が打てもみしやいでもないといの。以春樣にいふたらば、つい埒は明けれど、とつ樣もかゝ樣も、聟に無心云ひかけては、大事の息女にひけが付、とお年寄の我がつよく、以春樣へは鼻息も知らす事が叶はぬ。助右衞門にいふたらば、又例のしかみ顏、眉合に皺よせて、其足で以春樣にいふは定。我夫をさしおいて、手代にいふは何事、と結句物に尾鰭が付、此月末には去御公家衆の御

御身體―御身代
加判―連判
銀方―金貸した人
足もとから云々―俄の催促に云ふ諺
目安付る―訴訟する
一間―一軒
ひけ―負け
尾鰭云々―枝葉が出來て面倒になる

おさん蚶の口—海人の母が蚶にとられしよりおさんも蚶にとられたと洒落たり口々—接吻

六尺—駕舁

我からの—藻に住む蟲のわれからの歌をとる

鯛蚶、玉「あれお客が有退しやんせ」以「いや大事ない。蚶持參は女中客」と、いふ所へかご乘物、下立賣のお袋樣、お出の由を案内す。以「なむ三寶しうとめの古蚶、是はならぬ」と云捨て、迯て奥にぞかけ入ける。程なくかごをかきいるれば、おさん端迄出むかひ、「かゝ樣よふござんした。とつ樣はなぜおそい」母「さればいのとつさまは、おとゝひ花の本の連歌の會に夜をふかし、少風氣の有うへに、風早宰相樣の朝茶の湯、彌風を引そへ、それでゐござらぬ。先々けふは毎年かはらぬ初暦、商賣繁昌めでたい〳〵。以春殿はどこにぞ、悦びであらふの」さん「推量して下さんせ。御所方方々御嘉例の九獻に醉ふて、裏の數寄屋にねていられます。サア先奥へござんせ。りんやはつお供太義じや。晩にはこちから送らせましよ。六尺共往なしやや」と、親子件ひ入にけり。奉公を出過ぬ氣立傍輩の、下手につくも我からの、茂兵衞は早天より、暦くばりてさき〳〵の、びん美酒の麹の花、ちろ〳〵目にて立歸り、「あるいた事かな、七介やすみや。御一門衆お出なら、すぐに袴も著てゐて、爰で一ぷくたのしみ煙管、さらば醉をさまさうか」と、しばしくつろぎやすみしが、火燵の間より「是茂兵衞、爰へおじや」とよぶこゑはおさん樣。はつとゐなをり、茂「たつた今歸り、少し酒氣もござれ共、若急な御用もや」とい

粟田口―刑場

祝日―祝に言ふをかく

一度が定―一度あれば今度こそはと也

鎌足云々―海人が鎌足の爲に海底に沈み劍にて乳下を割き玉を藏めて歸りし事（謠曲海士と大織冠）

聲がする。あの中へいて何とする。エヽ氣の多い奴じやな。こりや男持なら、たつた一、人持物じや。間男すれば磔刑にかゝる。女子のたしなみしらぬか」と、だきすくめても爪立て、搔つくをあいたしこ。放せば離れてかけ出る。「ヤイ間男しのいたづら者、粟田口へいきたいな」と、後の我身を魂が、さきにしらせて祝日に、追かけ奥に入ければ玉もつゞいて立所を、以春むく／＼起あがり、後だきにひつたりと、以「サアうつくしい女猫捕へた」と、乳のあたりへ手をやれば、玉「アヽこそばあ。またしては／＼、だきついたり手をしめたり、一度がちやう。おさん様につけて、どこもかしこも紫色に成程つめらせます。アヽうるさや」とふり放す。以「どつこいやらぬ。本妻の悋氣と鰛飩に胡椒はお定り、なんとも存ぜぬ。紫色はおろか、身中が樺茶色に成とても、君ゆへならば厭はぬ。むごいぞゑ／＼、毎晩々々寢込にお見廻申せ共、一度も本望とげさせぬ。我ゆへに此以春、名をかへて鎌足の大臣。玉をとる思案ばつかり。今夜こそいやといはさぬ、一つの利劍をぬき持て、彼海底に飛入ぞ。應か／＼」とだきしむる。玉「どふ成とさしやんせ、こちやおさん様にいふ程に。あれおさん様／＼」以「やれやかましい。其外おさん鰐の口、口のついでに口々」と、顏をよすれば門口より、「頼みませう」と、臺にすへたる

肝いつて—世話して

ぶとうな—ごつごつした

濡かけ—戀しかけ

の云様で、茂兵衛の様に物やはらかにいふても事は調ふ。あの人も氣に如在はなさそふなが、ぢたいの顔が憎躰に、慳貪に見へるゆへ、詞もあいそがなさそうな。何と助右衛門男にほしいか。肝いつてやらふか」玉「エヽおさん様いやらしい事仰しやんすな。あんな男持ふより、牛につかれたがまし。同じ手代衆の内でも、茂兵衛どのゝ様な、かりそめに物云も、あいそらしうて、いつ腹立顔も見せず。ほんにあの様な男持をなごは果報でござんす」さん「ほんに云やればそうじや。猫にも人にも合縁奇えん、隣の紅粉屋の赤猫は、見かけからやさしう、此三毛をよび出すも、聲をほそめて恥しそうに見へて、こいつが男にしてやりたい。又向の練物屋の灰毛猫は、憎らしいぶとうな形で、遠慮會釋もなふ、屋根の上を馬せめる様に、怖い聲して此三毛をよび出す。先度も下立賣のかゝ様と、親子たつた二人ゐる縁先の藏の屋根で、此三毛をかはいげに、それは見られた事かいの。あんまりにくさに棹竹持て追たれば、おれを睨んだ目元の怖さ。こりや三毛よ、わるい男持なよ。灰毛猫が濡かけたら、一度が大事ふつてのけ。此さんが從者聟、よい男猫添そゞゐ。ヲヽかわいや」と猫なで聲。にやん〱あまへる女猫の聲、もれてやよそに妻戀の、男猫の聲々、三毛はこがれてかけ出る。さん「ヤイいたづらもの、大勢男猫の

たばね―家の締括りと束綿と掛く
奥綿―心を置くにかく、棧留縞の事
と渡り舶來
昆布の皮―厚き形容
のら云々―なまける
ちやうらかす―嘲弄す
しかきや―仕掛よ
かけかや―かけかへよ
さしあはふ―間に合ふ
給分云々―祝儀も給金の中に算入する

おも手代助右衞門、此家のたばね綿の小紋の羽織、主も心をおくしまの、袴もと渡りの昆布の皮、こはばつたる顔付にて、助「ヤ旦那はまだおやすみか。夜の中から方々の勤くたびれはお道理。申おさん樣、茂兵衞めが戻つたら、かはらふと存ずれど、どこにのらをかはくやら、二條むきお屋敷方の、進上曆がおそなはる、一息に廻つて來ませう。嘉例の通り御一門衆お出なされう。御臺所か姬君の樣に、猫ちやうらかしてござつてもすまぬ事。これ玉、同じ樣にそれなんじや。奥の臺子もしかきや。庭の小座敷も掃除しや。こたつに火をいりや。違棚のほこり拂ふて、すご六ばん將棊盤、ごいしの數もよんで見て、手水鉢に水入させ手拭もかけかや。たばこ盆に切炭いけて、膳立をして椀ふいて、お給仕にさしあはふ、夕めしはやふ食てしまや」と、一口に千色程、「まだめんどうな其猫め、ぎやあ〳〵とほへるが能で、鼠一疋取はせず。おねこ見てはぴろ〳〵と、屋根も垣もたまらぬ。重てやねでさかつたら、四つ足くゝつて西の洞院へながしてくりよ」と、なんの掛も構もなき、ねこに迄しぶ口の、茶の間中の間すみ〳〵見廻し、助「それ久三挾箱、曆くばる家に寄つてお引が出る、只取と思ふな給分に引つぐ、ことはつて置たぞ」と、打つれ表に出にけり。おさん玉が顔見合せ、「なんと今のを聞やつたか。同じ物

から猫云々—朱雀院の御女三の宮の猫が牝猫に呼ばれたる緣にて柏木と契る(源氏若菜)
から打—猫を繫ぐ唐打の紐此綱にて簾開き女三宮の姿見えたる緣より云ふ
春をもつて—名の以春なればいふ
大經師—表具師にて曆の製造を預る
どうぶくら—眞中
清華—大臣となるべき家柄
十德—狩衣に似たもの僧體の者の着る服

おさん茂兵衛 戀八卦柱曆（大經師昔曆）

作者 近松門左衛門

歌 から猫が男猫よぶとて、薄化粧するはしほらしや。猫さへも夫ゆへ忍ぶに、我身は何とから打の、エイソリヤ綱よりとけぬ契りぞや。じやれてそばへて手鞠とれ〳〵。まーつふたつ、みつ四ついつむつなゝつる八つる、こゝのほんほとおんゐ、ゐいころ〳〵〳〵、ころり火燵にしなだれて、なつくもをのが戀ならん。それは昔の女三の宮、是はおさんの當世女、おつとの名さへ春をもつては色香に鳴、梅の曆の根本大經師以春とて、袴いらずの長ばをり、家居も京のどうぶくら、諸役御免の門作り、名だかき四條烏丸。既に貞享元年きのへ子の十一月朔日、來ル丑の初こよみ、今日よりひろむる古例に任せ、あるじ以春は未明より、禁裡院中親王家、五攝家清華の御所方へ、新曆を獻上し、方々のめでた酒、嘉例の如く去年の如く、十德著ながら火燵にとんと高いびき。算用場には手代共、進上曆の牧包、江戸大阪のくだし曆、地うり子共の取さばき、一門振廻祝義の使、竈の霞鱠の雪、春めき渡る摺鉢の音、今日の霜月朔日を、元日とこそ祝ひけれ。

ば、一同「はあつ」と一度に頭を下げ、悦び涙悦び笑ひ、肩衣取て押退け〳〵、由良之介刀頂戴して左の小脇に突立れば、力彌も續て突立たり。次第〳〵に突立突込み引廻し引廻し、時も違はず場も違はず、主君の墓の左右にて、一度に腹を切たりし三世の縁こそ頼もしけれ。頓て殘らず介錯して直に御寺を墓所、萬劫末代萬々年、朽せぬ石に名を殘し、主君の子孫家繁昌、富貴自在の幸ひも、忠と孝との誠の心、天地に叶ひ佛神も、目出度守り給ひけり。

羊の步—一步一步死に近づく喩（摩耶經）
橫目—監督
上—將軍綱吉をさす

明寺に群集して門前市をぞ三重なしにける。既に時刻も午の刻羊の步み近付て、檢使の大將名越備前ノ守、光明寺に著給へば、介錯の役人を始めとして帳付橫目其外の、役目〳〵の場を請取爰を晴と列座あり。檢「用意能ば面々出られよ」と有ければ、左の幕より大星由良之介を先に立、矢間堀井原鄕右衞門廿三人續たり。右の幕より大星力彌第一にて小寺片山東ノ森廿二人打連て、步み出たる有樣は古今稀成武士の業、譽を取て世の中の濁に染ぬ白小袖、娑婆は夢なる契にて淺黃上下淺くとも、君に三世の忠孝と各墓に回向して、諸役人に一禮述べ一面に著座して、目と目を屹と見合せ檢使の詞を待たるは、天晴名士の腹切る樣尤斯こそ有べけれ、と知るも知らぬも淚を浮べ、あつと感ずる計なり。名越備前ノ守進み出、「上よりの御諚には此度鹽冶判官が家臣四十余騎、高の師直を討て亡君の仇を報ずる事、前代未聞の忠臣一人當千の働き甚感じ覺召し、一命助け置れたく思召すといへ共、太平の御代に干戈を動かし、御旗下を騷がすあやまり、國制據なく切腹仰付らるゝ。强將の下には弱兵なし。旁が忠義に依て鹽冶判官、存生の仁德を思召し遣れ、判官が一子竹王丸父が遺跡相違なく、出雲伯耆兩國宛行はるゝとの御諚、冥土へ參つて判官に申傳へ、有難く存奉り早々切腹仕れ」と、高らかに述給へ

いかつがましき—いかめしき
發言云々—斷乎として
人がまし—身分ある人
をし合—惜しと押合とかく

僧が手足をもいで取らば取れ、渡す事は叶はぬ」と、發言放ての給へば、郎「いや論は無益只込入て奪ひ取れ。門押破れ」とわめきける。斯る所に「畠山左京ノ大夫上使なり」と呼はれば、さしもの軍兵憚りて門の左右に平伏す。内より門を明ければ、畠山老僧に對面有、「鹽冶判官が家來共主人の仇を報はん爲、夜前高ノ師直が舘へ押寄せ、師直を討取る條武門の面目弓馬の譽といひながら、御所近邊共憚らず鎌倉を騒がす、御咎めに依て則仁木石堂に御預け、今日鹽冶が墓の前にて、殘らず切腹せさすべしとの御諚なり。はた又師直が首は一子師泰願ひに任せ、送り遣すべしとの仰なり」と述らるれば、住持御諚を承はり、「首桶しつらひ宜しくまかなひ取納め、師泰殿の御内にて人がましき方、請取り給へ」とありければ、「執權三隅の郡司」と嚴しげには名乘ども、甲斐なき主の首持て、悄々として歸りしは、面目なふこそ見へにけれ。畠「直に用意有べし」とて判官の廟を中にあて、左右に疊敷竝べ前に白砂積たるは、溢れし血を凊めん爲の用意なり。後に白幕引廻し白絹の布團を敷き、四十餘口の腹切刀三方に幷べたり。鎌倉中の諸侍「天晴武士の守り神、弓矢取る身のあやかり者」と威儀を正して參詣す。歌人は悼の和歌を陳ね、文者は歎きの韻を捜り、上下萬民老若男女名殘をし合ひ我先にと、光

天下に云々―朝夜の明るくなる如く天下にパッと知れる

弓取―武士

棒ちぎり木―乳迄の高さの棒事件のすみて後騒ぎ立つる意の諺

ぬ我等が一命彼等に施し報謝せよ」と、門外に下敷て待合せ見る武勇の程、天下にふるゝしのゝめや、是は高名寺の名は光明寺へと三重急ぎける。夜も明ゆけば谷七郷に隠れなく、在鎌倉の大小名何事やらんと、兜は著れ共鎧は著ず、片手矢はげて走るもあり、馬の腹帯を締兼て、肌脊に乘て駈るもあり。辻々の番太鼓人馬東西に走違へ、上下の騒動斜ならず。師直が嫡子師泰が郎等、光明寺の門前に雲霞の如く取かけ、「門を開きて御首渡せ。異議に及ばゝ寺の門を叩き破り、堂も伽藍も打砕き、片端に坊主首捻切て奪ひ取れ。渡せ〳〵」と犇きける。寺僧の面々衣の袖に玉襷、「棒よ杖よ」と防げども、制し兼て見へければ、住職の老僧立出、「やあ〳〵斯いふは師泰殿の手勢とや。して侍か下郎か、よも侍にては有まじ。鹽冶殿の家臣四十余人の人々は師直を討取、首を鹽冶の墓に手向本望達せし上は、鎌倉殿の御咎め恐有とて各身を捨て、只今幕府の御所へ罷出、如何樣共御制法に仰付られ候べし、と御下知を相待申さるゝ。是をこそ弓取の手本とはいふべけれ。和殿原は主君の親を闇々と討せ、其場へおり合討手の一人も切留ず、喧嘩過ての棒ちぎり木。佛場といひ長袖に向つていかつがましき振廻、當寺の法師は恐からず。幕府の御所より御指圖のなき間は、あの生首が髑髏に成迄もいつかな事、此老

浮木に云々―法華經にある句にて千載一遇の喜にいふ

光明寺―鎌倉にあり、泉岳寺をかへていふ

しめせ―消せ

りは消てなかりけり。由「此内は物臭し探せや捜せ」と云ふ聲に、内より炭を掴みかけ、割木を投かけ投つくる。矢間の庄司は炭俵弓手に掴んで投のけ、無二無三に切て入。師直今は叶はじと、躍り出るを重太郎餘すまじと飛掛り、押並べてむずと組み、一締締て跳倒し取て押へ、「高の武藏守師直を、矢間重太郎組留たり」と呼はれば、由良之介を始とし四十五人が聲々に、「浮木に逢る盲龜はこれ三千年の優曇華の、花を見たりや嬉しや」と、首打落し聲を上、躍り上り飛上り、扇を開き舞もあり、悅びの鬨の聲首眞中に取廻し、「妻を捨て子に別れ、老ひたる親を失ひしも、此首一ッ見ん爲の今日はいか成吉日」と、一首を叩いつくひ著つ、一度に「わつ」と嬉し泣き、理り過て哀なり。由良之介は師直が白無垢斷つて首押包み、由「矢間殿御親子は姿を變て片時も早く、我君の御菩提所光明寺の御墓まで此首を持參あれ。我々は後より」と、あらぬ下郎の首取上げ、同じく師直が白無垢切て押し包み、鎗に結付堀井の彌五郎大鷲文五に指荷はせ、由「師直が本首を御墓所に供ゆれば、今生の本望是迄なり。急まい〳〵急事ない。此屋敷も今迄は師直が屋敷なり。打れし跡は天下の地、踏荒すは恐れぞや。第一は火の用心螢程の火もしめせ」と、詰り〴〵を靜々と心靜かに巡見し、「敵の一類一家の武者、追手掛くるは日前なり。いら

ごくにも立ぬ—役に立ぬ

鎭—消し止められ

は水の幅に知るべきぞ」「心得たり」と堀井の彌惣、遠松甚六、外へ廻つて待かけしに、内より水をどう〳〵と、汲入〳〵流せども、水口割れて滴りの、跡へ余つて落口は岩に堰るゝ如くなり。〽「サア人あるに極つたり鎗を入て捜せや」と、手々に鎗を突込み〳〵狩立れば、堪り兼て泣き叫び、「なふお助け下され」と、這出るは藥師寺なり。人人「はつ」と惘れし所へ大星力彌走り寄り、「何のごくにも立ぬ奴、人手間取らせし憎さも憎し」と振上げて、首打落せば紅の血汐の樋とぞ流れける。由良之介大音上げ、「是程迄仕課せて師直を討漏す、能く天道に捨られたる我々、武運の程こそ口惜けれ。悄々歸つて死んより此所にて腹搔切り、四十五人の怨念惡靈となつて、師直を取殺さんと思ふは如何に」といひければ、力彌を始め原矢間、堀井片山四十余人、「何れも左樣に存ずれ共、大將の詞を相待たり。我々先を仕らん」と、面々肌を押し寛げ、既に斯よと見へし所に、兼て信ずる正八幡愛宕山の御加護にや、馬屋の傍なる小屋の内より煙頻りに渦卷上る。由良之介屹と見て、「南無三寶、あの煙り其儘打捨て外の人に鎭められ、鹽冶郎等四十余人師直を討損じ、狼狽たりといはれては、恥辱の上の名折なり。いざ鎭めん」士「尤」と我も〳〵と小屋の戸に手を掛け、「ゑいやつ」と引放せば、中には薪、炭俵、煙

卒爾—わけもなき敵對
形の如く——一と通り
靜まり返る—至りて靜肅

ける。大鷲文五原鄕右衞門詞を揃へ、「是は鹽冶判官高貞が家來の者共、主君の仇を報ぜん爲の働き候。天下へ對する狼藉にても候はず、元より兩隣仁木石堂殿へ、何の遺恨候はねば卒爾致さん樣もなし。火の用心は形の如く申付て候へば、是以御用心に及ぬ事只穩便に捨置れ候へ。夫とても是非御加勢と候へば、力なく一矢仕らん」と高聲に呼はつたり。兩家の人々是を聞、「御神妙〳〵弓矢取る身は相互。我人主人持たる身は、尤も斯こそ有べけれ。御用あらば承らん」と靜まり返つて控へける。一時計の戰に、寄手僅か二三人薄手負たる計にて、敵の手負は數知らず、討るゝ者百余人、殘る者は逃隱れ、今は手に立者もなし。され共大將師直、影も形も見へざれば、由良之助大きに急て、「年月心を碎きしは、彼奴一人を討ん爲。寐間と覺しき所を見よ」と、襖障子を蹴破り〳〵奧へ入て見てあれば、夜著蒲團引さばき枕計ぞ殘りける。由「ヤア是を見よ、斯る寒夜に此蒲團暖まり醒ざるは、只今脫しに極つたり。近くにあるぞそれ搜せ」と、天井屋根裏緣の下鎗を突込み矢を射入、打返して尋ぬれ共師直は無りけり。外にも人を配り置く、門へ出ん樣もなし。各呆れて立たりしが、由良之助傍を見廻し横手を打て、「あの水門の箱樋こそ一人這ふては通るべし。內より水を流しかけ外へ廻つて窺ひ見よ。內に人の有無

を抜て弓の弦ふッつ〳〵と切ければ、大竹に彈れて鴨居を四五寸持上、遣戸妻戸ははらはらと將棊倒しと成にける。力彌透さず緣の上へ駈上り、「鹽冶判官高貞が家臣大星由良之介義國、同じく力彌義道、此外忠義の武士四十五騎、亡君の仇を報ぜん爲攻寄せ候。武藏ノ守殿の御首を給はつて亡君判官が、黃泉の闇を照すべき存念なり」と呼はつて、一文字に切て入ゝば、「すはや夜討」と混亂して、宵の茶の湯の茶筅髮、寢惚貌に素肌武者、「太刀よ鎌よ」と犇いたり。小勢なれ共寄手は今宵必死の勇者、相詞合圖の笛吹合せ〳〵、爰に集り彼處に亂れ、馬手に開き弓手につぼみ、祕術を盡せば、由良之介、「余の者に眼なかけそ。只師直を討取れ」と八方に下知をなし、揉立て〳〵三重攻にけり。北隣は仁木幡磨守、南隣は石堂右馬之介、兩屋敷より何事かと、屋の棟に武者を上提灯星の如くなり。軍兵屋根より聲を掛け、「御屋敷騷動の聲、太刀音矢叫び事騷しく候故、狼藉者か盜賊か、但し非常の沙汰候か承り居よと主人申付らるゝ」と高らかにぞ呼はりける。寄手は元より返答せず、師直方にはうろたへて聞入る者もなく、隙間あらばと迯足も、門々には寄手の兵鎗の穗先を突かけて、出ば突んと待掛たり。屋根の上より口々に、「よし何にもせよ隣屋敷の騷動を、聞捨にせん樣もなし。御加勢申一防仕らん」とぞ呼はり

茶筅髮―髻の先を短く後へ垂れたる髮

仁木石堂―土屋主税本多孫太郎をさす（誠忠武鑑）

けはしく—はげしく

左右なふ—むやみに

三重 嬉しけれ。「時刻は能ぞすは乘れ」と、千崎彌五郎、須田五郎が肩を踏へて飛上り、塀の腕木に手を掛て、乘入んとせし所に、夜廻中間拍子木打て來りける。人々あつと靜まれ共、千「イヤ乘掛つたる一番乘、やはか乘で置べき」と、「ゐいやつ」と打跨ぎ、なんなくひらりと乘込ける。中間驚き「やれ盜人よ」といふ所を彌五郎取て押へ、「討て捨べき奴なれ共案内の爲暫く」と、帶を解て括し上げ控へ柱に縛り附け、千「我拍子木を打間に門の扉を打放せ」と、塀の内外諜し合せ、拍子木けはしく打ければ、外より小寺河瀨忠太夫、懸矢振上げどう／＼と打つ音に、相番の中間何事やらんと出る所を、彌五郎飛掛つて切て捨、又拍子木を打ければ、外より懸矢どう／＼／＼、咎むる中間ずつぱと切、拍子木の音かち／＼／＼、懸矢の音どう／＼／＼、中間出ればずつぱと切、三人切て捨る間に力に任せて打懸矢、門の金物打外し、貫抜中よりぽつきと折れ、扉微塵に打碎かれ、大門くはつとぞ開ける。大將由良之介忍びの火差上、内を見廻し山と聲を掛ければ、鐘と答へて一同に、我も／＼と込入しが、詰り／＼の戸を締て、内より錠は固めたり。敲き割れば目を醒し、内より先を取らるべし。左右なふ入べき樣もなき所に兼て期したる謀計、大竹の弓五張、戸口／＼の敷居鴨居に確かと食せ、各一度に手を揃へ、刀

碁盤に、金銀の砂子を蒔しに三重異らず。扨其次に堀井ノ彌惣七十二歳、一子彌九郎三十歳、親子名にあふ覺の者、ゆらり〳〵と出ければ、矢間の庄司六十八歳、嫡子矢間重太郎廿六歳、音に聞へし親子の武士、「今日を限りの死軍」とにつこと笑ふて出たるに、獅子と虎とが子を連て孤山を巡る如くなり。扨其外吉田、奥山、小寺が嫡子、由良が從弟の大星瀨平、岡野、中村、矢島ノ衛門、平賀ノ左衛門、牧野ノ平次、由良之介は後陣の押へ、忠臣以上四十五騎、義を泰山より重んじ、命を鵝毛と輕んじ、心を金石に比へしは、如何なる天魔破旬成共堪りつべうは無りけり。由良之介下知して曰く、「夜討の大事は奇正の變、敵を明りに誘引出し、味方は暗みを小楯に取れ。女童に手な負せそ。天下を恐るゝ敵討、矢を放つ共塀越さすな。火の用心に心を付て、繫ぎ馬を放さすな。折折に合圖の笛吹合せ〳〵、敵に中を割るゝな。敵をさへ討ならば、名乘て勢を引まとへ、合詞を常にして、味方討すな同士討すな。合詞も三度に替へ、乘込む時は山か鐘、軍になつては花か海、退口は笠か鶴。向ふ者は討て捨、逃る敵を追駈て、無益の高名手間取な。取るべき首は只一ッ。サァ攻寄せよ」と手組を揃へ、しと〳〵しと、しと〳〵〳〵と詰寄せて、門の南北二手に分り、屋形を睨んでひた〳〵と、塀裏に付たりし心の中こそ

彌惣—堀部彌兵衛
矢間—岡喜兵衛と十太郎
義を泰山云々—義重於泰山、死輕於鴻毛（司馬遷）
波旬—天魔に同じ
山か鐘—合詞にて山といへば鐘と答ふ以下同じ
詰り—壁や戸などの行き詰り

清氣云々—清氣なく濁氣充つとなり
老陽—偶數は陰奇數は陽にて一は若陽九は老陽なり（貞丈雜記）
金尅木云々—五行の内金は木を損ひ火は金を鑠かす（瑠璃天狗）
破軍—星の名にて此星の指せる所は不利なりと也
不破—不破數右衛門
東森—富森助左衛門
立川—横川勘平
千崎—神崎與五郎
河瀬—間瀬久太夫
村橋—倉橋傳助
遠松—近松勘六
赤根—赤埴源藏
磯川—磯貝十郎左衛門
花田—縹色

敵の要害遙かに見て、力「時こそ能れあれ御覽ぜ、人鎭つて清氣は沈み、空に朝霧横折れて濁氣上を覆へり。拍子木の調子金にして、數は九ツ老陽金尅木火尅金、自滅の相顯れたり。破軍は辰巳に向ふたり。東の門より南に附て、乘や〱」と下知すれば、「心得たり」と片山源太　鎗引提てぞ出にける。竹森喜多八大長刀、奥山孫七、須田五郎、勝田早見、東ノ森七筋合せの鎖にて、板金繋ぎの著込を著し、割筏わりふくべ、家金らんのぬりごてを、揃へてこそはさしもげに、音に聞へし原鄕右衛門、大鷲文五かけやの大槌、提げ〱下立ば、吉田、岡島、不破、前原、各 素鎗横たへて列を揃へて打たりけり。小寺藤内立川甚平、千崎彌五郎、河瀬忠太夫、彼等四人は半弓手挾み、「敵若遠見を付置くか、又は落行溢れ者介勢あらば射留よ」と、由良之介が下知に依て、左右を見定め前後に氣を付しんづ〱と歩み行く。蘆野、菅谷、千馬、村松、村橋傳次、大太刀佩てぞ續きける。鹽田赤根は長刀構へ、中にも磯川十郎は十文字の鞘外し、遠松甚六片鎌かたげ、杉野、木村、三村の二郎、皆一樣の花田の脚袢、由良之介が智畧にて、八尺計の大竹に弦を掛てぞ持たりける。勇む心は春めきて雪に秀る雪の梅、白梅嫉む白出立、白小袖に黒羽織、金の札に面々の假名實名書付て袖印に付たれば有明月に光あひ、白石黑石打散す亂れ

典廐―左右の馬頭の唐名、吉良の子上杉彈正をさす

燒鳥云々―燒鳥にも足に紐をつくると云ふ諺あれば用心すべしとなり

石公―黄石公

盛に小夜も漸更けにけり。やゝ有て表の門を叩き、「藥師寺二郎左衞門公能、初雪の御茶の湯に伺公致す」と呼はれば、門番立出、「はやお振廻は相濟お客も殘らずお歸、奥も漸仕廻にてお夜詰も退申。明日お出」と答へける。藥「いや苦しからず行より參る筈なれ共、典廐の御所に御用有て遲參せり。師直公の御寢間にてお咄申事も有。今宵は是に一宿致すお心易き藥師寺、ゆめ〳〵氣遣ひなき事。爰明けられよ」と云ければ、番「實も例の藥師寺殿いざ御通り候へ」と、門を開けばつゝと入、藥「番の衆太儀〳〵。最早夜中で有ふが、鹽冶判官が家老腰拔の由良之助、今は町人同前に成たるとは聞たれ共、燒鳥に經緒用心にあきはない。拍子木を絶さず、代り〳〵に寢ずの番、必油斷召さるな。ヤイ身が供の者、明日晝時分に迎に來ひ、朝飯は此方で食ふ。おれが食は焚するな」と、玄關に入ければ廣間は雨戸締る音、屋敷の廻り拍子木の音しん〳〵とぞ三重更渡る。夫柔能剛を制し弱能强を制するとは、張良に石公が傳へし祕法なり。鹽冶判官高貞の家臣大星由良之介、是を守ツて既に一味の勇士四十余騎、露命を亡君に抛ち死を一戰に極めて、獵船に取乘て苫深々と身を隱し、稻村ヶ崎を漕出し、天に滿たる曉の霜も鋭き白波の、岸の岩根に漕寄せたり。嫡子大星力彌苫押退けて舳板の上につゝと出、忍び挑灯差上、

智識—善知識にて人を導く高德の僧

口切云々—茶壺の口あけの茶會

こそ有べけれ。主君の敵の師直に母の仇妻の仇、三ツの怨みを一太刀に、晴さんと思ふ門出は嬉しうないか」力「嬉しうござる」由「足が輕い」と進むにも流石恩愛骨肉の、變れる形に氣おくれして、父には包む力彌が涙、父は我子をいさめの笑ひ、泣くも笑ふも武士の道、哀にも又賴母しし。老母むつくと起上り「アヽ嬉しや本望や。其心が知りたさに母は自害を中途にして、今の詞を待たるぞや。如何成智識の勸めより、今の詞を引導にて嫁姑は成佛す。跡の死骸の取置も去方に賴み置く。浮世に氣掛り露塵なし。突込む脇指合圖にして跡見返らず門出あれ。彼方へ參つて殿樣へ御披露申さばお悅、さぞお待かね成べし。片時も早く本望遂げ、親子連立ち早ふおじや。くはしい事は冥途にて、先夫までは去ばや」と、がはと突立「あつ」といふ、聲を聞捨て振捨てゝ、行ゑに響く夜半の鐘、共に孝行忠孝の武士の道こそ三重逞しき。爰に鎌倉高の武藏守師直が飯島の屋敷構、東面に石壁高く、西には大河漲りて、南の方に入海の、舟の往反自在にして、甚だ堅固の要害なり。忠功武勇の鹽冶が郎等、此要害に氣を屈し、今は狙ふ人なしと、聞より師直油斷を生じ、くせの驕奢の歡樂は運の末とぞ聞へける。文和三年天冴て冬も半の雲氷り、霰亂るゝ夜嵐に、口切の夜會を催し、數輩の客人勝手方、果は亂舞の酒

そと御知らせ有れかし」といへば、由「いや〳〵一言大事の所、其上母や女房も一味なりといはれては、母方の一門妻の縁者、天下の詮義にかゝらん時、人の心區々にて見苦しき事も有時は屍の上の恥辱なり。百丈の木に登つて一丈の枝より落るとは爰の事、母の恨みも妻のかこちも本望遂れば今の間に晴るゝ事。大事を思ひ立者が小事に拘る事なかれ」と、教訓あれば「御尤〳〵。ヤ忘れたり。鎌倉下向の一味の衆、四十余人より段段飛札到來」と、簞笥を開き取出せば、由「是は〳〵、扨は鎌倉首尾能便と覺えたり。それ封切れ」と親子の人、手〻手に開き見給へば、文「敵師直油斷の時節到來せり。一時も早く御下り待ち奉り候」と大概同じ文躰なり。由「サア目出度し〳〵。武具は先へ廻し置く。旅立とても此身がら明日と云ふも手伸なり、笠も草鞋も道での事。此文共を火中して金子を肌に忘るゝな。當地の拂ひ宿代は、書付に相添て簞笥の中に殘し置、心に掛る事もなし。我女房は其方が母、我も老母の顏ばせを暇乞に只一目、ちよつと覗いて立べし」と、手燭差上げ奥座敷の、襖戸そつと明ければ床の前に人伏たり。誰なるらんと能見れば、嫁姑の笛のくさり朱に染て伏し給ふ。力彌「是は」と驚けば由良之介押鎭め、「ア、是でこそ我女房、是こそは我母なれ。命を捨て我々が心に勇を附られしは、尤斯

、百丈の木云々—徒然草の人を木に上せて下るゝ時軒長程の高さになりて注意せし條を取れり

大事を思立—之も徒然草をとりたり

笛のくさり—喉ぶえ

岡目八目—圍碁より出たる諺にて本人より傍觀者が却てよく見分ける喩

の御恩束の間も忘れはせぬ。庭に飼ひかふ犬迄も、主の仇には嚙つくぞや。さいた刀は化粧か伊達か、左程敵が怖いか。いつ迄命が生きたいぞ、臆病者卑怯者。何の因果に腰拔を、子に持たぞ」と聲をあげ、前後不覺に泣き給ふ、恨みの程ぞ道理なる。力彌は俯き返答せず、由良之介色をかへ、「ヤァ口上ばるな女め。主の敵を得討いで恥をかいても身共が恥、酒宴遊興長生して樂みも身が樂み、人を雇ふ事でない。威勢強き師直を討損へば首が飛ぶ、討果すれば腹を切、何方へしても死なねばならぬ、損する者は我計。譽られて死なんより、誹られて生きたが德。一門も緣者も、岡目八目傍からはいひ能い物。力彌に向つて惡口我子にはいはれふが、夫にはいはれまい。サアいはれふば云て見よ」と、聲も荒く成所へ、老母は走り出給ひ、母「ヲヽ夫には云ひ惡く我子にはいひよいな。然らば其方は妾が子、其方に云ふは此母、去ながら口ではいはぬ。犬同前の畜生は礫に思ひ知らせん」と、碁笥なる石を引摑み搔摑み、目鼻も分ずばらり〳〵と投付〳〵、散々に投掛てわつと泣出し、母「なふ奥此方も元は他人なり。あの樣な子を持ちて、其方の心が恥かしい。何もいやるな云ふまいぞ。サア此方へ」と手を引て、涙ながらに入給ふ。流石は武士の嫁姑例なふこそ聞へけれ。力彌は泣いて平伏しが、「御心根も悼はしし。

山寺の云々―謠曲三井寺にある唄、下句花ぞ散りけるをおぎの聲とかへたり

盤上―双六、碁

亂舞―謠舞

家に爭ふ云々―父に爭ふ子あれば則ち身不義に陷らず（孝經）

烏帽子―元服して君より名を賜はる

膝を濡す―小便かけしなり

寺の春の夕を來て見れば、入相の鐘おぎの聲」庭の切戸を押開けて、由良之助の奥方つか〳〵と立出、「申々謠の聲碁石の音、隣座敷へ響きまする。私は夫婦の中、おいとしやお母堂様、遙々お供申せしもそもじ様の腰が抜け、お主の敵は打忘れ、盤上亂舞の遊び事、弓矢の道はすたりしと一門中の腹立。この異見の爲計、國許の老母女房が夕べ登つた、今朝早々内を出て今歸り、親子碁盤で阿房げな、山寺所じや有まい事。過分の所領を給はり、鹽冶判官高貞の執權と敬はれ、三千騎五千騎の諸侍の上に立、國中を靡けしは殿様の御恩ならざるや。其敵を生けて置き御命日の精進も御回向も、寺參りも何しに佛が受給はん。御恩は何で報ぜんとや。ヤイ力彌め悴め、父こそ腰が抜けふずれ、母が腹を貸したぞよ。なぜ父御前に異見はせぬ。家に爭ふ子なければ家治まらずといふ事を、常にいふたが忘れたか。己が二歳の秋の末有難や殿様の、お膝の上に抱き上げられ、親に劣らぬ人相有、成人して忠切なせ、と力彌とは殿様のおきせなされし烏帽子ぞや。其時に勿體なや、幼い者の習ひとて、殿のお膝を濡せしを却つて殿には御機嫌よく、主「でかした〳〵主の膝を憚らぬ、其心では百萬騎の敵を敵共思ふまい」と、御感の詞を常々にいひ聞せたを忘れはせまい。人でなしの父親は忘れても、此母は寢ても起ても主君

遠侍—中門の傍なる廊の如き所番人の詰所也

出來た—でかした

根太—床の下の横木

物影—目立たぬ所

とは云ひつ—とは云物の五つでか—力彌が五目もいて打たうかと也

氣がついたり。有まし如何に」と尋れ共、心計に息切の只ウヽ／＼と苦みて、言舌更に分らねば、由良之介碁盤を寄せ、「是此方より碁石を竝べ、圖を造つて尋ぬべし。合ば頷き合ぬ時は頭をふり、指を以て引直せ。白石は塀黑は舘と心得よ。爰は東表門一目を十間づもり、竝べし石數十四目、百四十間是皆塀か。ムヽ／＼折廻して平長屋、西の裏手は長屋か塀か。扨は是も折廻しの長屋門、櫓は爰に辰巳角玄關は爰の程、侍小屋は南か北か。ムヽ／＼三方に取廻し、馬屋は西か武具の藏、扨は爰等ぞ遠侍廣間は是より是迄な。奥の寢所は爰か彼處か。ムヽ出來た。然れば此間長廊下。此間が泉水築山廣庭ならん。北は明地か」碁盤の目、明いても塞ぐ手負の目、うんと計を最期にて終に墓なく成にけり。由「ヤレ音たてな沙汰するな。町屋住居の氣の毒さ。家主へ聞へては今日か明日かの發足に、大事の前の障碍なり。隣座敷へ聞へても、母女房に包む事、跡は兎もあれ當分遁れ、是又旅宿の重寶」と、親子頷き疊を上げ、根太こぢ放し死骸打込み、漸に元の如くに取繕ひ、疊に溢れし血を押拭ひ、物かげに敷換へ／＼、「サア能いはとは云ひつ、此上にも包むは兩隣、外より人も來る事有。色悟られな」と咡きて、親子碁盤に差向ひ、力「サア幾つで五ツでか」由「それでも成まいま一ツ置て六ツ」の鐘、謠「山

此時なり。片時も早く御下り、本望を遂げられよ。サア此事中仕廻ては浮世に思ひ置事なし。早々止めを刺いてたべ。熊野の牛王の起請の罰、現世にはあり〱とお手討にあふ現罰未來の無間も疑ひなし。那由陀劫が其間、阿鼻の苦患は受くる共、一言成共主君の忠、親の願を達する事、喜ばしや嬉しやな。去ながら願はくは今少ながらへ、敵討の御供し敵の首を一目見て、一所に腹を切ならば、なんぼふ嬉しかるべきぞ。忠義は人に負ね共、誠の時に外るゝは是も起請の罰か」とて、口說歎くも息切れて、哀淚の玉の緒の脈も亂れて見へにけり。親子も不覺の淚にくれ、「驚き入たる忠心、今一言の知らせにて大勢本意を遂ぐる事、一騎當千共いひつべし。身柄こそ足輕なれ、お主は冥途の鹽冶殿、我等親子も傍輩なり。主君の忠義に傍輩の禮を云も慮外なり。由良之介が志に此度の一味の武士、我々親子を始として以上四十五人有。假令其場へ出ず共其方親子を差加へ、四十七人忠義の武士と末代に名を留むべし。是を冥途の感狀と親父に語り吹聽あれ。あつたら武士を殘念や」と淚ぐめば嬉しげに、顏差上て一禮を云はんとすれど舌すくみ、聲も出ねば手を合せ、頭を下て頷きし、心の内こそ哀なれ。力彌は手負の顏色見て、「早目の色も變つたり。息の有内師直が、屋形の案內聞置きたし」と云ければ、由「實に是は

無間―無間地獄　阿鼻も同じ

那由陀劫―千億劫

すくみ―縮まつて動かぬ

手ぶり—物を持たずに行く、手ぶらに同じ

足輕寺岡親子が忠心と、鑓下に名を止め御恩を送り奉らんと、御城本へ走せ參じ籠城願ひ歎きしかど、牢人を集めては謀叛の籠城同前にて、天下のお咎め憚り有、叶ふまじきと追返され、親平藏は七十の老の望みも是迄なり。冥途へ參つて殿樣へ御奉公仕らん、手ぶりのお目見へ云ひ甲斐なし。己は敵師直が首取て、お土産に跡より參れと申置、去年の當月切腹致す。親の遺言お主の仇、人手にかけじと存じ立、緣を求め心を碎き、師直が馬屋奉公に罷出、馬の口取時もがな、只一討と佛神に、祈て時節を窺へ共用心深く引籠り、馬は扨置乘物でも他行とて致さねば、本望遂ん時節もなく、我身の運の拙なさと、思ひながらも世を恨み、天をかこちて一ト冬は、布子の袖の乾く間も、永き夜すがら忍び泣。よし仕損ぜばそれ迄よ。切込んと存ぜし內、各〻方が檢見の爲方々へ犬入るゝ。我へも其役申付見る事聞事內通し、虛言他言有まじと、熊野の牛王に血判すへ、方々へ出けるが、只目にかくるは此御親子、案內人に知らせじと當春より御奉公、親が念願殿樣の草葉の蔭の御忠節、切てもと存る故內通の度每に、由良之介親子の者腰が拔けて武道を忘れ、遊女に耽り酒宴に長じ、武具も馬具も賣拂ひ、主の敵を討事は思ひも寄らず、一門も中違ひといひ遣はすを誠にして、師直が用心怠り、連歌茶の湯花の會、油斷とは

御持弓―主君の弓を預つて近侍する役

を知るは、味方に十分の勝十分の徳取て、仕廻には此奴を殺しても助けても、損も益もないこと。損益なくば同じくは助くるは慈悲仁の道。我が計略は智より出で、お主が手討は勇の道、是常にいふ智仁勇、弓馬の家の守にも、本尊にも此三ツ、是を守るを忠臣共忠義の武士共名づくるぞ。エヽ早まつたり粗忽なり。去ながら若き者道理かな〳〵。我も口には斯くいへど、主君を無罪に殺害させ、其仇をも報じ得ず、主の敵と今日迄も、同じ天を戴くは智仁勇も口ばかり、忠臣の道を失はん、口惜さよ」と兩眼に、無念涙を浮ぶれば、力彌も教訓聞につけ、父の涙にもよほされ落涙止め兼にけり。深手の岡平起直り、親子の顔をつく〴〵見て、涙をはら〳〵と流し、岡「眞實敵の内通と思召れん恥かしや。疾に名乘らん〳〵とは存ぜしかど、一日も師直が扶持を受くれば、主從の道にあらずと延引し、此仕宜に罷成ル。拙者が親は前殿樣、御持弓の足輕寺岡平藏と申せし者、某は寺岡平右衛門、先年我等九歳の時、御領内の鹽燒濱檢地の落度に、親平藏御扶持を放され、流浪の身とは成ながら奉公こそは足輕なれ、忠義の道に違ひはなし。二君には仕へまじ。譜代のお主に今一度と、十余年の渇命は草の根を食み木の實を拾ひ、水を飲で暮せしに、去年殿樣滅亡と聞より親子が此時に、大手の御門を枕にして、鹽冶殿の弓

ないーはい
五音―宮商角徵羽なれども爰は只音調

一生の手始め仕損ずまじ」と、力「こりや岡平、用が有爰へ來い」と、にこやかに云ければ、岡「ない」と答へていざり寄る。力「いやずんど爰へ寄れ。遠慮なしに膝元へつゝと來い」といふ五音、岡平も心付脇指脫てからりと捨、丸腰になつて出んとす。力「ヤア其儘脇指さいて居れ。指いて來い」と重ねていへば、岡「何樣共とかく御意は背かじ」と、脇指さいて腰屈め、左勝手に座したりけり。力彌も小膝を立直し、「ヤレ己は最前關東の飛札を讀み、請取迄を書きながら、一文不通の無筆と僞り、主人の眼を晦まし誑かしたる不屆に依て、成敗するぞ」と聲をかけ、拔討にはたと切る。左の肩先肋をかけ脇指迄切付られ、仰向に返すを取て引敷止めを刺んとせし所へ、父由良之介立歸り、門口より聲をかけ、由「ヤレ其奴に止めを刺すな。子細有」と走り入、力彌が脇指取らんとすれば、力「此奴は敵の內通者お退なされ」と引放す。由「ヤレそれをお主は今知つたか。彼奴が作り無筆になり、敵方の內通とはそも〳〵より此由良之介が見付しが、只今討ては敵方にすは顯はれしと用心の氣を付させ、敵に六分の德有て味方に六分の損有。內通と知るからは其儘彼奴を生て置、謀計を打返しに白き物を黑く見せ、赤き物を青く見せ虛を實に振廻へば、彼奴は夫を誠とし、其通りを內通せん、時には敵に裏くはせ、居ながら敵の懷

〔顯はれ云々―朝ぼらけ宇治の川霧たえ〴〵にの歌による〕
〔うぢ〳〵―宇治にかく〕
〔犬―間諜〕
〔紙子臭い―きなくさい〕
〔まつかいな―眞赤と出鱈目とかく〕
〔せがみ―催促〕

言も、顯はれ渡るあじろ木や、うぢ〳〵として隱し兼、ずん〳〵に引さき茶釜の下に打くべて、門背戶に目を配る躰、力彌とつくと見濟して大きに惘れ、「是は扨色事などの文ならば祕す術も有べきが、いろはも知らぬと無筆に成て、人の心を許させしは底意に工み有奴。殊に飛脚が詞のはづれ、鎌倉よりと請取を書せて取たる次第迄、思へば敵の入たる犬彼奴內通に極つたり。エヽ出し拔かれし口惜さよ」と、胸を擦つて立たりしが、「我々が發足も今日明日に近付て、欠落するか道中にてはづすか、何にもせよおめ〳〵と取迯しては無念なり。一刻も油斷はならず、手討にせん」と思案を極め、然あらぬ顏にて　力「やい〳〵岡平、火の廻り氣を付よ紙子臭い」と出ければ、力「いや少しも苦しからぬ事。八幡愛宕方々のお洗米の包紙、只今火に上申たり」と、間に合虛もまつかいな、火箸なぶりて居たりけり。力「ムヽさこそ〳〵、ヤ最前の物もふは何方からぞ。又文などは來ぬか」といへば、岡「いや〳〵それは私用。近日御下り近付故道中の嗜み、晒し木綿の切レを買代物が遲いとて、氣の小さい商人め毎日せがみにうせをる。旦那に勤める岡平、三匁足らずの銀遣らずに立と思ふか」と、木綿は六尺一寸のがれ、誠しやかにぞ僞りける。力彌始終を聞屆け、「曲者に疑ひなし、下人手討は大事の物と豫て親の物語、

ふ
方々—所々奉公して
ひく—書く
じだらく無—検束也(俚言集覧)
三度飛脚—毎月三度東海道を往復せしめしよりいふ(我衣)
毛を吹て云々—藪をつゝいて蛇を出すと同意の諺

力彌打笑ひ、「世には無筆も多けれ共、己が年迄方々して一文字引事も讀む事もならぬとは、子共に劣つた奉公人。親仁のお歸り成されたら、屆けた衆を覺て申せ。ヤア序でに己に云事有。昨日お上りなされし女中、一人は身が母者人、お年よつたは祖母樣、隣の屋主の座敷を借り一兩日は御逗留。裏はひとつの行通ひ、牢人でも武家は武家、常の樣にじだらくに裏越に行まいぞ。お見廻申て來る迄に、用が有らば切戸を叩け」と、文共簞笥に錠おろし、裏へ出れば表より、「賴みませふ」といふ聲す。力彌聞付何事かと、障子の影より窺ふ共、思ひ掛けなく岡平は、「はて再々の賴みましよ。どれからぞふ」と立出る。客「いや我等は鎌倉の三度飛脚、大星由良之介樣の内衆岡平殿とは此方か。高師直樣の御屋敷から」と、狀取出せば、岡「しい〳〵高い〳〵。成程合點請取た」と懷中にをし入るゝ。飛「いや是々當代の師直樣、大事の御用と御念が入た。何時に屆いたと詳しい請取、欲う御座る」と云ければ、岡「アヽ聲高な合點じや。請取せん」とかけ入も、人は見ずとや蜆水、瀧本流の墨色や、なまなか常に無筆ぞと、僞はる筆の毛を吹て、疵を求むる類ひかや。飛脚は手形請取て立歸れば、岡平は封じ目切て小隅へより、繰返し讀む長文の、然も細字をつら〳〵と、南あかりの横櫺子影唇を動かせば、無筆と云し空

にし達ー主達の訛
もんじやりー御座り升の訛
ねまりー居られます
小寺ー小野寺十内
ゆつてー言ひて
ほつこうしもないー詰らない丹波與作にもあり
原ー惣右衛門のこと
あと笈ー背に負ふ笈
堀井彌五郎ー堀部安兵衛か後には彌九郎と出たり
伊勢のお師ー大神宮のお祓を國々に配る者
六十六部ー六部の事昔は法華經を日本六十六ヶ國に納めし故云

口上述んとする所に、又「物もふ」と案内す。岡「どれい」といらへ出ければ、客「是さにし達物さ問ひ申べい。我とうは常陸からつん出た、順禮さでおんじやり申。鎌倉切通しの邊で狀をことづかり申た。大星由良之介殿と云は、此屋臺にねまりめさるか。」岡「如何にも是が由良之介旅宿。シテ何方よりの御狀」といへば、客「是さお見やれ。狀は十四五もおじやり申ス。渡した人は小寺惣内竹森喜多八、片山源太と云へば先に合點だ。賴むと有てことづかり申た。順禮が屆けたと返事にゆつて遣りなされ」と、いふて出れば、客「是旦那殿大星由良之介樣は是か。こちは相州の馬方、三條堀川迄早追の通しに來ました。鎌倉の町原鄕右衛門と云人から、狀ことづかつて草臥ながらほつこしふもない」と持てくる。あと笈負たる高野ひじり、「我等此度東へ下り鎌倉の星月夜、堀井彌五郎殿と申御方より、急用の御狀とて事託りし」と置いて行。お祓ひ配りの伊勢のお師六十六部の納經者、關東廻しの商ひ便宜、思ひ〳〵の便について、案内合圖の忍びの狀數四十余通、九月五日の一時に到來するこそ不思議なれ。岡平一ツに引抱へ、力彌の前に手を突いて、岡「一度〳〵に申上んと存ぜし間に、追々と屆申故、數多ければお名も忘れ、元より無筆の私讀む事は盲目なり。狀は紛れ申せ共屆けられし口々は忘れませぬ」と申ける。

長路次―長い庇かけて長き庭の通路をいふ
片手ざし―碁盤を片手にさし上ぐ
岡平―寺坂吉右衛門
所化―僧
大鷲文吾―大高源五

兼好法師あとおひ 碁盤太平記

附たり師直がさよ衣今に一樣の黒羽織并に大勝四十七目のいし

近松門左衛門作

「物もふ。どなたぞ頼みましよ。頼みませふ。物もふ」もふと引聲も、長路次の裏座敷、牢人住居奥深し。折節嫡子の力彌は、碁盤引寄せ片手ざし、三ッ目がゝりの大指ひしぎ、腕先試して居たりしが、力「ヤイ岡平は居らぬか。物もふが有受取れ。岡平〳〵」と呼びければ、岡「どれい」と答へ出にける。客「是は承及ぶ鹽冶殿牢人、初の名は八幡六郎、今は大星由良之介殿と申御方のお宿は是か」岡「中々由良之介借宅なり」と云ければ、客「愚僧は關東の所化、用事有て昨日京著致せしが、鎌倉の町大鷲文五殿と申、是も鹽冶殿牢人なり、御狀一通ことづかり、急用なり大事の用慥に届くれとの事。お届け申」と出しける。岡「旦那は他行致され悴力彌宿にあり。申聞せん」と入らんとす。客「アヽ是々愚僧も本寺へ用有者、お目に掛るに及ばず」と、云ひ置てこそ出にけれ。岡平力彌に書狀を渡し、

い」島「南無阿彌陀佛」と喉笛に、がはと突きたて兩手をかけて、くるりとゑぐれば兩方の、面影消えて無かりけり。むざんや二人はなから死。男は女の姿を尋ね、女は「市樣」とのつゝ返しつ苦みの、くらむ眼に手を伸べて、尋迷ふぞ不便なる。終に一そく切斷の經絡六脈絶々に、息の通路ふつゝと切れ、うんと計を此世の名殘、いざよふ月の朝霜と、一度に命は絶てけり。弟善次は川端に捨てし衣裳と書置を、拾ひ驚き駈付て、見れば敢なく事切れたり。「南無三寶」と歎け共、詮なしかいなし面目なし。切ては兄の報恩と、恥も骸も衣裳に包み、負て一先立退きける。扨こそ世上に此男、死だ風説死ぬ沙汰、しやうじ二枚の繪双紙に、戀路の囘向をうけにける。

のつゝ―仰向け
一そく云々―一息にて息斷れると同時に血のめぐりが息む
いざよう―十一月十六日
川端―長柄川邊
生死二枚―市の死んだ死なぬの二枚の繪双紙を賣出す

吉原、梅田―墓場、くゆるはふすぼる意
六ツの巷―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天

の親には疎まるゝ、誠の親のありとても、親知らず子知らず、假令冥途で逢ふたりとも、何を證に誰をか見ん。惡業深き我身や、と聲をあげてぞ泣居たる。お島が心の歎には、一人の母の老の世に、いつかお主が年明きて、切て一日片時なりとも、湯水取られて往生せんと、是のみ一ッの願なりしに、病で死するは是非もなし。いとをしや母樣の、藥呑め灸せよ身養生して勤めよ、と大事にかけて下されし、此身體をば血に染めて、明日は堀江へ使たち、呼寄せ母の目に見せば、死入る樣の歎の顏、今見る樣で聞く樣で、思ひ過しの胸の中、五體の涙締寄せて、手にも袖にもせき餘り、漲る瀧に異らず。爰にくゆるは吉原よ、あれにふすぼる梅田のはか、他の無常の煙を見るも、明日は我身も何處の雲、何處の煙と立のぼり、誰に此骨拾はれん。冥土は六ッの巷ぞや。迷はぬ案内彼の煙の、消えざる内に我々も、と夫が脇指拔く形、島がまほろし後れじ、と用意の剃刀横たへて、市「サア只今ぞ、一足も早かるな遲かるな。手に手を取らんと思へ共、未だ死で見ぬ死出の旅、連れだとふやら連れまいやら、逢はふやら逢ふまいやら、二度生て生顏を見るは此世の限か」と、物をも云はず面影の、顏をしほ〳〵見合せて、わつと消入泣居たり。市「ヤア後れるな」島「後れませぬ」市「合點か」島「合點じや」市「南無阿彌陀佛を忘れま

鹿鴛鴦―畜生の中尤も夫婦仲善き故に云ふ

女夫池―天滿天神の北にあり、夫婦にかく

戀にせぐり云々―戀の爲に出でんとする魂が二人の思に引寄せらる

の身にぞ染む。お島も同じ我庵は、歌お初德兵衞のそのあか月の、夢も破れてまだ間もないに、心中すくせの報の業か。夫のみならず親方や、親の苦勞と思ひは知れど、男死せて見て居られうか。女房先立て存生あらば、それや犬猫も同じ事。同じ中にも鹿となり鴛鴦と生れて女夫池、生る間もなく身を果し猶や藻屑に埋まんと、又一向の憂淚、落ちて三途の川となる。男心もくれはてゝ、西か東か何處ぞと、月に向へど我影の、映らざるこそ不思議なれ。女も向ふ灯火の、壁にも窓にも障子にも、我影見へぬ怪さよ。アアあぢきなやはかなやな。誠や人の物語に、死する時節は人玉飛んで、其身の影の無きと聞く。市「嘸やお島も」島「市樣も」かくぞ最後の近くと、合圖の珠數の念佛の、一萬遍も繰詰て、九千遍にぞ早なりぬ。心細くも便なや、今千遍の命の內と、思へど我身は思はれず、先には如何いかにぞ、と案じ交せる互の形、茫然とこそ現れけれ。夢か現か空蟬の、もぬけの玉とも知らばこそ。こは何としていつの間に、一所に死ん嬉しや、と縺れ取りつき縋り合い、誠の形影の人、歎けば歎き泣けば泣き、こひにせぐりの玉の緖の、己が思ひにたぐられて、一里の道は隔たれど、鏡に映す如くなり。月は白みてあか月の、あれ明星も差昇る。近く最後一筋に、一ッ蓮と願へども、思へば〳〵我身のとが、養子

替るとも、連立つ道は唯一筋。今より數珠を繰初て、一萬遍に終る時夫が互の合圖ぞや。追付待つ」といひければ 島「合點しました、去ながら、同じ枕に死たいなあ。心はついて往きませふ」市「ヲヽ我とても其二階、顔を竝べて死たいなあ。心は跡に殘るぞ」と、あこがれ出る玉の緒の、互の目には見えね共殘し置のと連行と、兩刃に死する剃刀の、一ツ刀の亂れ燒亂れ心は 三重

血死期の道行

鉢タヽキ死神の導く道や陽炎の、はかなき虫も偶々は、朝の露に生殘る、夫よりも猶あだ比べ、是を限りと百八の、數とる歌たびに繰盡す命二ツを數珠二連、是が冥途の迎ぞや。見送る軒と見返る野邊と、中に飛びかふ夜這星、行て歸らば言傳ん。出て返らぬ魂の、あこがれ添ふとは知らねども傍に夫の有心、夫はお島と連立ちて歩む心の伴連は、目にちろちろとまぼろしの此は其人か、實か、と抱き付ば仇し野や、風ぼう〳〵たる閨の戸に、島「どれ市樣は」市「お島は」と尋る袖にふる涙、夜半の時雨となりにけり。是こそ曾根崎天神の、松と棕櫚との連理の森。書集めたる言の葉の、餘所に聞きしも今は又、餘所に嵐

殘し置く云々―市の魂は二階に殘し島の魂は市に連れ添ふ

陽炎―陰にかく、蜉蝣は朝になつて生殘るもあれど市等は生きぬと也

書集め云々―曾根崎心中をさす

火打が禁物―お初が心中の時火打たるに懲りし故

發起―懺悔

らばや〳〵」と云捨て二階に上りける。下女は見上て、玉「ハテ小きびの惡い聲つきじや。長兵衛門もよふ締やや。有明の消えぬ樣に油もたんと指いてたも。消へてもこちは火は打たぬ、己には火打が禁物じや。打音聞てもぞつとする」と呟きてこそ臥しにけれ。稍鎭まれる小夜格子市郎右衛門は立歸り、軒の下にてしはぶけば、お島は夫ぞと二階の窓、覗けど我が姿は見えじ聲を立べき樣もなく、柄つけの鏡差出し、星影映してひらめかし、爰に有とぞ知らせける。夫も心得扇を拔き、聲立てられねば金物の光に物をいはせては、招き合ひ〳〵我と我身を抱締て齒を喰詰て歎きける、深き思ひぞあぢきなき。弟の善次郎島が詞に發起して、惡心を飜し兄の命を助けんと、爰彼處と尋ね歩き、元の格子に走り付。兄は人ぞと立隱るれば善次郎は門を叩き、「長柄の市郎右衛門は是には居られ申さぬか。近江屋にて尋ればはや歸られたと申さるゝ。御存じないか」と呼ばはりける。内よりは「喧しい、夜更け廻つてそんな人は知らぬ」といへば、「南無三寶」と走り行。斯くと心を語りなば、死なで止みなん二ツの命、隔て疑ふ因果と因果、定まる業ぞ力なき。市「彼奴追駈けて討つて捨てん。いや〳〵見苦し最期の邪魔」と、心を鎭め小聲になり、「サア夜明も近づく人立あり、一所と思へど詮方なし。我は在所の堤にて最後の所は

いり譯云々―理由を述べるものにあらず

生身は死身―諺生あるものは必ず死す

へば勤の身が心中などで死るのは、お主へ對してぶしつけ、損を掛けるは身の罪科。去ながら死だ者が生返り其いり譯をいふにこそ。命に替る者はない。夫を捨て身を果すは、いふにいはれぬ詰まつた事、憎まふ者でもござんせぬ。斯ういふて私が心中する氣は無けれども、爰にも前の初様に手ごりの事も有故に、こりや前書の話ぞや。私が馴染の市様の勘當は、弟御の無實の難を身にかづき、所の住居もならぬとよ。これはなんたる胴慾ぞや。私等が今の此勤、だてにもはでにも身の爲でも一日片時成事か。親兄弟のいとしさゆへ、面白からぬ勤をも、つらいと一度いひやらぬは、親兄に苦をかけまいため。斯程大事の親里の貧苦を助けしお主なれば、御恩は更に忘れね共生身は死身、殊に又此比酒に當てらるゝ。若頓死でも致しなば、下された茶が末期の水」と、管まく躰に紛らかし、わつと計に堪へ兼ね、しやくり上げたる泣上戸と人目に見せし下心。市郎右衛門は忍び泣、弟は身の惡顧て、恥て悲む悔み泣、心は三ッに替れ共、同じ涙に曇る月、時雨の暗夜の本意なさよ。人影見てや町内の犬吠渡れば兄弟は、見付られては惡かりなんと、西東へぞ逃げ去りける。亭主夫婦は氣も付かず「管をまかずと早ふ寝や。皆々仕廻へ」といひければ、「あい」と答へて箱梯子、上りかゝつて、島「旦那様内義様、みんなさ

手が惡い―仕方が惡い
ごあんして―心易くお出になつて
けなりや―羨ましい
かたみ―半身
いて―往きて

て善次に逢ふ。ひらりと外すをちらりと見て、「是善次樣〳〵、手が惡い」と、よろ〳〵と縋付て、島「此方さんな聞へやせんぞゑ。前はさい〳〵ごあんして、何が恐ふて逃げさんす。是兄嫁の島じやいな。たつた今迄近江屋で兄さんと逢ふて居て、今日の樣子を聞きやした。大事のおれが男が勘當請けてござんしたりや、胸が痛ふて少の酒で舌が廻らぬ。此方さんは弟の身でけなりや機嫌が能さそうな。禮いふ事が有、ござんせ」と、胸倉取て引て行く。善次は「何も賴みます。賴みまする」と仰向にそり、引ずらるれば下女男、「是は島樣なんぞいの。サア內じや はいらんせ」と、無理無躰に押入るれば、上り口にひよろ〳〵と、かたみを頓と橫に投げ、「水給や」とて伏にける。「夜こそ更くれ」と一町の行燈仕廻へば天滿屋の、締たる門口暗夜に善次は島が心根の、恐ろしければ格子の影、身を引きそばめ立聞す。市郞右衛門は近江屋の人目にせかれ云々と、死際の契約せず便もがなと門に立、弟あり共知らざれば弟は兄がある共知らず、傾く月に東向き暗き格子を隔にて、內の樣をぞ聞にける。亭主夫婦これを見て、「島はいかふ醉ふたそうな、是いて休みや。お島〳〵」と茶を汲で、「一ッ呑みや」といひければ、島「あい〳〵、こりや忝い」と戴きて、「ほんに誠にお主たる身が勿躰ない、大事に掛けてくださんす。是を思

能き衣等—此語古今集序文にあり

とつかは—急忙

みめ—ほまれ

おふせて—かぶせて

ぴらくら—借金のどさくさ

なま—酔どれ

戸をたつ—死ぬる決心

て、夫で島様も近江屋へ送りました」といひければ、亭主「扨こそ〳〵そうあらふ。今宵丸屋のうたひ講に往たれば、町衆の話に長柄の市郎右衛門といふ人、報恩講の銀を盗み、親の勘當うけて、白晝に在所を追拂はれた。是も此方の島ゆへじやと女夫池で聞て來て、知らぬかといはるゝ故とつかはとして戻つた。前のおはつに懲果てた家名の出るも迷惑、容を倒すがみめでは無い。商賣せいでも大事ない。それ早ふ呼に遣れ」と、喚き散らせば女房も、「エヽ皆も氣が付かぬ。こちにいはるゝ事かいの。又淨るりに乘しやんなや。早う連て戻りやいの」と、女心のせはしし。譜代の下女は門より入り、玉「市様は、馴染ゆへ遣るは私が遣りましたが、勘當共ふんどう共、知つたらなんの遣りませふ。たつた今も近江屋へ往て見たれば、島様はきつう醉ふて居さんして、何をいふても譯がない。そんな事なら戻しませふ。お初様のかの夜さり、二階の梯子を踏み外し、己が胴骨踏まんした、形見の痛さが漸と、此比止んだに勿躰なや又踏まれてはならぬぞ」と、駈出してこそ走りけれ。斯くて弟の善次郎は兄におふせて銀盗み、所々のぴらくらを仕廻はんと此所へ來りしが、お島は酒に醉ひくづおれ、ひよろりひよろりとなまになり、近江屋出て濱筋や、今宵一ツに三途川越えんと思ひ詰たれば、心にはたと戸をたつる風呂屋の前に

らばいか樣共、孝行の盡し樣も有べきに、口惜さよ後悔さよ。產の親は見ず知らず養親には不孝を爲し、此市郎右衞門めは親の罰が當つたり。切て心の念願にて死して再度親子と生れ、今の御恩を報じたき其しるし、此杖の片折を未來の形見」と推戴き、「いかに講中組中も今生の暇乞、賴み申すは親の事。孝行盡せと妹に傳へてたべ。死するとあらば御回向も賴み申」と言置も、淚ながら餘所ながら見置きながらのはしばし。朽行身こそ三重

下の卷

哀なり、逢初し一夜を戀の水上に、三夜四夜五夜十夜百夜、通ひ車の蜆川、變る瀨枕沈む淵、思ひ二ツの中町や、更て苦む待宵に、明る詑しき別れ路の、憂を續木の梅田橋、うてさませと色茶屋の、色の出花の里ぞとは、醒ぬ花香を汲みてしれ。實にや士農工商の、品數々の其中に情で賣れば情で買ふ、歌人の評判つけ置し、能き衣著たる商人も誠を守る天滿屋の、亭主は外より歸りしが、「なんと女子共は仕廻ふたか。島は今宵はどうした」といへば、「島樣は今宵は長柄の市樣とて、馴染の御客が久しぶりで、近江屋迄見えまし

長柄の云々―遮莫名のみ長柄の橋柱朽ちずば今の人も忍ばじ（玉葉集）

蜆川―橋をかけて深草少將の故事を含めたり

瀨枕―早瀨の波が枕を打返す樣にも島が數多の客に接する事

花香―茶の香、色の衰へぬ遊女の事

歌人―貫之

てはつと泣き、「假令千兩萬兩でも銀惜いとは思はぬが、廢る己が名が惜い。近比面目無けれ共、人々も聞てたべ。此奴はとつくに殺す奴なれ共、今ならでは申さぬが、元我々が實子でなし。大坂の去人の四十二の二ッ子にて、産屋よりもらひ守育て、後に弟が出來たれ共夫には替ず可愛さに、育てるに從ひ性惡く、勘當せんと思ひし事五度三度には限らね共、若や己が寢心に養子といふ事知るならば、眞の親なら斯あるまいと我々夫婦を疎みやせん、と義理も有不便もあり、殊に母が最後にも、弟より彼兄を繼母に掛けて呉れるな、といふて死だは小耳にも定めて覺へて居ろふぞや。じんぎもよくも身の上も本子には忘るゝに、其本子より己をば大切にせしかひもなく、湯を沸かして水いらずの親の内で盜をする。是は如何なる性根ぞ」と聲をあげて泣きけれ共、子は覺へなき事ながら云譯も無きしだらと成。親も道理子も道理、心にこもる哀さの兩人の涙堰きあへず、と叉「かふいふも恥の恥、勘當じや出てうせふ。親子名殘の形見の杖、身に覺へよ」と追取つて、さんぐ\に打ちければ杖は中よりふつゝと折る。飛掛つて踏む所を妹下人縋付、泣くぐ\奥へぞ入りにける。市郎右衛門涙をはらぐ\と流し、「何も申事はなし。親ならぬ親子ならぬ子、眞實の親子にも勝つたる御恩德、いつか報じ申べき。疾にも斯樣に承は

はつと―わつと と讀むか

四十二の云々―四二に二を加ふれば死々の音となる故忌む

じんぎ―仁義も欲もなり

湯を沸し云々―折角育てゝ役に立ゝぬ事、水入らずけ疎き者の交るは油に水の交るが如しの意にて親しき同士に云ふ（俚言集覽）

身が銀―我が金
己が云々―汝を生かして
とざま―外様、公開の詮議さするは公明正大
大口小口―口幅の利く
憎いが餘つて―不肖の子程可愛い

付られ、仰天するは盜人な。身が銀ならば親の慈悲沙汰なしにもして遣らふ。身の油にて講中が、御開山へ奉る御茶所の銀じや盜人め、一文一字違ふても己が生けて置れふか。我等一人は緣者の證據それ〱講中組中」と、呼ばはる聲に向い隣、一在所が馳集まり、とざまの詮議ぞ是非もなき。介右衞門大きにせき、「サア何もの目の前で、掛硯を開かん」と引きだし見れ共金銀は、一錢とても無かりけり。介右衞門地團太踏み、淚を流いて「エ口惜や、何代か此家にこごとの有つた例もなし。歲六十に及んで一在所といひ講中の、大口小口動かする、己計が恥と思ふか。盜人を捕へて見れば我子なり。此手間で是程の能い事を仕たならば、親の身ではどれ程の自慢であらふと思ふぞやれ。成人の子を持てば親の心安めぞ、と人もいふに己には、寢た間も心休まらず揚句に斯る大事を仕出す。內でこふした心からは、外で何がな仕置きつらん。誰に似て此根性、憎いが餘つて不便なり。不便の餘りの憎さや」と地そらを叩いて無念泣、實に尤に憐なり。市郞右衞門顏を擡げ「鼻紙入は明けたれ共金銀には手をさゝず、盜人は外にあらん。心を靜めて御穿鑿」と、泣く〱いへば飛掛り喰付て「エヽ腹の立。盜をする子を持つて、なんと心が靜められうぞ。親の心を知ぬか」と懷中搜せば以前の壹步、「是を見よ」と打ちつけて、大聲あげ

三寶荒神―竈の神

機嫌さん〳〵―散々に不機嫌

よくも知らせ―よう知らせてくれた

見いれ―魅れ
よの悪性―他の女狂は誰もある故許さうがと也

ん」と、茶碗引寄せつぎければ「こりやどうじや。酒の中より壹歩が湧く。寶の泉か有難い」と、皆打明けて「是は夢か現か、三寶荒神の御利生か、死したる母の御授けか」と、嬉いやら恐いやら分別に能はねども、「久々で金けに逢ふた。先めでたふ壹歩のうは汁吸ひませふ」と、戴き〳〵ぐつと飲み、壹歩を紙に押包み、懐に納めける。黄金は人の身を富ます寶なれども此身には、命を刻む刃となる善悪こそは哀なれ。所へ善次ひよつと出、「ヤア兄者人お歸りか。推參な御異見なれ共、お身持がそうでない。親仁も機嫌さん〳〵のうへ、蜆川の何處からやら、悪い所へ文が來て親仁が見付、それそこな鼻紙袋に入置かれた。我らは南の御堂へ親仁の使に参るなり、跡で首尾よふなされ」といへば、市郎右衛門は肝潰し、是はと惘れ居る中に、善次は密と後手に、御酒徳利を隱し取、表に出て押し戴き、一さんに駈出し心の内こそ笑しけれ。斯く共知らず市郎右衛門、常々不和成弟の、流石恩愛なればこそ能くも知らせて有ける、と鼻紙袋の紐を解き文を捜す所へ、親つか〳〵と出後に立て、「それは何する市郎右衛門」「エ」「はつ」と驚き飛退り差俯伏てぞ居たりける。介右衛門聲をあげ、「己は天魔が見いれたか、佛罰が當つたか。よの悪性は若い者有らふ事ともいはれうが、あれ掛硯の口明いたり。鎰を入たる鼻紙袋明けて我に見

縒ひ紐を付けたる紙入（鯽の糸巻）

我とおびえ—自分から吃驚する

どうてん—動轉にて驚く事（俚言集覽）

心置—遠慮する

細きお島と一命の終る端とぞ成にける。講中も挨拶なく「男の子は何處もそれ〳〵。先お暇申ませふ。なんと太郎兵衛若い衆がよね〳〵といふ程に、何樣した事と思ふたが、田地を賣つて買ふゆへに、それでお山をよねといふ。今講釋が聞えた」と、堅い輕口いふて歸れば、介右衞門も苦笑ひ、奥の間にこそ入にけれ。善次郎は只一人外の事は耳にも入らず、一心不亂に掛硯の銀に性根を奪はれて、そろりと立つて錠前を押て見引て見捻て見て、奥を覗き表を見、箱口取てもち上れば、慄ふてどうど打落し、我とおびえて飛上り、種々樣々に盜み樣工夫することこそ恐ろしき。善「ヤア忝い鎰の入たる鼻紙入親仁が忘れ置れたり」引解き鎰取出しまんまと明て、鎰は元の紙入に初の如く納め置、掛硯の引出明け、二包の白銀を下懷へ押込んで、小判は頭巾にぐはらりと入、裸壹歩を手に握れば、奥より親の聲として、「善次々々」と呼懸くる。善「あい」といへ共此壹歩置所にどうてんし、口へ入たり目へ入たり狼狽廻つて釜の上なる御酒德利へ、ざら〳〵と移し入、親の前へぞ出にける。斯る所に市郎右衞門、内へ歸れど敷居高く、心置るゝ家來迄何も野畑へ出たれば、誰に首尾問ふ便もなく、上り口にとほんとして、寒さは寒し酒壹ッと膳棚捜せど酒もなし。市「ヤア荒神の御酒がある。冷でも壹ッ戴ひて、胸のもや〳〵はらさ

どれい―返事の詞どれよりの略

あたじたゝるい―あたは罵聲いやにしつこい事

鼻紙袋―四角に

躰あけ、方々の借錢堤際の田地をも、七百目の質に入、四貫めの手形したと聞。斯した性になるからは一錢も持たされず。あの弟めは一日でも居らねば年貢の埒明かず、身共が上りませふ」といへば、弟は律義な顔つくり、「太儀ながらそうなされ。ア丶何も、性の能い兄きにて、年寄られた親仁の苦勞でござる」といひければ、講中「夫はきやうがる今聞た」と頭を振り顔を顰める。介右衛門重ねて「白銀五百目貳包、小判廿五兩壹歩合せて四十切、改めて預つた」と數讀み揃へ懐中より、掛硯の鍵出し引出し開けて、金銀取入錠おろし鎰を袋に入にける。時に表へ駕の者「頼みませふ」と云ければ、「どれい」といふて妹のお吉、「何所からの使」といふ。「私は蜆川天滿やのお島様より市郎右衛門様へ急な使に參つたり。此文進ぜて下されませ」と高聲にいひければ、妹「ア丶爰な人高い聲さつしやんな。兄様は夕べから未歸られず、私が預り届けませふ」駕「お歸り次第頼みまする」と云捨てこそ歸りけれ。介右衛門聞付て「お吉今のはなんじや」吉「イヤなんでも御座りませぬ」親「なんでも無いとは己等迄が一ツになつて親の目を拔居るか」と、文捻たくつて「是何も、田地賣らせた女めが、市様まいる身ゟとは、はて扨々あたじたよるい。皆の手前面目ない。待て己どふする」と、鼻紙袋へ文をも入、ぐるぐる捲し小撚より、

縁
しゆらい代—諸雑用、集禮とかく
すつきり—すつかり
九兩—呉れうにかく
ぢうそう—十三にて中津川筋にあり
國島—柴島にて長柄の北
腹いる—腹立を慰める
お霜月—頭の白きに掛く、報恩講は十一月廿二日より七日間に行へば也（俳諧歳時記）
お茶所云々—御本山へ上る賽錢の事

藤の棚、谷町からと云ふもあり九間の駕夫が揚錢の、殘りも今日はすつきりと取て九兩二分の銀。道頓堀の水茶屋の、或は饂飩倹飩のそばで聞さへ笑止なり。善次郎もて扱ひ「尤掛は負たれ共、節季でも有事かつきともなひ今日に限り、此様にせがむのは。ムヽ合點じや〳〵。兄市郎右衛門のうつけもの、天滿屋のお島にぐはら〳〵と片鼻うちあけて、親仁の機嫌散々にて半勘當の身となつた。夫を聞て我迄を氣遣ふと見へたが、兄とは各別こんな銀譯悪ふする男でない。親仁にいふならいふて見や、一文にも成まいが。遅ふて此月一ぱいに濟まそといふから虚はない。ぢうそう國島北南の長柄で男といはれたる、善次郎じやがなんと見た。僅二貫目内外で捨てる善次が名ではない。親仁にいふて此善次を勘當させて腹いるか、但は自然に銀取るか勝手次第」と投出し、立派にいへば掛乞共「いかなれ虚は長柄川、砂にはよもや成るまいぞ」と、幾日々々の日切もて皆々宿所に歸りける。親介右衛門は六十餘頭に積るお霜月、講中お茶所の冥加錢殘らず爰に持ち集まり、お勤過ぐれば表に出で介右衛門云ひけるは、「何も講中有難いと思召せ。毎年のお霜月懈怠もなふ上ぐる事、自力では叶ず御恩どくのおかげなり。扨去年の通り此銀を兄市郎右衛門に持たせて京へ遣る筈なるが、在所で沙汰も聞かれつらん。新地狂に身

とぼし—色をあさりて
幾際—幾節季
斷りました—念ついた
あぢにして—繕ひて
しらごかし—正直ぶりて言ひくろめること、鼻紙の色の白きにかく
仕着—着物拵へてやらう
御人體—富家の子息にも似ぬ
利喰云々—利息が段々重なる事もどるは泥鰌の

の七兵衛、エヽお前は譯の悪い。術に依て待ならば待まいものでも無けれ共、幾際か／＼今日遣らふ明日遣らふ。假初ながら五百目餘り五匁も埒明かす。夫に夕も鄰までお出なされ、此方へは音信なし、あんまりな爲され樣。今日は親御樣へ直に申して取て來いと旦那が申付ました、斷りました」と入所を引留て、善「こりや聞えぬ日比の己じや知らぬかい。五百目や壹貫め今でも遣るは合點なれど、親仁が手前をあぢにして末永ふ出よふ爲、少しの銀を延引した。そちが差配で二三日何卒頼む。ヤアいつやらの紙花も思ひの外に遲なはり、面目ない／＼。これも拂と一度に遣ろ。今改めてこりやばつとうちなをすは」と、捻て出せし鼻紙のしらごかしこそ笑止なれ。所へ駕籠の長介來り、「私が請合の菱屋の花代津の國屋の料理代、合三百四十五匁六分、扨も／＼せがまれます。其上お前は當もない花車や娘仲居にまで、仕着をして取らせふと約束計でまいらぬゆへ。私がちうでも取たかと毎日毎夜の使立、内はやうぢう師走にて何共迷惑仕る。今日は是非に請取ませふ。それに成らずば、親旦那へ訴訟申」といふ所へ、五十餘の女房綿帽子にて顏包み、「編笠島の笹屋の嚊でござんする。御じんたいとも覺へませぬ。我等が僅の商賣の元手も利喰ひの月おどる泥鰌汁のしゆらい代」とり切間は何所迄も著き纏わるよ

いわれざる—いらざる、爰も作替

しどなし—しだらなし

うつけた—打と倥侗とかく

ほの〴〵と—人丸の歌をとる

其名はいはじ—俗傳の物いはじ父は長柄の橋柱泣かずは雉子も射られざらましの歌を取る

ぶう〳〵—無頼漢

氣が利かぬ。船頭衆頼みます。舟に乘せて下んせ」と、泣叫べば人々は「折も惡し場も惡し。是非御堪忍〳〵」と、むたいに舟に抱き乘せ櫂を早めて漕出す。猶舟中より聲をあげ貞「銀は持いでいわれざる、戀の意氣地の淨るりだて、身が前では措てくれ。おけ〳〵や」と、舟端敲き手を敲き笑ふて舟は上りける。市郎右衛門四邊を見廻し、「ハア丶我ながらしどもなや。氣が違ふた南無三寶、一期と思ふ女房を我物顏の見憎さに、苛つは戀の癖なれ共、思へば口惜こうせいでも、三匁では彼頰をうつけた事と思ひやせん。島が心の恥かしや。氣遣ひかけし可愛や」と、見送る方もほの〴〵と明石の客の乘る舟に、お島も隱れ島隱れ蜆川へと三重

中の卷

こがれ行く其名は云はじ名を問へば父は長柄の田地持、市郎右衛門が弟善次郎なれど惡性者、人の意見も馬の耳、餘所吹く風のぶう〳〵にて、夜歩行日歩行とほしたて、歸れば小宿で衣裳を仕換へ、稼ぐ躰をば親兄に、これみやの前大根を、荷ふて家路に戻りける。斯る所へ下男つか〳〵と寄て棒鼻取り、「申善樣、これお見忘れなされたか。毛馬屋

ますら―いかるだのますらとて外道の道士、職人鑑にありて此處もその作替へ

はし〱云々―場末の曖昧屋

濱の納屋―納屋のかげにて情を賣る辻君に成下る

けんびいしし―檢非違使勝舟、あらより又例の作替

まい合―眉間

身が客に引かれ芝居へ往たが珍いか、船に乗るが不思議なか。淨るりは其許より私が能ふ覺へて居る。晩に此方の見世へおじや、よふ合點のいくよふに、敎へて遣らふ」と世話やけ共、市郎右衛門もいひ掛り、「いや〱此方に習わいでも、此方の胸中にある淨るりは、此鼻が覺えて居るお聞きやれ」と、扇を拍て、「扨もますらが此目の玉ぐつと脫出、花人親王の蜆川の御所の躰とつくと見屆候へば、まのゝ長者同前の大銀遣に思はれて、金銀小袖を仕て囉ひ深い男を振捨、登り詰て揚句には姫君を請出すとて、料理獻立表替眞最中と見て候。兩人が中へ某が毒氣を吹込み男と女と不和になし、同士戰の口舌をさせば姫君は見放され、はし〲のくら屋へ下り後には濱の納屋の影、一本立にて候、と語りけるこそ不思議なれ。なんと此節に違があるか」といひければ、眞「チヽよい推量追付お島を請けて見せう。なんぼ急ても張合ふても金で語る淨るりは、少と喉に詰らふぞ。こりや是見よ」と、お島にしつかと抱き付「なんと腹が立か」といへば、又扇の拍子を拍て、市「あら不思議やますらが行ふ魔法の形、天上に現れ出異形は手を伸べけんひいしがまい合を、破て退けとはたと打つ。ハァ拍子に掛つて麁相〱」眞「ヤァおのれ打たぞよ。最聞かぬ」と立上るを、島は縋つて「なふ情なや。是私が詫事じや。エヽ供の衆

にも見捨てられ大恥をかいてござある。されどもおか島大明神氏子を不便とも思召さず、或時は餘國の大じんぐうに身請の談合を仕かけ、或は紋日をかづかせ、ひき日の立前跡から剝る禿頭、親里の合力なんどと申て、やつかいしつかいむくりこくりの上手ごかしに、むくり取られたとの御託宣、無上しんれいしんたう加持」是これが眞實戀のある淨るり、島樣よふお聞きなされい」とよそながらこそ恨みけれ。男は二人が目色を見て、貞「はて扨變はつた文句じやの。なんと餘國の大盡に身請の談合とは珍しい事ふれ。これお島、和女は今のが面白からふが此貞は耳に立つ。迚も所望しかゝるからはまあ一節所望致そう。お島とお身とが連節で戀の籠つた淨るりを、初段から切まで語り拔かせにや堪忍せぬ」と、ぎしみまはればお島一人が氣を苦み、「是申こな樣程の粹樣が、是は又氣のとをらぬ。彼人と私と譯ある樣に見さんしたそうなれど、みぢんそんな事ではない。腹立てさんすを面白がつて、法界悋氣に言はんすわいの。おとなしうしてサァ舟に乘らんせ」と、手を取れども聞入ず貞「いやいやおつしやれなく。他國から上つて此大坂で、よねづかをも握る者が通例の男と思ふか。どうでもこうでも聞かにや置かぬ、語らせねや置かぬ」と堪忍せぬ顏付に、お島は難義手に汗握り、「是爰な人も誰か知らぬがよつぽどな。勤する

おか島—お島氏子—市郎右エ門をさす
紋日云々—節句の入費を負擔さす
ひき日—女郎の休み日
むくり—蒙古高句麗にてむしり取りなどの意
ぎしむ—りきむ（俚言集覽）
よねづか云々—遊所通ひする、柄を握るは當道を好みて道をたしなむ心（色道大鑑）

ヤ申別にお腹の立つ事共存ぜず。我らも下地淨るり好折々稽古仕るが、此さんろの道行は戀を含んだふし付なるに、只今お島樣とやら遊ばした淨るりの、節は少も變らねども、情を御存じない故か、誠の心少ふて御眞實の無いゆへか、如何にしても道行が浮氣に聞えて、底意に戀がござらぬ」と片眼でお島を睨にける。男冷笑ひ「ヤア吐すまい〳〵。島が淨るり能かれ惡かれ、己が冷にも熱氣にもなることか。どふでも外に樣子が有ふ。但し又己がいふ戀を含んだ淨るりの、語り樣を知つたらば只今爰で語つて見よ。節が違ふと打据るがサアなんと語らふか」市「何が扨御所望ならば語らいでは。則ちさんろの四段目検非違使が鹿島の事ふれ、島樣とつくとお聞なされ。「是やこなたへ御免ならふ、是はお島ではござらぬ、お鹿島大明神より罷出た事ふれでござりや申。惣じておかしまと申には、上の客が卅三人中の客が卅三人、拙者が樣な見る影もない粕客がたつた一人。正月七日神前に於て、おやおつかない誓紙を書くその誓紙の文言に、斯樣に申交すからは、未來までも變るまい虚をつくまい隱すまい、勤の間外に深い男を持つまいと申起請を、取交すから僞は申さないと存じ、盡す程にける程に只今は向臑からでつかちない光物が飛で出で、巾著の扉が八文字に開け、内の首尾が八角にわれ、神馬のお馬の幇間

冷にも云々—損にも得にもならぬ

事觸れ—神主姿にて吉凶を占ひ國中を觸歩くもの、此章は用明天皇職人鑑四巻にある文句の作りかへ

おつかない—嚴めしい

でつかちな云々—大きな光物、大盡貞をさすか

うそ汚れ—薄よごれ
ひけた—おくれを取る
詰開—談判
目はじき—目くばせ
十面—澁面にて苦い顔
見けつかれ—見て居れ

じやうるり待や〳〵、舟も留い。なんと皆は氣が付かぬか。先にから陸を見ればうそ汚れた八丈島に、花色の羽織茗荷の丸の紋付て、編笠著たる男めが、道頓堀を乘出すから此舟に目を放さず、跡へ下れば走り付、先へ拔ければ立とまり、付て廻るは合點いかず。ありや〳〵又彼處に立たるは、喧嘩仕掛ける躰と見た。默つて居るはひけた事。あがつて一ッ詰開かん」と脇指押取出んとすれば、島引留め、「ハテはでな人樣じや。私等が樣な者が乘た舟は目に立つゆへ、どれに限らず皆見さんす。なまなか咎めて一本かたけ恥かこより、ハテ彼方から見るなら、此方からも見て大樣にして居さんせ」と、いへども更に聞入れず。駈上れば續いてあがり、見ればいよ〳〵間夫の男。「これ市樣」と、いはんとせしが目はじきして、「是申此方は他國のお衆じやぞ、所の衆なら粹であろ。何を言懸けさあんしよと云分してくだんすな。何方の爲にも惡いぞ」と心を揉むこそ道理なれ。貞は肘はり十面作り「こりや編笠、五度や三度は堪よふが、どふした事に舟につき、女を乘せたる船中を見るも大方方圖がある。夫程見たくば近くへ寄て見られに來た。サア我が存分に見けつかれ。見よふが惡いと免さぬ」と、聲をなまつてりきみける。市郎右衛門も差當る意趣は無けれど、當分の妬ましさばかりなれば、口論しては如何ぞと、市「イ

古郷の風―胡馬依二北風一越鳥巣二南枝一(文選)
べう―犬の鳴聲に豐後の別府村をかく

牡鹿の苑―鹿野苑、釋尊比丘を度し給へる所(釋氏要覽)
しこ草―玉世姫の繼母

燈臺―鈴振花、燈臺下暗しの義
相撲取草―菫
斑女―漢の成帝の愛妾後に趙飛燕の爲に寵を奪はる
さりとは―嗚呼

の藤袴破るなと、泣くかいばらのつるさきに、野飼の駒の優くも、古郷の風の北に嘶へて嘶けば、越路の雪にふる鄕の、空を慕ひて泣く犬の、べうの湯本はあれとかや。いかにいはんや久方の、天津雲井をあまさがり、賤の仕業はいつ君が、ゐにかくならで思ひきや、見しや聞きしやとばかりに、草も刈兼ね忍び兼ね、涙をうけて研ぐ鎌の、砥石も心碎けとや。夢にも斯くとしら玉の、玉世の姫は「胎内の、未見ぬやゝの別れぞ」と、つれなき母に誘はれ、行く道筋は多けれど、笛に誘はれ妻戀る牡鹿の、そのゝ法の導きこれなれや。互ひに夫と道芝の縋るばかりの戀草も、芽は繁りそふ母子草、千草八千草思ひ草、恐ろし鬼のしこ草に隔つる中の垣根草、力草なく泣きかはす、心ぞ思ひ遣られたる。草ばし刈るな笛を吹け。野路に兩人が悔み草。毒の草をも身の上と、知らぬ手元の暗さには燈臺草を クドキ歌 思ひ出す。思ひ出ずや有し夜の、亂れあいにし枕にはかつら草をぞ思ひ出す。彼のほの〴〵のほのぐらき、黄昏早く寢し時はかやつり草を思ひ出し、人目思はで肌觸れて起つ轉びつさゞめして、相撲取草を思ひ出す。通路遠き獨居の、斑女が閨の寂さは、茶引草をも思ひ出し、心細しや糸薄、歌 ゐい〳〵風かと聞けば山の下には嵐吹く嵐吹くさりとは嵐吹く。山をはなれて風と成かぜも昔に吹き歸れ」貞「ヤア

け、繁昌に半疊敷島に布くをかく

難波津—王仁の歌

とふから—早くお出で

むすまい—芝居のはねに人込みの様

佛金色—曾根崎心中の終りに未來成佛云々とあるを取りていふ

さんろの道行—さんろは用明帝の草苅になり給ひし時の名、此事は用明天皇職人鑑にあり

くぢ—愚痴か

また—まだか

いろは船—淺き意

初尾花—惚れたる様の色に現はる

賤群集は冬ながら、心ぞ彌生と三重なりにける。中に家名も君が名も、世上に高き天満屋の、お島といひて彼の里に、おはつが跡繼隱れなし。此比あかしの貞といふ、馴染の容に揚げられ、今日は南へ連れて出る。いづくはあれど曾根崎の、緣の芝居初様も、定めし佛金色の、身あがりと聞く外題に引かれ、終日見物慰みて、芝居果れば繫がせし、屋形に皆々乘出す。提重開き幇間ども、「なんと島様今日のさんろの道行は、本で語ると直に聞とは又各別、大盡様のお慰み、船の著く迄道行を、所望々々」とどよめけば、貞「イヤこりやよかろ。己も島の一弟子で、よつぽど節は覺えたが、おつ付島を引摑み、國へ連れていつたり共國元は堅い所、こんな遊は成がたし。此船中をぶら〳〵と、たゞ行もくぢの至大坂の名殘に少と聽聞致したし。サア皆つけやや」といひければ、供の丁稚が懐中の、本取出してお島に渡し、「東西々々、此所がさんろ草刈の道行、師弟連節東西々々、

歌おきに戀路の〳〵またいろは船、惚てほの字の帆が見ゆる。ほの字の〳〵、誰に〳〵ほの字のはつお花、小すげしらすげいわますげ、此の一むらは刈殘せ、妻ごめの夜の床にせん。塒の虫と諸共に、刈取る鎌の鋭くも、聲きり〴〵す轡虫、牛のくらにも音を泣きて、歸る家路を松虫や。さらば笹原小蟹の、秋に染糸繰出し、五百機立てし機織や。そ

心中二枚繪草紙

作者　近松門左衛門

上の巻

今年の酉―寶永二年
顔見世―初芝居
翁の面―芝居の初めに舞ふ翁の面、色白き故初霜の白きと置きとにかく
馴染―無しにかけ、お出は客のお出と日の出に、久方は久しに掛けたり
天地を動かし―以下古今集の序文をもぢる
竹の紋―竹本筑後掾の紋
日も紐―にか

既に今年の酉もたち戌の顔見世、朝木戸をあけぼの深く提燈の、影きら〳〵と初霜の、翁の面のにこやかに、始まり呼ばふ聲に引かれて、老も若ひも見る人は、餘念馴染に御贔屓に、よふお出やつた朝日影、御代も御國も久方の、此の日の本のならはしの、歌を種なる謠物、天地を動かし鬼神を感ぜしめやかに、妹脊も猛き武士も、心やはらか饅頭や、菓子に火蠅に番付と、賣る聲にまで節籠る、竹の紋つく道行の、本を召せ〳〵目關笠、笠も預る預けて御座れ。紅のくけひも淺黄紐ゑ、繁昌々々、イヤ此所繁昌毛氈敷島の、その難波津の冬籠、今を春べの顔見世に、日もなが事の御退屈。はや今日のお暇と、散し太皷の下とゞろき、明日はとふから唐錦、色どる空は夕陽の、山は夕の雲の帶、腰の廻の御用心。おすまい〳〵、おすまい日の入りくる人や歸るさや、花山の幕か袖續く、貴

取組―此狂言の取組

給所云々―諸人の領地入組みたれば七百町の地割六ヶ敷

駒引錢―馬の形を鑄込みたる錢

韓幹―唐の畫人特に馬を畫くに巧なるを以て知らる

候ふべく候―そこら〳〵にしておくことにいふ諺(用捨箱)

平夫婦と談合して、血をわけた遠山に、いたしたが我らが趣向。取組は御屋形の、御意でござる」と小短く、譯も聞へる道もたつ。銀つかふたるしるしなり。將監夫婦も悦び涙、「小さい時のお光が成人顔、見て嬉しい」と抱き付てぞ泣給ふ。名古屋重ねて懷中より一通を取出し、「是は田上郡七百町の御朱印、永代知行なされ」と頂戴させ、「扨田上郡は給所々々の入組にて、地わり中々むつかしし。某が父主計の介、天文の曆算に達し鼠承露盤と云ものを巧み、積物割物人の聲にしたがつて、承露盤の表明白に顯はるゝ。是を以て勘へば、間づもり知行高、刹那に相濟申べし」と有ければ、元信聞給ひ、「それに付延喜の帝、陸平永寶駒引錢を鑄させて、民を賑はし給ふ。其駒は、晉の韓幹が馬を寫されし。我又其駒の圖を傳へ覺えて候へば、駒引錢を鑄て、領内を賑はし申べし」「是は珍重、然らば善は忙が」しや、嫁入婿入國入して、本祝言の儀式は重ねて。先々今宵は祝ふて、ざつと目出度ふ候べく、そろばんつぶに萬代積るぞ三重豊なる。年は子の年大黑女夫、力次第に子孫も湧出る、地からは五穀手からは金が、湧出々々子々孫々迄、長久榮花の家繁昌は、君が惠みの威德なり。

涙—無しにかくさしづめ—さすにかけて當然香車—遣手の事、吃又平が射間なれば遣手はその妻なり

ふれ〲雪—ふれ〲小雪云々の小唄による

斯うなうてから—かうないにしても

じぶんさま〲御懇志の趣、主人御屋形滿足致され、先當分お禮申さるゝ印目錄の通、微少ながら」と述べければ、將「御使がらと申御丁寧成御事」と、互の禮儀淺からず、誓く時こそ移りけれ。稍有て名古屋、「ヤア承れば娘子遠山、忘八の手前約束の年明て、今是へ歸り候ふよし、さぞ〲お悦び推量致した」と、いへ共人々のみこまれず、兎角の返答なき所に、供の者共こゑ〲に、「遠山樣早やあれ迄見へまする、迎ひにお出なされませ。ありや〲振つてござるは」と、云うても更に心得ず。死して程經る遠山が、歸らん樣は涙ながら、立ち出見やれば屋形の姬君銀杏の前、髩いれずの二ツ櫛、鴨のはなりのはすは袖、供の又平日傘、さしづめ香車は女房なり。いつならはしの道中も、心つければ振りやすい。ふれ〲雪の遠山が、御影もよもや、「是爰がおれが内か」とつゝと入、「なふ父樣母樣今歸つたはいな。久しうて逢ひやした」と、とんと座りし居住居は、禿だち見る如くなり。各は不審晴れず、名古屋は元より合點なれば、山「ヲヽいづれもの御不審は尤々。ながふ申せば段々あれ共、畢竟姬君を將監殿の娘にして、死したる人が二度蘇生られたと思召し、元信にめあはせあれ。姬君も一度は大事の命を助けられし各々なれば、斯うなふてから親同前。なまなか儀式だてしては、養子というで面白なさ。又

院、正親町の帝、三代四代の聖朝に仕へ、祝髪の後越前ノ法眼、玉川齋永仙と號し、末世の今に至る迄、古法眼と賞歎するは、此元信の筆とかや。既に大永七年新帝、大嘗會悠基主基の御屛風を書、從四位ノ下越前ノ守に補任せられ、數多の門弟上下の供人、肩をいからす山科や、土佐ノ將監光信の山庄に案内せられける。將監夫婦出向ひ、「今官祿に秀で給ふを見るに付、娘が事の忘れがたなふ候」と、詞に先立泪なり。元「仰のごとく、某とても、彼の人を先立、世に交る所存なけれ共、將監殿を世に立んと、惜からぬ世も捨かね申せし所に、次第々々に登庸し、大嘗會の御屛風を仕、敍爵に至る朝恩の上、貴公の勅勘訴訟叶ひ、向後一家の結をなし、相竝んで給所の門を開くべしとの宣旨を蒙り參りたり。親御達を世にたてなば、草葉の蔭の娘子の、一ツの迷ひも晴るべきかと、かたのごとくに禁中方、願ひ取なし候」と、語り給へば將監夫婦「有難や忝や。歎きの中の悅びとは、我らが身にて候。貴殿の御ひけいにて勅勘を免さるゝも、一ツは娘が光りぞ」と、なを〳〵落涙せき敢ず。斯る所へ名古屋山三春平、樽肴黃金時服さま〳〵音物持せ、將監に對面有。「雲谷不破が不屈故、元信我等兩人永々沈淪致せし所、善惡の是非落居し、三人の惡黨死罪流罪の嚴科に處せられ、某も先知に復し候。其節は姬君の御事に付、御

大嘗會云々―天皇御卽位の後始て行はるゝ大儀式、悠基主基は、其左右にある祭場

願―敕勘赦免の願

御ひけい―おかげ

先知―元の知行

桶―置にかく、即ちそのまゝ桶に入れとなり

わきて云々―坪にかけて庭の隅に泉の湧き流るるをいふ

壷の印―元信の印の形

ならび云々―雙なき鹿の夏毛の狩野の筆

長康云々―顧長康、張僧繇、陸探微

只今の始末諸人の見せしめ、親子諸共獄門に曝さるべし。それ〳〵死骸の首を打て」承つて下郎共、搔首にして髻をからげ、道犬が首にかけさせ、雑「扨雲谷は當座の慮外、罪の輕重いかゞあらん」と有けれ共、元信春平詞をそろへ、元は彼奴が惡逆騒動の始なり。古主の屋形に訴へ、長袖なれば流罪に行なひ申たし」雑「尤々二人共に籠屋へやれ」と引立れ共脛立ず。雑「エヽ卑怯者歩まずは、任せて桶にうち入れて、生ながらの酒浸し、地獄の鬼の晝食菜」と、戯れ笑ひ歸らるゝ。悦ぶ中にも元信は、憂へに沈む那智の瀧、亂るゝ色を勇めんこ、謠へや謠へ雅樂の介、其外の門弟中、憂ひは憂ひ祝義は祝義、未來の嫁入は一七日、現世の嫁は七百町、ながく知行にすみ筆や。家を彩色く繪具筆、隈筆藁筆泥引筆、その筆先に金銀も、わきて和泉の壺の印、ならびなつ毛の狩野の筆、末世の寶となりにけり。

下之卷

凡繪の道には、六ッの法有。長康、張僧、陸探の三人を、異朝の三祖と學びきて、和國に筆の色をます、狩野の四郎二郎元信、天然彩墨の妙手を得て、後柏原、後奈良の

ござんなれ—こそあるなれの略、であるを強めて云ふ也

後覺—後學にて後進の學問

世間流布—世間に知れ渡れる

と、理非明かに述べらるゝ。名古屋勇んで罷出、「名古屋山三春平は、外の事は不調法、傾城の買ひ樣と人切る樣は大名人、恐らく宗匠ござんなれ。それ〳〵伴左衞門が死骸を是へ出されよ」「心得たり」と役人共、封切ほどき酒漬の、死骸は更に色變らず、唯其時の如くなり。名古屋袴のそば取てちか〴〵と寄り、「彼を討しは先月廿日、曉月の時鳥、名乘かけしは欺さぬ證據。向ふ疵に切り伏せ、とゞめを刺んと乘つかゝり、胸押し開けば懷中に金子有。此儘置いては誠の盜人、來つて搜し取らんは必定。時には山三が盜みしと、後日の難を察せし故、鳩尾先を剜つて、金子は彼奴が身躰の內、肺の臟に押込だり。五臟の中にも肺は金、同氣もとめて朽も錦けもよも僞まじ。いで見せん」と、手を伸しぐつと入、朱に染みたる緞子の財布、引ずり出して、山「是見たか。是でも山三が盜人か。弓矢取身の仕方を見よ」と、道犬にはつたと投付、死骸を蹈へつゝ立ば、雜式を始として、元信其外門弟等、「出來た〳〵。あつぱれ〳〵御分別、後覺なり」と勇みをなす、道犬は言句も出ず、雲谷はひるまぬ貌、「相手の云譯たつからは、此方は切られ損。お歸りなされ」と立所を、二人の雜式飛びかゝり、鐵棒ふり上打つ程に、面も眉間も打裂れ、胴骨碎くる計なり。頓て繩をかけさせ、「道犬親子は世間流布の重罪、上を犯す科といひ、

苦々敷―人々がにが〳〵しく思ふ

一ツ間へさへ―身分の低い事

其跡は合點か―其跡の處分は承知か

譯と、苦々しくぞ見へにける。四郎二郎斯くと聞より飛んで出、「いや〳〵兎角の評議は御無用、盗人ならば盗人、切取ならば切取、科人は狩野ノ元信、繩は百筋千筋でもおかけなされ」と、大小脫いで投げ出さんとする所を、名古屋押へて「暫らく〳〵、御心底忝い。去ながら、それ迄に及ぬこと。ひらに〳〵」と推留め、山「是道犬、某盗人でない申譯が立ならば、おのれ又侍に盗人といひかけした其科はなんとする」時に雲谷進み出、「イヤサ山三、盗人でない云譯立てば、命を助かる其方が仕合よ。道犬公は一子を殺され金子を取れ、何の過り有べき」と、いはせも果てず山「ヤアうぬらが存ずる詮議にあらず。お屋形にては一ツ間へさへ入ざりしを忘れたか雲谷、此穿鑿相濟んで、うぬも遁がさぬ用心せよ」と、睨み付れば道犬、「山三々々脇道へすべらすまい。五百兩の金子を身に付た伴左衞門、切りは切たが銀はしらぬと云とても云はせふか。盗人でないならば、云譯せよ」と詰かくる。山「ヲヽサ云譯はして見せん。其跡は合點か」道「イヤ先云譯から聞んず」とせりあへば、「雜式是々名古屋、問答迄もなし其爲の我々。人にこそよれ兩方共に、弓馬の身柄、盗賊といひかけ分明ならぬ訴訟、且は上を掠むる越度。云譯たたば道犬は、存分に計らふべし。又盜賊に極まらば下知の如く、お手前に繩をかけ申」

片口の御裁斷―片一方の言のみを聽きたる裁判

死骸を舁せ、どや〳〵と亂れ入、「此所に名古屋山三春平や有。官領よりの御下知有、對面せん」と呼はつたり。名古屋遲々せず出でむかへば、雜式鐵鞭引き鳴らし、「不破伴左衞門をお手前が手にかけしこと紛なき上、父道犬願ひによつて、吟味を遂げらるゝ處、盜賊の罪遁れがたく、曲事に行なはるゝ條、召捕り來れとの御諚、尋常に繩をかゝられよ」とぞ仰ける。名古屋少しも騷がず、懷中より忘八の手形數通の文を取出し、「斯樣の愚蒙の返答は、申も似合ぬことながら、片口の御裁斷如何にしてもかろ〳〵し。是此手形を御覽ぜ。葛城事は三月二日に親方が暇を取、拙者が本妻、借宅見たての間、揚屋に預け置し所、伴左衞門數通の艶書、斯くの通不義者の妻敵なり。此方より願ひを申、親道犬をも罪科に沈めんと存ぜし折から、却つて我らを召捕れとは、定てそれは各の聞違へ、夫成道犬か雲谷が事でがなござらふ。遁げも走りもせぬ男、聞直してお出なされよ」と、大樣にこそ答へけれ。道犬つゝと出、「汚ない〳〵こりや山三、悴伴左衞門葛城を請出す手付として、金子五百兩懷中せり。妻敵討は聞へたが、なぜ金子は盜んだ。惣じて盜みと云物も盜む時はうまいこと、顯れた時は辛い苦い物じやげな。サアなんと脫るゝ所は有まい」と、證據なき云ぶんながら、名古屋も相手は死人なり、何を印の云

一心の火をもとの火に、返す間の影ぞかし」前に立たる花ずすき、ほのぐ見へしまぼろしは、「木辻の町の三つ山と、呼れし時の面影が、今は名のみに奈良坂や、この手彼の手の枕の酒、霙霰とへだつれど、解ればおなじかすり井の、水をかり成戯ふれも、つひに迷ひのゐせきにからみ、木は執心の斧にくだかれ、土は逢ふ夜の壁とへだたり、火は又三世の緣を燒く。四大の四苦を此身一つに重ね、重ねて空より出て空に入、報も罪も色も情も、迷ふも悟るも待夜の鐘も、別れの鳥のこゑぐ迄も、地水火風の五ツの玉の緒、只一筋に結びあひたる姿成ぞや。なふく、惜みても猶惜まるゝ、名殘も緣もつい に行、道ならばいざ伴なはん。とは思へ共夫の命ながかれと、祈る心もさまぐに、皆妄執のあだ夢と、さめざめもろき涙の露の、玉の臺の床の內、連理の蓮片しきて、永き契りを待つぞや待たん、しるしはこれ此一見卒塔婆永離三惡道、南無や三熊野本地の三尊、迎へ給へや道引給へ」と、唱ふる聲は伏屋に殘つて、形は見へず消へにけり。元信抱き留めんと、すがりつけば影もなく、うんと仰向に目くるめき、忽息切絶へ入しを、名古屋揚屋門弟等驚き騷ぎ、藥さまぐ呼び助け、やうく一間に三重休めけり。夜もほのぐと明行比、官領の雜式、不破の道犬長谷部の雲谷誘引し、伴左衞門が酒漬の

霙霰―酒のもろみにかけて云ふ、雪氷雨や霰と隔つれど落つれば同じ谷川の水(澤庵和尙)
待夜―平家物語の待宵侍從の歌による
四大の四苦―生老病死の苦
地水火風云々―四大よりなる五人の命
一見云々―一見卒塔婆永離三惡道(涅槃經)
官領―管領

まぶ―情夫

八難―地獄餓鬼等八つの難（釋氏要覽）

五輪―地水火風空

五行―木火土金水、みやが五度名をかへたるを五輪にあてゝ以下五人の姿となつて顯はるゝ所注意すべし

敦賀―釣にかく

四大―地水火風

て此世を去り、極樂諸天はおろかのこと、假令へ地獄の底迄も、誘へ伴へ連立て」と、座敷のくまぐ屛風押退け、障子を開き、「やれ遠山は何處にぞ。みやはいづくに我妻」戸、明る遣戸に遣手の形、現はれ見へしぞ哀なる。〽哥「いつならはしの世渡りや、阿波の鳴門は超るとも、此浮舟の浮き流れ、何と遣手の身ぞつらき。まぶの忍び路關となり、文の通ひのさかも木に、人の思ひは戒しめながら、我身は包む戀衣、赤前垂の火焰に焦れ、三途八難の惡趣に墮す、苦みの涙目を眩まし、生死を分ぬ迷ひの雲、所々に名を變へて、かずぐ色を飾りし報ひ、身躰一つが五つに分れ、五輪五行の苦をうくる。如何成世にか免かれん」と、叫び慄く袂の影、艶色あて成二人の遊女、左右に別れ見へたるぞや。〽「是こそは其はじめ、白粉紅花に粧ひし、後世の道には遠山が、あだの情の釣針に、人を敦賀のうき姿、松といはれし松が枝は、四大のもとの木に歸るなり」〽「次は三國へ買ひ流されて、姉女郎や傍輩に、賣り負けまいぞ勝山と、名をかへ風を變へけるも、戀に我をはる我慢の山、麓の塵のちりひぢの、土にかへすを御らんぜ」と、夕月出るごとくにて、後に高くあらはれしは、「流れ漂よふ川竹の、伏見に來ての淺香山、流石所も極樂を、願へと告る撞木町、安養世界の夜見世には、灯すべき灯火なく、吹き消す風も吹ずして、

十二社―十二因縁をよせたり
流の罪―遊女の時の罪を地獄の業の秤にかければ磐石却て輕し
垂跡和光―佛の神と現じて此土に跡を垂れ玉ふ
つゝましし―恥かし

證殿の階を、おりて下りて待うけ悦び給ふとかや。我はいか成罪業の、其因緣の十二社を、廻り輪廻を離れねば、疑ひ深き音無河、流れのつみをかけて見る、業の秤のおもりには、それさへ輕き磐石の、岩田川にぞ著にける。垂跡和光の方便にや、名所々々宮立迄、顯はれ動き見へければ　元信信心肝に染み、我畫く筆共思はれず、目をふさぎ、「南無日本第一大靈驗、三所權現」と伏し拜み、頭をあげて目を開けば南無三寶、先に立たる我妻は、眞逆樣に天を蹈み、兩手を運んで步み行。はつと驚き、元「これなふ淺ましの姿やな。誠や人の物語、死したる人の熊野詣では、或ひは逆樣後向、生たる人には變ると聞。立居に付て、宵より心に懸ること有しが、扨は和女は死んだか」と、こぼし初めたる淚より、盡きぬ歎と成にけり。みや「恥かしや心には、陸地を步むと思へ共、逆に見へけるかや。四十九日が其中は、娑婆の緣にむすぼほれ、姿を見せて契りし物を妹脊の中に怖氣立、愛想も盡きばいかゞせん。變る姿のつゝましや。逢ひ見る事も是限り」と、泣く聲計身を絞る、淚の霧や戀慕の霞、冥々朦々朧々として、見へつ隱れつ灯火の、油煙に紛れ失せにけり。元信五躰をかつぱと投げ、「よし、雨露に朽果てし、骸骨なり共抱き留め、肌身に添へん夫婦の友、何に恐氣の有べきぞ。現世の逢瀨かなはずは、刃に死し

甲ふが順當なるに之は逆なりとなり
老木云々―老後の言置は詰らぬ
三途―満つに掛く
熊野―苦にかく
照手―夫小栗判官を慕うて宿屋の下女となりし話、常陸小萩は其時の假名
はしに云々―夫小栗が癩病になつて端に居るも知らず
土車―之に小栗をのせて姿構はず曳く事
湯元―熊野の湯
和歌浦―若にかく
かう〳〵―神々しいと鳴る音にかく

の盃ざゝんざ濱松のをと、七ほん松の七本を、女は卒塔婆に數ふれど、男は今日の七五三、嫁入ごとせし戯れも、今は誠と嬉しげに、手を引あふて笑ひ顔、我は朝顔しぼみゆく、花のうへなる、露とはしらぬ果敢なさよ。月は缺けてもみつの山、娑婆の便は片便宜、文も屆かず言傳も いはで心の熊野路や、照手の姫のやつれぐさ、常陸小はぎもおつと故、身を旅籠屋の水だなの、はしに目鼻の癩病を、つまとは更に白糸の、緣はきたなきつち車。心は物に狂はねど、姿を物にくるはせて、ひけや〳〵此車、ゑいさらさら〳〵笹の葉に、死出の旅路の後世の友、一ひきひけば千僧供養、二ひきひけば萬能の、藥の湯元と聞からに、四百四病は消へもせん。骨になつても癒らぬは、私がそ樣を戀やまひ、變る心を案じては、神の御名さへぞつとする。飛鳥の社濱の宮、王子々々は九十九所、百に成ても、思ひなき世は和歌の浦、梢にかゝる藤代や、岩代峠汐見坂、晝き寫す繪は殘る共、我は殘らぬ身と聞ば、いとしやさこそ我つまの、涙にくれて筆捨松の、雫は袖にみつ汐の、新宮の宮居かう〳〵と、出島によする磯の浪、岸打波は補陀落や、那智は千手觀世音、古へ花山の法皇の、后の別れを戀慕ひ、十善の御身をすて、高野西國熊野へ三度、後生前生の宿願かけて、發心門に入人は、神や受くらん御本社の、誠

ずか。又の便に傳三殿へ、假令いかなること有共、四郎二郎樣へ歎きの懸る事などは、知らせまして下さんすな、とよふ云ひ屆けてくださんせ」と、苫の下まで我夫、悼はる心ぞ不便なる。みや「サア女夫連で參りませふ。此方さまは勝手へ行て、後夜の鐘の鳴迄、念佛きらして下さんすな。似合たか知らぬ」と、笠打被たる五輪の影、五ッの假の夢現、餘所のことではなく〳〵も、元の座敷へ人々は、宗旨々々の手向草、題目眞言念佛の、廻向に更るも　三重、

三熊野かげろふ姿

歌あら惜やあたら夜や、夫婦のなかに咲く花も、一夜の夢の眺めとは、知らぬ男の悼はしやと、泣くより外のことはなし。昔の朝の身じまひに、髮にたいたり裾にとめ、そよとふくさの色風も、今燒香に立つ煙、反魂香と燻ゆるかや。香爐の灰の灰寄せも、順をいふなら此方さんを、われこそあらめ逆さまの、水の流れの身のならひ、ところ〴〵の死水を、誰にとられんあさましと、よそにいひなす言の葉を、世に亡き人とはそもしらず、アヽいま〳〵し、老木の末の思ひ置はよしなやな。こちもそなたも若松の、歌「千代

髮にたいたり—伽羅沈香を髮に焚きこむ
反魂香—漢の武帝方士をして李夫人を出さしめし香此所を表題としたるなり
順をいふなら—みやの詞元信樣が死んで妾が後

薮蚊の云々―皿吸うた蚊の集りて上下するを餅搗に譬ふ 前垂着けて臼どりする故續けたり

物ごし―詞つき

らう〳〵―勞の字を宛つ

牛王―熊野牛王の事、天の網島にあり

の影を御覽あれ。假令怪しいこと有共、必わつといふまいぞ」「何が恐いこと有」と誰も口では夕暮や、小氣味のわるき籬が本、軒に藪蚊の餅つきも其前垂の名殘かと、心細くも佇ずめり。雅樂の介何心なき調子にて、「是は暗いお座敷。みや樣はそれにか。火を灯したらよふごさらふ」と云ふ聲す。みや「アヽされはいな、心の迷ふた身の上、闇に闇を重ぬるつらさ、晴らして欲しや」と夕顏の、黄昏照らす行燈の、障子に映るを能く見れば、元信は元の人躰にて、女の影は五輪とみやが物ごし計。人間の地水火風の風脆き、木の葉に結ぶ陽炎の、露の姿ぞ哀成。四郎二郎はらう〳〵と疲れ詫びたるごとくなり。雅樂の介猶訝しく「此菅笠は里の便に參りしが、何に要ことぞ」といへば、みや「なふ嬉しや〳〵。ほんに是が欲かつた。私が熊野を信ずる事、敦賀では遠山三國での名は勝山、伏見へ賣られて淺香山、山と云字を三度つき、それ故に木辻では三ッ山と付られし。思へば熊野三ッのお山の名を穢し、牛王の咎めも恐ろしく、お主と一所にして下さらば、連れだちお禮に詣でませふと、笠の紐迄絆おきし。追付別るゝ身なれども、一日でも斯ふ添ふからは、願は叶ふた同前。神佛に嘘はないと、此襖戸にお山の繪圖を賴みまし、參つた心で拜まんと、思ふ所へこの笠は、どふした便に來たことぞ。餘のことは何もいは

ごくに立ぬ―間に逢はぬ（俚言集覽）

野干―狐

たふ。書置もしたいが、口でさへ盡くされぬ、筆には中々廻らぬ、と目をほつちりとあいて、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と七八へんは聞ました。なふ肝心の時には念佛といふ物も、何んのごくに立ませぬ。南無阿彌さへすうく陀佛迄やらずに、轉りととつていきました」とわつと叫べば人々も、「扨は定よ」と手を打て、皆々袖をぞ絞らるゝ。名古屋も呆れゐられしが、「疑ひもなく夫にひかるゝ魂魄、假に形を見せけるぞや。さもあれ樣子を尋る爲、腰本衆く」と呼びければ、腰「あい」と答へて奧より出る。山「なんとおみやは機嫌はよいか」と問ひければ、腰「アヽ機嫌よふにこく笑ふてござんする。去ながら志有とて酒も魚も口へよせず。樒の香の煙り絕やすな。煙絕ゆれば爰にゐることならぬとて、おねまの內は抹香で、ふすぼります」といひければ、山「して四郎二郎はどふしてぞ」腰「アヽされぱおみや樣の賴みで、お寢間の襖に熊野山の繪をあそばひてござんする」山「扨はみやの幽靈疑ふ所もない」とあれば、腰本驚き「アヽ怖や。なふ知らひで傍に居ました」と、膝の傍に這ひ寄りて、身を屈むこそ道理なれ。雅樂の介心を決せんと思ひ、「さもあれ狸野干の業も有。誠の死したる幻は形あれ共、影映らずと承る。某參り直に逢ふて笠を渡し、灯火をたて實否を試し申べし。かたぐは小庭より障子

骨佛—死人をいふ

いとしぼげ—いとほしの轉

ひき〴〵—贔屓

やくたいもない骨佛にしてのけた」と、さめ〴〵とぞ泣ゐたり。人々更に誠とせず、「酒に醉ふたか狂氣か。みやは少樣子有て、姫君に替り四郎二郎と祝言し、五日前より奧に夫婦ならんでじや。たはけたこと吐すまい」傳「イヤ私をたはけになさるゝか。七日前に死んだ人が、五日前に來るものか。蓮臺寺專譽樣の御引導、舟岡山で灰になし、和國樣をはじめ、女郎衆から名代に、禿共が灰寄せ、五輪迄立てたもの、なんの僞り申ませふ」と、眞顏にいへば人々も、ぞつと怖氣も立ち寄りて、「して眞實か。どふして死なれたことぞ」といへば、傳「眞實かとはいとしぼげに。常が癪持ぶら〳〵とはしながら、一日と寢られたこともない人が、いつぞや葛城樣身請の晩から、頭痛するとて引こんでそれから枕上らず、次第に重つてくる程に、お客衆のひき〴〵で、柳原の法印さま、半井の御典藥、幸と和國樣へ對馬の客から參つた朝鮮人參、尾張大根見る樣なを、きざみもせず丸口、人參の風呂吹を一期の見はじめ、人參でも鐵炮でも、いかな咽を通すにこそ。最ふ無いに極つて私を呼びよせ、今迄は隱した遠山といふた昔から、四郎二郎と夫婦の契約し、目出度ふ願ひ叶ふたら、女夫づれで熊野參りを致そふと、願ひをかけ、此笠の紐も手づから絎ました。これを著て四郎二郎樣熊野へ參つて下され。死しても心は連れ立

（俚訓栞）つき〲しー似合ふ
了簡云々ー奇麗にみやの頼みを容るゝ心
不道化ー惡洒落

樣了簡うつくしく、おみやも念晴れ元信心も落ち付き申こと、皆是貴公の御蔭、門弟中も忝く、悦び存候」と、何れも禮をなしにける。山「是は迷惑。元信ためと存ずれば、各同前の大慶。さて今日は五日め五百八十の餅を搗いて、里歸りといふこと、緣邊の式法なれ共親元は遠所、祝ふて我らが宅へ呼びたいと、葛城も申が、ちよつと尋て見たい」とあれば、雅樂の介打笑ひ、「イヤ尋ぬるに及ず。軈て別るゝ日限の女夫、寢いる間も惜いとて、顏と顏を突合せ、頭もふらぬしたゝるさ、里歸りは扨置、臺所へも出られませぬ。夫はぎやうな喰ひつき樣。そふして互ひにあかせたら、跡のためには珍重。元信筆は達者なり、一日一夜に半年の仕事は出來ふ」と笑るゝ。斯る所に無紋の色に淺黃の上下、編笠取て入を見れば、舞鶴屋の傳三郎、出口の與右衞門打しほれたる風情なり。名古屋を始め門弟中興さめて、「是傳三あんまりそれは粹過た。聞ぬといふこと有まい。葬禮の戻りに、祝言の家へ立ち寄るは、無禮すぎた不道化、笑しうない歸れ〱」と苦々しく叱られ、鼻打かみて目を擦り〱、傳「姫君樣の御祝言と遠慮致して見ましたが、わきから沙汰が有てはお恨みの程もいかゞと、嗅が心を付まして、今日七日目の墓參りついでながらのおしらせ。常々氣だてが結構で、おみやとはいはず佛々と申たに、あつたら佛を

妻―夫の事、原本夫妻とも皆妻の字を用ふ

借る時云々―借る時の地藏顏なす時の閻魔顏の諺を利かす

かこふ―包む

貝桶―目覆の貝を入るゝ桶

黑餅―黑丸の家紋

子持筋―嫁娶の時著物に大小の筋を入れるが例

聞きし故、此小袖を見や、廓模様に云ひ付た。是著ていきや」と裲襠脱いで、「七日といふもいま〳〵し。來月一ぱい貸すぞや」遠「アヽお志は有がたけれど、終に別るゝ此身なり。然らは七々四十九日が中は私が妻と思しめせ、此分で死んだらば、定めて男の餓鬼道へ墮ちませふ」と、泣く〳〵たてば姫君、「さふいふて皆吸ひ乾しやんな。どこぞ少は殘してたも。こちは是から腰本つれて步ふて戾る、あの乘物で皆供しや」と、歸るさを見て遠山は、「姫君樣の情程、我身の罪は重うなる。借る時の地藏菩薩に捨てられ、返す時の閻魔の廳、どふ云て脫れふ」と、淚をかこふ神垣や、神も佛も見どほしに、酸も甘いも梅青む、北野の假屋に 三重 嫁取の、嫁の手道具、御厨子鏡臺うちみだれ箱、葛籠貝桶挾箱、長刀持せて遣手のみやが、來るとは思ひがけもなし。其心底の屆きしこと、姫君の情といひ、かた〴〵默止がたければ、門弟雅樂之介、采女隼人大學なんど宗徒の弟子共、すべよくまかなひ春平にも內意を得、表向は銀杏の前御入有しと披露すれば、方方の音物樽よ肴よ卷物よ。太刀折紙の馬代銀、五十目がけの蠟燭の、明ぬ暮ぬと賑ひて今日五日目の麻上下、雜煮の黑餅子持筋、つき〴〵しくぞ見へにける。其日もやう〳〵傾ぶく比、名古屋山三春平「お見廻申と案內有ル。雅樂介出むかひ、「先以て此度は姫君

はつたり―俄に縁切れる

笑止―氣の毒　いやと云々―否といろてはなり

かけご―中蓋、心の底をいふ

飛梅の神―天滿天神

い、遣手はしてもをのれやれ、一度は狩野ノ元信が、内義といはれふ〳〵と、四年が間の氣の張弓、はつたりと弦きれて、泣くにも力あらばこそ、無理ともそんとも餘り無法なことながら、永うはいらぬ一七日、今宵の嫁入を下されば、跡はお前と萬々年、七日添ふて別れて後は此世の生顔見せまいし、たとへ死んでも彼の人の、未來の廻向は受ますまい。最ふ此跡は申ませぬ」と、涙を流し手を合せ、伏轉ぶこそ哀なれ。姫君呆れておはせしが、「聞けば笑止悼はしや。いやと云はたいてい胴慾者といはれふず。心得たといふてから迷惑するは我一人。新枕はどふこうときほひかゝつて行嫁入、道から貸して歸るとは、咄にも聞ぬこと。こちや義理ずくめになつたか」と、聲を上て泣給ふ、道理のうへの道理なり。やゝ有て涙をおさへ、「ムヽよし〳〵合點した。和女が其思ひからは男も心にかゝる筈。二人の縁の離れぬ中へ嫁入しておかしうない、蓋もかけごも打明けたこそ女夫なれ。男を貸してやる程に、互ひの心を晴らしてたも。去ながら、餘りかけごを明け過し、底拔きやつたらこちや聞ぬ」と、涙ながらにの給へば、「アヽ有がたや」と遠山は、姫の膝にいだき付、遣「貸すお心より借る心、御推量遊ばせ」と、泣聲よそに飛梅の、神も憐み給ふべし。姫「サア迚もなら早いがよし。元信はかねてより、傾城好と

陸路—道筋

頭のかゝり云々—いひ出す手がかりがない

西所云々—火葬地、みやの亡靈を仄めかす

修羅出立—死裝束

たしなみ—愼み

いはれては大人氣ない。相手むかひにしておきや。サアなんぞ聞ふ」と、口は陸路をわけながら、胸はしどろの山坂や、顔は躑躅のごとくなり。女溜息顔をあげ、「ア丶流石でござんすな。其美しい出やうには、こふ取た胸倉を放し様に困つた。我とても中々狼藉する氣は微塵もなく、お乘物に縋つて歎きを申、お情をうけふと、七本松から跡先に、是迄窺がひ參りしが、あたまのかゝりが如何もなく、思はず慮外致せしなり。思ふ願ひが叶はずは、西所川原か舟岡へ、直に飛ばふと思ふ氣で、私が爲の修羅出立、高いも低いも女子には、大なれ小なれ此氣はあれど、いはぬで持た世の中。色に出さぬをたしなみと、心で心を叱つて見ても、いかなる慾もはなれふが、男によくは得離れぬ。去りとてはきたない氣、恥かしゆござる」と、聲をあげ譯をもいはず泣るたり。瀬兵衞を始め女房、「御祝言の時刻ちがふ。道行計いはず共、要ること計申せ〳〵」と責ければ、みや「ヲ丶御尤。私は土佐の將監が娘、稚名はお光、親の憂瀨に身を賣り、越前の敦賀で遠山と申せし流れの者。四郎二郎殿とは故有て、起請一筆書ね共、釘かすがいより離れぬ中。身も持くづし方々をうろたへ、今は六條三筋町、上林が内みやと云、流れの身よりあさまし

らばでござんす」傳「門迄送れ」跡賑かし、打たり舞たり舞鶴屋「傳三が萬うけこんだ。おきみやげを遣手衆、お春お夏」と勇めども、みやが心はあきがらの、腰の巾著ぶらぶらと、物寂しげにぞ 三重 見へにけり。花の三月はや過て、娘の年も廿棹。いつのまにかは長持に、桐の葉茂るよめり月、銀杏の前の御祝言、名古屋山三のはからひにて、四郎二郎元信を、北野の社人にかり座敷。名古屋が家の子世繼瀬兵衛輿添にて、供女中の出立や、地黑地淺黃紅ひわだ、右近の馬場にぞ著給ふ。並木の櫻くれかゝり、まだ人貌も白無垢著たる、若き女の横合より、嫁入の供先押わり〳〵、打も敲くも事共せず、しつかと縋つて引程に、乘物の戸は碎けて放れ、姫君あつと叫び給ふを、胸ぐら摑んで引ずり出し、土堤に押つけ引すゑたり。瀬兵衛刀の反を打、六尺徒士衆おつ取廻し、「そこを放せ放さずは、打殺せ捻殺せ」と口々に呼はれば、姫君制して「アヽ默つて居や構やるな。嫁入する身に女のざいで、只のこととは思はぬ。四郎二郎殿の妾か、但時の戲ふれに、末では妻にせふなどと、男の當座まに合を、一筋な心から其恨みであらふの。我が身にしらぬことながら、殿を持つ役なれば聞まいとはいはぬ。道理さへ立ことで、負る道なら負もせふ。又筋もない道云つて見や。我にも手も有足も有。銀杏の前が理不盡と

圍―天神の次の職
心はあきがら―心と巾著のあきに秋をかく
棹―年の數と長持の數
桐の葉―家紋
白無垢―死裝束知れぬにかく
六尺―籠舁の事
女のざい―女の分際

主持たぬ云々—浪人の身は是が何より結構
見廻や—見舞へや
投首—憂に沈む様子
乗物古ひ—乗物で出るは昔の事となり

走り出、山「アヽ〳〵お手がら〳〵。酒呑童子の首より取にくいこと、主もたぬ身は爰が過分。手を引あふて門を出て、名古屋山三と葛城と、後々迄の咄を殘さふ。ヤア亭主近付になつて置きや。狩野ノ四郎二郎元信廻り逢ふ計に、互ひの苦勞は知る通、身は葛城を請出だす、四郎二郎は大名の、お姫樣をほり出す。祝言の夜は勝手へ見廻や。扨みやの禮は今は申さぬ。前垂鎰を捨てさせ、武家か公家か町人か、望み次第に數ならね共、拙者が親分、先づ姫君の祝言には、待女郎に賴もふ」と、勇みかけても投首に、目も泣はらして返事もせず。堪へ兼てつゝと出で、云はんとするを四郎二郎、柄に手をかけ腹をさすれば手を合せ、泣く〳〵退れどなほ堪られず、思ひきつていはんとす。四郎二郎胸おしあけ、既にかふよと見せかくる。みや「アヽ〳〵申四郎二郎樣、私やなんにも申ませぬ。御息才で姫君と、夫婦になつて下さんせ」と、わつと叫び伏しければ、共にせきくる四郎二郎、「ヲヽよい合點〳〵。廓の衆は涙もろく、目出度いことにも泣たがる。身請する女郎衆に名殘惜いは尤ながら、他國へ行ず死はせず、追付逢ふ泣やるな」と、外にいふさへ包みかね、目はうろ〳〵となりにけり。傳「サアお乘物が參つた。早ふお出なされませ」葛「いや〳〵乘物古ひ」と立出れば、一家の大夫天神圍、「葛城樣さらばや」葛「去

息才―息災

聞きたい迄―迄は例の助辭

山三様にあふて四郎二郎が女房は、此みやでござんす、と罷出て斷らふ」元「ヲヽ云ひたくば云や詞の中に脇指を、此腹へ突きこむ。サアどふぞ〳〵」と詰られて、泣より外は何をいふも大切さ。みや「そんならいふまい息才でゐてくだんせ。去ながらどふぞ言抜らるゝなら、言抜て見てくだんせ」と、まだぐど〳〵の忍び泣。元「尤々男のつら役。斯ふいふとてなんの如在が有物ぞ。弟子衆こちへ」と涙ながら、奥へ行間も惜まれて、みや「是采女さま雅樂さま、祝言の咄が出たら云ひ消して下さんせ」と、賴む返事の否應は、涙に紛らし入にけり。心許なさあぶなさに、心騷ぎて落著かず、襖の際にさし足し、立聞すれば伴左衞門を討とめた物語。みや「アヽ嬉しや女房事は出ぬそふな。最ちつと聞ふ。あの耳語はなんじやしらぬ。聞きたい迄」と耳をよせ、「アヽ悲や、連て歸つて姬君と、女夫にせふといひくさる。こちの男が利口そうに、こなたの詞は背きませぬと、吐しづらは何事じや。エヽ聞まい物を腹の立」と、耳をふさいつ立つ居つ、身をもみ歎くぞ哀なる。舞鶴屋の傳三郎遣手引舟下男、いきりきつて大聲あげ、「こりや〳〵、葛城樣の身請さらりつと埒明た。あとの三月二日に隙をやるとの一札、王樣の御綸旨より高直な物握つた。乘物の戶をぐはらりと明て、今でも大門お出なされ」と喚く聲に、人々悅び

今も今云々―只今云うた其人なれば逢はずに頼むと也
げしう―是非とも
餅屋云々―餅屋の店の看板にお多福の面を着ける事當時の習はし(用捨箱)

つそ親のこと、思ふ所へいかなんだ。私に罰が當らずば、當る者は有まい」と、口說立れば四郎二郎、二人の弟子もとも淚、さゝらの竹も古の、紫竹にそむる計なり。稍有て四郎二郎、「先いふべきは、名古屋山三春平、此所にて不破ノ伴左衞門を討て、詮議に遇ふ由洛中の是沙汰。遺恨のもとは某故、聞捨てをかれぬ挨拶。廓の說はどふぞ」といへば、みや「さればいなア、詳しいことも聞ました。山三樣にする世話は、こなさんへの奉公と、さま〴〵心を碎いて、何の波風ない樣に、十の物が九ッ、追付埒が明筈で、あれ奥にじやはいなア」山「是は大慶先通つて對面せふ」みや「イヤ〳〵待たんせそりやならぬ。こな樣を尋出し、姫君と夫婦にせねば侍がすたる、と今も今云ふた人に逢ずといんでくださんせ」元「エヽ愚痴なこと計、我故に一命を果さふといふ、山三じやないか。逢ずに歸つて人外の名をとれか、げしう逢はせまいなれば、爰で腹を切らふか」と、脇指に手をかくる。みや「ハテ死なんせではないはいの、外に奥樣持つまいと、いふ誓文立てあはんせ」元「ヲヽ姫君は扨置、たとへ餅屋のお福でも、山姥と祝言するとても、山三が詞を一たん立てずにおかれふか。エヽ世間見た樣にもない、氣が狹いぞや」と恥しむる。みや「世間は唐土迄しつても、氣は武藏野程廣ふても、大事の男を人には添はさぬ。

座敷、「こいよ〳〵」と手をたゝく。「あい〳〵あい」と禿共、立つ間遅しと走りより。みや「是こふしたこともあらふかと、憂命をも捨てなんだ。よふ顔見せてくだんせ」と、縋れば男も抱き締め、涙の外は聲もなし。みや「なふ戀しいの懐しいのとは、大抵戀路の慣ひぞや。それをとんと打越して、主親方にも背きし故、奈良伏見迄賣り渡され、今此京で遣手となり、花の都も我身には鬼界が島に住む心。胼湅瘡に苦しみても、手足の苦勞は成もせふ。心を痛める計じやない、力業にも才覺にも、かなはぬ物は逢ひたい、と思ふて遣瀨がなかつた」と、あまへ口説ぞ不便成。四郎二郎も盡きせぬ涙、元「ヲヽ道理〳〵いとをしや。たび〳〵文でも云通り、和女の蔭にて大事の繪を書き譽を取、契約違へず身請をせふと、思ふ間に不慮の事共、命が有るといふ計。恩をきた名古屋山三、我ら故の牢人。行先も〳〵、目出度いと云字は書様も忘れて、今は團扇の繪あしや釜の下繪に露命を繫ぎ、大津でとへば奈良にといふ、難波できけば伏見とやら。是は釆女雅樂の介、二人の弟子の介抱で、丸四年目に顔を見て、嬉しいことはどこへやら。おれと云者ないならば、疾によい仕合。前垂鑰はさげまい、と親御の事まで思はれて、生た心はせぬぞ」とて、男泣に泣ければ、みや「ナウ左樣打明けてくだんすが、ほん〴〵の御眞實。私はい

蘆屋釜―元信の下繪にて松竹梅を鑄出したる釜

前垂云々―赤前垂や巾着の鍵

夕朝云々—阿波鳴渡に出てたり

どうぶくら—眞最中

相ノ山—伊勢の相の山にて唄ひ出でし一種の歌曲、

したたるい云々—しつこい、物やる隙ない行けと也

ふくろび—包みきれぬ

定めなき云々—前の相の山の作りかへ

とては、切て有所が聞きたい」と、聲をたてねばないじやくり、氣も沈み入る時しもあれ、心細げな鼓弓の聲、あはれ催す相の山「我れに涙を添へよとや、夕朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響け共、聞て驚く人もなし」みや「通りや。只の時さへ相の山、聞ば哀で涙が溢れる。悲しゆて成らぬどうぶくらに、あた聞ともない通りや〳〵」と、いひて涙を押拭ふ。相ノ山「野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥土の友となる」みや「アしたたるい手の隙がない。通りや〳〵」といふ聲に、心に苦のない新造禿、ばら〳〵と走り出、「こちら好じや相の山、聞て泣きたい所望々々」と立かゝる。みや「エヽ意地のわるい子共じや。それ程何が泣たいこと。やつて去そ」と巾著の、紐を解いて取り出す、錢は一錢二世の緣、切れてもきれぬ笠の中、泣沈みたる顏見れば、戀し床しの四郎二郎、互ひに「ハア、ハアヽ」とばかりに、目くれ心はしみ〴〵と、抱付たふもあたりには、禿が目元小ざかしく、堪へるだけと包め共、咽びふくろび泣るたり。みや「アヽ去せましたらよい物か。まちつと哀な心を、謠ふて聞せてくださんせ」元「あつ」と涙にするさゝら、鼓弓の弦も細き聲相ノ山「定めなき世に捨られて、身の寂滅が知らせたく、文は書け共便りなし。獨寢覺の友とては夢に見た夜の面影か。是が寢ざめの友となる」折しも二階奥

まきぞへ—附帶
ないて—無いと泣くとかく
のらぞんざい—粗略
うつとり—茫然、礫も打たぬにかく
煙草のんでも云云—煙管は烟が通つても喉へは通らぬ、此句高尾ざんげの長唄にあり
所在—泣くが仕事
物日—祝日

首尾してくださんせ。まきぞへが要るならば、私が繻子の帶も有、八丈の袷もござんす」と、歎けばともに泣聲の、傳「ヲヽ奇特によふいやつた。おれも男じや氣遣すな。女房を惣嫁に賣つてなりと、埒を明けぬといふ事は、ない」て出るぞ頼もしき。みやが憂身のうき思ひ、口でいはねば氣につかへ、目に流るゝは百分一、胸に涙のとゞこほり、山三樣に骨折るも、男の心の悲みを、思ひやり手となつたるも、のらぞんざいで成れふか。戀がこふじて遠山が、此躰になつたとは、知らぬか聞ぬか男めが、何處に居るやら死んだやら、梨も礫もうつとりと、煙草飲んでも、煙管より、喉がとおらぬ薄煙り、人の見ぬ間に思ふ程、泣くを所在か味氣なや。内を首尾して葛城は、走つて來るより駈上り、「みや殿爰にか、いかひ世話であつたげな。忝ないぞや。土になつても忘れはしませぬ、おれが心を察してたも。ほんに〳〵物日なかに瘦たはいな。こなたは今は何の苦もなふて樂であろ。遣手の身は浦山しい。山樣は奥にかの、ちよつと逢ふて來ふぞや。後に後に」と云ひ捨てゝ、行を見るにも猶涙、みや「つらいぞ憂ぞといふ中にも、男を傍へ引つけては、憂を凌ぐも力が有。此身には苦も有まいとや。明暮つきあふ人目にさへ、樂な樣に見へるもの、遠國隔てた男氣に、思ひやりのないことは、無理ともいはれず去

はだを合せ―同心

とつと跡の月―ずつと前の月

お腰の物云々―刀は武士の魂、夫を放せとはいはれぬ

鮫―雨やさめに掛く

みます」と、身に引かけて歎く體。亭主暫らく思案し、「是々よい仕様有。爰へよりや」と、小聲に成、「是をついでに葛城様を、とんと請出し奥様に、定める時に親方とはだを合せ、手形の日付をとつと跡の月にして、外様へは借宅見たての其間、廓に少し逗留分。すれば疾から御夫婦と云ものよ。昨日迄伴左衛門がくどひた狀文、握つてからは間男の證據慥なり。女敵討は天下のおゆるし、千人切りても切德。此分別はどふ有ふ」みやは悅び、「ヲヽできた〳〵、目出度い〳〵智恵者め」と、煽ぎ立れば、傳「アヽむしやうに目出度がるまい。當分請出すお銀がない。もしお腰の物をそれ迄の質物に遣はされば、私が加判で大夫様をたつた今、門を出して見せませふが、お侍にお腰の物とは、なふおみや、どふも申かねるはいの」みや「ハテおのしのお身計か、不便になさるゝ四郎二郎迄、命を助かることとなれば、御了簡あそばしませ」と、手を合せるやら歎くやら、山三も共に涙をうかめ、「ヲヽ〳〵何が扨〳〵、皆の衆に苦勞をさせ、何しに否と云はふぞ、近比過分千萬。コレ是は重代の左文字、二千五百貫の折紙有。惜しとは思はね共、七才の時より今日迄、ついに脇指一本で、他所に居たこと知らぬ身が、刀の冥加に盡きたか」と、涙は雨や鮫鞘の、脇指計で奥に入、後姿を見おくりて、みや「おいとしや〳〵、傳三様どふぞ

どうつつて—どう續いて

わが身—汝

粟田口—仕置場逢はうにかく

下から云々—下の者は上の人の心計られぬもの、此諺狂言末廣にもあり

込うだる四郎二郎様に、斯く迄深き恩を見せ、お命をも捨てんとは、アヽ頼もしや忝や。我こそと名乘て一禮いはふか。いや／＼姫君とやらへ聞へては、御祝言の邪魔ぞと遠ざけらるゝは知れたこと。只餘所ながら彼のお方の爲に成、お命を助けるこそ我夫への奉公」と、思ひ定て「是傳三さま、お侍の覺悟の上を、女子の了簡推參なことながらあのさんに腹きらせ、恩を受た四郎二郎、いづくの浦で聞付ても、よもや生ては居られまい。人の所緣はしれぬ物、どれからどれへどふつつて、誰が悲みとならふやら。山三樣のお身の難、脫るゝ工面は有まいか。思案は今でござるぞや」と、よそをいふのも夫のこと、案じて餘る淚の色、胸撫でおろすも道理なり。傳「チヽわが身がいふ通り、おつ取て廓の迷惑、お仕置には法が有ル。腹切たいとおつしやつても、よふあたゝかに、見苦しい罪に粟田口、下からどふも量られぬ」と云へば、山三はつとして、「アヽウよい所へ氣が付イた。三味線所でないはいの。相手は主持こちは牢人、あばれ者にしなされ、木兎の留つた樣に、獄門などに曝されては、先祖一家の恥辱、今さつぱりと腹切ても、其段からは死骸迄、彌恥は重う成、エヽ主持たぬ身の無念さよ」と、齒切をしてぞ淚ぐむ。みやは聞程我男の、身に逼りくる悲さの、「どふぞよい分別して、進ぜて下され頼

不肖―因果

音色―山三の詞つき

滅多―連りに

らば爰は人もくる。二階へお通りなされ」といへば、山「ヤレ何が怖ふて隠れふぞ。伴左衛門を切たるは誰とか思ふ、此山三が手にかけ打つて捨てたるぞ。葛城が意趣は僅のこと、彼めと傍輩たりし時、狩野ノ四郎二郎を身が取持にて、奉公に出せし所に、伴左衛門親子雲谷と云ふ繪師を引、御在京のお供の留守、無實を云かけ刄傷に及び、四郎二郎は行方しれず。あまつさへ外戚腹の姫君銀杏の前、四郎二郎に心をかけ、御祝言有筈を妨入て狼藉し、某迄も讒奏し、牢人の身と成たれば重々の遺恨有。殊に四郎二郎は隠れもなき名筆、大内繪所の官にも進む身を、某しゐて國に留め、難義をかけて見て居られず、姫君と夫婦になし、四郎二郎さへ出世すれば、本望々々。生けて置ば四郎二郎に如何成仇をかなすべきと、傾城の意趣を幸に、討て捨たる伴左衛門、知れて切腹する計。四郎二郎故に捨てん命、聊か惜いと思ふにこそ。武家に生れた不肖には、大門口で立腹切り、新造衆や禿共、芝居でするよなこととして見せふ。ヤア葛城はどふじやの。亭主諷へ」と三味線の、天柱に貌をすぢかひ身、糸の音色も目の色も、人をきつたる躰はなく、亭主結句色違へ、「先お咄はいらぬ物、内外の者共必ずあだ口聞くまいぞ」も、わな〳〵慄ひ手酌にて、滅多に呑んでぞ居たりける。みやも聞より驚きて、「扨は我二世迄と、思ひ

家の桓武天皇九代の後胤云々の句にもじる、平は春平

まんぎ—せんぎといふより口拍子にて續けいふ、工面十面の類

平の供して口輕く、舞鶴屋にぞ入にける。亭主傳三を始とし、數多の女郎遣手迄、「是は是は樣子はお聞なされふが、先四五日も御出なされぬがよいはづ。日比意趣有伴左衞門、切手は名古屋山三じやと、何處ともなしの取沙汰。葛城樣のお案じ我ら夫婦の氣遣、此おみやが辯舌で、今日はずらりとやりましたが、伴左衞門が死骸を奈良漬にして後日の詮議、殊にお客の名所書きしるせとのいひ付。お身に覺えがなふてから、詮議まんぎも喧しし。お前を外樣へつくばはせて、此傳三が立ませぬ。帳面に留ぬ間に先お歸り」と云ひければ、山「いや傳三そふでない。お手前こそ念比、廓中の女郎衆へ苦勞をかけた此山三が、穿鑿にあふ悲しや、と屈んでゐる程ならば、里通ひも妓交りも、あたまからせぬがよし。先和國樣から御禮申ス大事の遣手をお貸しなされ忝い。扨みやの働き心ざし、詞の禮はいふ程古い。三千石とつた山三が手をついて頭を下る、額に千石兩の手に二千石、主人の外一生に、此式作法はみや一人。是が禮ぞ」と手をつけば、みや「ア丶勿躰ないなんのお禮が入ませふ。ちよつと葛樣に逢はせて去なせましたい物じやが、私が行けば目に立、和國樣一筆進ぜて下さんせ」和「いや文もいかゞじや、私らが直に誘ふて、遊に出る貌で連れまして來ませふ。サア皆ござんせ」と、座敷をこそは立にけれ。傳「然

かい—妨
おつる—つまる
もてあつかひ—もてあます
籠屋—牢屋の事
水をくれる—水責
惡ごう—わる洒落
二代の後胤—二代目の門番を平

人のお耳に立、お身のかい共成時は、御一門の評議にのり、人をはぐの欺すのと、おつる所は廓の難、爰の意氣をたてるが色里のたしなみ。身請の談合破れたも、伴左様のお身の上、大事に思ふ上の事でござんす。道で切れさんしたはそこ迄は存じませぬ。定めし死とも有まいし、尤遁げても見さんしよし、そこに如才も有まいが、先の相手が強いか、身の取まはしのわるさか、知らんでやんす」と答へける。検使の人々もてあつかひ、雑「よいは〱もふ默れ。一時に詮議成がたし。死骸を酒にひたし置、後日の評定たるべし。それ〱」とて役人共、「桶をしつらひ死骸を納め、酒汲み入て繩がらみ、籠屋へやれ」と舁き上たり。雑式重て「年寄々々、商賣なれば傾城には構ひなし。去ながら夜前よりの買手共、事濟む迄名所を、一々に書き留めよ。こりや遣手め、重ねての詮議には、水をくれる用心せよ」と、おどして立共おぢもせず。みや「エイをかんせ。銀くれる遣手に、水くれるとは惡ごうな」と、笑ひを機に云ひしらけ、先を拂ひて立歸る。權威を見せて突鳴す、鐵棒のをと、三味線に、引かはりたる三筋町、戀の市場と 三重 なまめかし。名古屋山三春平は、通ひ馴にし六條の、道には石が幾個有迄、よみ覺えたる一貫町の、茶屋が葭簀のよしやよし、里になげうつ命ぞと、大門口の與右衛門も、門番には二代の後胤

前、ちよつちよと座敷へ出る度に、一杯づつも飲む酒に、ふら〳〵眠りのいき倒れ、朝から晩迄緋の袴、花色繻子の巾著も、中は秋の夜の長紐、提た鎰の穴から天を覗けばほのぼの明、妓様達の身仕廻風呂の、手洗水の髪洗ひの、鍋よ杓子よ臼よ杵よ、正月しまへば節句朔日、今日は二日の拂日なり。灸もすゑたし卯はら辰もよ背中に腹、商賣には換られず。皮切こらへて出る心、其樣に言はんすな。廓は諸國の立合、常住切つてのはつての是程の喧嘩は、お茶のこ〳〵茶の子ぞや。アヽ仰山な」と笑ひける。雜式怒つて、「いやさ己が身の上は問はず、此伴左衞門千二百兩にて、葛城を請け出すとな。傾城は賣物直段極る上からは、名古屋山三が妨いふても叶はぬ筈。然るを違亂に及ぶとは、汝等がもがりと覺たり。切手も知らいで叶はぬ筈。眞直に申せ」と詞あらく問ひかくる。少しも臆せず會釋して、「御意の通り賣物とは申ながら神佛の奉加と同じことで、銀出しながら拜するは、恐らく世界に傾城ばつかり。買ふてくれるが嬉しいとて、親がかりやお主持の、戀路の闇の一寸先、見へぬ所を傍から見て、買人のお身も廢らず、女郎ものほさぬ樣に、舵を取るが引舟、目の鞘はづすが遣手の役。大事にかける證據には、世間に心中十ヲあれば、廓に一つ有かなし。伴左樣は御大身、お銀に不足も有まいが、御主

緋の袴—赤前垂の洒落
巾着云々—巾着の中は淋しいと也、此邊色々掛詞にて埋めたり
卯腹云々—卯の日には腹に灸を据ゑぬもの、次も同じ
背中に腹—背に腹はかへられぬ(諺)
皮切—初灸、凡て初手の苦を云ふに用ふ
もがり—騙賊
目の鞘外す—眼を八方に配る

すゞどげなし—鋭き風なくて
まん〳〵—滿々
おしよほ云々—褄の結ひ方
きやうとい—大變いやな
ゑづ—怖い
云損うたら云々—云損うても構はぬ
てんぼの皮—ままよ
かさをかけ—頭から

埒が明まい。どれぞ機轉な遣手衆を、頼んで見ん」と云ふ内に、「出ませ〳〵」と頻の使、忘八「エイ思ひ付た。一文字屋の和國に付てゐる、みやと云ふ遣手は越前の敦賀で、遠山と呼ばれた全盛の大夫。戀故今はあの躰、すゞどげなふて智惠まん〳〵。閻魔の廳でもいひぬける、此みやを頼まふ。あれ〳〵彼處へ、大福帳かたげて來るは、みやじやないか」といふ所へ、おしよぼからげの忙がしげに、みや「皆さん是にござります。まあ〳〵きやうといふことが出來まして、御苦勞でござんす」と、云ひ捨通るを、忘八「是々おみや、檢使の衆葛城が遣手を召るれ共、玉は愚鈍で臆病なり、何をお問なされふやら、いひ敎へて濟ぬこと。廓中の頼みじや、葛城が遣手に成て出て、請返答をしてたも。恩に受ふ」と云ければ、みや「あの死骸の傍へ出ることか、アヽゑづ。去ながら、いやと云も子細らし。云ひ損なふたら大事か、口に任せて遣つてくれよ。てんぼのかは」とぞ出にける。雜式鐵鞕よこたへ、「をのれは葛城がやりてめか。用有て召出すになんとして遲なはる。横著者氣隨者」と、かさをかけてぞ叱らるゝ。みや「アヽ彼のさんわいの、頭から叱らんす。なんの氣隨でごあんしよ。十二人の大夫樣を一人して廻せば、辨慶遣手が忙がしさ。口說の中を押し隔て、打物業にて叶ふまじと、日に幾度の詑言やら、夜の身持は揚屋の吸物同

用ふ
然もなく〱—傷なし
女郎かひて—女郎買手と胡坐かくにかく
起き〱の—やつと起きたばかりの
引舟—ひくにかく引舟は大夫につく國女郎
牢人—浪人の事以下皆同じ

起々の禿共、つね彌いく野と手を引舟も走つて來て、塀にくらかけ木に取付、禿「かほる樣あれ見さんせ。吉野樣の大膽な、掃溜山へ上つて、海老の皮で足突かんすな」吉「突いたら大事か。切れて死る人さへ有」と、あだ口々の喧しさ。甲「あの切られてゐる人は、葛城樣の大盡、不破ノ伴樣に似たじやないか」乙「ほんにそふじや伴樣に極つた」丙「サア伴左衞門が切れた」と京童の物見だけく、手負見がてら傾城見に、群集はおしも分けられず。すはや檢使と人を拂ひ、官領の雜式供人引具し、死骸を解いて疵改め、雜「江州高島の執權、不破の伴左衞門に極つたり。扨此者の買ふたる傾城は何と云。意趣有者の覺えはなきか、口論などはなかりしか眞直に申せ。當分隱して、後日に知れなば曲事なり」とぞ仰ける。年寄罷出で、「上林の葛城と申大夫を、千二百兩にて請出さるゝ筈の所、名古屋山三と申す牢人衆と葛城と、行末深い約束とて、談合成かね申せし故、兩方意趣を含み居られしが、是ならで覺候はず」と詳かにぞ云ひわくる。雜式一々口書し、「名古屋山三は牢人なれ共、元は伴左と傍輩、かた〴〵大事の詮議なり。先葛城が遣手を呼べ」年「遣手出ませ」と呼ぶ聲に、玉は臆病年寄なり、玉「やら恐ろしや私が出てなんといはふ、縛られたら何樣せふぞ。なふ悲しや目がまふた。氣付は無いか」と泣居たる。忠八「是では

蜘手かくなは—糾かけ四角

り、西から東北から南、蜘手かくなは十文字、割りたて追廻し、さん〴〵に切り立てられ、さしもの軍兵堪りかね、八方へ遁げ散つて、残る者こそなかりけれ。又「さあしてやつた此上は、コ、〳〵爰には片時も叶ふまじ。都の方へと姫君を」ヲヽ〳〵ヲヲ逢坂山の時鳥、まだ初聲の口は吃り、心は鐡石かなおとがひに、勝つた優れた越へた峠は日の岡の、石原草原足もしどろにどよ〳〵〳〵、吃り廻つてのよ〳〵登りける。

中之巻

里—島原
通ひ足らぬ—猿は人間に似通へども毛三筋足らぬといふ諺を利かせたり
三筋町—島原の町名
遅櫻—開けの縁迄に用ふ
忘八—仁義八行を忘るといふより出でたり、女郎屋の亭主
白茶字—舶來品の絹布、袴地に

里は都の未申なり。通ひても通ひたらぬぞ三筋町、西ノ洞院中道寺、衣紋が馬場の一方口、未大門の遅櫻、忍びてひらけ一ばん門の東がしらむ。ドンどんと打たる太鼓の番太、「何者やら大門口に切れてゐる」と呼はる聲に、忘八屋揚屋茶屋駕舁廓の年寄立合、見れば年比卅計、究竟の侍、二つ重ねの白無垢白茶字に、縫紋紅裏に源氏雲の裾くよみ、南蠻ごろの大小對の金鍔毛彫は波に山王祭、七所御物蒔繪の印籠、天川珊瑚珠は然もなくて、大疵五ヶ所肝先にとゞめ有と、委細に書付、官領所へ訴へさせ、死骸を圍ふ横はしご、二階から女郎かひて、遣手のかめは首のばし、松は寝ほれて顔出し、まだ

沈返し―腕を曲げて枕返する手づま
しやー罵聲

木綿付鳥―鷄、逢坂關の祭に鷄に木綿を着けて放つよりいふ
廻らぬ云々―舌の廻らぬに物いふは無用

打つて出るや現の闇の、座頭一人とぼ〳〵と、とぼつく杖をふり上げ〳〵、盲目打にうつてんげり。「餘さじ物」と續いてかゝる團八が弟犬上三八、二八計の小人枕がへしの曲枕、おつ取〳〵はらり〳〵はら〳〵〳〵、うつ波枕かず枕、枕重に打亂れ、散り〴〵にこそ引たりけれ。伴左衞門怒をなし、「手にも足らぬ雜人ばら、しや何ごとか有べき。武士の刀のあんばい見よ」と、眞一文字にかけたりけり。伴「あら凄じやこはいかに」姿は沙門頭は鬼神、鬼の念佛嚙みくだく、牙を鳴らし角をふり、向ふ者の眞向、撞木を持つて叩き鉦、くわん〳〵〳〵〳〵、耳にこたへ骨に染み、進みかねては引き足も、隼荒鷹鷲角鷹、一度にさつと飛び來り、むらがる勢を八方へ、追つ立て蹴立てつゝきたて〳〵、翼の嵐夜明の風、三重鷲の聲々逢坂の、木綿付鳥にしら〳〵と、白み渡れば白紙に、有し形は彩色の、繪に寫りたる筆の精、天骨の妙とも云つつべし。又平勇んで女房の袖を引、物はいひたし心進んで舌まはらず、只「ウ、〳〵」と計なり。妻「エヽ爰な人敵が詰かけ事急な。廻らぬ舌をいはれぬこと。舞で〳〵」といひければ、又「ヲヽそれよそれよ氣がついた。今目前の不思議を見よ、我らが手柄で更になし、土佐の名字を繼だる故、師匠の恩の有難さよ。敵の中へ駈け入て、命限りに追散さん」と、大勢にわつてい

ぬるい―手ぬるい

鳥毛―鷄にかく

露の命―果敢なき命を君に與へん(唄の文句)

そめしだいなし―紺の着物と無茶苦茶の意とかけたり

きどく頭巾―奇特にかく、女の被る覆面づきの頭巾（嬉遊笑覽）

鉢叩―頭を叩く

住まれぬ荒屋、何者か有べきぞ。察する所見世に張たる三文繪を生物と見違へしか。怖いと思ふ心から、眼が眩んだ腰拔共、それ〳〵蔀をこぢ放せ。ぬるい〳〵」と下知すれば、鳶口ひつ懸「ゑいや〳〵」と、なんなく見世を放しけり。內を見れば不思議やな、いひしに違ひも荒奴の、影ともわかず幻とも、まだほのぐらき曉の、鳥毛の鑓さき揃へしは、土佐が魂寫し繪の、精靈なりとも知らばこそ、我も〳〵と驅け向ひ、打てども突けども手に取れぬ、露の命を君にくれべいと、そめしだいなし嫌ひなし、相手えらばず防ぎたり。雲谷が弟子長谷部の等巖、「數にも足らぬかす奴、我に任せ」と捲りかゝれば、片肌ぬいだる立髮男、大盃をひらり〳〵と閃めかし、眉間にふつたる唐芥子、等「ヲヽ辛、ヲヽから、から」からにしき、黑白も別かず引かへす。師匠の雲谷堪りかね、「片端より打みしやぎ、手なみを見せん」と飛んでかゝる。優しや優者の女わざにはきどく頭巾、藤のしなえをおつとりのべ、引纒ふてはたと打、しとと打つをひらりと外し、受けつほどいつ麻衣の玉襷、かひぐ〳〵しき若き法師の現れ出、勇みかゝれる有樣は、なみや鯰の瓢簞〳〵、持つてひらいて鉢叩き。叩けばすべり、打てはすべり、ぬらり〳〵と手に堪らず、倦みはてゝぞ支へたる。不破が郞等犬上團八、「そこ退き給へ人々」と、

居合―長き刀を自由に扱ふ術
埴生―見苦しき小屋
八町云々―大津八町を走るとかく、走井は其所の名井
さしもの―鎖しにかく
しどろ―亂雜

みの色、氣を急けばなほ物云はれず、心を仕方の腕まくり、力み反打居合の眞似、拔打撫切拜打、組合捻首手にとつて、握り拳の武士氣をあらはし、埴生にかくまへ參らする、夫婦が所存ぞ賴もしき。程なく八丁走井の問屋組頭、組町引具しおこしかへつて聲々に「六角殿の姬君朱印を盜出給ひ、御家老より御穿鑿、裏屋小路もあらためよ。別して給書は屋搜し有。人は勿論犬猫も內を出すな」と裏口門口、ばた〳〵とさしもの又平取こめられ、狩場の鹿の如くなり。不破ノ伴左衞門長谷部ノ雲谷、著込の兵百騎計、むら立來つて家々に、押入々々搜しける。又平一期の浮沈ぞと、女房諸共姬君を押し圍ひ、隣を「がは」と蹴破て、ぐつと拔けたる壁あつき、氷の樣成大刀物、又「さし出す首を片はしから、キ丶〳〵〳〵切ならべん」と、壁に添ふてぞつゝ立たり。雲谷聲をかけ、「ヤアヤア是ぞ音に聞、土佐が弟子吃の又平めが住家なり。敲きこぼつて搜して見よ」兵「承る」と一番手、「捕たく〳〵。捕つた〳〵」とどつと寄しが、しどろになつて引返し、兵「なふ怖やすさまじや。何かは知らず家內には、人大勢みち〳〵て、或は奴の形も有、又は若衆女も有。人間ばかりか猿野猪鷲角鷹、爪を研ぎたて眼を瞋らし、寄付ることでなし。なふ〳〵いやや」と身ぶるひし、舌を捲いてぞ恐れける。伴「何を吐す狼狽者、人三人とも

山水男—身窄らしい男

繪本—手本にかけたり

火ようじ—火の用心

やごとなき—貴き

揚げにけり」斯て女房勇みをつけ、「又もや御意の變るべき。はや御立」と勸めける。又「ヲヽいしくも申されたり。身こそ墨繪の山水男、紙表具の躰なり共、朽て朽せぬ金砂子、極彩色に劣らじ」と、勇み進みし威勢は、由々し賴もし我ながら、天晴繪筆の殊勝さよ。唐繪の樊噲張良を、たてについたと思しめせ」お暇申てさらばとて、打立出る威勢は、誠に諸人の繪本ぞと、ヲヽ譽ぬ者こそ 三重 なかりけれ。逢坂の關、曙近き火ようじの、聲高島の屋形には、六角殿の姬君行方見へさせ給はぬとて、旅人の改め問屋の詮議、土を返さぬ計なり。又平は今朝七ッ立ち、門出祝ふ中椀に、例の熱燗三杯ひつかけ、うつ立つ所に、やごとなき上﨟の、跣足の土に身も頽れ、伏見の方よりうろ〳〵と、上「是そこな者、京の道を敎へてくれ。草鞋とやらいふ物をはかせてくれ」と、詞つきの横柄さ。又平むつと貌に立はだかつて返事もせず。女房走り出、「大抵のお方でない。威の備はつた見所有」とお側に參り、女房「恐れながらお屋形の姬君樣と見參らす。我々は土佐の將監が弟子、吃の又平と申繪書の夫婦。狩野の弟子雅樂の介に賴まれ、お迎ひに參る折柄なり。必包ませ給ふな」と、さゝやけば嬉しげに、上「ヲヽ自こそ銀杏の前、道犬雲谷が追手すき間なし。よい樣に賴むぞや」と宣へば、又平土邊に額をすり付、悅びの色勇

と定め、こなたの繪像を書とゞめ、此場で自害し共跡のおくり號を待つ計」と、硯引よせ墨すれば、又平頷き筆を染め、石面に指向ひ、「これ生涯の名殘の繪、姿は苔に朽る共、名は石魂に留まれ」と、我が姿を我筆の、念力や徹しけん、厚さ尺餘の御影石、裏へ透つて筆の勢、墨も消ず兩方より、一度に書きたる如くなり。將監大きに驚き給ひ、「異國の王義之趙子昂が、石に入木に入も、和畫に於て例なし。師に優つたる畫工ぞや。浮世又平を引かへ、土佐の又平光起と名乘べし。此勢ひにのつて姫君御朱印諸共に、取返せ」と有ければ、「はつ」と計に又平は、「忝し」共口吃、禮より外は涙にくれ、踊り上り飛あがり、嬉し泣こそ道理なれ。將監夫婦悦び、「心功にて心ざし厚けれ共、敵に向つて問答せんこと、いかゞ有らん」と宣へば、女房聞もあへず、「常々大頭の舞を好き、妾諸共つれわきにて舞はれしが、節の有ことは少しも吃り申されず」と云ふ。將「やれ夫こそは究竟よ。試に一節目出度ふ舞ふて立て」又「あつ」と答へて立上り、古き舞を身の上に、なぞらへてこそ舞ふたりけれ。舞詞「去程に鎌倉殿、義經の討手に向くべしと、武勇の達者を選ばれし、それは土佐坊、是は又土佐の又平光起が、師匠の御恩を報ぜんと、身にも應ぜぬ重荷をば、大津の町や追分の、繪に塗る胡粉は安けれ共、名は千金の繪師の家、今墨色を

おくり號―謚
苔に朽る―地に朽果つる
王義之云々―此二人有名の書家にて書ける文字自ら木石を穿つと云ふ
功―剛か
大頭―能に似たる女舞
大津―大任を負ふに掛く

殿共いはぬ云々—修理を崇めた詞、殿は樣より輕し(俚言集覽)

おとまし—いやになる

「とは情ないお師匠じや」と、聲をあげてぞ泣居たる。將監なをも聞入なく、「不具の癖の述懐涙不吉千萬。相手に成ては果しなし。是々修理ノ介、御邊向つて思案をめぐらし、奪ひ返し來られよ」修「畏つた」と云ふより早く、刀ぼつこみ立ち出る。又平むんずと抱留て、「マヽまんまん待てくれ。師匠こそ情なく共、弟子兄弟の情じや、此又平を遣てくれ。殿共いはぬスッスヽすつ〱すり樣」修「こりや又平、某矢竹に思ふても、師の命は力なし。こゝを放せ」又「イヽ〱いやハヽ〱放さね」修「放さねば拔いて突ぞ」又「ッヽつきコヽ〱〱殺せ。ハヽ〱〱〱放しやせぬぞ」修理ノ介もてあつかひ、「放せ〱」と捻ぢ合ふたり。將監夫婦聲を懸け、「放せ〱」と留むれ共、耳にも更に聞き入ず。女房取付、「あれお師匠樣の御意が有。おとましの氣違や」ともぎ放せば、女房を取て投、はたと蹴て白眼付、又「おのれ迄が氣違とは、エヽ女房さへ侮どるか。不具は何の因果ぞや」と、どうど座を組み疊をうつて、聲も惜まず歎きける、心ぞ思ひやられたる。將監重ねて「汝能合點せよ。繪の道の功によつて、土佐の名字をついでこそ、手柄共云ふべけれ。武道の功に繪書の名字、讓るべき子細なし。成らぬ〱」と云切給へば、女房居直り、「サァ又平殿覺悟さつしやれ。今生の望は切たぞや。此手水鉢を石塔

頰杖つき―思案の體

しんき云々―氣を揉む

せしや―拙者

ゐん正云々―跖定の名刀にて首のやりとりする

命の云々―浮世も命も輕い諺

須彌山―重い喩

勢頼み申さん爲、忍び參り候」と語りもあへぬに、將監皆聞迄に及ず、將「狩野と土佐は一家同前、力に成て參らせん。され共彼奴らと太刀打は、いッかな〳〵叶ふまじ。姫君にも負傷あらん。どふぞ辯舌のよき人に、御屋形の御意といはせ、たばかつて取返す分別がござらふ。何れも云ふてお見やれ」と、額に小皺頰杖つき、各小首を傾くる。又平何ぞ云ひたげに、妻の袖引背中つき、指差すれ共合點せず。しんきをわかし女房を引きのけてつゝと出、師匠の前に諸手をつき、唾を飮みこんで、又「此討手には拙、せしやが參り、姫君もゴウ御朱印もウ、〳〵うば奪取て歸りましよ」將監きつと見、「ヤア面倒な吃め、思案なかばに邪魔いるゝ。そこ立てうせぬか」と、叱られてもおぢるにこそ。又「イヤ膝共談合と申。口こそ不自由なれ、心も腕も天下に怖い者がない。拙者が分別出し、叶ぬ時はゐん正すけさだ、あつちへ遣るか此方へ取か首がけの博奕。命の相場が一分五厘、浮世又平と名乘ては、親もない子もない身が一心、命は掃溜の芥、名は須彌山とつりがへ。悴の時から舊功なし、命にかへて申上るも、師匠の名字を繼たい望ばつかり。拙者めを遣はされて下されませ。申〳〵、さりとては御承引ないか、吃でなくば斯うはあるまい。エヽ〳〵恨めしい喉笛を、かきやぶつてのけたい女房共、さり

は、禁中の繪所小栗と筆の爭ひにて、物勘の身と成たるぞ。今でも小栗に從へば、富貴の身と榮ふれ共、一人の娘に君傾城の勤めをさせ、子を賣て食ふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ。土佐の名字を惜むにあらずや。修理は只今大功有、をのれに何の功か有。琴棊書畫は晴れの藝、貴人高位の御座近く參るは繪書。物も得いはぬ吃めが推參千萬。似合ふた樣に大津繪書いて世をわたれ。茶でも呑で立ち歸れ」と、愛想なくも叱られて、女房は力を落し、「此方を吃に產付た、親御を恨みさつしやれ」と、賴みなく〳〵又平も、我咽ぶえを搔むしり、口に手を入、舌をつめつて泣けるは、理り見へて不便なり。時に藪の內よりも、「將監殿光信殿」と呼はつて、痛手おほたる若者、緣先によろぼひ立、「狩野の弟子雅樂之介御見忘れ候か」將「實も〳〵雅樂の介、まづ此方へ」と座敷に入レ、承れば四郞二郞殿、雲谷不破が惡逆にて、難に逢ひ給ふ段々、具に聞。氣遣し」とありければ、雅「さん候某も供仕、雲谷と戰ひ斯樣に深手を負候。賴み切たる名古屋山三殿は在京、元信危うく候ひしが、漸のがれ落うせたると承る。こゝに難義の候は、姫君銀杏の前元信を憐み、七百町の御朱印を持て落給ひしを、敵奪ふて下の醍醐に隱れし由、二度姫君屋形へうつし、御朱印奪ひ返さでは、永く繪師の瑕瑾なり。某手負の身は叶ず、御加

急げば云々―武夫の矢走の船は早くとも急がば廻れ勢田の長橋(源俊頼)

ゆめ〳〵しう―忌々しう

おはもじ―お恥かし

あやかり―似る

時節―よい折

藤の花云々―二ツ共、大津繪によく畫く繪なればぶら〳〵に續けたり

な一日立ずくみ、何をするやらのらくらと、急げばまはる瀬田鰻、只今膳所からもらひまして、練貫水の大津酒、ゆめ〳〵しうござりますれ共、此春からお仕合がなをつて、鰻の穴から出る樣に、御世にお出なされませ。ほんにつべこべ〳〵と、私が云ふことばつかし。こちの人の吃と私がしやべりと、入合せたらよい比な、女夫が一組出來ませふ。ア丶おはもじや」と笑ひける。北の方聞給ひ、「ヲ丶よふこそ祝ふてたもつた。今宵は奇妙なこと有て、修理は名字を免され、土佐の光澄と名乘ぞよ。其方もあやかり給へ」とあれば、又平「時節」と女房を、先へ押出し背をつき、我身も手をつき頭をさげ、訴訟有げに見へければ、女房心得進み出、「誠に道すがら百姓衆の咄を聞、身は貧なり不具なり、弟弟子に土佐を名乘らせ、兄弟子はうか〳〵と、いつ迄浮世又平で、藤の花擔げたお山繪や、鯰おさへた瓢簞の、ぶら〳〵生ても甲斐なし、と身をもんでの無念がり、尤とも憐れ共、連添ふ我等の心の中、申も涙がこぼれまする。奥樣迄は申せしが、お直の願ひは此時節、今生の思ひ出、死しての跡の石塔にも、俗名土佐の又平と、御一言のお免しは、師匠のお慈悲」と計にて、涙に咽び入ければ、又平も手を合せ、將監を三拜し、疊に喰付泣きゐたり。將監元より氣短く、「ヤア又しても〳〵叶ぬことを吃めが。こりや此將監

順―不詳

火打箱―小さい形容

一度を云々―一度の食事を二度に分ると掛く

めつきり―俄に

通主―通譯

牢人―浪人の事

いさめ―慰め

さゝゑ―酒を入れる竹筒

道者時分―伊勢參宮時

染、虎の順にさし當、四五間間を置ながら、筆引かたに從つて、頭前脚後脚、胴より尾先に至る迄、次第に消て失けるは、神變術共いひつべし。百姓共舌をまき、「孫子迄の咄の種、なふあの上手な繪書殿に、よいお山を十人程書てもらひ、金儲がしたい」と云へば一人が聞て、「ヲヽ〳〵冬年お目に懸つたら、借錢乞の帳面を爰から消てもらはふ物。お暇申」と打ち笑ひ、在所々々へ歸りけり。こゝに土佐の末弟浮世又平重起と云繪書あり、生れ付て口吃り、言舌明ならざるうへ、家貧て身代は、薄き紙子の火打箱、朝夕の煙さへ一度を二度に追分や、大津のはづれに店がりして、妻は繪のぐ夫は畫く、筆の軸さへ細元手。上り下りの旅人の、童賺の土産物、三錢五厘の商ひに、命も錢も繋ぎしが、日蔭の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦づれ、よな〳〵見まふぞ殊勝なる。夫はなまなか目禮計、女房傍から通主して、「まだ是はお寢りませぬ。誠にめつきりと暖に、日も永ふなりまして、世間は花見の遊山のと、ざは〳〵さは〳〵致しまする。こなたは山影御牢人の、お徒然をいさめの爲、嫁菜のひたしに豆腐の煮染、さゝゑでも致シまして、關寺か高觀音へお供して、春めく人でも見せませふ、と女夫申て居ますれ共、心で思ふたばつかり。道者時分で見世は忙し、洗濯物は支へる、仕事にははかいかず、日が

逼塞—閉門に似て輕し

顔輝—元の畫工秋月の事

七足—師の陰は七尺の諺による

本に出た例なし。十方もないこと、夜盗押入の手引か。此庵を誰とか思ふ、土佐の將監光信と云繪師。子細有て先年勅勘を蒙り此所に逼塞し、將監年は寄たれ共、某は門弟修理之介正澄と云者。油斷はせぬ」と、棒ふり廻しいさかふ聲、將監夫婦障子を明、「聞た聞た。天地の間に生ずる物、有まい共極めがたし。諸共捜せ」と鑓熊手、ひつ提〳〵ゐいゐい聲、たい松ふつて狩立る。一むら竹の下蔭に、「そりやこそ物よ」と火を上れば、暴にあれたる猛虎の形、人に恐るゝ氣色なく、背をたはめてぞ休み居る。將監横手を打て、「あら不思議や顔輝の筆の、竹に虎の筆勢に、少しも紛ふ所なし。是は誠の虎にあらず。名筆の繪に魂入て、顯はれ出しに極つたり。然も新筆今是程に書んず人は、狩野ノ祐勢が嫡子四郎二郎元信ならでは覺えなし。いづれにもせよ證據には足跡有まい」「物は試し」と百姓共、若草わけて尋れ共、虎の足形あらざれば、「かき手も書手目利もめきゝ、前代未聞の名人や」と、心なき土民等も、拜む計に信をなす。修理之介七足去つて師匠を拜し、「ァ、有がたや此虎を見て、繪の道の悟りを開き候そのしるし、我筆先にてあの虎を消し失ひ申べし。名字名乘をさづけ、御免しを受け度候」と、懇望あれば將監悦び、「ヲヲ今日より土佐の光澄と名づくべし」と、印可の筆をあたふれば、修理はいたゞき墨を

ぞばへ―戯る

豐干禪師云々―豐干禪師と寒山拾得が虎と共に睡る圖を四睡圖と云ふ

李將軍―漢の李廣

くる風さはぎ、給にかく虎は形を現じ、牙をならして哮かゝる。道犬も强力者、組止めんといどみあふ。虎は猛つて爪をとぎ、邊を蹴たてゝ三重揉合しが、元より不思議の猛獸、道犬が襟髻ひつ咥へ、打かたげくるり〳〵、くる〳〵〳〵くるり〳〵と持て廻り、一振ふつて投ければ、塀を打越敷石に頰をすつてぞ打付ける。虎は勇で元信の、縛を嚙み切、背を差むけてぞばへたり、元信頓て心付、袴の股立しぼり上、ひらりとこそは乘たりけれ。虎は千里の足早く、風に嘯く身もかろく、追來る敵を追散しかけちらし、堀も築地も跳り越へ、飛びこへ跳越へかけり行く。豐干禪師が四睡の虎、李將軍は虎をくむ。給にかく虎を動かすは、古今一人乘たも一人、天下一人一筆の、譽は世にぞ三重殘りける。げに獸君の一靈、山野にはびこり草木を踏おり、田畠を荒すことなゝめならず。近鄕の百姓ころ〳〵に、「三井寺の後から藤の尾迄は見屆た。此山科の藪かげへ迯こんだに極つた。皮に疵を付ずに毆き殺せぶち殺せ」と、とり〴〵喚き評 掟す。庵の內より棒ついて、小灯燈提たる男、「ヤヽ何者じや人の軒、打の殺せのとは胡散なり」とぞ咎ける。詞「いや是は矢橋粟津の百姓共。此比設樂山から虎が出て暴る故、隣鄕が云ひ合せ、此藪へ追込だ。搜させて下され」と口々に呼はれば、侍あざ笑ひ、「やい、虎と云獸が日

あけずの門―常にあけぬ門
鳥居立―仁王立といふが如し
あいつたしーア痛し
電もく云々―電猛雷威か
怒り符―怒り斑

防げば餘さじと、奥を差てぞ追つめける。腰掛に控へし雅樂介、かくと聞よりたまられず、かけ廻つても奥方の、勝手は知らず中口の、あけずの門碎けてのけと扉をたゝき、雅「狩野ノ四郎二郎元信が弟子、雅樂介之信と云草履取、主といひ師匠なり、死ぬる道なら共に死なん。高が繪書の丁稚づれ、怖いことも有まい。相手の首取分のこと。開けよ明よ」と貫の木も、折る計に踏たゝき、鳥居立にぞ跨つたる。元信内より、「雅樂介か滿足した。身に過りなき上に慮外をして、姫君の御身のあやまち氣遣し。歸れ〱」と呼はれば、雅「アヽ慮外と云もことによる。あけずば踏んで踏破る」と、わめき散せば雲谷不破、「雅樂介を打殺せ」と、引返して門の貫の木、はづす所をつけ入に、雲谷が小びたひずつぱと切下げたり。あいつたしと跳りあがり、二人抜きつれ打かくる。あなたへ追詰こなたに支へ、城下をさして三重切出る。四郎二郎地團太踏んで、「エヽ佞人共むざむざとは死ぬまい。親より傳し一心の繪筆はこゝぞ」と觀念し、右の肩に齒を立て、ふつつ〱と喰破り、口に我身の血を含み、襖戸に吹かけ〱、口にて虎をぞ書きたりける。電もくらいゐの眼の光り、怒り毛怒り符怒り爪、千里も駈ん勢なり。道犬は姫君の行がた尋ね廻りしが、「まづ繪書めから仕まはん」と、太刀を抜んとせし所に、俄に吹

どやくや―騒擾

ほろゝ云々―ほろゝのほろと雪ふるのふると續くれば亡ぶるとなる

斯る所へ不破伴左衛門宗末、雲谷を伴ひ、遠慮もなく座上にずつかと直り、「是四郎二郎、汝如何成野心にか、お屋形を調伏し、亡さんとの存念有。きつと詮議を遂ぐべき旨、父道犬が下知、申譯仕るか、直に縄をかけふか」と、はや縄たぐつて見せかけけり。四郎二郎些とも騒がず、「せめて形の有ことには申譯も有るべし。御屋形調伏とは此方の云譯より、まづ御咎めの證據承はらん」とぞ答へける。雲谷下座より「こりや〳〵證據は某よ。惣じて繪書の祕密にて、繪をかいて調伏すること、人は知らじと思へ共、此雲谷が見付た。此掛繪は和主が筆、梅に山鳥雪に雉。抑當家は高島の御屋形と號す。山へんに鳥と書ては島とよむ文字なり。梅の梢に山鳥の高々と留りしは、是高島にあらずや。雉にほろゝの聲有て、雪はふるとの心有、讀くだせは高島亡ぶる調伏。狩野とはかりの野とかけり。姫君と心を合屋形を亡し、一國をおのれが狩場の野原にせんずる表相、重罪遁れず縄かゝれ」と取付所をひつぱづし、胸板はたと蹴倒すまに、飛かゝる伴左衛門が眞向、刀の柄にてはつしと打、直に抜んとする所を、隱し置たる取手の者、十手八方鐵鞭を、ぶち立〳〵捻ふせて、高手小手にいましめ、黒書院の床柱に思ふさまに、縛り付、伴「姫君の御朱印を、奪取れ」と群がるを、女中手々に枕鑓、長刀にて引つゝみ、圍ひ

請とては成がたし。よき樣に御取なし、賴入」とぞいひ切たる。藤「ハヽアにべもなふ埒あいた。如何にとしても上つ方へ、左樣な慮外申されまじ。少し物に品付て、始より約束の女房有と申さば、お胸の晴ることもある。去ながら、其女房は何者と、ごどをつかる念の爲、今こゝで私と夫婦かための盃して、とつと前から藤袴と、契約有と申さば、いかな主でも大名でも、此道計はせんが先。此談合はどう御ざんしよ」元「チヽウ幸望む所。サア盃仕ふ」藤「いや〳〵いや〳〵、我とても假にはいや。佛神掛ての女夫ぞや」元「誓文々々繪筆をとらぬ法もあれ、こふじや〳〵」と抱き付。「近比嬉しい忝し。これ祝言の盃」と、一つ受て元信に、「妻の盃頂く作法、儀式はかたふ」と四海波、腰本中が謡ひつれ、奥よりお局島臺に、七百町の御朱印箱、局「姫君樣の御祝言、三國一」とぞ祝ひける。四郎二郎合點ゆかず。迯んとするを抱きとめ、姫「藤袴とは假名ぞや。自こそは銀杏の前。誓文だての盃、いやは成らぬ」と宣へば、元「いや我らの名ざしは藤袴。外に妻は是なし」と、尙いぢばれば腰本衆、「そんなら本の藤袴、早ふ〳〵」と呼出す。お茶の間のきりかゞ五十餘りの、厚化粧、三平二滿の口紅、しなだれ懸る會釋顏、「是がなんの藤袴。しやちらごはい皮袴」と、どつと笑ひのどやくや紛れ、盡せぬ妹脊と成給ふ。

にべもなふ―無愛想に

ごどを云々―念つかるゝ

繪筆云々―繪書かいでも構はぬ

きりか―不詳
三平二滿―おた福
しやちら云々―硬ばつた事

に、茶進じやは
腰元への詞
脇詰—娘の著る
振袖を詰て嫁姿
になる

いなせ—否應

欲心—七百町貫
はうとの欲

草盆、落雁かすてら羊羹より、菓子盆はこぶ腰本の、饅頭肌ぞ懐かしき。物に臆せぬ男なれ共、女中の色に目うつりして、氣を取られたる折ふし、十八九成脇詰の後結びも各別に、銚子盃前に置、しとやかに手をついて、「私はお姫様のお髮上、藤袴と申者、しみ〴〵お咄致しませいとの御事ぞや。御存の通、お妾腹のお姫様、御臺様への憚りにて、大名高家のお望なく、心次第緣次第と、田上郡七百町、御朱印握つて殿好み。情ないは其許樣、いつぞやより色々と、お乳の人お局、口のすい程勸ても、どふでもお請ないとのこと。おいとしや姫君は、餘りのことに戀こがれ、私をお寢間へ召し、「ヤイ藤袴、切てのことにそちなりと、四郎二郎と名を付て、心ゆかしに抱て寢よ。そちもおれを抱しめて、姫かはいひと云ふて呉」と、もがき言がおいとしさ、とんと下紐打解けて、寢程抱く程締る程、二人の心せく計、どちらぞ男になりたい、と云うても泣ても叶はぬこそ。なふ大名の手業にも、有べき道具の足ぬのは、ひよんな物とておむつかる。自にいなせの返事、聞切參れとのお使、私も一分立つ樣に、お返事なされ」と述にける。元信額を疊に付、「冥加に余る仕合ながら、度々お返事申如く、諸傍輩のそねみと申、慾心に紛るゝことと世間のあざけり、よし御機嫌に違ひ改易仰付らるゝとて、御恨候まじ。御

まつかせ―よしきた
左右なく―迂濶に
丸腰―腰に刀佩かぬ事
御用人―用人なれば居つても構はぬ
なを穏便に云々―不破の無法を元信は女中の前なれば穏便にして逆らはず
まづゆるり云々―ゆるりは元信

と呼はれば、宮内卿、「いや是は私ならず、姫君樣より殿樣へ御伺ひ、則京より名古屋山三殿の指圖にて、奥へ召るゝ四郎二郎、なんのお咎ござらふ」と、いへ共更に聞入ず、道「お留守を預る家老の耳へ承らぬ御意なれば、殿の御意でも叶ぬこと。それ伴左衞門捥いで取れ」伴「まつかせ」と立あがる。四郎二郎も身がまへして、縋らば切らんず眼ざし、左右なくも寄りつかず、伴「サア、渡せ〳〵」と、詞でおどす計なり。時に奥よりお腰本つか〳〵と出、「是々いづれもお姫樣より御意が有。四郎二郎には直に御用のことあれ共、丸腰でなければ奥へ通さぬ御法度とあれば、是非に叶ず姫君樣、此所へ御出との仰なり。四郎二郎は御用人、其外の男の分、雲谷は云に及ばず、御家老殿を始め御前へはかなはぬ。皆お廣間へ立ませい〳〵」との權柄さ。道犬親子無念ながらつゝと立て、「サア雲谷姫君の御前へは、男たる者罷り出ず。男でもない奴原に、侍の時宜無用の沙汰」と、四郎二郎に刀のこじり、打あて〳〵袴の裾、踏たゝくつて白眼付、お次の間にぞ出にける。御留守といひ女中の邊、なを穏便に事共せず。元「御好の掛物、梅に淡雪雉山鳥、仕つて候」と、紐を解て懸ければ、局「このよし披露致さんに、サアまづゆるりと、お茶進じや」と、局は奥に。腰元「あい〳〵」と愛想らしき聲々の、男の側へ寄ことは、常に梨地の煙

見いれ—見込む

いかさま云々—成程我を罪に陥す巧あり

と、當はめて置た物。姫君狩野めに心を通はし、今日密々祝言有と、奥目付より聞きたれ共、御意と有ばせんかたなし。御在京の其間は、山三めも留守なれば、彼奴が方人する者なし。少しにても過りを、隨分見出せ聞出せ。慮外をせば打ち殺せ。御留守の間國中は、某がさばきなり。此不破といふ鰐が見いれて、あまり程は有らせまい。試して見たい新刃はないか。一の胴か二の胴か、望んで置け」といひければ、雲谷甚笑壺に入、「政道正しき御家老樣、お屋形のしん柱」と、追從たら〳〵見ぐるしし。斯とはしらず四郎二郎、櫻の間に伺公し、「姫君銀杏の前樣より、御掛物を仰付られ、持參仕候。御取次頼み奉る」と、いへ共入道伴左衞門、じろりと見たる計にて、返答もせず睨付る。元「ヤアしれ者よ。そばには雲谷、いかさま我に手を取らするたくみ有、立歸るも不覺なり。幸々奥へ通路の鈴の綱」ふりはへひけば鈴の音、「おふ」と答ふる女の聲、宮内卿とて中老の局立出で、「ヤア狩野殿か。姫君樣の御待兼、お直の御用も有とのお事。サア〳〵此方へ」と有ければ、畏て四郎二郎入らんとすれば、伴左衞門聲をかけ、「待て〳〵。お家の掟を知ずんば、なぜ物頭には伺はぬ。知て背くか不屆千萬。上より御免しなき時に、刃物を帶し奥方へ參ること、禁制との御條目。あれ大小捥いで引摺出せ。當番〳〵」

結び、千年萬年萬々年、とぢ付ひつ付松脂の、離れぬ中」とぞ三重壽きし。されば江州高島の舘、左京ノ大夫賴賢卿、參勤の上洛有、執權不破ノ入道道犬、同嫡子不破伴左衛門宗末、國を預る留守居也。御家の繪書長谷部ノ雲谷遽だしく、入道親子が前に手をつかね、雲「近比過言に候へども、某ことは雪舟のてきでんとして代々の御扶持人。此高島のお舘にて、繪筆を取て誰人か拙者が上につき申さん。然るに此度狩野とやらん申二才、武隈の松を書しとて、過分の恩賞を下され、古參を踏付御前にはびこり、剰今日は奥方へ召され、姫君樣よりお料理を下さるゝと承る。殿樣の御留守誰が免しての推參。御家老の仰一國に違背申者はなし。きつとお仕置然るべし」とぞ支へける。道犬頷き「つゝと寄れ雲谷、惣じて此四郎二郎めは、相役名古屋山三が取持にて召し出された。山三は元來お小姓立、前髮の酒林で殿を醉はせし男傾城、口ばしの黄な小雀が、家老並につらり、威をふるふ其山三めを甲にきて、のさばりまはる四郎二郎、我々親子が睨め共、事共思はぬ奇怪さ。其方とても同前たり。又をとの姫君銀杏の前は、御愛子なれ共脇腹故、御臺所を憚り給ひ、田上郡七百町の御朱印を付られ、京都有德の町人か、由緒有御家中へも、下されんとの御内意故、某嫁に申請、此件左衛門に緣邊し、七百町をぬしづかん

的傳―他人に傳へぬ傳授を受けたる者
二才―靑二才
酒林―酒店の前なる杉葉の束、之を若衆の前髮に寄す
甲にきる―かさにきる
有德―富豪
ぬしつかん―我物にせん

松根云々—倚松根而摩腰千年緑滿手云々（和漢朗詠集）
三木—見きと掛く、橘季通、武隈の松は二木を都人いかゞと問はゞ三木と答へん
千貫枝—一枝千貫の價と云ふ諺
かたくま—肩車
さゞれ—細小の意
ほの見へ—仄かに見へ
天神—大夫の次の位を天神といへば掛けたり

こゝにて學び見せ申さん。それにて寫し留給へ。是そこな奴樣、爰へござんせ雇ひましよ」奴「ない〳〵」手ふる頭ふる年ふる松の、松根によつて腰つきも、千年の緑寫せしは作意なりけり。先哥人の見たてには、一本松を二木共、三木とつらねし言の葉の、それは老木の松が枝なれど、寫す若木の奴の〳〵、此の膝のふし松のふし、前へ地摺の下枝に、ぬつと出せし片足は、慮外千萬千貫枝、筆捨枝や久かたの、天津少女のかたくま枝や、腰掛枝の三がい松、月にさはらぬ枝々の、さゞれ小枝の松かげを、サア沖こぐ船の帆のほの見へて、さす腕には壽福の枝、をさむる手には不老の枝、たれて雪見のひかへの枝。是々これ〳〵、ずつと伸たるながしの枝。松は非情のものだにも、傳へし心の色はなほ、宛ら青々條々として、松の生木のいき〳〵と、若やぎ立る其風情、狩野は一點違ひなく、書つらねたる筆勢、何れを寫繪何れを立枝、紛ひつべうぞ見へにける。元信「家の幸甚たり。早速歸り本懷とげ、此報恩には御身の上、父御のことも請取申。萬のお禮は本國より」と、立歸るを、大夫「是申、神の告に任せしからは、恩にはかけず末かけて、情を思召すならば、必外に内義樣持てばし下んすな。奴殿頼みます」奴「何が扨〳〵、天神樣より大夫樣、追付お二人連理の松、中に立たる此松は、島臺持ての取

御了簡云々―御堪弁と同時に御交際も廣き事なれば助力ありたし

此身に沈む―此遊女になれる事

まざ〳〵―ありあり

無駄言なしの云ひ捨は、田舍米とて笑はれず。元「チヽ、御機嫌そこねし御尤。實々松とは大夫さま。我等はわるふ心へて、不調法な御挨拶、眞平々々お詫こと。是を御緣にお知人に成ましたし。下拙ことは、狩野ノ四郎二郎元信と申わづかの繪書。去御方より武隈の松の圖を仕れとの仰。則天滿天神の夢想に任せ、此所にて名有松と尋しを、大夫さまとの取ちがへ、是はかふも有ふこと。御了簡ついでにお交際もあまた也。願のかなふ便もあらば、御世話頼み奉る」と、思ひ入てぞ語らるゝ。女郎はつと顏を詠め、扨は狩野ノ四郎二郎元信樣とは御身の上か。耻をつゝむも時による。何を隱さんわしことは、土佐ノ將監光信が娘なるが、父は一とせ勅勘うけ、今浪人の憂渡世、此身に沈むは申さず共、推して泣ひて下さんせ。扨武隈の松の圖は、土佐の家の祕傳の繪本、漏すことは叶はね共、夕不思議や天神樣の夢の告、狩野と云ふ繪師下るべし。武隈の松を傳受せよ。父が出世の種ならん、と見たはまざ〳〵正夢」と、語りもあへぬに四郎二郎、感心感涙肝にそみ、天を禮し地を拜し、懷中の繪筆繪絹をひろげ、「サア遊ばせ御傳授頼む」と悅びける。大夫「いかにも傳へ申さんが、親の免しもなき中に、筆取ることは如何なり。アヽ何とせん、實に思ひ付たり。あの御供の人の立姿を松の立木になぞらへ、笠を枝葉の笠となし、

酒には云々―濱松のざざんざと囃す故
名高き松―此松は大夫の事
まぶこそ云々―情夫に逢ふ事もさしひきあり
米―妓にかく、水損なしはいつも全盛を云ふ
ぬめり―しなりと出た
はまつた―欺かれた
こなさあ―こなさん

に天神の御告と有に思ひ當つた。當所敦賀の町に名高き松の御座候。是ぞ京にも類なしと、心を懸ぬ人もなき、色よき松の候が、若左樣の松にては御座なく候か」元「實や往來も慕ふとは疑ひもなく、我らが尋る名木よ。急いで見せて給はれかし」里人「いつも夕暮毎には此所へ現はれ出給ひ候。ヤア〱はや那へ御出候。我らはお暇給はり候べし。御逗留の間御用の事は承り候べし」元「賴み申候はん」里人「心へ申て候」高き名の松の門立たちなれて、人待ち顏の暮ならん。町は敦賀のかけ作り、まぶこそ汐のみちひなれ。誰をかも知る人にせん此廓の、松と成しも親の爲、賣られ買はれて北國の、土氣の賤の里なれど、米の育ちは上田の、水損なしの大夫職、名を遠山と呼ばれしも、人に登れの戀の坂、おろし歩みの道中は、花の立木の其儘に、ぬめり出たる如くなり。雅樂の介、「是申見事な者が夫そこへ。夫々」といへば、四郎二郎「ヤアなんと、松が見へたか現れたか。寫しとめん」とふつと立ち、女郎にはたと行當り、元「是は扨、松かと思ふてはまつた。眞の松を尋て見ん。丁稚こい」と行違ふ、袖を控へて、大夫「是申此遠國の我々と、京の廓の松樣達と、比べさんすが不覺の至り。併不粹なお方には、松と見られて嬉しうなし。杉と云はれて腹立ず。桑の木とも榎とも、こなさあに似合ふたあほふの木共見さんせ」と、

島の舘とて、系圖所領竝びなき大將成が、將軍家の御意を受、本朝名木の松の繪本を集めらる。然るに奥州武隈の松と云名木は、往古能因法師さへ、跡なくなりしと讀たれば名のみ殘つて知る人なし。我是を書顯はし、譽を得させ給はれ、と天滿天神を祈りし所に、武隈の松を見んと思はゞ、越前ノ國氣比の濱邊に行べし、とあらたに靈夢を蒙れども、それは陸奥爰は越路、何を知邊に尋ぬべき。哀れ里人の來れかし、物問ん」とぞ呼るゝ。里人「所の者の御用とは、都人にて有げに候。御尋有たきとは何事にてばし御座候」元「御覽の如く都の者、天神の教に依て松を尋る子細有。此所にこそ名高き松の候らめ。教へて給はり候へとよ」里人「是は思ひも寄らぬことを承る物かな。此北國にてお尋有ふならば、越前布越前綿、若は實盛の生國なれば、お供の奴の髭にぬる、油墨などのお尋も有べきに、名高い松とは流石優しき都人。先當國の名木は、西行が鹽こしの松、あそふの松若が物見の松、金が崎には義貞の腰掛松、山のを山松庭のを庭松、門には門松酒には濱松、肥たは肥松、捻たは捻松、わり松たい松ぬつぽり松、我らが息子に岩松長松と申緑子も有、庄屋の名は松兵衛、若い時には相撲取、赤松ぶちわつた様に御座有しが、今老松になられて、力も元より下り松、腰も屈んで、ゐざり松〳〵と所の人は呼候。ヤア誠

跡なく云々—武隈の松は此度跡もなし千歳をへてや我は來にけん(能因法師)

所の者の云々—此邊能のワキ詞にてうつす、以下皆其言葉遣

實盛—越前生れにて白髮を染め戰死せしより云ふ

しほ越の松—坂井郡濱阪村にあり、よもすがら嵐に波を運ばせて月を垂れたる汐越の松(西行)

あそふ—鯖江の北の淺生津か松若は盜人の名

傾城反魂香

上之卷

作者　近松門左衛門

白きを云々―能の次第に似せて筆を起す、下繪の後に彩色する意(論語)
北野―來たに掛く
丹靑―繪畫
きせる―被せると煙管
腰―越にかく
歸山―春なれば雪解け緣にかへると掛く
孫杓子―手に持てば疱瘡輕くなると云ふ名物
あつき―厚きと熱き
敦賀―鉉に掛く

白きを後と花の雪〳〵、野山や春を畫くらん。聞に北野の時鳥、初音を啼し其昔、淸凉殿に立られし、跳馬の障子の繪、夜毎に出て萩の戸の、萩を喰しも金岡が、筆のすさみの跡たへず、傳はる家や畫工の名譽、狩野四郎二郎元信、丹靑の器量古今に長じ、心ばへ能男ぶり、親の繪筆の彩色に、生れつきなる美男なり。比は文龜の彌生の空、天滿天神の告有て、越前の國氣比の浦へと旅羽織、我は笠著て大小の、柄にも袋きせる筒、丁稚がこしの白山も、去年の緣にかへる山。山のいたゞき靑々と、雲に映ふ月代の、湯尾峠の孫ぢやくし、盛こぼしたる花重、かさね〳〵し旅籠屋が、情もあつき燗鍋の、敦賀の濱にぞ著給ふ。四郎二郎一僕を招き、「ヤイ雅樂の介、外の弟子にも隱し、此所に下りしこと餘の義にあらず、近江ノ國の大名、六角左京ノ大夫賴賢殿と申は、佐々木源氏の旗頭高

近松浄瑠璃集 中巻 目録

吉野都女楠（八行本）
以上凡て丸本
心中二枚繪草紙（八行本）　堀江川波鼓（八行本）
今宮心中（八行本）　五十年忌歌念佛（八行本）
心中刃は氷の朔日（八行本）
以上凡て嚴密なる寫本
以上の諸書中、碁盤太平記以下十一編は悉く高野斑山氏の珍藏に係る。余が本書を校訂するに當り、筐底の祕を擧げて之を貸與せられたるは、深く感佩して措く能はざる所、特に記して感謝の意を表す。

大正二年七月　校註者　忠見慶造

す」の場合は、何れも送假名を添へずして、單に中の字のみを當つる等、殆ど一定の形式となりたり。

原文の體裁斯の如し。其他漢字に振假名なくして二樣に讀まるゝ所などは、態と假名を省けり。

本書の覆刻に用ひたる原本左の如し。

傾城反魂香(八行本)、心中萬年草(八行本)

夕霧阿波鳴渡(八行本)　卯月潤色(八行本)

孕常盤(十行本、最後の一枚十一行)　碁盤太平記(八行本)

戀八卦柱曆(七行本)　ひぢりめん卯月の紅葉(八行本)

丹波與作(七行本)　冥途の飛脚(七行本)

一々頭註にことわり置きたれば、聊か紛るゝ事なし。

二、見へ。て、聞へ。て、心へ。ての如く、也行、阿行を波行に混用したる例多かる外、「壹人お。ばお藤と呼だ」「虫籠をはづひ。て」「負ほ。て」「とお。らぬ」「破軍がなお。つた」「珍らしゐ。」「恨めしゐ。」「榮ゐ。て」「を。のれ」「こ。ふ。せ。ふ。」「そ。ふ。して」の如き異例も多々あり。

又、「ぬつほり」「一へん」『かつはと』の如く、半濁音符を省略するは原本の常なれども、是には讀過の便宜を圖りて、特に「○」符を加ふる事となしぬ。

三、原本「なり」又は「なる」と讀む場合に成の字、「あり、ある」の時には有の字、「とも、ども」には共の字、「つき、つく、つけ」は付の字を當つる事通例なり。

又、「まで」は迄の字、「ばかり」は必ず斗の字(本書計の字に改む)、「申し、申

話物にして、作者老熟の筆よく當時の世態人情を曲盡せし世話物廿四編中、實にその半を占めたり。

校訂は既に上巻に陳べたる如く、一々原本に從ひ、其面目を保存する事を努め、假名の多くして煩はしき所にのみ、近松慣用の漢字を擇びて多く塡めたれば、從來の覆刻本に比して、體裁大に異なるものあり。左にその用字形式等の一斑を掲げて參考に供せん。

一、牢人(浪人の事)、十面(澁面)、腰本(腰元)、見廻(見舞)、御共(御供)、念比(懇釼(劔)、囉ふて(貰うて)の類。又人名にも、高氏(足利尊氏)、秀平、忠平(藤原秀衡、同忠衡)の如く、故らに換へたるらしき所あり。甚しきは夫をツマと讀むに當り、妻字を宛てゝ實の妻と混ずるが如き所もあれど、其等は

丹波與作	同　四年六月廿四日	同
心中萬年草	同　五年四月十六日	五十六歳
五十年忌歌念佛	同　六年正月　二日	五十七歳
今宮心中	同　七年正月廿三日	五十八歳
心中刃は氷の朔日	同　七年六月十六日	同
夕霧阿波鳴渡	同　七年七月廿四日	同
冥途の飛脚	正德元年三月　五日	五十九歳
吉野都女楠	同　年九月　十日	同
孕常盤	同　三年七月十六日	六十一歳

此中、傾城反魂香、碁盤太平記、吉野都女楠、孕常盤の四傑作を除く外、悉く世

緒言

上巻に續きて本書收むる所十六種、其登場年代及び作者の年齢等を示せば次の如し。

傾城反魂香	寶永二年八月十五日	五十三歳
心中二枚繪草紙	同　三年三月廿七日	五十四歳
碁盤太平記	同　三年六月朔日	同
戀八卦柱暦	同　三年九月廿一日	同
堀江川波鼓	同　四年二月十五日	五十五歳
緋縮緬卯月の紅葉	同　四年四月廿一日	同
卯月潤色	同　四年六月朔日	同

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

近松淨瑠璃集

中卷